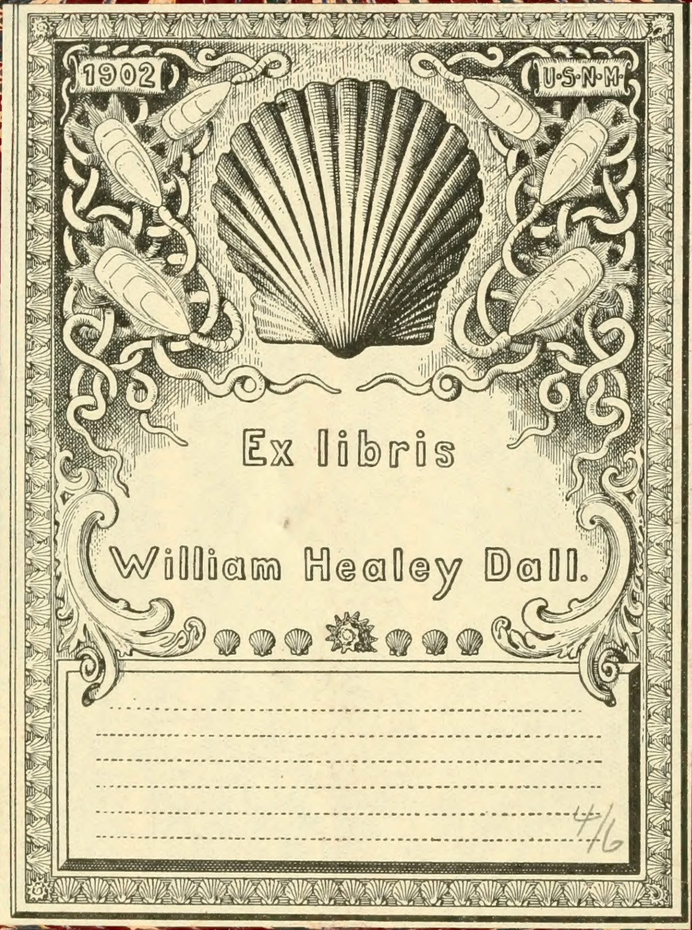

1902
U·S·N·M·
Ex libris
William Healey Dall.
4/6

KYOTO, MAY 20TH, 1907.

DEAR SIR:—

Twenty years have elapsed since I began to collect shells in this country. For this purpose, I have sent my assistants to almost all parts of Japan—from Hokkaido in the North as far as Formosa in the South, including even very small islands in the ocean. Now I have extended my exploration to Korea and China. The number of species of land, fresh-water, and marine shells has now reached over three thousand. Among these are nearly one thousand new species found by myself and my assistants.

In spite of poverty, I have continued the work absolutely at my own expense without help from any museum or university. During these years I have met various obstacles and hardships, which have required great efforts to overcome; and it has been only by hard endeavour and by the help of Dr. Pilsbry and many others that I have reached my present situation, having spent no small amount of money in the study of conchology.

Moreover, I started the publication of a monthly conchological magazine to devote to this branch of the sciences. But the study is still in its infancy in Japan; and I have no more than one hundred and fifty subscribers. From this also I am suffering no small loss every month. I have been paying special attention to the magazine, hoping very much to put some of the articles into English, French, or German: but I am not allowed to do so for the present; first because of my poor knowledge of languages, and then because of my present economic condition. Though the plates are not very satisfactory, I am glad to see that they are improving number by number, and I shall endeavor to perfect them.

The establishment of a conchological museum in my country is very important for the diffusion of conchological knowledge; and it has been my intention for years to erect a building, though it may be a small one for the museum. Having amassed a tolerable amount of money little by little, I have been thinking of starting the construction this year, at the latest. After the recent war, however, the economic conditions of this country have so marvellously changed, that the price of land and cost of construction have doubled as against a few years ago. I am afraid now that I may be unable to start the work in the near future.

Such being my present conditions, I shall be very happy to have you give me valuable orders, to enroll you as a subscriber, and also to introduce me to your friends, for I want to increase the number of subscribers to the magazine and buyers of shells as much as possible in order to get the required sum for the work.

Yours truly,

Y. HIRASE.

明治四十年一月二十日發行
明治四十年一月十九日第三種郵便物認可（毎月一回二十日發行）

THE CONCHOLOGICAL MAGAZINE

A MONTHLY

PUBLISHED BY Y. HIRASE.

VOL. I. JANUARY, 1907. No. I.

CONTENTS.

Notice: The subscription price for Europe and America is $1. 50 per annum. All letters and communications should be addressed to Y, HIRASE, Shimo chōja-machi, Karasumaru, Kyoto, Japan.

◎動物學雜誌

第十八卷 第二百十八號

(毎月一回十五日發行)

〔圖版一枚附〕〔定價金二十錢〕

明治二十九年十二月十五日發行

目次

論說

雜錄

會報

發賣所

東京神田區表神保町 東京堂

全日本橋區通二丁目十八 裳華房

全本鄕區元富士町 盛春堂

述する所あるべし、卽ち之に關する海水の關係、繁殖の方法及び生長等の事を述べんと欲す、今廣島灣に於ける養蠣の歷史を見れば、古記に據れば靈元帝四代家綱將軍延寶中佐伯郡の草津村に小林五郎左衞門と云へるものあり、蛤蜊を養殖せんとて樹てたる竹枝に圖らずも蠣苗の數多附着せるを見て、其地の牡蠣に適するを知り、玆に人工養殖法を按じ海面を劃して簇場を設けたり、之を此地養蠣の始めとす、其後近傍の民之に倣ふもの漸く多かりしと、されど販路開けずして其業も亦盛んならざりき、東山帝五代將軍綱吉の時卽ち元祿の始めに至り、村の年寄河面仁左衞門其弟西道朴なる者村と相謀りて三次藩の保護を得、蠣仲間の取締法をも設け仁左衞門其支配人となりて、大いに近畿地方に販路を開く、寶永五年大阪の時偶々高麗橋の下に繫げる蠣船のもの、官の制札を火中に取りて災を遁れしかば大阪町奉行其功を賞し、阪地の諸川に於て自由に販賣する事を特許せらる是より販路益益廣まり遂に今日の盛大を致すに至れりといふ、明治卅年第二回水產博覽會を神戸市に開かるゝに當りて小林五郎左衞門、河面仁左衞門の功績を追賞せられしかば、村民感奮し碑を建て恩を記して後世に傳へん事を以てしたるに、該會の總裁たる元帥陸軍大將彰仁親王殿下深く之を嘉尙せられ給ひ、「安藝國養蠣碑」の七字を書し賜はりぬ、我國に於ける養蠣の歷史は概ね以上の如きものなるも、歐洲の之に關する歷史を見るに、第七世紀頃に於て羅馬のアビルヌス湖今のフサロ湖に於て牡蠣養殖を計りしと云ふ、其時は泥底の鹹淡水にある處へ石を積み其周圍に杭を樹て、或はそれに細枝の束をつけて附着器となしたりといふ、尙牡蠣は已に石炭紀より其化石を發見せりとの事なり。

△牡蠣養殖場の面積　今廣島灣の最近の牡蠣の養殖場の面積及び收獲高及び其の利益額を見るに、安藝郡仁保島にては淵崎、向洋、本浦が六萬八千坪、丹那が四萬八千坪、大河が一千八百坪合計十一萬八千坪(稅金六百八十八圓)同郡海田市にては一萬八千坪(稅金百十一圓)、佐伯郡草津村にては十九萬三千坪(稅金千百二十七圓)なり、而して仁保島の實收が三十萬七千八百貫目利益金高三萬八千四百七十五圓、草津村の實收が五十一萬四千四百貫目、利益金高四萬五千一百圓、海田市の實收が四萬八千八百貫目、利益金高二千四百四十圓なり卽ち實收の合計が八十七萬貫目にして利益金高は八萬六千圓〇十五圓なりとす、而して十貫目につき四升の牡蠣を採取するとすれば卽ち三千五百石となるなり。

△牡蠣と海水の性質、かく多く產出する牡蠣は如何なる海水に生活するかと云ふに、海水の性質は多少の差あれども、先づ其溫度比重に就て能く之を調査せざるべからず今日是等の經驗によれば、牡蠣は水溫華氏三十二度乃至九十度間に棲息するものなり然れども淺き水中にあるものは三十二度に降らば屢々凍死する事あり牡蠣の性質として淡鹹相交ふる所によく生活し得るものなり、故に比重は一、〇、一二乃至一、六二五間の水中に棲息し、甚だしきに至りては比重一、〇〇〇中にも棲息することを得ると云ふ、此の如き淡水中に住む牡蠣は品質劣等にして其色蒼白色を帶ぶ、且生殖器にも大いに變化を來せり、長き經驗に依れば牡蠣の棲息し能く繁殖する海水の比重は一、〇二一〇內外とす、卵は其親蠣の棲息したる所より大なる比重の海にて受精するを能はず、故に產卵期中に牡蠣の比重の小なる所より大なる所に運搬するは宜しからざるなり、廣島灣に於ける比重は一、〇四五乃至一、〇二〇とす、卽ち千分の內に二十乃至四十丈鹽が含まれ居るなり。

(以下次號)

貝　葛園

橋つめに蠣の貝割る賤の女の
　並ふつふりに枯柳ちる

過りより斯る無謀の言を吐くに至れるものです或一鮑の年々產卵する數は實に夥多しきもので定の期間に達する迄のもの卽ち小形の鮑を採收せざる制限を設けさへすれば決して全滅杯の恐れは毫も無い何故なれば鮑の生活期と云ふは長くも七八年で已に六年に到れば人間で云へば最早老朽に達したとでも云ふべきか追々肉が萎縮して來るものである從て丁度盛なる時期と云ふは五年位の處で此期間迄の者は幾ら採收しても後から漸々殖へて行くから毫しも心配するには及ばない次第です又海馬島附近の東海婦人の產出額が非常に多き事、根室近海の帆立貝に豐富なる事等は皆私共潜水業者の大に注目すべきものにて當局者は勿論有力者諸君の奬勵を望む處です、右の外尙ほ多大の注意に價するは眞珠貝の採收です不幸にして我日本內地の海岸には之が採收を爲すべき場所の發見せられざるは頗る遺憾の極でありますが將來所有危險に堪ゆべき決死の探險隊を組織して琉球諸島より臺灣に至る近海を精く調査したならば大いに得る處があるだらうと思ひますが如何にせん潮流が早くて其目的を達するには甚だ困難の事であらうと信じます、目下眞珠貝の採收地として有名なる合衆國領ローカルホルニア灣の如き其貝殼のみにても年百千圓の採收を下らず然も其殼の大さは菓子器の盆位の大なるものありと云ふが其價額は年數百万圓の利益ありと聞くに至りては驚かざるを得ないではありませんか殊に米國は器械の精銳なるものを使用する潜水の術に至りては頗る幼稚で我邦潜水業者の第三流位の地位に居るものであるから沈下の程度も漸やく二十尋迄を止まりとして夫れより以上は危險界と稱して沈下せず若し我邦の四、五尋以上に沈下する潜水業者をして潜水せしめたならば尙ほ一層の利益ある事を信じます、此外に新領地たる樺太沿岸又千島群島及び目下談判中なる沿海洲の漁業權の如き將來大に私共の發展すべき場處と機會は頗る豐富でありますが是等に就ては又追て御話する事を致しませう。（都新聞）

◎廣島の牡蠣

這は過般廣島高師校に開催したる博物學會大演說會に於て同會員下村六三（本縣出身）氏が爲したる講話の大要なり。

△牡蠣の產出地　牡蠣は介類中最も滋養に富み人生必須の食用品たるを以て、之を嗜好するは獨り本邦のみならず、支那及び歐米諸國に於ても亦然り、殊に歐米諸國に於ては本邦よりも之を嗜好すること更に甚だしといふ、故に其天然物を採捕するのみにては、自他人民の需用に應ずるに足らざるを以て、蠣田及び蠣床を稱し、夙に人工を以て養殖するの法を行ひ、養蠣の術大いに進步せり、而して養蠣の爲に得る收益の莫大なる一例を擧ぐれば、和蘭國の如き一小國にても、當業者が牡蠣養殖のために海面を區劃使用するが故に、之に對して政府に收むる所の海面借地料のみにても、年々幾拾萬圓に下らずといふ、其收益の大なる想像以外にあり、本邦に於ては從來天然產は同じからず、北海道釧路國厚岸灣の如きは、面積大約千万坪の內牡蠣の棲む區域は六百六十万坪の廣きに亘り、天然の牡蠣累々層をなして島嶼を形成し、干潮の時水面に露はるゝ處のもの十數の多きに及ぶ、俗に之を牡蠣島と云へり、又南部にては薩隅州南諸島に於ても天然產のもの夥しく、中央部に於ては何れの海面を離るも之を產せざるはなし、既に天然產なり之に人工を加へ養殖を圖らば、其收額の增加すべきは固より論を待たず、然るに本邦養蠣の事業は、古來我廣島灣に於て最も盛大に行はれ、備中の妹尾、肥後の八代灣之に次ぐ、輓近に及んで東京灣內、千葉縣に屬する沿岸並に陸前の松島灣に於ても此事業を營むに至れりと雖も、其方法は未だ完全ならず、要するに舊來の方法に近來の學術を用ゐて、之を行ふ計畫をなすもの甚だ少なきが如し

△廣島灣の牡蠣　今廣島灣の牡蠣につき聊か講

かく〳〵すれば牡蠣が出來るといふ模範を示して居るけれど、これを見て成程これは有利な結構なものでゴザルといふので、自ら手を下してやる人が起らぬといふことを屢々耳にするが、實に不思議に堪へぬ。無論養蠣のことは、今日では一より百まで學問上で解釋の出來ぬこともあつて解つて居ない所もあるけれど、地勢、海水の比重、海底の土質などの標準が知れて居る今日、尚躊躇する必要はない、その場所が標準に合格する所ならば先づ養蠣は成効するのである。要するに民業としては算盤球に合ひさへすればよいので、少くともそれだけの範圍では充分學問の方は解釋がつくのである。牡蠣の幼虫が海水に游泳して居る間が七日間であるとか十日間であるといふ議論や、牡蠣の食する硅藻は何と何とであるかといふことなどは、宜しく學者に任して置いて、民業としては實際その業が經濟に合ひさへすればよい。一体水產の學問はまだ極めて幼稚であつて實地の方が學理より先きに行つて居る方の學問であるから、何もかも解らなくては仕事を始めぬといふことは少し愼重し過ぎる恐れがあつて、實益のあるのに手を出さぬといふことは餘り感心した話でない。

△實際學理の方より經驗の方が先きに行きつゝき居るとは醫術などに殊に多い、よく御承知の種痘といふことは學理の方は今日尚分つて居ないけれど、確かに種痘といふことが始まつて以來アセラク、カシナンといふものが少なくなつて充分にその功果が認められて居る、誰も種痘の原理が分つて居ないから、自分は種痘はお斷りだといふ人も今日では恐くはあるまい。

△要するに實益さへ充分に認められさへすれば學問上に未だ解らぬ所が少々あつても、利益が占め得らるれば大に得るべし何も遠慮に及ばぬさてその最好適地といふ所の標準は、第一、遠淺に限る、然して入り込んだ灣になつて風波の難の少なき所、第二、その灣に淡水の交る所即ち小河の流れ込むを要す。海水の比重は一、〇二より一、〇一四位いの間にて餘り鹹味の強くなき所、第二海底は土と砂とが半分〳〵になつて居つて泥ばかり砂ばかりの場所にあらざること、第四には潮の干滿の度の充分大なる所、其他水温とか何んとか詳細なこともあれど先づ大体に於て以上の標準に合格さへすれば十中の九は成功するといつて宜しい。

△上述の如き場所があれば、そこに日本にて重もに用ゐて居るマダケを五尺位に切ツたる篊といふものを四月頃に建てゝ幾列にも並べて置くこれ即ち養蠣場と稱するもので、牡蠣の幼虫が其竹篊に附着するといふ仕組みである。これが滿二年すると、充分成長して食膳に供するものと成るので、仕事は大變六づかしいといふわけではない。又附着する材料には竹の外に木の枝石材又は瓦等をも用ゐる、外國ではむいた牡蠣の介殼を海底に投じて置いてそれに又牡蠣を附けるといふ工夫をして居る所もある。

、尚詳細なる事は少し技術もあるが先づ大体は上述の次第であるから最好適地と認らるゝ場所があるならば、大にこの事業を各地に試みられんことを懇望するのである。實地見分をしたいとあらば、東京にては最も近い千葉縣下に木更津又は千葉町の附近に八幡といふ所がある、そこに養蠣をやつて居るから、行つて御覧になるのも又一興と存ずる。（報知新聞）

●海の底（林吉之助氏談の一項）

△貝類、そしては鮑を第一として帆立貝、海茸婦人、ミル貝、蠣等であるが鮑は千葉の金谷、靜岡、宮城、岩手、青森、九州の沿岸、北海道禮文島、利尻島の周圍抔は尤も著名な產地です殊に鮑の採取は其肉に利益あるのみならず其殼も亦有利であり肉は罐詰となし外國向の輸出品として頗る有望です然るに或地方の漁業者は之を潛水業者の手に委する時は忽ちにして濫獲の結果鮑の全滅を來すべし抔憂慮する者が尠なくありません是等漁業者は鮑の狀態を研究せざる

●養蠣のすゝめ　（理學士妹尾秀實氏）

△この頃肢齋居士の食道楽に、牡蠣の料理法が連日續載されたことは報知讀者の御覧の通りである、從來多くは酢牡蠣や豆腐汁として用ゐられて、牡蠣自らも少しはつまらなく思つて居るだらうが、實にかくも澤山の料理が一の材料から甘味しく出來るといふことを、社會に教示された肢齋子の擧は世間に對し牡蠣の嗜好力を増進せしむる事に非常なる功勞ありといはねばならぬ、養蠣家は宜しく同氏に對し大に謝すべきである。

△歐米ではオイスター、ハウスといつて、牡蠣ばかりで種々の料理をつくり、簡易に食はせる處が出來て居つて、大に世間に牡蠣の好味を紹介して居る。洋行して歸つた人々の内には、東京にも季節には牡蠣を食はしてくれる所があればよいにといつて居る人もある。甘い味は中々忘れられぬものと見ゆる。

△又上方のお方は御承知の廣島から毎年冬になると大阪の橋々の下岸に繋いで、盛んに客を招いて居る牡蠣舟が、幾十艘も來て、いろは四十八種の料理をやつて居る、中々好きな人も多いと見ゆて隨分賑はふ、よき金があがるといふことである。廣島縣の本元に行つて見ると、毎年寒いとき丈け大阪で儲けて倉など建てゝ、立派にやつて居る家が甚だ少なくはない、東京でも両國橋の下邊に牡蠣船の五六艘や、又は神田邊の便利な所にオイスター、ハウスの數軒もあつてもよいと思うけれど、誰もやりてがない。

△近來はアメリカへ牡蠣を輸出せうといふ計畫もある。それは合衆國では牡蠣の出來る場所が唯東部の大西洋沿岸に多くて西部の太平洋沿岸にては殆んど東部から縱貫鐵道で運ぶといふ有樣、從つて價格も高いといふ所から、日本から早い便船でハワイに寄港せずに直に桑港へ向け俵につめて、生牡蠣を送つたら三週間もかゝらぬ故充分死なずに、行くといふ事をいつて居る人もある、現に大阪へ廣島から送る牡蠣は所謂三年物といつて介殼の厚い分を帆船で運ぶのであるが二十日は請合であるといつて居る。

△又必ずしも米國の土地まで運ばずとも、横濱又は神戸から出る外國航路の船舶へ海路の途中で食用とする材料として特約を結んで供給することも又一方法と考へる。以上の次第であるからイクラ牡蠣が出來ても品物が多過ぎるといふ心配はいらぬ、販路は充分あるのである。

△本邦にて養蠣の本元は藝州の廣島で、二百有餘年の歴史を持て居る。草津村といふ所にては一ヶ村で三十町歩の海面にこの養蠣をやつて居る又仁保島といふ所では狭い河尻を利用して居るので、そこの養蠣地は海面一反歩の使用權の讓渡し賣買が先づ一等の場所で百七拾圓といふ莫大の相場を呈して居るなどは、實に驚かざるを得ない次第で、これは陸田の一反を買ふより高い價格を有して居るといふことは、イカに利益が上るかといふ事を豫想せらるゝのである。

△牛併廣島では各村それ〴〵往昔よりの慣行を墨守して居つて、各固有の養蠣法を行つて居る、故に只經驗のみで之を學術上よりの研究は少しもしない。理屈は分らずに只私の村ではあの村のやり方とは違ひまして、ドーしてこういふ風にせねばなりませぬといふ樣な有樣で、尚一層有利に進歩改良するといふことは少しも念頭にないやうである。

△學問上より研究せられたのは、明治三十一二年頃水產講習所で技師藤田經信氏が千葉縣の八幡に養蠣場を開設して試驗せられたのが始めであると心得て居る。試驗の成績も出でらは今日にては各府縣の水產試驗場に養蠣をやつてそれ〴〵成績を發表して居る、概して中[illegible]南日本の海灣には一体に好適地と認めらるゝ場所極めて多いのであるが、未だ民業としては[illegible]達して來ない

△ドーいふものだか各地に於て、水產試驗場が

雑　報

◉淡路福良通信

△瀬戸貝。　鳴門暗礁に蔓生附着する瀬戸貝は十二月初旬より翌三月下旬までの間に採取せられ、其收獲高大約五百貫目に及び、神戸大坂兩地に販賣せらる。明治十七八年の頃には礁上一面に蔓延し、採取額頗る多かりしかば其肉は之を乾燥して清國へ輸出せる程なりしが、乱採の結果大に蕃殖を害し、近年に至りては採取額著しく減少し、從つて價格の騰貴を來たし、こゝ數年間は大阪神戸兩地に送るのみなりと

△馬刀貝。　鳴門近海より汐崎に至る海岸一帶に生棲し二月より四月までの間に採取せられ、其額大約貳萬貫目に上る。販路は大阪德島方面にして、前者へは煮身として、後者へは生貝の儘積出すなり。馬刀貝も瀬戸貝と同じく、一時は乾肉として清國に輸出したることもありしが、賣行面白からざるため現時の狀態に陷りたるものなりといふ

△眞珠貝。　福良灣内の沿岸淺瀬に散在せる小岩石に蔓緣附著し、一昨年度の總採集量は左表の如し

貝數五十萬個、貝殼總量四千貫目（貝殼平均百個に付き八百目）生肉總量貳拾四石（百個平均四合八勺）眞珠總量七拾參匁（含有眞珠貝殼百個に付き壹厘五毛）

但し本口上乘物、芥子玉、泥入玉、鎔入玉共肉は煮身として大阪神戸に送り、又明石罐詰所等に送る。貝殼は神戸百番館へ販賣せる由なるが、從來は神戸臨濱に於て四人の貝ボタンを製する資に供せられ、其品質佳良なるや外國に輸出せられたるもの少なからずといふ

◉眞珠生育の研究

モナコ領事の依囑に應じ、シュラーといふ人が眞珠の起原に就て研究し、其の結果を報告し、同地の海洋學博物館に寄せた。昔は眞珠の起原を海蟲の外膜が砂などの外物に刺激さるゝ結果、其の外物に小珠をなして附着するを思はれ、次では病理學的假說を立てられ、死んだ牡蠣が材料で、其石灰が結晶したであると思はれた。然し最も當を得たる說は、眞珠を寄生虫のなす所とするので、この說によれば、輭体族が寄生虫の作用で胞を石灰化するのである。千八百五十二年にフェリッピは眞珠の形成を、小虫（トレメトード族）の卵の生ずるによるとした。千九百二年より四年迄にシュラー氏は眞珠を分析して、眞中に有機体の核があつて、コンキチリンといふ小虫が之を取圍めるを見た、この核は一吋餘の小虫（スコレックス）であつて、端の黒い眞珠牡蠣の寄生虫である又シュラー氏はチロセファルムのスコレックスは海鰩魚に寄生して、のみ發育する。海鰩魚は眞珠牡蠣を呑み、殼を砕き、牡蠣の中のスコレックス虫が魚の腸で生長するのである。この理が明かにならば人工を加へて純良の眞珠を得ることが出來るであらう。（讀賣新聞）

◉貝釦の製造狀況

西牟婁郡朝來村の橋本某が始め同郡東富田村新庄村に於ては目下十ヶ所の貝釦製造所ありて盛んに製作中なるが右は原價の低廉にも拘はらず品質良好の由にて神戸の某商舘と取引も盛んに行はれつゝあるが聞く所によれば阪地及び當地方に販賣する貝釦類は多く同所にて製造せるものなるが神戸商舘の手によりて再び當地に販賣せらるゝものなれば隨つて價格も幾分か昂値をなす事なれば當業者は同製造所と直取引するを上策とするとは某當局者の談（和歌山實業新聞）

◉漁業團蛤採集期

既記の如く韓海漁業團に於ては韓國洛東江の蛤採取業に從事する筈にて目下東飾磨郡に於て貝卷漁夫十人以上三十人を募集し廿七日迄に一切取極め廿九日に元千葉縣漁貨捌合資會社書記富田清康氏同伴渡韓し寒前より寒中に於ける蛤を採取する見込なりと云ふ　（東海新聞）

以て閉塞せらる、」

キセルガイ科 Clausiliidae.（第十圖）

○法螺貝の話

葛園

昔の戰陣には貝役といふものがある今でいへば丁度喇叭手に當る卽ち法螺貝を吹ひて兵の進退を司令したのであるけれども喇叭手は唯受令的一兵卒にすぎないに反し貝役といふものは歴きとした士格今ならば差詰尉官の位地であるそれ故主將に直隷して或る塲合には自づから機を量りて全軍の驅引を司る程の重き任務を帶びたるものである今茲に常山紀談より一の貝物語を原文の儘拔摘して讀者諸君に紹介し古考の一助に供してみやう

　輝政公關原合戰の前岐阜の城攻のとき合渡(がふど)の川向ひに岐阜勢出で此方より渡るを待かけたるに池田の御人數敵を見て進みかゝり切崩さんと勇みける所を輝政公兵機を遲しくせんために押へてかゝらせ給はず見つくろはせ給ふに御貝吹貝吹(かいふき)右衛門(ゑもん)最早進み貝を吹き可然と申上げ合渡の川へ三里だけふみこみ貝を水にて通しかゝり貝を大貝にて吹立ると池田の諸軍一同に川を渡りて其勢にて御勝利なり貝吹右衛門は武藤伊勢右衛門先祖なり貝吹右衛門中村勘齋など高祿の貝役なり輝政公右御合戰以後每年元朝(ぐわんてう)表へ御出ありて始めて御言葉をかけらるゝは貝吹右衛門なり表へ御出ふくゑもん目でたいと吹右衛門へ御言葉をかけらるゝとき吹右衛門五百八十年御目出度ござりまするど御返答申上ることと御吉例なり右の合渡の合戰のときに吹たる大貝は大概長さ一尺五六寸許りもありて息よわき者の吹かるゝ貝にあらず一はいを吹たるは福田市太夫若盛のときまでなり右の御合戰御勝利以後關が原御一戰後東照君御利運にて輝政公段々數國を封せられ播磨備前淡路三ヶ國の大守となり百万石の俸祿を得玉ふ故に此大貝を指して三ヶ國百万石を吹出したる御貝とて重寶となしたるものなり（常山紀談拾遺）

（三）側齒廣く、殼を有せず、外套は全背面を被へり」
　エンドトンチディ科　Endodontidae.（第二圖）
　蛞蝓科（なめくじ）　Philomycidae.（第三圖）

（乙）動物は足の邊緣上に溝を有せず、」

（一）口に顎を有せず、齒舌の齒は皆狹くして棘狀をなし、軟部は赤色或は黄色なり、」
　ストレプタキシディ科　Streptaxidae.（第四圖）

（二）顎は其上緣に（の如き）一ヶの方形板を有し、殼は長形にして極めて薄く、少數の螺環と、甚だ大なる殼口と、甚だ小さき螺塔とを有す」
　スクシニディ科　Succinidae.（第五圖）

（三）顎は單に弓狀（の如き）をなし、齒舌の緣齒は廣し」

（イ）殼は扁平なるか、球狀なるか、或は高かくして、擴張、反曲、或は厚くなりたる唇を有す、齒舌の中齒は殆んど側齒と同じ幅を有す」

（ロ）殼は長形、塔狀をなし、日本產にありては薄質、半透明にして、小さき殼口と薄くして鋭き唇とを有し、殼口內には齒或は薄板を有せず」
　マイマイ科　Helicidae.（第六圖）

（ハ）殼は卵形にして、卵圓形の殼口と、圓錐形の螺塔とを有し、唇は擴張或は反曲せず、殼軸に內壁は通例門口の薄板（複數）を有し、齒舌の齒は奇形をなす」
　アカチニディ科　Achatinidae.（第七圖）

（ニ）殼は卵形にして樽狀或は塔狀をなし、不透明にして殼口短く、概して齒を有し、唇は多少擴張し、或は反曲し、殼頂鈍し」
　アカチテリディー　Achatinellidae.（第八圖）
　プピリディー　Pupillidae.（第九圖）

（ホ）殼は長紡錘形をなし、概して狹長なり、殼口は卵形にして門口の薄板を有し、通例一ヶの殼質片を

後貝の義を失へり但目八譜に久保介とあるは寶貝の類にあらずシタダミ類の大形種なり　（以下次號）

海士少女とゞなひきつゝ海きはに
　とりわけみれはこやすかひなり

春風に波やおりけんみちのくの
　まがきが嶋のむめのはなかひ

○日本陸産貝類の分類綱要　（陸産第一版付）

昨年の頃なりき、余は米國の介類學大家ピルスブリ氏に陸産貝類分類の困難を訴へ、氏の示教を求めしに氏は寸暇なきにもかゝはらず、懇ろに日本陸産貝類分類の大綱を教示せられたれば、余は之を默するに忍びず、こゝに譯載することゝはなしぬ、もとより匆卒の際、余に對する注意までに記されたるものなれば、只其要点を擧げ、單に屬名を列記せる箇所も尠からず、讀者之を諒せよ」

陸産貝類の諸科は殆んど全く其肉体解剖に基けり、然れども左の綱領にありては成るべく殼の性質をも採用せり」

（甲）動物は邊緣上に足に沿ふて一條の溝を有す」

（一）菌舌の側菌は狹くして棘状をなす

殼は螺形にして球状、扁平、或は圓錐形なり日本産にありては概して薄く、半透明にして（ヘリコンセア及プリスチロマの外）、薄くして鋭き唇を有せり」

ゾニチデイ科　（[illegible]圖）

（二）菌舌の側菌は廣く、[illegible]或は[illegible]を有す」

殼は螺形にして扁平、臍孔を有し、不透明[illegible]、薄くして鈍き唇を有し、唇は決して擴張或は反曲することなし」

されども茲に云ふのみ。

〇動詞の起りの事

凡動詞は語根を名詞形容詞に取るを常とすれば換ふと云ふ動詞も亦貝の轉なりと思惟せらる其詳なるは後に讓る扨貨字は同化なり能く物に易る。依りて變化感化等の義に假借せられ竟には殆用言の状態となりしより之と區別せんが爲めに新に貝を附加して今の如く作りしと云即廣韻に貨者化也。變化反易之物。故字、有レ化也。とあり。

〇カヒ(詮)といふ語の事

貝は一の寶貨なるより義一轉してかひある。かひなしなどの詞も出て來にたり其初見は平安朝以來にて初めて土佐日記、竹取物語、後撰集に出でより以來最も廣く用ゐられたり、多くはかひなしといひ又貝に懸けて云へり大抵詮の字之に當れり新千載集賀に津守國冬「海原や波に漂ふ葦芽(アシガヒ)のかひある國となれるかしこさ」こはかひあるとよめる例なり百人一首に「かひなく立ん」とある句は「何の詮もなくて」と云ふに同し

〇たからがひの古稱ウマノクボカヒの事

たからがひとはいつの程より稱へ出てけん寶暦八年に出來にたる怡顏齋介品には「貝子俗ニ子安貝(コヤスガヒ)又齒貝(ハカイ)ト云フ」とありて寶貝の名未だ見えず文化文政前後の書には已に此名を載せたり子安貝の名は最も古くして竹取物語に出でたるが和名鈔には紫貝の一種を擧げて和名「宇萬乃久保加比(ウマノクボカヒ)」と註せり紫貝は石壽の目八譜に云へる八丈寶にして其形の尤大なる種あり季瀧云「古陰門の事をくぼといひしによれるなるべし」と按ずるに催馬樂の「陰名(くぼのな)」と題せる歌に「くぼの名をば、なにとかいふ、くぼの名をばなにとかいふ、つびたり云々」とあり守部が入文に云『くぼの名をば』註して云今按に、女陰の一名にて、上古に保登(ホド)と云ふ類なり、云屎は音朱、開也、久保とある是也、屎は玉門を朱門と云に同じ、和名抄にも出たり。云々』按にクボ又カヒの通音にして轉して窪(クボミ)の義に移り

川言をなし與へも意を轉して價ヒと呼び專ら物の品位を定むる語となりしもの丶如し

○二神釼璁を相換へ給ふ事

或人難じて曰若し果して然らんには古記中に見えざるやうやある買ふは換ふと云ふ言より轉せしものならん而して物を交換せし實例は神代史に

天照大神謂二素盞鳴尊一曰以二吾所帶之劍一今當奉レ汝汝以二汝所持ノ八坂璁之曲玉一可以授レ予矣　如レ此約束共相換取。

とある是なりと曰へ、然り有無交換はいづれの時代にも行はるれども現今に之を行ふと極めて稀なる如く其間には少なからざる不便あれば時態の勠進步をなすと丶もに忽其媒介物たる貨の必用起り而かも金銀に乏しき時代には貝。眞珠或は貴石等を以て之に宛てしとしるべきのみ。

○牽牛織女の事

牽牛織女の事は日本紀に出で今も質朴なる山村漁家には此祭を行へり萬葉集に一年に七夕のみあふ人の戀も盡きねば夜のふけゆくもなど數多其歌あり俗說も大方此意なり。今按ずるにこは數の九章に云粟布とて仲秋を期して開く米帛の貿易市の事を夫婦の會合に寓して云へるものならんかさらば是も有無交換の一例と云ふべし。又云賣買の事は夙に行はれしもこは物品の交換よりも常の事にて筆すべき程の事にあらざれば多く古書に漏れたるは深く異しむに足らず。

○石鏃は古代の通貨なりとの考の事

高知の貨泉家今井貞吉氏云石鏃は古代の貨幣なりとの考あり或說に南洋の或島にて矢竹に裝したる石鏃の獸骨に立ちたるを發堀せしとありとていたく此說を難せりといへどもこは寧偶然にて其物の獸を傷くるに適せざるよ竹木を燒き尖らせたるの鋭利なるに不レ及と遠し支那の古代通貨の斤斧刀戈形に模したるものをも倘武器なりと云ふべきや錢も戈に從へば武器とすべきやては貝の事なら

の媒介物に用ゐしこと世界萬國概然らざるはなし○說文曰「古者貨ㇾ貝」又曰「至ㇾ秦廢ㇾ貝行ㇾ錢」と、又字を制するに財寶賣買等の字皆貝に從へる等以て一斑を窺ふに足れり

○貝字訓義の事

貝字はタカラカヒの形象にして古字は貝也字の異體頗多しタカラとは寶字を訓み專珍寶の總稱なれども語根は田柄の義にして毛詩に稼穡惟寶とあるに叶へり蓋初寶字を作るや宀に从ひ玉に从ひ缶に从ひ貝に从へるは宇內此三物を以て珍寶中の尤なるものとなしゝに識由せり

○兒をタカラと呼ぶ事

うつぼ物語に生兒を「たから」と訓めりこは民を以て國の寶と稱する如く兒は家の寶なればなり。萬葉集卷第十六に「寶之字等」と詠めるも此義なり是玉なども寶と呼ぶにも優りて貴きこと限なし北伊勢には此義遺りて「內の寶」など云へりとぞ世間に子寶など云ひ歌に「子にまさる寶はあらじ」などよめる多し。

○本邦亦貝を貨とせし考の事

吾邦上古の貨幣制度は一も文献に徵すべきなし況んや貝を貨とせしとをや唯り沖繩縣にては古貝を貨となし、と南島志に見えたり、されども物を賣買するとをサリカヒと云へるに就きて考ふるに吾上古に在りても亦貝を貨となしゝものゝ如し卽ち此約束を定むる時は必次の如き問答あるなるべし

問「予は汝の所持る物を欲っす予は汝に其代の貝幾干を與ふべきか」

答「予は此代として貝若干を得んと思ふ汝の意如何」

扨物品は時に從ひて異なれども貝は常なるより之を主として物品の需要者を貝方と云ひ物品ハ供給者を得る方貝と稱し又此時與ふる貝の數を與へと呼びしが後には貝の體言を買ハン買ヒ買フ買へと活せて一の用言をなし得るの用言は更に賣ラン賣リ賣ル賣レと活せて別種の

に一の布袋あれば事足る。竹細工の手籠は、貝拾ひの一般に携ふる器具にして、一見便利なるが如くなるも凹凸不平なる岩上に跋渉する際動もすればこれを轉倒して折角丹精を凝らせる獲物を失ふことあり、否な余の如きは幾回も其失敗を經驗せる揚句に古手拭を以て袋を造り携へたるに轉倒の心配もなく、小貝を漏逸する憂もなくして頗る便利なるを覺えたり。其の他マテガヒ（Solen）メカジヤ（Lingula）等の如き、砂泥に埋れたるものを堀るには、手頃の鍬を要し、又ヒミズ（Lithophagus）カモメガヒ（Pholas）等の如き、岩若しくば珊瑚礁に穿沒せる種類を獲んが爲には、鐵鎚を要することもあれど、是等は必ずしも携帶するを要せざるなり。

沿岸採集を爲すに吾人に最も有益なる補助を與ふる者は海岸に遊び戯ぶるゝ漁村の兒童である。大人を雇はゞ、更に有益なるべく考へらるゝも、事實は然らずして、彼等は請求の大なる割合に得る所却つて少なり。彼等は、平素唯漁獲にのみ汲々として、食用に供すべき大貝ならば格別、利益の寡き貝類特に小貝等には無頓着なる習慣ある故なるか、兎角に獲る所少なし。然るに子供は無邪氣にして利得の念慮薄く、一に好奇心より能く吾人の希望を容れ、且活潑にして視力鋭ければ、意外の好貝奇品を齎らすことあり。彼等は賢き勸誘もよく聽き、大人の報酬は圓なるに、兒童の報酬は錢にて事足るも吾人に取りては實に一擧兩得の上策である。（つゞく）

○かひの名義考

永沼小一郎稿

○大古貝を以て貨とせし事

かひの種類は極めて多く其已に發見せられたる種類のみにても無慮三十萬と號し內現在種十六萬化石種十四萬と算ひ而して其形狀色彩の賞すべきもの少からざるも就中古人は寶貝を貴び之を装飾用とし又貨となして通商貿易

き望は少なし。小形の貝類は、往々砂の中に埋れて生存し、又遇々岩蔭に堆積せる殼の破片中には、ムカシタモト(Columbella)イトカケガヒ(Scala)等の類完全に保存せらるゝことあるを以て、或は砂を掘り、殼片を發きて細かに詮索することも亦必要である。概して蛤類は、殼薄くして破損し易きゆへ。沿岸採集に其完全なるものを得ること稀なれども砂濱には却つてこれを得べき望多くして彼のナミノコ、フヂノハナガヒ(Donax)の如き小貝を始め、マテガヒ(Solen)たかのは(Cultellus)ミゾガイ(Siliqua)等の如き形大にして殼の極めて脆弱なるものも、完全に打ち揚げらるゝことあり。

一度海岸に至りて落ち散りたる殼片を見れば、其の海の貝類に富めるや否やも分かり、産種も大畧判斷せらるゝものもある、若し其採集地たるを見出さば、近傍に滯在して屢々同所を見舞ふことも必要である。一回巡廻して直ちにこれを見捨つるが如きは輕卒といふべし、今日は何等目星しき標本を得ざるも、明日意外の稀品を獲ることとあり。殊に毎朝早く海岸を巡りて採集に從事するを良とす、否らざれば徒らに村童に拾得せらるゝ虞あればなり。且前夜海荒れ、波浪高く揚がれる後ならば、一層好貝を得るの望あり。余先年相州鵠沼に滯在中、毎朝沿岸に採集せしに一週間に多數の完全なる標本を得たることあり。

沿岸採集を爲すに當りて豫め考ふべきは、季節にして春季の干潮を最良とす。但の季節といへども潮の干滿を見計ふことを必要となす。干潮の際には平素近寄りがたき海中の岩礁も海底も共に露出するが故に、岩間を探り砂泥を堀りて多數の好標本を生獲するを得べき好機會である。

沿岸採集をなすに要する器具には大したるものなし。嘴の稍々扁き一挺のピンセット、少しく大なるナイフ、大小の管瓶數本(是は小貝を容るゝに甚だ輕便なり)、其の外

するとしても、興味は薄いものである。

貝類には、水産と陸産との二類あり。水産には純粋の鹹水に棲めるいはゆる海産あり、純粋の眞水に住める淡水産あり、又鹹淡混合水に生息するものあり。種屬の最も多數なるは海産にして、水の深淺に從ひ、更に沿岸、淺海、深海の三にこれを分つべし、其他海洋の水面に浮泳する彼の翼足類(Pteropoda)アサガホガヒ(Ianthina)等の如きものあれども、便宜上今はこれを淺海種の中に編入せり、採集法は、貝の棲所と習性とに從つて異なるものなれば、沿岸採集、海中採集、淡水採集及び陸上採集の四段に分ちて、これを記述せん。

(沿岸採集)　沿岸採集は、最も普通に而かも手輕く行はるゝ方法にして、完全なる標本の採集は期待すべからざるも、時機と場所とに依りて間々貴重なる標本を獲ることあり、貝類を多く産すると否とは、其土地の季候と瀕海の性質とに從つて、素より異同あれども沿岸の地形に依つて獲物に大なる相異あり、峻地の沿岸にして岩礁多き所なれば、最も普通に獲らるゝものは、タマキビ(Littorina)イシダヽミ(Monodonta)ヨメガサラ(Patella)クボガヒ(Trochus)レイシガヒ(Purpura)ヒザラガヒ(Chiton)等にして、是等は潮の干滿に從ひ、或は全く水上に露出し既に乾燥せる岩の間隙に附着して生活するものなれば、斯かる岩間を精細に檢するを要し、又自己の力に適ふべき岩石は一々轉倒して其の下面を檢することも甚だ必要である。

沿岸砂質にして、岩礁なき所にては、前の如き種類を得難し、然れども沿海貝類に富みて波浪の高く打ち揚ぐる所ならば、時に完全なる深海種をも拾ひ得ることあり。余嘗て土州の沿岸に採集を試みたる時、僅に十町許の砂濱に二十餘種のコヤスガヒ(Cypraea)を得たることあり。岩礁多き沿岸にては、假令打ち揚げらるゝものありても、破損せらるゝこと多きを以て、完全なる標本を拾得すべ

此類の他に類似したる諸種と異なる所は胎層の末端附近に絲狀の一龍骨を有するにあり」

ホ子ガヒ　M. Tenuispina, Lam.

胎核は淡黄白色の二層より成り、龍骨は下層の縫合に密接し、殆ど隱蔽せられんとす、核端の縱脹脉は小形にして圓く、之に次ぎ密接せる圓肋ありて第四層に至り縱脹脉に刺を見る、各層の肋類は九ヶにして、四條の細螺線に横ぎられ、胎層間の縫合は印刻せらる」


第十五圖　ホ子ガヒの殼頂

○貝類の採集に就きて

岩川友太郎

貝類は、多く堅き殼を被りて破損の憂も少く、且其の肉を保存せんとせざる以上は、保存液をも要せざるが故に、他の動物に比すれば、これを採集することも寧ろ容易である。然れども完全無缺にして、而かも美麗なる標本を獲んとすれば、其採集法に就きても種々の注意を要することがある。

貝類の完全なる標本とは、如何なるものなるか、先づ此の事より述べて見ませう。完全と申せば、別に説明を要せず、事理自ら明白なるが如くなるも、同じく完全といふ中にも階級がある。二枚貝(蛤類)にして二枚の殼片揃ひ、一枚貝(螺類)にして蓋(ふた)あるものに蓋の添ひたるは、之を缺ぎたるものに比すれば、完全に相違なきも、若し其貝が死して後、久しく空氣と日光とに晒され、或は波に揉まれて表皮剝脫し、尖角みな磨滅していはゆる俗にいふシヤレッカヒ(曝れ貝)ならば如何、これを表皮の色鮮かにして光澤麗はしく、質重くして活々したるものに比すれば、完全の程度は同日の論にあらざるべし。去れば完全の貝類標本とは、要するに殼の各部を全備し、色澤共に美くして生鮮なるものをいふと知るべし。斯かる標本にあらざれば、科學上の價値は甚た少く、娛樂に供

を左方に向はしむべし、殼口は指南とするに足らず、之れ殼の生長するに從て殼頂の殼口に對する位置を變せしむればなり」

今次は余(ベーカー氏)は觀察を模式的骨貝卽ちツリブラス類に限りたり」

余の知れる限りに於て骨貝の殼頂を記載せし人はワトソン氏(Watson)のみにして同氏は之をチャレンヂャ號探撿の腹足類報告中に記載せり」

ツリブラス　M. Tribulus, Linn.

核は角光を呈し、凡一層半の光澤ある螺環よりなり、龍骨は先端に始まり、頂層を繞り、遂に第二層上部の縫合線に至りて消失す、螺環始部側面の輪廓は外斜して龍骨に下り、龍骨よりは内斜して縫合に至り、第二層肋面の輪廓は微曲し、外方に下りて龍骨に達し、それより内斜して縫合に下れり、龍骨は下層の縫合の上少距離にありて下層の爲めに殆ど隱蔽せらる」

第十三圖



ツリブラスの殼頂

此頂層は絲狀の一小縱脹脈に終り、該縱脹脈以下の諸層は結節多く、第三層に及んで縱脹脈は刺を有するに至る螺層の縱脹脈が有刺となるまでには各螺層に九肋ありて初層次層との間の縫合は稍や印刻せらる」

アクキガヒ　M. Ternispina. Lam.

核は褐色の一層半より成り、龍骨は最後の胎層の末端附近に始まりて次層の最下螺線に達し、微にしてよく注視するに非ざれば認む可らず、側面の輪廓は同く、背層の頂點は少しく凹みて一方に曲下せり」

第十四圖



アクキガヒの殼頂

背層の末端に縱脹脈を繼ぎ次で諸々縱肋見はれ往々胎層中より始まることあり、肋は漸々其大さを增し第四層に至りて縱脹脈上に刺を生ずるに至る、各層に九肋を有し、四條の細螺線に横ぎられ胎層間の縫合は印刻せらる」

○骨貝類の殼頂の變形に就て

第十二圖



ナガテング（トライオンより）

は褐色にして口內はテングガヒの如く紅色を呈することなく白色或は暗褐色なり」

ホ子ガヒ類の殼頂の變形に就て、フランク、シー、ベーカー氏は一千八百九十年分費府博物學會紀要中にホ子ガヒ類の殼頂を記載し、單に殼頂の差別のみによりて、ホ子ガヒ類の分類を試みたり、余は今こゝに其中より僅かに三種の日本產ホ子ガヒ類に關することのみを摘譯して備考となしぬ

骨貝類の殼頂に存する胎殼は一乃至一ケ四分の一（二ケ半の一側あり）の光滑ありて縱脹脉を有せざる胎層より成り、或は圓形をなし、或は龍骨を有し、其境界に判然たる一縱脹脉を有し、頂部は多く稍々下せられて一方に下曲し、胚殼の先端は Murex scolopax Dill. の外は常に圓し、胎殼の螺層は或種にありては鈍き龍骨を有し、他の種にありては絲狀の一龍骨を有するも全く龍骨なくして單に圓きものも亦少からず、胎殼の境界をなせる縱脹脉は或は三角形をなし、或は圓く、或は大きく、或は小にして僅かに見ることを得べく、此縱脹脉より先きは卵を出でし後の生長部なること疑を容れず、

胎殼に龍骨を有せる種類にありては、其龍骨は螺環の中途より始まり、斜走して下の螺環の上部の縫合に終り、或は次層の最下の螺線に連續し、胎層に次げる諸層は概して圓くして、九乃至十三條の小縱肋を有し、其縱肋は大抵四ケの細螺線に横ぎらる、

現標本を下の記載に比較せんと欲せば先づ胎層の縱脹脉

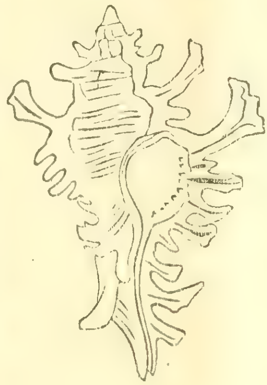
すべく、形狀ツリブラスに類似し、殊に其強固なる点該種に酷似せりと云へり」

テングガヒ亞屬

コテングガヒ M. Axicornis Lam.

産地、紀伊、

長、二三寸、



コテングガヒ（トライオンより）

第十圖

縦脹脈間に二三の縦肋あり、縦脹脈上には葉狀刺ありて其上刺は螺層上より生じ長くして曲り体層の下部に上刺よりも短き著しき刺あり、此両刺の間に更に短き刺あり、又脊上にも數刺ありて、よく發達せり表面は帯黄白色乃至暗褐色にして、隆起螺線は濃色なり」

○本邦海産貝類圖説備考

ガンセキモドキ M. Capucinus, Lam.

産地、紀伊、琉球、

長、三四寸、

殻は狭長にして螺塔高く、縦脹脈は厚く且扁平にして縁飾を有する刺を有せず、或は微刺を有することあり、[illegible]ある隆起線を繞らし縦脹脈間に二縦肋ありて結節狀をなし、内外共に栗色にして、外脣に歯あり」



ガンセキモドキ（トライオンより）

第十一圖

ナガテング M. Elongatus, Lam.=M. Sinensis, Reeve.

産地、未詳、支那、インド洋等にも産すと云ふ、

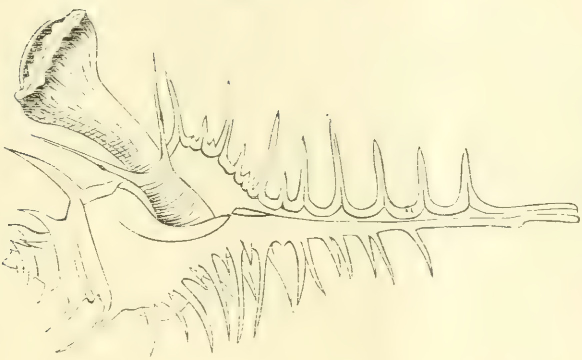
長、三四寸、

テングガヒよりも狭長なり外脣にテングガヒと同様なる一牙を有するも、大抵テングガヒよりも濃色なるか、或

アクキガヒ

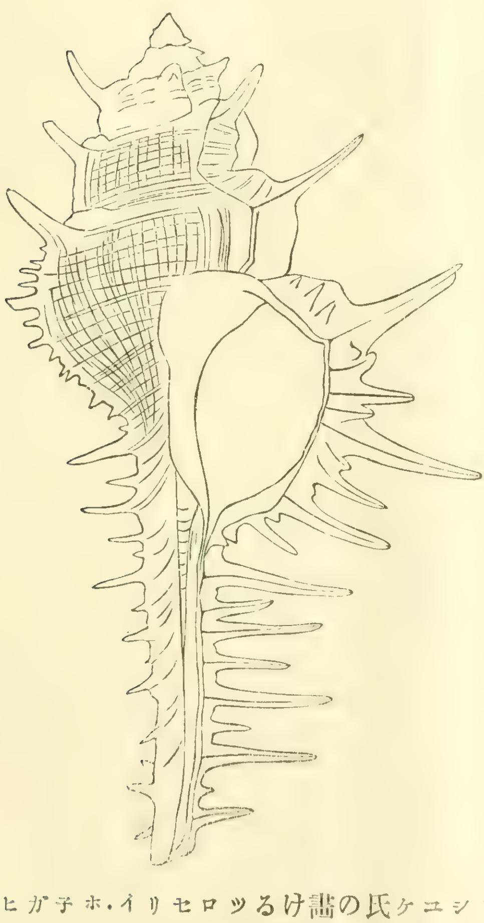
此圖はQuoy氏及Gaimard氏の畫けるアッキガヒの圖を轉寫せしものにて、其殼を仰向に安置せしときに殼內の動物が非常に伸長して起き上らんとするを示せり、足は頗る大きく、亞圓筒形にして、帶黃色を呈し、兩側に黃色、褐色及赤色を混彩せり、觸角は極めて細長にして、形圓く、先端尖り、其中央部に眼あり、外套は灰色にして、其緣は波狀をなせり」トライオン氏はM. Martinianus, Reve. 及M. Adunco-spinosus. Beck. を此種に合し、只刺の發達の程度を異にせるものなりとし、リシュケ氏の記載せる、M. Troscheli, Lischke.（第九圖）も此種の大形にして强固なるものとし、其完全なるものは長凡七吋に達

第八圖



アクキガヒ（トライオンより）

第九圖



リシュケ氏の畫けるツロセリイ・ホネガヒ
（トライオンより）

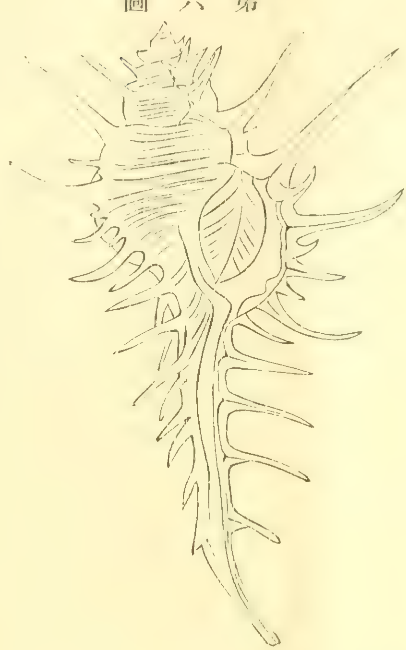
ツリブラスホ子ガヒ

M. Tribulas, Linn.

產地、日本、支那、紅海、

長、四吋半に達す、

第六圖



ツリブラス、ホ子ガヒ（トライオンより）

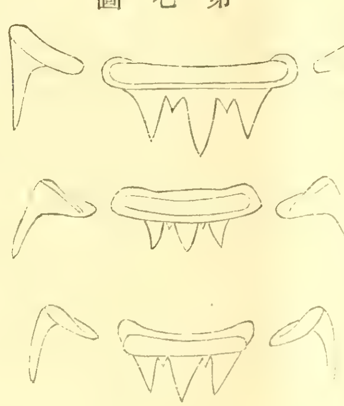
諸螺層は數條の結節狀肋（各縱脹脈間に四乃至六條あり）に横ぎられ、該肋は更らに大小交互せる螺脈に横ぎらるゝ、

（本邦海產貝類圖說稿考）

模式形は褐点の數螺列を有し、脊上の刺はホ子ガヒに於けるが如く多數ならず、

M. Nigrospinosus, Reeve. は此種の刺が黑色を呈せるものに外ならず」

第七圖



甲　乙　丙

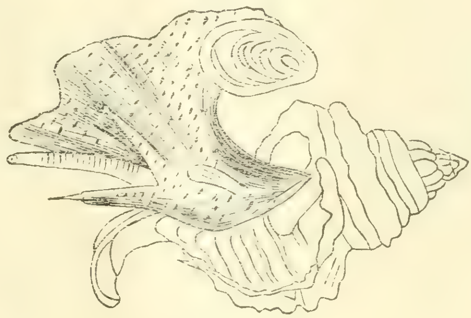
ホ子ガヒの齒舌

甲ハツキガヒ　乙ツリブフス　丙テングガヒ

附言、トライオン氏はアクキガヒの條下に該種が殆んどトリブラスと區別し難く、之を別種とすることを非常に躊躇すと記せり」余の大隅國大島より得たる標品は正にホ子ガヒとアクキガヒとの中間の形態を有し、其何れに屬するやを判じ難し」

より紫色の染料を取りしことありと云ふ、其法小形の種は殼と共に臼にて之を搗き碎き、大形のかひよりは其動物を抜き出して之を製したりとぞ、故に或地方(Tyrian coast 及び希臘國 Morea 海岸等)にありては今猶往時染料に用ひし、介殼(M. Trunculus, Linn. 及び M. Brandaris, Linn.) 碎片の堆積と岩を掘凹めし大釜形の孔とを發見することありと云ふ」

第四圖



染料を取るかひ (M. Trunculus, Linn.)

(トライオンより)

第五圖



染料を取るかひ (M. Brandaris, Linn.)

(トライオンより)

の彫刻は概して外套緣の作り出す所にして、よく外套緣の不規則なる凹凹に適合せるもの丶如し」

刺、ホチガヒ類の刺は恰も猬（ハリネヅミ）の剛毛が犬等の强敵を禦ぐに足るが如く、殼內の動物をして魚類及他の水棲肉食動物の呑食を免れしむる防禦的武器の用をなすものなるべしと云ふ」

自殼溶解の能力、かひ類中には往々自殼の一部を溶解するの能力を有するものありて、ホチガヒ類中にも自殼の成長發展を阻得する刺を取り去ることを得るものありと云ふ」

牡蠣の敵、ホチガヒ類は牡蠣飼養者の大敵にして、エリナセウス骨貝（エリナセウスがひ）（M. Erinaceus, Linn. やうらくがひ屬に屬す）と稱する歐洲產の一種（英吉利海峽の兩岸に多く、漁夫等は之を刺螺（Sting winkle）と稱し其吻を以て他のかひ類の殼に圓孔を穿つと信ぜり）は實に牡蠣床の强賊と稱す可く、佛國ボルドウ附近の牡蠣床にありては漁夫を雇ひて終日小刀を以て其足の一部と其厴とを切斷して之を撲滅することに從事せしむと云ふ、さて此類が牡蠣を害する方法をたづぬるに、始め牡蠣の殼面に固着し、牡蠣の殼頂附近の一点に自己の吻をあてがひ、三四時間其体を左右に動かし、遂に一小圓孔を穿ちて牡蠣の內臟を貪食すと云ふ、之れ蓋し其齒舌を以て牡蠣の殼を磨り銼すものなるべし、或は一種の酸液を分泌して牡蠣の一部を溶解せしむるならんとの說もあれど、之れ只一の臆測に過ぎず、フイシエル氏（M. Fischer）は此類の幼者は幼牡蠣を選み食ひ、已に成長せし者は成長せし大なる牡蠣を嗜好し、又ホチガヒ類は生牡蠣を好むもムシロガヒ類及タマガヒ類は其死肉を食ふことを觀察したり」

第三圖



（トライオン氏に從ふ）

染料、ホチガヒ類中には紫液を分泌する特別の腺を有せるものありて、昔時西洋諸國にありては諸種のホチガヒ

○本邦海產貝類圖說備考

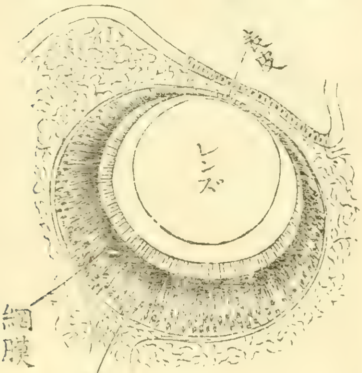
英語にては Spiny reck shell と云ふ、

分布、地球上到る所に産し、學名の知られたるもの總計凡二百餘種に及び、主もに熱帶及亞熱帶産にして、熱帶亞米利加の西岸、支那海、亞弗利加の西岸、西印度等に最も多く産し、低潮線下凡そ二十五尋に至るまでの海水中に住し、稀には六十尋の深所に住することありと云ふ」

化石、英國、佛國、ジアヴア等の始新層以下に發見せられ、學名の知られたるもの凡そ百六十餘種あり」

模式 ホ子ガヒ

第一圖 ホ子ガヒの眼

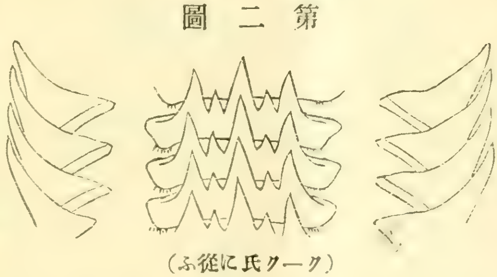


(ヒルゲル氏に從ふ)

眼、ホ子ガヒの或種にありては眼の構造頗ぶる複雜なり、之れ此屬が腹足類中の高位に位する一證にして、眼球を被へる表皮は比較的に厚く、又眼球内には他の高等動物の硝子体に匹敵すべきレンズを有せることと上圖の如し」

ホ子ガヒの一種 M. Regius, Lam. の齒舌の一部(六十倍)

第二圖



(クーク氏に從ふ)

齒舌、齒舌によりて分類すればホ子ガヒ類は尖舌類(Rhachiglossa)に屬し、中齒の强大にして多尖なるは、其肉食類なることを示し、側齒は一尖にして稍退化せることと上圖に示せるが如し」

彫刻、ホ子ガヒの殼面にある縱脹脉は殼の成長が一時中止せし痕を示せるものにして、其刺は始め其腹方に裂目を有せる中空の管なれども、動物の成長に伴ひ外套緣の退去するに從ひ漸々中實となるに至る」總て介殼の表面に於ける種々

産地、相摸、薩摩、大隅、紀伊、
長、四寸内外、
形狀、各層の縱脹脈上に各一ヶ宛の長刺あり、葉狀をなさず、該脈間には各二三行の曖昧なる縱肋ありて、各層の中央に大なる結節を有し、体層の下部及嘴に數小刺を具へ、外唇に齒あり」
彩色、帶白色にして、口内は帶白乃至肉色なり」

テングガヒ M. Ramosus, Linn.　（海産、第二版、第十一圖）

産地、大隅大島、薩摩、琉球、
長、四寸乃至一尺、
形狀、此屬中の最大なるものにして、殼質堅固、螺塔低く、殼口大きく、縱脹脈上にはガンセキボラの如く枝多き葉狀突起を簇出するも該種の如く密接せず、外唇の下方三分の一ばかりの所に、腹方に向へる牙狀の一突起を有し、全背面殊に刺背は細鱗をなす」
彩色、白色にして細螺脈は栗色を彩り、所々に褐雲あり口内は白色にして兩唇殊に内唇は肉色を彩れり」

キエボラ M. Brevifrons, Lam.　（海産、第二版、第十二圖）

産地、相摸、安房、伊勢、淡路、土佐、
長、三四寸
形狀、前種に酷似し、前種よりも小形にして、前種の幼貝よりも螺塔高きを以て識別すべし」
彩色、前種に似て少しく汚褐色を呈し、幼貝には淡栗色の暈と栗色の三廣帶とを有するものあり」

○本邦海産貝類圖說備考

ホ子ガヒ科

ホ子ガヒ屬

異名、　Aranea, Perry.　Centronotus, Swn.
Murianthus Swn.　Muricidea, Swr.
Haustellum, Klein.　Brontes, Montf.

産地、屋久島、
長、二寸六七分、
形狀、刺は分岐して葉狀をなし、內脣に齒あるを以て容易に類似の他種と識別し得べし、縱脹脈間には二三行の縱肋あり」
彩色、褐色にして螺肋は栗色を呈し、葉上紅色を彩るものありと云ふ、口內白色にして兩脣緣は栗黑を呈し、齒は白色なり」

ガンセキボラ　M. Adustus, Lam.
（海產、第一版、第八圖）

産地、土佐、薩摩、琉球、八丈島、
長、二三寸、
形狀、殼質重厚、螺塔高くして全長の半に近く、縱脹脈より葉狀突起を出し、該脈間に一ヶ宛の大なる縱肋の脹起あり、又之を横ぎれる大小の肋ありて、其大肋は葉狀突起に終り、大なる葉狀突起よりは左右に枝を出せり」
彩色、多くは灰白色の汚物に覆はれ、往々黑色を呈し、全体は黃褐色にして、大なる螺肋は栗色なり」口內は白色、兩脣は肉紅色にして、幼貝には往々口內菫色を呈するものあり」

コガンセキ　M. Penchinati, Crosse.
（海產、第二版、第九圖）

産地、長崎、小笠原、
大、一寸乃至一寸六七分
形狀、前種よりも著しく小形にして、其葉狀突起は連續して緣飾をなし、縱脹脈間に二縱肋を有するを以て前種の幼貝と識別するを得」
彩色、帶白色に微紅を彩り、口內白色にして往々微紅を彩る」

ハツキガヒ八鬼貝　M. Senegalensis, Gmel.
Var. Calcar, Kiener.
（海產、第二版、第十圖）

オガサハラツブリ 新稱　M. Gallinago, Sowb.

（海產、第一版、第五圖）

產地、小笠原母島、

長、二寸乃至二寸五分、

形狀、前種に似て小形、螺層高く、長き嘴は少しく背方に曲り、縱肋は著明なり」

彩色、地色は前種に等しく、各螺層に一帶宛、体層に三帶、嘴に曖昧なる二三條の褐色帶あり、口內は白色なり」

六百介圖の象介に酷似せるも其當否を確むるに由なし故に暫く新稱を附して後考を待つ、

芭蕉貝亞屬　Pteronotus, Swainson.

バセウガヒ　M. Pinnatus, Wood.

＝M. Pellucidus, Reeve.

（海產、第一版、第六圖）

產地、未詳

長、凡二寸五分

形狀、紡錘形にして、三行の捩れたる縱脹脉上には薄き翼狀突起ありて、外唇にあるもの殊に廣く、殼軸の端は左方に向て、水管溝は右方に向て反曲して人字形をなし、各層の縱脹脉間には各一ヶ宛の疣を具へ、大小交互せる螺肋を有して翼狀突起に及び、其外觀芭蕉の葉に髣髴たり、外唇及上唇には內方に擴長せる薄板ありて、殼口を狹め殼口をして往々亞三角形を呈せしむることあり」

彩色、全表面及口內共に純白なり」

此種は支那產として世に知られ、トライオン氏はフイリッピンのバンダヤン島にて淺き七尋の珊瑚底に發見せられたる M. Pellucidus. Reeve. と異名同物成とせり」

天狗貝亞屬　Chicoreus, Montf.

センジユガヒ 新稱　M. Palma-rosae, Lam.

（海產、第一版、第七圖）

螺肋の裏面に當り褐線を見はせり」

アクキガヒ 悪鬼貝　M. Telnispina, Linn.

（海産、第一版、第二圖）

産地、紀伊、大隅、和泉、相摸、土佐、清國、

長、凡五六寸、

形狀、前種に似て稍や大形なり、刺は數少くまばらにして太し、

彩色、前種に似て、螺肋は紫褐色を呈し、口内は白色なり」

ヒメホネガヒ 新稱　M. Sobrinus, A. Ad.

（海産、第一版、第三圖）

産地、阿波、伊豫、

長、凡一二寸、

形狀、前種に似て小形なり、縦脹脈上及長腨上の刺數少く、各螺層の肩角上にあるものゝ外は概して短し」彫刻は前種に似て縦脹脈間の縦肋は著しく、概して三行なれども、往々四行なることあり」

彩色、前種に似て、体層に紫褐色の二螺帶を有し、口内は淡菫色なれども、往々体層表面の褐帶を透見することあり」

介志のツムは多分此貝なるべきも、其當否を確むるに由なし、故に暫く新名を附して後考を待つ」

サツマツブリ 薩摩紡車利　M. Haustellum, Linn.

（海産、第一版、第四圖）

産地、薩摩、大隅、琉球、

長、凡四五寸、

形狀、球形、長腨、殆んど刺なく、內唇は著しく殼軸を離れて伸長反曲す」三行の縦脹脈間には三四行宛の大なる結節狀縦肋あり、又波狀をなせる細螺脈あり」

彩色、地色は前三種に似、縦脹脈上所々に暗雲を見はし、螺脈は紫褐色なり、口内は淡肉色にして両唇は肉紅色を呈す」

只前水管溝の變じて殼質の管となりて殘れるあるのみ靨は欠けるもの丶如し」

サワボラ屬、Sypharatista. 殼は獨樂形、亞圓盤狀にして、上部の諸層は相接觸せるも、下層は多少分離せり、殼口は擴張し、微角を有し、口緣反轉し、臍孔甚だ大にして漏斗狀をなし、其螺層は尖端に至るまで外より之を見ることを得、靨なし」

ラパ屬 Rapa=Bulbus. 殼質薄く、球狀梨形にして、軸は穿孔し、臍孔は反折せる內唇の爲めに一部覆はれ、螺塔鈍く、殼口は橢圓形にして、前方は延長して稍反曲せる溝をなし、靨は未詳なり」

マヂラス屬、Magilus=Leptoconchus. 幼殼は螺狀をなして薄きも、長ずるに及んで、堅固となり、管狀をなし、白色を呈し、始めの三四層は螺狀をなせるも、下層は延長して、不規則なる直管或は曲管をなし、後部は堅固にして、左側に一ケの水管龍骨を有せり」

ホネガヒ科 Muricidae.

ホネガヒ屬 Murex Linn.

模式**ホネガヒ** Typical.

ホネガヒ骨貝 M. Tenuispina, Lam.

（海產、第一版、第一圖）

產地、紀伊、薩摩、肥後、

長、凡三四寸、

形狀、嘴（水管溝）長く、互に百二十度の角をなして三行の縱脹脉上には縱に幷列せる長曲刺あり、就中外脣下の嘴上に位せるもの最も長く往々一寸二分に達するものあり、背列之に次ぎ、內唇の列最も短し、又長刺の間に異なりたる方面に曲れる短刺あり、嘴の外觀魚類の脊骨に似たり、之れ骨貝の名ある所以ならん、螺肋の大なるものは長刺に終り、小なるものは短刺に終り、曖昧なる結節狀の縱肋と精細なる生長線とを有す」

彩色、帶白乃至淡黃褐色にして口內は白色なれども往々

にして、前方は延長して閉塞せる水管溝をなせり、未だ本邦産あるを知らず」

ツノオリイレ屬、Trophon.　縱脹脉は多數にして、薄板狀或は鋸齒狀をなし、螺塔秀で、殼口は卵形にして、溝は開き、大抵左方に曲り、殼は白色にして、殼口內は屢ば暗色を呈し、主として北氷洋及南氷洋に産す」

レイシガヒ亞科分類綱領

レイシガヒ屬、Purpura.　殼は長卵形にして、体層大きく、螺塔は概して短し、殼口は卵形にして大きく、極めて短き斜溝を以て終り、或は只刻目をなし、殼軸は扁平にして外唇は簡單なり」

イオバス屬、Iopas.　殼は卵形にして、皺多く、体層大きく、螺塔尖り、殼口は中庸にして、先端凹みて溝をなし、內唇は薄き琺瑯質を以て被はれ、後部には著しき一ヶの襞狀滑層を有し、外唇は波狀をなし、其內緣は鈍鋸齒をなせり」

ヴエキシラ屬、Vexilla.　殼は茘枝形にして、內唇扁平にして低く、外唇は十分生長せる標品にありては厚くして內曲し、齒を有し、殼口廣し」

イガレイシ屬、Ricinula.　殼は卵形にして固く、螺塔短く、諸螺層は結節或は刺を有し、殼口狹長にして滑層突起によりて狹窄せられ、前方には先端凹める短き斜溝を有し、內唇には結節狀の皺ありて、往々指狀をなせり」

アカニシ屬、Rapana.　殼は脹らみ、殼軸の穿孔は頂に達し、螺塔低く、殼口は卵形をなして前方狹く、溝は開きて少しく反曲し、內唇は反折して前部は離れ、臍孔は廣くして皺めり」

リゾキルス屬、Rhizochilus＝Coralliophila.　殼は幼時は附着せずしてアカニシに類似せるも、成長の後には堅固にして多少不規則なる內外唇の擴張部を以て往々珊瑚の軸或は他の介殼の表面に附着し、遂に其口を閉ぢ、

し、稍や曲れり」

テングガヒ亞屬、Chicoreus. 殼は卵樣梨形にして、縱脹脉は葉狀をなし、時としては刺狀を呈す、溝部は短くして曲り、廣くして殆んど閉塞せり」

b. 縱脹脉は四乃至十、

リノカンタ亞屬、Rhinocantha. 体層短く、模式骨貝的の長溝部を具ふるも、多數の縱脹脉を有せり、未だ本邦産あるを知らず」

イヲフガヒ亞屬 Homalocantha. 螺層圓く、縫合甚だ深く、縱脹脉は葉狀をなし、擴張して指狀を呈し、溝部は長し」

フイロノタス亞屬 Phyllonotus. テングガヒ亞屬に似て縱脹脉多し」

B. 嚼はレイシガヒ的なり、

a. 縱脹脉は三、

ヒレガヒ亞屬 Cerostoma. 縱脹脉は翼狀にして、殼口は外唇の內部大抵齒狀を爲し、其基底附近に一ケの延長せる齒を有し、芭蕉貝亞屬に似たり」

b. 縱脹脉は多數、

ヴイツラリア亞屬、Vitularia. 殼は楕圓形にして螺塔短く、体層長く、溝甚だ短くして廣く、外唇厚く、其內部は齒狀をなし、縱脹脉は殆んど磨滅せり」

ヤウラクガヒ亞屬、Ocinebra. 螺塔高く、溝は多少閉お、縱脹脉は葉狀にして時としては刺を有せり」

ウロサルピンクス屬、Urosalpinx. 紡錘形にして、縱脹脉なく其代りに縱肋あり」

ユープリユラ屬、Eupleura. ミヤコボラ形にして、兩側に側位縱脹脉の一對を有し、其中間に數條の、小さき縱脹脉あり、殼口の內方は齒狀をなす、未だ本邦産あるを知らず」

チフイス屬 Typhis. 卵形或は楕圓形をなし、三ケの刺狀縱脹脉間に突出せる中空の管を有し、殼口は亞圓形

或は石灰質なり」

管口類、Siphonostomata.

ホネガヒ科、Muricidae. 殼は螺狀、紡錘形にして、殼口は前方に長溝乃至刻目を有す」（無柄眼は觸角の外基底に位し右觸角の後方に大なる陰莖あり、齒舌は伸縮自在なる吻内にありて、其中齒は少くとも三強尖を有し側齒は平坦なり、殼は堅固にして、多少の結節、刺及縱脹脉を有し前溝は單に刻口のものより長管をなすものに至るまで長短種々あり」

ホネガヒ亞科、Muricinae. 殼は溝を有し、諸螺層は縱脹脉（複數）に横ぎられ、厴は卵形にして、核は亞頂位なり」

レイシガヒ亞科、Purpurinae. 殼は前方に極短の水管或は刻目を有し、往々肋を具へ或は結節多く、殼軸は大抵廣く且つ扁平なり、厴は楕圓形にして其核長く長形の外緣をなせり」

右二亞科の記載は大体に應用すべしと雖ども、往々二者の何れに屬すべきか、區別判然たらざる者なしとせず、例へばホネガヒ亞科中の一種にしてレイシガヒ亞科的の厴と短溝とを具へ、又レイシガヒ亞科中の一種にして骨貝亞科的の縱脹脉を有する者あるが如し」

ホネガヒ亞科分類綱領

ホネガヒ屬、Murex. 殼は卵形或は楕圓形にして、螺塔秀で、諸螺層脹れ、三ヶ以上の連續せる縱脹脉に横ぎられ、殼口の下方は溝をなし、其溝は概して一部閉塞せり」

A. 厴は亞頂核を有す、

a. 縱脹脉は三、

模式**ホネガヒ**、殼は刺多く、螺塔高く、溝部極めて細長にして直し」

バセヲガヒ亞屬、Pteronotus. 殼は三角形にして、縱脹脉は鰭狀或は葉狀をなし、溝部は中庸にして閉塞

學ひの海の水そくみける　加藤　壽

海あさりくぬかさくりてあめか下
君かまなこにもるゝ貝なき　伴　葛園

好みては心同しき世の人に
あまねく頒つ貝の繪説きや　同人

おしなへてのこるくまなくあつめけり
よのたからかひうさわすれ貝　進藤爲名

拾ひ得したからの智識分たんと
新にいずる貝の此のふみ　小林長陽

君ありてまた世に知れぬ貝の名も
しらへつくさん日こそ待たるれ　山本三省

內外の貝の光りや春の風　織田松里

○本邦海產介類圖說（第一）

綱、**腹足類** Gastropoda.

眼及觸角を具へたる頭部を有し、体部は通例螺狀或は圓錐狀の單殼を以て保護せられ、体の下面よりは厚くして擴張せる一ケの匍匐盤卽ち足を出せり」

第一目、前鰓類、Prosobranchiata.

動物は匍匐或は游泳し、通例其肉体を容るゝに充分なる介殼を以て保護せられ、呼吸器(鰓)は羽狀にして、心臟の前方に位し、雌雄異體なり」

甲區、管口類、Siphonostomata.

動物の外套緣は延長して一ケの水管となり、体外の水を鰓室內に送るの用をなす、肉食、海產にして、殼は螺狀をなし、殼軸は通例臍孔を有せず、殼口は延長して溝或は單に刻目をなし厴は薄板狀にして角質なり」

乙區、大口類、Holostomata.

呼吸水管を欠ぎ、或は外套の襟狀葉にて代表せられ、殼は螺狀或は皿狀をなし、概して球形或は圓錐形なり、殼口は下部完全にして圓し、海水、淡水及陸上に產し、大抵植物を食し(玉介類は肉食なり)、厴は螺狀にして角質

ブライアント、ウオーカー

千九百六年十月二十日

平瀨與一郎殿

○米國ウイリヤム、エチ、ドール氏來翰

拜復、小生は貴國產介類學に貢献するの目的を以て貴下が發行せんとする雜誌の上に御成功あらんことを望み、不幸貴國語を解せず候らへども、喜んで讀者たらんとする者に御座候。世界何れの國と雖ども貴國の如く趣味ある動物界を有するもの無之、加ふるに自然物を描くに巧なる多くの日本美術家を有せらるゝことに候らへば、貴下が美はしく其說を圖解するに於て毫末困難を感ぜられざるべしと存候、小生も折あらば貴誌に寄稿仕らんと樂しみ居り候

ウイリアム、エッチ、ドール

千九百六年十月廿二日

平瀨與一郎殿

○米國ジョージ、クラップ氏來翰

拜復、八月三十一日附御書拜誦、貴下が今回日本產軟体動物に關する月刊雜誌御刊行の趣承り、欣喜此事に御座候。小生は貴國人否全介類界が此の極めて趣味ある問題が貴下の如き老手に依りて提げられたるを慶賀すべきを信じ、茲に貴下が其事業に成功せられんことを祈り、小生も讀者の一人たらんことを望み候

ヂヨルヂ、クラップ

千九百六年十一月八日

平瀨與一郎殿

○祝歌句

あら磯にすたれし貝をかきあつめ

事に御座候。余は貴下の御成功を祈り、鶴首して初號の出でんことを望み候。心血を注ぎたる好出版物、就中特殊なる科學專門のものにありては、其結果として、啻に其出版せられたる國の學術界に對してのみならず、他邦に於ても同様大刺激を與へたるは殆ど其揆を一に致し候而して余の貴誌に待つ所も實に之に外ならず候

イー、アール、サイクス

千九百六年十月四日

平瀬與一郎殿

○英國ジー、ケー、グード氏來翰

拝復、這回日本產軟体動物の研究を專門とする月刊雜誌を發行せんとの貴下の提議は――亞細亞に於ける此種產物の魁たる――貴國に於て信實なる歡迎と賞讃とを博すべきを疑はず候。而して小生も亦衷心より貴下の御成功を祈る一人に御座候

ジー、ケー、グード

千九百六年十月廿三日

平瀬與一郎殿

○米國ブライアント、ヲーカー氏來翰

日本介類雜誌御發行の趣御報被下候八月三十一日附の貴書正に拝誦仕候。驚歎すべき日本動物界に關する吾徒の知識が茲數年間に於て多大の進步をなせるは、一に貴下の熱心且つ丹精を籠められたる御盡力に之れ由る儀と存候。此の如き貴下にして、其同胞國民をして國產介類の眞價を知り且つ之を研究するに便ならしむる雜誌を發行せられんとするは、衷心祝すべきの事に御座候。而して是れ必ずや愉快なる斯學に對する民間の趣味を鼓吹すべきを疑はず候。呉れ〳〵も讀むべき這回の御企に付き貴下の御成功を祈り候、敬具

Nov. 8th, 1906.

Dear Sir:—

I have your favor of 31st Aug., and am pleased to note that you are about to begin the publication of a monthly magazine devoted to the mollusca of Japan.

I think that the people of Japan and in fact the whole conchological world, are to be congratulated on having this most interesting subject taken up by so competent a man as yourself and that you will be successful in your undertaking.

Kindly put me down as a subscriber,

Very sincerely yours,

Geo. Clapp.

○佛國フィリップ、ダウチエンベルグ氏來翰

拜復、貴下今般日本介類學專攻の雜誌御發行の由、欣喜の至りに奉存候。小生は貴下が天晴企圖を成就せらるべきを信じ、此くて明媚なる貴國の驚異すべき動物界が、尙一層世界各地の介類學者に知らるゝならんと存じ候。小生は充分なる貴下の成功に對し、萬腔の希望を寄せ、此くも價値ある興味ある出版物の擴張に付き、及ぶ丈け貢献するを得ば幸甚と存候。

フィリップ、ダウチエンベルグ

千九百六年十月廿六日

平瀨與一郎殿

○英國イー、アール、サイクス氏來翰

拜復、貴下今回日本介類學專門の雜誌御發行の由欣喜此

Detroit, Michigan, Oct, 20, 1906.

Dear Sir,

your favor of August 31st announcing the publication of a Japanese conchological magazine was duly received. The great progress during the last few years in our knowledge of the wonderful fauna of Japan has been wholly due to your zealous and painstaking labors. It is a subject of sincere congratulation that you are about to undertake the publication of a magagine that will enable Your own people to appreceate and study the shells of their own country. It can not fail to stimulate popular interest in this delightful branch of science.

With best wishes for your success in this laudable enterprise,

I am,

Yours very sincerely

Bryant Walker.

Washington, D. C., Oct. 22, 1906.

My dear sir:

I hope your project of a magazine for contributions to the knowledge of Japanese shells may be successful, and should be pleased to enroll myself among your subscribers, although I can not unfortunately read the Japanese language. No country has a more interesting fauna of mollusks than Japan, and with the numerous Japanese artists who understand so well how to portray natural objects, you should have no difficulty in illustrating your articles beautifully. I should be pleased, if occasion offers, to send you some notes for your publication,

Believe me,

Yours sincerely,

Wm. H. Dall

3. Grays Inn Place,
Gray's Inn
London
Oct. 4th, 1906

Dear Sir

I am much pleased to hear that you are issuing a periodical devoted to the interests of Conchology in Japan. I wish you all success, all shall look forward to seeing the first number.

A carefully edited publication, specially devoted to one particular branch of science, has, almost invariably, the result of giving a great stimulus to the study, not only in the country in which it appears, but in other lands as well. That this may be the consequence of your journal is the least wish that I can send you.

E. R. Sykes.

114, Adelaide Road,
Hampstead, N. W.
Oct. 23. 1906.

Dear Sir

Your proposal to start a monthly magazine devoted to the study of Japanese Mollusca—the first of its kind to be produced in Asia—will doubtless meet with cordial welcome and approval in your own country and with sincere wishes for every success from

Yours fathfully

G. K. Gude.

需むる所も科學的分類等を解説せよと云ふには非ざるべし。

几上廣益玉篇あり、其の貝部を見るに和漢人の貝に對する觀念を窺ふことを得るなり。

貞 タヽシ　責 セムル　資 タスケ

贒 カシコシ（賢の古字）

などは貞操、責任、資望、贒良の熟語となりて、倫理的なり。

賚 アタヘル　賞 タマフ　賑 ニギハフ

貸 ホドコス　買 カフ　貨 タカラ

貯 ヲサム　財 タカラ　貢 ミツギ

などは一字にて十分に豊富の感を與ふるなり。

故に平瀬君の新刊雜誌は經濟的にして亦道徳的なることを知了す科學的なるは論ずるをまたず、前途の希望は東洋の大なるが如し、謹而祝之

明治四十年一月　戸川殘花

Paris, 26 Oct. 1906.
209. Rue De L'université

Dear Sir,

I am very glad to hear you are intented to publish a magazine principally devoted to the study of Japanese shells. I am sure you will carry out quite well your purpose and so the marvellous fauna of your beautiful country will soon be, thanks to you, better known to the conchologists of every part of the world.

I send you my best wishes for a full success and shall be happy to contribute as much as possible to the dispersion of so valuable and interesting a publication.

Yours very truly

Ph. Dautzenberg

言へば、洵に一小國たりと雖も、其の位置よりすれば、北は樺太より、南は臺灣に至るまで、寒帶より溫帶を經て熱帶に至り、地勢氣候の點よりすれば、千差萬別全世界の事物を一所に集めたりと謂ふべし。故に科學者の學術上より研究する材料は、實に他國にて得られぬものあり。殊に介類の種類の多き、其の一種の研究にすら、學者一生涯の研究を値するものあり。將來の水產國として世界に立つ我邦に於て、各種專門雜誌の發刊を見るは誠に祝すべきことなり。

今や我國は空前の戰爭に勝ちたるの勢ひを以て、科學上又は實益上に於て大に研究を要する事物多きの日に方り、厚友平瀨與一郎君の手によりて介類雜誌の呱々の聲を揚げたるは、邦家が大なる發展を爲す前兆として余の大に慶ぶ所なり。冀くば健全の生育を遂げ、長く科學上幷に實益上、世道人心の向ふべき所を示し、我邦が世界に於ける好位置にあるの責を盡し、以て世を益する倍々多からんことを。之を祝詞とす。

○祝辭

名和昆蟲研究所長　名和靖

斯學に熱心なる平瀨君今回介類雜誌と題する介類專門の月刊雜誌を發行せらる實に近時の一大快事といふべし、抑も動物界中最も種類の多き昆蟲類は陸棲多くして水棲少なきに引かへ介類は水棲多くして陸棲のもの比較的少なきも種類の多き恐らく昆蟲類に亞くものならん、今君が此の材料豐富なる介類世界の眞相を紹介して人世を裨益するの多大なるを信ずると共に日を追ふて健全なる發達を遂げんことを希望するの餘り茲に一言を寄せて祝辭となす。

○祝詞

余は科學的に介類を說明する力なし、敎兄平瀨君の余に

關する博物の著書の如きも其大半は貝類に屬せりと君惟らく本邦の博物思想の尙未だ彼に及ばざること遠きも古來の習俗却て之に似たる所ありしに今や大に否らずと。竟に志を決し獨力以て之が再興を謀らんとし鋭意採集者を四方に派し羽檄を內外に飛し或は懸賞し或は購求し或は有無交換し或は學名を歐米の大家に仰ぎ規畫二十有餘年一日の如く珍となく奇となく內外海陸の種雲の如く蔚れる標品種は樓上の研究室に貯藏せられ其大なるは斗の如く小なるは粟の如く或は手づから玻管に盛り或は自ら紙牌に貼し或は親しく箱に納むる等多く助手を俟たず故に一絲紊れず整然屬類に從ふて架上に騈列せられたり其形の奇なるものは飛鳥の如く又奔馬の如し或は光瑩の如く又玲瓏氷の如きものあり或は色の赤きこと珊瑚の如く靑きは瑯玕の如く或は黃に或は綠に五采燦爛錦繡啻ならず古來之を愛翫して措かざりしも亦宜なり。然れども君が意は固より美の愛にあらずして專ら之が種類習性散布の狀如何を究めんとせらるゝにあり故に一種の標品を貯藏せらるゝや多きものは數百千個に及べり以て豐富なること蠣山啻ならざるを知るに足る古來知られざる新種の發見に係り新たなる科名にヒラセイラ、ヒラセア、ヒラセヤ(フアメテスタ)等あり又新らしき種名にヒラセイ、ヒラセヤナ、ヒラセヤナム等不磨の學名を刻せられしものも亦鮮からず信書の如きも常に机上に堆く月刊の到達殆虛日なく和洋參考書亦具る。今や機漸く熟し茲に該機關雜誌を公にせらると聞き曩に洛北に遊びし歸途君が家を訪ひて親しく見聞せしことを追懷し漫に其一班を序いで以て慶意を表すと云爾多罪々々。

○介類雜誌の發刊を祝す

津田仙

日本の世界に位するや、太平洋岸の一小島にして、其の面積全世界の三百分の一に過ぎず。故に面積の點より

介類の雜誌を編述するの擧ありて余の一言を求めらる余も亦介殼を好むの癖ありて本年は貝の話なる一編を講述したり既に東洋學藝雜誌に載す余の介殼に關する從來の知識と之を利用し又之を應用するの希望は皆擧げたるを以て目下特殊の考案なし唯同君の編述せらるゝ雜誌を見ることを樂むと同時に介殼に關する展覽會の開設あらんことを待つのみ、茲に所感を述べ併て同君の盛擧を祝すと云爾

明治三十九年十二月七日

在伊勢神都農業舘々舍　田中芳男記

○祝辭

厚知　永沼小一郎

嘗て余京師の博覽會に參せし折り、洛北を巡り、金閣寺に登りしが樓上に陳列せる寶物中に貝類の標品數多納めたる箱の痛く古色を帶びたるを見しも惜哉其由緒を繹ねるに遑なかりき。抑も本邦貝類を愛翫すること遠く上古に淵源し平城、平安両朝の間に於て漸く發達し伊勢難波の浦などに美しき貝を拾ひていへづとゝなし或は貝合とてその優り劣りを鬪はしゝことなど歌集、日記、記行、草紙、物語等に散見し、近くは寬文以來是が專門書の公にせられしもの極めて多く今尙幸に世に存するものも亦鮮からず、然るに維新以來百事是革まりかゝる高尙優美なる業も殆其跡を歛むるに至れり。京師の志士平瀨君は固と淡路の閥流にして夙に博物趣味を會せらる、一日君外賓を訪ふ、室内飾るに許多の貝類を以てせり、依て其故を問ふ、曰く、貝類を以て室內を裝飾することは、泰西には珍奇の事にあらずこは唯色彩の美を愛するのみにあらずして淸翫の間に博物思想を涵養し不知不識天工の妙機を會得せしむるにありて其標品專門の商賈も少からず特に之を硏究する學科を Conchology （貝類學）と云ひ其著書極めて多く其冊數博物書全體の半を占め且つ日本に

の如き大部の好著を出すに至りしも、惜しむらくは、以上の諸書皆寫本なるが故に、民間多く得易からずして其影響の及ぶ所一小部分に過ぎざりしことを。爾來介類の研究遲々として進まず、本邦產の珍種、空しく外國人の研鑽に任かせ、吾人却つて教を其足下に乞はざるべからざるに至らんとは。地の利を得ると已に上の如く、先人の蹤を殘せしこと又已に上の如く、而して吾人の爲す所獨り此の如くなるは本邦學界の面目のために忍ぶべきことなるか。今や印刷術の進步と交通機關の整備とは實に吾人をして起たしむべき時となりぬ、試に起つて人の和を呼ばんかな。

準備は已に整へぬ、今や首途に上らんとして、過去の辛酸を顧みれば、假令結果の所期に副はざるものあるにせよ、衷心歡喜の情を禁ずる能はず。或は伴侶多からずして前路容易ならざるものあらん。然れども渾身の力を籠めて、羽翼を高く理想の天に擊たんと欲す。

終に臨み田中芳男氏岩川友太郎氏永沼小一郎氏が不肖の事業に同情を寄せられ、沖莊藏氏大瀧五百太氏大上宇一氏岡本良知氏關原喜代松氏山本二省氏等を初め其他十數氏が採集に盡力せられ、加藤延年氏が研究及び本誌編輯の爲めに盡力せられたるを深謝し、尙は米國ヘンリー、エー、ピルスブリー博士、ウヰリヤム、エッチ、ドール氏ブライアント、チーカー氏ジョージ、エチ、クラップ氏英國アーネスト、アール、サイクス氏ジョージ、ケーグード氏ジー、ビー、ソーエルビー氏佛國フィリップ、ダウチエンベルグ氏等に負ふ所の多大なるを附言せざるを得ず。

○祝　詞

平瀨與一郎君は曾て本邦の蝸牛殼を全國に蒐集せられしこと其後海產の介殼をも集め遂に陸海共に夥多の類聚ありと聞く其研究も亦熟練せらるゝことゝ信ず頃日同君は

て本誌を發行し、汎く天下同志の士に訴へ、敢て介類研究者の媒介たり紐帶たらんとする所以也。幸にして大方の賛同を辱ふし、或は寄贈に依り、或は通信に依り、成るべく多く各地の所產と諸賢の研究とを輯め、多種の標品と共に之に關する万般の智識を綜合するを得ば、庶幾くは綱張り目擧がりて系統的研究の自ら其間に髣髴たるを見るに至らんか。

加之介類は頗る趣味深きものなり、見よ、形態の妙、光澤の麗、若しくは斑文彫刻等の美、之に就けば目を喜ばしめ、之を味へば興盡きざるにあらずや、而かも花鳥の如く栽培飼養の煩、枯凋斃死の憂なく、火酒浸腊葉剝製標本等の如く製造保存の難、變色揮發蟲蝕の恐なく、啻に小兒の玩具、好事者の嗜好品たるのみならず、又實に高尙なる室內裝飾品として適當なるものなり、況んや能く博物上地理上の觀念を與へ、海事思想を皷吹し、又到る所として產せざるなきを以て人々其の好む所に從つて採集を企てなば山の邃、野の濶、海の壯何れも彼等の友となり、從つて品性上健康上にも裨益少からざるべし。然るに現今此趣味を解する人甚だ少なく、折角海水浴若しくは登山の如き好機會を有するに關らず、波打つ際に寄貝を踏み、森幽き邊に蝸牛を看過するなど毫も注意を拂はざるもの多きは何ぞや、是れ畢竟介類に關する智識に乏しく、興味を煥起するに由なければなり。是に於て本誌は之が手引を供し、智識の鍵を以て趣味の寶庫を開き、以て良好なる風尙を利導せんことを期す。而して每號に插入せんとする彩色又は彫刻美なる介類の版畫は此目的に資するのみならず夫れ或は美術家の資料たらんか。

抑も我國の地勢は北寒帶より南熱帶に出入し、江山錯綜四面環らすに海を以てするが故に、海陸產介類の種類殊に豐富を極め、之を研究の方面より見るも將た賞玩の方面より見るも大に有望なりと謂はざるべからず。故に之に關する圖書は古來比較的多く、夫の「貝譜」「介志」等

介類雜誌　第壹號
明治四十年一月二十日發行

○介類雜誌發行の主旨

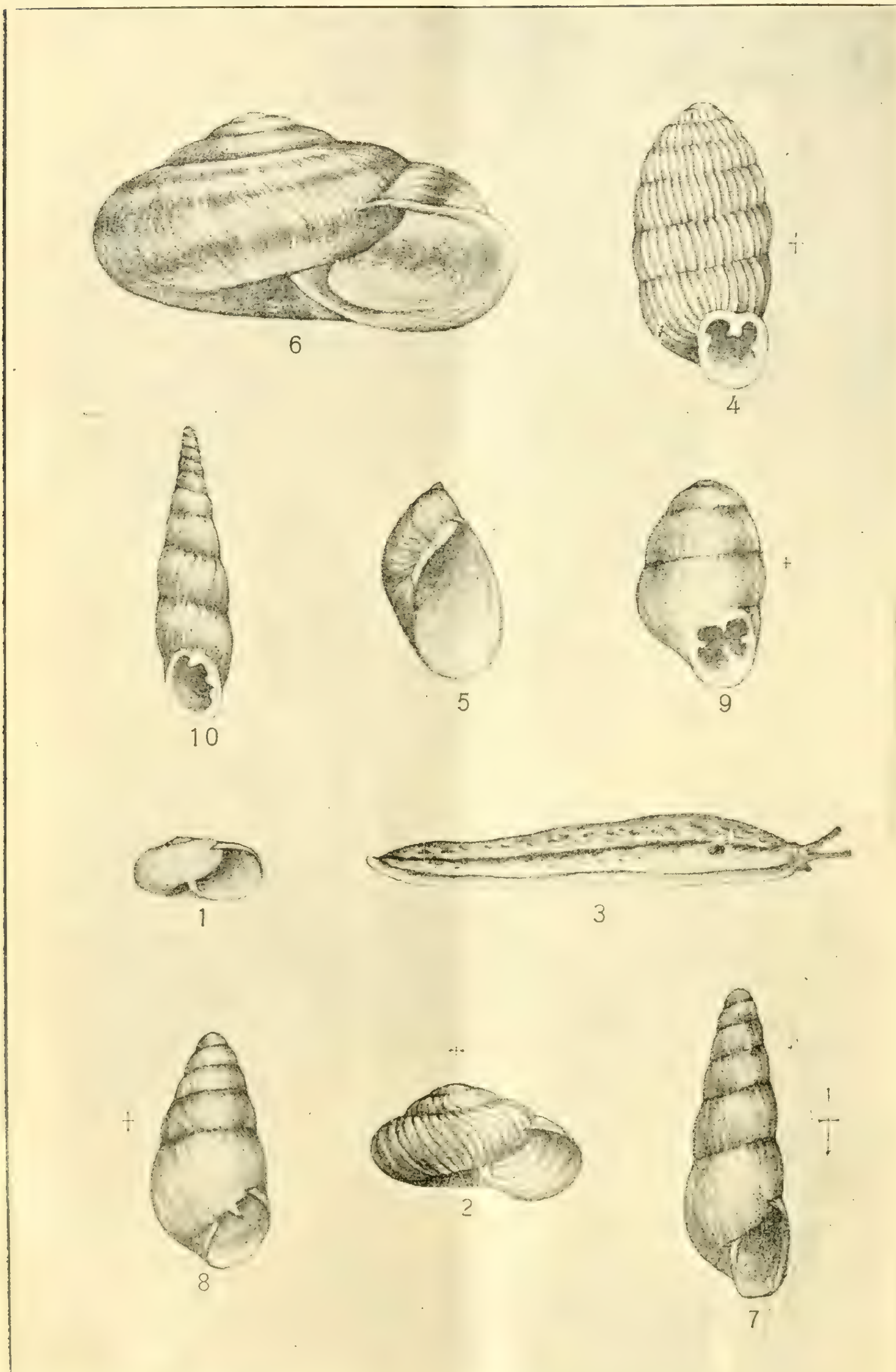
平瀨與一郎

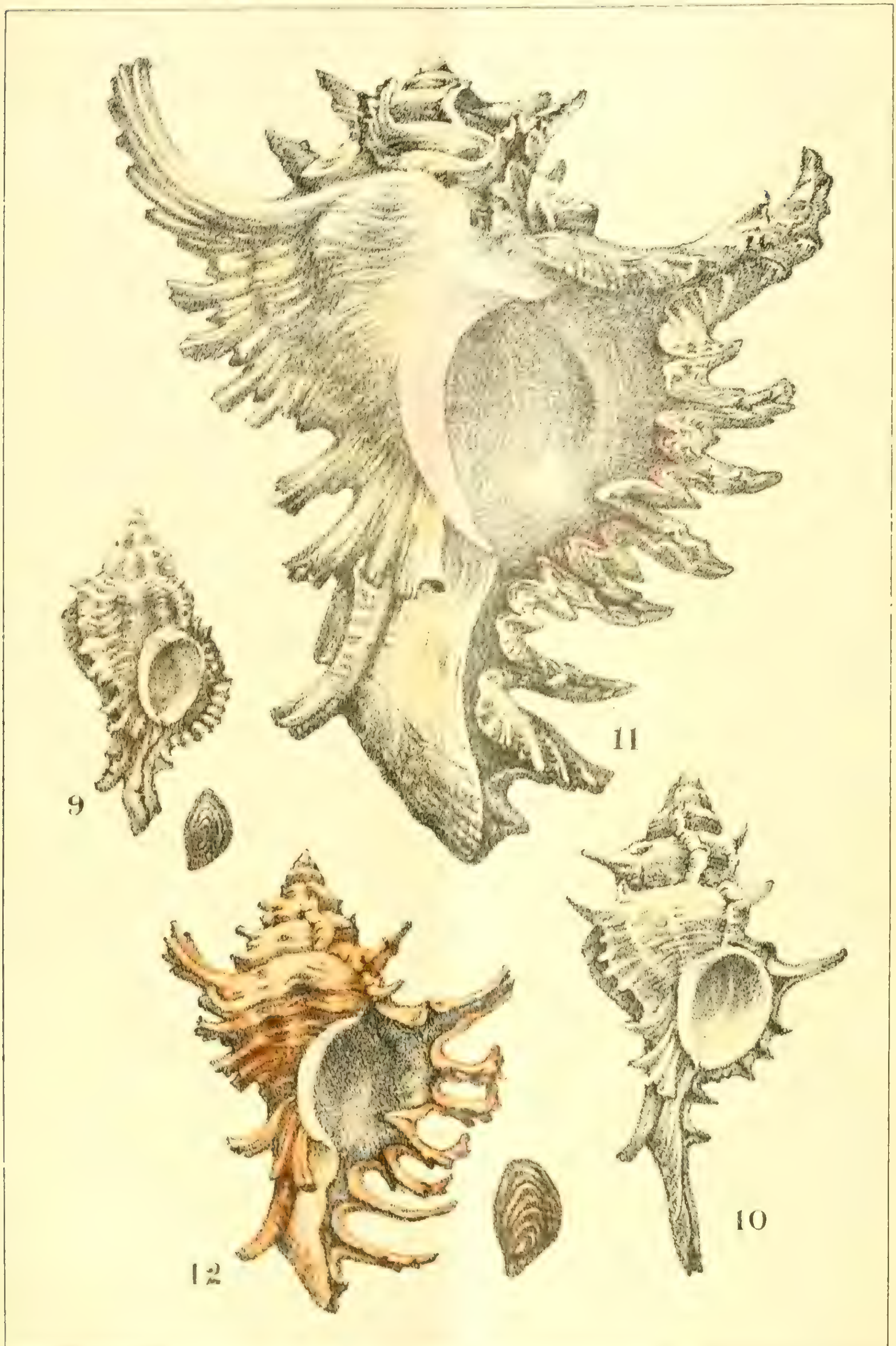
不肖微力を顧みず、茲に介類雜誌を發行せんとするに臨み、聊か卑見を述べて其の主旨を告白せんとす。

抑も介類は動物界の一大部門軟体動物中の大部を占め、海陸到る所に産せざるなし。從つて其形狀、內部の構造、彩色、斑文、彫刻等の變化極めて多く、之が一小部に通曉せんとするすら容易の業にあらず、況んや其全般に亘りて之が品類を窮めんとするが如きに於てをや。

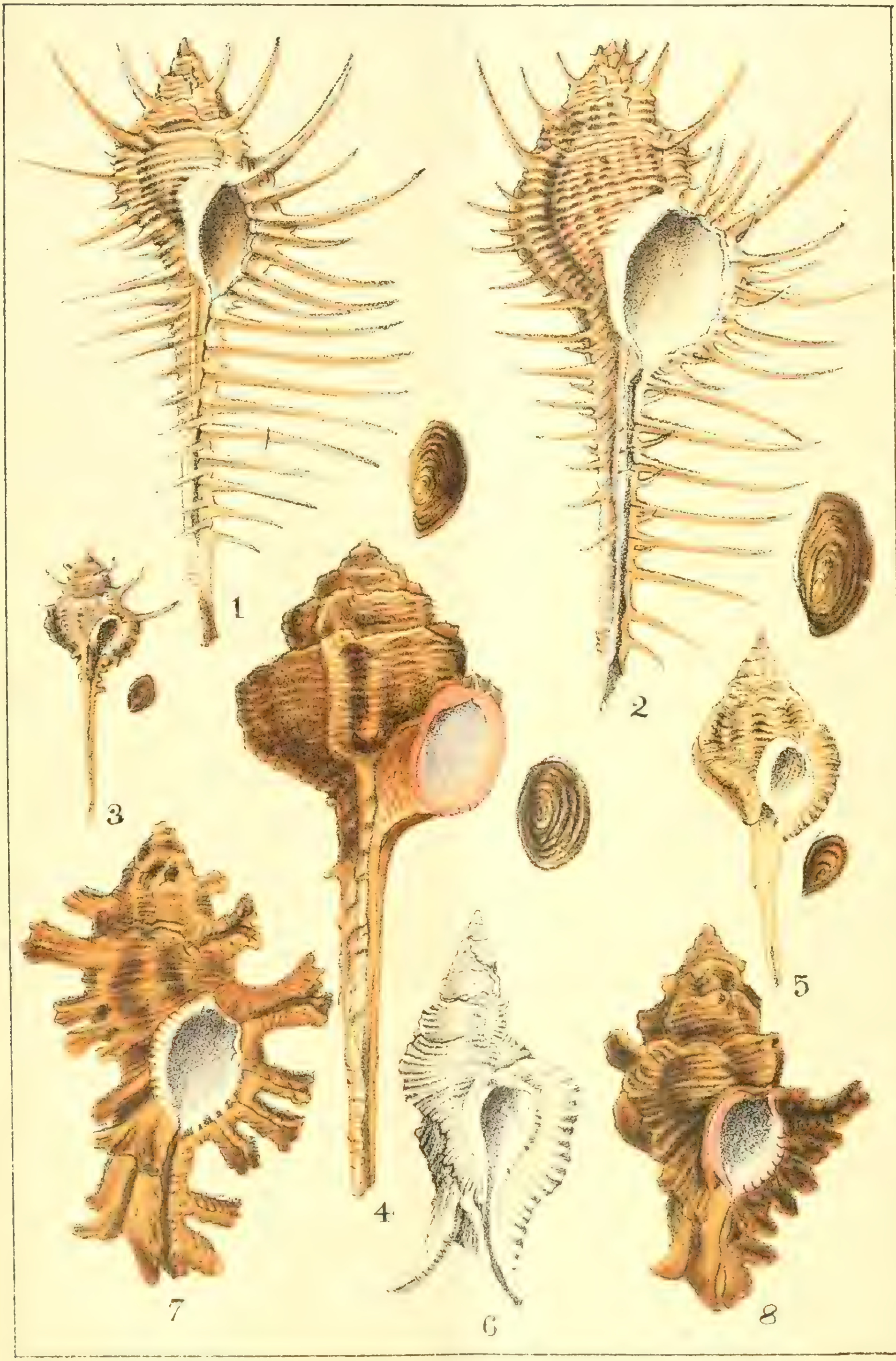
不肖海陸諸介を蒐集するもの多年、北は千島を窮め南は臺灣に及び、全國殆ど採集を經ざるの地なく、藏する所の標品已に數千種に達し、就中不肖の發見にかゝる新種凡そ八百種を數ふるに至れり。其間財を糜し勞を積みしこと實に讀者意料の外にあらん、而かも今に至つて其窮め得たる所を察すれば、嘗つて眞理の蒼溟に秘義を探ぐりし古先輩の歎を反覆せざるを得ざるなり。

且つ不肖の介類を蒐集せしは珍品異類を藏して獨り自ら娛まんとしたるにあらず、私かに本邦産介類の硏究甚だ幼稚なるを憂へ、廣く材料を蒐集して、一は以て自己の硏鑽に資し一は以て內外諸學者に成るべく多種の完備せる標品を供し、聊か分類學上、分布學上に貢献し、本邦産動物學の欠陥を補ひ、且つ敢て水産學化石學及び進化論に寄與する所あらんと欲せしなり。而かも希望徒らに大にして効果の擧らざる、日暮れて道遠しの感に堪へず。想ふに學藝の錦繡は幾多硏究者の努力が經となり緯となりて初めて織り成されたるもの、殊に硏究の初歩にある日本介類學の如きは、同志力を協せ勞を分ち、以て之を一に歸せしむべく各自の蘊蓄を傾倒するにあらざれば、遂に成功の期なからんとす。是れ微力を顧みず身を挺し


6
4
10
5
9
1
3
8
2
7


11
9
10
12

JAPANESE MARINE MOLLUSKS PL. I　日本海産貝類（第一版）



本誌定價		
一部	金貳拾錢	郵稅壹錢
六部	金壹圓貳拾錢	郵稅不要
十二部	金貳圓參拾錢	郵稅不要

本誌廣告料	
五號活字一行廿五字詰	金拾五錢
半ページ	金參圓
一ページ	金五圓

發行所 京都市上京區烏丸通下長者町北龍前町十四番戶 **平瀨介舘** （電話九百七十四番）

發行者　平瀨與一郎
編輯者　中堀末吉
印刷者　川勝靜三郎
印刷所　合資商報會社

大賣捌所 京都市佛光寺通烏丸東入 **東枝律書房**

明治四十年一月十九日第三種郵便物認可（每月一回二十日發行）

明治四十年一月二十日發行

（禁轉載）

介類雜誌

第一卷

第一號

目次

明治四十年二月二十日發行
明治四十年一月十九日第三種郵便物認可（毎月一回二十日發行）

THE

CONCHOLOGICAL MAGAZINE

A MONTHLY

DEVOTED TO THE STUDY OF JAPANESE SHELLS.

PUBLISHED BY Y. HIRASE.

VOL. I. FEBRUARY, 1907. No. 2.

CONTENTS.

Notice: The subscription price for Europe and America is $1. 50 per annum. All letters and communications should be addressed to Y, HIRASE, Shimo chōja-machi, Karasumaru, Kyoto, Japan.

動物學雜誌

（每月一回十五日發行）

第十九卷 第二百十九號

明治四十年一月十五日發行

〔石版圖版二枚附 定價金二十錢〕

目次

論説

雜錄

會報

發賣所

東京神田區表神保町　東京堂

仝日本橋區通二丁目十八　裳華房

仝本郷區元富士町　盛春堂

三版

留岡幸助編 **二宮翁と諸家**

定價金三十五錢（郵稅金四錢）

本書收むる所總て是れ**二宮尊德翁**に關するもの、**批評**あり、**論說**あり、**逸事**あり、**雜感**あり、是れ皆**當代の名士**が**西洋思想を以て二宮翁をこなし上げたるもの、**苟も**國家の進善、社會の救濟**を企圖する宗教家、政治家等の諸君は必らず之れを一讀するの價値あり

◉東京經濟雜誌評曰　二宮尊德翁の思想及行績は哲學者も之を究むるの價値あり、爲政家も之に學ぶの要あり、經濟家も之を行ふの益ありて、身を修め家を齊ひ世に處するものゝ典型となすの價値あるは、今更に辯ずるの要なし、本書は二宮翁の報德制度、人格、遺物より其事業、思想等に就き當代の名家が各方面よりの觀察論評を蒐錄したるものにして、人をして善意善行に進ましむるの文字を以て滿さる、小冊子なれども有益の書といふべし。

發行所　東京巣鴨家庭學校內　**人道社**

博物學雜誌

每月一回發行　一部　郵稅共金拾四錢

第七十八號目次

◎表紙畫　△羊の生態…（寫眞版）

○口繪　△松の解剖…（石版）、△ライオン鼠…（寫眞版）

○卷中寫眞版　△川上氏の通信…寫眞版、△長原氏の年賀狀…寫眞版

○論說　△明治四十年を迎ふ…動物標本社主、△藻の海に於ける發見…理學博士　岡村金太郎、△松…記者、△秋田產蝶類…仁部富之助、△植物學研究の趣味…鳥居傳八

○雜錄　△四十年に因みて…行洞稿、△ヒキ蛙の寒中採集…上野守、遺傳に關する研究…好櫻子、△今蘭山を後訪して聞書…山海子、△竹林中の二現象…白本正光、△千葉縣の植物…蕣張友月、我鄉土の珍草…河野行洞、△梅に就いて…淡堂生、△和歌山の植物方言…佐伯牧

○雜報　▲新刊書▲盆栽の流行▲冶金界の大發明▲動物園の獅子▲アイヌ人▲野村彥太郎氏▲餅と屠蘇▲生物學新年會▲本號の口繪▲飲食界の植物誌▲校外生活▲鑛物界教科書▲全上標本の發賣▲新刊雜誌其他數件

○廣告　數十件

發行所　東京市神田區五軒町一番地　**動物標本社**

百虫詩畫

京都故山本章夫先生畫〇山本復一翁詩

先生ハ故博物家亡羊先生ノ三子幼ヨリ博物學ヲ修メ旁ラ畫ニ巧也動植物ノ寫生數千品ヲ描ク此圖ハ則其一ニシテ畫家ノ好粉本也翁ハ先生ノ姪又同學ヲ修メ且詩ヲ善クス自園所觀ノ蟲ヲ賦ス皆寓意ノ作〇本集二冊奉書紙彩色摺ノ美本也先般宮內省へ進献　兩陛下乙夜ノ覽ニ供シ奉レリ詩冊ハ正價金五拾錢畫冊ハ正價金壹圓五拾錢

發賣所　東京　淺倉屋久兵衞、田中文求堂、磯部太郞兵衞（大坂　松村九兵衛、鹿田靜七、青木恒三郞（京都　熊谷鳩居堂、細川開益堂、山田芸草堂、大黑屋太郞兵衞、山田茂助（名古屋　三輪文治郞、三浦兼助（神戶　熊谷久榮堂（金澤　池善平

行ひ、其發生を見るに精蟲は其初め卵の周圍に集まりて、凡そ二十分を以て受精を終る、其結果透明なりし卵粒は不透明となり、外形多少不整なりし卵は眞圓形となる、其後三四十分間を經て卵の一方より小球の放出せらるゝを見るべし、之を極球と云ふ、此處に注意すべきは我國の牡蠣に限り極球二個ありと云ふ、外國産のものは只一個なりと云へども、未だ充分なる經驗を遂ぐる能はず、其後二三十分を經て卵は二分せられ、次に四分八分十六分して終に極めて微小なる小球の集合せらるゝ如く分裂するを見るべし、此時に至り能く之を見れば細微なる小球は唯卵の上面を蓋ふ部分なるを見るなり、其下面にあるものは稍少しく大なり、之より卵を二層に區別するを得、其上部にあるものを外胚葉といひ、下層を內胚葉と云ふ、此二層の生長の度相均しからざるより下層の內胚葉は卵の內部に押し入れられ、卵も亦之によりて著しく其形狀を變ず、內胚葉の斯の如く押し入れられたるは原腸時代の始めなりかくなるまでには二時間半乃至三時間を要す、尙此時に至れば極球を放出したる部分は、其生長盛んにして纖毛を生じ時計の針の回轉する反對に回轉するなり、卽ち地球の回轉と同一に回轉す、其後卵は又發生して体の極球を放出したる部分の附近に口を生じ、又場所に接して殼を分秘す、尙原腸の諸部分は種々變化を爲し、或は一部より肝臟を生じ又其一部は胃に變ずるなり、其後極球を放出したる部分は特に發達して終に其形を變じて足となる也、此の如き時期に至れば游泳を始む、其後殼も凝固し、眼耳神經等を發生し、遂に一ヶの完全なる胚となるなり、かくなるまでに三日間を要すと云ふ、其時は肉柱二個あるも後一個となる、胚は固形物あれば其殼を以て附着す、受精後凡そ六日乃至九日を要すと云ふ、固形物の表面は必らず淸潔ならざるべからず、其品質は撰ぶ所なし、然れども水の比重の關係あれば高潮と低潮との中間に於ける處に附着するを最も多しとす。

（以下次號）

讀む文にわれも拾はんうつせみの浮世の邪念わすれ貝ねば　小林長陽

海に陸に生をしいける小介をもしらべつくせよこの道のため　山本三省

つれ／＼にあつめし貝をもてかへり京の兒にやる須磨の夏旅　伴葛園

泥ふよく足ふみいれて上鳥羽の田螺をあさる冬の慈姑田　仝人

冬の日を伊勢に旅して時雨煮の蛤さげてかへる京人　仝人

浦安のかひある國に生れ來てかゝる文見ろけふのうれしさ　永沼小一郎

海にくかにあさりつくしてあみいてし君がいさみのかひのふみかな　佐野さく子

貝寄や礒をいろどる貝の數　露石

前號正誤

頁	段	行	誤	正
三	下	十六	塾練	熟練
七	下	四	intented	intended
十	上	十二	Klapp.	Clapp.
十五	下	十三	「未だ本邦産あるを知らず」十一字衍	
十六	上	二	「未だ本邦産なるを知らず」十一字衍	
十八	上		81	18
仝	仝	二	Telnispina	ternispina
廿五	下	第七圖		（トライオンより）の七字を脱す
廿八	下	十一 十二	螺環	螺層
廿九	上	十三	螺環	螺層
廿九	上	十五	肋面	側面
廿九	下	五	初層次層	初層と次層
卅	上	一	「此類の他に類似したる」	「此頁が他の類似の」
卅	上	八	肋頂	肋數
卅八	上	九	螺環	螺層
卅八	上	十二		

するをなし、故に牡蠣の生命は甚だ安全なるものなり、而して牡蠣の幼蟲は潮流にすみて五哩も運ばるゝをありと云ふ

牡蠣床の性質　茲に牡蠣床の性質につきて述べんに、牡蠣を養殖すべき土地の性質は、其牡蠣生長に關係するのみならず、其味にも大いに關係を有するものなり、如何なる土質を最良となすべきかと云ふに、稍々硬き粘土より成り其上に砂貝殼の存する所を良とす、最も不良なる場所は純粋の砂より成る所、岩石の下にある所、泥土の深き場所等なりとす、其理由は、純粋の砂礫及び岩石の處には、牡蠣の食物となる有機物發生する處の要素に乏しく、又泥濘の深き所は屢々泥を被りて窒息することあり、故に牡蠣を養殖せんには此の如き土地を避けざるべからず、尤も此土地を改良すべき方法なきにあらざるも、其費用多きため却つて經濟をならず、又前に述べたる良地と雖も、風當りの強くして濤を立つることを能はざる場合は又他の方法を用ゐざるべからず。

採苗法即ち發生　牡蠣の生殖器は体の前方にありて消化器の上を蓋ふなり、冬期は甚だ著しからざれども、生殖物熟成するに從ひ漸々肥大し、夏季に至れば体内は唯生殖物のみを以て滿さるゝが如し、其生殖物成熟するときは、生殖管より卵或は精蟲を出すものなり、生殖器の充分熟したるときは、雌雄共に乳白色を呈し、雄にありては其色漸く濃けれども、容易に外觀により區別することを能はず、然れども若し生殖物の一部を取り、硝子板等に附着せしめ之を透かし見るときは、雄にありては全く不透明なる液体なれども、雌にありては其内に微小なる顆粒体あるを發見すべし是即ち卵なり、倘顯微鏡にて之を檢すれば、成熟したる卵は圓形にして、其内に核あるを見るべし、精蟲は主に二部より成り甚だ小にして西洋梨の形をなせり、頭と稱する部分を極めて微細なる絲狀を爲す尾部より成るなり、即ち其尾部を以て水中を游泳するものなり、生殖物の生熟する時季は大概れ五月乃至九月なれども、其遲速は土地の狀況及び氣象等によりて異なるなり、例へば南方は早く北方は遲く且同じ地方に至りても、淺き所は深き所のものより早く熟し氣候溫暖なれば又早熟す、故に此事實は單に溫度に關係するものなり、春暖溫度の乾燥したるときなれば、三四月の頃已に生殖器の成熟するを得ることあり、雖産卵の期節のみならず、卵の多少も亦氣候に關係を有するなり、適當なる溫度にては卵の成熟する數量多し、最も忌むべきは氣象の急變とす、特に溫暖より急に寒氣を催すときは全く産卵を停止することあり、是を以て生殖期中に牡蠣を一所より他所に運搬することを禁ぜざるべからず、廣島に於ては梅雨期より夏土用前後が最も産卵することを多しと云ふ。

牡蠣の生殖力の時期　牡蠣が生殖力を有するに至るの時期は、場所によりて多少の差異あるなり、通常は二年なれども早き處は一年目より已に有す、卵數は牡蠣の大さによりて異なれども、通常大なるものは四千萬個を産し、稍々大なるものは六千萬個を産むなり、卵が体中より産卵せらるれば他の牡蠣より來る精蟲を合し、後漸々變化して一個の牡蠣となるなり、此精蟲と卵を合一するを受精と云ふ、此受精をなすに最も適したる溫度は華氏六十四度乃至八十度位にて、特に適當なるは七十度なりとす、斯の如き溫度なれば受精してより胚となりて游泳するに至るまで、僅かに三時間乃至十時間を要するのみ、溫度六十四度以下に至れば發生せざるもの多く、八十度以上に至れば破裂して胚となることを少し。

牡蠣の卵と精蟲　牡蠣の卵を取り精蟲を以て人工受精を行ふ事を述べんに、此方法は北米合衆國の發明學者Mr. John. A. Ryder氏が一千八百八十三年に發見したる所のものなり、牡蠣の人工受精法は比重一、[illegible]三位の海水中に入れて

●烏貝の大漁

津市沿岸及一志郡河藝一帶沿岸は去五日以來烏貝漁業を開始し隔日に捕獲し居れるが漁船總數は八百艘にして一艘の漁獲高平均約五千個を得價額一個二厘五毛なれば一日の漁獲額は十万圓に達するを云ふ（勢州毎日新聞）

●牡蠣の窒扶斯菌撲殺力

牡蠣は滋養分に富み消化を助くる事至大なるは人の知る所なるも歐洲の一部にては牡蠣は水中の窒扶斯菌を吸收するが故に人體に危險なりと傳へられし所あるも今回倫敦中央實驗所のクラーク教授は永らく研究の結果牡蠣は他の温血動物とは全く反對に腸窒扶斯菌撲殺力及び防腐力を有し居れりてふ驚くべき發見を公けにしたり教授は將來此實驗にして寸毫も誤りなきを證せば腸窒扶斯治療劑及び豫防劑として最良なるは則ち牡蠣なりと斷言するを得べしと云へり兎に角牡蠣は安心して且つ信用して食うて可なり（馬關毎日新聞）

●きぬ貝の養殖

京都郡仲津村長井浦漁業組合にては同地先海面二萬町餘坪を畫しきぬ貝を蒔付けこれが保護養殖を爲す筈にて豫て區畫漁業出願中なりしが今回其筋の許可ありたるに付本年春季より蒔付に從事する由（福岡日日新聞）

●貝殼精製法研究

三津濱町尋常小學校に於ては日曜研究會を組織し教育上の疑問に係る件を研究しつゝありしが去る十三日は岡山縣人三宅賢三氏を聘し貝殼精製法の研究をなし全時に全地高等小學校の教員も臨席して其傳習を受けたるが全地は海濱にして多少の原料あるより手工科として生徒にも之れを教授せん筈なりといふ（愛媛新報）

●廣島の牡蠣（承前）

牡蠣と海水の深淺等　海水の深きも牡蠣の養殖に關係するなり、今日我國にて行ふ方法にては概ね沿岸にして、低潮の時は全く露出する所のみに限れり、然れども天然に五六仞までの處にも存在す海水中に夥多の淤泥が存在し、之が爲に恰も濁水の如き觀を呈する事あり、此淤泥の浮游するは養蠣上最も忌むべきことなり、何となれば篊其他の附着面に淤泥附着するときは牡蠣の子供の附着を妨げ、又牡蠣の子供（胚）の既に附着せるは淤泥の之を蓋ふときは之が爲に窒息して死するなり、生長したる牡蠣にありても此淤泥が呼吸の際水流と共に其体内を循環するときは、其体内を汚し大いに風味を減ずるものなり、此淤泥は地盤の軟かにして屢々風浪の多き所に多し、我廣島の如く河川の多き所は牡蠣の子供の出づる頃降雨多く出水すれば其發育を妨げ其年の不作を來すこと屢々なり、淡水には生長することを得るも其味惡しきは前に述べたるが如し、因みに胚と云ふ言葉は學術的の言葉なるが故に此處にては子供とか子貝とか云ふ方分り易きなり。

牡蠣と潮流の關係　牡蠣の生育物は主に海中に於て受精するものなりと、精蟲は活動するの機能あれども、遠距離に行くことは能はざるなり、故に牡蠣の卵を受精せしめ又受精したる卵を四方に運搬せしむるものは水流なり、水流に依りて四方に運搬するを廣ければ、其附着する割合大にして發生を遂ぐる事數多し多少流れには水力強くとも牡蠣の子供の附着器に附着するを妨ぐるをなし、又此力あれば附着器の表面に淤泥の附着することをも減じ、又流るゝ水に附着器を置くか、靜水に附着器を置くよりも同時間に多量に接觸するものなり、故に從つて牡蠣の小供の多量を附着することを得るものなり、されば牡蠣の子供を有する水は、淤泥の附着を妨ぐることを急流なるを良しとす、而して尚附着器を水中に設置するを良しとす、又靜水は日光の爲に熱せられて其中にある有機物は死して腐敗し窒素は生物のために利用せられて漸く缺乏すれども、水流若しあれば窒素の供給絶えず充分にして、水温も四方に分配せられ有機物も死亡

雜報

介類展覽會の計畫

田中芳男先生の祝詞中にも介類展覽會開設を希望せらるゝ旨記載せられて居るが、これに付きては當部に於ても兼ねて其必要を認めて居つたのである、實際介類の研究や趣味が記載のみによりてなされ、又は惹き起されるのは困難であり、是非實物の對照に待たねばならぬことは申まで、ない。誰れに見られやうとてか、深さも知れぬ海の底や、人跡至らぬ山の上や、汚穢なる頽木腐草の中などに潜み居る介類の麗質は、親ずしては想像にも及ばぬことが多いのである。で、當部は介類の標本は勿論、介類を以て製造せる器具を初め、介類の應用せられたる一切の物、並びに介類に關する圖書等、可及的多くの種類を蒐め、近き將來に於て、京都に展覽會を開設せん計畫である。各種の展覽會が流行して夫れ〳〵効果を收めつゝある今日、此種の計畫も亦江湖の賛同を受くべきは、吾人の疑はざる所である。方法の如きは何れ他日を以て發表することにしやう。

牡蠣の繁殖場　（全國無比なりと稱す）

安倍郡不二見村村松及宮加三漁業組合の事業たる牡蠣の蕃殖事業は地味と潮流の關係にや、種特別の繁殖力あり其成績全國に比なきものにて舞阪邊のものよりも三倍程大きくなる由にて立てゝ後約一ヶ年しかならぬ粗朶に一本に付き十四五貫目より二十四五貫目を附着し之れを抜實にすれば三升乃至五升あり其大さも四寸位までにはなる、特に本年は數十年來の豐年なれば約四千圓位の收入あるべしと、從來は二三石宛抜實にして當市附近へ販賣したるが將來は組合を組織し抜實にしたるものを直ちに淡水に入るゝ事を廢し鹽水にしたるまゝ運搬することゝ爲し其自然の香味を保ち腐敗を豫防せんとの計畫中なりと、尚折戸灣の牡蠣の事業は將來無限の利源にて一本一錢に買入るゝ海苔の古粗朶も之を此所に利用すれば何の手數も掛けずたゞ海水のまゝにして六十錢の收益あるわけなりといふ　（静岡民友新聞）

人工眞珠貝

三重縣志摩國神明村多德島の沿海にある眞珠貝養殖場は我國水産界に異彩を放てる一名物なるが其孵化方法の如きは頗る興味あるものにて凡て眞珠貝は孵化後四年間は發育時期に係り五年目に至れば七八月の候潛水夫をして貝を採取せしめ其貝中に眞珠となるべき物質を插入し更に之れを海中に放ち四ヶ年を經過して始めて眞珠を採取するに至ると云ふ目下右養殖場に放置しある眞珠貝は無慮三百萬個に達し其現今外國に輸出するもの十萬圓除に上ると云ふ而して眞珠貝は獨り眞珠の有利なるのみならず其貝殼は鈕として需用廣く其肉は之を乾燥して支那に輸出するに於ては支那人は帆立貝と同一の嗜好を以て迎へ、其眞珠の品質に至りても外見毫も天然眞珠と異なる處なければ追々には一大水産品たるべしと云ふ　（日本）

烏貝の漁獲に就て

愛知縣重要海産物の一なる烏貝は伊[illegible]に横須賀大野附近三河灣にては篠島以東一帶に繁殖しつゝあり其筋にても同貝族保護上毎年四月廿日より十二月十五日まで漁獲を禁じ且つ幼貝滅亡を慮りて漁具万牙の爬間を一寸二分以上に限定し居れり而して今や本年も既に漁期に入りたるが近年稀れなる豐年にして今期の漁獲高は二三万圓位あるならんと豫想せらるゝより豫て不漁を喞ち居る縣下の漁業者等は恰も餓虎に肉片のそれの如く或は漁獲に或は漁具の新調に汲汲たる有樣なれば其筋にても[illegible]ら嚴に規則の勵行を爲し反則と見ば容赦なく漁具を没收する由依て一般漁業者は宜しく注意せざるべからずとの事なり　（新愛知）

喜界島(長聖道氏報)

そんにやく、でらんと、うゑんたのかねじゆ、みゝそはなを、きらすぞでらんか、

大隅大島(仝氏報

一んだり〳〵、はやくつのをださんと、よびとにかたるぞ、

屋久島(仝氏報)

つまめ〳〵、つのれてをどれ、をどらんとからたわつてやる、

甲斐(鹽澤薫太郎氏報

めゝめんじよめ　めんじよ、角(つの)だせ、めゝんじよ、つのをださねばころすぞ、

下總(小關泰一郎氏報)

めゝたぼ、こたぼ、角もつてでろ、棒もつてでろ、おのが家がやけるぞ、

水戸

まい〳〵つぼろまい〳〵つぼろ、うらの垣の下にけんかゞあるから、つのだしてみせろ、やりだしてみせろ、

淡路福良(森崎周吉氏報)

でん〳〵でむし、でにや、かま、うちわるぞ、

伊豆下田(片山賴太郎氏報)

まい〳〵つむり、つのだせやりだせ

讃岐白方(山地一萬里氏報)

でーん〳〵でんむしこ、はーよでて、みーづ汲め、われの家もやーけるぞ、ひ、その家もや、けるぞ、

東京、小國氏九年九號より

まい〳〵つふろ、「こっつぶろー、ゆーやに喧嘩があるからつーのーだーせ、やぁりだせ、

能登三崎(瀬戸與三郎氏報)

かたつぶりかたつぶり、角だせ〳〵、角をだゝまいならば、われやうちわふぞふ、

羽前西田川郡(大瀧五百太氏報)

かたつむり、角だせ、角だしたら錢(ぜに)百くれろや、男だら角三本くれろや、女だら針三本くれろや、

全國湯の濱溫泉場邊(仝氏報)

なりまい、角だせ、ださぬと家打わるぞ、

伯耆印賀村(山脇德藏氏報)

みゝみ角だせ、そゝそへて、まゝゝわしよ、

羽後淺内村(原田恒八氏報)

かたつぶりかたつぶり、錢百けつか、角だして見せれ〳〵、

「けつか」といふは物を與ふる意味なりと云

長門萩(村田彥熊氏報)

まい〳〵角を出せ、刀を、本買ふてやろ、それがいやなら、雨ふらしてやろ、か、

土佐後川村(岡澤使吾郎氏報

かた〳〵角だせ、河原のばんば(婆)、豆煎て喰はす、

丹後宮津

まい〳〵角だせよ、煮ても燒ても喰はれんぞ、

出雲松江(渡部尙一郎氏報)

だい〳〵虫だい〳〵虫、雨も風もふかぬけん、角ちとだせよ、

阿波立江村(伊勢小周次氏報)

でん〳〵でむし、わが家が燒けよるぞ、早ふ起きて水かぶせ、

„ diplomphalus, Pils.
„ entheca, Pils.
„ goniobasis, Pils.
„ hypolia, Pils.
„ insignis, Pils. & Hir.
„ major, Pils.
„ nesiotica, Plis.
„ planulata, Pils. & Hir.
„ profundispira, Pils.
„ sinuosa, Pils.
Hirasea (Fametesta) mirabilis, Pils.
„ „ „ var. paterna, Pils.
Hirasiella clara, Pils.
Mandarina hirasei, Pils.
Microcystina hiraseana, Pils.
Moellendorffia hirasei, Pils.
Plectopylis hirasei, Pils.
Sitala hirasei, Pils.
Succinea hirasei, Pils.
Vertigo hirasei, Pils.

○蝸牛の童謠（一）

各地より寄贈せられし蝸牛童謠一束、讀み來りて誰れか一笑禁じ得やう、雨後の垣根などに偶々角を出して居る蝸牛を取り上げては、其の殼に潛み去るを殘念がりて、でん／＼でむしと叫ぶ少年少女のあどけなさが、眼前に浮ぶではないか、のみならず地方の人情風俗を偲ぶの料になるであらう、でん／＼の方言、意味の解し難きもの多きも、また一興である

東　京（田中芳男氏報）

まい／＼つぶろ、湯屋に喧嘩があるから、角だせ首だせ、挾箱だせ、

加　賀

つのだし婆々、つのをださねば、親の刀で、ぶつ／＼切るぞ、

越　後

だいろう／＼、つのだせだいろう、角をださねば、大宮樣へ申しあげるよ、

丹　後

かたつぶり、角をだせ、角をださねば、奥の山へ打ちあげて、[illegible]さらせう、

會津及南部

でん／＼蟲、でん／＼蟲、神子（みこ）どんのへそが出て、之れもだいしこ／＼やー、

圓以上）を初めとし和洋の藏書豐かなるは深く吾人の感じたる所なりき、

這回發刊の雜誌は石版圖或は寫眞版入の者なる由なれば勿論貝類の圖說も出づべけれど日本產三千餘種の貝類は容易に圖說し難かるべく或は單に解說のみに止むること必要なるべし或は其檢索表或は目錄に廣く產地を記入する等或は一國或は一郡或は一村或は一嶋に產する水陸貝類の目錄とも記載せられたし或は介志目八譜五百貝其他未刊の貝類古書の說明の抄錄幷に其學名考等貝類に關することは廣く記載せられん事こそ望ましけれ枯木も山の賑ひと云はずや又筆末ながら平瀬氏の姓を採て種名となせし水陸貝を一寸余の知る所のみを記せば左の如し

海產介類の部

Buccinum hirasei, Pils.
Cantharidus hirasei, Pils.
Mitra hirasei, Pils.
Lima hians Gmel. var. hirasei, Pils.
Onithochiton hirasei, Pils.
Pecten hirasei, Bavay.
Pleurotomaria hirasei, Pils.
Tellina hirasei, Pils.
Trochus hirasei, Pils.
Venus hirasei, Pils.

陸產介類の部

Alycaeus hirasei, Pils.
Ena hirasei, Pils.
„ hiraseanus, Pils.
Chloritis hirasei, Pils.
Clausilia hiraseana, Pils.
„ hirasei, Pils.
Cyclotus hirasei, Pils.
Cyclophorus hirasei, Pils.
Helicina hirasei, Pils.
Helicarion hiraseanus, Pils
Hirasea acuta, Pils.
Hirasea acutissima, Pils.
„ biconcava, Pils.
„ chichijimana, Pils.

第三小中大の學堂は清國開發の機運に乘じ、各省各地到る所雨後の筍の如く簇生しつゝあり、科學の知識を教授するには必ずや種々の標本を要すべく、土地の廣大なる丈けそれ丈け其需用も多かるべく、從て介類標本も動物學研究の材料として多少の需用を見るべし。

介類雜誌發刊に就て

播磨　大上宇一

貝類蒐集家として有名なる平瀨氏此度貝類雜誌發刊の由通信あり依て茲に予の平素の所感の一部を記し其埋草の一にも相成らばやと廻らぬ筆を茲に取る

我等が數十種の播磨産陸貝を採集し是れが名稱を知るに至りしは氏の助力に依るものなるか氏の斯業に熱心なると其結果の著しきとは實に驚くべきものあり予は嘗つて博物學雜誌に於て在野二大博物家として平瀨氏と名和氏の事業と結果の廣大なるを論せし事あり又動物學雜誌上に平瀨氏貝類目錄を評して其事業を賞賛せし事あり日本五千萬人中其姓を取て以て貝類の屬名とせられし者幾人かある吾人は小笠原産の陸貝に於てピルスブリー氏が平瀨氏の姓を取て Hirasea 并にヒラセイラと名けし者あるの外を知らず以て日本にては氏の外貝類蒐集に熱心なる人少なきを知ると同時に氏の名譽武勳者の金鵄勳章に比すべきを知らん而かも此の如き名譽が未だ廣く世に知られざるは何ぞ名和氏の事業は直接に生業と相關し或は講習會を開き或は全國の虫害年々一億萬圓に上ぼると稱せらるゝも氏の事業は文明的世界的にして專ら理學的なるに依る陸貝の蒐集せられたる者日本産のみにても七百餘種其内五百餘種計りは新種にして是れ即ち氏の名譽あるものなり又海貝を蒐集すること千を以て數へられしも海水は全世界に通じたれば陸貝の如く多くの新種はなかりし而かも數拾種の新種ありしは疑べからざる所なり又參考書としてはトライオン氏貝譜（コンコロヂー）（代價千

生ずることなしとも限らざれど、未だ其機會に接せざるなり。

唯實用的需用として廣く賣買せらるゝは古くより雲母殼(眞珠)あり、而して雲母殼は南清廣東地方に於ける內地產額の外年々外國より輸入せらるゝものの幾何に達すべきか、統計の徵すべきものなければ之れを知るに由なしと雖も、蓋し其額數萬圓を下らざるべきか。其用途は之を以て種々の玩器象嵌細工の如き雲母器を製するの外、主として雲母粉(イエンム、フエン)を製造するにありとす。

雲母粉とは、雲母殼を粉粹したるものにして、小麥粉に似て少しく青色を帶びたる光澤を有し、主として壁紙に粘付するに用ゆ。清國に於ける模樣付白色壁紙は、各地各屋(特に北清滿洲地方に在りては土藏家屋の內張りとして)に之を要せざるはなく、從て其模樣に粘付する雲母粉の需用多きは多言を要せざるなり。此他雲母粉は、又藥用として少許の需用ありと云ふ。

次に清國に於て將來起るべき介殼の需用としては、第一介類ボタン婦人耳輪　第二賣藥人　第三學堂用標本なりとす。

第一支那人の衣服には必ず一枚に付數個の結紐ボタン又は陶器ボタン、ゴムボタン、金屬製ボタン、象嵌細工ボタン等を要す。而して支那人は此ボタンには種々の模樣彫刻を施し、一は實用的、一は裝飾用として比較的多額の金錢を投ずるを辭せず、若し日本に於て介類ボタンを製し、種々の彫刻模樣色彩等を施し、よく支那人の趣味に投ずることを圖れば、將來莫大の需用を惹起することなしとせざるなり。

第二、賣藥人として介殼の需用は、目下僅少なりと雖も、洋藥店の增加と醫術の進步につれ、清國人が一般に洋醫を信用するに至りつゝあるを見れば、將來此方面に於ても多少の需用を呈することあるべし。

雜錄

北清地方の介類及其需用

在清國大沽税關　高柳生

北清地方は、氣候、寒威甚しく、一年中三ヶ月間は結氷を見る位なれば、渤海灣は清國他地方の海に比し、魚類の繁殖するもの少く、從て海產介類の種類も極めて乏し、又直隷平野は今より三千年前には渤海灣の一部なりしものにして、云ふ迄もなく地質沖積層に屬し、海岸數里の陸地は今尙鹽分を含むこと夥しく、各種植物の發生に適當せず。特に氣候非常に乾燥にして一年中八九月の交を除けば降雨を見ること稀なるを以て、陸產介類の繁殖せざるは免れざる所なり。

海產介類の種類は、單殼のものと双殼のものとの二種あり、單殼のものはゼニ介（支那語ロース）及サヽエ（ターコー）あり、共に近海岸及び白河口に產し往々土人の之を食するを認む。ゼニ介の湯煮たるは十個壹厘位にて小供等の之を買ひて間食し又は遊戯するものあり。

双殼類の普通なるものはアゲマキ（支那語シエンチヤン）白カイ（ハンヅ）赤ガイ（マーハンヅ）等にして、同じく近海及び白河口に產し、土人は好で之を賞味す。湯煮て食するあり、料理に用ゐるあり、又其肉を乾燥して近くは北京天津保定府遠くは南清地方へ輸出するもの年々數千圓を下らす。芝罘山海關營口地方等に至れば、蛤の產出夥しく、其介殼は膏藥入として用ゐらる。

支那人間に於ける介類の需用は目下唯肉を食するにありて、未だ一般に介殼を要するに至らざるなり。勿論數寄を好む者はサヽエ、ホラ介等を以つ卓上の装飾となすものなきにあらざれど、風雅よりも寧ろシツコキ裝飾を愛する支那人が、介類を蒐集する如き趣味なきを怪むに足らず。尤も日本に於けるが如く、美麗にして風雅なるものを一見したらんには、或は漸次之を愛好するの風を

上隅に一溝をなせり」

エンネア属 Ennea.（第二十七圖）

スクシテイデイー科

日本には只一属を産す」

スクシネア属 Succinea.（第二十八圖）

日本陸産貝類第一版及第二版種名

第一版、1. Macrochlamys perfragilis, Pils.
2. Punctum rota, Pils. & Hir.
3. Phylomicus Sp.
4. Ennea iwakawa, Pils.
5. Succinea lauta, Gld.
6. Eulota (Euhadra) senckenbergiana, Kob.
7. Opeas kyotoensis, Pils.
8. Tornatellina biplicata, Pils.
9. Vertigo hirasei. Pils.
10. Clausilia mertensi, Herk.

第二版、11. Hirasea profundispira, Pils.
12. Hirasea (Fametesta) mirabilis, Pils.
13. Hirasiella clara, Pils.
14. Pristiloma japonica, Pils. & Hir.
15. Microcystina hiraseana, Pils.
16. Vitrina exilis, Morelet.
17. Macrochlamys tanegashimae, Pils.
18 Zonitoides minusculus, Binn.
19. Vitrea radiatula, Alder.
var. radiata, Pils. & Hir.
20. Otesia japonica mlldff.
21. Trochomorpha horiomphala, Pfr.
22. Kaliella harimensis, Pils.
23. Sitala nanodes, Gude.
24. Punctum amblygona Reinh.
var. pretiosa, Gude.
25. Sphyradium edentulum, Drap.
26. Pyramidula pauper, Gld.
27. Ennea swinhoei, H. Ad.
28. Succinea ogasawarae, Pils.

ツロコモルファ屬 Trochomorpha.（第廿一圖）

（丙）殼は微小にして圓錐形をなし、概して臍孔を有す」

（一）殼は平滑なるか或は縱脈を有す」

カリエラ屬 Kaliella.（第二十二圖）

（二）殼は上部に螺脈を有す」

シタラ屬 Sitala.（第二十三圖）

以上諸屬の差異は多く其肉体の解剖に存するが故に、殼のみにては往々其所屬を定め難きことあり、例へばミクロシスチナと小形のマクロクラミスとの差、或はミクロシスチナとカリエラの區別等の如し」

エンドドナディー科中の諸屬識別表

（天）殼は極めて小さく、扁平にして臍孔を有し、殼質脆く、顎は數片より成る」（トライオン氏介類學第九卷ヲ見ヨ）

プンクツム屬 Punctum.（第廿四圖）

（地）殼は極めて小さく、圓柱狀にしてプヒラ屬或はベルチゴ屬に似るも、殼質薄くして、鋭き唇を有し、顎は數板より成る」

スフイラディウム屬 Sphyradium.（第二十五圖）

（人）殼は前屬よりも大きく、且つ堅く、臍孔開き、肋を有し、顎は一片より成る」（トライオン氏介類學第九卷ヲ見ヨ）

ピラミヅラ屬 Pyramidula,（第二十六圖）

蛞蝓科

なめくじ類にして、殼を有せず、外套は全背を被ふ」

ナメクジ屬 Philomycus.（第一版第三圖）

スツレプタキシディー科

日本產は只一屬あるのみ」

殼は臍孔を有し、圓柱形或は圓柱樣圓錐形にして兩端鈍く、肋或は脈を有し、殼口短く、反曲せる唇は退縮し

(乙)殼は平坦なり」

フアメテスタ屬 Fametesta.(第十二圖)

(丙)殼は圓錐形にして光澤あり」

ヒラシイラ屬 Hirasiella.(第十三圖)

(丁)殼形低平、上下両面共に平滑にして光澤あり」

プリスチロマ屬 Pristiloma.(第十四圖)

(地)唇薄く、殼軸は内部に厚くなりて、殼は光澤を有し、低平にして、圓きか或は少しく角立てる周緣を有す」

ミクロシスチナ屬 Microcystina.(第十五圖)

(人)唇及殼軸薄く、殼軸の緣は反曲す」

(甲)殼は凹み、周緣は圓し、光澤あり」

(一)殼は薄くして脆く、且つ透明なり、臍孔なく、螺層は二層半或は三層ありて、殼口大なり」

ヴイツリナ屬 Vitrina.(第十六圖)

(二)殼は臍孔を有し、其臍孔は往々甚だ狹きことあり螺層多く、殼口は新月形をなす」

マクロクラミス屬 Macrochlamys.(第十七圖)

(三)殼は開きたる臍孔を有す」

(イ)動物は一ヶの刺針(dart 譯者曰刺針は直、曲、或は捩れたる炭酸石灰の洞管にして、其先は針の如く尖り、陰門の外孔近傍に附着せる刺針嚢中にありて、交接の際に使用せらると云ふ)を有す」

ゾニトイデス屬 Zonitoides.(第十八圖)

(ロ)動物は刺針を有せず」

ヒアリニア屬 Hyalinia.(第十九圖)

(乙)殼は低平にして、周緣に龍骨を有す」

(一)臍孔甚狹く、殼質薄し」

オテシア屬 Ctesia.(第廿圖)

(二)臍孔は開けり」

は其諸主歯の間に多数の微細なる歯を具へ、骨貝屬の歯否に見るが如き中歯表面の鋸歯に代れり、卵嚢は楕圓形をなし、頂の方廣く肩角あり、側扁にして兩側に龍骨を有し、柄は短く、附着点極めて小さく、口は頂の中央にあり」

本屬はツノオリイレ屬と其屬を異にし、ヤウラクガヒ亞屬と異なる所は其殼面平滑にして、判然たる縱脹脉を欠ぎ、水管溝の開けるにあり、コベルト氏は本屬を以てツノオリイレ屬の亞屬とせり」

インノタビリス U. innotabilis, E. A. Smith.



第四十圖 インノタビリス（トライオンより）

産地、日本、

長、二十ミリメートル、

淡褐色の地に二條の阻碍せられたる濃色帯を有し、口内は白色にして、外唇に六歯を有す」

ユープリユラ屬 Eupleura, H. and A. Ad.

H. and A. Adams.氏はマツカハガヒ（E. pulchra, Gray.）を此屬中に編入せるも、トライオン氏は之を疑ひ、之をナルトボラ屬（Ranella）中に編入せり」

編者曰、此備考の項は啻に圖説に掲げたる種屬に關する諸般の論説事實を記すのみならず、日本産として知られ居るも余の標品を有せざるもの、及び、標品を有するも種名の信偽疑はしきもの等は總て此欄内に掲載し以て、同好の參考に便す、又朝鮮産、支那産等も時に掲載することあるべし」

○日本陸産貝類ノ分類綱要（第二）

（陸産、第二版付）

ゾニテデイー科中の屬諸識別表

（天）唇は内部に厚くなり、殼は臍孔狹く、或は之を欠く—

（甲）稍堅牢なる殼の上面は汚色、不透明にして彫刻を有し、螺塔は凸きか、平坦なるか、或は低平なり、—

ヒラセア屬 Hirasea（第十一圖）

産地、日本、三十五尋、

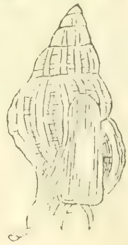
長、記載なし、

形狀、彫刻美麗にして堅固なる卵狀紡錘形の小貝にして、結節狀其小線と薄縱襞と相交叉せり、螺層は五層ありて、其中央は稍や角狀を呈し、螺塔は鋭き圓錐形をなせり、殼口は卵形にして狹く、前方窄みて捻れたる水管溝をなし、殼軸は弓狀にして平滑なり」

彩色、灰色なり」

クリスプス T. crispus. Gould.

動物は黄色、殼は灰色にして、內部は光澤ある紫色を呈し、唇內に溝あり、長一吋、



第三十八圖　クリスプス（トライオンより）

Arthur Adams 氏は日本に此種を産すと云へるも多分誤なるべし」

クラサス T. crassus, A. Ad.

（トライオンより）

産地、日本函館、

長、一吋三分、

帶黄褐色にして、口內は黄色なり」

此種は殼質堅固となりし爲めに、模式的ツノオリイレより唇內の齒等を失ひたる變形なり」



第三十九圖　クリスプス（トライオンより）

エー、アダムス氏は日本種の T. incomptus, Gould を本種と同一なりと疑ひ、本種の幼殼にありては薄板著明にして、肩角に數多の小刺を有すと云へり」

ウロサルピンクス屬 Urosalpinx, Simpson.

殼は長卵形或は短紡錘形にして、縱肋或は波狀螺脉を有し、殼口は短嘴を具へ、外唇の內部に齒及隆起脉あり、脣は幾分か茘枝貝の脣に類似して半心臟形をなし、中央部の少し下方の外縁に核を具へ、齒舌は殆んどツノオリイレ屬に等しく、側齒は附着せる長き基底を有し、中齒

第三十五圖 アルクアッス (トライオンより)



長、記載なし、

管は彎曲して上層に接近せり、

ソーエルビー氏は T. japonicus, A. Adam. を本種と異名同物とせり、T. duplicatus, Sowerby. も本種と差別の點なし、

第三十六圖 ツプリカッス (トライオンより)



モントフォルチ T. montofortii, A. Adams. (トライオンより)

產地、日本、

長、半吋、

最後の管は甚しく延長し、淡紅色なり」

第三十七圖 モントフォルチ (トライオンより)



ツノオリイレ屬 Trophon, Montf.

模式的ツノオリイレは紡錘形の殼を有し、其質薄く、其色白く、螺層は多數の鋭き薄板狀縱脹脈を有し、該脈間は平滑なるか、或は螺肋を有し、水管溝は開き、大抵左方に曲り、臍孔なく、唇薄く、內部は平滑なり、多くは北氷洋附近に產するも、南溫帶及南氷洋にも少しく異なりたる種を產す、Trophon てふ名稱は希臘神話中の神名Trophonius の短縮せしものなり」

クラチクラッス T. clathratus, Lin. (トライオンより)

第三十七圖 クラチクラッス (トライオンより)



產地、グリーンランド、氷州、セントローレンス灣、スピッツベルゲン、那威、北米太平洋岸、

長、一吋二五乃至一吋半、

殼は內外共に白色なり」

化石、英國、カリフォルニア、日本に產す」(エー、アダムス氏)

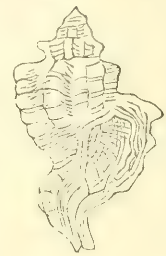
コンシンヌス T. concinnus, A. Ad. (圖なし、トライオンより)

（トライオンより）

產地、北海道エンデルモ港、四乃至七尋、砂泥」

長、一吋三五、

第三十二圖



エゾヤウラク（トライオンより）

形狀、殼は卵形にして、螺塔は段階をなし、螺層は六層あり、上部は肩部斜降し、周緣に角を有し、縱脹脈は七行ありて鋸齒狀を呈し、上部は鈎狀をなし、不等にして粗き螺肋に横ぎらる、殼口は卵形をなし、脣厚くして緣飾を有し、內部に齒を具へ、下部に一强牙あり、蓋は閉ぢて强く、少しく反曲せり」

第三十三圖



彩色、口內は帶紫色にして、殼軸は帶靑白色を呈し、中央に褐紫色を雜ふ」

肩部の螺肋及体層の螺肋三、四條は他の螺肋よりも大にして、縱脹脈と交りて粗き縫目狀の觀を呈す、

＃ M. talienwhanensis, Crosse. M. inornatus, Recluz. は此種に類するも脣緣の一牙を欠けり」

而してトライオン氏は之に附記して其一標品をも見たる事なきを自白せり」

第三十三圖は余が釧路厚岸より得たる標品の略圖にして、ソーエルビー氏は之をエンデルモニスと鑑定せしもピルスブリー氏は之を否定したり、而して、其外脣緣下部の一强牙なきを以て察するに、多分 talienwhanesis か或は inornatus の一なるべし」

チフイス屬 Typhis, Montfort.

此屬に特有なる上向管は動物の外套緣の擴張部に占領せられ、蓋は卵形にして、骨貝屬の如く頂核を有せり」

アルクアツス T. arcuatus, Hinds.

（トライオンより）

產地、日本、支那、喜望峰、

少しく小形なるのみにて、余は兩者の相違を認むる能はず。Cは相模の產にして之をトライオン氏の書に出でたる「falcatusの圖(E圖)及海產第三版第廿一圖と比較するときは、其ヤウラクたること疑ひなきが如し、然して其標品の一群をB及Dに比較するに、或物はBに酷似し、或物はDに酷似し、殆んど相違の点を見ず、而してDは正にトライオン氏のeurypteron(F圖)に符合し、其淡黃色なることも亦よくトライオン氏の只一句の記載に符合せり、これ余が此兩種を異名同物なるべしと信ずる所以なり」

ヤウラクガイ變種アヅンクス

M. falcatus Sowb. var. aduncus, Sowb.

產地、未詳(博物舘目錄)

長、及形狀、彩色共に記載なし」

第三十圖



ヤウラクガヒ變種アヅンクス
(トライオンより)

アカンソフオルス M. acanthophorus, A. Ad.

產地、函舘(五尋)、ツサキ(本州三十七尋)
(エー、アダムス氏による)

長、一吋七五、

第三十一圖



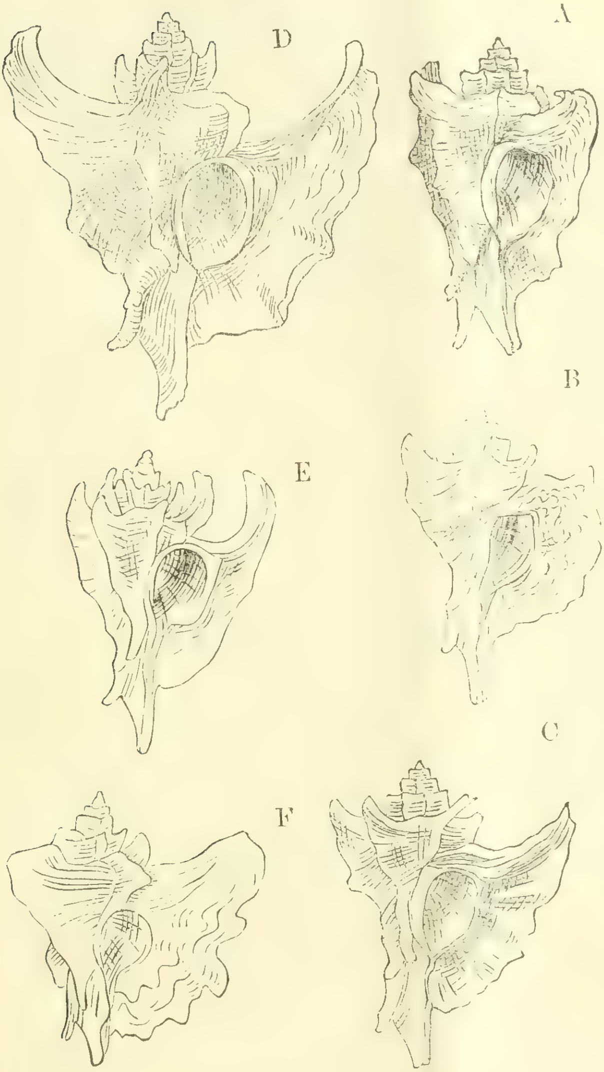
アカンソフオルス(トライオンより)

殼は卵狀紡錘形にして五行の縱脹脈を有し、其質堅固なり、螺層は五層ありて、中央に角を有し、上部平かにして、横脈あり、縱脹脈は薄片狀をなして捲縮し、肩部に三角形の强刺を作り、殼口は楕圓形にして、前方狹く、唇は厚くして、緣飾を有し、內部に齒あり、嘴は閉おて反曲し、臍はレイシガヒ的なり」

彩色、表面は帶白色にして、口內は帶紫色なり」

エゾヤウラク 新稱 M. endermonis, Edg. Smith.

此種はもとツノオリイレ屬中に載せられしも其縁廣き唇はヂヤポニクス等と關係あることを示せり、或は前諸種中の何れかの幼貝ならん」



第十三圖

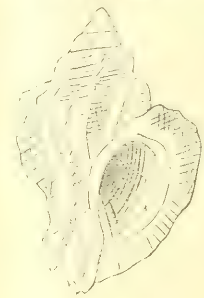
ヤウラクガヒ (M. falcatus) と**ヤウラクヒレガヒ**(M. eurypteron)に就て

余は本邦の諸地方より來れる多數の標品を比較して此亞屬を異にせる兩種が同種ならんことを信ずるに至れりAは海產第三版第十五圖に示せる天鹽國ナカウタ產のヤウラクヒレガヒ中の他の標品にして、余之を佛國のダウツエンベルヂ氏及米國のピルスブリー氏に分ち送りて其鑑定を乞ひしに、ダ氏は之をMurex eurypteron, Reeve. とし、ピ氏は之をOcinebra falcatus, Sowb. としたり、Bは肥前平戶の產たるが兩氏共に之をeurypteron とし、只前者よりも

(トライオンより)

產地、陸奥青森灣(博物館目錄)、北支那、

長、二吋、



ヂアポニクス(トライオンより)

第二十七圖

形狀、五六條の薄板狀縱脹脉ありて、相隔りたる螺肋に横ぎられ、外唇厚く、内部に齒あり、溝深く、僅かに臍孔を見はす」

彩色、暗褐色なり」

ヅンケル博士の記載せし唯一ケの模範標本は磨滅して特徴判然たらざりしも、リシュケ博士は多數の標品により精密に之を記載せられたり、(Japanische Meeres-conchylien. Supp. 三十一頁)

インオルナッス M. inornatus, Recluz.

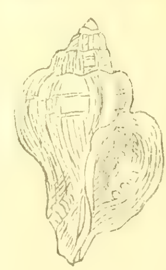
(トライオンより)

產地、函館、朝鮮、

長、記載なし、

縱脹脉の數定りなし、帶黄褐色の地に曖昧なる帶を有し、殼口内は微紅を彩す」

トライオン氏はヂヤポニクスの不完全なるものならんかと云へり」



インオルナッス(トライオンより)

第二十八圖

タンチルス M. tantillus, A. Ad.

(圖なし、トライオンより)

產地、サタノミサキ、五十五尋、

長、記載なし、

形狀、小さき卵狀紡錘形にして、縱狀薄板は鋸齒狀をなせる脉と交りて網目狀をなし、螺層六階あり、中央に角を有す、殼口は狹くして、亞卵形をなし、唇厚く、反曲部廣く、後部は稍波狀をなし、嘴[illegible]

彩色、白色なり、

長、一吋半、

彩色、淡褐色、トライオン氏はM. Nuttallii, Conradと同物とし、ピルスブリー氏はヒレガヒと同物なりと云へり」



第二十三圖
フオルニエリ
（トライオンより）

フオリフルウス　M. ioriflaus, Adams and Reeve.　（トライオンより）

産地、朝鮮、

長、一吋三、

彩色、淡褐色にして、縦脹脈は白く、唇の歯は著明なり」



第二十四圖
フオリフルウス
（トライオンより）

トライオン氏は幼貝なることを明なりと云へり」

ヤウラクガヒ亞屬

イノルミス　M. inermis, Sowb.

産地、日本、

長、半吋、

形狀、縦脹脈は狹く、六條あり、嘴は稍長くして開けり」

彩色、白色なり、



第二十五圖
イノルミス
（トライオンヨリ）

ルグブリス　M. lugubris, Brod.

産地、北海道、

長、一吋二五、

形狀、縦脹脈は六ヶありて狹く、幾分か薄板狀をなし、扁くして稍扁平なる肋と肋間溝とによりて横ぎられ、螺塔は小塔狀をなし、刺狀結節を備へ、体層は肩角を有し、縦脹脈は肩上に曲刺を爲し、嘴は短くして閉づ」

彩色、栗褐色にして、肋間溝は大抵濃色なり」



第二十六圖
ルグブリス
（トライオンより）

ヂアポニクス　M. japonicus, Dkr.


プロレートル
（トライオンより）

第二十一圖

（トライオンより）

産地、朝鮮、

長、一吋半、

形狀、記載なし」

彩色、栗褐色にして、中央に一白帶を有す」

恐くはヒレガヒの幼貝たらん」

ブランキプテロン　M. branchypteron. A. Adams.

（圖なし、トライオンより）

産地、日本浦賀、十二尋、

長、記載なし、

形狀、卵狀紡錘形にして、其螺層は縱線と齒狀螺線とに横ぎられ、殼口緣は緣飾を有し、水管溝は閉ぢて反曲し、翼狀縱脹脉は類似の他種よりも短し」

彩色、淡茶褐色地に栗(まだら)色紋を雜へ、中央に一白帶を有す」

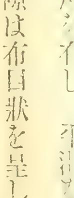
スチムプソニ　M. stimpsoni, A. Adams.

（トライオンより）

産地、日本浦賀、二十一尋、

長、記載なし

第二十二圖


スチムプソニ
（トライオンより）

形狀、卵狀紡錘形をなし、螺塔鋭く、螺層は七層あり、各層は扁平にして肩角を有し、平滑なる[illegible]、間隙は布目狀を呈し、縱脹脉は廣き葉狀をなし、其後方は廣がりて闊くなり、唇緣は廣き緣飾を有し、水管溝は短くして直く且つ閉ぢたり

彩色、淡茶褐色なり」

これ恐くは特徴著しからざる一ケの幼貝なるべし

フオルニエリ　M. fournieri. Crosse.

（トライオンより）

産地、日本海、

產地、日本、

長、記載なし、

形狀、殼は卵狀紡錘形にして、螺塔高く、圓錐形をなし、螺層は五層ありて中央角立ち、稍や互に隔りたる鱗狀螺脈と七縱脹脈とを有し、肋上の突起は後方延びて鱗狀刺をなす、殼口は卵形にして水管溝は短く、開きて反曲せり」

ヒレガヒ亞屬

ゴウルヂ M. gouldi, A. Adams.

(圖なし、ツライオンより)

產地、日本對馬、

長、記載なし、

形狀、卵狀紡錘形をなし、螺塔尖り、各螺層は扁平にして、多少肩角を有し、横脈ありて其線不等なり、縱脹脈は短き葉狀突起を有し、各突起は後方反曲せる一刺に終り、殼口卵形にして、其脣は廣き總狀の緣を有し、水管溝は直くして閉塞し、寧ろ長き方なり」

彩色、淡茶褐色なり」

テウセンヒレガヒ 朝鮮鰭貝(新稱) M. coreanica. A. Ad.


第二十圖
テウセンヒレガヒ
(トライオンより)

產地、韓國釜山浦、

長、一寸乃至一寸五分、

形狀、卵狀紡錘形にして曖昧なる螺肋を有し、縱脹脈は低くして廣く、往々僅かに葉狀をなして少しく反曲し、縱脹脈間に一の結節を有し、外脣内に結節狀齒ありて、外脣緣の前方に一尖齒あり、或標品にありては僅かに其痕跡を止め、或は全く之を欠如す」

彩色、淡茶褐色にして、疎に栗色の斑紋を散らし、大抵白色或は淡綠色の汚物を被り、口内は淡菫色にして、結節狀の齒は白し」

プロレートル M. plorator, Adams and Reeve.

第十七圖はトライオンの書より轉寫せるものにて、第十八圖は本種の幼介と考へらるゝ余の標品にして、全面淡紅色を彩し頗る美麗なり」

ヒナノカムリ亞屬

コロナツス M. coronatus, A. Adams.

(圖なし、ツライオンより)

產地、日本ツガキ、三十五尋、

長、記載なし、

形狀、殼は楕圓狀三角形にして、圓錐形の螺塔を有し、螺層は扁平にして、六層あり、其後方は角立ち、四條の螺肋と多數の肋間細脈とを有し、六縱脹脈ありて總狀又は鋸齒狀をなし、後方には廣き鈎を有し、殼口は楕圓形にして前方窄み、外唇は總狀の緣を有し、水管溝は短し」

彩色、淡茶褐色なり」

フイムブリアツルス M. fimbriatulus, A. Ad.

(ツライオンより)

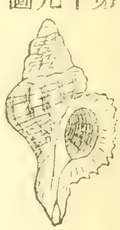
產地、日本、

長、十九ミ、メ、

形狀、楕圓狀紡錘形にして、螺塔高く、螺層は六層ありて脹れ、顆粒形の微縱糉と横脈とありて、密細鱗をなせり、殼口は卵形にして完く、外唇は壯麗なる總狀緣を有し、他に縱脹脈を有せず、水管溝は直(なほ)く、延長して、閉塞せり」

彩色、淡茶色或は淡紅色にして、所々阻碍されたる暗色の狹き一中央帶を有し、口內は淡紅或は肉色なり」

第十九圖



フイムブリアツルス
(トライオンより)

本種はもとツノオリイレ屬(Trophon)として記載せられしも非なり、第十九圖はイー、エー、スミス氏(E. A Smith)の公にせる所にかゝる」

プテオルス M. puteolus, A. Ad.

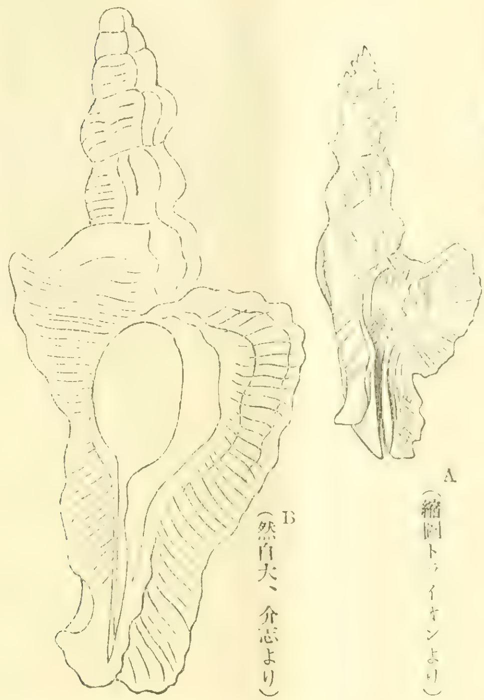
(圖なし、ツライオンより)

○本邦海產貝類圖說備考 (二)

芭蕉貝亞屬

カラスキ (介志) M. clavus, Kiener.
(トライオンより)

第十六圖 カラスキ



A (縮圖トライオンより)

B (自然大、介志より)

產地、フイリッピン諸島、

長、三吋二五、

帶白色或は肉色にして、幼貝にありては結節及縦脈頗る著明なり」

イテフガヒ亞屬、Homalocantha, Mörch.

トゲナガイテフ、M. scorpio, Linn.



第十七圖 トゲナガイテフ (トライオンより)

產地、琉球、

長、凡二寸、

形狀、イテフガヒに似て嘴長く、銀杏葉狀の刺も亦甚だ長く、縫合の陷入イテフガヒよりも深く、爲に往々蜂腰狀の奇觀を呈す」



第十八圖 (原圖自然大) (表面淡紅色、內面白色)

彩色、純白乃至褐色にして、縱脹脈と刺とは概して暗色をなし、殼面多くは白色の汚物に被はれ、口內は微柑色を彩す」

此種は余の寄贈せし標品によりピルスブリー氏が新種として記載せられしものにして、標品極めて少し」

ツノオリイレ屬 Trophon. Montf.

ツノオリイレ T. clathratus, Linn.

（海產、第三版、第二十五圖）

產地、陸奥青森灣、

長、一寸二分内外、

形狀、紡錘形にして螺塔高く、凡そ七八層を數へ、薄板狀をなせる外唇緣は、常に前方に向て彎曲し、肩部にありては淺き溝をなし斜に上方に突出し、此外唇の遺跡は七八行の薄板狀縱脹脈となりて存し、老成せし標品の上層にありては磨滅して龍骨狀を呈せり、嘴は長くして開き、著しく左方に反曲し、臍孔を欠ぐ」

彩色、表面は帶白色にして、唇及水管溝内は褐色を呈し、口内は淡褐色を彩る、幼貝にありては唇白く往々黄褐色の線或は斑紋を見る」

ウロサルピンクス屬 Urosalpinx. Stimpson.

ビリレツフイ、U. birileffi, Lischke.

（海產、第三版、第二十六圖）

產地、平戶、

長、七分内外、

形狀、紡錘形にして、殼質堅固、螺塔は段階をなし、凡そ七層を數へ、螺層は膨れて肩角を有し、八九條の縱肋は鱗狀をなせる螺脈に横切れ、其螺脈は大小交互して相密接し、其末端は外唇緣に終りて、細齒狀を呈せしむ、外唇は厚くなり、其内部に數條の隆起線を有して其末端は鈍齒狀を呈し、嘴は短くして開き、少しく反曲し、内唇には滑層を有し、臍孔を欠ぐ」

彩色、帶黄褐色乃至栗色にして、兩唇、滑層、及水管溝内は紫褐色を常とし、往々帶紅淡褐、或は菫色を呈するものあり」

産地、平戸、(ニューカレドニア、フィリッピン、ヴィチ諸島等にも産す)

長、一寸内外、

形狀、ハネナシヤウラクに似て水管溝開き、螺塔高く、外唇緣の下部には一强牙を有することなく、縱脹脈を欠き、其代りに十條内外の縱肋を有し、細鱗狀をなせる密なる螺脉之を横ぎり、外觀頗る美麗なり」

彩色、帶白乃至淡褐色にして、數條の螺脉は往々暗紫色或は栗色をなし、肋間にありては殊に濃色を呈す」

コヤウラク 新稱 M. Iuridus, Midd.

(海産、第三版、第二十三圖)

産地、土佐、

長、三分内外、

形狀、ヒメヤウラクに似て著しく小さく、嘴は短くして開き、螺層は密接せる螺脉と數條の圓き縱肋を有し、外唇の内部に齒あり」

彩色、表面は帶白乃至汚栗色にして、口内は暗紫色を呈す」

按ずるに Luridus. は米國西岸の産なれば、此種と別種なるやも測られざれど、今暫く博物館目錄に從ふ」

カタハ子ヤウラク 新稱 M. monoptera, Pils.

(海産、第三版、第二十四圖)

産地、平戸、

長、四分内外、

形狀、豆大の小形種にして、螺塔高く、凡六七層を數へ、肩角著しく、八九條の稜昧なる縱肋ありて、肩部に結節狀を呈す、又稍や細鱗狀をなして密接せる大小の螺脉ありて、肋間の密縱脉を横ぎり美麗なる顆粒樣布目狀をなし、外唇は擴張して少しく反曲し、緣飾を爲し、嘴は極めて短く、閉塞して少しく反曲せり」

彩色、帶白乃至褐色にして、數條の螺脉は往々栗色の点線をなし、口内は淡褐乃至菫色なり」

四條の大なる縱脹脉は少しく扭れて上下相連り、螺塔は略ぼ紡錘形をなし、螺層は六七階を數へ、螺肋著しく、肋間に縱脉を見はし、其外觀籠目狀を呈し、嘴は短く、稀に稍長きものあり、殆んど直角をなして反曲す」

彩色、表面も口內も共に白色なり」

ハネナシヤウラク 新稱 M. monachus, Crosse.

（海產、第三版、第二十圖）

產地、平戶、（支那にも產すと云ふ）

長、一寸二三分乃至一寸五分、

形狀、紡錘形にして、四行の縱脹脉は狹くして葉狀をなさず、大小の螺肋は曖昧にして、縱脹脉間の中央には螺層毎に一ヶ宛の小結節を具へ、外唇緣の下部に一强牙を有し、之を欠げるもの少からず、又外唇の內部及唇緣に數ヶの圓き齒あり、水管溝は短く且つ反曲し、殆んど臍孔を有せず」

彩色、栗色の地に白色を雜へ、往々帶をなせることあり」

トライオン氏は此種をチヤポニクスの變種ならんと疑ひ、ヴイツラリア亞屬に似たる點ありとし、日本人は之を食用に供すと記せり」

ヤウラクガヒ 瓔珞貝（丹浦） M. falcatus, Sowb.

（海產、第三版、第二十一圖）

產地、羽前、相模等、

長、一寸二三分乃至一寸六七分、（更に大なるものあるべし）

形狀、縱脹脉は廣き翼狀をなし、其發達の程度により種々の形を呈し、ヒレガヒに似て小さく、又外唇の一强牙なく、イソバセチに似て、縱脹脉間の結節なく、其翼は肩上に擴張して、末端鉤狀をなし、往々瓔珞狀をなせるものあり」

ヒメヤウラク 新稱 M. contractus, Reeve.

（海產、第三版、第二十二圖）

を有すること無きを、前種との識別点とし、嘴及狹き臍孔の周圍はすべて前種と異なることなし」

彩色 前種に似て帶白乃至淡褐色なるも概して汚物を被れり」

イソバセヲ 磯芭蕉(丹浦) M. emarginatus, Sowb.

(海産、第三版、第十七圖)

産地、平戸、五島、紀伊、伊豆、相模等、

長、一寸五分内外、

形狀、ヒレガヒに似て小さく、葉狀の縦脹脉は殆んど反曲せずして其葉縁も亦齒牙狀を呈せず、外唇の齒は僅かに痕跡を存し、螺層の各層には縦脹脉間の中央に大なる結節を有せり」

彩色、青紫色を帶びたる淡褐色にして、大抵白色緑色等の汚物を被れり」

ヤウラクガヒ亞屬 Ceinebra, Leach.

ツヤナシヤウラク 新稱 M. inglorius, Crosse.

(海産、第三版、第十八圖)

産地、小笠原島、

長、六分内外、

形狀、紡錘形の小貝にして、縦脹脉の代りに八九條の縦肋を有し、螺層は六階ありて、肩角高からず、螺肋著しく、殻口は紡錘形をなし、前後兩端に溝を有し、嘴は極めて短く、開きて前溝をなし、後溝は刻目狀をなせり、内唇は稍廣くして平たく、外唇内に七八ヶの齒狀突起あり」

彩色、紫褐色にして、口内は紫色を呈す」

ヒシヤウラク 新稱 M. tetragonus, Brod.

(海産、第三版、第十九圖)

産地、大隅喜界島、

長、八分内外、稀に一寸に達するものあり、

形狀、略ぼ四角形をなせる小貝なり、殻質重厚にして

ヤウラクヒレガヒ 新稱　M. eurypteron, Reeve.

（海産、第三版、第十五圖）

産地、平戸、天艸等、

長、一寸五分内外、

形狀、縱脹脉は廣き葉狀をなして波狀に皺曲し、大なる螺肋の先端は其緣に數ヶの裂片を生じて後方に反曲し各片の裏面の中央に淺溝を作り、肩部にある裂片は長くして其先端は鉤狀をなし、外唇緣をなせる縱脹脉は殊に廣くして花瓣狀をなし、美麗なる細鱗狀の彫刻を備へ、殼の頂上より見る時は略ぼ五角形をなして宛然巴草の花の如く卷ける觀を呈し、水管溝は扁平なる管狀の廣く短き嘴をなして、其先端は少しく反曲し、其遺物は三四ヶを存し、螺階を爲して極めて狹き臍孔を繞れるを見る、又大なる螺肋の間には更に小なる螺脉ありて、全表面は細鱗狀をなし、新鮮なる標品にありては汚角色の表皮を被る」

彩色、淡黃色或は淡褐乃至白色にして、往々白色或は綠色の附着物を有し、口内は概して淡茶褐色を呈す」

ヒレガヒ 鰭貝

M. burnetti, Adams and Reeve.

（海産、第三版、第十六圖及 a）

産地、大隅、陸奥等、

長、三寸内外、

形狀、前種に似て稍長く、殆んど肩角なく、紡錘形をなし、著しく大形なり、三列の縱脹脉は少しく捩れて上下連續し、葉狀に擴張し、螺脉の端は裏面に淺溝をなし葉緣に突出して齒牙狀をなし、稍後方に反曲することを前種に異ならざるも、縱脹脉の嘴に近き部分は反對に前方に反曲し、外唇緣は前面に突出せる六七ヶの牙を有し、嘴の方より數へて第二の牙は、殊に强大にして識別の特徵となすに足る、又縱脹脉間の肩部に微突起ありて、体層にあるもの尤も著しく、大なる螺肋の間には別に小肋

の小刺を出し、縫合は深く陷入し凡そ五行の縱脹脉によりて區劃せられ、各層上に五ケの窪穴を生じイトカケガヒ狀を呈す」

彩色、內外共に帶白色にして、概して汚白色物を被り、往々綠色或は褐色を帶ぶ」

ヒナノカムリ亞屬、Phyllonotus, Swains.

ヒナノカムリ 新稱 M. cirrosus, Hinds.(var.)

（海產、第三版、第十四圖）

產地、平戶、

長、四五分、

形狀、短紡錘形にして、水管溝は開きて短く、殼口は卵形をなし、六行乃至九行の縱脹脉ありて、凡そ六條の螺肋に橫ぎられ、肩部にありては上後方に向へる長く鋭き鉤刺をなし、テンニヨノカムリ（天女冠）に似たる美觀を呈す」

彩色、內外共に白色にして、往々褐色を彩る」

ヒンヅ氏の說に從へば、本種はボルチヲ島とセレベス島との間なるマツカッサル海峽にも產し、深さ十五尋の砂礫の海底に住すと云ふ」

ヒレガヒ亞屬、Cerostoma, Conrad.

此亞屬とバセチガヒ亞屬との區別頗る困難にして、屢の未詳なる種の多きと、レイシガヒ的の唇を有せる種にありても其唇齒の判然たらざるものあるとにより其分類益困難となれり、蓋し一ケ以上の縱脹脉間結節を有するものは眞のバセチガヒ亞屬にして、其分布は主として印度洋太平洋なり、然るにヒレガヒ亞屬の分布は北太平洋にして、日本より北方白令（ベーリング）海峽に及び、亞米利加の西岸にありては南方中亞米利加に達せり、凡そ貝類中、種の特徵を捕ふることの困難なる此亞屬中の諸種の如きもの尠し、故に若し日本の諸地方より多數の標品を得るに至らば、今日別種となせるものも其異名同物たるを確め、其種數を減ずるに至らんことを期して待つ可し」

之をもカヒと云ひ又カヒコとも云へり拾遺集に

「鳥の子はまだ雛ながら立ちて居む卵(カヒ)の見ゆるは巣守なりけり」

「松の苔千歳をかけて生ひしげれ鶴の卵(カヒコ)の巣とも見るべく」

○梭をカヒと云ふ事

梭を日本紀の古訓にカヒと訓ませたるは本名なりこは布を織るとき左右かはる〲往きかはすれば貝をもて物を買ふより換ふに移り更に行き更ふに移り再びカヒと云ふ名に歸りしものか交ふと云へる例は古今集に

「夏と秋と往き交(カ)ふ空の通ひ路はかたへ涼しき風や吹くらむ」

上カヒと云へる詞の大方を揭げたり其間に一貫の原則ありて直に脈絡貫通して相離れずして其語根の一に歸する所あるを知るに於て思ひ半に過ぐるものあらん中にはいかゞと打傾けらるゝふしもなきにあらざらめれど沈思熟考するときは自づと疑團を氷解することもありぬべし只其孰を始めとし孰れを後とすべきは之を判すると容易ならざるも意味の深遠なる用言(ハタラキコトバ)卽動詞は意味の單一なる體言卽名詞に基くと多く名詞は形容詞複詞或は他の名詞より導かれたるもの多きを以て見れば如上カヒの詞も或は貝の名を以て語根と定むると學理ありと云ふべし猶次說を見るべし

(以下次號)

○本邦海產介類圖說　(第二)

イテフガヒ亞屬 Homalocantha, Mörch.

イテフガヒ 銀杏貝 M. rota, Sowb.

(海產、第三版、第十三圖)

產地、琉球、

長、一寸五分、

形狀、嘴太くして長く、外唇緣より嘴上に連りて銀杏葉狀の扁平なる五六刺を生し、他の縱脹脈上よりも同樣

「櫻花咲にけらしな足引の山のかひより見ゆる白雲」
國名甲斐も峽(カヒ)の義にして甲斐川も谷(カヒ)川の義なり熊谷(クマガヒ)も亦然りクマガヘとやうに云へるは訛りたるなり扇谷(アフギガヤツ)も此類なるべし

○時の間をカヒと云事

カヒは時間にも云へり催馬樂に
「伊勢の海淸き渚の汐間(シホガヒ)に莫告藻や摘まん玉や拾はん貝や拾はん」

○泣く事をカヒをつくると云事

なくことをかひをつくるといへりこは両手を顏におしあてたるが貝の形に似たればなるべし榮花物語に
「しらとめの北の方、見奉りに出で給ひて何ともなく、たゞかひをつくり給へば云々」
今昔物語にもかひをつくりて云々とあり。散木集にも
「身のあやしきことをおもひつゞけて泪ぐましきによめる
「ともすればまづつくらるゝうつせ貝空しく手のみ世をやすぐらむ」

○籾(モミ)をカヒと云事

延喜式の祝詞式に「千穎(チカヒ)八百穎(ヤホカヒ)爾(ニ)奉(タテマツ)り置(オ)き氐(テ)云々」とある穎(カヒ)は稻の實の事にて籾の形の貝に似たればなるべし一說に稻の穗を云ふとも有りいづれにてもあるべし

○匙をカヒと云事

匙を賀比と云へることも和名鈔に見えたりこは初貝殼にて作ればなるべし。伊勢物語に
「女の手づから飯匙(カヒガヒ)を取りて笥子に器に盛りける」
是より物を養ふことを飼ふと云ひ。倒れんとするものを支ふることをも撐ふと云ひ水を檜杓(ヒシヤク)にて酌干(クミホ)すことをも渫(カ)ふといへるは匙の用言に移りしものなり(後世小なるをサジと云ひ大なるを杓子と云ひて之を區別せり女中詞にサモジと云ふはやがて杓子の事なり)

○卵(タマゴ)をカヒと云ふ事

蜆貝などは愛らしく卵も愛らしくして殼に包まれたれば

の響或は細砂を咬合せたる音となる
カリ〱　鼠の屋器を噛じる音などなり鈍聲には濁りて云へり
コリ〱　えびの軟骨などを食ふ音に云
以上は齒の響に用ゐらる
ゴロ〱　多くは雷鳴に用ゐらる
ガタ〱　板敷を足駄にて行く響など又清みても云へり
ゴト〱　器中に物ありて相撃つ響など又澄ても云へり
ギク〱　屋床弛み歩すればきしみ鳴る音などに云ふ
ガク〱　物の把束堅牢ならざる様などに云ふ
以上は雜音に用ゐらる

實に上代言語の初期はかゝる形容語に胚胎し後漸く發達して名詞となり更に進みて今の如き許多の動詞を産出したるものにして例へば噛むと云ひ堅しと云ひ軋(キシ)ると云ふも如上の形容語より轉一轉して成れるものなれば力に屬する語の多少堅實の意を有するもの多きは深く異しむに足らず其餘舌音に屬するスラ〱、ヌル〱と云が如き白づと一種の意を表出する等學者宜く各行の音に就きて一一其性の如何を試みなば以て前說の偶然ならざるを証するに庶からん

○芽(メ)をカヒと云事

吾人がかひと云へば先第一に蜆、淺利貝文蛤の類を想ふべし種子の萌芽せる時其形の之に似たるより又忍貝を想起すべし依りて之を稱してカヒワリ(甲坼)と云へり記、紀に芽、甲をカヒとよめるは芽の義なり例へば記に「葦(アシ)牙(カヒ)」とあるはアシノメを云へるが如し

○物の間をカヒと云事

蜆などの形の二の殼に介まれるより物の間をカヒと云へり例へば山間をヤマカヒと云へるが如し倭名鈔に峽を訓み日本紀に谷をよめり又古今集に貫之

金（カネ）の義にあらで高音（タカネ）の上畧なりと云へり）千載集に
「高砂の尾上のかねの音すなり曉かけて霜や置くらむ」
（こは寒さ夜耳なれぬ遠寺の鐘のこう〳〵と枕に響くをよめるなり）黄金は固よりカネと云はず必「こがね」と云へり萬葉集に
「すめろぎの御代榮えむと東なる陸のくの山に こがね花咲く」
黄金は古代に在ては砂金の儘價を定めて商賈の取引に使用せしことと今も韓國にて行はるゝに異なることなく後には大小判の如く延板となし夫より二分金起り二朱金之に次て出てたり是等の貨幣を只カネと呼び出てしも徳川治世後にして之に對へて鐘をツリカネともハンシヤウとも云ふに至れりカネのカシカリと云詞と何等の關係あることなし。かくカシ、カリの詞出で來し後は今の如く廣く物品の貸借をも云ひあらはすことゝなりしなり或人の說にカシは假り出しカリは假り入りの略なるべしと云へれど假りは却て借りより出でしことは言語學上爭ふべからざるものなり。

或說に預りは宛て借りの轉なりとさらば前章に價は與ふなりと云ひしは考の及ばざる所ありとも宛て貝にて例へば勾玉一個の宛貝幾干と云を今の如く畧してアタヒと云出てしと云はん方前の考に優れり。

○カ音に屬する形容語の事

俚俗堅体の相摩し相擊つ所の騷音を形容するに多くカ音を以てせり例へば

キン〳〵　强烈不快なる鋭音を云
ケン〳〵　較鋭き音多くは金石の聲
カン〳〵　金或は木を擊つ聲濁りて云ふは鍋などの響にて鐘聲には澄みて云へり
コン〳〵　木を擊つ音など也濁れば大鐘の響
以上は堅體相擊て發する響に用ゐる
ケリ〳〵　齒を軋る鋭き音濁れば自鳴鐘古式などの齒輪

○かひの名義考（二）

永沼小一郎

○通貨用の寶貝の事

古來通貨として使用せるものはかゝる大貝種にあらずして專黄寶なるが如し。西曆一千八百四十八年の記錄に依れば「西亞弗利加諸州の通貨或は裝飾用としてリバープールに輸入せし黄寶の總量は重サにて六十噸に達せり一と云試に之を米の量に換算する時は拾[illegible]百俵の量下六貞實錄に相當せり其學名は C. Moneta（ソーモネタ）にして貨幣貝の義なり但黄寶は其實價の貴きものにあらず其重きを置かるゝものは佗にありて現に大絲掛貝とて其大さ田螺に等しきものは肥前のチヽ巖にも產するものなるが某地方にては英貨五磅（吾五十圓）に價し又相州沖に特產する長者貝と稱し近時の發見に懸る希有品の如きは其完備のものは十磅以上に價すと云等なり

○貝の字をカヒと訓む事

貝の字の本義は元來タカラガヒのとなれども本邦にては之をカヒと訓み凡て螺蛤の總名となせると上に云へるが如しこは近く始まれるにあらで利名抄に貝和名加比とあるにてもいと古き習はしなることを知るべし

（殼及介の字をカヒと訓む事

和名鈔に殼を「和名與レ貝同シ」と註したるは義の稍廣まりしなり後世介と訓めるは其意義益廣まれる、蟹、蝦、龜、指甲螺、海燕、をこ包括して云へる所[illegible]にして[illegible]顏齋介品の如きは此類なり

○貸借と云詞の事附り價の再考

物の貸借をカシ、カリと云へり今其因て起る所を考ふるに是も貝の出入を表章するに始りしものゝ如し卽

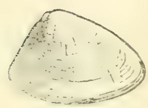
カシは　カヒの出し方の中略にして

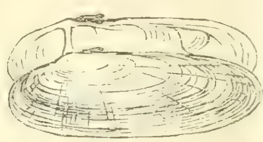
カリは　カヒの入り方の中略なり

或人曰此カは金（カネ）のカと見ん方大に事實に叶へり如何曰否古書に「かね」と斥せるは凡て錢のことにて（是れすら

ン氏の言を俟たずもがなと思はる。(以下次號)

前號「貝類の採集に就きて」に記載せられたる貝類に就き、本號の卷頭に其寫眞版を付し其種名を左に列記す是れ卽ち採集者をして實物と對照するの便あらしめんためなり、但し原文には屬名を記載しありしを種名となしたるもの〜和名は聊か相違あるなり、左の二圖誤りて寫眞版に脫漏せしを以て爰に掲ぐ讀者之を諒せよ(編者)


16


17

補版(第一版)

1. Ianthina ianthina, L. アヰガホガヒ
2. Littorina sitchana, Phil. タマキビ
3. Monodonta labio, L. イシダヽミ
4. Helcioniscus toreuma, Reeve. ヨメガサラ
5. Chlorostoma argyrostomus, Gmel. var. basiliratum, Pils. クボガヒ
6. Purpura bronni, Dkr. レイシガヒ
7. Liolophura japonica, Lischke. ヒザラガヒ (此種ハ Chitonidae ニ屬ス)
8. Cypraea capt-serpentis, L. ハナマルユキ (コヤスガヒトモ云フ)
9. Columbella versicolor, Sowb. フトコロガヒ
10. Scala pseudo-scalaris, Brocchi. イトカケガヒ
11. Solen gouldi, Conrad. マテガヒ
12. Caltellus philippianus, Dkr. タカノハ
13. Lingula anatina, Lam. メカジヤ
14. Lithophaga nasuta, Phil. ヒミズ
15. Pholas manilensis, Phil. var. inornata, Pils. ニホガヒ
16. Donax proximus, Bertin. フヂノハナガヒ
17. Siliqua pulchella, Dkr. ミゾガヒ

机上に齎さるゝこともへ、實に便利であるといふことであつた。

サー、ワイヴイル、タムソン氏が、千八百七十年ポルキユパイン號にて、ポルチユガル沿海に海底探檢を爲したる際、同年七月二十日に試みたる唯一回のドレッヂにて、九百九十四尋の深海底より揚がりたる貝類は、百八十六種ありて其の中、四十%は未だ記載せられざる新種であつた。そこで同氏は言へり、貝類學者の平素熱心なる研究あるに係らず、今回の採集品の半分以上は、彼等の始めて目撃するものなりとは、海中生物學の前途、猶遼遠たるを吾人に教示する。又、今、北大西洋の廣大なる海底面積と、其の両岸に沿ふて點々と探檢せられたる狹小の海底面積とを比較し、これに如上の採集成績を對照して推考せば、全地球上に於ける海底生物に就きて、吾人の將來研究すべき希望は、如何に廣大なるべきかと絶叫した。爾來三十有餘年、氏の豫言は着々と實現せられ、探檢船の出づる毎に、他の海底生物は暫くこれを措き、貝類の新種の增加せらるゝこと、常に數百に達し、吾人をして海産無盡藏なりとの諺の虚妄ならざるを想はしむるのである。

平瀬君の陸産貝類採集品に就き、ビルスブリー氏の調査せる報告を見るに、唯僅に小笠原の一小群島より出でたる新種のみにても、よくは勘定せぬが、既に百數十種に上ぼつて居る。小笠原島は、太平洋の一隅に點々せる一小群島にして、其の面積を太平洋海底の面積に比較しなは如何ん、恐らく百疊敷の疊の目一にだも及ばぬ位であらう、而かも是は海底に比すれば、百事採集に便利なる陸上であつて、唯貝類採集家の入らざりし爲め、斯くの如き良成績を舉げたのである。況や海洋の廣き、未だ一回も探檢を經ざる場所は、小笠原島を單位として勘定したならば、數萬乃至數億倍になるであらう。左れば海産貝類の新種發見に關する將來の有望なるは、敢てタムソ

りませう。今日のドレッヂには、種々の型があるやうですが、悉くこれに改良を加へたものに外ならないのである。

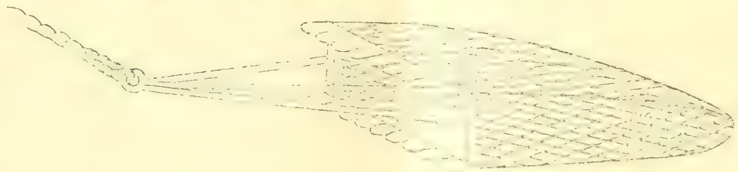
前世紀、後半に至るまで、生物學者の一般に用ひたものは、ボール氏ドレッヂといつて、枠の長さは一尺五六寸、幅は五六寸にして兩緣に鋸齒を設け、網の眼は五分許で、深さ二尺前後あり、釣手も網も皆麻絲製であるが、之れに太い引き繩が附らるゝからして、矢張目方は頗る重い。此のドレッヂを本邦の沿海に始めて使用したのは、余輩の恩師ドクトル、モールス氏が恐らく嚆矢であらう。是は明治十一二年の頃であつて、余も始めて房相の沿海に親しくこれを試みたのである。

當時、これを使用するには、小舟に乘りて網を卸し、海底に達したるを見計ひて網を舟緣に結び着け、漁師二三人に櫓を押させ、時宜に依りては風力と潮流とを利用し、三四十分も牽きたる後、其の網を手繰り揚げるのである。然れども元來人力に賴る業であるゆへ、到底深い所には其の力及ばずして、精々五十尋以內に止まる。百尋以上になると蒸汽船にて蒸汽の力を藉り、種々の器械力に待たざるを得ない。既に五十尋前後の海中に採集を試みやうとしても、重い網具を運搬しなければならず、萬事手重になりて容易な業でない。併し採集し得たる標本を見れば、自ら其の勞も忘れ、費用も敢て惜からぬやうに感ずる。蒸汽船にて大仕掛に採集するにも、今日は昔と違ひ頗る輕便に行はれるやうになつた。昨年合衆國水產局より我が近海に派遣になつた探檢船アルバトロス號に、一時便乘せる箕作博士の談に依ると、一千尋內外の深海底にトロールやドレッヂを使用するにも、萬事器械力を利用することゆへ、採集器を取り扱ふものは、僅に一人や二人にて事足り、海洋何處にても、豫め測量して其の深さが分かりさへすれば、一號令の下に網は直ちに海中に卸され、一定時の後に海底の生物が、研究者の

却說、貝類の採集に最も必要なる器械はドレッヂである。此の器械は、唯、貝類のみならず、諸般の海底生物の採集の爲に用ひらるゝものゆへ、其の發明ありて以來、幾多の改良を加へられ、今日は探檢船の無二の器械と成つて居る。實に海中生物學の今日の進步を見るに至つたのは、一に此の器械發明の賜と言つても、敢て過言でないと思ひますから、是に少しく其の來歷を陳べませう。

十九世紀の央ばに至るまで、海底の生物に關する智識は、甚だ幼稚にして、其の程度は大干潮に際して曝露せらるる海底に止まり、其の以上に涉れる智識と言へば、嵐のあつた後偶々海岸に打ち揚げられたる標本、又は彼の延繩、牡蠣網、トロール(打瀨網)等に罹かれる標本に基きたるに過ぎなかつたのである。生物學者の始めて用ひたドレッヂは、新たに發見せられたるものではなく、全く從來の牡蠣網を應用したるに過ぎない。牡蠣網の構造は、時代と場所とに從つて一樣ならざれども、概して鐵製の枠に鐵條の釣手を附け、其の枠に鐵鎖又は革にて製したる袋を着けたるものである。第二圖は、現在デンマーク邊で使用して居る牡蠣網なるが、枠の長さは三尺許もあり、袋の海底に觸るゝ側面は、鐵網か乃至は革に孔を穿けたるものなどであるからして目方は頗る重く、到底深海底にこれを牽き廻はすなんど、思ひも寄らぬことでありますから、枠も遙に小さくし、網は麻にて製することに致したの

第二圖 外國の牡蠣網

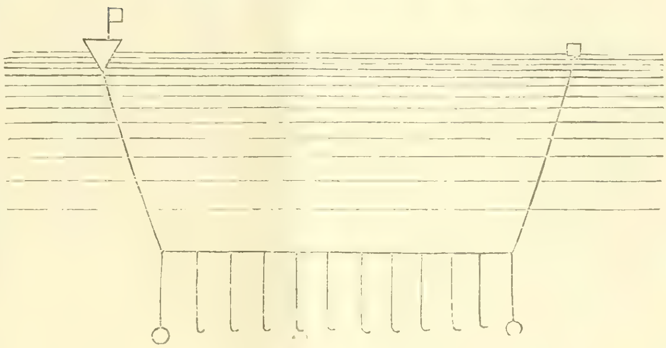


此のドレッヂを科學上に使用したのは、實に千七百九十九年であつて、オ、エフ、ミユール氏が、デンマーク及びノルウエー沿岸に採集したのが嚆矢であ

揚ぐるものである。是は獨り我が邦のみならず、外國でも古來使用するものにて、元來、深海魚を漁獲する爲の道具なるが、肉食性の貝類は、往々これに引き掛かり夫のオキナエビス一名長者貝(Pleurotomaria beyrichi Hilg.)の如き貴重なる種類も、これに依りて漁獲せらるゝといふ話である。其の他章魚壺の中にも數種の貝類を獲ることあり、是は章魚がこれを食せんとして玆に運び入るゝ爲めである。又水禽、大魚等を屠るときには、

第一圖

延繩使用の摸型圖



其の胃袋の中に意外の好貝を發見することもある。

小貝は、多く海藻の中に潜み居るものなれば、網に懸かれる藻屑を携へ歸り、器に海水を盛りてこれを浸し置けば、彼等は自ら這ひ出づるが故に、これを生獲することが出來る。若し其の肉を捨てゝ殼のみを得んとするならば、海水の代りに淡水を用ふべし、左すれば小貝、皆、死して器底に沈むが故に、これを蒐集すること一層容易である。

前に陳べたるが如く、貝類採集家に對する漁民の同情は甚だ薄きも、彼等の同情は金を以て購ひ得らるゝが故に、初め一二の貝に向かつて稍々不相當の高價を投ずるに於いては、彼等は競ふて其の採集に力むること常である。余、先年土佐の國に採集を試みんとして、彼の珊瑚の採集を業とする柏島の漁村に至りし際、此の方法を以て貝を募りしに、極めて短時日の滯在なりしにも係らず、隨分多種の深海品を手に入るゝことを得ました。

介類雜誌　第貳號

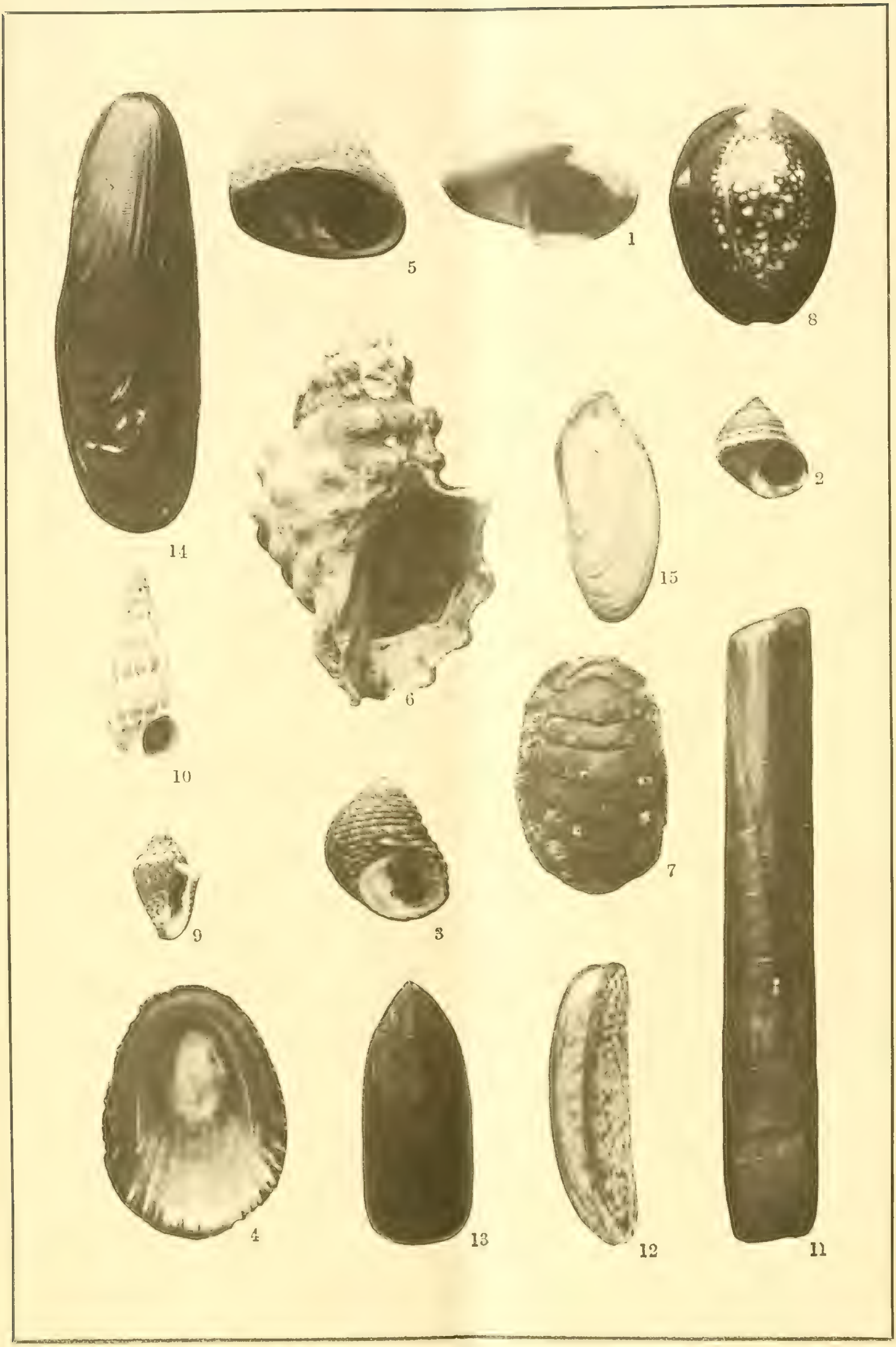
明治四十年二月二十日發行

○貝類の採集に就きて（二）

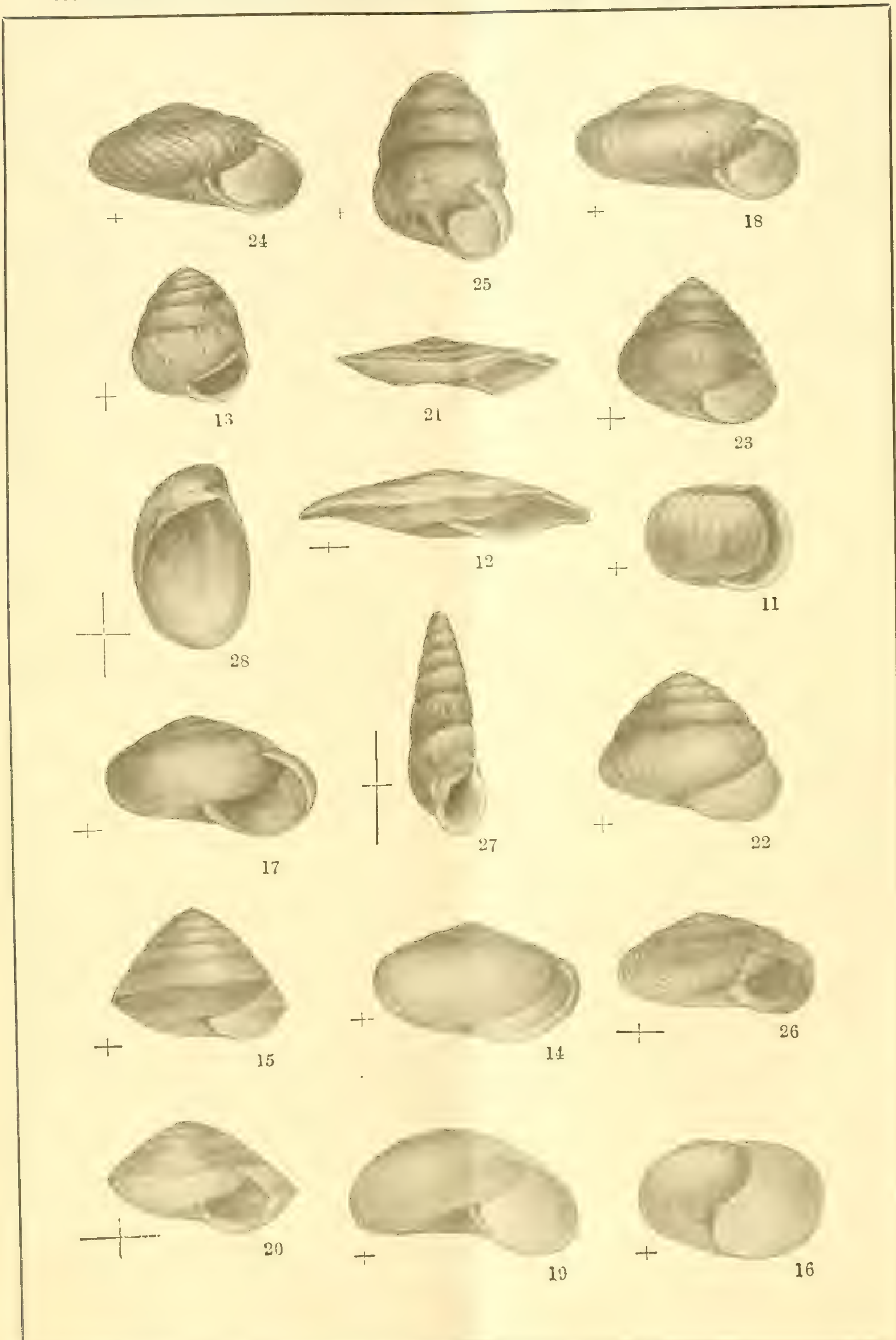
岩川友太郎

海底採集　海中に貝類を採集せんには、自ら相當の器械を要するを以て、沿岸採集の如く容易ではない。然れども海產の完全なる貝類標本を得んとすれば、此の法に依るの外ないのである。余は先づ最も實行し易き手近の方法より說き始めんと思ふが、尙一言述べ置きたいことは左の事情である。卽ち我が邦は四面海を繞らし、津々浦々到る所に漁業は盛んに行はれ、從つて古來種々の漁具は使用せられ、漁師も魚族を獲るには熟練もして居り、又熱心でもあるが、貝類の採集に至りては、彼の海士が水底を潜りて石決明や栄螺を撈獲するとか、一定の季節に牡蠣や海扇を採集する位にて、貝類の漁獲を以て生業とするものは甚だ少ない。是は獨り本邦のみならず、萬國皆然りである。海產貝類は、科學上の標本としては無上の價値を有すれども、食用其の他の利用上に於いては、其の種屬の多き割合に其の價値は少ないのである。斯かる事情あるが爲に吾人偶々沿岸の漁村に至り海底の採集を試みんとするに臨み、其の同情者を得ることが眞に稀である。從つて折角相當の器具や器械を持參しても、これを使用する方法を敎ふることより取り掛からねばならぬやうな始末ゆへ、仕事は中々憶劫である。

手繰綱を使用する地方ならば、吾人これに依りて數種の貝類を採集することが出來、又延繩を使用する場所ならば、往々珍貝を獲る便宜がある。延繩は細き麻繩にてこれを製し、百尋內外の海底に用ふるものならば、其の長さを約五百尋とし、これに約三尺每に長さ三尺許の麻絲を吊り下げ、其の端に鈎を附して餌を着け、これを海底に沈めて一時間許も經たる後、繩の一端より順次に引き


5
1
8
14
2
15
6
10
7
9
3
4
13
12
11

JAPANESE LAND MOLLUSKS PL. II. 日本陸産貝類(第二版)




13
22
21
19
25
16
19a
23
26
16a
24
17
18
14
15

加藤延年著
〇袖珍美本 貝ひろひ　全一册（近刻）

貝ひろひ！美しき想ひの止め難きかな、あゝ波打つ際に踏みけん白砂の跡[illegible]影、永劫の色を湛に千古の情を包む海の[illegible]大なる胸より吐きし秘密める[illegible]趣味の興なる可憐の貝は、[illegible]的題目[illegible]以て面白き[illegible]情操に富める[illegible]者にひろはれ、茲に無限の[illegible]を語る[illegible]。圖[illegible]須つて、最も平易に而かも[illegible]一般の知識を[illegible]羅し、[illegible]兼ねて[illegible]各[illegible]一[illegible]備はらざるなく、實に我邦に[illegible]る[illegible]太より[illegible]に至り、[illegible]世界の[illegible]異たり、若夫れ珍種[illegible]類[illegible]書[illegible]縮[illegible]ば[illegible]全國到所の[illegible]快[illegible]愉[illegible]ものあら[illegible]に愛讀を乞ふ、

〇貝合せ（[illegible]説明附き）　近刻

[illegible]「貝おほひ」[illegible]公卿諸侯の姫君たちに[illegible]は昔、今や坊に[illegible]の科名[illegible]を案[illegible]して[illegible]的符合[illegible]作ら[illegible]符[illegible]に美麗なる[illegible]圖もある[illegible]面白いのみ[illegible]に、[illegible]の知識も[illegible]味と[illegible]與ふることも大なるもの[illegible]るであらう

〇貝類繪畫はがき　四枚一組　郵税共[illegible]五錢

貝類數種を選びて上等の紙質を用ゐ實物大の[illegible]版となし學名、和名、産地等も附記しあり優[illegible]にして高尚なる嗜好に適す

京都市烏丸通下長者町上ル
發行所　平瀬介館

〇廣告
昆蟲世界　毎月一回（十五日）發行

昆蟲世界生れて以來茲に十年號を重ぬる百十三昆蟲に關する專門雜誌にして毎號正確鮮明なる多數の圖を插入し害蟲驅除の指導者となり昆蟲學研究者の機關となり當所の發展と共に益々其改善を加ふ昆蟲を學ばんとするものは見よ農業を營まんとするものは讀め本誌の價値如何世既に定論あり茲に[illegible]々を要せず
定價一部金拾錢　一ケ年十二部前金壹圓八錢（郵税不要）

岐阜縣岐阜市公園内
發行所　名和昆蟲研究所

〇平瀬介館雜誌部 廣告

〇發行　介館雜誌ハ毎月一回二十日發兌可致候
〇前金　介館雜誌代[illegible]年ニ廣告料ハ前金ヲ以テ御拂込被下度候（[illegible]代用一割増）
〇爲替　郵便爲替ハ室町中立賣郵便局宛ニ被成下度候
〇領收證　本誌代金御[illegible]ノ節ハ別ニ領收證ヲ出サズ本誌ノ[illegible]送ヲ以テ[illegible]報告ト可致候
〇前金濟　御[illegible]込ノ前金[illegible]キ候節ハ本誌包紙ニ濟ノ文字ヲ朱印シ御送[illegible]ヲ以テノ表章ト可致候

本誌定價

一部	金貳拾[illegible]	郵税壹錢
六部	金壹圓貳拾[illegible]	郵税不要
十二部	金貳圓[illegible]拾[illegible]	郵税不要

本誌廣告料

五號活字一行（廿五字詰）	金拾五錢
半ページ	金參圓
一ページ	金五圓

京都市上京區烏丸通下長者町北誕前町十四番戸
發行所　平瀬介館（電話九百七十四番）

發行者　平瀬與一郎
編輯者　中瑚末吉
印刷者　川勝靜三郎
印刷所　合資商報會社

大賣捌所
京都　東枝律書房
東京　東京堂
仝　東海堂
仝　北隆館書店
大阪　大華堂

明治四十年一月十九日第三種郵便物認可（毎月一回二十日發行）

明治四十年二月二十日發行　（禁轉載）

介類雜誌

第一卷　第二號

目次

明治四十年三月二十日發行
明治四十年一月十九日第三種郵便物認可（毎月一回二十日發行）

THE CONCHOLOGICAL MAGAZINE

A MONTHLY

DEVOTED TO THE STUDY OF JAPANESE SHELLS.

PUBLISHED BY Y. HIRASE.

VOL. I. MARCH, 1907. No. 3.

CONTENTS.

Notice: The subscription price for Europe and America is $1. 50 per annum. All letters and communications should be addressed to Y, HIRASE, Shimo chōja-machi, Karasumaru, Kyoto, Japan.

◉動物學雜誌

第十九卷
第二百十九號
（毎月一回十五日發行）
（石版圖版二枚附
定價　金二十錢）
明治四十年一月十五日發行

目次

論説

雜錄

會報

發賣所
東京神田區表神保町　東京堂
全日本橋區通二丁目十八　裳華房
全本郷區元富士町　盛春堂

明治十九年二月創刊

毎月一回二十日發行　明治四十年二月二十日發行

東京人類學會雜誌

定價壹部金拾五錢（郵稅金壹錢）

第二十二卷　第二百五十一號目次

○挿　圖

紅頭嶼土人の風俗

○論說及報告

臺灣に於ける漢族の家屋の構造及び家屋の裝置…………伊能嘉矩、中間土器（彌生式土器）の貝塚調査報告（承前）…………八木奘三郎、人類の他動物に及ばざる點及び是れを補足する手段…………坪井正五郎、蒙古語に就て…………鳥居龍藏

○雜　報

口繪說明○幽靈退治の裁判（迷信研究資料）○陸中のチヤシコツ○支那人の想像する胎兒形態○小學校に於ける太古遺物の陳列○早稻田大學歷史地理科學生主催第三遠足會

○東京人類學會記事

例會○入會者○會員轉居○退會者○會費納入者○寄贈交換圖書雜誌目錄

發賣元　東京市京橋區尾張町一丁目一番地　隆文館

委托發賣所　同市本鄉區本鄉六丁目五番地　哲學書院

博物學雜誌

毎月一回發行　一部　郵稅共金拾四錢

第七十八號目次

◎表紙畫　△羊の生態…（寫眞版）

○口繪　△松の解剖…（石版）、△ライオン鼠…（寫眞版）

○卷中寫眞版　△川上氏の通信　寫眞版、△長原氏の年賀狀　寫眞版

○論說　△明治四十年を迎ふ…動物標本社主、△濠の海に於ける發見…理學博士　岡村金太郎、△松…記者、△秋田產蟲類…仁部富之助、△植物學研究の趣味…鳥居傳八

○雜錄　△四十年に因みて…行洞稿、△ヒキ蛙の寒中採集…上野守、遺傳に關する研究…好櫻子、△今蘭山を後訪して聞書…山海子、△竹林中の二現象…自本正光、△千葉縣の植物…蕎張友月、我鄉土の珍草…河野行洞、△梅に就いて…淡々生、△和歌山の植物方言…佐倍牧

○雜報　▲新刊書▲盆栽の流行▲冶金界の大發明▲動物園の獅子▲アイヌ人▲野村彥太郎氏▲蘇と暦術▲生物學青年會▲木村氏の日記▲飲食界の植物誌▲校外生活▲鑛物界教科書▲全土標本の發賣▲新刊雜誌其他數件

○廣　告　數十件

發行所　東京市神田區五軒町一番地　動物標本社

百虫譜

京都故山本章夫先生畫○山本復一翁詩

先生ハ故博物家亡羊先生ノ三子幼ヨリ博物學ヲ修メ旁ラ畫ニ巧也動植物ノ寫生數千品ヲ描ク此圖ハ則其一ニシテ畫家ノ好粉本也翁ハ先生ノ姪又同學ヲ修メ且詩ヲ善クス自圖所觀ノ蟲ヲ賦ス皆寓意ノ作○本集二冊奉書紙彩色摺ノ美本也先般宮内省ヘ進獻　兩陛下乙夜ノ覽ニ供ッ奉レリ詩冊ハ正價金五拾錢畫冊ハ正價金壹圓五拾錢

發賣所　東京　淺倉屋久兵衞、田中文求堂、■■■太郎兵衞　大坂　松村九兵衞、鹿田靜七、青木恒三郎、京都　藤谷鳩居堂、細川開益堂、山田芸草堂、大黑屋太郎兵衞、山田茂助　名古屋　三輪文治郎、三浦兼助　神戶　熊谷久榮堂　金澤　池善平

乃至一尺八寸埋め烈しからざる所は一尺內外埋めて通行路を四尺程あけるなり、安藝郡海田市にては袖簇と稱し、間口五間位にして長さ六十間位に達する破竹を用ゐ、周り五六寸長六尺位にして三尺いけるなり、而して隣りの竹枝と竹枝とを組み合せて連接し、其境界一間位おきて道路を爲すが如し、又草津海田の方法は、簇を設立したる翌年四月に打ち落すなり、故に牡蠣の簇に附着することを滿一ヶ年なり、之より養殖塲に移すなり、而して其秋、市塲に持ち出すものなり、

今他地方に於ける方法を述べんに

牡蠣の石附法　牡蠣の石附法と云へば石を産出することを多き土地に適用せらるゝなり、之を設置するの土地は少しく柔軟なるも害なし、之を設置するの方法は先づ二個の石を一二尺隔てゝ置き、其上に他の石を乘せ恰も橋の如く据え置けば胚は上の石の裏面に附着するなり、暫らくして其生長を見たるときは、其石を轉じて裏面を表面となし、牡蠣の胚をして充分に日光に晒すべし、元來牡蠣は幼少なる時に當りては稍々暗き所を好めども、生長したる後は明くして日光の能く透通する處を好むものなり、斯の如く翌年まで存すれば表面の牡蠣は漸次に成長し、尙裏面に再び牡蠣の胚を附着す、此時に至れば表面の牡蠣を剝離し、再び石を轉じて裏面を上面にす、此方法によれば能く一個の石にて數千の牡蠣を附着せしむることを得べし、然れども石の性質によりて牡蠣の附着することも甚だ少く、之が爲に剝離の際破損することも甚だ多し、故に此法の適用は稍々限りあるものなり、若し扁平なる石を得ることも能はざれば、數個の石を成るべく不規則に五六寸乃至一尺位の高さに積み、可成間隔を存し胚の附着に備ふべし、斯の如き方法は風浪の害少き處に行はるゝものなり。

雀貝（夫木抄）

波によろ竹の泊のすゞめ貝うれしき世にもあひにけるかな

あわび（山家集）

岩のねにかたおもむきも波うきてあわびをかつぐあまのむらきみ

かたしかひ（よめのさらとも云ふ）　藤原康光

いちじまや二見の浦のかたし貝あはで月日をまつぞつれなき

あさり　光俊朝臣

いせの浦の汐干にあさりもとめたるかひをぞたもつ身をば捨てつゝ

蛤

山吹をりさしにさせばはまぐりをゐてのわたりの物をみるかな

忘貝（万葉六）　大伴坂上郎女

我せこにこふればくるしいとまあらばひろひてゆかん戀忘貝

櫻貝　堀川院中宮上總

春風のふけ非のうらにちる花を櫻かひとてひろふけふかな

花貝（夫木抄）

えだながらうづまく浪のおらねばやちりちりよする千代の花がひ

第二號正誤

頁	段	行	誤	正
目次			か○の○こ名義考	かひの名義考
海產第三版			21	15
同	上		15	21
十三	上	二	圖版の番號は誤れり、向て右上隅の21を記しある圖を見よ	
十五	下	五	同上、向て右下隅の15を記しある圖を見よ	
十四	上	見出	本邦海介產○類圖説	本邦海產○介○類圖説
十五	下	十四	の後に彩色の記載を脱す、其文左の如し、彩色、內外共に帶白色なり	
二十	上	七	の後に彩色の記載を脱す、其文左の如し 彩色、淡茶褐色なり	
十八	上	十六	圖、B、然○自○大、	自○然○大、
廿八	下	四	○三十九圖クリス○プス	クラ○サ○ス
廿九	下	十一	屆○諸識別表	諸屆○識別表
卅一	下	十一	なめくじ○類	ナメクジ○類
卅三	下	十二	以つ○	以て○
卅七	下	三	一笑○禁	一笑○を○禁
卅八	下	八	なり○まひ	なそ○まひ

例へば佛國に於ては專ら瓦を使用して附着器となせども、北米合衆國にありては其殼を海中に放して之に附着せしむる等の如く國により所によりて相異れり。

我國に於て古來使用せらるゝ附着器は竹なり、此附着器は固定附着器にして其竹は主に「はちく」「くちく」等とす「はちく」は專ら潮流甚だしく風の猛烈なる處に使用せり「くちく」は潮流稍々緩なる處に使用せらる、普通竹は直徑一寸内外なるも、潮流の甚だしき所にありては一寸五分乃至二寸位のものを用ゐ、長さ四五尺に切り其四五本を束ねて篊となす、または其篊竹の長さは必らずしも一定せず、海水の滿ること深き海面にありては長く、淺き海にありては短くして可なり、篊を植うることも其深さは亦一定せず概ね一尺位とす、潮流の緩急及び風の強弱等により更に其深さを增減す、篊は其配列の方法に種々ありて、或は其一列を以て一作をなすことあり、或は二列を以て一作をなすものあり、かゝる作に於ける篊の位置も種々ありて、皆等しく一直線をなして正列するもあり、或は交互配列するものもあり、又篊間の距離及び作間の距離も種々ありて、其短距離のものは一尺位とし、長距離のものは篊間の距離は三尺作間の距離は四五尺のものあり、要するに篊は其方向は潮流を平行に爲し、潮流急なる所にては作間の距離を作りて潮流を自由ならしめ、緩なる處に於ては作間の距離を短くすべし、篊を建つる塲所は潮流のよく交通する附近を良しとす、此理は既に前に述べたる所なりき。

廣島灣の牡蠣篊　先づ今安藝郡二保富村淵崎向洋の牡蠣篊につきて見るに篊は毎年梅雨の候之を設く、其適地は鹹淡水の交迭する斥鹵の地にして流を遮りて之を設く、其法は四五寸廻りの竹を四尺許りに切り、縱（潮に從ふを云ふ）の垂を一尺乃至二尺とし、橫（流を遮ぎるを云ふ）の垂を三尺乃至五尺として二三本若くは四五本を一叢に植う、其形恰も[illegible]の如し、蠣の種子を着する時節は年によりて多少の差あれども、大抵毎年七月より十一月頃にして其形狀は泡沫の加く水面より十五分乃至一寸許りの下に漂ひ、潮汐を共に流動し來りて篊竹に附着す、土人之を蠣の潮といふ、九月に至れば方言芽蠣又花蠣を稱し、稍々生成したる蠣苗を見る之を夏附を云ふ、若し夏附せざる年は十、十一月頃に附着し、十二月頃に至り蠣苗を見る之を秋附といふ、然れども夏附せざる年は甚だ稀なり、蠣は二年にして採收するあり、之を二年蠣といふ、三年にして採收するあり之を三年蠣といふ、二年蠣と三年蠣とは少しく其養方を異にせり、三年蠣の養ひ方は中秋の候蠣苗の附着したる篊竹を抽取り、稍淺き地に移し、凡そ四五本を一叢に樹てゝ之を一株とし、一反に歩四十株乃至五十株を列植す（方言にて掛又は「かけし」と云ふ）之を遠望すれば恰も茶園の如し、而して翌年初秋の候又は掛篊を抽き附着したる蠣を打落し、更に稍や深き所に撒布し置く之を池塲を云ふ、其翌年四月に至れば稍々成長す、此時再び淺水の斥地に移し撒布すること前の如くす、之を夏活塲といふ、而して其年七月頃蠣殼を再び除き、九月頃より毎月二三回宛上下に攪き別けて日光を受けしめ、翌年十一月頃に至れば殼肉全く成長す、之を以て三年蠣とす、二年蠣の養方は七八月頃附着したる篊竹も翌年六月頃まで其儘に放置したる後悉く蠣苗を打落し篊地の外部又は他に設けたる養蠣塲に移し毎月上下に攪拌することを三年蠣の如くして、其年の十一月頃より採收す、又蠣苗の附着したる篊竹を翌年十一月頃まで其儘に放置し其後打落して直ちに市塲に出すものあり、共に之を二年蠣と云ふ、二年蠣を三年蠣とは種取篊の儘越年せしむるを否とにより其篊竹の樹方に粗密あるなり。

又佐伯郡草津村にては枝日四尺に切り四寸廻りの「束竹」を二、三本或は四本一所に立て、間隔一尺四方おきて風のあたること烈しき處は一尺五寸

固形物に附着し漸次生長す、我國の經驗によるに五月中頃に種を産つれば、七月には一寸となり、八月には一寸三分となり、九月には一寸六分となり、十月には二寸となるなり、尚三ヶ年平均によりて調査せるものゝ聞くに、殼の長さ一寸五分に至るには六十三日を要し、二寸となるには九十六日を要し、二寸五分となるには七ヶ月を要すと、佛國にては一月に殼の長さ一糎、二月に五糎となり、四ヶ月には十四糎となり、一ヶ年には二十二糎となると、斯の如き相違は牡蠣の最も生長する夏秋の頃に於ける海水の温度の相違、食物の多少、又は海水中に存する石灰の多少に關係するものなり、

牡蠣は何を食するか　今牡蠣は如何なるものを食物として生活するかを見んとするに、牡蠣の胃は身体の割合に比して甚だ大なるものなり、其食物として取るものは動植物にして、動物には原蟲類、蠕蟲類、軟体動物、甲殼類等の胚及び高等食物の化粉海藻類の胞子、硅藻等なり、而して牡蠣の胃中其主なるものは硅藻類とす、嘗て之に付米國にて調査したる所によれば左の如し

動物性、蠕蟲類、原蟲類等五分　植物性、硅藻九割、海藻の細片生殖体等二分　松の花粉等三分

以上なりとす、而して硅藻は其種類甚だ多く、近年の研究に依れば、日本産の牡蠣の胃中より百五十種許りの硅藻を發見したりと云ふ、少しく横道に這入るも硅藻のことを一言せんに、硅藻は石灰質及び硅石質等の箱状を爲す包被中にあり、而もよく運動す、日中は温度高く又光線強きにより水面に浮游し分裂によりて蕃殖す、夜間は水の表面より海底に沈むなり、斯の如く絶えず海中を昇降するものなり、硅藻は常に牡蠣を肥育するのみならず、其味を佳ふるに必要なるものなり、牡蠣は食物を取るに自ら一定の時期あり、通常漲潮の時其殼を開き、潮流によりて海中にある食物を送らしめ之を食するなり、又朝は其胃は多く空虚にして日光の激しき日中に多く食物を取り、夜間に入り其量甚だ減ずるなり、斯の如く炎暑の候食慾最も強盛なるは硅藻日光に感じ易く、海底より海上に其の如く浮動するによりて此時分初めて食するならん、氣溫即ち水の比重等に食物供給に非常なる關係を有す、海水の静穏にして氣候温暖なれば、食物となるべき有機物の生活に依り其生育も宜しく、從つて牡蠣の營養を増進す、斯の如く種々の關係あるにより食物は概ね深海よりも、却つて海岸より一二尋位の處に多しとす、今日佛國に於て盛んに行はるゝ牡蠣の飼養地、即ち「く

れ・る」と稱するものは、此理を應用して建造したるものなり、而して其海水は長く交換せられずして深さも甚だしからざるが故に、其中にある動植物は頗る繁殖を極め、牡蠣も之が爲に天然に於けるよりも、殆んど三分の一の時間を以て、同樣に生長することを得、食物となるべき動植物は只此れの食物を要するものにして、其食物となるべきものは多くは春秋にして有機物を含む泥土中より發生するものなり、故に牡蠣が純粹なる砂土又は岩等の處に多く發生せざるは、此食物となるべき動植物の發生少なきによりて然るならんか

牡蠣の胚の附着器　牡蠣は其胚海中を游泳する一定時の後は必らず他物に附着するが、其物体は直に擇ぶ所なし、只表面清潔にして泥滓等の附着せざるを宜しとす、

尤も普通の牡蠣の胚を附着せしむる物質は木、竹、瓦、煉瓦、介殼、石塊、岩石等なり、是等の物体を使用して製作したる附着器は、其使用の方法によりて可動附着器と固定附着器との別あり、もと附着器は其目的海中にある胚を附着せしむるものなれば必らずしも一定の法則に從ひ何れの土地に於ても施行すべきにあらず、先づ其土地に得らるべき安價の材料を其土地の形勢とによりて、必らず是非の判定を下すべし、

合では去る十六日から十八日迄三日間試みに蜊獲りをやらした、鳥貝は漁船に乘つて例の万牙で海中を掻いて獲るのだが、蜊は干潟で採るのである、十六日の初日の如きは、福江町大字向山の踊鼻から、秋葉下海岸にかけての干潟、一帶「夫れから又新切鼻、松山、古田の「ベサイ」、伊津川の青山等の干潟にさして吾れ先きにと蟻の如く漁獲者の集まつた者は無慮八千人、翌十七日には多少減少したけれど、夫れでも尚五千人は此蜊獲に出かけて來た、十八日は朝來東風に連れて、あの霏々たる雪の爲め僅か出漁者も五十人位に減少したけれども、繁昌は去年に優つて非常に多大である爲め、漁獲者の意氣込みも亦素張しものであるさうな、今年は是等介虫に引換へて魚類は何物に依らず皆無の姿であるから、魚價は非常な昂騰を來し從つて貝類も當分の内は此豐漁に關はらず存外に値段が能くて、目今問屋での買入値段は一斗小粒三十七八錢から、大粒なものになつて四十二三錢位の能い値に買入れるさうな、初日の如き一人に付多きは三斗内外から、少くとも三四升は確かに獲れたさうで二日干潟を漁つて、優に一圓内外の儲けをして居るのであるが、之れで見ると三日間を通じては小賣相場にして二万圓位の蜊は獲つて居るのである、幾何海が廣大でも蜊の方ではこんなに獲られては堪らんと溢して居るかも知れぬ　（仝上）

●和泉灣の牡蠣禁漁

大阪府和泉灣に於ける海產の收穫は約百万圓に達し全國有數なる漁魚區なるが其内牡蠣は一種の特色ありて西洋料理用とし頗る内外人に珍重せられしも近來濫漁の結果絶滅の姿となりしかば岸和田濱、佐野の兩漁業組合にては漁民保護の爲のため本年四月頃より滿三箇年牡蠣の採漁を禁じ繁殖を計らんため近日保護區設置に付き同府に申請すべしと　（海國日報）

●牡蠣拾ひ

これは品川の臺場沖へ小舟を漕ぎ出し竹棹の先へ牡蠣を掻き揚げる一種の器械を自由に回轉し得るやうに装置して海底を掻き廻し岩などに附着するものを採收する呑氣な商賣なり殊に今年の如きは牡蠣の價高く小な盤臺に一杯で八十錢もすれば牡蠣拾ひの收入は小舟を借りる賃錢を拂ひても四五十錢の立前になると云ふ尚ほ是等牡蠣拾ひの採收したるものは深川蛤町また品川の濱川岸等にて賣るを例とする由なり　（讀賣新聞）

●眞珠の騰貴

一兩年この方眞珠の需用著しく增加し流行界の歡迎ますく盛んなるより價格は騰貴一方にて設令形の小にして稍や椿圓なるものにても十二三圓以下にては求め難くその五厘徑位のものにして百圓百五十圓の高値を有するもの決して稀しからざるに至れるが此の流行は單り我邦のみに止まらず歐米の流行界亦これを歡迎し其逸品といはゞ數千金の値ひを生じ隨て天然品は愈々拂底し人工培養品の如きも次第に好價格を生じつゝあるが眞珠の流行は今後益々增大すべき見込なり　（東京朝日新聞）

●安戸の牡蠣

水產試驗場が三豐郡詫間にて養成せる牡蠣の種苗を大川郡引田村安戸池に移植養成しつゝある由は曾ても記せしが其の成績は頗る良好にして發育佳良味亦廣島牡蠣に勝るとも劣らざるの美味ありて此の地に於る牡蠣の養殖はなかくに有望なるが如しと菅原縣技手は語れり　（香川新報）

●廣島の牡蠣

牡蠣の生長に就て　次は附着せし牡蠣の生長を見るに、氣候食物等によりて大いに異なれり、然れども幼蟲のときは一寸の百五十分の一位なるも、胚の固形物に附着する頃は、其殼の長さ一寸の八十分の一乃至九十分の一となるなり、其殼は甚だしく凸面をなし、薄く弱くして充分に生長したるものは其形圓し先づ其下殼を以て

祈り舳艫相啣んで航海の途に上るのであるが、歸は船によつて相違がある、然し大抵は翌年の三月中旬に歸るとしたものだ、航海ば順風であれば四日目で大阪に來るも暴風に逢ふと十日もかゝる、そこで一艘の蠣船が繫留中の收入總高は場所の繁華に據つて相違はあるが平均千八百圓前後で、收入が二千五六百圓、さし引き四五百圓は持つて歸る、蠣は隔日に汽船や汽車で送つて來る、どの船でも一日に八俵位は使用する、一俵の重量は二十貫正味蠣が六升五合ある　（大阪朝日新聞）

●今年の烏貝

今年の烏貝が特別味い譯ではない、又決して今年の烏貝から黃金や金剛石が出ると云ふ譯けでも無い、唯もう非常に蕃殖して、從つて非常に安くて、未だ此先きも非常に獲れる、市中到る處の魚屋は、例の陣羽織に烏帽子被つた樣な奴を殆んど毎日見ない事は無い、全体烏貝と云ふ奴は何の位獲れるものだらうかと調べて見た

△烏貝の漁期は毎年一月十六日から始められる、秋の出水の工合で蕃殖にも種々と差があるそうだが今年は時候が好かつたので其漁獲は實に非常なもので、此處十年間位には先ア無い豐漁だそうな

△烏貝と云ふ奴は萬牙で搔いて獲るのだが、万牙の齒幅は漁業取締規則に依つて一寸二分以上と規定され、小さい物は獲らぬやうにして蕃殖を圖つて居るのが、此んな空前の大漁に遭遇しては、もう委細搆つて居られず、齒の細かい奴をドンドン入れる、若し其の筋で取締らうとすれば、烏貝の漁船は一艘も海へ出られぬことになる位ださうで頼りと當路者は苦心して居る

△先月十六日烏貝漁の開始と共に、四方より集合して來た漁船は開始當日でも七百餘艘に達し、之が各自漁業組合の白旗を押し樹て、舷々相摩し、入り亂れて、獲物の多大なのに狂喜しつゝ持て餘して援助を呼ぶ聲やら、船の衝突やら、船頭の海中に落つるものやら、宛然もう戰爭の樣で、三河沿岸、殊に幡豆郡地先、蒲郡前の海面は此等の漁船を持つて、日出より日沒に到る迄帆影に海を埋め、万牙の爲めに海水は混濁して、泥海を變じ、時ならぬ潮流を作りつゝあるさうな

△五人乘一艘に就いて約四万個、小漁船でも一艘に就いて一万五千個は獲れる、漁船一艘の漁獲高を平均二万個として、一個の價を一厘と見積つても、一日の漁獲高は優に一万三四千圓に上る勘定になる、流石に海は廣大なものだ

△此丈けの澤山な烏貝を何處へ賣るかと云ふと、大概は干物として三河から東京、大阪方面へ絕間なく輸送する、柱及び腸は由來貝類を商ふ事に得意な下の一色へ持つて行く、下の一色から又名古屋へ捌きに來る、熱田停車場前の松傳運送店へ蒲郡の停車場から送つて來て一色の魚杢、魚住等へ中繼ぎをした柱や腸ばかりでも、去月十五日から一斗入りの石油箱二ツ合せの物二千八十餘個を取扱つたさうである

△熱田では如何に獲れぬ此内の一割位いは生身の烏貝で熱田の魚屋から吾々の膳に上るのである、一色の魚德などは此の柱や腸を時雨煮として信州路及び伊賀、大和路へ送つて居る

△舊正月の爲め漁も一寸中絕したから、自然市場の價ひも今日ではいくらか高くなつたが、漁は昨日から亦始まつたさうである、下の一色でも今月七日から開始されたが、此方は極僅少で、三河方面の好況に連れ、其方に漁師が引き連れて行くものが多いさうな、日々たさか例年よりは殆んど二倍に達する、烏貝の漁期は四月の十九日で終る事になつて居る　（名古屋新聞）

●あさり獲り

烏貝の繁殖は莫大であると共に、今年は又蜊の繁殖も大したもので、もう㳍々例の一色から市中にも出廻るであらう、目下で最も此蜊獲りの盛んな處は渥美郡であるさうだ、福江、中山、小中山、清田、泉、宇津江と此の六ヶ村漁業組

雜報

●眞珠養殖會社設立

三重縣東洋水產株式會社の株主及び同縣の水產業關係者の發起にて資本金百萬圓を以て掲題の會社を設立し養殖事業の經營方法は同縣水產試驗場其他に囑托して調査せし上養殖場を志摩郡沿海の適當なる場所に設置せんと目下計畫中なる由眞珠の養殖事業は同縣志摩郡鳥羽町御木本幸吉氏が明治二十二三年頃より苦心經營し箕作理學博士其他の指導に依り漸次養殖事業の成効を見るに至り又志摩郡沿海には天然產の眞珠の產出少からざるが上に同郡沿海の港灣は氣候水深及び潮流の關係上眞珠の養殖に最も適せる場所柄なりと尙會社の定欵、事業計畫等既に主唱者間にて略ぼ決定し居れば近日中夫々設立の手順に着手する筈なりと　（名古屋新聞）

●ボタン原料の發見

南洋貿易に從事する某氏は過般獨領バラオ島近海に多數のタカセ介あることを發見したる由なるがこれをボタン製造の原料とする時は從來主として輸入に待ちし原料たるキヤウ介に比し低廉にして優良のものを得ると同時に海外に輸出する望多ければ南洋に志ある者の看過すべからざる事なるべしといふ　（やまと新聞）

●蠣船

一寸した橋の詰に美しい小意氣な座敷船（猪牙船の一種さうな）を浮べて「蠣何」と記した硝子燈うす暗く板橋に寒い風渡つて時に紅い襷の往來するのも見る、廣島名物「蠣船」は是れである同じ「蠣船」にも古組と新參組との二派がある信濃橋、京町橋、新町橋、九郎右衞門町、高臺橋、常安橋、宍喰屋橋、淀屋橋、難波橋、高麗橋、本町橋東詰、久寶寺橋、千代崎橋、相生橋、櫻橋の蠣船は總て古組で、最も古い歷史を持つて居る、新參組方は大江橋、天神橋、平野橋、本町橋西詰、大渉橋、筋違橋、三池橋の七ヶ所で之は新しく加はつたものである、そこで古組の來歷を聞くと、百五十年も以前から大阪に來た者で當時河中に杭一本打たうと云つても、會所の手合が喧しく差止めたものであるから、隨分大困難であつたのを、何でも今の高麗橋附近に出火のあつた際、東詰に繫いで居た蠣芳と云ふ蠣船の親爺が今にも類燒せんとせし金札を早くも船に持込んで、危く類燒を免れた功に據つて、杭を打つことも免され、蠣船を繫ぐ事も許されたのであると、古組中の老人はきゝ傳へて居るさうな、繫留場も大川筋は河川取締法により、東西の横堀川は準河川法に據つて居るが、その他の枝川は河川法に據つて居らぬ、枝川は五箇年の契約で借りて居る、大川及び東西の横堀川は一箇年の契約で大川、東西横堀川は一坪一圓三十錢の使用料を徵收され、枝川は一坪一圓十錢、大抵の蠣船は二十五坪位を使用して居るので每年府に收める使用料は、總で四十圓位になるげな、年によると新參の蠣船が場所爭ひをする事があるが彼等仲間には相當の規則も設けてあり、蠣萬は何處、蠣清は何橋と極つて居るから每年[illegible]の競爭はない、[illegible]には先づ管轄區役所の手を經て市役所に屆け出で最後に府廳の許可を得るのである、同時に水上警察署の許可も受けねばならぬ、古組は前云ふ通り先祖は百年も前から大阪に來て居た者の子々孫々で、先づ蠣船の元祖であるから新組は五十年程前から加はつたので、誰云ふとなく新參組と云ふのである、古組の蠣の產地は廣島縣佐伯郡草津村で新組の產地は安藝郡仁保島村と極つて居る、蠣の產地から異つて居るのは珍ぢやないか、古組の中にも櫻橋に繫留して居る蠣吉は本名を松本元五郎と云つて、古組中での古組であるので同人仲間でも顏が賣れて居るさうな每年國を出發するのは十月上旬で暦を調べてよい日を選むのであるが、出發の當日はドラ鐘をヂヤン〳〵續打にしお神酒を戴いて海上の無事を

雑録

Eulota (Euhadra) senckenbergiana, Kob.

Eulota maekensii, A. Ad.

Eulota sieboldiana, Pfr.

Buliminus reinianus. Kob.

Clausilia tau, Bttg.

Helicina japonica, A. Ad.

Succinia lauta.

なめくじの褐色なるもの、黒色にして背上に瘤を有し其側部に大なる呼吸孔を有するもの、以上二種を産するも未だ種名を詳にせず

○蝸牛の童謡（二）

備中乙島村（樋口柳三郎氏報）

でん〳〵でんぐるま、角をだせはやせ、早島のさきで、簑も笠も買ふてやろ、

同上（同）

でん〳〵、出たりはいたりしやーれ、岡山のせどて布一反買ふてやろ、赤い紐つけてやろ、

紀伊田邊（矢野平次郎氏報）

でん〳〵みのじ、でにや尻つめろ

同熊野串本港（同氏報）

かたじでへ〳〵、でにやしりつめろ、

陸奥六戸在（白井毅一氏報）

角だーし、角だーし、角をだきながら、うぶ(汝)ゑ(家)こ打毀す〳〵

同上（同）

角だーし角だーし、角をだきながら、庄やどんさこもわーろ〳〵、

磐城（小野徳治氏報）

べーこべーこしんぺーこーつーのーだしてみせろ

羽後酒田（越島幾久太郎氏報）

かさつふりめーめー、銭百くれつさけ、角だーしてめーせれ、めーせれ、

下総海上郡（服部耕雨氏報）

おば〳〵おばらか（おばは蝸牛の方言）家が焼るから、棒を持つていて來う、鎗をもつて出て來ふ、出なけら焼るぞ、

長門（小林長輔氏報）

まお〳〵ー〳〵、角を出せ子を出せ、角を出しや、刀を一本買ふてある角出さんにや、尻から火をつけるぞ、

播磨（大上宇一氏報）

でん〳〵でんのむし、でにや、尻にやいとしやう、

伊豫西條（岡本眞知氏報）

でん〳〵で虫、で原の原で、鬼がでゝ、舞よるぞ、そのまでゝ舞はんか

伊豫松山（同氏報）

でーんでーんでんでんの虫でにやかまぶちわる

Littorina brevicula.	大森	多
Pyramidellidae.		
Pyramidella sp.	品川	少
Scalaridae.		
Scala anguste, Dkr.	品川	最稀
Naticidae.		
Natica ampla, Phil.	大森	多
Natica powisiana, Recl.	大森	少
Natica sp.	品川	多
Nassidae.		
Nassa festiva, Powis.	品川	多
Nassa japonica, Adams.	品川	多
Eburninae.		
Eburna japonica, Reeve.	品川	多
Neptuninae.		
Siphonallia cassidariaeformis, Reeve.	品川	稀
Melongeninae.		
Hemifusus tuba, Gmel.	品川	多
Fusinae.		
Fusus perplexus, A. Adams.	品川	多
Purpurinae.		
Purpura tumulosa, Reeve.	品川	多
Rapana bezoar, Linn.	品川	多
(追加		
Lithophaga sp.	品川	稀

採集の範圍は僅々二里未滿なるも其數實に二十九屬四十種に達す此他磨滅鑑識に堪へざるもの及未見出の者を合すれば百餘種にも達すべし願くは追加示教の榮を賜はらんことを

米澤産陸貝目錄　　仝人

當地産陸貝の調査甚不充分なるも余の知る所を列記せば左の如し

Arca granosa, Linn.	品川	多
Arca satowi, Dkr.	品川	多
Arca subcrenata, Lischke.	品川	多
Cardiidae.		
Cardium papyraceum, Chem.	品川	多
Veneridae.		
Meretrix meretrix, Linn.	羽田	多
Cyclina chinensis, Chem.	大森	多
Tapes Sp.	品川	多
Tapes philippinarum, A. & R.	品川	最多
Tellinidae.		
Tellina nasuta, Conrad.	品川	多
Tellina inquinata, Desh.	品川	多
Mactridae.		
Mactra sulcataria, Desh.	羽田	少
Mactra veneriformis, Desh.	品川	少
Myacidae.		
Mya arenaria var. japonica, Jay.	品川	少
Solenidae.		
Solen gouladii, Conrad.	品川	最稀
Scaphopoda.		
Dentaliidae.		
Dentalium octangulatum, Don.	品川	最稀
Gastropoda.		
Trochidae.		
Trochus labio, Linn.	品川	稀
Neritidae.		
Nerita sp.	羽田	少
Cerithiidae.		
Cerithium sp.	品川	少
Littorinidae.		
Littorina sp.	品川	多

學の進歩著しき時代にありては其集散の原因と抑留蕃殖の法等學理的に研究するを得べきか聞く所に因れば此貝は其蓋を開きて帆を爲し巧に海上を馳驅すと云説あり果して然らば彼の蛸舟と其性質を同ふする者の如し此故に何か意に適はぬ事あれば一令の下に全群帆を揚げて去り一顆を止めず貝仲間のストライキを行ふに似漁夫も此が爲に唖然爲す所を知らずと云右板屋介採取は余か實地見聞する所に就き林氏の談を補ふ

右板屋介は我邦沿海各地に生産する事あるも其集散蕃殖の摸様は悉く知るを能はず然も山陰地方は大抵此と同一なり

品川産貝類目録

羽前 松島克生

何を以てか本誌の發行を祝せん親友大上宇一氏の二號誌上に記載せられたる注意に基き一二地方の目録を掲げん万一埋草ともならば幸甚、左に記載せるは余が明治廿九年三十年の二ヶ年間品川大森羽田附近に於て採集せし目錄なるも調査甚不完全なるを以て其一部の目錄たるに過ぎざるべし

Lamellibranchiata.

Ostreaidae.

Ostrea gigas, Thunberg. 品川―大森 最多

Ostrea denselamellosa, Lischke. 品川 多

Anomiidae.

Anomia cytarum, Gray. 品川 多

Pectinidae.

Pecten laetus, Gould. 品川 少

Mytilidae.

Modiola senhansii, Reeve. 品川 最多

Arcidae.

Arca obtensa, Reeve. 羽田 少

不便と見ゆるものゝ偶共棲を許すの最大必要となり、環虫も亦榮螺の生命と共に終始し、榮螺の死すると共に自ら死せざるを得ざるものなれば、相倚り相扶けて能く之れを保護するものならんか。

板屋介の話

玄堂

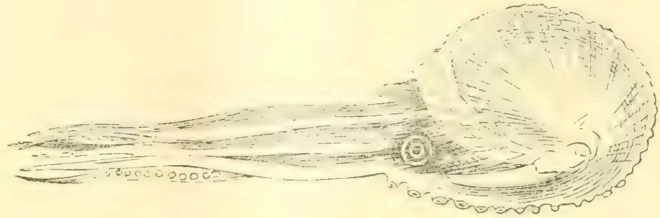
介類雜誌第一號林氏海の底の談話に帆立貝の表目顯はれたるも惜しむらくは詳細の説明を欠きたれば聊之を補なはんと欲す

余は鳥取縣因幡國に生れ濱海地方に人となりたれば凡四十年前板屋介(一名帆立貝)の獵取を面たり見聞せしとあり帆立貝は支那人之を海扇と稱す其蓋の扇に似たるを以てなり此貝は毎年期節を定めて來集するものに非ずして大抵七八年或は二三十年を隔てゝ來集することあり其來るや因幡及び伯耆數十里の間に充滿し海底を埋め舟行を妨ぐることありて恰も珊瑚島にも似たるところあり漁夫は鋤簾を舟に釣し縱橫馳驅して掻き集め或は鋤簾を手にして直に掻き取るともあり其貝を剝くは多く女子にして殼中に身と膜と液と糞とを藏す身は乾して之を支那地方に輸出し膜は生乾共に食ふべし身は甘くして毒なく之を燒き之を煎之を酢漬となして食ふべし其用方太だ博し其貝殼は因幡伯耆の海岸數十里の間に累なり之を望めは皚皚たる雪山の如し之を燒て石灰に製造し得んも漁夫は夫迄に手は行き屆かざりし又之を撫ひて竹柄を付け貝杓子と爲し各地方に販賣する者あり其利益も亦少なからず

板屋介集合の期は大抵春より夏に渉るやう思ふ其滿期に當りては男女之に從事する者沿海村落其幾千人なるを知らず又駄菓子商煎賣屋の類四方より集まり一時繁閙を極む其狀宛がら鯨を陸揚する時の摸樣と異らず而して此板屋貝の性質たる氣候と汐合とに因り忽來り忽去者にして長く其地に止り蕃殖する者に非ざれども現今の如く科

に海水を入れたる中に、放ち飼ひしに、直ちに、底に沈みければ、窃に傍より窺ひしに、頓て介は浮き出、殻の水を吐き棄て、自由自在に游泳せるが、人影映ふか、人聲すれば、直ちに、皮を伸ばして介を包み、底に沈みぬ、是れ物に觸れ、介の破損せんことを恐るゝが爲めならんか、實に不可思議の働きあるなり、平生は何處に棲息するや詳かならねど、或書には、津輕北海に棲息すと見えたり

茲に掲げし貝蛸の圖は恰かも其の航行し居る所を示せるなり



さゞゑと一種の環虫類との共棲

大上宇一

伯州及び因州の海濱に多きものは、海扇、榮螺、ばい等なるが、此内さゞゑは、爪あるもの極めて多く、爪なきもの極めて稀れなり、而して、往々、其の外面爪の見へざる迄、砂を附着し、一見、螺類とは思れず、唯だ圓き砂塊と見誤まるゝものあり(尤も口邊には砂なし)、是れ何故ならんか、若し此の圓き砂塊を取りて点検すれば、微細なる一種の環虫類、砂の細管を構成し、十重二十重に。螺類の外殻に附着し居るを見む、斯くの如く砂の細管を荷ふは不便甚しと思はるべく、所謂、だちん取らずの重荷持なるの觀ありと雖、仔細に研究すれば其勞を償ひ得て餘りあるを知るなり、何ぞや、若し赤裸々に其体を現はさば忽ち獲物となつて了るべきに、かくて螺類の砂中より這ひ出るや、宛然圓き砂塊の如くにて、外敵の襲來に對し生命の保護上、非常の効あればなり、されば

補版（第一版）

1. Colliastoma unicum, Dkr.　エビスガヒ
2. Euthria ferrea, Reeve.　カヂコデ
3. Turbo coronatus, Gmel.　スガヒ
4. Chlorostoma carpenteri, Dkr.　コシダカガンガラ
5. Acmaea saccharina, Linn.　ウノアシ
6. Amalthea conica, Schum.　スヾメガヒ
7. Thylacodes imbricatus, Dkr.　ハマカヅラ
8. Chlorostoma rusticum, Gmel.　コシダカガンガラ
9. Haliotis aquatilis, Reeve.　アワビ類
10. Tapes philippinarum, Ads. & Rve.　アサリ
11. Septifer bilocularis, L　クヂヤクガヒ
12. Chlorostoma nigricolor, Dkr.　クマノコガヒ

◉蛸舟の話

能登岬　姫島鮑夫

予の居所は、本土の北陬、日本海に面せる地にて、汀を洗ふ波の音、偖ては、水面に遊ぶ鷗を友とする磯屋なれば、世に珍しき話のあるべき筈なけれど、霜月末方より春にかけ、稀れには章魚介のはせ寄ることあれば試に其の話を紹介せん。

章魚介は其の形状屋形船の如く、白色又は純白色を帯び、章魚其内に潜伏す、游泳する時は両手を殻の肩より、両足を殻の後より出し、帆の形を成すものなるが游泳航行の自由自在なる驚くばかりなり、然れば、章魚舟の稱あるも亦むべなるかな。

章魚介のはせ寄るは、毎年のことならずして、稀れに前記の季節に於てするものなれば、人の珍とする亦一と通りならず、其殻は極めて薄弱にして、破損し易ければ、如何にも丁寧に取扱ふを要す、往昔、婦人の褄を縫ふに、婦女子、是の介を摸範としたりとか、予嘗つて章魚介の、磯打つ波に打ち上げられたるを拾ひ、盥

貝類は他の海產物と同じく日本より來るものが多い、然し蛤とか蜆などは北淸にもある蠣の生のもの、乾したものは南方から來るのです。江肉柱最も珍重せらるゝもので天津の日本雜貨店などで賣捌て居るが、支那人の間に隨分高價に相應賣行があると云ふことです。

汐干狩

入江の蘆芽ぐむ頃より、潮の寄するところ、姿態橫生して長汀曲浦の眺め云ふべからず、煙るが如く夢の如き海の面の、平和のうねりにはそも如何なる情が籠るであらうか、悠々たるかな春の海や、社會の事務に疲れたる者、胸に痛苦を覺ゆる者など試に春の磯邊に避けなば、大自然は必ず爾を其寬濶なる懷に抱きて力を與へ淚を拭うて遣る。而して汐干狩の遊びはたしかに其一であらう、漫々たる潮、一たび退き去りては遠く其床を現はし、平生秘め藏くせる數多の貝類を遺して人の拾ふに任かせ、再び寄せ來ては右に左に縱橫膠着せる遊船を浮べて、今や捗り盡くして、坐ろ疲勞を思ふ士女の氣を新にし、凱旋者の如くして歸らしめる。かくて日頃傲慢と衒氣とに充てる人々も頑是なき自然の小供となりて遊べ戲るゝ所、如何に淸新の趣致が躍るであらうか。

攝津住吉の浦や、和泉堺の濱などは昔から名高い所であるが、東京灣も中々盛だ。只此等の名所は恰でお祭騷ぎの樣なもので三味線や太鼓の囃で半ば興を扶けるけれども汐干狩の眞味は却つて他に在るので、何れの海岸でも享け得らるゝのである。家族打連れ、朋友相携へて一たび春の海と親しむ時、云ひ知らぬ味は、そが遺せる諸種の貝類の多きが如く充分に了得せらるゝであらう。今や汐干狩の期節も近いことであるから各地方に於て拾ひ得る貝類を選び、其種名と和名とを擧げて讀者の參考に供し、聊か興を助けたいと思ふ。

るのは乾したものである。

其料理法は色々あるが、支那人は日本の様に決して生では食しない、何でも煮たものでなければ危險であるものとして嫌ふのです。且つ煮立の温かいものを尊ぶのだ又貝類は日本の如く煮しめとしては一般に食しない様である、(尤も近來罐詰のを食する風があるけれども)重に吸物として用ゐるのが多い、吸物と云つても日本の様に御椀の中へ一つ二つ浮かすのではなく、蓮根筍茸類とか云ふ他の材料と共に細かくきざんで、混ぜて、之を芝蔴油(ごまのあぶら)(ツマユー)でヂャ／＼といり上げ、酒と塩と少しの砂糖とを以て煮るので、日本の如く醤油(チャンユー)は使はない。之に体裁と香氣とをよくする様に、菊菜(トンツアイ)白菜(パイツアイ)菠薐草(ポーツアイ)韮(チユーツアイ)等の湯煮たのを浮かして、成るべく原色を失はない様に、而かもスープの味のよい様に料理するのが、最も料理人の注意する所です。さて之を大丼の内へ入れて、卓の眞中に置いて、四方から日本の箸の二倍位もある長い箸でとるか、又は陶器製匙(ティヤオカン)ですくい上げて食するのです。下等社會ほど味がからく上流ほど甘いのは日本と同様ですが、支那では客の前には必ず二三の小皿が各並べてあつて、其中の一皿には上等の醤油がついであるから、若し料理が甘すぎたら之で加減して食すると云ふ至極調法の仕組に出來て居るのです。貝の肉でも貝柱でも必ず細くきざんで料理するので、圓々のものは使はない、さうして極めて軟かく煮るのが支那料理の長所である。

貝は又湯煮て其儘大道で呼賣して居るものもある、之には蠅などが一ぱいにたかつたり塵埃がついたりして頗る不潔である、下等社會のもの貧民の小供などが之を小買して食するのを往々見受ける、此外貝は如何樣に料理しても必ず芝蔴油でいり上げるのは他の副食物と全樣である。

が著しくなつて居るのを注意せらるゝでしよう」

第三圖は、墺匈國內の一州スラボニアにある一盆地の第三系の湖跡の各層から掘り出された田螺類の化石で、圓田螺の樣な一番から榮螺の樣な結節のある十七番まで順次に、少しづゝ變つて行つて、殆んど完全に進化の徑路を示して居ます、其中の七八種は、此化石の一組がまだ揃はない前に全く別種として記載されましたが、其中間の者が續々發見せられまして、ウィーン府のノイマイル教授が說明されました通り、此等の標品は皆田螺の一種の變種であると云ふことが明かになりました」

右の三例は大抵の進化論の本に引てありますが、猶ほ此外にアンモン石や蝸牛の變形に關する研究、貝塚の貝と今日の貝との比較、移植した貝の變形など色々面白い研究がありますが餘り長くなりますから他日に讓ります」

雜錄

支那の貝料理

在清　土房居士

支那人は概して日本人よりは食事に贅澤である。酒池肉林とか、山海珍味とか云ふ熟語は、何れも支那から來たものだが、支那人の饗應には必ず料理の中に海產物のない事はない。就中燕窩（イエンナー）魚翅（ユイツ）海參（ハイサン）などは何處でも尤も尊重せられて居る。如何に下等社會の料理でも、苟も人を御馳走することゝなれば、右の中一品位ない事はない。中流上流などになると、日々の食事には海產物が必ず料理の內に這入つて居るのです、從て貝類は最も支那人の好む所である。江瑤柱（チヤンローチユー）を始めとして、鮑魚（パオイユイ）蛤子（ハンヅ）等は其季節々々に食する許りでなく、之を乾して貯藏して置て時々賞味するのです、日本から輸入す

丈が高くなり、形もずつと大きくなつて居ますが、IIの行の貝は餘程都合の悪い境遇に在つたものと見へて餘り進化して居ませぬ、又Iの行は三つの枝に分れて、其中二つの枝の貝は極端に變化して居ます」

此四本の系圖の樹は、何れも其幹から出て居る澤山の枝と小枝とを剪り去つたもので、實際スタインハイムから掘り出された中間の貝は、まだ〱澤山あつたけれども、此圖には複雑を避けて、各行の貝の數をずつと減らして、只代表的の者ばかりあげてあります」

第二圖は米國フロリダ州産袖貝の圖で、上の二つは化石で、下の二つは現存して居る種類であります、即ち2と2aとは今日でもフロリダの海岸に住で居る Strombus accipitrinus で2aの方が其模範的の形です、1及1aは其先祖とでも云ふ可き Strombus leidy と申す貝で Heilprin 教授がフロリダ内地の鮮新層から發見せられたもので、此發見は前に述べた平巻貝の研究よりもずつと後の事です、諸君は此四ヶの袖貝の圖を較べて、其螺塔が段々と

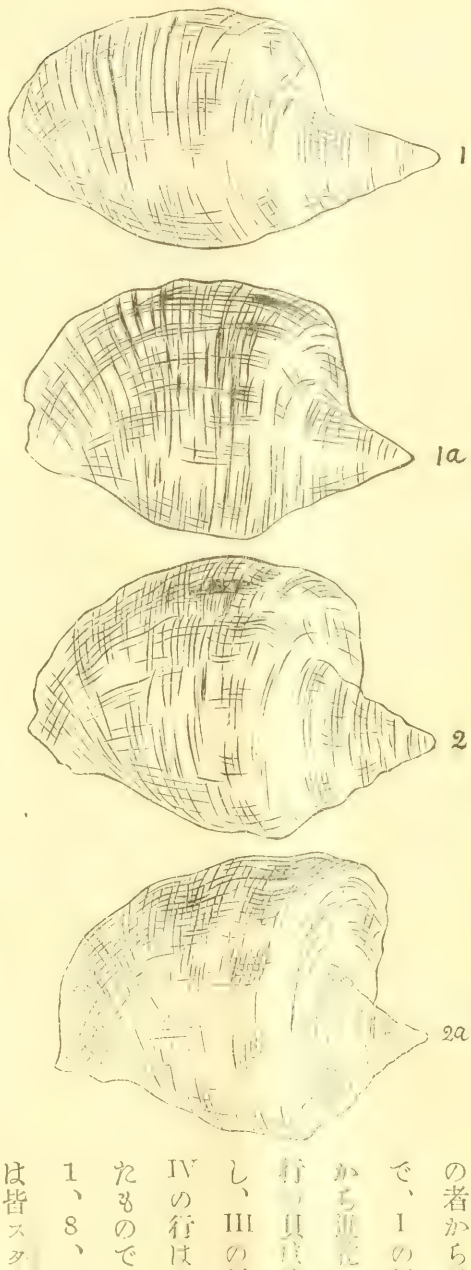
第三圖　田螺の變形　（ハイマイル氏原圖）



低くなると共に、袖（外唇）が段々と擴がり、螺層の結節

比較的に急に出來たものであると云ふことが解つて居るからして、千年を一日とする様な地質學的の永い年代から申せば、割合に短い間に、此圖に畫き出してある様な著しい變化が出來たと云ふことも疑ひありませぬ、又若し中間の標品が無つたならば、此圖の各行の最上層の者と最下層の者とは、誰も別種と鑑定するばかりでなく、

第二圖　袖貝の變形（ヘイルプリン氏原圖）1及1aは化石、2及2aは現存種、



中間の者の中でも、若し甲と乙とが別な場所から掘出されたならば、必ず別種の貝とされたに違ひありませぬ、更に圖に就て委しく言て見れば、I、II、III、IV、各行の貝は皆其行の一番下の者から發達したもので、Iの行の貝は皆16から進化いたし、IIの行の貝は皆12から進化し、IIIの行は8から、IVの行は1から進化したものでしよう、此の1、8、12、及16の貝は皆スタインハイム以外の割合に古い地層から發見されたもので、各行進化の有様は少しづゝ異つて居ます、例之ばIVの行の貝は發育上最も都合のよい狀体にあつたものと見へて、段々と

化の道すぢを示す中間の標品が澤山に掘出されてあります、但し貝類の死殼は代々水の底に沈んで、砂や泥に埋つて、化石になつて保存せられて居るから、之を順々に



第一圖　平卷貝の變形　(Hyatt氏原圖)

掘出して行て、之を其所に今活きて居る貝類と比較すれば其變形の模様がよく解るので、他の化石の研究よりも幾分か容易で、結果が十分であります、百聞は一見に若かずと云ふ諺もありますから、くだくだしく書立てるよりも、こゝに二三の圖を掲げて、一と通りの説明を試みましよう

第一圖は獨逸聯邦の一つであるビュルテンベルヒ王國のスタインハイムと云ふ村から掘出された平卷貝の化石の圖ですが、此所には、昔つと太古、一つの小さな湖水があつて、其水の中には無數の小さな貝類が育ち、其殼が年々砂と一所に湖水の底に沈み、完全に保存されて居つたものと見えます、此等の貝類は何の幸か、ふと掘出されまして、世界各國の老練なる化石學者の手に渡つて研究されましたが(Hilgendorf氏は西暦一千八百六十六年に、Hyatt 氏は一千八百八十年に之を研究せられました)、其研究の結果は大抵一致して居ます、卽ち、上層から掘出された貝は下層卽ち古き地層から掘出された貝の子孫で、此等の地層は

採集の場所に關しては

到處の地採集に適す。陸介は濕氣及び暗所を好むを以て、之を採集せんにはそれ〴〵の產地に於て丸太、木皮、木葉等の下を搜索せざるべからず、多數の種は腐敗せる倒木の中に住むものなれば前述の鋤にて之を破碎すべし、倒木の四周、枯葉堆積せる所は是れ介の好みて棲息する所なれば、かゝる所は精密且徐々と指又は鋤にて搜索すべし、溝渠河流に沿へる草木茂生の場所も亦常に採集の好適地たり、南部及び西部地方は土地乾燥なるため東及び北に面せる山側又は峽谷ほど適當せず

松柏類の林は軟体動物の生活上不毛の地と稱すべく之に反し石灰質より成る地方の堅木の森は理想的採集地なり、又四時水の涸れざる所はそれ〴〵適種の軟体動物を產す、急流にのみ棲息するものあり、靜水にのみ棲息するものあり、溝渠其他停滯せる水中はヒシディアの如き小形の種を採集するによし、夏季乾涸せる林間の凹地には他所にては發見し得られざる種類の潛み居ることあり、沼澤又は川岸の砂原等も小形の種類を採集するに適す（以下次號）

進化論に引用せられたる貝類變形の事實

貝類の研究が進化論に功績（てがら）があると云ふのはどんな事であらうか、亞米利加の地層から、馬の先祖の化石が順次に掘出されて、其蹄の數が四つから三つ、三つから二つ、二つから一つと段々減つて其体軀（からだ）が漸々大きくなり遂に今日の一蹄の大きな馬となつたと云ふことが証明せられたことは諸君の御承知の通りでありますが、高等の動物の中で、進化の路すぢの十分よく解つて居るのは馬ばかりで、下等動物の中には稍多くの事實が知れて居ます、其中でも貝類にはアンモン石だの、卒卷貝だの、田螺（たに）だの、袖貝だのと隨分多く解つて居ます、そして其變

大形の種類を採集するにはポッケットへの出入自由なるべき位の錫罐最も便利なり、大形ヘリックスの夥多なる、一々罐の蓋を去りては入れ〳〵することの甚だ煩に堪へざることは、ヘリックスを入れ得べき程の円角なる孔を蓋に穿ち置くを便とす、かくて罐の頂に自轉車ノワガネ裡の如き薄きゴム片を張り、確乎(しつかり)と緊まる様蓋をし、前に穿ちたる蓋の孔に相當する孔をそのゴムに穿たば、蝸牛を入れたる後、ゴムは其の彈力によりて再び蝸牛の出づるを防がん、且つ罐中の蝸牛が轉々(ごろ〳〵)衝突して破損を生ずる恐あれば、豫め若干の木葉を罐中に充たし、蝸牛の數を増すに従ひ之を除去すべし。産地の異なる介類は之を區別せざるべからざるを以て若干の箱と多數の硝子罎を携へざるべからず

河産の採集には掬器及び出來べくは小さき爬網を用意せよ。掬器は通常銅製(?)にして底に金網を張れるものなり、柄は自由に取代え得る様なせば、必要に應じて竿に付け使用するを得るべし、是れ海岸に於て又は舟にありて採集するとき必要なるのみならず、他の方法にては發見し能はざる多數小介を棲息せしむる砂泥を水底より掬ひ上ぐるとき特に必要なり、此砂泥は手桶に移し、家に歸りて檢査するを可とす、何となれば野外にては往々小形の介類及び珍らしき介類など看過するの恐あればなり、砂泥は晴天日光に曝露(さら)し、其乾きて碎け易くなるを待ち介類を摘出すべきなり、而して之をなすにはかの微細(?)なる種類を檢出せんには普通讀書眼鏡を肝要とす、得まく欲(?)しき多數の種類は水中深き所に住み、掬器を使用すること能はず、かゝる時は小なる爬網を使用すべし、其口徑縦九インチ、横六インチ位のものなれば漕艇の上にて一人自由に使用するを得るなり

終りに注意すべきは脆弱なる介と堅硬なる介とは別々に入れ置くべし、然らざれば罐を持ち廻はる際破損する恐れあればなり

りて、延長或は反曲せり、此屬は尤も支那産のカメーナ屬に密似せり、

陸産及淡水産 軟体動物採集の栞

ブライアント、チーカー氏述

某生大意摘譯

介類採集者が心得べき要項を擧ぐれば

(一)死殼にても之を得るは空手にして歸るより勝る

(二)生殼を得れば死殼は之を得るを要せず、若し注意して採集すれば介骨を發見し得る所には概して其生介をも發見し得べし

(三)凡て介類の多寡は年によりて甚だしき相違あるものなれば採集するに當りては出來得る丈多數を得るを期すべし

採集用の器具に關しては

陸介採集に必要欠くべからざるものはフエリス鋤とす、即ち輕小なる柄の附きたる園丁用鋤を取り、其刄を去りて作り、頂の巾三インチ餘、端に至るに從ひ尖鋭なるものなり、かくて其柄を杖程になせば携帶に便利となる、其用は丸太を轉ばし、朽木を摧き、木株の周圍を堀り返へし、或は枯葉堆積の中を採集するにあり。尙蛇多き地方にありては之を殺すに用うるを得べし

小形の介類を採集するには鉤状採集鑷を必要とす、また小形の種類と大形の種類とを同一容器に入るゝときは塵や土くれなど、混ずる恐れあれば小形のものを採集するにはガラス罎又は木製罎を用意せざるべからず、

採集の際、アルコールに入るれば直ちに死し且肉膨脹すべければ、爾か爲ざるを可とす、乾燥罎に入れて數時間放置すれば肉自殼內に引込み殼孔明かに現はれて試驗をなすに適すべし、而して是れ其特長として殼孔に齒牙を有するプピデイーの如きに於て特に必要なるものなり

アクスタ亞屬、Acusta.

エーヂスタ亞屬、Aegista.

プレクトツロピス亞屬、Plectotropis.

コエロルス亞屬、Coelorus.

トリシヨプリタ屬、Trishoplita.

ブリミノプシス屬、Buliminopsis.

（乙）刺針嚢と粘液腺とを有せず」

クロリチス屬、Chloritis.

モーレンドルフイア屬、Moellendorffia.

ガネセラ屬、Ganesella.

マンダリナ屬、Mandarina.

ユーロク及其亞屬の記載はトライオン氏介類學第九巻にあり、余は今アクスタを別亞屬なりと考ふ」

アクスタは其殼球狀にして、大抵薄く、殼口大きく、唇は薄くして、延長或は反曲せず」

コエロルスに就ては、貴下の貝に關する余の最初の論文を參考せられよ」

トリシヨプリタ屬は解剖上他と異なるも、殼の記載のみにてはガネセラ或はユーハドラと區別すること難し、然れども熟練によりて直ちに之を識別することを得べし」

ブリミノプシス屬に就ては、トライオン氏介類學第九巻を見られよ、該書には之をガネセラ屬中に編入しあるも否なり」

クロリチスに就ては、トライオン氏介類學第九巻を見られよ、日本產クロリチスはトリコクロリチスに屬す」

モーレンドルフイアに就てはトライオン氏介類學及「ノーチラス」雜誌を見られよ」

ガネセラに就ても前に同じ」

マンダリナ屬は殼稍大きく重厚且堅固にして、球狀圓錐形より扁平形に至る、臍孔を有し、或は有せず、最初の二層或は二層半は大なる胎殼をなし、殼口緣は厚くな

普通欠疣幸螺とあり、

第卅二圖及第卅二圖aはリシュケ氏のP. bronni, Dunker. 産地、陸前、淡路、能登、丹後、長門、對馬、長、二寸内外にして、トライオン氏は之を單に本種の充分成長して、結節の發達せし標品なりとし、ピルスブリー氏は之を一變種とす、日八譜のレイシは該標品なるべし、

第卅三圖はリシュケ氏のP. clavigera, küster. 産地、陸前、相摸、長、一寸内外にして、トライオン氏は之を本種の不完全なる一標品なりとし、ピルスブリー氏は一變種として余に通知せられたり」

ツノレイシ岩川、 P. pica, Blainv.

産地、伊豆、薩摩、大隅、琉球、小笠原等、(支那海、フィリッピン、及太平洋の中部にも産すと云ふ)

長、一寸六七分、

形狀、殼は重厚にして、螺塔低く、体層大きく、螺列せる刺狀の結節は頗る大なり、殼口は略ぼ半圓形をなし、内唇は比較的に圓く、前端の短き斜溝は少しく反曲せり、外唇内に齒なく平行せる細隆起螺線を有するを以てテツレイシ等と區別することを得べし」

彩色、表面は帶白色の地に、暗栗色の帶を有し、其帶は延びて帶黃色なる殼口の内外唇に見はれ、栗色斑をなし、外唇内の螺線は黃褐色を呈す」

○日本陸産貝類の分類綱要(第三)

蝸牛科、Helicidae. (陸産第三版付)

此科の諸屬は肉体、殊に生殖器の解剖によりて分類せらる、日本産は二屬に屬す」

(甲)生殖器は一ケの刺針囊(ニードルサック)と粘液腺とを有す

ユーロタ屬 Eulota.

ユーハドラ亞屬、Euhadra.

ユーロテラ亞屬、Eulotella.

長、一寸三四分、

形狀、短紡錘形の重厚なる貝にして、体層に四列、他の螺層に一列の刺狀大結節を繞らし、殆んど金米糖狀を呈し、縫帶にありては大抵磨滅せり、口内には細襞せられたる明瞭の隆起條ありて其先端は齒狀をなし、殼軸は暗昧なる隆起によりて横ぎらる」

彩色、帶黃或は帶白色にして、多少暗栗色を彩り、或は同色の斑紋或は帶を具へ、往々黑色を以て被はれ、外唇緣に廣き帶をなすことあり」

トライオン氏の說によればP. bitubercularis Lam.は單に本種の黑色なる變種にして、外唇緣に黑帶あり、又P. distinguenda, Dunker も亦黑變種の不完全なる標品なるべく、結節低く刺狀をなさず、又P. intermedia, Kiener.（第三十圖）にありては、其結節殆んど磨滅して單に白點を殘し、P. ocellata, Kiener. は其幼形なるべし、然しP. intermedia は變種として存し置くこと便利ならん、別に一變種ありP. alveolata, Reeve.と云ふ、帶白色或は帶褐色にして結節は暗色をなし、口内は帶黃色に褐色の斑紋を有せり」

レイシ、丹連、P. tumulosa, Reeve.

「海産、第四版、第三十一圖、第三十二圖、同ニ及第三十三圖

產地、陸奥、羽後、常陸、安房、相模、播磨、對馬等

長、一寸內外

形狀、螺肋圓く、上部のものは圓き結節となり、外唇薄く、內部に齒なし」

彩色、淡褐乃至暗栗色にして、多少の白斑を有し殊に其結節を然りとす」

ピルスブリー氏は第卅一圖の標品をツムロサの變種プロブレマチカ（var. Problematica, Baker.）とするも、今暫らくリシュケ氏に從ひ該品を以て本種とす、

該標品の和名は、古名錄にクロニシ目八譜に惡辛螺（アザニシ）

長、二寸五分內外

形狀、殼は比較的平滑にして螺塔低く、体層極めて大きく、螺層脹れ、不規則にして、皺狀をなせる生長線と無數の螺溝と相交りて、殆んど粗き布目狀をなし、体層に凡六條、他の螺層に二條の狹き螺肋を廻らし、肋內に点々微結節を刻し、次体層にありては其結節著しきを常とす、体層の肋間には更に細螺肋を有することあり、殼口非常に廣く、半圓形をなし、上下に溝を有し扁平なる殼軸前部の中央には縱走せる淺き凹所を有し、其外緣は往々隆起せり、

彩色、各溝に負かず鐵色にして螺肋は栗色部と白色部と交互して太き点線の觀を呈し、栗色部は常に結節に當れり、口內は帶青或は帶紅肉色にして、外唇內には阻碍されたる褐色或は青灰色の並行線を有し、內方に向ふに從て其色益す淡く、唇緣に至りて漸々隆起し、各々両岐して齒狀をなし、其色益す濃く、上下相融合して、大抵唇緣を黑染するに至る、內唇は肉紅色なり」

トライオン氏は P. inerma, Reeve. を本種と同種なりとなし、テツボラも亦同種なるべしと疑へり

テツボラ、P. rudolphii, Chemn.

(海產、第四版、第廿八圖)

產地、大隅、薩摩、土佐、八丈等(フィリッピンにも產す)

長、一寸七八分、

形狀、概して前種よりも小形重厚にして、螺塔稍高く、螺肋廣く、体層にありては概して二條を數へ肋內の結節高く、外唇厚く、內唇直く、螺層は僅かに肩角を有し、其他彫刻等前種と異なることなし」

彩色、總て前種に同じ」

テツレイシ亞屬、Thalessa, H. and A. Adams.

テツレイシ、P. hippocastaneum, Lam.

(海產、第四版、第廿九圖及第三十圖)

產地、小笠原、薩摩、大隅、琉球、

は皺あり、未だ本邦産あるを知らず」

テツレイシ亜屬、Thalessa. 螺塔高く、螺層に刺多く、上部に角を有し、殼口は中庸にして、殼軸圓く、前方に結節あり、外唇は内部に小結節を有す」

クリフレイシ亜屬、Stramonita. 螺塔高く、螺層は簡單なるあり、或は結節狀を呈せるあり、殼口は中庸にして、前方延長し、殼軸圓く、前方は簡單なり」

チヤミボラ亜屬、Trochia. 諸螺層は深溝によりて分たれ、内唇は厚くして、凸く、脈を有し、殼口は極めて短き水管溝を有す」

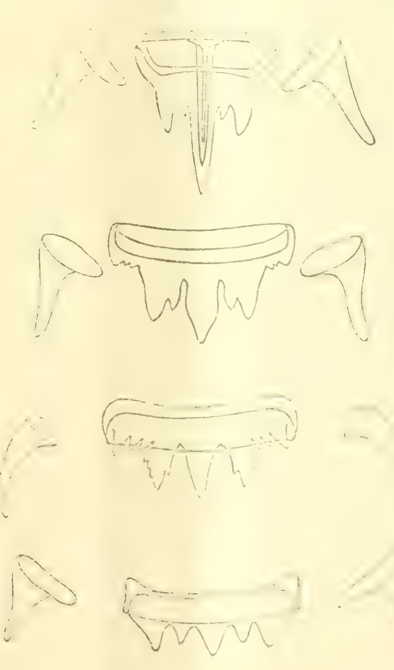
ナガチヤミボラ亜屬、Polytropa. 螺塔尖り、螺層は葉狀或は結節狀をなし、内唇は扁平なり、水管溝は小さくして斜向し、殼口は其前部狹し」

クロニア亜屬、Cronia. 殼は卵形をなし、螺塔尖り、殼口は中庸なり、内唇は上部に滑層を有し、殼軸は直くして、其前部は簡單なり」

レイシガヒ屬、Purpura, Brug.

動物の外形は解剖ともホチガヒ屬と異なることなく、眼は大抵觸角の先端附近に位し、水管短く、足は大ならず」第三紀層に屬する此屬の既知の化石凡て四十種あり」

レイシガヒ屬の齒舌



一、テツボラ亜屬、バツラ、　二、テツレイシ、　三、クリフレイシ亜屬、ルスチカ、　四、ナガチヤミボラ亜屬、ハウストラム、

ホソスヂテツボラ 皆川　P. persica, Linn.

(海産、第四版、第廿七圖)

産地、大隅、琉球、小笠原島等(フィリッピン諸島にも産す

て云へり。

コリコリ　ほびの軟骨などを食ふ音に云ふ。

以上は齒の響に用ゐらる

ゴロゴロ　多くは雷鳴に用ゐらる。

ガタガタ　板敷を下駄にて行く響など又清みても云へり。

ゴトゴト　器中に物ありて相摩の音などを謂てと云へり。

ギクギク　屋床弛み歩すればきしみ鳴る音などに云ふ

ガクガク　物の結束堅牢ならざる様などに云ふ。

以上は雜音に用ゐらる

實に上代言語の初期はかゝる形容語に胚胎し後漸く發達して名詞となり更に進みて今の如き許多の動詞を産出したるものにて例へば轟むと云ひ堅しと云ひ軋ると云ふも如上の形容語より轉一轉して成れるものなればカに屬する語の多少堅實の意を有するもの多きは深く異しむに足らず其餘舌音に屬するヌラヌラ、ヌルヌルと云が如き自づと一種の意を表出する等學者宜く各行の音に就きて一一共性の如何を試みなば以て前諸説の偶然ならざるを証するに庶からん

○本邦海產介類圖說　(第三)

レイシガヒ屬　Purpura. Brug.　分類綱要

チツボラ亞屬、Purpura (typical.) 殼は長卵形にして、体層大きく、螺塔は大抵短く、殼口は卵形をなして大きく、前部に一斜溝を有し、殼軸扁平にして、外唇簡單なり」

プルプーラ亞屬、[illegible] 殼口狭窄し、外唇の内部に强歯あり、殼軸は扁平にして、其中央に一二の判然たる螺狀隆起脈を具ふ、未だ本邦產あるを知らず」

トリブルス亞屬、Tribulus. 螺塔低く、螺層簡單にして、体層脹れ、殼口廣く、殼軸彎曲し、内唇凹み、前部

高砂の尾上のかねの音すなり曉かけて霜や置くらん

（こは寒き夜耳なれぬ遠寺の鐘のこうこうと枕に響くをよめるなり）黄金は固よりカネと云はず、必「こがね」と云へり萬葉集に

すめらぎの御代榮えむと東なる陸のく山にこがね花咲く

黄金は古代に在ては砂金の儘價を定めて商賈の取引に使用せしと今も韓國にて行はるゝに異なるとなく後には大小判の如く延板をなし夫より二分金起り二朱金之に次で出でたり是等の貨幣を只カネと呼び出でしも徳川治世後にして之に對へて鐘をツリガネともハンシヤウとも云ふに至れりカネのカシカリと云詞と何等の關係あるとなしかくカシカリの詞出で來し後は今の如く廣く物品の貸借をも云ひあらはすとなりしなり或人の說にカシは仮り出しカリは仮り入りの略なるべしと云へれど仮りは却て借りより出でしとは言語學上爭ふべからざるものなり。

或說に預りは宛て借りの轉なりとさらば前章に價は與ふなりと云ひしは考の及ばざる所あり之も宛て貝にて例へば勾玉一個の宛貝幾干と云しを今の如く略してアタヒと云出でたりと云はん方前考に優れり。

○カ音に屬する形容語の事

俚俗堅体の相摩し相撃つ所の騷音を形容するに多くカ音を以てせり例へば

キンキン　强烈不快なる鋭音を云ふ。

ケンケン　較鋭き音多くは金石の聲。

カンカン　金或は木を撃つ聲濁りて云ふは鍋など響にて鐘聲には澄みて云へり。

コンコン　木を撃つ音なども濁れば大鐘の音。

以上は堅体相撃つて發する響に用ゐらる

ケンケン　歯を軋る鋭き音濁れば自鳴鐘古式などの歯輪の響或は細砂を咬合せたる音となる。

カリカリ　鼠の屋器を嚙じる音などなり鈍聲には濁り

ひ又磁石の南北相互に相引くと云へる物則に暗合せり但し水晶の水生物にして日熱を集むるは眞なれども眞珠の月水を引くと云ふ事は事實上有り得べからざる事なれども理想上の比喩としてかく云へるのみ宜二者の間に別を立てゝ古說の眞味を味ふべし

○女神と龍の事

神話に女神を貝龍等に擬するは其性を借て意を寓するものなり但易に云ふ女の數八は一轉すれば九の數乾に之(ユ)きて龍の位に登ると云ふに在り辨才天女を白蛇など云ふも此類にて姿に貝と屬との兩說あるも此理に出です、姸玉の如き窈窕たる貝の擬人豊玉姫も產に臨みて八尋の大鰐に變じて倜倘委蛇すとあるも竹を握破するが如く苦悶に打勝たんとして顯せる勇氣を形容せるに過ぎず神話は凡て斯の如く釋するときは稍其眞意を竊ふ事を得べし（龍は九九八十一鱗を具へて乾に屬すと云は鯉は六六三十六鱗を具ふるに對して云）

○カ音の事

如上かひの名を構成する所のヒ音の用例並に其本性を論へりカ音の堅實的表章語たるとは金(カネ)は堅素なりとの一語にて足れり東雅に體制上貝と同類なる烏賊(イカ)の釋名に云「イカとはイは發語の音にて、カとは其腹內に甲あるをいひしと見えたり云々。」按に蟹(カニ)。龜(カメ)。石陰子(カセ)の如き外堅の物は貝(カヒ)の名と等しくカに首(ハジ)まるが如きを以てカ音の性用如何を知るに足らん

○貸借と云詞の事附り價の再考

物の貸借をカシ、カリと云へり今其因て起る所を考ふるに是も貝の出入を表章するに始りしものゝ如し卽

カシは　カヒの出(シ)方の中略にして

カリは　カヒの入り方の中略なり

或人曰此カは金(カネ)のカと見ん方大に事實に叶へり如何曰否古書に「かね」と斥せるは凡て鐘のとにて（是れすら金(カネ)の義にあらで高音(タカネ)の上畧なりと云へり）千載集に

天に沖せんとするの隱勢力を有するものとせり茲に於てか鯉は龍門の瀧を登りて龍となるとも云ひ立身出世の吉瑞を具ふる魚なり且男子と云ふことにも縁あればとて五月の節句には百尺竿頭高く鯉の形を揭げ以て其兒の將來を祝するは昔時なべての子を思ふ親の哀情より出でたる吾古き習はしなどいとめでたき。

○三月の蛤の事

こゝに圖するは元祿十年印本居清信がかける繪の內に此圖ありとて骨董集に出だせる古書なり雛の前なる盃上に置きたるはハマグリのカヒなることはさらなり其右方なる二のはがいの形は後の別と稍異なれども貝桶なるとしるし古は雛の檀に蛤貝を用ゐしと諸書に散見せり女子と貝との關係は已に上に云へり昔は苟且のことだにもかくことわりをこめて定規を越ゆることなかりしも世漸く降りて何事も無意義に終れるもの多し蓋蛤は一夫一婦和合の表象ありて同時に婦德を表章するものなり茲には五月の鯉に對へて古の雛祭に蛤を用ゐしことを云ふのみ其詳なるが如きは後日に讓る



○水晶と眞珠の事

水晶は水より生じて能く日火を呼び眞珠は貝より生じて能く月水を呼ぶと云へるは陰陽の所屬其作用を顚倒するに似たれども易に「陰者愛陽」陽者愛陰」と云へるに叶ひ又陰電は陽電を又陽電は陰電を引くと云

○日の神は女性に在す事

離☲の卦たる二の陽爻外にありて一の陰爻中にあり陽爻は剛なり明なり實なり其數は三なり陰爻は柔なり暗なり虛なり其數は二なり卽離は外明にして內暗き象なりされば太陽に黑點あり燈火は內部暗し又其陽の二爻合せて六之に陰爻の二を加へて八を得八は偶數にして女性とす而かも陰の主爻中央にあり故に中女とし又日の神大日孁貴(オホヒルメノムチ)と申し女神に在すと記紀に明なり甲冑以下は凡て外剛內柔なり是又離の卦に配する所以なり

○月の神は男性なる事

日の對月の神なる月讀命(ツキヨミ)は如何にといふに。万葉集に「あめにます月よみ男、まひはせむ。今宵の長さ、いほよつぎこそ」とあり又桂男と云へるも同體なり

○月神を男性とせし理由の事

月を見れば稍明なる斑點あり是日月を金烏玉兎と稱する所以なり日の黑點は見難きも月の白點は明視すべし(天文學者は富士山の如き噴火山の日に映じて强く光れるものなりといへり)之を形容して白兎と云へるのみ月はかく內明の象なれば陽爻中央を占むる所の坎☵の卦に配せり且月は日に對へて水の精なりと云へるより水字の古体を出に作れり但し之と同理にて火字の古体を火に作れるは☲の陰爻⚋を割て左右に置き陽爻⚊を合せて⊥斯の如く置き換へたるなりそを後に人となしゝと猶出を累して㕣などに作れるに全じ

○五月の鯉の事

坎☵の象を按ずるに陽爻中央にあり故に中男とす又中剛外柔なるより之に鯉を配せり是鯉は魚中の長也と云へるより特に之を撰べるものなり扨坎の卦を數ふれば七にして其一陽爻變すれば六となりて坤☷に之(ユ)くの象なり又鯉の側鱗卽鰓下より尾に達する一列の鱗を算するに六六三十六片あり故に六六魚とも稱して坤の位を兼ねたり又坤の卦を立てゝ裏面を見れば乾☰の象なり故に一躍して忽

○豐玉姫と龍宮女の事

海神の在せる所を海神ノ宮といへり舊事記に「城舍崇華樓臺玲瓏」と有り後に龍宮と云ひ女神を龍宮女と云へり夫木集に「契あれば鶏の羽ふきける濱屋にも龍の宮緒通ひしものを」とあり又紫貝闕とも云へり

○貝と龍の事

龍と貝とは形の似るべくもあらねど理想上時に其説を一にするとあり漢書天文志に「海旁ノ蜃氣象ニ樓臺ニ」とあり
ては北國地方にては海上靜穩の時猶舶或は諸の地物の歷然として空中に影ずると敢て珍しとせず傳へ云是海中に棲息する蜃と云ふ物の所爲なりと蓋此説の依て基く所次の如し

山海經曰「蜃ハ一名蚌一名含漿。」

和名鈔に蚌蛤ハマグリ一名含漿とあれば推して蜃はハマグリとすべし或書にオホハマグリと訓めり然るに本草ニ曰。「蜃ハ蛟之屬也。其狀亦似ニ蛇而大也。有ニ角如ニ龍狀一紅ノ鬣。腰ヨリ以下ノ鱗ハ盡ク逆ニ。食ニ燕子ヲ能ク吁ス氣成ニ樓臺城郭之狀ヲ。將ニ雨ナラント卽見ハル名ニ蜃樓ト亦曰ニ海市ト云々」

此説に依り蜃又タツとも訓めり

されば神話の海神宮を龍宮とも紫貝闕とも云ひ豐玉姫を龍女など云へる所以とも推して知らるべし古事記には豐玉姫の産に臨みて八尋和邇而匍匐委蛇とあり此ワニとあるを舊事記には大鰐とあれば印度亞非利加などの大河に棲める鰐と云ふ義なるべけれど字に拘はらず猶龍屬と見るべしされば繪などには龍の形を畫けるもありとありあるに似たりされども其本體は猶成女を表章する貝の擬人たるを失はず其理後に明也

○貝と易の事

かひの名を日或は火に取り其擬人を女性となすとはさながら易説に暗合せり。易の説卦傳ニ曰、

「離ハ爲ニ火ト爲ニ日ト爲ニ電ト爲ニ中女ト爲ニ甲冑ト爲ニ戈兵ト爲ニ鱉ト爲ニ蟹ト爲ニ蠃ト爲ニ蚌ト爲ニ龜ト」

も亦妻をめで、セ或はセコとも云へりホゾに對へて女性のをホドと云へり火門の義なり古事記には陰字を訓めり同書には此字極めて多く日本紀には或は改め或は存せり古人は今の如く此名目を忌憚せざりしにや遙に降りし世にも猶種々の物名に用ゐられたり大和高市郡吉田村に御陰井あり承久記の武人に女陰四郎あり植物に土鬮兒。百部根。茯苓あるなど皆語原一なり著聞集におそくつの繪と云ふとあり此オソは茲に云ホゾにてクツはクボと同義なりと云その意も大方はしるけきのみ

因に云和名鈔に　臍を註して和名保曾俗云倍曾とあるは前と別義にして火ノ磯の義か東坡云「生之根也」其餘ヒ音をヘに轉じて云へる例あり

○貝の一名ツビの事

和名鈔に甲蠃子を「豆比」と訓めり新撰字鏡には蚶ともよみ又螄を海ノツビとよめりされはツビは貝の總名にて此つびのヒもかひのヒと同義にて卽津火の義なり津は集にて船舶の輻輳停泊する處にて貝はかゝる所に多く栖息すればなり又和名鈔に「玉門」をも「通鼻」とよめるは貝の名より轉せしものか此語はツブ、ツベ、ツボなどゝ轉じて廣く貝の名に用ゐられたり例へば田螺をたつび和名鈔たつぶ(日八譜)たつぼ、などゝ呼び土佐の東部にては腰高貝をつべたかがひと云へりこは同地方にて腰の事をツベと云へればなり旁螺をつぼがひなどいへるは殆常なりこは壺の義と見るも大差あるとなしツは又トに通ひて門と殆同義なり

○貝と神話の事

神話にては貝の擬人をば必女性とせり例へば古事記の𧏛貝姫　蛤貝姫の如し舊事記には𧏛を黑に作り或書にイガヒヽメと註せり𧏛は蚶と同義なるとしるし又海神の女神に豊玉姫玉依姫ませり此二神の名はあからさまに貝とはなけれど海神の玉は珠にて珠は貝に依て創めて生ずるものなれば両ながら珠母の義を寓せるとしるし

ン錦。又埤雅ニ錦文如ㇾ貝ノとありされば斐はたからがひの如き文ある錦の美くしきを賞めて云へるなり以てビ音の何者たるを知る貝の美なると錦文と並賞せられたるを知るべし

○氷をヒと云ふ事

氷をもヒと呼べるは其質玲瓏として輝けるに基き轉じて冷もと云ふ作用言起れり雹をヒサメなどいへるは氷雨にて義明なり

○樋をヒと云ふ事

火は明なり通ずるものも亦明なり依りて水を通はす管をも樋と云へり閘門をヒノクチと云ひ刀劔の血漕をもヒと云ひ又鑛脈をもヒと呼べるは皆通ふより轉せし名なり

○ヒ音と女性の事

後宮名目に經水をひと云へるよし見えたり又女根をひと云ふは正字通に「㞓音界女子陰」とありてひは字音なりと云へれど倭名鈔に「吉舌を比奈佐岐」とよめりては火之鼻にて陰頭の名なるも續谷響集に「今も西偏東部ともに女陰をかくいへり」とあるは漸く義の轉ぜしものなり一説にかひのヒは之と同義にてカはか黒き。か弱き。か細き。などのかにて只詞の上の助辭なりとも云へりされどもカは猶堅の義と見るを可とす。此理後に詳なり

○ヒの轉音ホの事

ヒをホに通じ火影をホカゲ火の穂を炎とやうに云へると常にて穂も實は火にて帆も亦同じ語根也共に目に立ち易きに取れり秀は穂出るの義にて衆に抜んずる義なれども是は却てヒイヅルと訓ませたり。前陰をヒと云へるは氣の發する所なりと云へり多くはホに通はせて云へり例へば下腹即肚をはがみと云へるは火上なり此ホは專女性に用ゐれども偶男性に用ゐらるゝとあるにや埃嚢抄に「男をほぞつきたるものをいふとはほぞといふなり」とあり即ホゾは火背にて背は長あるものを云ふ兄又夫を背と呼ぶも丈夫などゝ云ふに同じく賞めて云へるにて夫

介類雜誌　第參號
明治四十年三月二十日發行

○かひの名義考（三）

永沼小一郎

○かひの語原の事

かひは堅靈の義と定むべきか蓋カは五十音中最も剛なる音にして多く堅實の意を表章するに用ゐらる（故に牙音と云）ヒは息の脣に觸れて發こる微音に近き聲にて輕妙の意を表章するに用ゐらる靈は純に高皇產靈ノ尊とある靈にて猶日と云ふが如し是日は宇宙間の最靈なるものなれば義は卽一なればなり轉じて美の表章となる彥姬などの稱是なりされはカヒは次の如く釋するを得

「カヒは堅き殼をもてる靈はしき物なり」

是よりヒを呼ぶ物のくさ〴〵を序て且カ音の實例を擧げて前說を明ならしめんとす人の如きも萬物の靈なる物なれば呼びて日與こと云へりと云ふ卽日の友の義と云ふ

○ヒ音の事

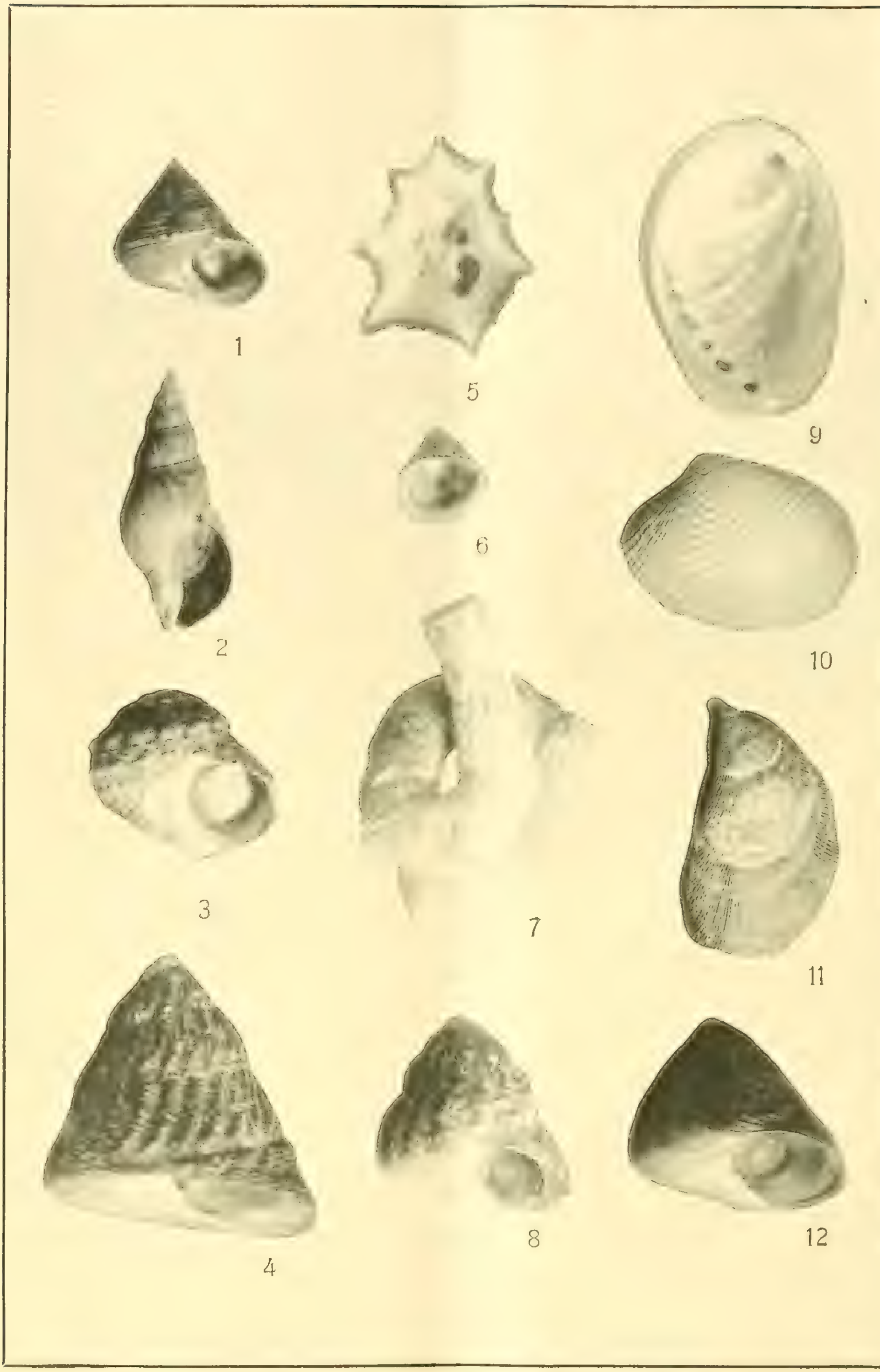
ヒ音を以て日の表章語となせる事は已に之を云へり。地上にて熱と光とを放ち其靈妙なる作用のさながら日に似たるものは大なり故に其名を日に借りてやがて是をしもヒと呼びなすと天と雨とを等しくアメと云ひ水天髣髴たる消息は之を潛く海人をもアマと云ふと同用例たり

○色の最も赤きをヒと云ふ事

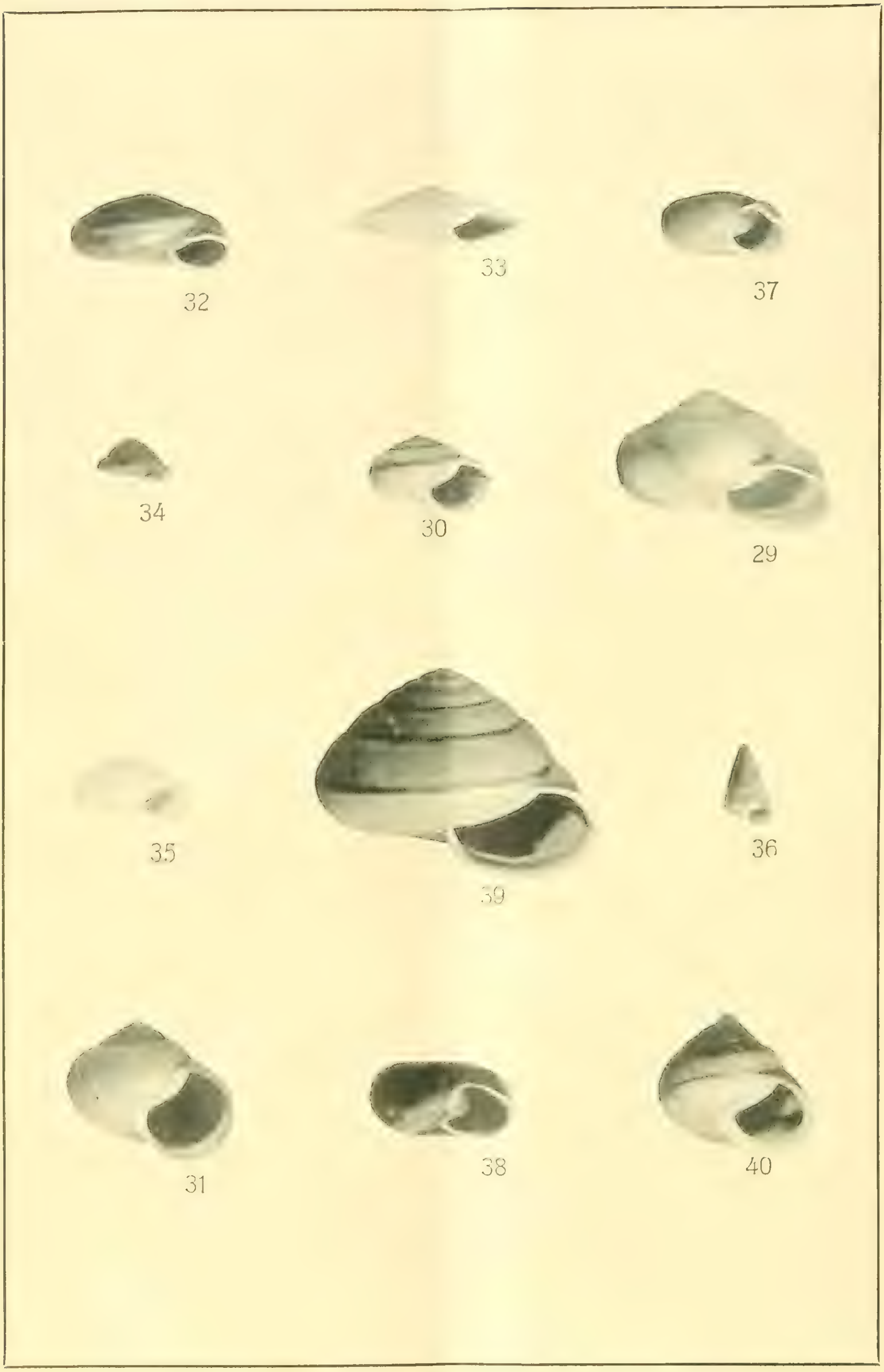
說文に「緋ハ帛ノ赤色」とあり其音非ヒ也同書に「翡ハ赤羽雀」とあり其音費也本邦にて女官の袴に緋ノ袴あり此ヒは字音とするも又火の色と云ふに叶へるはヒ音の本性の依て然らしむるものと云ふべし

○ヒ音を美の表章とする理由の事

彥姬のヒの美を表章するとは已に之を云へり斐の字の義も亦此義に同じ詩ノ小雅ニ云萋兮斐兮成ニ是貝錦ー傳ニ貝錦ハ錦ノ文也と註し集傳ニ貝ハ水中ノ介蟲也。有ニ文彩ー似



1. Calliostoma unicum, Dkr.
2. Euthria ferrea, Rve.
3. Turbo coronatus, Gmel.
4. Chlorostoma carpenteri, Dkr.
5. Acmaea sacharina, Linn.
6. Amalthea conica, Schum.
7. Thylacodes imbricatus, Dkr.
8. Chlorostoma rusticum, Gmel.
9. Haliotis aquatilis, Rve.
10. Tapes philippinarum, Ads. & Rve.
11. Septifer bilocularis, L.
12. Chlorostoma nigricolor, Dkr.



29. Eulota(Euhadra) callizona, Crosse. var. amaliae, Kob.
30. Eulota(Eulotella) similiaris, Fer.
31. „ (Acusta) despecta, Gray.
32. „ (Aegista) oculus, Pfr.
33. „ (Plectotropis) elegantisima, Pfr. var. Cara, Pils.
34. Eulota(Coelorus) cavitectum, Pils. & Hir.
35. Trishopiita pallers, Ehrm.
36. Buliminopsis turrita, Gude.
37. Chloritis aibola'ris, Pils & Hir.
38. Moellendorffia eucharistus, Pils, var tokunoensis, Pils. & Hir.
39. Ganesella myomphala, Mart.



27. Purpura persica, L.
28. „ rudolphi, Chemn.
29. „ hippocastaneum, Lam.
30. „ „ var. intermedia, Kiener.
31. Purpura tumulosa, Rve.
32. „ bronni, Dkr.
33. „ clavigera, Küster.
34. „ pica, Blainv.

本誌定價

一部	金貳拾錢	郵稅壹錢
六部	金壹圓貳拾錢	郵稅不要
十二部	金貳圓參拾錢	郵稅不要

本誌廣告料

五號活字一行（廿五字詰）	金拾五錢
半ページ	金參圓
ページ	金五圓

發行所 京都市上京區烏丸通下長者町北龍前町十四番戶 **平瀨介館**（電話九百七十四番）

不許複製

發行者 平瀨與一郎

編輯者 中堀末吉

印刷者 川勝靜三郎

印刷所 合資商報會社

大賣捌所

京都 東枝律書房

東京 東京堂

仝 東海堂

仝 北隆館書店

大阪 大華堂

明治四十年一月十九日第三種郵便物認可（毎月一回二十日發行）

明治四十年三月二十日發行　（禁轉載）

介類雜誌

第一卷
第三號

目次

明治四十年四月二十日發行
明治四十年一月十九日第三種郵便物認可（毎月一回二十日發行）

THE CONCHOLOGICAL MAGAZINE

A MONTHLY

DEVOTED TO THE STUDY OF JAPANESE SHELLS.

PUBLISHED BY Y. HIRASE.

VOL. I. APRIL, 1907. No. 4.

CONTENTS.

Notice: The subscription price for foreign countries is $ 1. 50 per annum. All letters and communications should be addressed to Y, HIRASE, Shimo chōja-machi, Karasumaru, Kyoto, Japan.

◎動物學雜誌

第十九卷 第二百二十一號

（每月一回十五日發行）

〔石版圖版二枚附 定價金二十錢〕

明治四十年三月十五日發行

目次

論說

雜錄

會報

發賣所

東京神田區表神保町 東京堂

仝日本橋區通二丁目十八 裳華房

仝本郷區元富士町 盛春堂

雜報

ー氏の如きは小笠原産の陸貝に平瀨氏の姓を取つてHirasea又はヒラセイラ等の名稱を附けて之を學界に紹介したることあり又海産介類に於ても氏の蒐集にかゝるもの數千の多きに達したれども海水は全世界に通じたれば陸貝の如く多くの新種はあらざりしが而も平瀨氏の姓を採つて種名となせしもの十數種存在することは明かなる事實なり斯の如く篤學なる氏は日本産三千餘種の貝類を石版圖又は寫眞版等に依りて圖說し或は檢索表若くは目錄等を添へて解說し以て廣く我社會に紹介せんことを欲し去一月より介類雜誌を發行して同好の士に頒ちつゝあり其內容記事等は事專門に屬するが故に今茲に更めて之を述ぶるの要なきは勿論ながら插畫及紙質の如きは頗る鮮明優良にして一見して其金儲主義の雜誌にあらざることを首肯せしむ我等は我動物學界に斯かる眞面目なる雜誌を得たるを喜ぶ

大阪每日新聞評　日本產介類の研究を專門とする學術雜誌にして本號には卷頭に日本海產貝類の圖數三枚を收め本邦海產介類圖說及び備考貝類の採集について、かひの名義考、日本陸產貝類の分類綱要等の有益なる記事あり吾人は斯る眞面目なる學術界に貢献する所多き有益なる雜誌の健全なる成長を祈るものなり

東京日々新聞評　介類の研究を目的として生れたる本誌は平瀨與一郞氏の主幹に係り內容皆な研究の餘に成れる眞摯なる記事を充されあるが其の價値如何は同氏發行の主旨中に「蒐する所の標品已に數千に達し就中不肯の發見にかゝる新種凡そ八百種を數ふ……」とあるに就ても窺知し得べく且鮮明なる圖畫多數を插入しあるを以つて斯學者には有益なる侶伴なるべし

大阪新報評　介類は動物界の一大部門たる軟体動物中の大部を占むるものにしてその研究の有益にして興味深きは詩歌園藝繪畵の類と必ずしも甚しき軒輊あらず而も世人のこれに注意するもの極めて寥々たるは進化學上分布學及び分類學上の一缺陷たるのみならず海事上、地理上、美術上また憂ふべきことなりとの旨趣にて詣りその手引草となり趣味の媒介者となり研究の件侶たらんため發刊せられたるもの是れこの介類雜誌なり生物學的智識の普及を要する今日德る學術雜誌の誕生を見るは喜ぶことなりかし

神戶又新日報評　名和昆蟲研究所長曰く斯學に熱心なる平瀨君今回介類雜誌と題する介類專門の月刊雜誌を發刊せらる實に近時の一大快事と謂ふべしと斯る專門雜誌の出るは我科學界の爲め洵に慶すべし貝類の採集に就て(岩川友太郞)かひの名義考(永沼小一郞)等あり卷末の貝類に關する新聞切拔一寸思ひ付きなり（以下次號）

前號正誤

頁	段	行	誤	正
十	下	圖三	ノリフレイシ(	ノリフレイシ)
十三	下	十四		「(第二十九圖」)ヲ脱ス
同	同	十五		「(第三十圖)」ヲ脱ス
十四	上	一		「(第三十一圖)」ヲ脱ス
同	同	二		「(第三十二圖)」ヲ脱ス
同	同	三		「(第三十三圖)」ヲ脱ス
同	同	四		「(第三十四圖)」ヲ脱ス
同	同	五		「(第三十五圖)」ヲ脱ス
同	同	六		「(第三十六圖)」ヲ脱ス
同	同	八		「(第三十七圖)」ヲ脱ス
同	同	九		「(第三十八圖)」ヲ脱ス
同	同	十		「(第三十九圖)」ヲ脱ス
同	同	十一		「第四十圖)」ヲ脱ス
廿四	上	二	(Colliastom-	Calliostoma
廿五	上		挿畫顚倒シ居レリ	
廿七	下	一四	onlansiis	senhausii
廿八	下	四	goulacii	gouldii

三十四

て其貝殼を買ひ求め（無論肉は捨つるものなりし）より某は其事業の有望なるを認め益々擴張して今にては鮑取女にても卅餘人を使用し居るよし然して其肉は一甲一千圓位の價にて乾して清國に輸出し殼は充分磨き上げて避暑客に賣り付くるの事にてそれも一個五十仙位より二弗位迄に賣れ摸樣の珍らしきものあれば數弗にも上ろものありと云ふ從つて海女の收入も平均一日三圓以上五圓位ありとの事なり目下米國政府は繁殖の爲め小さき鮑は採取を禁じ居れり

（平民新聞）

●廣島の牡蠣（前より續く）

▲牡蠣と瓦附法　石附法に似て尚其効用の勝るものを瓦附法とす、此法は專ら佛國に於て行はるゝ者にして、瓦の形狀は我國の煉瓦に倣て稍長く半月形をなすものなり、牡蠣の瓦に附着するときは之を剝離すること頗る困難なるにより、種々の試驗を經て今日にありては石灰を塗ることを考出せり、之に依れば牡蠣は石灰の爲に容易に瓦の表面より剝離せらるゝのみならず其上にある石灰のために介殼の生長充分に完全となり、瓦に塗る灰石は之に混ずる物質種々あり、我國にては嘗て石灰と角叉とを混じ及び生石灰一分細砂三分、或ひは生石灰一分細砂泥土一分等を混じ之を樽等に入れ其中に瓦を暫時浸し、或は刷毛等を以て瓦の全面に塗る、斯の如き瓦を用意すれば之を設置する前、凡そ二三十日より準備し、其全く乾燥するを待ち之を設置するなり、而して其設置する場所は成るべく泥沙少き所をよしとす、時は縱を立つる時と同じ瓦は分離することなく、或は單に之を併列し、或は斜に之を列する等にて其方法に種々あるなり、瓦に附着したる幼蠣は通常九月或は十月頃に鑿を以て剝離す、然れども氣候溫暖なる所にては翌年三四月の頃剝離するも宜し、既に牡蠣を剝離したる瓦は之を石灰の液中に浸して使用すべし、一物体に附着したる牡蠣は、場所に限りあるに依りて其成長を異にするなり、故に牡蠣を充分生長せしめんとするには、之を附着せしめて剝離せざるべからず、斯の如く牡蠣を離すことは本邦のみならず、外國に於ても行はるゝ處なり、其時期に關しては其土地により多少相異なるものなり。

▲牡蠣の形態　今生長せし牡蠣を見るに、二つの介殼を有し、其大さは互に異なり又形も異にせるなり、其左介類は大且つ厚く、而して甚だしく彎曲し附着するなり、若き牡蠣に於ては左介殼は水中に於て他物に必らず附着するも、生長すれば或は元の儘にて他物に附着し、或は分離して海底の土に落るとあり、右介殼は扁平にして左介殼類よりも小なり且つ厚さも薄し、而して外面は葉狀をなし、裏面は瀨戸物の如きなり、但し肉眼痕のみは、栗色を帶ぶるなり、牡蠣の体は前面の肉轉筋を失ふと後部の發達とに伴ひて体の前面の部分退化せり、ピーダル神經節及び聽覺は足の退化と共に全く退化せり、而してラビアル神經節は甚だ小さく、然れどもパリエータ、スプランクニックは能く發達し、神經系統の主要なる部分をなすなり、心臟及びペリカーヂアルチエムバーは肉轉筋の前方にありて體と殆んど垂直をなす、腸管はペリカーヂアムの上に在るなり、以上は牡蠣の大体に付て述べたる所なり、時間の短きがため十分之を述べ盡す能はざるは甚だ遺憾の至りなり云々（終り）

（藝備日々新聞）

●本誌の批評

本誌初號より三號に至るまでの各新聞雜誌に掲載せられたる批評頗る多く一々爰に掲ぐ能はざれば其の中の若干を茲に抜萃することゝせり

讀賣新聞評　昆蟲學者として岐阜の名和氏を知るものは貝類學者として京都の平瀨氏を知ざるものはあらざるべし氏が我國に於て蒐集したる陸貝の中日本産のみにても七百餘種其内五百餘種は師氏の新發見になるものにしてピルスプリ

雜報

●烏賊甲の海外注文

今回米國紐育市アメリキヤン、キヤッスル並にフミユーレボーン會社より神戸商業會議所へ宛て本邦產烏賊甲の買入れを希望する旨の通知あり該品の紐育港に於ける輸入年額は三四萬弗に達し前途有望の品なりと云ふ因に神戸市に於ける該品の輸出取扱商店は榮町四丁目小島長清方にして輸出に對しての注意事項は左の如し

一、損傷又は汚れなき品にて長サ四寸五分以上七寸以下たる事

一、荷造は堅固なる箱に入れ籾詰として甲を腹合せと爲し橫列する事

(大阪時事新報)

●牡蠣の移植

水產試驗場に於て三豐郡詫間灣にて作りし牡蠣の種苗を大川郡引田村安戸池に移植せしに好成蹟なりし由は曾ても報ぜしが目下移植の好期節なるを以て吉津養殖主任技手は去る十六日より出張目下專ら移植中なるが約十日間にて作業終了の豫定なりと

(香川新報)

●牡蠣養殖試驗

本縣水產試驗場の牡蠣試驗は四十年度も繼續實行する由にて其試驗方法は底面より高さ三尺內外に竹簀を挿入し又同高さに於て松枝を圓狀に植立し又は底面より二尺內外の高さに屋脊狀に枠を組み之れに瓦を取付け以て蠣苗附着の用に供す而して之れ等は主として潮流に併行して設置するものとす(蛤及其他魚類)總て之等の採取を禁じ專ら種介の蕃殖を計る方法なりと

(德島每日新聞)

●松島灣牡蠣の收獲

松島灣內牡蠣養殖場は三十一箇所にして公有水面積八萬六千五百九十坪其收獲數量は一ケ年卅一万千五百五十貫同價格五千四百八十九圓なり

(河北新報)

●淡路の眞珠

理學士西河藤吉氏は去る八日以來兵庫縣今田屬と共に三原郡福良灣に到り眞珠貝養成の摸樣を視察したる上十二日神戸に引還し直に歸京したり其談に同灣の眞珠貝は十年前の發見に係り一度採取したることもありしも一昨年秋之が繁殖を計るべく種貝を植附けたるが其發育頗る良好にして明年頃には採取し得べき見込なりとあり

(大阪朝日新聞)

●蠣の採收

本縣水產試驗場の經營にかゝる三豐郡詫間沖に於ける養蠣は成績佳良にして之れを大川郡安土池に移植し是れ亦た好成績を奏しつゝあるが同試驗場にて本年採取せし蠣は其量百五十石に達し昨今之れを乾蠣に製し又た罐詰とし或は生蠣のまゝ京都地方の需要に應じつゝありと

(實業新聞)

●最も高價なる出品

今回の出品中にて今の處高價の品と聞えたるは銀座四丁目御木本幸吉出品の軍配團扇にして價は二万圓なり此は豐太閤朝鮮征伐の砌自ら用ゐたる軍配團扇を模造したるものにして實物は帝室の御物となれる由なるが大さは長さ二尺にして全部に眞珠を鏤め頗る見事の品なりと云ふされば博覽會事務所にては特に觀覽者の目に附き易き場所を撰びて第二號館內中央大通路の四角に陳列することゝなりたるが其陳列棚の如きも二千五百圓を投じて充分に裝飾したる立派なるもの

(東京日日新聞)

●日本婦人の鮑取

北米桑港近傍なるモントレーは海岸の避暑地にて其邊一帶は鮑の產する事夥しきに米國人は餘り鮑を食用とせざるため一向採取せざりしを今より五年前日本人某その採取を企て靜岡縣の海女にて同地に赴き居りしものを雇ひ入れ日本內地でやる樣に海中に潜り入りて取らしめしところ物數奇な同國の紳士淑女がこは面白しと爭つ

〃 (〃) nigrolineatus, Rve. くしのつめ

〃 (〃) toreuma, Rve. よめがかさ

Scaphopoda. 堀足類

Dentalium Sp. つのがひ

〃 aciculum Gould. すゐつのがひ

右貝類中多額の産あるは、あはび。ひらさゝゐ。にして、數年前までは二萬個以上の漁額ありしが、濫獲の爲め年々其數を減じ、近年にては數年前の半額となれり。肉は食料に供し、主として罐詰の原料となす、當地方にて、ろつがひ大和煮、或は勿來さゞゐ、など稱する罐詰はこれなり、肉身一個の價壹錢壹貳厘貝殼一個の價大なるものは參錢五厘內外を保てり、貝殼は大阪地方に送り、ぼたんの原料に供せらる。さゞゐは産額甚だ尠し。くぼがひの類は、かじめなんこ。と稱し漁民は之を食料に供す、ほらがひは、ねび、等の漁獲の際漁獲する處にして、年により漁額大なるを以て肥料に供す。あわびは、當地方に於ける漁獲物として、名あるものにして年々壹萬圓內外を産す、あはびは鮮食の目的に供すること甚少なく、殆んど漁獲の凡ては明鮑、灰鮑とし幾分は清國輸出の目的を以てボイルド(罐詰)に製造す、貝殼の大なるものは、ひらさゞゐ、と共にぼたんの原料として賣買す、あはびは、まだか。くろ。の二種あり。ばいは舊幕時代水戶光圀公が生産に力められ、なまこ。こんぶ。と共に松前より取寄せ放ちたるものなりと傳ふれども、充分なる繁殖をなさず僅かに種族を繼續せるに過ぎざるなり。

ちくさ貝 (夫木抄)

君か代のためしと見ゆる長濱に
　千種の貝の數もつきせじ

枕貝　大江廣重

船とむるいその浪路のまくら貝
　かひある夢にあはざらめやは

千鳥貝

はまちどりふみをくあとのつもりなば
　かひある浦にあはざらめやは

田螺ト蕎麥ヲ食スレバ死ス　（越前）

あげまき冬至ノ後ニナレバ水管長サヲ異ニス　（柳河）

寶貝ヲ產婦ノ臍上ニ置ケバ安產ス　（東京）

十、貝類に關する和洋古文書の解題も一聚と存候

常陸大津產貝類（第一報）

小松崎三枝

Gastropoda.　腹足類

Turbo coronatus, Gmel.	さゞえ
Astralium japonicum, Dkr.	ひらさゞえ
Murex falcatus, Sowb.	やうらくがひ
Trophon sp.	ころもがひ
Purpura succincta, Mart.	ちゃみぼら
Rapana bezor, Linn.	あかにし
Triton tritonis, Linn.	ほらがひ
Siphonalia kelletii, Forbes.	みがきぼら
Eburna japonica, Rve.	ばい
Nassa festiva, Powis.	あらむしろ
Voluta megaspira, Sowb. var. prevostiana, Crosse.	ひだちをび
Olivella mandarina, Duclos.	ほたるがひ
〃 fortunei, Adams.	はなあやめ
〃 floralia, Duclos.	もちごめがひ
Oliva mustelina, Lam.	まくらがひ
Columbella pardalina, Lam.	まつむしがひ
〃 versicolor, Sowb.	ふところがひ
Natica ampla, Phil.	つめたがひ
Dolium perdix, L.	うつらがひ
Trochus (calliostoma) argenteonitens, Lischke.	ぎんえびす
〃 (monodonta) neritoides, Phil.	くろづけがひ
〃 (chlorostoma) argyrostomus, Gmel.	くぼがひ
Haliotis gigantea, Gmel	あはび
Patella (Helicioniscus) pallidus, Gould.	ゆきのかさ

都合）四ー八頁の附錄あらば研究者には不少便宜と存候

三、從來貝學は昆虫學等に比し稍普及の遲きが如く感ずるは學理と實用の融和不完全の爲かと愚考仕候貝類も重要水產物の一に相違無之殊に本邦の地理的關係からしても充分學理に基きたる實用的の研究あらまほしくと考候右に付時々分類、分布殊に生態上の小論文も在野の人より募集相成　或は懸賞法によりて　審査の上有益なる者は本誌によりて世上に御紹介相成候事も一興かと存候

四、日本の Fauna 中海の者は調査未三分の一に過ずとはある大家の話されたる由貝類抔も僅に其一つかと存候故に研究者は可成廣き方面より可成多數の材料を蒐集せざれば調査も甚不充分と被考候右に付本誌は讀者相互の標本交換の媒介を願度候

五、本誌中更に質問應答の一欄を設らるゝ事も讀者に對し頗便宜かと被存候

六、雜報欄に諸新聞の切拔も相見え候が此上外國新聞の切拔殊に貝に關する新著論文の摘要抔もより一層面白からんと存候

七、紙數にも凡規定あるものとせば記事は可成介類學といふ事に重を置れん事を祈候

八、圖版には時々地方の養貝、採貝等の實況を示すもの又は貝類の生態を示すもの又は應用、加工せられたる者抔も結構に御座候

九、蝸牛の童謠抔も面白く拜見仕候が猶一層範圍を廣め介類一般に關する地方の迷信俗傳（食合に關する者、神に關する者、マジナイに關する者、等）も一興と存候

　一例

ボーズガヒ（方言）Cyclina chinensis 食スレバ禿頭トナル（品川）

法螺ハ百年ノ後、山ヲ拔ケル（岡山）

集の一層精密になる時何所で發見せらるゝかも知れませぬ。現に Trishoplita hilgendorfii, Kob. の如き又は Clausilia mikado; 同じく iotaptyx. の如きも爾か思はれて居たのでありますが他で發見せられましたからな
最も多數な種類は Trishoplita helgendorfii, Kob. でありまして雨晴れた時分など叢の中に入つて木の枝を擧ぐると顆々纍々の觀あることは前にも述べた所であります
面白いことは伊吹產の介類は他の地方の同種類のに比して概して大形なることゝ、ある種類は山麓より頂上に至るに從ひ、螺層の高くなることであります。後者の如きは幾分進化の過程を見ることが出來ると思ふ。
終りに一言すべきことは伊吹採集談とするに關らず龍前山や大谷や板並などを同格に書いて居ることでありますが、これは伊吹一帶の產を伊吹なる總稱の下に保管しある介類につきて驗べたからであります、尙何等學問なく從つて秩序的叙述をなすことの出來ない私が此欄を汚して讀者に背いたことは幾重にも謝する所であります

希望

貝きちがひ

好める道とて毎月本誌の發刊を待兼る次第に御座候猶斯學の爲本誌の爲忌憚なく本誌に對する希望を開陳仕候不惡御宥恕を乞ふ

一、本誌の体裁動物學雜誌に似たるは是又淺からざる因緣と存候就中英文活字に輪廓明瞭ならざる者、誤植のもの時々有之候樣見受候が學名は學術上殊に重要かと被存候につき此所今一層の御注意を得ば本誌は一段の光輝を加ふる事と存候

二、詳細なる圖說を每號御揭載相成候事は我々同好者の隨喜に堪ざる次第に候へ共何分にも多數の事故是が完結は餘程遠き將來と被存候就ては每號誌末に一定の分類に從ひたる日本產貝類總目錄(學名、和名、二三の產地シノニユーム迄もあらば一層好

な様であります

Eulota (Aeusta) sieboldiana, Pfr.

他の產地　羽前、丹後、紀伊、長門、播磨

山の麓で採りました

Eulota (Plectotropis) vulgivaga, Schm. & Bttg.

他の產地　京都、美濃、加賀、越前、播磨

京都附近のに比すれば其形大

Ganesella jacobii, Pils.

山巓の草の中で

Ganesella Japonica var. cavinata, Pils. & G.

麓の村、石垣の椽

Ganesella japonica var. granulosa, Pils.

他の產地　京都、播磨

Ganesella japonica var. Satsuma, Pils.

他の產地　志摩、薩摩

伊吹では不完全なるもの一個採集したばかりです

Ganesella stearnsii, Pils.

他の產地　京都、播磨、越前、

美濃に面した方の、灌木や小笹などの間に居ります、京都にも居りますが伊吹の方は大きいのです

Helicina reini, Kob.

灌木の枝や、岩の面などに附着して居る

Palaina (adelopoma) pusilla var. omiensis, Pils.

藪の中に多い

Trishoplita hilgendorfii var. tenuis, Pils.

谷に多く、木葉の裏、落葉の中などで發見せられます

Trishoplita hilgendorfii, Kob.

恰かも雨の止みたる時でありましたが、頂上の叢間、灌木の枝など、宛がら果顆累々の觀ありました

以上述べた所で

伊吹の特產は Ganesella jacobii, Pils. でありますが、採

Clausilia mikado, Pils.

岩石の間、若しくは落葉の中又は小石の下などに居ります

Cyathopoma micron, Pils.

他の産地　大隅屋久島、日之永良部島、播磨香島村等なり

Cyclophorus herklotsi, Mart.

分布極めて廣くして棲息の場所は谷間がゝつた所に多い

Diplommatina collarifera, schm. and Bttg.

上ること七合ばかり、少しく小徑に分け入り清水湧き石コロ多き所で採りました。

Ena reinianus var. omiensis, Pils.

他の産地　美濃、加賀、越前、何でも岩を見附けるのです、余の採つたのは大抵は岩に附着して居た。而して伊吹産の者は他の産より大きい

Ennea iwakawa, Pils.

他の産地　京都、播磨、鹿兒島

Ena reinianus var. extorris, Branc.

伊吹其他　京都、貴船

Eulota (Aegista) mimula var mimuloides, Gude.

Eulota (plectotropis) omiensis, Pilsbry.

他の産地　越前

此れは餘程種類が少いです

Eulota (Euhadra) peliomphara, Pfr.

伊吹　美濃に面したる方、武藏、駿河、大和、丹後、攝津

Eulota (Euhadra) scaevola, Mart.

他の産地　飛彈、信濃

大谷では只二個獲たばかりでありまして、從來伊吹以南に於て獲たることは少ない、否何處にも少ないのでありましやうが、其寒國に產することは確か

怪影、峯頭に去來して。何時も帽を脱がしめない。それで私は伊吹山なる名稱の由來は、息氣を吹くといふ意味ではあるまいかなど思ふたことがありましたよ。

だが、採集には極めて困難少なき所で、朝、宿を出づれば、夕、星を戴くに及ばずして歸ることが出來ます、況んや、單に登山するばかりの目的なら、登りに四時間、下りに一時間半もあれば充分であらうと思はれます。

陸介分布上此山は餘程特色があります、其種類多き點に於て、將たまたこゝの附近の山野に於て見出し得ざる種類のある點に於て他に卓絕して居ると云うてよい。恰かも昆虫や植物のそれに於けると同じ樣に。

で、何處で何種を採つたとか、如何な風にして居るものかとか、一々お話するが善さゝうなものゝ、それは却つて繁を覺へしむるのみと思ふから、寧ろ表にして、お目に掛ける方が簡にして要を得ると存じます。

伊吹產陸介表

Bifidaria pleidens, Benson.

他の產地　美濃、阿波、

Blanfordia bensoni, A. Ad.

他の產地　北海道

七合ばかり上りて、水が流れて石コロの多き所の草の間で、磨れて不完全になつたのを二個見附けたばかりです、

Clausilia hickonis, Kob.

他の產地　讃岐、加賀、土佐、

山の下腹、石コロを打ち廻へして

Clausilia iotaptyx, Pils.

伊吹を中心として其附邊に產するのです、未だ其他の地方では見當りませぬ

Clausilia martensi, var. reiniana, Kob.

伊吹(谷に多し)

畠の椽のゴミの中で

の案內から始めましやう。

伊吹山と云へば先づ日本武尊が荒神を征伐して毒氣に觸れ給うたことを想起す、何だか一種凄味を感じますが、織田信長が天主教の宣教師に賴み、當時我邦に來往せる葡萄牙人に托して海外の珍らしい花卉藥草等を取寄せ、之を此山に移植えしめ、現に山上の草木多く藥味を帶ぶなど聞きますと、又一種賑かな床しい趣も想像せられましやう。

下車すべき筈の驛名を呼ぶ聲に緜々たる空想を破られたが、なるほど汽車が長岡に着したのです。それから步して上野に至りましたが、其間は僅に一里に足らぬ程であります。

宿泊所は松井半內氏の宅でした。同氏は伊吹の藥草を採つて販賣しつゝある人で伊吹の登山者は、大抵此所に宿泊を乞ふのが常であります。山代（此地には村へ一定の稅金を納めて山番の株を買取る者があつて、登山者は山代として一人につき十錢を拂はしめられる）のことや案內者（登山者五人を一組とし、之に一人の案內者を附けるので、一組の案內料は六七十錢位と思うて居る）のことや、万端の用意を整うて呉れられますから、至極便利です。私方にては此山には前後五回の採集を試み。其外にも土地の人に依賴したり、同地小學校長要石氏に依賴して生徒に採集して貰うたり爲ましたが、其內三回は私が試みたのであります。

試みに山の模樣を述べて見ましやうなら、私が登つたのは、四月五月八月の三回で、四月に行つた時は頂上尙は雪を存し、八月には野花繚亂、天使の群が花環なんか編んで遊ぶなら實に如此所であらうかと思はれる程でありました。何にしろ海拔四千五百尺といふのだから、山勢俊偉、眺望空濶、爽快極りなしですよ、左樣山の三分の一までは樹木がありますけれど、其上になると凡て花卉ですな。若し夫れ雲に至りては山上を神異ならしむるもので、仙姿

ヘリシナ屬 Helicina.（第四十八圖）

ハイドロセニデイ科、 Hydrocenidae. 殼は卵圓形にして、中齒を有せず」

ゲオリッサ屬 Georissa.（第四十九圖）

し、殼口は圓形或は卵圓形にして、臍部に厚き滑層なし、齒舌は紐舌式（taenioglossate）（一列に七齒あり）

ポマチオプシデイ科、 Pomatiopsidae.

ブランフオルヂイア屬、 Blanfordia.（第五十圖）

アスシミニデイ科、 Assiminidae.

アスシミ子ア屬、 Assiminea.（第五十一圖）

リアリデイ科、 Realiidae.

オムフアロツロピス屬、 Omphalotropis.（第五十二圖）

アクメラ屬、Acmella.（第五十三圖）

トランカテリデイ科、 Truncatellidae.

トランカテラ屬、 Truncatella.（第五十四圖）

雜録

伊吹山採集談

中田生

雜誌に採集談を掲載ることになりましたが、多人數で致したことであり、追々有益なる材料も出やうと思ますが、今回は私の伊吹山採集談を出せといふ御命令で、實は恐縮に堪へませぬ、如此ことなら、初めから用意してかゝる所であつたものをと後悔するばかりです。

付きましては明治三十四年八月二十日のを基礎として話致さうと思ひますが、

目的は無論陸介採集にあるので範圍は只に伊吹山のみではなく、大谷、美濃に越ゆる所の谷又、板並村の神社、龍前山、池野の鎌ヶ谷等に渉り、歸路竹生島に過ぎつたのであります、けれども談話は題の如く伊吹に限られましやうが、それにしても、先づ山

り、殼口は卵圓形を呈し、外唇は延長せず、內唇及內壁の入口に、一ケ以上の薄板を有せり」

プピリデイ科、Pupillidae.

エナ屬、Ena, Leach.（第四十三圖）吾等が多年ブリミナス(Buliminus)と稱せしものにして、該名稱の不都合を發見せしによりかく改稱したり」殼は臍孔を有し、先窄りの長楕圓形にして、不透明なり、形甚だ小ならず、殼口は卵圓形にして齒なく、唇厚くして反曲或は延長せり」

プピラ屬、Pupilla, Turton.（第四十四圖）
之れプパ(Pupa)の新名なり、殼小さく、圓筒狀にして、先端鈍く、且つ圓く、褐色にして、不透明なり、殼孔小さくして圓く、上部は截切狀をなし、齒を有せざるものもあれど、內壁、內唇、及外壁に細齒を有せるものあり」

ベルチゴ屬、Vertigo, Müll.（第四十五圖）
殼は微小にして、卵圓形をなし、褐色を呈し、光澤あり、殼口圓く、上方は截切狀をなし、內壁、內唇、及外壁に齒を有せり」

ビフイダリア屬、Bifidaria, Sterki.（第四十六圖）
殼は小形にして、卵圓形をなし、角質にして、蒼白色なり、殼口は角及內壁薄板を有し、其薄板は輻合し、或は結合せり、又內唇に一褶を有し、且外壁に數襞を有す」
(濠洲産、及ポリチシア産、プピデイに關する小冊子を見よ)

ネソプパ、Nesopupa, Pils.（第四十七圖）
(濠洲産、及ポリチシア産、プピデイに關する小冊子を見よ)

有厴陸產貝類

甲、殼口は半圓形をなし、臍部上に厚き滑層を有し、齒舌は扇舌式なり、(rhipidoglosate)（一列に無數の齒あり）

ヘリシニデイ科、Helicinidae. 殼は扁平にして、所謂ヘリシナ形をなし、齒舌は中齒を有せり」

り」

變種キマダラシロイガレイシ 新稱

R. ricinus, var. arachnoides, Lam.

(海產、第六版、第五十一圖)

產地、喜界島、

長、八九分、

形狀、本種と異なることなし、

彩色、本種の如く刺黑く、內唇の滑層下には刺の痕跡なる黑点を透視するを得べく、外唇及內唇の兩端には深黃色の方形斑あり」

トライオンの書には arachnoidea Lam. を ricinus. と異名同物なりとするも、ピルスブリー氏は之をシロイガレイシの變種とせらる」

キイロイガレイシ 岩川 R. digitata, Lam.

(海產、第六版、第五十二圖)

產地、喜界嶋、八丈島、(中部太平洋中の諸島にも)

長、八九分、

形狀、幼殼は殆んど球形なるも、前水管溝は斜めに前外方に發達し、前方尖れる扁平なる形をなし、臍部は內唇の中央に位し、殼頂は著しく背面に傾くに至る」

彩色、外面は帶白色にして、內外唇及口內は柑色なり」

○日本陸產貝類の分類綱要 (第四)

アカチニデイ科、Achatinidae.(陸產第四版付

オペアス屬、Opeas, Alb.(第四十一圖)殼は楕圓或は圓筒狀にして、一方窄み、青白色にして、多少透明なり、殼頂は鈍くして、圓く、螺層膨れ、殼口は卵圓形を呈し、小さく、齒或は薄板を有せず、外唇薄くして鋭く、延長することなく、內唇緣は反曲せり」

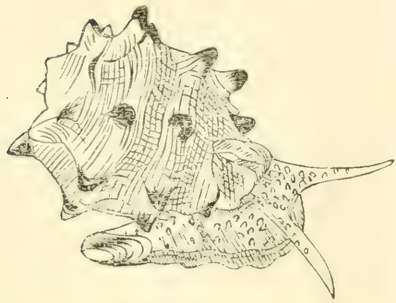
アカチ子リデイ科、Achatinellidae.

トルナテリナ屬、Tornatellina, Beck.(第四十二圖)殼は長卵圓、或は鋭き卵圓形にして、薄く、幾分か透明な

長、一寸三四分、

形狀、殼は短くして膨れたる芋貝形をなし、其質重厚、外面には數螺列の結節乃至刺を具へ、極めて大なる標品にありては往々臍孔を有し、殼口は比較的に廣く外唇の齒は殆んど群をなさずして並列せり」

彩色、外面は黄褐色にして、大抵白色の汚物を被り、口内は帯紫赤色なり」



ムラサキイガレイシ
（トライオンより）

ムラサキイガレイシ 岩川 R. horrida, Lamk.
（海產、第六版、第四十九圖）

產地、琉球、薩摩、小笠原、（布哇及フィリッピンにも）

長、一寸二三分、

形狀、前種よりも螺塔低く、殼口は群をなせる齒によつて狹窄せられ、內外唇の滑層は前種よりも廣し」

彩色、外面は大抵白色或は淡褐色にして、結節或は短刺は黒色を呈し、口內は濃紫色なり」

シロイガレイシ 岩川 R. ricinus, Linn.
（海產、第六版、第五十圖）

產地、小笠原、八丈、紀伊、土佐、薩摩、琉球、（紅海、ナタル、ギニア、フィリッピン、新西蘭、ポリネシア等にも）



シロイガレイシ及ヘタ
（トライオンより）

長、一寸內外、

形狀、前種よりも狹長小形にして、刺長く、汚物を被むらざる標品にありては螺脈及生長線を見る」

彩色、外面は白色或は帯黄褐色にして、結節は往々黒色を呈す」

余の所有せる此變種の模式的標品は內外共に純白な

をなし、生長線と交りて顆粒狀を呈し、螺塔にありて殊に著しとす、殼口は長楕圓形をなし、外唇厚く、內方に結節狀の歯あり、內唇は稍扁平にして其後部に薄き滑層を有し、後溝は刻目狀をなし、前溝は極めて短く少しく反曲せり」

彩色、黑色にして、体層には數條の褐色螺帶あり、兩唇及口內は紫褐色にして、歯は帶靑白色なり」

余は本種の標品を送りてピルスブリー氏の鑑定を乞ひしに、氏は Usilla gouldii, Smith. なりと報知せられたり、これに由て考ふれば、同氏はウシラを亜屬とせずして、屬名とせらるゝものなるべし、而してトライオンの書にはゴールデーなる種を記さず、但し該書に掲載せられたる V. fusco-nigra, Pease. の圖も記載も、よく余の標品に適合せるを以て、余は或は該種と異名同物ならんかと疑へり」

イガレイシ屬 Ricinula, Lam.

エッチ及エー、アダムス氏は此屬の正統者を刺或は結節ある螺層と指狀の外唇を有せるものとに限れり、されば實際は大さを異にせる數種を含むに過ぎず、外唇內の歯は上中の複歯及下位の單歯に分る、レイシダマシ亜屬は大抵本屬より小形にして螺塔高く、紡錘形をなし、外唇內の歯は群をなさずして箇々分離せり、此分類法は頗る便利なればトライオンの書には之を採用せり、然れども分類困難なる中間の物あるは自然物の常なれば、レイシダマシ亜屬とノシガヒ屬(Engina)、リウキウツノマタ屬(Latirus)、及ピサニア形(pisania)の或種との區別の如きも頗る困難にして、或種の所屬に關して學者間に種々の說ある所以なり、此屬は主としてポリネシア諸島に產し、往々珊瑚礁上に發見せらる」

アカイガレイシ 岩川 R. hystrix, Linn.

(海產、第六版、第四十八圖)

產地、琉球、薩摩、(布哇、フイジー、等にも產す)

形狀、殼は重厚にして紡錘形をなし、大抵著しき大小の螺脈と不規則なる生長線とを有し、往々顆粒狀の外觀を呈す、殼頂尖り、体層大きく、縫合部は平坦なり、殼口長く、前溝廣く、後溝狹し、外唇は簡單にして、內唇に滑層を有し、後溝附近に一襞あり」



ハナワレイシ
（トライオンより）

彩色、栗褐色にして、周緣に斷續せる白帶を廻らし、其他所々に帶黃白斑を有し、口內は乳白或は淡肉色にして兩唇は褐色或は黑色を彩る

此種は異名多く、變化頗る多しと云ふ

シイノミレイシ屬　Vexilla, Swains.

シイノミレイシ亞屬　Usilla, H. Adams.

Pease(ピース)氏がV. fusco-nigra, Pease. を記載せんが為に創設せし亞屬にして、氏は之にPurpura leucostoma, Desh. とPlanaxis cingulata, Gould. を加へしも、トライオン氏はピース氏の標品をピサニア屬に酷似すとなし、又デセイス氏の標品をP. columellaris. と同物にして、眞正の茘枝屬なりとし、ピース氏及ゴールド氏の標品の屬は不幸にして記載なきを以て、果して一亞屬として存すべきや、否やを疑へり」

ピース氏の標品が摸範的ベキシラと異なる所は、其螺塔の尖りて、殼口の稍狹窄せるにあり」

シイノミレイシ　新稱　V. gouldii, Smith.

（海產、第六版、第四十七圖及第四十七a圖）

產地、小笠原、

長、四分內外、

形狀、殼は重厚にして紡錘形をなし、螺塔尖り、其高さは殼長の半に及ばず、体層は大きくして膨れ、まばらなる細螺溝を繞らし、大抵平滑なれども溝間は往々螺肋

第四十四圖はピルスブリー氏が fryeinetii の新變種として、P. fryeinetii var. alabaster, Pils. とする所にして、長一寸七八分、体層著しく脹れ。曖昧なる螺肋を繞らし微肩角を有し、内外共に濃褐色を呈し、千島の國後島（クナシリ）産なり」

トサレイシ 新稱 P. tosana, Pilsbry.

（海産、第六版、第四十五及四十五a圖）

產地、土佐柏島、

長、四分半内外、

形狀、殼は小形、堅固にして、臍孔なく、紡錘形をなし、螺塔高くして尖り、凡そ七層を數へ、頂上の二層は平滑なる球様低圓柱形の核をなし、次の諸層は縫合線下少しく凹み、体層脹れ基底に細帶を有し、殼面には十乃至十五條の圓き縱襞ありて、大抵故口緣の痕跡なる隆起線を伴ひ、數條（体層にありては凡そ十條）の圓き螺肋に横ぎられ、螺肋の幅は肋間深溝の幅よりも廣く、基底斜面上の螺肋間及縫合線下には更に若干の細螺脈を有し、十分老成せし殼の螺肋間には覆瓦狀の薄板密布せり、殼口は全殼長の半よりも少しく長く、外唇内に三乃至六ヶの齒を有し、前溝は短くして開けり」

彩色、表面は灰白乃至淡黄褐色にして、縫合線下、周緣下及基底には阻碍されたる栗色の帶あり、口内は黄褐色をなし、表面の諸帶に應じて廣き栗色の帶を有し、往々、栗色内に淡色の帶を具ふるが如き觀を呈せり」

本種は余の送りし標品によりて、ピルスブリー氏の新種として記載せられたるものにして、標品極めて少し」

ハナワレイシ屬 Jopas, H. and A. Adams.

ハナワレイシ 新稱 J. Sertum, Brug.

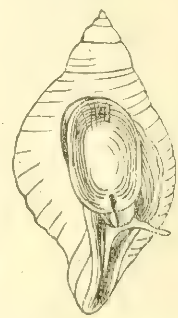
（海産、第五版、第四十六圖）

產地、琉球、

長、一寸、

產地、歐米北方の海、シベリアより日本まで

ナガチヂミボラ
（トライオンより）



長、二吋乃至二吋半、

形狀、曖昧或は著明なる肋を具へ、或は全面に螺脈を有し、表面は平滑なることあれども、螺肋と成長線と相交りて覆瓦狀或は薄板狀を呈せることもありて、成熟せるものにして成長休止時期にある標品の唇は、大抵內部厚くなりて、齒を有せり」

彩色、殼は大抵帶白、柑褐或は栗色を呈し、往々一條乃至數條の螺白帶を繞らせり」

本種は非常に變化多く、分布廣く、諸學者の說紛々として一に歸する能はず、トライオン氏はこれまで別種として記載せられし多くのものを此中に編入せり、これ其中間の標品ありて、平滑なるものより結節あるものに至り、長きものより圓きものに至るまでの變化を示せばなり」

第四十一圖は殼面平滑にして長さ一寸三四分ある稍長形の千島產標品なるが余は之をピルスブリー氏に送りて其鑑定を請ひしに、氏は之を P. fryeinetii, Desh. とせられたり、之れトライオン氏が lapillus の變種 P. Saxicola, var. 中に編入せる所にして氏は fryeinetii を大形なる幼介なりとし、Saxicola に酷似し、變形非常に多しと記せり」

第四十二圖は著しく小形にして、長一寸內外、螺塔極めて低く、殼口非常に大きく、表面は比較的に平滑にして、兩唇白く、內外共に褐色なり、ピルスブリー氏は之を P. fryeinetii の變種とせり」

第四十三圖はピルスブリー氏の同く P. fryeinetii の變種とする所にして、大さも、形狀も、彩色も、全く前者と同しきも、著しき大小の螺肋を有し、釧路國厚岸產なり」

脉は生長線と交りて布目狀をなす、殼口は圓みを帶びたる三角形をなし、殼軸の前部に曖昧なる縱襞を有し、外唇の內部に三四ヶの相隔りたる齒あり」

彩色、殼の表面は帶黃褐色にして、暗栗色の斑點或は同色の縱波線を有し、口內は黃色或は柑色を彩し、間々褐帶あり」

チヂミボラ亞屬 Trochia, Swains.

チヂミボラ 六百介圖 P. Succincta, Martyn.

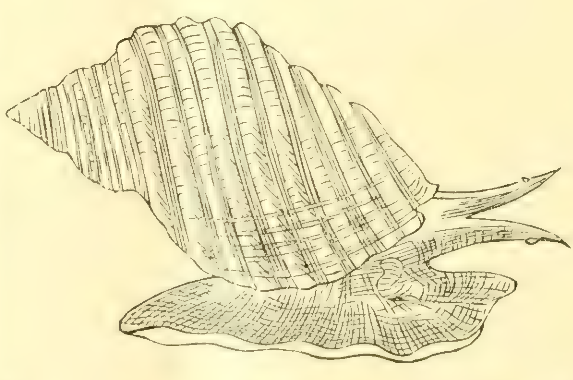
(海產、第五版、第三十九圖及第四十圖)

產地、北海道、(濠洲、新西蘭、喜望峰、にも產すと云ふ)

長、第三十九圖ハ一寸五六分 第四十圖ハ一寸二三分 (三吋に至るものありと云ふ)

形狀、殼は凡そ八條の强螺肋を繞らし、肋の兩側は深鑿せられ、且つ皺狀をなせる生長線に橫ぎられ、肋間は往々隆起螺線を滿たし、肋頂には間々刻線を見ることあるも總ての彫刻の磨滅せることも亦尠からず」

チヂミボラ (トライオンより)



彩色、白色なり、第四十圖は余の所有せる北海道產の標本にして長さ一寸二三分トライオン氏貝類學第五十一版第百十三圖（亞弗利加洲アビシニア及喜望峰產）に適當し前條の記載に比較すれば、强螺肋の間に更に一條宛の小肋を有し、內外共に淡褐色なり

ナガチヂミボラ亞屬 Polytropa, Swains.

ナガチヂミボラ P. lapillus, Linn.

(海產、第六版、四十一圖より四十四圖まで)

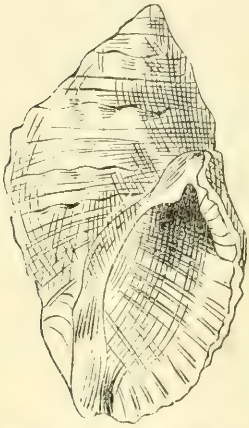
にして尖り、其螺列の間に細螺脈を繞らし、殼口は半圓或は楕圓形にして、殼軸の前方には曖昧なる二三の低齒を具へ、外唇内に齒或は低隆起線を有す」

彩色、表面は帶黃色にして、白色或は綠色の汚物を被り、結節は往々赤色を帶び、口内は白乃至深黃色にして、深黃色なるもの(第三十六圖)にありては外唇内の齒なく、隆起線は濃柑色を呈し、殼口の内部白色なる標品(第三十七圖)にありては隆起線まばらにして數少く、内方に至るに從ひ漸々低くなりて、遂に消失し、往々

エキナタ
(トライオンより)



エグロタ
(トライオンより)



白色の低齒狀をなせり」又内外共に白色なるものを P. echinata(エキナタ) と名づけて區別せる學者あるも、中間の標品發見せられ「就中上圖に揭げたる P. aegrota. Reeve. は日本及濠洲の海に住すと云ふ」トライオン氏はエキナタをキナレイシの變種として存するも差支なかるべしと云へり

クリフレイシ亞屬、 Stramonita, Schum.

クリフレイシ 新稱 P. luteostoma, Chemn.

(海産、第五版、第三十八圖)

產地、平戸、薩摩、琉球、

長、一寸二三分

クリフレイシ
(トライオンより)



形狀、殼は紡錘形にして形稍シラクモガヒに似るも長さ其二三分の一に過ぎず、又結節の狀テツレイシに似るも外唇薄く、口内黃色なるを以て一見兩者を區別することを得べし、螺層比較的に高く、殼頂尖り結節大きく、肩角著しく、表面の螺

猶蝸牛の殼をカタツブリノイヘといひ、蜘蛛の巢をクモノ非といふが如く、其殼の少しきなるを云ふ。卽今のコサヾイといふものと見えけり。催馬樂の歌に、アハビサダチカ、カゼと見えし、サダチカは、螺をサダヘといへば、サヾエの事なるべし、とあり。又和訓栞にちひさき柄の如きもの多くつける貝なり。今異邦の人、鬼拳といふとぞとあり。小按に若しサダエと云へるが本ならば小(サ)刺家(トゲエ)の約にてサヾエは頓て小刺家(サヽエ)なりと考ふを得べし。新撰字鏡に蜂又螯をサソリと云へるも同一理なり

○本邦海産貝類圖說　(第四)

シラクモガイ　P. armigera, Chemn.

(海産、第五版、第三十五圖)

產地、薩摩、大隅、琉球、(フィリッピンにも産す)

長、二三寸、

形狀、殼は紡錘形をなし、螺塔尖り、其斜面直く、体層稍脹れ、結節高く、体層の肩上に聳ゆるものは殊に長く、表面は一面に絹地樣の縱橫細線を刻し、殼軸直く其前部に一二の縱襞及二三の低き小橫襞を具へ、殼口狹長にして、外唇內に齒あり」

彩色、表面は大抵白色綠色等種々の汚物に被はれ地色は白色にして、概して結節間に淡褐色の螺帶或は平行線を繞らし、其端は殼口の內外唇に見はれ、口內は帶黃或は淡肉色なり」

キナレイシ 新稱　P. mancinella, Linn.

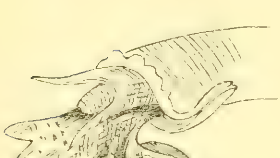
(海産、第五版、第三十六圖及第三十七圖)

產地、屋久島、小笠原等、

長、第三十六圖の標品、一寸五分餘、第三十七圖の標品、二寸內外、

形狀、殼は重厚にして兩端尖りたる楕圓形をなし、結節は小

キナレイシ動物一部
(トライオンより)



サヽエは出雲國風土記に榮螺とあるを初めとす。夫より賦役令、延喜式に螺類聚雜要抄。塵添壒嚢抄に榮螺子と書したり其和名の稱も亦さま〴〵也催馬樂我家の曲にサダラ又サダヱとあるを其初めとす。其歌は

「わいへンは、とばりちやうをもたれたるを、おほぎみきませ、むこにせん、みさかなは、なによけん、あはびさだをか、かせよけん、あはびさだをか、かせよけん

之を釋すれば「我家は帷帳をも垂たるを大君來ませ婿にせん。御肴は何よけん石决明拳螺歟海膽よけん」入綾にサダチ一本にサダヱとあるを正しと云へり是古寫本の倭名鈔に和名佐太江とあるに叶へり津守ノ國基集十八に

賀茂の禰宜成助がもとへ、かひつものやるとて、

「したゝみもあはびさだえもはまぐりもかきあつめたり皆ながら見な」

かへし

「なにはがたなにはのものもかひありて朝みつしほのみつとしらなん」

又山家集下に

うしまどのせとにあまの出入りてさたえと申すものをとりて舟に入れ〳〵しけるを見て、

「さだえすむせとの岩つぼ求め出でいそしきあまのけしきなるかな」

古歌には凡てさだえと讀めり。又催馬樂秘傳抄の注には

延喜式に螺をさだがひとよめり。

とあり其餘梁塵愚按抄にさゞゐ。全書、藻塩草、朝倉亭御成記にさゞい全書に又さゞゐ、三好義長亭御成記にさゝひとあれども恐くはサダヱを云へるが本にて後にサヾヱ、サヾヘ、サヾイ、サヾヰ、サヾヒ、サダチ、サダカヒなどさま〴〵に轉じて云へり或書にはサダチをサダチカなりと云へるは此歌の歟文字一つにて聞かせたるをよくも辨へざりし說なり。

(釋義)東雅にサヾヱとはサヽは小而小也。ヱとはイヘ也。

十二

けるに風わしくてほどへけり。澁川のうらと申す所に幼き者共數多物を拾ひけるを問ひければつみと申すもの拾ふなりと申しけるを聞て

「下りたちてうらたに拾ふあまの子はつみより罪をならふなりけり」。

此うらたは浦田にて之より推せばツミは恐くは田螺を云へるなるべし上人が幼童等の無下に之を拾へるを痛み歎きてかくはよめるなるべし

(釋義)東雅の近俗に田螺をタツボといふなり(小云群分品彙に此名を用ひたり) これも古の時にはタツビといひしと見えたりツビといひ、ツボといふは猶壺坩の類をツボといふが如く、其中窪りなるをもてかくいひしなりとあり猶貝の名義考を見るべし

(創見)ツビの名は初て催馬樂に見え中世に至り古今著聞集等往々此名見えたりされどもこは女陰の名たるに過ぎずして倭名鈔巻三にも別に形體部第八に房内經を引て此名を出せりされども貝の名としては未た他に見及ばざれば之が創見は叙上の字書類なりと云ふべし

○第二項、さだゑ。榮螺子。崔禹錫が食經に云榮螺子(註云和名佐太江)

小云今本に佐左江としたるは太を左に誤りたるものなり今は古寫本に依ることは今云サヽヱなると明けし然るに玆にも一の疑團ありそは似蛤而圓者也とある是なりサヾエハマグリの形は懸隔の差あり如何ぞそを相似たりと云ふべき今其誤の由て來る所を繹るに本草和名に榮螺子。板螺一名魽。(註に似蛤而圓出崔禹ニ和名都比。とあり卽魽は蚶に同じくして今云アカガヒ也これぞ蛤に似て圓きものなり然るに順朝臣は榮螺子と魽とを同物異名と速了し乙の註を移して甲に嫁せしめしものにて其誤たるとしるべければ今は之を削ることとせり

榮螺子の名は今の本草書に見えず。又寧波府誌。華夷鳥獸考には峯螺とある是なり

和名都比は其總稱なるに似たり。惟ふに榮螺子の上一名の二字を脱せしものか（本書にかゝる誤多し）是疑の三なり

（四）本項の外甲蠃を加世に讀み別項石陰子の注釋とせり。カセの何者たるかは姑く措き只子字一個の有無に依り別物の名となるべき理由あるとなし蓋子字は椅子銚子等の如く一種のものを居えて云へるに過ぎざれば甲蠃子は豆比なるときは甲蠃は義較廣くして豆比類の汎稱となるが如き是也さるを全く異類なる石陰子の別名となしたり是疑の四なり。

（推定）惟ふに此一項は貝名の開卷第一に位すれば本鈔蟲豸類の始に蟲の項を置きたる如く茲には貝の汎稱名のあるべき位置なれば推して和名豆比は少なくも螺類の總名なりと考ふを得べし。諸櫻を花の盟主となし單にハナと稱するが如く甲蠃子亦螺類中の尤物なるより等しく豆比とも稱せしを順朝臣は能くも辨へずして海蠃の別名と信ぜしものなるべしさらば之を本項より除去して次の如く改むべきか

（正誤）第一、つび海蠃。揚氏漢語抄ニ海蠃、豆比、（註云今按蠃は即螺字なり音羅）

猶甲蠃子もツビと稱し後轉じてツブと呼び今は專バヒと云へる一種の名なるとはカセの項に詳かなり

○更に進みて豆比の名を研究せんとす此名は叙上の外猶新撰字鏡に螄、豆比。蝸牛、津比。蛹、蠃大者、海豆比とあり又本草類編に宇美川不とあり。因に云或地方にてイソギンチヤクをウミツビと云へり。

之に依て是を視ればツビの名一層廣義に用ひられ時に主要なるカヒを斥しても如かく呼びしものと考ふを得べし猶海蛤即ウムギノカヒを參照すべし

（轉語）ツビはツブツベツボなど廣く變轉し中世ツミと云へるも此轉訛なるべし山家集下に

ひゝしぶがはと申方へまかりて四國の方へ渡らんとし

要訣なり、

第一篇

倭名類聚鈔卷第十九鱗介部三十龜貝類第二百三十八中に出てたる貝名

第一項つび、甲蠃子、本草云、甲蠃子ハ（註云、今按ニ蠃ハ即螺ノ字也音羅、揚氏漢語抄ニ海蠃ハ豆比）貌チ似テ辛螺ニ而中ニ有ル角蓋ニ者也

此一項は之を究むること深ければ紛錯綜を來たせる一にして諸家其説を異にし或は海蠃より推して螺の總名とも云ひ（古名錄等）或は次の二項の石陰子カセ棠螺子サヽエの三を合せてサヾエの類にて只大小の差あるのみと云ひ（東雅）或は總名といふはいかゞといひて別に説をなさるゝものあり（和訓栞）て未だ適實なる考を得ず故に條を分ち先甲蠃子より漸次之を考究せんとす、

（一）甲蠃子は今の本草書に見へず但本草和名に

甲蠃子（注云、貌似ニ辛螺ニ而口ニ有ニ角蓋ニ蓋上甲錯似ニ鮫魚ノ皮ニ

又倭名鈔龜貝體第二百三十九に

角蓋（ツヒノフタ）、本草云、甲蠃子ノ中ニ有ニ角蓋ニ（注云、和名都比乃（ツヒノ）不太（フタ））蓋上錯似ニ鮫魚皮ニ者也

二説殆同文にして共に古本草に出れるもの也其上面鮫皮に似たりとあるに從へば甲蠃子はサヾエにて當時之をツビと云へりしものか今もツボガヒの名あり然るに本草別にサヽエの項あり是疑の一也

（二）甲蠃子の注釋として引用したる海蠃は本草綱目に出で其條下に大小螺、珠螺、鸚鵡螺（アフムガヒ）、梭尾螺（トラノヲガヒ）、香螺（ヘナタリ）、老鈿螺、紅螺（アカニシ）、青螺（ヤクガヒ）、蓼螺（カラニシ）、紫貝螺（ヤクノマダラガヒ）、等間々無蓋の者も列記したれば海蠃は海產螺類の總名にて甲蠃子の如き有蓋の者と同視すべからず是疑の二なり

（三）叙上本草和名の甲蠃子の條を再出すれば

甲蠃子（注上出）榮螺子（サヽエ）。板螺一名鮒（アカニシ）（注下出）和名都比

此說に依れば榮螺子（サヾエ）、鮒（アカニシ）の外に甲蠃子と云ふものありて

撰字鏡の稿を起し博士深江輔仁は本草和名の擧ありて其今尚存すと雖前書に及ばざる所あるを以て學者多くは之を顧みず偶以て參照に供せるのみ、茲に於てか古名を調査せんとするには先倭名鈔を精査するにあらざるよりは其正鵠を望べからざるを察し竟に其方向を一轉して專ら倭名鈔並に他の二書を調査し之を基礎とし以て古書に及ぼすことゝなせり、然るに一度之を繙くや古名難義の鎖鑰に貫せられし倭名鈔も文簡潔に過ぎて意の達せざるもの或は引証する所の書多く烏有に皈して殆參考に資すべきものなく且今の本草書は宋代に當りて一新せしより上代に通し難きもの多きを如何せん茲に於てか或は古今其名を異にし或は甲乙互に其名を轉嫁するものさへ尠からず殊に動植名の如きは朝臣自ら其實を辨せず只當時の書契のまゝを襲ひしが如き形跡なきにあらず從ひて後世其訛を傳へて末益遠く恰も風を捉へ影を撮り甲是乙非更に決せざるものあり依て自ら謀らず猥りに今按を加ふるの已むべからざるに至れり或は恐る猶考の及ばざるもの多々あらんことを謹で博雅の叱正を乞ふ

凡　例

一、此書古國書中に散見せる貝名の創見、沿革、釋名を明にするを以て旨とし且之に關する文章詩歌古實を以てす是本立而末整フと云へる古人の言を多としたれば也

二、此書先釋くに倭名鈔を以てしたるは已に緒言に云へる如く先人が古名を証するに多く此書を用ゐしに依る

三、倭名鈔の註釋を試みしもの數種あり然れども余は一も之に滿足を表することを能はず故に茲に一々せず

四、考古のとたるや固より難し就中古名は古語の考究よりも猶難し蓋本邦古來多く力を語に致し名の如きは之を忽諸に附するの傾向あるより往々義を誤るもの遠く古代に溯源したればなり故に之を究むること愈深ければ愈疑團を生じ諸説紛々卒に決し難きものあるは固より其分なることを知らざるべからず是古名を解するの

二點に歸すると惟ふ。
大なる標本は、一個づゝ紙或は綿に包み、小なるものは、一種づゝボールの小箱又は硝子管に入れ、之れに一々番號を附すべし。大なる標本の番號は、これを包紙に記するも敢て妨なきが、小形の符箋に記してこれを其の標本に貼付するを便宜とす。小箱又は硝子管に入れたるものには、其の外にこれを貼付すべし。次に堅固なる箱の底に鉋屑、綿又は紙を布き、大なる標本を底に容れて、脆弱なるものを上に乘せ、間隙を充分に塡めて動搖を防ぐべし。別に目錄を添えて是に符合を附し、學名と産地とを明記すべし。若し命名を請はんとする品ならば、名稱の位置を明けて記入の便を慮るべし。
世の斯かる要件を知らざる人は、塵埃に塗れたる標本を仕分もせず、番號も附せず、亂雜に箱に塡めて送り越すことあり。或は名の分からざる爲に、仕分の出來ぬといふこともあらん。然れども斯かる流義の人には、名を聞いても餘り益を爲さゞるものと考ふるなり。且其の品を汚穢にし、亂雜に保存するは、眞に其の物を愛せるの主義に副はざるものといふべきなり。（結了）

國書貝名考（第一）　永沼小一郎

緒言

余初め國書に散見する所の貝名を考究せんと欲し先古史には古事記舊事記日本紀古語拾遺詩歌には懷風藻万葉集古樂には神樂催馬樂等の如く略時代を逐ひて是れが調査をなし名義の如きは一々考古學者の說を參照せしに其引證する所は今を距ると約九百六十餘年の昔朱雀天皇の承平年中に成りしといふ、勤子內親王の令旨を奉りて源ノ順朝臣の撰にかゝる倭名類聚鈔の說に歸着するの外は殆餘に何等の消息あるを見ず實に該鈔は考古學者の寶典として最重を置かれしものなるを知る蓋此書に先んずること約四十年卽今を距ると約一千年前に當りて僧昌住は新

銹樣の汚物附着して容易に除け難きことあり。斯かるものは、暫く蓚酸溶液にこれを浸し、水にて洗へば容易く除去せらる。但し此の酸に浸すのは、身を拔く前にするを良とす。否らざれば内面の眞珠質は酸に冒されて光澤を損するの虞あり。

ドブガヒ類は、光澤の美しき表皮を有すること常なれども、これに少しく亞麻仁油を塗附すれば、一層其の美を添ふべし。又カラスガヒの如く、乾燥せる後、動もすれば脆くして破損し易くなることあり。これを防ぐには、暫時クロール石灰の溶液に浸すを良しとす。

最後に、余は一般探集家の準繩とすべき個條を左に列記して此の項を結ばんとす。

(一)最良の探集地を發見せる塲合には、これを最後の探集地と考へ、出來得る限り、最良の標本を獲んことを力むべし。些細なる事情の爲に、再會の機もあらんなどと漫に看過すべからず。

(二)完全なる標本を選ぶべきは、無論なるが、同時に必ず老幼を取り雜ぜ、種々の形を收容するを務むべし。

(三)材料の豐富なるときは、成るべく多數の標本を採集することを力むべし。然れども其の量は、標本として用途あるを度とし、一疋の蝸牛たりとも、妄りに其の生命を奪ふは、罪惡なりと知るべし。

標本荷造法　標本の交換或は命名依賴の爲に、貝類の標本を遠方へ輸送する塲合には、種々注意すべき要件がある。此の注意を缺くに於ては、或は時に貴重の標本を毀損し、或は人に不快の感を與ふることなしと限られぬ。余も從來、世の同好者より標本を送られたることあるが、其の人の多くは一般の荷造方を知らざる爲に、斯かる缺點に陷りたるもの多々ある。寄贈品ならば兎も角も、命名を請ふ爲に人に送るときには、殊に深く注意すべき點があると思ふ。其の注意すべき事項は、要するに脆弱なる標本の破損を防ぐことゝ、標本を丁寧に整理することゝの

るが故に、これを匕に挟び取りて乾かすべし。又砂は、これを干して他日の用に供すべし。

淡水產採集　本邦に產する淡水產貝類は、カラスガヒ(Cristaria) ドブガヒ (Anodonta)、イシガヒ (Nodularia)、シヾミ (Corbicula) カハニナ (Melania)、モノアラガヒ(Limnaea)、タニシ (Viviparus) 等にして、水田、池沼、河湖、溝瀆等あるとあらゆる淡水に產し。彼等は、多く淺水に住するを以て、これを採集することは割合に容易である。水淺くして彼等の匍匐する狀を認め得べき場所にては、手づから採集し又少しく深き所にては手網を用ひてこれを採集し得れども、湖水や潟の如き水の深き場所、又は急流の河等にては、人を雇ひてこれを採集せしむるの外ない。余の經驗に依れば、シヾミを採りて食用に販賣する土地は、淡水產の貝を蒐むるに至極便利である。斯かる土地には、必ずシヾミを採る爲に相當の器械が使用せられて居る。近江の瀬田川、薩摩の川內川(センダイガハ)、陸奥の十三潟、常陸の霞ヶ浦等は、貝類を蒐むるに余の最も便宜を感じた所である。

採集に要する物品は、手頃の手網一本、大小の刷毛(ブラッシ)、蓚酸飽和液五六合、少量の鹽酸、煮沸せる亞麻仁油、アルコール入の瓶數個、酒精燈一個等である。

身を拔きて殼を整理する方法は、海產類に於けると大同小異である。唯淡水產の肉は、海產貝と異なり、腐敗し易くして激臭を發し、若し斯かる標本の一個たりとも、他の標本と混ずるに於いては、全標本を汚損するの虞あるが故に、少したりとも肉の遺らぬやうに注意するを要す。殊にタニシの如きは、肉柔かにして動もすれば遺留することあり。此の際、殼に水を充たして幾回となく振り出せば、通常除去し得るも、到底拔け難きときは、酒精燈にて其の殼頂を暖め、蒸發氣の發するを見て洗ひ出すも、一の良法である。

ドブガヒ、イシガヒ、モノアラガヒ等は、時に殼面に鐵

ピンセット一本、ブリキ製若くは木製の扁平なる小箱二三個、此の箱は活きたる蝸牛を容るゝ爲である。

採集を終へたる後、標本を整理するに要する器具は、先を曲げたる大小のピンセット、毛揚子二三本、試驗管二三本、長さ六寸許のシリンジに徑一寸許の强きゴム球を附したるもの一本、清淨なる白砂二三合、眼の細かなる灰篩一本、深さ二寸徑六寸許の銅製の鍋一枚、白き陶器製の蒸發皿二つである。蝸牛の殼は、一般に薄くして脆弱なるを以て、これを整理するに特に注意を要す。先づ鍋を火鉢に懸けて湯を沸かし、豫め毛揚子にて洗淨せる蝸牛五六個を灰篩に容れ、其の柄を取りてこれを湯に入るべし。數分時にして蝸牛死したらば、これを取り揚げ、其の一個を左手の拇指と示指とにて夾み、右手にピンセットを持ちて徐に其の身を引き拔くべし。容易に拔き去るを得たらば、別に温湯を盛れる蒸發皿にこれを容れ、更に他のものを試むべし。身の拔け難きものは、再び煮ることを要すれども、煮沸度に過ぐれば却つて困難となるものと知るべし。形の不規則なるもの及び小形のものは、概して困難なれども、經驗を積めば意外に容易と成る。滿足に身を拔き終はらば、シリンジを以て一々殼の內部を洗ひ、水を切つて口を下にし、新聞紙の上に並べてこれを乾かすべし。

ヒラマキミヅマイ（Planorbis）大以下の最小ものは、身を拔き去るの必要なく、唯一二日間アルコールに漬け、後に乾かせば事足る。斯かる小形の貝殼を洗淨するには、試驗管に四分の一乃至三分の一程淸き白砂を容れ、これに其の貝を雜せて水を充たし、徐に振盪すべし。斯くすれば殼の破損することなくして、これに附着せる泥及び塵は自ら掃ひ除かるべし。充分に洗淨せられたるを見なば、水と共に蒸發皿へ移し、箸を以て徐に攪拌すべし。此の際、貝は砂粒と共に浮き揚がりて渦卷を成せども、砂粒はやがて自ら沈降し、獨り貝のみ水面に止ま

貝を煮る爲に鍋に容るゝときは、豫め一種毎に金巾の袋に入れ、其の口を括るを便とす。殊に小形にして層を具へたるものを然りとす。此の層は、貝の種類にも依れども、煮らるゝ間に自ら脫落することあるを以て、數種を一所に煮るときには、唯互に混亂するのみならず、往々紛失する虞あり。然れども斯く袋入にすれば、其の虞なくして整理上に甚だ便利である。

陸產採集　陸產の貝類にては、蝸牛とキセルガヒの類を最も多しとす。これを採集せんとするに臨みて、豫め注意すべきは其の地方の地形と土質とである。一般に砂質にして乾燥せる場所や、針葉樹林又は竹藪のある場所等は、全く蝸牛類の產せざるものと見做して誤はない。之れに反して石灰質にして陰濕なる場所は、其の採集に必ず好望あり。彼等は、溫暖なる土地を好むといへども、直射の日光を忌むが故に、日中は木葉の下、樹幹の北側、水邊の苔の中、岩石の間隙等に潛んで居る。然れども、雨後には日中といへども、這ひ出づるゆへ、此の時を以て採集の好機とす。苔生じたる古木、頹敗せる古祠、堂屋、古城址の石垣等は、彼等の好める潛匿所なり。又蝸牛類には菌蕈を嗜むもの多ければ、これを發見せるときには必ず搜索すべし。其の他、山間に宿泊する時機を得なば、板を濕して叢の上に伏せ置き、翌朝これを檢すれば、數多の蝸牛これに附着することあり。幽邃なる深山、叢樹、暗き密林等には、採集の望なきこと一般なれども、種類に依りては、却つて豐富なることあり。余は、先年木曾の山中に本邦產中、最大の蝸牛を得、又讚岐國、琴平の象頭山の密林中に、意外にもヤマタニシ（Cyclophorus）、Pupinella の如き有蓋蝸牛類を澤山採集したることあり。

蝸牛類を採集するに必要なる器具は、一二オンス入の硝子瓶一個、これにアルコール二分に、水一分を和したるものを入る。是は殼の弱き小形の種類を容るゝ爲にして、夫の軍用水筒の如く、扁平なれば懷中するに便利である。

性等を參酌して、其の分類を究めやうと計畫する貝類學者は追々出て來て居る。唯、如何せん、海産貝類の種屬は、非常の多數にて、而かも採集することの困難なる等より餘義なく今日の分類を以て滿足して居るのである。將來研究を積み、事實の充分に蒐集せらるゝに至らば、其の分類を改良すべき時機が、必然到來するだらうと考へる、故に採集家が肉の附きたる形態を寫生し、或は其の習性を多少たりとも調べ置きて、これを學界に報告することは、斯學に貢献する一の方法であると思ふ。

貝類の形態及び習性を觀察せんとするには、硝子盤に海水を盛り、生貝を暫く飼ひ置くことを要す。貝類は、他の海産動物と異なり、勢力の割合に強きものゆへ、やがて體を伸ばして徘徊するからして、形態及び習性の一斑は、直ちにこれを窺ひ知ることが出來る。貝殼の形狀の異なる、色澤や斑紋の美麗なるは、人の旣に知る所なるが、吾人其の肉體に注意するに於いては、其の形態の愈々奇にして、體色の貝殼よりも尚、一層秀麗なることが分かり、殊に其の習性に至りては、實に驚くべきものゝあること、既知の事實に依りて察せらる。

貝の身を拔くには、これを煮沸するを最良とす。蛤類は、これが爲に自ら口を開き、肉も分離するを以て特に注意すべき事なし。唯これを洗淨して乾燥せんとする時には、直接に日光に觸れしめずして、陰干するを要す。乾燥を了へて收藏せんとするときには、靱帶乾固して脆弱と成らざるを度とすべし。但し靱帶の彈力を失はざる間は、殼片を合するも自ら離開するものゆへ、一々絲を以て締め括ること必要である。螺類は、兎角身の拔け難きものなるを以て、充分に煮沸するを要し、殊に大形の種類に至りては、身を拔くこと一層困難である。殘りなくこれを拔き去るは、唯熟錬と忍耐に賴るの外ない。又其の靨を有するものは、一々これを保存し、殼口に綿を塡めて其の上に粘附するを法とす。

介類雜誌　第四號
明治四十年四月二十日發行

○貝類採集に就きて（三）

岩川友太郎

ドレッヂの起原は、全く西洋の牡蠣網にありたることを前に陳べしが、本邦に於いても、海底の貝類を採集する爲に、實驗上より、自然に、これに類したる網を使用したやうに見える。余、數年前、青森縣野邊地灣に帆立貝を採集せんとせしが、此地方ではハッシャク（多分八尺の意ならん）と稱する網を使用して居る。其の網の型は、大體ドレッヂに類して、桁の長さは約五尺、幅は一尺許あり、網の眼は三伞貝以上のものを漁するに制限せられて居るもへ、甚だ粗い方であるが、若し其の眼を細かにしたならば、諸種の貝類を採集する爲にも、屈強の利器ならんと當時考へたことである。

海底採集を爲さんとするに臨み、要する器具は、網の外に種々あれども、特に必要なるものは、底に金網を張れる長さ一尺二三寸、幅七八寸にして深さ三寸許のブリキ盤である。是はドレッヂに罹れる品を砂泥、藻屑等と共に容れて、これを洗淨する爲の器である。從つて取扱上の便利を慮り、狹き方の兩側に蕨手を附け、これを取りて海水に浸し、泥砂を篩ひ流すときの便宜に供へて居る。

海產貝類の採集に臨みて、一の注意すべきことは、肉の附きたる生貝の寫生圖を取るべきである。單に貝殼のみを收容するは、一般採集家の從來の風習であつた爲に、柔軟部の解剖及び各種屬の習性等に至りては、不明に屬するものが甚だ多い。現在の貝類の分類は、主として貝殼の形狀に從つて立てられてあるが、是は決して完全なる分類法にあらざることを動物學者の夙に確信する所である。故に比較上、實驗するに便宜なる陸產の蝸牛類又は淡水產の蚌類に就きては、其の肉體の解剖上、其の使習



41. Opeas gracilis, Hutt.
42. Tornatellina inexpectata, Pils.
43. Ena hirasei, Pils.
44. Pupilla insulivaga, Pils. & Hir.
45. Vertigo hydrophila, Reinh.
46. Bifidaria armigerella, Reinh.
47. Nesopupa dedecora, Pils.
48. Helicina japonica, A. Ad.
49. Georissa japonica, Pils.
50. Blanfordia simplex, Pils.
51. Assiminea cincta, A. Ad.
52. Omphalotropis japonica, Pils.
53. Acmella vagans, Pils.
54. Truncatella liusiuensis, Pils.



41. Purpura freycineti, Desh.
42. „ „ „ (var.)
43. „ „ „ (var.)
44. „ „ var. alabaster, Pils.
45. 45.a } „ tosana, Pils.

47. 47.a } Vexilla gouldii, Smith
48. Ricinula hystrix, Linn.
49. „ horrida, Lam.
50. „ ricinus, L.
51. „ „ var. arachnoides, Lam.
52. „ digitata, Lam.



35. Purpura armigera, Chemn.
36., 37. „ mancinella, Linn.
38. „ luteostoma, Chemn.

39., 40. Purpura succincta, Mart.
46. Iopas sertum, Brug.

加藤延年著

◉袖珍美本 貝ひろひ　全一冊（近刻）

貝ひろひ！樂しき想ひの止め難きかな、あゝ波打つ際に蹈みけん白砂の跡！ひろひ！永劫の色を湛に千古の情を包む海の其の大なる胸より吐きし秘密の影、趣味の塊なる可憐の貝は、學科的頭腦を以て而かも詩的情操に富める著者にひろはれ、茲に無限の意味を語る、津々たる筆致明確なる圖解とを相須つて、最も平易に而かも最も面白く、分類學名種名其他貝類に關する一般の知識を網羅し、兼ねて悠々の趣味を傳へ來る、由來我邦の領たる北樺太より南臺灣に至り、各帶の産一々として備はらざるなく、實に世界の驚異たり、若夫れ珍種異類を蹈み付けて顧ざる海水浴客の如き、一たび本書を繙かば、全國到所の避暑愉快更に其愉快を倍するものあらん、幸に愛讀を冀へ、

◉新案 貝合せ（説明附き）　近刻

優美なる「貝おほひ」の遊びが公卿諸侯の姫君たちに喜ばれしは昔、今や巧に貝類の科名種名等を案配して科學的符合せが作られた、符毎に美麗なる彩色圖もある故に娯樂として面白いのみならず知らず〳〵の間に、博物上の知識を與味を與へることを大なるものがあるであらう

◉貝類畫はがき　四枚一組　郵税共拾五錢

貝類數種を選びて上等の紙質を用ゐ實物大の寫眞版となし學名、和名、産地等も附記しあり優佳にして高尚なる嗜好に適す

京都市烏丸通下長者町上ル

發行所　平瀬介館

◉廣告

昆蟲世界　每月一回（十五日）發行

昆蟲世界生れて以來茲に十年號を重ぬる百十五昆蟲に關する專門雜誌にして每號正確鮮明なる多數の圖を挿入し害蟲驅除の指導者となり昆蟲學研究者の機關となり當所の發展と共に益々其改善を加ふ昆蟲を學ばんとするものは見よ農業を營まんとするものは讀め本誌の價値如何世既に定論あり茲に喋々を要せず

定價一部金拾錢　一ヶ年十二部前金壹圓八錢（郵稅不要）

岐阜縣岐阜市公園内

發行所　名和昆蟲研究所

◯平瀬介館雜誌部 廣告

○發行　介類雜誌ハ每月一回二十日發兌可致候
○前金　介類雜誌代金并ニ廣告料ハ前金ヲ以テ御拂込被下度候（郵劵代用一割增）
○爲替　郵便爲替ハ室町中立賣郵便局宛ニ被成下度候
○領收證　本誌代金御送付ノ節ハ別ニ領收證ヲ出サズ本誌ノ發送ヲ以テ御報告ト可致候
○前金濟　御拂込ノ前金相盡キ候節ハ本誌包紙ニ濟ノ文字ヲ朱印シ御送金ヲ乞フノ表章ト可致候

本誌定價

一部	金貳拾錢	郵稅壹錢
六部	金壹圓貳拾錢	郵稅不要
十二部	金貳圓參拾錢	郵稅不要

本誌廣告料

五號活字一行（廿五字詰）	金拾五錢
半ページ	金參圓
一ページ	金五圓

明治四十年四月廿七日印刷
全　年全月三十日發行

不許複製

發行者　平瀬與一郎
編輯者　中堀末吉
印刷者　川勝静三郎
印刷所　合資商報會社

京都市上京區烏丸通下長者町北東前町十四番戸
發行所　平瀬介館（電話九百七十四番）

大賣捌所
京都　東枝律書房
東京　東京堂
全　東海堂
全　北隆館書店
大阪　大華書堂

明治四十年一月十九日第三種郵便物認可（毎月一回二十日發行）

明治四十年四月二十日發行

（禁轉載）

介類雜誌

第一卷

第四號

目次

明治四十年五月二十日發行
明治四十年一月十九日第三種郵便物認可（毎月一回二十日發行）

THE

CONCHOLOGICAL MAGAZINE

A MONTHLY

DEVOTED TO THE STUDY OF JAPANESE SHELLS.

PUBLISHED BY Y. HIRASE.

VOL. I. MAY, 1907. No. 5.

CONTENTS.

Notice: The subscription price for foreign countries is $ 1. 50 per annum. All letters and communications should be addressed to Y, HIRASE, Shimo chōja-machi, Karasumaru, Kyoto, Japan.

明治十九年二月創刊

東京人類學會雜誌

毎月一回二十日發行 明治四十年四月二十日發行

定價壹部金拾五錢 （郵稅金壹錢）

第二十二卷 第二百五十三號目次

發賣元 東京市京橋區尾張町一丁目一番地 隆文館

委托發賣所 同市本鄉區本鄉六丁目五番地 哲學書院

博物學雜誌

毎月一回廿五日定時發行 定價一册金拾四錢郵稅共

第八十號目次

發行所 東京市神田區五軒町一番地 動物標本社

三版

留岡幸助編

二宮翁と諸家

定價金三十錢（郵稅金四錢）

本書收むる所總て是れ二宮尊德翁に關するもの、批評あり、論說あり、逸事あり、雜感あり、是れ皆當代の名士が西洋思想を以て二宮翁をこなし上げたるもの、苟も國家の進善、社會の救濟等を企圖する宗教家、政治家等の諸君は必ずや之れを一讀するの價值あり

◉動物學雜誌

第十九卷 第二百二十二號

（每月一回十五日發行）

（石版圖版二枚附）
（定價金二十錢）

明治四十年四月十五日發行

目次

發賣所

東京神田區表神保町　東京堂

仝日本橋區通二丁目十八　裳華房

仝本鄉區元富士町　盛春堂

博物之友

每月一回二十五日發行
定價金拾貳錢郵稅五厘

第七年第三十九號（明治四十年四月）

目次

發行所　東京市下谷區練塀町十番地市河三喜方　日本博物學同志會

賣捌所　東京市神田區表神保町　東京堂



刊として此程其第一號を發行せり斯學界唯一の好雜誌たるを失はず

●大坂朝日新聞評　本誌は介類に關する唯一の學術雜誌にして本號に記載するもの岩川氏の「貝類の採集に就きて」を始め永沼氏のかひの名義考あり本邦海產介類圖說は卷頭の寫眞版と待つて面白く其の他雜錄、雜報、各欄共に斯道學界の注意すべき事項多し

●東奧日報評　自然の美は陸にありては花なり海にありては介類なり介類の形態の奇、光澤の艶、斑彫刻の美、不世の興味あり然るに介類に興味を有する人甚だ少なし本誌は此の興味を分かたんが爲めに平瀨與一郎氏の發行せるものなり挿入の介類の版畫頗る美なり

●上州新報評　多年介類を蒐集して我國產介類の參考に資せんとしたる平瀨與一郎氏が介類研究者の媒介たり紐帶たらんとして發刊したるもの口繪には日本海產貝類十數種鮮明なる畫圖を挿み諸大家の祝詞及諸名家の記事多し動物學を研究し貝の美を賞せんとする者には好侶伴たり

●靜岡新報評　今回新に發行されし介類に關する研究雜誌なり本邦名士及佛獨米清國の人の祝詞あり本邦海產介類圖說同上備考貝類の採集に就きてかひの名義考其他あり極はめて眞面目なる學術雜誌なり新刊には輕佻浮華なる雜誌の多き今日この種の雜誌に特に多くの尊敬を拂ふを躊躇せず

●河北新報評　本邦產介類の研究甚だ幼稚なるを憂へ廣く材料を蒐集して介類研究者の媒介たり紐帶たらんことを期し併せて介類に關する趣味を養ひ眞好なる風尙を導かんとすといふ卷頭に挿入せる版畫亦た極めて美なり

●東京每日新聞評　貝類の採集に就きて（岩川友太郎）かひの名義考（永沼小一郎）本邦海產介類圖說、同上備考、日本陸產貝類の分類綱要、は本號の主要目次にして卷頭に日本海產貝類の貴重なる、コロタイプ版三葉を挿入し記事平易にして貝類に關する一般の智識を網羅せり

●九州新聞評　本誌は現今貝類の趣味を解する者乏しく、折角海水浴若しくは登山の如き好機會を有するに關らず波打つ際に寄貝を踏み、森幽き邊に蝸牛を看過するなど毫も注意を拂はざるを憾し之れが手引を爲し、智識を與へんとするものにて雜誌の體裁は彩色又は彫刻頗る鮮美にして有益の資料たらんか

●馬關每日新聞評　本誌本邦產介類の研鑽幼稚なるを慨し斯界に完美せる好標本を供提し又分類學上、分布學上に貢獻せんとて發刊されたるもの卷頭の標本圖先づ流石京都だけありて、こつたるもの又其內容に至りても大に見るべく「本邦海產圖說」「貝類の採集に就て」（岩川友太郎）「かひの名義考」（永沼小一郎）等其の一讀の價値ありとす而して紙質の鮮麗なるに至りては我雜誌界多く見ざる所とす

前號正誤

頁	段	行	誤	正
五	上	五	Corhicula	Corbicula
一六	上	七	薄枚	薄板
一六	下	四	fryeinetii	freyeinetii
一六	下	六	val.	Val.
一六	下	六	fryeinetii	freycinetii
一六	下	一二	仝	仝
一六	下	一三	仝	仝
一七	上	一	仝	仝
一七	上	二	仝	仝
一七	上	六	tosan	tosana
二〇	下		挿畫顚倒	
二五	下	三	B. bensoni Ad.	B. simplex Pils.
二七	上	一〇	Japonica	japonica
二七	下	七	adelopoma	Adelopoma

し、永遠に其健全なる發達を遂げんことを斯學の爲めに切禱に堪へず。

●京都日出新聞評　海陸諸介を蒐集さるゝと多年藏する所の標本數千種の多きに及び今尚介類を研究する平瀨與一郎氏ハ發行する所にて頗る眞面目なる專門雜誌なり載する所本邦海產介類圖說、同上備考、日本陸產貝類の分類綱要など讀むべし

●農工雜誌評　介類の研究を主とする月刊の專門雜誌にして介類研究の熱心家平瀨與一郎氏の主宰する所なり健全に成長して永く學界に寄與せんことを望む

●中央新聞評　本誌は我國一流の介學者平瀨與一郎氏の編輯發行する所にして本邦唯一の介類專門雜誌なり編纂の体裁動物學雜誌に酷似し內外の斯學者の祝辭を初め本邦海產介類圖說貝類の採集につきて(岩川友太郞)日本陸產貝類の分類綱要等有益なる研究多し學界の爲め健全なる成長を祈る

●信濃日報評　世に研究する者の少數なる科目を專門として書籍雜誌を出版するの困難なる實に察するに餘りあり平瀨與一郎の貝介に於ける熱誠至れりと云ふべし當號は貝類のコロタイプ圖版三枚を口繪とし岩川友太郞氏、の貝類の採集に就て、永沼小一郎氏のかひの名義考及び本邦海產介類圖說同備考、日本陸產貝類の分類綱要、其他雜錄雜報にて紙質の堅實精白、印刷の美を盡せる殆んど他に見ざる所なり

●高田新聞評　本誌は介類に精通せる平瀨與一郎氏の爾來貝類の研究遲々として進まず本邦產の珍稀空しく外國の研鑽に任せつゝあるを慨き斯道に資せんとて發行せるものなり口繪には彩色石版寫眞版等あり記事には「本邦海產介類圖說」「貝類の採取に就きて」、「貝の名義考」等あるが趣味ながく深き雜誌なり

●報知新聞評　海水產物中特に介類に精通の聞ある平瀨與一郎氏が盡力發して行斯界に貢獻せむと欲するの念に出でたるもの內容は總て科學的にして一讀の下吾人の發明する處少からざる有益の雜誌なり

●下野新聞評　介と言へば太古を聯想し蜃氣樓を聯想し海濱を聯想し化石を聯想し貝合せを聯想し從軒を聯想す皆美しき聯想也今や之等を共に聯想せらるべき更に一人を加へぬそは新たに介類雜誌を發行せる京都の人平瀨與一郎氏也氏は開も淡路の閑流にして海陸諸介を蒐集するの多年全國殆んど採集を經ざるの地なく藏する所の標品既に數千種に達し就中氏の發見にかゝる新種凡そ八百種を數ふるに至り此間財を散じ勞を積みしも實に意想外也といふ植物の牧野富太郞氏と好一對に非ずや氏が發行の主旨に曰く不肖の介類を蒐集せしは珍品異類を藏して獨り自ら娛まんとしたるにあらず私かに本邦產介類の研究甚だ幼稚なるを憂へ廣く材料を蒐集して一は以て自己の研鑽に資し一は以て內外諸學者に成るべく多種の完備せる標本を供し聊か分類學上分布通上に貢獻し本邦產動物學の欠陷を補ひ且つ敢て水產學化石學及び進化論に寄與する所あらんと欲せし也)又(現今此趣味を解する人甚だ少なく折角海水浴若しくは登山の如き好機會を有するに[illegible]拾はず波打[illegible]際に[illegible]踏み[illegible]を違に[illegible]年に看過する[illegible]は[illegible]ざるもの多きは何ぞや是れ畢竟介類に關する智識に乏しく興味をかん起するに由なければ也是に於て本誌は之が手引を供し智識の鍵を以て趣味の寶庫を開き以て其好なる風尙を利導せんことを期すと以て其の抱負の那邊にあるを知るべし本號收むる所は日本海產貝類彩色石版二枚、日本陸產貝類寫眞版一枚、內外諸家約二十名の祝辭祝歌本邦海產介類圖說、全上備考、貝類の採集に就て、かひの名義考、日本陸產貝類の分類綱要、法螺貝の話、新聞雜誌より拔萃せる雜報等云々

●東京朝日新聞評　貝類の研究と蒐集に依つて其名を知られたる平瀨與一郎氏主宰の本誌は月

雑報

●貝釦の製造に付きて

拝啓陳者貴舘御發行の介類雑誌第一號雑報中貝釦の製造狀況に關する記事有之候が小生は現に斯業に從事しつゝある職工に候得者今御參考迄に其記憶せる處を御一報申上候

扨而此貝釦なるものは明治廿五年頃大阪にて始めて製造せしものありしやに聞及び候次で神戸にて外商八十五番舘ツインケレル社（獨逸人）が此業を始め候當時は中々の盛況にて職工は二百人以上を使用し仍ほ本國より二人の授業師を雇聘し職工の養生に從事したる事も有之不肖も右職工生の一人に候ひき然かるに同社は都合により其後本國に引き上げ卅三年頃よりは一時外商百番舘の事業となりしも現今は神戸東洋貝釦製造所の營業と成り居り候扨て八十五番舘に雇聘されたる二人の獨逸人の中一人は社と共に歸國致し一人は今猶ほ河内近村に在りゾンスキツエルと申す仁にて獨逸にては有名なる職工と聞き及び居候

爾來斯業に意を注ぐもの多く相成り終に今日の如き盛況を呈したる次第に候

當營業家の所在地（大略）

神戸、西之宮、尼ヶ崎、西成郡、大阪、東成郡、河内、大和、堺、紀州、淡路、讃岐、播州龍野、豊後佐賀關等

就中大阪の如きは數十ヶ所の工場あり隨而職工も五百人以上は有之候其他監獄にて斯業に從事せる處神戸、姫路其外一二ヶ所有之由に候

從來使用したる原料貝名

長蝶貝、眞珠貝、鮑貝、蝶貝、座貝、夜光貝、玉貝、榮螺貝、廣瀬貝、高瀬貝、烏帽子貝、

以上の内現今重に使用せらるゝは廣瀬貝及び高瀬貝の二種に候此高瀬貝は沖繩南洋及び印度の採收品と聞及び候

製品の販路

販路は年々廣まり輸出取引をなすもの神戸外國商舘にても數十を數ふるの盛況を呈し候特に戰後は注文益多く同業者は明に繁忙を極め候仍ほ内地向は概ね粗品に御座候先者亂筆を以て以上御報告申上候　（上北峰吉氏報）

●貝類保護の急務

近來は濱崎の濱を云ひ天保山附近を云ひ貝類の濫獲甚しく殆んど食用に供せられざる豆同樣の小貝に至る迄漁り尽して餘すなき有樣なるが古老の話に據れば昔時は蛤貝平貝赤貝等夥多なりしも近年に至りては全く種切れの樣にて多く見當らず今にして何とか保護法を設けざれば現在の白貝等も軈ては絶無に歸すべしと嘆じ居れり　（鹿兒島新聞）

●藻貝移植試驗

本縣水産試驗場の藻貝移植現況を聞くに須田技手主任となり去る三十八年度以來那賀郡大潟濱内三十二町歩の面積に毎年約二十石を移植したるが尚四十年度の事業として藻貝種二十石を過般岡山縣より購入不日現品到着の上移植すると同時に前年度の事業に對し具体的調査をなし其成績を公表し將來の參考に供すと　（德島毎日新聞）

●本誌の批評　（[illegible]）

●人道評　本誌は京都の平瀬與一郎氏が這回新たに發行せられたるものなり。氏は特志なる介類研究者なるが、其發行の趣旨に曰く「不肖海陸諸介を蒐集するもの多年、北は千島を窮め南は臺灣に及び、全國殆んど採集を經ざるの地なく、藏する所の標品已に數千種に達し、就中不肖の發見にかゝる新種凡そ八百種を數ふるに至れり。其間財を廢し勞を積みしこと實に讀者意料の外にあらん、而かも今に至って其窮め得たる所を案ずれば、啻って眞理の蒼溟に秘義を探りし古先輩の歎を反覆せざる得ざるなり」と云々と、吾人も氏が苦心の径路を聊か見聞したるもの、氏が今日の此雑誌を發行するに至られしを祝

蜃食(オホハマグリ)之其所ニ食貝積聚成ニ岡（字ニ云貝化石のある丘を見て古人の誤説をなせるもの）

久慈郡密筑(ミツヤ)里海濱石決明(アリビ)　棘甲嬴(ウニ)　魚貝類甚だ多し

（四）　豐後風土記

海部(アマノ)郡　此郡ノ百姓ハ並ニ海邊ノ白水郎(アマ)也因テ曰ニ海部(アマ)郡ト（註曰和名抄海部（安萬）白水郎は蜑戸也）續日本紀文武二年九月豐後國獻ニ眞朱ヲとは此地の産乎とあり

（五）　肥前風土記

松浦郡玉島小河之側神功皇后の鮎を釣玉ふ所なり土佐風土記に吾川郡玉島或云神功皇后國巡之時御船泊ニ之皇后下ニ島休ニ息磯際ニ得ニ一白石ニ圓如ニ鷄卵ニ皇后安ニ于御掌ニ光明四出皇后大喜詔ニ左右ニ曰是海神所ニ賜白眞珠也故爲ニ島名ニとあるは肥前の玉島と附會したる説なりとも云

逢鹿驛　登望(トミ)驛　大家(オホヤ)島　値嘉(チカノ)嶋共に蚫(アワビ)　螺(サザエ)あり（蚫和名抄本草云鰒一名蚫和名阿波比崔禹錫食經云石決明○螺和名抄漢語抄云細螺之太々美）

値嘉島の條に取ニ木皮ヲ作ニ長蚫(ナガノシ)　鞭蚫(ムチノシ)　短蚫　陰蚫(カゲノシ)　羽割(ハワリ)蚫等之樣ヲ獻ニ於御所ニ

彼杵郡の條に白珠の事あり眞珠の事なるべし

大略此の如し尚ほ漏れたること及他國の風土記にある所など參考の爲め記載あらまほし



シヾミ　美嚢郡志深里　所ニ以號ニ志深ト者伊報和氣命御ニ食於此井ニ之時信深貝遊ニ上於御飯筥縁ニ爾時勅云此貝者於ニ阿波國和那散ニ我所ニ食之貝哉ト故號ニ志深里ニ字一按するに播磨にては現に蜆をチヾミ貝と發音する者あり蓋しシヾミの訛りなり俗人のみならずチヾミと發音するにや此志深村は歴史上有名なる縮見岩屋の在所也是れ正しくは志深の岩屋と云ふべきを里人の訛りしまヽ縮見の岩屋と呼びて之を史上にも記するに至りしならん風土記に曰於奚袁奚天皇等所ニ以坐ニ於此土ニ者汝父市邊天皇命所ニ殺ニ於近江國摧綿野ニ之時率ニ日下部連意美ニ而逃來隱ニ於惟村石室ニ然後意美自知ニ重罪ニ乘馬等切ニ斷其筋ニ逐ニ放之ニ亦持物按等盡燒レ廢之ニ即經死之爾ニ二人子等隱ニ於彼此ニ迷ニ於東西ニ仍志深村首伊等尾之家所ニ役也(以下略す)和名抄日美嚢郡志深(之々美)名跡志日有ニ志染庄縮見岩屋ニ履仲天皇ニ皇子所ニ隱云按此二皇子卽履中帝孫此爲ニ子誤○此皇子の事に就ては顯宗紀に詳なれば一々記さず遁ニ入播磨國縮見山石室ニ而自經死とか或は縮見屯倉首忍海部造細目也の文字あるを見るなり

（二）出雲風土記

意宇郡野代ノ海螺子海松ヲ產す

蜛蝫　島根郡ニ蜛蝫島周り十八里一百步高三丈

島根郡に凡ソ北海所ニ捕の内に烏賊　蜛蝫　鮑　蠑螺　蛤貝（宇或作ニ蚌菜ニ）　螺蠣子　白貝

秋鹿郡北海所ニ捕には烏賊　螺　貽貝　蚌

出雲郡北海所在蚫氣多島に螺子あり

神門郡神門の水海に玄蠣あり

（三）常陸風土記

行方郡霞の浦の條に白貝　辛螺　蛤　多生　和名鈔に白貝唐韻蛤蜊色立成於保）

多珂郡海有ニ鰒魚ニ大如ニ八尺ニ并諸種珍味あり

那賀郡平津ノ驛家　上古有ニ人体極大自居ニ丘壟之上ニ採

此の說に由ると、太古の原始的軟体動物は、多少發達した頭部を有つてをつて、其の餌食を磨碎するに足る丈けの、原始的の齒を有つてをつたものと假想せらるゝ。此の假想から推論して、此の原始的軟体動物が、一方には活潑な生活に應化し、其の諸体部が發達進化して、頭足、腹足、掘足の有舌類となり、又他方には不活潑、即ち堕食の生活に應じて、其の諸体部の退化を來たし、或は又滋養欠乏の爲めに、其の既得の体部を失つたものとするか、或は又他の三綱のやうに、高等な体部を得ることが出來なかつたものであらうと論定するのである。

但し二枚介類の幼蟲が、其の初め外部に見はれてをる口を有つてをり、又目を有つてをるにも拘らず、生長するに從つて、口は次第に瓣を以て被はれ、目は其の成熟する遙か以前に於て全く消失する事實は、二枚介の頭部及び咀嚼器を有せない事を說いて、退化したのだとする議論の强い証據とすることが出來る。

古風土記中の貝類記事

大上宇一

古風土記とは今より一千二百年前即ち和銅年間勅により撰び奉りしものにて播磨出雲常陸豊後肥前の五ヶ國に關するもの即ち是なり今同書中に散見する貝類に關する記事を參考の爲に左に抄出す。

（一）播磨風土記

細螺(シタヾミ)　揖保郡少宅里(ヲヤケノサト)の條に細螺川所‐以稱‐細螺川‐者百姓爲レ田闢レ溝細螺多在‐此溝‐後終成(ク)レ川故曰‐細螺川‐

白貝(シロカヒ)　同郡浦上里の條に白貝ノ浦昔有‐白貝‐故因(テ)爲レ名

烏賊(イカ)　宍禾(シサハ)郡石作里の條に伊加麻(イカマ)川大神占レ國之時烏賊在‐於此川‐故曰‐烏賊間(イカ)‐（注曰國圖有‐五十波(イカバ)村‐讀云‐伊加八‐即烏賊間也）

がある、之れは寒武利亞、志留利亞、及び泥盆三系の代表者と見るべきものである）から發見せられた軟体動物の種類は四百種に近く、今日存在してをる大分科の代表者は皆之れを含んでをるのであるが、然し古今相類似してをる点は甚だ少いのである。

軟体動物の分類

軟体動物を分つて四個とする。卽ち頭足類、腹足類、掘足類、斧足類などである。此等の名稱は皆其運動器官である足を形容したものであつて、此の足の官能は脊椎動物に於けると、少しも異つた事はない。

頭足類にあつては、足卽ち腕は、頭或は口の周圍に齊等に配列してをる。イカ、タコなどは此の類である。

腹足類は、腹面卽ち蹠で匍匐する、蛞蝓、蝸牛、海螺などは此の類である。

掘足類は、兩端の開いてをる管狀の長殼を有してをる、しかして其の細長い足で坭を掘つて、其の中に住むのだと想像せられてをる。角貝は其代表者である。

ペリシポダは、總ての二枚貝類を含んでをる。此の足は概して斧頭狀をなしてをる。

或學者は以上に加ふるに翼足類（プテロポダ）を以てして五個とする、翼足類は遠洋に住んで、夜は海面に浮び、晝は沈降して、海水の冷かな所に止つてをるのが常である。頭の両側に翼狀の足を有つてをつて、之れでもつて游泳する。で、或學者は之れを腹足類に屬せしむる。また或學者は全く之れを別綱とするので、其の位置がまだ確定しないのである。思ふに之れは腹足類の變化したもので、遠洋生活に適するやうになつたのであらう。

又或學者は、頭足、腹足、掘足の三類を總稱して、有舌類（グロソフオラ）として、二枚介類を無舌（アグロサ）とする。之れは全く多くの齒列を有つてをる紐狀の舌、卽ち齒舌を有つてをると、否とに由つて區別したものである。

もない。また深海は暗黒で寒冷であるから、生物の發生を催すには適しない。其の發生に不適當であるにも拘らず、今日此等の深海、洋面に無數の生物を見るに至つたのは、そも〳〵如何なる理由であらう。惟ふに是れは皆最初他所に發生して其の繁榮を極めたものが、後こゝに移住したものであらう。

深海とは反對で、海岸に近い淺海では、海流は不定であり、明暗は相交つてをり、其の上變化に富んでをる。其の變化は決して極端でなく、極めて好く調攝されてをる。また温度と潮汐との影響が著しいから、植物がこゝに發生する。其の發生した植物は愈繁榮を極める。さうして動物の餌食となるのである。此る良好の場所が先づ準備せられて、其所に無數の動物が發生したといふ事は、更に疑を容るべき餘地がないやうである。

さて軟体動物もまた此る順序で、海中に發生して來たのであらう。さうして此軟体動物は海中で、種々の憂き目に逢つた。怒濤は容赦なく打ち、岩石は無遠慮に碎き、滿潮は之れを汀に導き、退潮は之れを空しく沙上に殘して、鳥獸の貪食に任せるのである。また空氣、光熱の破壊作用に暴露せらるゝ。此くて彼等は幾多の迫害を甘受しなければならぬ。魚類の來つて之れを嗜むのもある。水禽の之れを啄むのもある。時としては同種相害することもある。此る狀態であるから、自然に「適種生存」の理が行はれて、こゝに無數の種類が起つて來る事となる。

此くて彼等の多くは硬殼を被り、或は砂を掘り、或は岩石を穿ち、或は岩石に固着し、遂に種々の習性と形狀とを有するに至つたのであらう。

此の軟体動物の原始の形狀を、比較解剖學に基いて、説明しやうとした學者もあつたが、其の形狀の如何なるかは、まだ今日まで確定するに至らない。

カムブリアン地層（化石を有する最古の地層で、日本では太古層と石炭系との間に、厚さ凡四百米の無化石層

Purpurinae.

× Separatista chemnitzii, A. Adams.

○ Rapana bezoar, L.

Ricinula ricinus, L.

● Purpura tumulosa, Reeve.

× 〃 rudolphi, Lam.

Muricinae.

● Murex ternispina, Lam.

〃 brevifrons, Lam.

× 〃 penchinati, Cross.

〃 adustus, Lam.

〃 luvidus, Midd.

× 〃 ramosus, L.

（追加）山内豊威氏採品目錄中の一部

Polinices mamilla, L.

〃 simiae, L.

Philippa cingulum, Kien.

Guildfordia triumphans, Phil.

Ptemotus pulchra, Gray.

Ricinula sp.

Chlorostoma sp.

Finla reticulosa?

Globulus sp.

此他野澤氏標品中未同定のもの二十余種を存す

軟体動物の起原

地球上に生存する總ての生物は、其の太初を尋ぬると皆海中に發生したもの丶やうである 是れは有名な諸學者の一般に承認する所である。然し此の廣大無涯の海水の何處でも、悉く生物の發生に適するといふ譯ではない、一寸考へても其れは明白る。かの森渺たる太洋の水面には、生物の隱れ住むべき家もなく、其の休息すべき場所

Columbellidae.

○ Columbella sp.

○ „ sp.

„ sp.

Olividae.

× Oliva mustellina, Lam.

Mitridae.

× Mitra sp.

Volutidae.

Lyria cassidula, Reeve.

Nassidae.

× Nassa sp.

× „ sp.

× „ sp.

Eburninae.

● Eburna japonica, Reeve.

Pisaninae.

○ Euthria plumbea, Phil.

Neptuniinae.

● Siphonaria cassidariaeformis, Reeve.

Buccinadae.

Melongeninae.

○ Hemifusus tuba, Gmel.

Fusidae.

Fusinae.

× Fusus perplexus, Adams.

● Fusus nicobaricus, Lam.

Tritonidae.

× Ranelia sp.

× „ bufonia. Gmel.

● Triton nodiferus, Lam.

Muricidae.

× „ moneta, L.

○ Cypraea helvola, L.

× „ poraria, L.

× „ flaveola, L.

× „ lynx, L.

× „ carneola, L.

× „ isabelli, L.

× „ cruenta. Gmel.

× „ tigris, L.

× „ nuculeus, L.

× „ errones, L.

× „ artuffeli, L.

„ miliaris, Gmel.

Strombidae.

× Pterocera lambis, L.

● Strombus canarium L. var. isabella, Lam.

● „ floridus, Lam.

● „ luhuanus, L.

Conidae.

× Conus miliaris, Hwass.

× „ nocturnus.

× „ tessellatus, Born.

× „ fulmens, Reeve.

× „ pauperculus, Sowb.

× „ omaria, Hwass.

Pleurotomidae.

● Pleurotoma principalis, Pils.

● Clathurella sp.

Terebridae.

× Terebra sp.

Cancellariidae.

● Cancellaria asperella, Lam.

○ „ sp.

Rotellidae.

● (Umbonium) moniliferum, Lam.

● („) costatum, Lesson.

Neritidae.

× Nerita pica, Gould.

× Nerita ampla, Phil.

Pectinibranchiata.

Cerithiidae.

● Potamides multiformis, Lischke.

○ Cerithium citrinum, Sowb.

Scalaridae.

× Scalaria japonica, Dkr.

Onustidae.

× Xenophora pallidula, Reeve.

Calyptreidae.

× Crepidula sp.

Naticidae.

Natica ampla, Phil.

Doliidae.

× Pyrula reticulata, Lam.

× Dolium luteostoma; Kust.

Cassididae.

● Cassis glabrata, Dkr.

× „ rufa, L.

× „ strigata, Gmel.

× „ vibex L. var. erinacea, L.

Cypraeidae.

○ Cypraea caput-serpentis, L.

○ „ arabica, L.

○ „ vitellus, L.

○ „ anulus, L.

Tectibranchiata.

Bullidae.

● Bulla vernicosa var. ovula, (Gld.) Sowb.

× „ sp.

Prosobranchiata.

Scutibranchiata.

Edriophthalma.

Patellidae.

Patellinae.

● (Helcioniscus) toreuma, Reeve.

● („) amussitatus, Reeve.

● („) nigrolineatus, Reeve.

× Patella sp.

Acmainae.

● Acmaea saccharina, L.

Podopthalma.

Haliotidae.

○ Haliotis diversicolor, Reeve.

× Haliotis gigantea, Gmel.

● „ „ „ var. discus, Reeve.

Trochidae.

○ Monodonta labio, L.

● (Chlorostoma) nigricolor, Dkr.

○ („) pfeifferi, Phil.

○ („) argyrostomus, Gmel.

● (Lamprostoma) squarosus, Lam.

● (Tectus) obeliscus, Gmel.

× Trochus sp.

× Delphinula distrota, L.

Turbinidae.

× Turbo coronatus, Gmel.

● „ cornutus, Gmel.

Veneridae.

● Tapes amabilis, Phil.

● Tapes philippinarum, A. & R.

● Tapes variegatus, Hauley.

● Cyclina chinensis, Chem.

● Dosinia troscheli, Lischke.

Tapes euglyptus, Phil. 本品ハ第二高等學校ニアリ

× Dosinia troscheli, Lischke,

× Circe sp.

● Meretrix meretrix, L.

× Cytherea sp.

● Gomphina melanaegis, Röemer.

× Chione sp.

Tellinidae.

● Psammobia elongata, Lam.

● Soletellina boedinghausi, Lischke.

× Soletellina olivacea, Jay.

● Tellina nasuta, Conrad.

● „ dissimilis. Martens.

× „ vulsella, Chemn.

Paphidae.

● Paphia striata, Chemn.

Mactridae.

● Mactra sulcataria, Desh.

Myacidae.

● Mya arenaria var, japonica Jay.

Solenidae.

× Solen gouldii, Conrad.

● „ grandis, Dunker.

● Solecurtus divaricata, Lischke.

Gastropoda.

Opisthobranchiata.

× " irregularis, Sow.

× " plicatus, Chem.

Limidae.

× Lima episcopalis, L.

× " Sp.

Spondylidae.

○ Spondylus sinensis, Sowb.

● " ducalis, Chemn.

Heteromyaria.

Pinnidae.

○ Pinna attenuata, Menke.

Aviculidae.

● Malleus albus, Chemn.

● Vulsella lingulata, Lam.

● Meleagrina martensii, Dkr.

Mytilidae.

○ Septifer virgatus, Wiegman.

● Modiola senhausii, Reeve.

● Mytilus hirsutus, Lam.

Homomyaria.

Arcidae.

○ Pectunculus vestitus, Dkr.

● Arca rhombea, Born.

Arca subcrenata, Lischke.

● Arca granosa, L.

○ Arca obtensa, Reeve.

× Arca sp.

Siphonida.

Integripalliata.

Cardiidae.

○ Cardium papyraceum, Chemn.

Sinupalliata.

雜　録

土佐産貝類目錄

松　島

土佐はよいとこ南を受けて薩摩あらしの吹く度毎に海岸に珍客の集合する時々耳にする所なり去三十八年五月在高知親友野澤愛三氏より數十種の貴重なる標本を送られ又同年十一月同氏の紹介によりて山內豐咸氏の採品目錄も送らる他に博物館目錄及內山氏の記載を案じ總括して土佐産貝類目錄となす

愛讀者諸君中本目錄記載の外品種發見さるれば直に本誌へ御報告あらんことを希ふ

○　野澤氏送品
●　博物館備品
×　山內氏藏品
無印　內山氏の記事より

Lamellibranchiata.

Asiphonida.

Monomyaria.

Ostreidae.

○ Ostrea denselamella, Lischke.
● Ostrea cucullata, Born.

Anomiidae.

○ Anomia ephippium, L.

Pectinidae.

● Vola laqueata, Sowb.
● Amusium japonicum, Gmel.
○ Pecten crassicostatus, Sowb.
● „ laetus, Gould.
× „ spectabilis, Reeve.
× „ mollitus, Reeve.

産地、フイリッピン
長、〇、八五吋、

第四十三圖
シデレア（トライオンより）



白色にして、赤褐色の方形点を
不規則に散らし、不明瞭なる結節
狀の肋と螺脈とを有せり」
珊瑚礁上に住し又低潮に際して石下に發見せられ、
稍フトコロガヒ屬 (Columbella) に似たり」

○日本陸産貝類の分類綱要（第五）

（陸産　第五版付）

シクロフオリデイ科、Cyclophoridae.
シクロフオルス屬、Cyclophorus.　第五十五圖
レプトポマ屬、Leptopoma.　第五十六圖
ヂヤポニア屬、Japonia.　第五十七圖
シクロタス屬、Cyclotus.　第五十八圖
スピロポマ屬、Spiropoma.　第五十九圖
シアソポマ屬、Cyathopoma.　第六十圖
アリカエウス屬、Alycaeus.　第六十一圖
アリニア屬、Arinia.　第六十二圖
パライナ屬、Palaina.　第六十三圖
ディプロムマチナ屬、Diplommatina.　第六十四圖
プピナ屬、Pupina.　（コベルト氏貝譜參照）
プピネラ屬、Pupinella.　第六十五圖

烏介　　西行法師
浪よするしらゝの濱のからす貝
拾ひやすくもおもほゆるかな

雀介　　讀人不知
波よする竹のとまりの雀貝
うれしき世にもあひにけるかな

彩色、殼面は帶黃褐色にして、八條の狹き栗色帶を繞らす」

ウシラ亞屬、Usilla, H. Adams.

シンギユラタ、V. Cingulata, Gould.

(圖ナシ、トライオンより)

產地、日本大島、低潮に見はる、石下にあり、

長、十二ミ、メ、直徑、六ミ、メ、

形狀、殼は重厚にして小さく、卵樣塔狀をなし、平滑なり、螺層は七階にして、稍や膨れ、殼項は顆粒狀をなし、体層大きく、殼口は卵形にして狹く、唇は斜向して七齒を具へ、內部に細帶を有し、殼軸は凹めり」

彩色、表面は帶褐赤色の帶と黃色の帶と相交互し、(其間に脈を有し)內唇は赤色なり」

もと Planaxis(プラナキシス)屬として記載せられしものにして、其儘に之をプラナキシス屬に屬せしむるも不可なかるべく、又 Vexilla(ベキシラ)屬とするも或は Pisania(ピサニア)とするも別に不可なきが如し」

レイシダマシ亞屬、

レイシダマシモドキ(吉川)

R. Marginatra. Blainv.

(トライオンより)

產地、濠洲、中部ポリネシア、

長、〇、七五乃至一吋、

形狀、外形變化多く、縱肋は螺肋と相交りて結節を起せり」



第四十二圖　レイシダマシモドキ(トライオンより)

彩色、殼面は帶褐色にして、結節は暗色を呈す、口內は帶青色にして、「チヨコレート」色の隆起線を有し、其隆起線は厚唇上にある四五ヶの白色或は暗黃色の結節に終り、兩唇は「チヨコレート」色を彩れり」

シデレア、R. Siderea, Reeve.

(トライオンより)

なり、前種よりも殼質薄く、縱肋分明ならず、螺肋の鋸齒は長くして尖り、全面に針を樹てるが如し、龍骨の扁刺は火焔狀をなして內方及後方に卷曲し、細脉を欠ぎ、前種よりも一層美麗なり」

彩色、內外共に白色なれども、表面は往々淡褐或は淡紅を彩ることあり」

本種はテンニヨノカムリ及ミヅスイと共に稀品中に數へられ從て價頗る貴し」

キキヨウニシ 介志、R. D-Burghiae, Reeve.

（海產、第八版、第六十七圖）

產地、伊豫福浦、

長、一寸三分、刺を加へたる徑一寸七分、

形狀、高さ低くして壓扁せられたるが如く、螺層脹れ、水吸の如く分離することなく、殆んど扁球形をなし、殼質薄く、彫刻は前二種に似て更に細密なれども、華蘚の如く刺をなさず、天女冠の如く著しき縱肋なく、全面細

鱗狀をなして刺に及び、刺は廣くして三角形板をなし、兩唇は簡單にして、臍孔は水吸に似て小さし」

彩色 極めて淡き黃褐色にして、刺上に微紅を彩る」

トライオンの書には DeBurghiae を水吸と同種なりとせり、日八譜の華蘚は多分此種なるべきも、區別の爲めに介志に從ふこととなしぬ」

同上備考（第三）

ハタガヒ屬、Vexilla, Swains.

ハタガヒ 新稱、V. Vexillum, Chemn.

產地、小笠原母島、

長、五分內外、



第四十一圖 ハタガヒ（原圖）

形狀、殼は亞圓筒狀にして、螺塔低く、螺層膨れ、殼口長く、前溝短く後溝深し、全面平滑にして、不規則なる生長線を見る、

色となれるものも亦少からず」

第六十四b圖は幼貝の上面、同c圖は幼貝の前面なるが、余の標品中に第六十四d圖(上面)及び同f圖の如き物ありて、殆んどミヅスイとキキヨウニシとの中間の形を有し、bとdとを比較し、cとfとを比較すれば、dは刺內曲せず、fは臍孔大きく、水管溝の上部の縊れなきを見るべし、若し多數の標品を採集することを得ばミヅスイとキキヨウニシとを連絡するに至るやも測る可らず、現にトライオン氏は此兩者を同種とせるものゝ如し、

テンニヨノカムリ(天女冠)介志、

R. japonica, Dkr. (ヅンケル氏)

(海產第八版、第六十五圖及同a、同b圖)

產地、紀伊田邊、

長、一寸七八分、

形狀、殼質重厚、螺塔は高くして尖り、肩角の龍骨にはミヅスイの如く細脈を有せる牙狀の扁刺を具ふるも、內曲の度少く、肩部は比較的平坦にして、牙形の小扁刺を有せる二列の小龍骨あり、全表面に美麗なる鱗狀の螺肋を有し、肋緣は殆んど鋸齒狀を呈し、肩角以下の部は殊に著しく、十二三行の縱肋を被ひ、臍孔はミヅスイよりも小なり」

彩色、內外共に白色なり」

第六十五a圖は本種の幼貝と思はるゝ物の前面、同b圖は同上の上面なり」

クワセン(華蘚)介志、

R. Lischkeana, Dkr. var(ヅンケル氏)

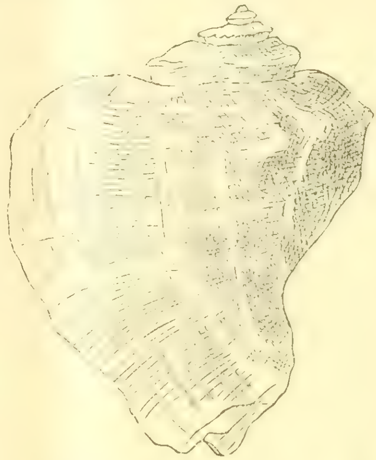
(海產、第八版、第六十六圖)

產地、紀伊田邊、

長、一寸五分內外、

形狀、前種に酷似し、其幼貝に非ざるかと疑はるゝ程

bezoar よりも平滑にして薄く且脹らみ、或は bezoar の一變種ならんと記し、其圖版も此所に轉寫せる如く、極めて平滑なるを見れば、チリメンボラが果して bulbosa に適するや否や、稍疑なき能はざるも、今暫く、岩川、內山両氏に從ふてとゝなしぬ」



ブルボサ（トライオンより）

ミヅスイ（水吸）**亞屬**、Latiaxis, Swainson.

螺層は多少相分離し、龍骨を具へ、殼口小さくして三角形を呈し、水管溝は狹長にして反曲せり、動物及厴は未だ詳ならず」

ミヅスイ、六介、R. mawae, Gray.

（海産、第八版、第六十四圖、同a圖、同b圖、幼貝上面、同c圖幼貝、同d圖幼貝上面）

產地、紀伊田邊、土佐柏島、（支那及フィリッピンにも）

長、一寸三分內外、

形狀、上方の螺層は肩部のみを見はして、平坦なる螺塔をなし、其中央に粟粒狀の原殼突出し、体層は斜に前方に降り、其降るに從て肩部漸々脹れ、体層の前部は殼軸を離るゝに從ふて肩部漸々脹れ、內唇の中央は其体層の先端に接するに至る、肩角は龍骨を具へ、其龍骨は內曲せる牙形葉狀の薄き突起を起し、緣は微鋸齒狀を呈し、其突起の新しきものは中空なり、臍孔は大にして深く、其緣は不規則なる鋸齒狀をなし、両唇は鋭し、全表面は布目狀の彫刻を有し、其美麗なること吾人の指頭の渦紋に似たり」

彩色、表面は帶白乃至淡黃褐色にして、口內は新鮮なる標品にありては美麗なる淡紫色なれども、褪色して白

(海產、第七版、第六十一圖及第六十二圖)

產地、全國、(支那及フィリッピンにも)

長、第六十一圖の標品五寸內外、第六十二圖の標品二寸內外、

形狀、殼は形狀大小の變化非常に多きも、概して螺塔低く、螺肋或は螺脈を具へ、生長線は平滑なるか、或は粗き葉狀突起を有し、螺層の肩部は扁平にして、外唇內には螺溝を具へ、唇緣に至りて齒狀を呈す」

彩色、表面は淡褐色にして、概して縱走せる暗褐色の斑紋を有し、又不明瞭なる同色の点線を繞らし、口內は美麗なる肉紅色を呈す」

トライオン氏は肋と葉狀生長線とを具ふるものを模式形とし、以前別種として記載されし、平滑にして只だ螺脈のみを有する標品を本種と同一なりとし、或は本種の一變種(var. thomasiana, Crosse.)(第六十二圖)として存するを得べしと記せり、但し其外唇內の螺溝は栗色なり」

チリメンボラ R. bulbosa, Solander.

(海產、第七版、第六十三圖)

產地、淡路、阿波、(支那、フィリッピンにも)

長、二寸內外、

形狀、殼は螺塔低く、肩部膨れ、体層には三四條の大肋と、多數の小肋とを繞らし、葉狀をなせる生長線と交りて、縮緬樣の皺或は鱗をなす、就中肩角に當れる一肋と、下部を繞れる一肋とは殊に大にして、鱗狀突起を有し、外唇緣に至りて稍深き切れ込を生じ、肩角の突起は上方の諸螺層に及び、縫合部は陷沒せり」

彩色、外面は曇りたる帶黃褐色にして、口內は白色、或は柑色なり」

余は此標品を佛國Dautzenberg氏及英國スミス氏に送りしに、兩氏共にR. bezoar, Linn. 即ちアカニシと同種とせられたり、又トライオンの書には bulbosa を

形狀、殼は紡錘形にして、肩角を有し、圓き縱肋は密接なる**隆起螺線に横ぎらる**」

彩色、褐色或は帶黑色にして、口內は淡紫褐色或は菫色なり」

シマレイシダマシ、R. musiva, Kiener.

（海產、第七版、第五十九圖）

產地、櫻島、（フィリッピンにも）

長、六七分

形狀、殼は紡錘形にして、螺塔尖り縫合線上の結節著しく、体層にも凡そ五螺列の結節を有し、凡そ八九行の縱肋をなし、結節間に三四條宛の細溝を繞らせり」

彩色、殼面は淡黃褐色にして、結節は褐色の列と黑色の列と交互せるを以て、容易に他種と識別することを得べし、口內は淡肉色にして、二三條の暗帶あり」

五十九圖の標品は岩川教授よりレイシダマシモドキとして分與せられたるものと同物なるも、余は暫くヒルスブリー氏の說に從ひて之をmusivaと推定し、レイシダマシモドキは別に之を備考中に記してトライオンの書にある圖を添ふることゝなしぬ」

コレイシダマシ 新稱、R. Paucimaculatum Sowb.

（海產、第七版、第六十圖）

產地、八丈島、小笠原母島、

長、三分內外、

形狀、小形にして、螺層は中央に肩角を有し、大なる縱肋とまばらなる螺肋とは相交りて角立ちたる結節をなし、螺肋間には更に細脈を繞らし、殼口は長卵形にして、外唇內に齒を有し、前溝部は短くして反曲せり」

彩色、白色乃至淡褐色にして、結節は概して栗色なれば、まばらなる栗色の点線を繞らす」

本種はトライオンの記載なし」

アカニシ屬 Rapana, Schum.

アカニシ R. bezoar, Linn.

動物はグールド氏の記載によれば深綠色にして、外套足及觸角は淡綠色に白色の細點を有すとぞ」

ウ子シロレイシダマシ 新稱 R. anaxeres, Duclos.

產地、琉球、屋久島、（海產、第七版、第五十六圖）

長、五分餘、

形狀、レイシダマシよりも少しく小形にして、肩角高し、

彩色、レイシダマシの反對と云ふ可く殼面は暗色を呈し、結節は淡色にして、往々殆んど白色を呈し、口內は暗紫色なり」

トライオン氏は彫刻はモルスに似るも、レイシダマシは一層酷似すと云へり」

シロレイシダマシ 岩川 R. ochrostoma, Blainv. =R. spectrum, Rve.

產地、喜界島、屋久島、琉球、（海產、第七版、第五十七圖）

長、一寸二三分、

形狀、殼質重厚、紡錘形にして、幼貝は螺塔の高さと殼口の長さと略ぼ相等しく、結節著しきも、長ずるに從て、螺塔比較的に高くなり、兩唇厚くなりて、殼口狹窄し、結節幾分か磨滅し、白色の汚物を被むるに至る」

彩色、內外共に白色なり」

トライオンの書によれば、結節、縱肋、螺脉、の發達種々にして、變形頗る多く、異名亦多く、彩色も往往乳色或は黃色を帶ぶることありとぞ」

ウ子レイシダマシ新稱、R. undata, Chemn.=R. margariticola, Brod.

產地、肥前、薩摩、大隅、（支那、濠洲、等）（海產、第七版、第五十八圖）

長、七八分、

R. morus, var. asperus, Lam.

（海産、第七版、第五十三圖）

產地、土佐

長、五分內外、

形狀、本種にありては縱肋曖昧なれども、此變種にありては縱肋著しく、深き螺溝に横ぎられて結節狀をなし、其結節は本種に於けるよりも狹くして鋭し」

彩色、縱肋は黑乃至褐色にして、肋間白く、口內は菫色なり」

變種、**ハチヂヨウレイシダマシ**新稱

R. morus, var. borealis, Pils.

（海產、第七版、第五十四圖）

產地、八丈島、

長、五分內外、

形狀、殼は本種よりも小形にして、結節頗る高く、短刺をなし、縱肋及大小の螺肋著しく、美麗なる鱗狀をなす」

彩色、殼面は白色にして、口內は菫色なり」

本種は余の標品によりて、ピルスブリー氏の新變種として記載せられしものなり」

レイシダマシ 岩川、R. tuberculatus, Blainv.

（海產、第七版、第五十五圖）

產地、薩摩、琉球、（フイリッピンより布哇に至る）

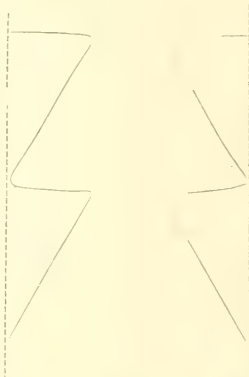
長、六七分、

形狀、殼質重厚にして外形變化多く、レイシダマシに酷似せるも、レイシダマシの如く結節の螺列間に一條の細肋を具ふる代りに、多くの螺脈を有し、殼口狹く、外唇內に齒あり、シマレイシダマシにも酷似すれども殼口の形によりて區別するを得べし」

彩色、レイシダマシと異なり、表面暗褐色にして、結節黑く、殼口は暗褐或は黑色を呈し、齒及內唇の一部は白色なり」

より、任意なり。

抽斗を設ける方法は左の如し、戸棚の内部には高一インチ、廣八分の三インチにして上部に至るに從ひて擴張せる水平なる幾段の棧を板に固着す、左に排列の狀を示さんか



一インチの抽斗にありては其全く外部に向へる端は棧の角度に適する樣傾斜す、かくて抽斗其突出せる所を出入するの裝置なり、又一方の抽斗に於ては抽斗の頂から一インチの所に一の突出せるレールを置かば同一の用をなさん、かくて抽斗は相互に密接せる場所を失ふことなし戸棚の戸はガラス又は板の戸を可とす。戸柱の内部にゴムの薄片を固着せしむれば戸の閉ぢたる際之を壓迫して有效なる塵除けとなる、凡て個々の抽斗にガラス蓋を使用せんとすることは甚だ危險多きのみならず、常に多額の費用を要す、蓋し上述の如き戸棚は實際上實用的塵除となるものなり、各匣には其内にある標本の種名番號産地を記せる鮮明なる帖札を付すべし、底を倒にせる箱は各抽斗の族及種を分類するに使用せらる、此等介類に使用する爲、適當なる大さの護謨の小札は帖簿店にて購入し得べし

○本邦海産介類圖説（第五）

レイシダマシ亞屬、Sistrum, Montf.

モルス R. morus. Lam.（トライオンより）

産地、ポリネシア、

長、〇・六乃至一吋、

大抵白色（時としては樹色）にして、結節黑く、（時としては彩色なし）内部は淡紫色なり）

變種**クチムラサキレイシダマシ**新稱

もの即ち是れなり。

壜脆弱なれば壓窄せるコルクを使用するとき往々之を破損する恐れあれば、コルクは回轉又は强壓して柔くしたる後使用すべし、之をなすに鉛製の釘抜を必要とす、種の番號はコルクの上に記入するか、又は小紙片に記入して壜中に入れ置くべし、大にして壜中に收め能はざるものは、インキを以て直接殼上に記入すべし、かくする時は抽斗の覆る如きことありとも容易に發見し得べし、かく番號を附せる上は其壜及び標本を盆に藏むべし、

此淺匣に對しても亦標準形を定むべし、陳列戸棚の抽出に適合すべし、ワシントン國立博物館にては其單位を縱二インチ横一インチと定め此より以上のものは皆其倍數をなせり、費府博物館に於ては其單位を縱三、横一インチとす、双方の場合に於て中間の大さは縱三横二又は一、二分の一インチの大さなり、場所を要すること緊急ならば其標準を大ならしむるを便利とせん、小形のものは壜の長さを僅かに一インチ四分の一となし、二個の壜を一の淺匣中に入れ、かくて抽斗の容量を倍加し、淺匣の深さを均一ならしむべし、大抵の單殼介は半インチあれば充分なり、より大なる種、及びユニオニディにありては之に相當の大さを要す、四分の三インチ位あらば足るべし、此等の匣は紙箱製造所より買ふべく、採集者自ら合紙の一種なるカードを切りて容易く造り得べし、但し隅々は護謨を塗りたる紙片にて密着せしむることを要す、採集品を入るゝ箱は採集者各自の財力と嗜好とによりて決せられんも淺き抽斗付戸棚を可しとす、然れども之を新調せんとする時は、交替自由なる抽斗を有せる標準大のものを造るべし、標準大とは外部にて其深さ一インチのものを云ふ、而して其長と巾は必ず等しからしめよ、二列の抽斗ある戸棚ならば十九インチ四角位が便利なり、其他は深さ二インチ、又は三インチ位にてよきも三インチのものは比較的其用少なし、戸棚の高さは抽斗の數に

も大採集には絶對的必要なり、而してカードの大さは一定して且携帯に便なる様なさしむべし。

各項一枚宛のカードを充てんとせば小カードにて可なるも、場所の經濟上一枚のカードに出來る丈多數を記入せんとせば圖書館用のカード位が好當なるべし、かくせば廿の記入をし得べし、試に其雛形を揭ぐれば、

Albolabris (Say	Polygyra
No.1.Ann Arbor, Mich.	No.
No.	No.
No.	No.
No.	No.
No.	No.
No.	No.
No.	No.
No.	No.
No.	No.
No.	No.

上段に種名を記入し、各個に付き記入番號及び産地を順次下に記下す、此の如きカードは採集者をして一見或る種が自家採集物中にあることを知り得るのみならず、其産地をも併て知ることを得て一々逐號目錄を繰るの煩を免るべし、此カードは適當の抽斗又は箱に入れ、又異なる屬及及び科の下にA、B、C、順に排列し置くべし、屬を示す見出しカード(普通のものより稍高さ)は之を格段の所に嵌入すべし、博覽會に出品するときは通常カード上又は一定の區域内に飾るべし、然れども私人の聚集に於ては此の如き排列は誤れり、何となれば研究の際標本取扱に不便多ければなり。

直徑一インチ以下の標本は小硝子壜に蓄藏し置くを便とす、此小壜は賣藥店にて購入し得べし、其大さは標本大のものとし、頸を有せざるものを用ふべし、其長さは使用せる淺匣の標準大による、余は之を別ちて四種とす、直徑四分の一、二分の一、八分の五、八分の七インチの

採集物の善惡は左の二要素を具備すると否とによりて之を知ることを得、

(一) 標本其物の撰擇及び調製

(二) 產地の事情に關する絕對的詳悉

不眞不淨の標本に對しては何等辯解の辭あるなし、又採集者の野外作業の精細なる記錄を存せざるは同じく失敗なり、例へばポリギラアルボラブリスの如き普通標本を充たせる抽斗ありとせんに、若し其產地を明記せざらんか、標本の掃除充分なりとするも全く價値なし、之に反し數十百個の各地產標本を充たせる一個の抽斗も各產地を正確に記載せるによりて其國の介類界に大なる貢獻をなさん、學術上の名稱は何時にても訂正增補し得べきも、其產地の誤りに至ては之を一度すれば遂に訂正の期なからん、故に採集者は之に關する記錄を作り置き、決して其記臆にのみ信賴する事なき樣注意すべし

されば採集又は掃除の際は產地の異なるに從ふて此を區別し、一々記號を附し置くべし、軟体動物地理學上分布の研究も亦介類學研究の中尤も重要なる分科なり、此研究をして有效ならしめんには採集者の絕對的に正確なる行動に因らざるべからず。

標本の排列

標本の藏め方並びに排列法は各自の任意なるべきも、目錄は肝要なり、而して學術的に收錄すべし、爾かせば標品の增加に際し、再び之を調製するの煩を免るべし、尙又逐號目錄及びカード目錄をも備へざるべからず、各種の增加品は受領次第標品中に加へ、逐號目錄中に記入すべく、帳簿の行數は固より隨意たるべし

普通の雛形左の如し

種族番號	種ノ番號	名稱	發送人	產地	摘要
1	5	Polygyra albolabris (Say)	何某	何地	

カード目錄は小形採集品には單に便利と云ふに過ぎざる

す蓋を保存すべし、是れまた標本の一部にして之れあればそれ丈標本の價値增加すべければなり、蓋は容易に肉より離し得るものなれば、よく掃除したる上、殼の內側に入れ、綿にて殼孔を塞ぎ、殼の附着物は蓋と共に充分に洗ふべし、凡そ水産介類は多少石灰質又は酸化鐵を以て表面を覆はるゝ傾あれば、蓚酸に漬けて之を除くべしされど、若し漬け過ぎすときは介の組織を侵蝕する恐あれば注意を要す、尚之にて成效せざるときは酸類を用ゐよ、Angyli も亦此の如き表皮を有すれど數分間倒に之を酸中に浮べ、然る後柔刷毛にて徐ろに掃除すればよし、大形の二枚介は充分に之を洗滌すべく、必要あらば小刀にて磨くべし、但之が爲に表皮を損せざる樣注意を要す、又之を煮るもよし、さらば介は口を開き、体部を拔去るに便ならん、然れども規則として肉柱を切斷し体部を排去するを更に便なりとす、之には薄刄の小刀を使用すべく而て之を挿入するの際脆弱なる殼を破損せざる樣注意し且凡ての動物質は痕跡を止めざる樣除去すべし、洗滌を終りたる後は糸にて之を結び合せよく乾燥せしめよ、但色糸は介を染むる恐れあるを以て使用すべからず、蓚酸又は鹽酸を用ゐれば如何なる殼面の附着をも容易に除去するを得べし、特に鹽酸は大形種に使用して著しき效あるものなれば、小ブラッシュに付けて試みよ、但し其際注意を加へ、且屢洗滌し、殼を損せざらんことを期すべきものなり

小形の二枚貝例へばスフィーリヤ、ピシディア等の如きは數日間之を稀薄なるアルコホールに漬け、後之を乾燥せしむるを可とす、若し漬くること長きに過ぐれば介殼開きて標本の外貌を損する恐れあり、大形スフィーリームは去肉せざるべからずして、それには煮るか又は數日間アルコホールに浸せ、此等諸介は極めて小形なるため糸にて縛り難きことあるべし、其時は蝶鉸の柔軟なる間に、綿、紙に包みて乾燥せしむべし。

て何かあらん。

偖て全然肉を拔出せる後は水銃にて能く殼內を洗滌せよ屈伸自在の銅線に海綿の小片を結び付け、之を以て內部の粘液を除け、掃除不充分のまゝにて乾燥せしむれば、甚だ標本を醜穢にするものなり、殼の外部は柔軟なる歯刷又は爪刷にて擦掃すべし、かくて內外共に掃除了らば、よく內部の水氣を去り、空氣中に放置して乾燥せしむべし、但し直接日光に晒すを避けざるべからず、陸產介類に對して其何種たるに係らず油又は酸類を使用すべからず、小形の種類は前述の去肉法によらんよりは、先づ之を乾燥せる所に置き体部の殼內深く隱るゝを待ちて一兩日間二十五度のアルコールに漬けよ、最も漬けるの長き丈肉の硬さ加はらんも、必要の程度は二十四時間位にて足るものとす、斯くて後之を空氣中にて乾燥せしむれば惡臭を止むることなかるべし、尚ほ乾燥の前後何れにても其介類を清潔なる砂に混せ、壜に入れて振蕩すれば汚物は全く除去せらるべきなり、陸介を解剖用に供せんとせば溺死せしめたる後アルコール又はフォルマリンに漬くるを可とす何となれば初めより此等の液に漬くれば体部を深く殼內に縮め從つて肉身の緊縮を來たし、解剖上甚だ困難を感せんも、之に反して溺死せしむるときは体部膨張するものなればなり、此方法に依りて蝸牛を殺すには一日を要す、アルコールハ初めは稀薄なるを用ひ、二十五度以下とすべし、かくて一兩日間經たる後之を五十度のアルコールに移し、後更に純アルコールに移せ、二度のフォルマリンも亦最も此種の目的に適する防腐劑なりとす

プラノルビスの大形なるは例外にて、煮たるのみにて掃除容易なり、河產單殼類にありては之を煮沸するも、將た稀薄のアルコールに浸けるも其結果に大差なく、何れにしても体部を拔くに些の困難を覺えず、淡水產の微細なるは小形の陸介と同一方法に依るべし、有蓋類は必

必ずや沸騰せしめざるべからず、且各個一様に煮えしめんが爲に同形大のものをば同時に煮よ。

又介を煮る間之を支持せんために、長柄の附ける針金製濾器を使用するを便とす、何となれば直接介類を煮器に入れんか取上ぐること困難にして爲めに度を過すの恐あればなり、煮沸の時間は介類の大小及び種類によりて差異あり、若し煮沸充分ならざれば肉柱の緊着依然たるため体部脱落せざるべく、度過ぐれば肉身方裂し易く爲之を拔出すに困難を覺えん、例之 Polygyra monodon 大のは十秒より Polygyra albolabris 大ならば六十秒等の差異あるが如し若し如何程煮て可なるか、これが適當の時間を知らざるときは、各種につき一二個づゝ試煮するに若かず、又体部を抽出すには温度の失せざる間が善きものなれば、一度に多數を煮るは不利なりと知るべし、体部を抽出するに當つては充分注意して徐々に行ふべし、急なれば螺頂部に肉を殘して斷絶すべければなり、此の拔出を行ふに便利なるは有鉤鑷なるが、其他種々の鉤を安全ピンにて作り得べく、之に附するに小なる木柄を以てすれば自ら有效器具を得べきなり。

其端の頗る尖鋭なる齒科醫用水銃も亦欠くべからざるものゝ一なり、鉤にて拔出し難きとき又は斷れそうなる時などには之を用ふべし、射水の勢にて其困難を除き去らん、然らば螺頂肉の斷れたるときは如何にすべきかといふに握潰さぬ樣に介を持ち、股の上にて激しく拳を打て若し其れが得難き標本にして損害を恐るゝならば、二十四時間之をアルコールに漬け、殼に殘りし肉片の緊縮するを待ちて水銃を用ゐて脱離せしむべし、殼孔に齒牙を有する種類に對しても直ちに鉤を用ひ難きものなれば、先づ例の水銃にて強く水を注ぎ体部の促出せらるゝ時鉤を使用するを可とす、尤も水を注ぎたる全肉の脱出さるることあり、特に小形の種類に於て然りとなす、若し忍耐と我慢とあれば何種の標本たりとも之を清掃するに於

躑ニ而附レ石ニ生スル者也、兼名苑註ニ云、石花（花或作華）二三月ニ皆紫ノ舒レ花ヲ附レ石ニ而生スル故ニ以名レ之。とは今猶セイともカメノテ（龜ノ手）とも又シヒ（椎）とも云へるものにて岩礁の浪打ちかくる裂隙に群棲し浪を被る每に殼を開きて紫色の鬚を出し之を振ひて小動物を捕へ食す其狀花の如く美觀なり而して浪退けば復殼口を閉づ此擧動は二三月と限らず嚴冬の外皆然り（）此名の初見は萬葉集卷第三にて同書卷第三に石花海とあるは今の海にて又卷第十二に

馬聲（イ）蜂聲（ブ）石花（セ）蜘蟵（クモ）荒鹿（アルカ）

とある馬聲は馬のイヒヽといなゝく聲にて即イの假名、蜂聲は蜂の羽を振ふ時の響にて即ブの假聲其餘石花は即セ、蜘蟵は蜘蛛にて即クモ、荒鹿はアルカなれば此十字にていぶせくもあるかと訓むなり、又同書に鬱悒とかきて「いぶせく」と讀ませたり義は心ともなしと云ふに同じ其書きざまの奇なれば茲に云ふ（）本草には石蜐とあり閩書に龜脚の一名あるは甚吾名稱に似通へり此者今は稀に海士の子等が採て其肉脚を生食するを見るも古は是をしも珍味とせしにや延喜式に踐祚大嘗祭の時の料に淡路國の潜女十人を役して採らしめしと見えたり。其餘出雲風土記等には所々に麗々しく石華の産を序列せり

陸産及淡水産 軟体動物採集の栞（承前）

ブライアント、ウオーカー 著

某生大意摘譯

標本の掃除及び其調製

大形のヘリクスは、其肉一たび凝固すれば之を除去すること殆ど不可能となる、されば解剖學上の目的に供せんとならば格別、然らざる以上はアルコールに浸すべからず、其死せざるに先だち、速に煮るを可とす、生殼は此種に特有なる臭氣を發し、加之決して好標本たることなし、而して之を煮るの程度は、温湯にては充分ならず、

ダーウヰン氏に先んずると三百年已に生物進化の一大原則を僅に三十一音を以て世に公にせられきと猶上人の歌中之に類するものあれど玆に用なければ云はず貝上人が歌集中に貝の歌數を出で、後人の手に成れる三十六貝歌撰など云へる書の歌の過半は其供給を此集に仰ぎたるを思へばいかに上人が在世の時之を翫ぶもの多くして而かも他の歌人が難しとして多く詠まざりし歌題をも自由自在に詠し去られしはげに比類なき一大詩人とてそいふべけれ

㊂更に和名加世の義を攷ふるにてはウニの殼より來る名と見るべし且此名は古く催馬樂にも見え今も仍諸國の海士往々之を稱し或は轉じてガツヽなど呼べるもウニと云へる名は古書に見えず是ぞ却て肉膏の名にふさはしく或は其色丹赤色なるに取りて海丹の義とも解すべき之に對へてガゼは殼の形に取りて毬栫の義又ガツヽは頓て毬筒の義にて此カは即イガの上略なり

○催馬樂に出でたる歌は今よりして見れば賭博、又閨門を越ゆる等のことに得で、風紀上いかゞと打傾けらるゝも少なからず此我家の曲もあはれさはいへ（アハビ、サダチウ、カセ、の三ともに特に介類のみを列ねしは皆一の上喩と見ては一篇の主旨貫徹すべからず、さて上件日記、本草、佛書等古書の例を擧げて之を論及し又「さて此うたも、何事にかつきて、うたひしならん大君きこせ、犂にせんといふよりして、たゞの言がらならず、なまめかし、もあり○借本抄には石陰子の次に列せし項は「靈鸁子 本草ニ云靈鸁子。（漢語抄ニ云蝶甲蠃、字仁）貌似橘而圓。其甲紫色、生芒角者也」されはウニの名もいと古き名とおぼしく、從てカセと重複せるを見るべし、此次に尨蹄子の一項あり是も貝類ならざれども外形幾分か貝に似たるにより之をしも貝類なりとしたれば猶玆に揭げて參考に供す

尨蹄子　崔禹錫食經ニ云、尨蹄子（和名勢）貌似ニ犬

㈢次に石陰子に就て考ふるに恐くはイガヒに似て小なるカヒの海中岩石の間隙に固く繫著して群栖する所のものにて俗にカラスガヒと稱するものならんか其肉の形も亦イガヒに似て不與なり是石陰子と云ひ陰精と云へるに能く叶へば也但からすがひと稱する貝はまち〳〵にて色の黑きものには大方此名あり例へばどぶがひ蚌。ながたがひ馬刀など皆しか言へりされば茲に云ふからすがひを辨じ措かんに此名は古く言塵集に烏貝とあるものにて閩書に

又有二一種形似二淡菜一而小一。名二沙簾一

とあり。之を本草啓蒙に

小にして色黑き者。カラスガヒと呼一名ウミガラス。

と註せり地方にては是をしもイガヒ或はイハイガヒ。カラスノクチバシなどゝさま〴〵に稱へ口善惡なき蜑の子はあらぬ名をもてさへづるもあり。俗間位上人が「内院二條に貝合せんとせき給ひけるに人にかけりて一其

「浪よする白良（しら）が濱のからす貝ひろひやすくもおもはゆる哉」

と詠せしも是にや予曾て阿波の撫養（むや）より夜をこめて鳴門にあくがれいでしときそが貝殼の三つ四つ五つ白砂の中にちらばひて浪にさへ打ぬれたるさまゝばもさまでに黑黑き有明月にかゞやきてうばたまの夜の目あやなる餘の貝よりは一きはまさりて見え渡り夫の上人の詠ども寂しき胸に浮び出でそゞろに昔を忍びやう〳〵涙を漏さざりにき

今時の物しり人此歌を評してあまり理窟に過ぎて詩の範圍を越えて本旨に叶はずと評したるはさるべきことながらこは上人がさる理窟より割出でたるにあらで只目のあたり見たるまゝを詠せしがかくゆくりなくダーウヰン氏が云ふ生物保護色の原理を背面より檢證したるに當りて不思不構の間にかく宇宙の眞理をも漏しながらさることゝは自らも曉らざりしなるべし。故に曰上人は無爲にして

條並に賦役令の輸雜物を云へる條共に

甲嬴六斗

とあり其餘甲嬴の名は臺記別記にも出でたり又出雲風土記秋鹿郡の條なる甲嬴にはウニと點せしは前後の齟齬を免がれず况んや之をウニと見る時は諸國より輸調せる量の六斗は極めて過大なるに驚かざるべからず。蓋精煉せるウニ即肉膏の料は其每一個中瓢子乃至小豆大に過ぎざる極小量の卵巢を取り蒐めて之を醃藏せしものなれば其價極めて貴く其用は一種の嗜好物にて主として酒の下物たるに過ぎず如何ぞ之を諸國に課して數十石を調貢せしむることあらんや。惟ふに斯く斗を以て量るものなれば拳螺の如き稍大なるものにあらざるや必せりさらば之を普通食品となすべき多產性の螺類に徵するに延喜式。賦役令。出雲風土記等にある甲嬴は其本義は姑く措き今云バヒなるべし是油螺海蛳又學語篇に海嬴とあるもの也之にカセの訓を點せしは後世の業なるべけれども當時何と讀みしか詳ならず甲嬴果してバヒならば甲嬴子も亦否るべからず。或地方にては今猶之をツビと云へれば第一項のつびは或は今のバヒなるやも亦知るべからざる也。

○猶合類節用集を見るに海螺、流螺及甲螺をツブともバイとも訓みたりされば其出典を明記せざるも甲嬴は今云バヒにしてツビは其古名なりとの考は頗る信を措くに足るを知る從ひて風土記の點は倭名鈔の和名を襲ひしに過ぎずしてそが引証せる漢語抄に棘甲嬴字仁（宇仁カセ）とせしは不可無しとするも甲嬴加世とせしは愈誤たると多言を要せずして明かなり今此説と多くの古説を參考し前に揭げたる出風雲土記の訓點は左の如く改むべきか

榮螺（サダエ）今云サザエ　棘甲嬴（カセ）今云ウニ　甲嬴（ツビ）今云バヒ

然る時は賦役令延喜式風土記、山家集の歌にも叶ひて毫も勃ることなきのみならず甲嬴の甲は磨の事にて其磨は甲香とて特に香料に供するものなれば斯く甲の字を冒したる所以も自づから了解することを得べし

介類雜誌　第五號
明治四十年五月二十日發行

○國書貝名考（第二）

永沼小一郎

○第三項石陰子　本草ニ云石陰子ハ（註云、漢語抄ニ云甲贏加世）是ノ物生ニ海中ニ陰精ナル故ニ以テ名ク之。

小曰此一項は本抄中の最難義の一なり。其攷按次の如し

石陰子の名は今の本草書に見えず從て古說紛々たり　東雅云。「カゼとは凡介蟲類カといひしはカラ也カラとは甲殼あるをいひし也。セとは石花をセといふが如く、古語に石をばシといふシといひセといふは轉語也其殼堅き石の如くなるをいふなるべしサヾエとは云々今のコサヾイといふものと見えたり、云々。カゼとはナホサヾエなどいふものにやあるべき」とあれど其大小のサヾエは何を斥して云へるか今云ヒメサヾエは指頭大に過ぎずして復あまりに小に過ぎ且實用となれるものにあらず又和訓栞にカセを云ひて。

倭名鈔に甲贏をよめり。今肉膏をうにといひ殼をかせといふ佐渡にてせをにでり勢州にてかぶと貝とよべる物也實は海膽なりと云へり

とあり。されども本鈔別にウニの一項ありて其註に漢語抄ニ云棘甲贏ハ宇仁とあるを否定せざるべからず卽肉膏に棘を云ひて殼には別て之を云はざる理なければなり

其餘僅馬樂書入に

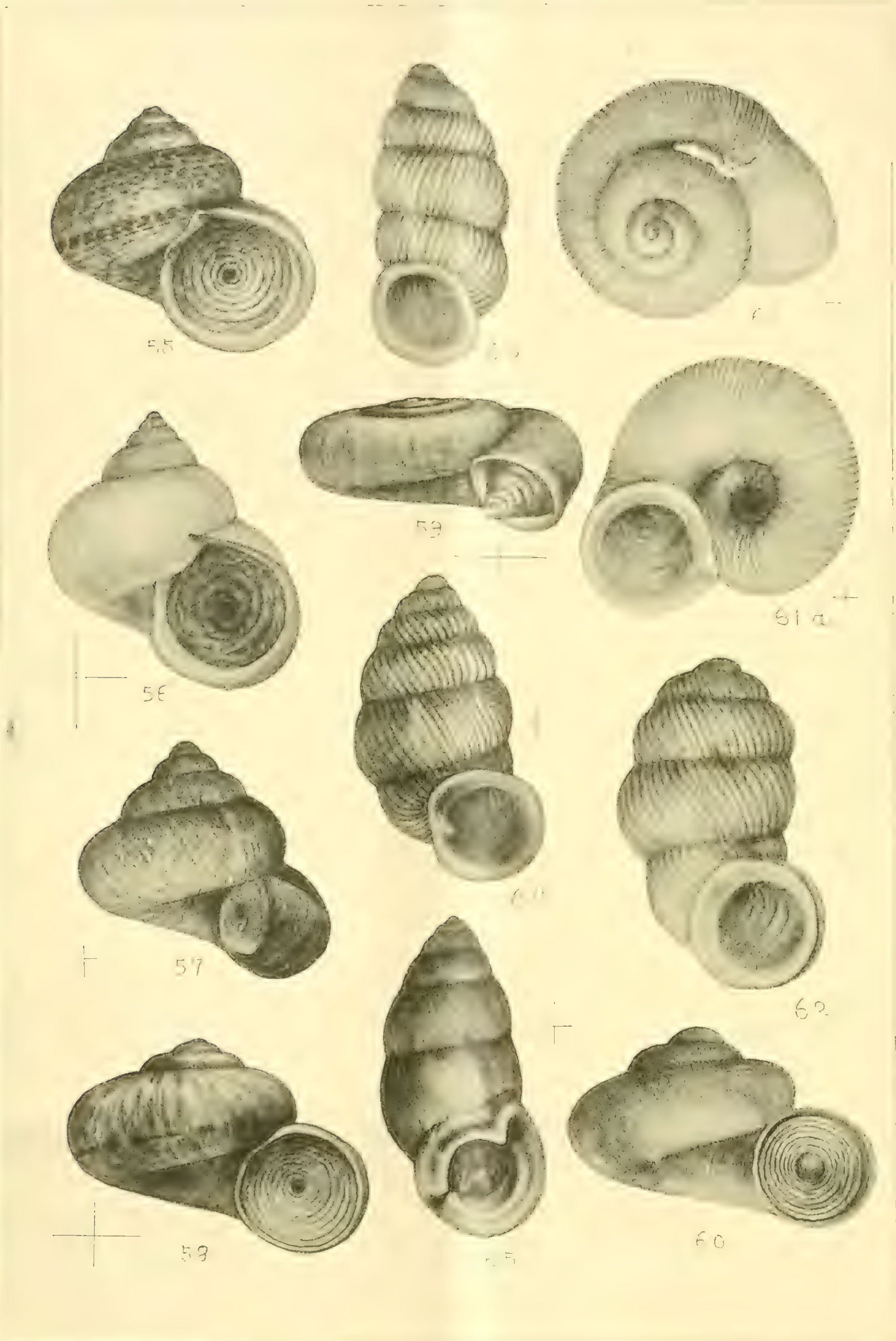
かせは黑貝也、はたて貝の事也

など云へるは論ふに及ばず

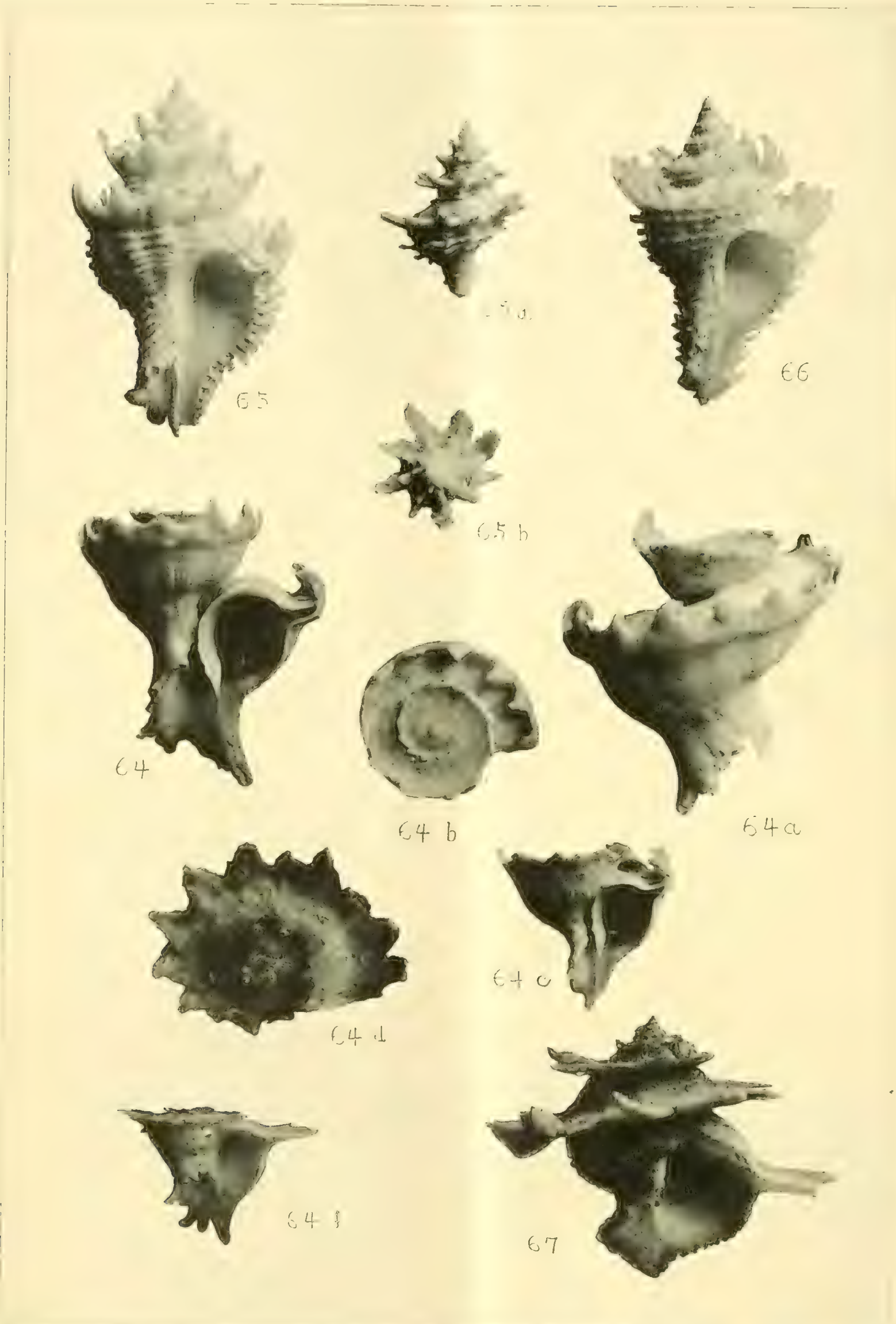
㊀今先甲贏に就て考究せんに。出雲風土記に島根郡の北海產を云へる條に

榮螺（サヽエ）、棘甲贏（ウニ）、甲贏（カセ）　今本の訓點に依る

とあり斯くウニ、カセを並說したるは甲贏は全然ウニと別なるを證左なり　又延喜式主計上の諸國輸調を云へる



55. Cyclophorus Hirasei, Pils.
56. Leptopoma vitreum, Less.
57. Japonia sadoensis, Pils. & Hir.
58. Cyclotus campanulatus, Mart.
59. Spiropoma japonicum, A. Ad.
60. Cyathopoma micron, Pils.
61. } Alycaeus(chamalycaeus)Hirasei, Pils.
61.a }
62. Arinia japonica, Pils. & Hir.
63. Palaina(Adelopoma)pusilla, Mart.
64. Diplommatina collarifera, Schm. & Bttg.
65. Pupinella rufa, Sowb.

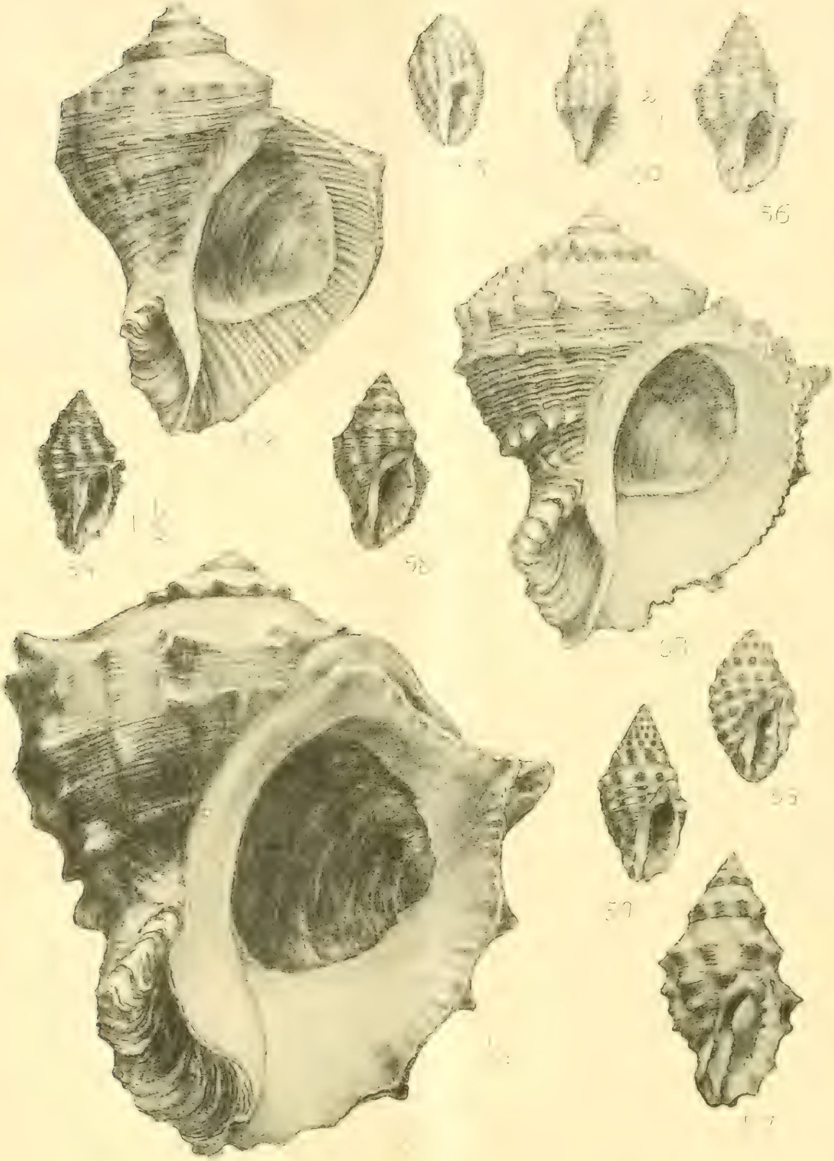


64. a. b. c. d. f. } Rapana (Latiaxis) mawae, Gray.

65. a. b. } Rapana (Latiaxis) japonica, Dkr.

66. „ („) Lischkeana, Dkr. (var.)

67. „ („) DeBurghiae. Reeve.



53. Ricinula morus, var. asperus, Lam.
54. „ „ var. borealis, Pils.
55. „ tuberculatus, Blainv.
56. „ anaxeres, Duclos.
57. „ ochrostoma, Blainv.
58. „ undata chemn.
59. Ricinula musiva, Kiener.
60. „ paucimaculatum, Sowb.
61.}
62.} Rapana bezoar Linn.
63. „ bulbosa, Solander.

本誌定價

一部	金貳拾錢	郵稅壹錢
六部	金壹圓貳拾錢	郵稅不要
十二部	金貳圓參拾錢	郵稅不要

本誌廣告料

五號活字一行（廿五字詰）	金拾五錢
半ページ	金參圓
一ページ	金五圓

明治四十年五月二十八日印刷
全年全月三十一日發行

不許複製

發行者	平瀨與一郎
編輯者	中堀末吉
印刷者	川勝靜三郎
印刷所	合資商報會社

發行所 京都市上京區烏丸通下長者町北龍前町十四番戸 **平瀨介館**（電話九百七十四番）

大賣捌所

京都	東枝律書房
東京	東京堂
全	東海堂
全	北隆館書店
大阪	大華堂

明治四十年一月十九日第三種郵便物認可（毎月一回二十日發行）
明治四十年五月二十日發行

介類雜誌

第一卷
第五號

目次

明治四十年六月二十日發行
明治四十年一月十九日第三種郵便物認可（毎月一回二十日發行）

THE CONCHOLOGICAL MAGAZINE

A MONTHLY
DEVOTED TO THE STUDY OF JAPANESE SHELLS.
PUBLISHED BY Y. HIRASE.

VOL. I. JUNE, 1907. No. 6.

CONTENTS.

Notice: The subscription price for foreign countries is $ 1. 50 (3yen) per annum. All letters and communications should be addressed to Y, HIRASE, Shimo chōja-machi, Karasumaru, Kyoto, Japan.

動物學雜誌

第十九卷
第二百二十三號

明治四十年五月十五日發行
（毎月一回十五日發行）
〔圖版二枚附
定價金二十錢〕

目次

論說

イソメ科環蟲類の二新種に就て　理學士　飯塚啓
猿類に寄生する Bertia　吉田貞雄

雜錄

●露西亞帝國產田日類●動物學者近況●昆蟲學界近況批評の一●ウントリの害●蝦蟇果して無用の長物歟●二三の蜂蟲●トリクラダ●珊瑚につき●Alcyonacea の體內發育●收縮胞の作用●本年春期三崎實驗場日誌抄●水產研究誌の發行

會報

●東京動物學會例會記事

發賣所
東京神田區表神保町　東京堂
全日本橋通二丁目十八　裳華房
全本鄕區元富士町　盛春堂

地學雜誌

第十九年
第貳百廿一號

明治四十年五月十五日發行
定價一冊金貳拾五錢郵稅壹錢五厘

論說

◎カラフトの地勢と地質　理學博士　神保小虎
◎「湖ノ湖」閉塞盆地の湖沼に就て（第二百十七號續き）　理學博士　田中阿歌麿
◎火山破裂一年中の分布に就て　理學博士　大森房吉

雜錄

◎韓山遊記　理學士　石川成章
◎山上萬次郎氏著日本帝國政治地理を讀みて　理學士　小川琢治
◎朝鮮の政治（完結）　藤田嘉三郎

圖
◎第十九年第十一版第一圖 [illegible]附近より鳳凰山を望む
第二圖安奉輕便鐵道連山關附近

會報
東京地學協會記事
◎理事會評議員會及例會

雜報
◎本邦四件　◎亞細亞五件　◎歐羅巴五件　◎亞弗利加三件　◎南北亞米利加二件　◎兩極地方及其他五件

發行所
東京市京橋區西紺屋町十九番地
（電話新橋四百十四）
東京地學協會

賣捌所
東京市神田區表神保町　東京堂
東京市日本橋區吳服町　北隆館
東京市本鄕區元富士町　盛春堂
東京市京橋區銀座四丁目　東海堂
東京市京橋區彌左衛門町　貫明堂
東京市神田區駿河臺西紅梅町　供智堂

んど同氏の手に於て養殖せるものゝ由なり食料養殖と共に採取事業も年々發達の狀態を示し居れば將來は頗る有望なる事業となるべしとの事なり（人民新聞）

●輸出向貝釦製造の計畫

播磨國飾磨郡廣村の資産家田村治作氏は今回輸出向貝釦の有利なるを認め獨力同村に於いて之が製造業を開始すべく過般來該事業に關する諸般の調査を爲しつゝありと（鷺城新聞）

●伊良湖の瀬戸貝根絶

愛知縣渥美郡伊良湖岬大字伊良湖にては從來地先海面に夥しく瀬戸貝を産し同地方著名なる物産の一に指を屈せられつゝありたるを本年一月頃元村長の職に在りたる小久保春吉なるもの潜水器械を使用し普く海底を搜索し種貝まで採獲し代金壹千金餘の賣上を爲せし由なるがそれが爲同地方の瀬戸貝は根絶するに至るならんと因に潜水器械を使用し同地先海面の海産物を採獲するは從來禁止しあれば右春吉の行爲は漁業慣例を破りたるものなりと批難する者多し（新愛知）

●蝶貝、眞珠貝

原料貝殼の輸入は年額約四萬圓前後にして英領海峽殖民地其他南洋諸島よりす、本邦に於ても亦原種の材に富めり、其加工に成れる鈕釦は獨逸の拾萬圓を主とし東西兩洋の諸島へ輸出せられ年額拾五萬圓より貳拾五萬圓の間を上下せり（都新聞）

前號正誤

頁	段	行	誤	正
一三	下	九	レイシダマシ	モルス
一三	下	一〇	同	同
一三	下	一四	同	同
一四	上	四	Hauley	Hanley

豆粒ほどのものは五六百圓の價がある。眞珠は眞珠貝の中に偶にはいつてる者であつて貝を千拾つても其中に眞珠一もはいつてゐないことがあるし一つの貝を拾つて其內に二つも玉を含んでることもあるし運よく打ちあてるものである、眞珠は眞珠貝の中に砂などはいつた時貝が自分のからだから分泌したある液で此の砂を包みこんな美しい玉になると云ふことは諸君も博物學で學ばれた所だらう貝は大抵五六寸位の徑あつて平たいもので內部はやはり眞珠の色と同じ色して奇麗なもので上等のボタンや裝飾品にこしらへて高價のものである。

眞珠取りに從事してゐるのは殆んど日本人ばかりであつて木曜島を去る六十哩乃至百二十哩位の處に行つて捕るさうである。十四五年前まではすぐ近くに居たさうであるが今は次第になくなつて遠くに行かなければ取れないとか。皆小さな帆船に三四ヶ月分の糧食を充分積んで出かけ潜水器を使ひ卽ちモグリで海中へ入つて取るのであつて三四ヶ月の中に二顆位の眞珠貝を取つて歸るさうである、運がよくて眞珠入の貝を拾つた時は數千圓の儲けをするし運が惡くて眞珠がはいつてゐなくても貝は相當の價を以て賣り拂ふことが出來るのでこの物價の非常に高いのにかゝはらずよほど暮しやすいと云ふとである。右の如く眞珠取りはいつも船を家として外に出て仕事をするから家を構る必要はない(以下略)(九州日々新聞)

●本邦に於ける眞珠業

眞珠の養殖業は恰も本邦に於ける獨占事業の觀あり隨て其生產額の如きは年々參百萬圓以上を算し輸出額も亦貳百萬圓を下らず我水產業中最も有望の事業なるや近來は單に眞珠の採取のみを目的とせず食料に供する爲めに養殖事業を營むものゝ追々增加の傾向あり從來眞珠の養成のみを主とし本邦に於ける所謂斯界の大家として多年の經驗と熟練とを以て名を爲し居るは志州英虞灣に一大養殖場を有する御木本氏にして本邦產出眞珠の大部分は殆

Arca ocelleta, Reev.	ふねがひ
〃 obtusa, Reev.	かりがね
〃 inflata, Reev.	あかゞひ
〃 subcrenata, Lischke.	さるばう
Mytilus crassitesta, Lischke.	いがひ
Septifer crassus, Dkr.	くじやくがひ
Pinna chemnitzii, Hanley.	たひらぎ
Spondylus sinensis, Sowb.	めんがひ
Pecten mollitus, Reev.	にしきがひ
Vola laqueata, Sowb.	いたやがひ
Ostrea cucullata Born.	かき
Pellina nitidula, Dkr.	さくらがひ
Mactra sachalinensis, Schrenk.	うばがひ
〃 veneriformis, Deshayes.	しほふき
Lutraria maxima, Janas.	みるくひ
Solen gauldii, Conrad.	まてがひ
Siliqua pulchella, Dkr.	みぞがひ
Pholus manilensis, Phil.	にほがひ
〃 fragilis, Sowb.	かもめがひ
Saxidomus purpuratus, Desh.	うちむらさき
Mactra sulcataria, Desh.	ばかがひ

雜報

●濠州の眞珠貝採集

此の記事は松島艦乘組少尉候補生三由榮次郎氏の遠洋航海記中の一節なり

木曜島は東西一哩半南北一哩ばかりの小島で濠州の北東端ヨーク岬のすぐ北に位して英領である。こゝは諸君も御承知の通り眞珠貝で有名な所である。目下日本人は七百人ばかり居て其の內七分は眞珠貝取りに三分は他の職業についてゐる。眞珠貝は諸君も知つてゐられる通り其の貝の內に眞珠の玉を含んでゐる此の玉は小豆形をなしたもので白いよりは美しい光を持つた實に奇麗なものだ大

して又交易をなす故に寶の字實買の字等皆貝に從ふ至秦貝を廢め錢を行ふ」とある。三才圖會にも殆同樣の事があるし浦の錦には「貝子昔は古寶として交易に用しものなり委は貝經本草に見えたり錢世に行はれて貝子すたる」とある、此貝又は貝子とあるのは此場合では寶貝のみを指したものであるがこれによつて見ると周の頃迄はこれを通貨にして居たに相違ない、又マルコポロの旅行記にも支那の南部の一部ニンナンで通貨として用ゐてをる云々のことがあるさうだ。即ち全國では秦の時にやめになつたが其南方の一部分では後世迄も用ゐ來たものと思はれる又寶買の字ばかりでなく寶を初め資貨、貸、賤貧貪財賄等貨幣に縁のある文字皆貝といふ字を持つてをるところを見ても古代の支那に貝を通用させて居たとがわかる。

フヒリッピン邊でもたしかにこれを通貨に用ゐて居たものださうだが我國で少くも內地では貨幣とした証據はないやうだ。

南洋の諸島で現に之れを通幣にしてをることは人のよく知つてをるところで上野の博物館にもニユーブリテンの土人の使つてをるものが出てをる　（完）

常陸大津産貝類（第一報ノ二）

小松崎三枝

Lamellibranchiata.　雙殼類

Meretrix meretrix, Linn.　はまぐり
Tapes philippinarum, A. & R.　あさり
Venus jedoensis, Lischke.　おにあさり
Chione isabellina, Phil.　はながい
Cyclina orientalis, Sowb.　おきしゞみ
Tapes undulatus, Born.　いよすだれ
〃 schnellianus, Dkr.　すだれがい
Diplodonta semiaspera, Phil.　うめのはな

Barth氏によるとムニヨマでは王の所得が年に三千萬個で税率は大人一人につき毎年一千、運搬用牛一頭につき同様に一千奴隷一人を使ふと二千の割合だといふ。アフリカの内地では寶貝のことをkurdi或は又simbiといふところがある。其供給は前にいつた西海岸の港からと一つは東岸のザンジバル港から回教徒の手によつてなされる。ザンジバルの近傍の海では寶貝の産出が盛んなものと見えハムブルグの或商店では年々十四艘の船を出して買ひ集めさせそれを持つて西海岸の方へいつて河を遡つて内地にもはいり込んで椰子の油などに交換した。次にあげるのは此西海岸の方の港ラゴスへ輸入された寶貝の總額だ

一八六八年	三二七五噸
一八六九年	二八〇二噸
一八七〇年	二五一七噸

此統計で見ても分る通り年を追うて少くなつたのは事實だ。

さてアフリカで此等寶貝の價はといへば西岸の方では四十個を一連とし其二連半が一ペニーに當つた。即ち百個が一ペニーである。他の地方では千で一志三片にわたるところもあるとか。この方は少し高い。スーダンでは寶貝の外に通貨として用ゐられるものがない。然るに其一弗と同じの二千個の寶貝すら數封の重量がある。此地は近來商業が漸く進歩したに拘らず人民が富裕でないのは全くこんなに重い厄介物を貨幣としてをるからだといふ。

アフリカは此位にしておいて次に支那にうつる。

本草綱目に「古者貨貝而寶龜用爲交易、以二爲朋、今獨雲南用之呼爲海貝以一爲庄、四庄爲手、四手爲苗、五苗爲索」又曰はく「雲南極多用爲錢貨交易」又紫貝のところに「南夷釆以爲貨市」とある。又「貝類極多古人以爲寶貨而紫貝尤貴、後世不見用錢」物類品隲には「古は貝をもつて寶と

ぬ。尤もこれよりずつと前アッシリアの時代にこれを用ゐた證據があるそうだ。それは彼のニチエから寶貝を發掘したといふのであるが果して貨幣にして使つたかどうかたゞ單に飾か何かにして居たのか其邊までは分らぬといふ話である。ベンガル地方では曾て一般に通貨にして居たもので其用に供するために輸入したものが凡三萬磅の價に相當したとある。其價は四千個の貝がやつと一志に相當するので六十四個を一pice 六十四 pice を一rupee sicca に當てたとか。Reeve氏に據るとカタック府に住んで居た一紳士が家を新築した其費用を悉く此寶貝でもつて拂つたところが其數が千六百萬個に達した其價はというと僅かに四百磅であつたといふ。平賀鳩溪の物類品隲に「今も咬𠺕吧ベンガラの海島にては貝を以て交易をなす名をカウルスと稱すといへり」とある咬𠺕吧はジャガタラのことだ。

暹羅では今も通貨にしてをるところがあるやうだ。其價は此寶貝の六千四百個で同國貨幣の一tical即一志六片に相當するといふ。松岡怡顏齋の介品には「華夷珍玩考曰、海𧵳被人採、積如山、淹爛內肉轉賣暹羅榜葛刺國當錢使用」とある海𧵳は海肥ともかき此寶貝のことで榜葛刺は假名ではベンガラと書いてをる今云へばベンガルだらう。

アフリカの土人は今なほ寶貝を通用せしめてをるが嘗て奴隷賣買の禁止せられなかつた頃は英國の港に寶貝の輸入せられるものが非常に多く英人はこれを携へて奴隷の賣買の盛んなコンゴーなどへ出掛けた。

原來此地方では寶貝があまり多くなかつたと見えて其價格は原產地に比して甚貴くために其利益は五倍に登つたとある。此頃其材料を供給するために輸入したものリヴアプールだけでも一年に三百噸もあつたそうだ。寶貝の通貨たるものは單に海岸に近いところばかりでなくてガンドー、ムニヨマよりチムブクツに達して居たとか。

なかつた。又死殼外皮のないガチセラフエルギニアを得たけれども、是れも亦生殼はなかつた。午後一時に寺院着。其れから四時まで、近傍を大擧して探索した。が辛うじてクローヂリヤヒラブラタを數個と、新にC.ヒコニス三個と、小クローヂリヤ一個と、生きたるユーロタルハナ變種一個とを得た。勞力に酬ゆる此の結果で、實に失望した。明日は近傍の有木村方面を探索し、今少し多數を得たいとの希望である。 (未完)

通貨としての寶貝に就て

東京　T　F　生

貝殼といふものは未開の人間には通貨として東西ともに用ゐられたもので現にアフリカや南洋の島々ではつかつてをる所もある位だ。通貨として用ゐられてをる貝類も其種類がいくらかあるが多くは貝殼の缺片を磨いたものだとか又は其他色々の人工を加へたものゝ方が寧ろ多いやうだが獨此處にいはうとする寶貝のみは最も普通に用ゐられてをる上に其儘で格別人工も加へずに貨幣になつてをる。これは其色が美しくて大きさも丁度いゝ加減で其上に他のものに混ずる憂がないから單純な野蠻人には御誂向といふ樣な譯なのだらう

寶貝の中で最も多く用ゐられた種類はといふと英語でいふ Money cowry 學名 Cypraea moneta が第一で其外 C. annulus, C. mauritiana 等もある樣だ。

印度のマルヂヴ諸島、セーロン、アラバル岸それから東印度諸島は此 Money cowry の澤山產するところで從つて印度では餘程早くから貨幣に使つて居たと見え七世紀の頃既に次の樣な數學の問題が出來てをる。

「或人乞食に一ドランマの半分の三分の二の四分の三の五分の一の十六分の一の四分の一を與へたら Cowry の數は如何

といふのであるがドランマといふのはどの位だかわから

から落ちる滴とで、困難を極め、外套も通さんばかりであつた。が之れにも屈せず、一倍奮勵して探索した。椎の木の下の土の面を這つてをるユーロタルハナ變種を數個得た。兩人更に採集に力めた結果、此の日の收獲は十一ケの生殼と一ケの死殼とであつた。ガチセラも數個を得たけれど、多くは破れてをり、又は幼いので効をなさない。其れから一層進んで、杉林の暗い所に行つた時に、デプロムマチナカツサを得た。尙はゾニテイデイの數種を少しと、クロージリヤビラブラタと思はれるもの數個と、一ケ宛のプレクトツロピスと、ヘリシナジヤポニカとを得た。午後六時に歸宿。午後は雨歇む。此る努力で、其の得た結果は、あはれ此くも少數であつた。

八月廿二日、晴。午前七時半から、案內者に伴れられて、大滿寺山に向いて出發した。八時半に有木村に着い此所にて案內者を返へし、木匠要戶金太郎氏に賴んで宿を借り、外套、鞄等を預けて置き、大滿寺山で別に案內者を探して、漸く一人を得た。で九時過ぎから出發した。行くこと十八町で麓まで達し、其所の大森林で採收を試みた。カリチウムノデウリフエラム、デプロムアチナ(一種)、パレイナプシラ、マクロクラミス、サイアツホマミクロン、アリコース等を得た。何れも少數宛にて殘念であつた。此所で正午まで採集したが、得る所實に僅少であつた。午後登山。本道から登ると中腹迄十八町あるといふ、森林を探さんければならぬから左の方から登つた。嶮峻を越えて進んだ。一蝸牛カリゾナ變種と思はるるもの丶、死殼數ケを新に得た。ユーロタルハナ變種の死殼は多數あつたけれども、外皮か剝げてをつて用をなさない。生殼は一ケも見當らなかつた、此の深林にして此の通りであるから、一旦は繁殖したのでもあらうが其れが遂に死絶えて、此る樣となつたのであらう。尙はこの日は新にサイクロホラスハークロチーを得た。右は頗る澤山に產出する樣子である。西鄕では死殼すら見當ら

ヶ所に及んだ。大形介は實に少數で、普通のものすらない。死殼でもと思つても其れもない。大蝸牛は死殼數ヶの外、全く不成功であつた。小介類も多數のカリチユームニポチンセの外、パレイナプシラ、ミクロシスチナシナピデツムマクロクラミスドエンチー等より外皆無で、大の部では、ガチセラミオンパラ(變種)ユーロタルハナイヅモニス狀稍大であるばかり、其他何物をも得ないので大いに失望したが。右は探索不充分から來た結果とは思ふが、然し失望は免れなかつた。午後五時歸宿。夕方散歩。西町時計商石田鏡一氏は、今朝尋ねた曲玉を一箇所有つてをるとて示された。一寸五分位の赤汚色瑪瑙製で疵がある。歸宿後書簡を認めて發した。

八月二十日、未明から、さだちが激く、續いて普通雨となつた。此る天候では何れへも出ることが出來ない。不得已旅宿に籠居。午後一時小やみとなつたから、外套裝で出掛けた。目指したのは南方の一大深森であつて、雨後の事だから、大いのが這ひでゝをることであらうと思つて、頗る望を屬してをつたが、豈に計らんや、全森かけ廻つた結果が、只一のユートタルハナイヅモニスの幼生殼を得るに過ぎなかつた。其他には四ヶのツリショプリタメソゴニヤと、二ヶの幼介を得たのみである。他には一種もなかつた。四時半歸宿。何故に北方に位する國土には、吾々の研究資料が此くまで少ないのであらうか、或は寒い爲めであるか。

八月廿一日、降雨、後、曇。本日は朝から雨が頻りに降つて、外出は六ヶ敷樣子であつたけれど、聞く所によると、山陰道一帶は、年中雨が多くつて、年に八十日位よりか晴天がないといふ事で、其の上毎年土用後は、降雨が多いとの事であるから、何時迄まつたからとて、出る日がなからうと思つたから、意を決して、雨を冒して出發した。乘つた船は宿の持船であつた。案内者と共に、西鄕港の南西部の大森林で採集を試みた。降雨と木

カリヅナディクツニーの外は、何物をも得なかつた。此のあたり別に望を屬くすべき地もなかつたので、其所から二里程の、和田村の神社の森といふのに向つた。此所は甚だ有望と見込をつけて、二人で盛に探集したのであるが、只ユーロタルハナイヅモニスの外は、何物をも見出すことが出來なかつた。實は此所は旅宿の主人から、採集の唯一好所として紹介せられた所であるのに、右の次第であるから只失望の外はなかつた。

全体境町から米子までの地は、全くの平地で、土壤は全く濱砂同樣で、夏日ひでりが少し續くと、農作物は悉く育つことが出來ないといふことである。要するに、此所の森では、落葉の下すら、皆砂土であるから、小介類は、右のやうな濱地質には發生し難いので、棲まないものであらうか。サイクロホラス、ハークロチーの如きすら皆無で、何れの死殼だもないのであるが、只ユーロタルハナイヅモニスだけは多くあつた。當方面では他に採集の地がないといふことであるから、先へ進むことは止めにして、午後五時に宿に歸つた。明朝は隱岐丸にて出帆の豫定。天候曇り勝ちにて、風浪頗る高からんと思はれた。

八月十八日、夜來驟雨、後霽れ。午前三時起床、喫食後、隱岐行き滊船隱岐丸に乘込む。五時出帆。雨後、天候次第に回復して、甚だしく暑氣を覺ゆるに至つた。午後一時過西郷に着。途中知夫、知々井の兩港に寄つた。由永旅店から紹介して呉れた平木屋に行く。折柄同家では親戚に不幸があつて、多忙といふことであるから、同町中町吉岡松若方に投宿。晝食後京都其他へ發信、且つ人夫雇入等の事に就いて相談す。後市街を散歩した。

八月十九日、晴天。午前中散歩旁、曲玉探索に出掛けた。古物商、時計商、印材師などのうちを漁つたが、何物をも得なかつた。晝食後案内者の老女と倶に背面に行き、宮山に行き、其の他幾多の杉森を探しまはること五

同船に乘り込んだので、船内狹隘をつけて大困雜を極めた。

八月十三日、曇。自分が乘り込んだ對島丸は、海上無事に、午前八時に下の關に着した。種々の用事を了つて九時半西南部町海岸肥後又旅館に投じた。今晩か明朝かには、北廻りの滊船が出帆の筈である。見物旁近傍を散歩してみたが、別に何等の採集する所もなかつた。明朝出帆に延期したから、此夜は一泊することゝした。

八月十四日、時々曇。朝來滊船の入港を待つてをつたが、漸く正午入港、午後六時出帆との話、時間の不正確に驚いた。朝は少し買物をする。午後乘船、時刻が來てやつと出港、明日の天氣を氣遣ふ。

八月十五日、快晴。未明に萩に入港した。日出々港。午後一時、石見濱田港に着。暫時の後出港。夕方温泉津に投錨。其の後日沒の時分に久手に投錨した。但し滊罐に損所が出來たので、其の修理をした。

八月十六日、曇、少雨。午前二時に久手を拔錨した。未明に出雲國杵築に着。七時出港。午後一時美保關に着いた。自分の乘船第一松山丸は、此の日都合があつて、境港に入港しない事に變更せられたので、不得已此所から下船して、直に小蒸滊船境丸に轉乘した。午後二時出帆。仝三時無事境港に到着した。此の短距離の行程なるにも拘らず、海上のみに、晝夜、釜山から凡四日の時日を費した。船をでゝ海岸通水上署前の由永ヤス方に投宿した。即時聞き合はせた所では、明日隱岐丸が隱岐へ出帆するとの事であつたが、後又明後日早天出帆といふ事に變更せられた。

八月十七日、曇、少晴。昨夜は深更まで、雷鳴驟雨が甚しかつたのであるが、朝はからりやんだので、一日まづ境港附近を採集する積で、案内者を雇ひ、南東に向つて出發した。行く〳〵熱心に人家附近、其の他神社の森を索めたが、然しユーロタルハナイヅモニス及ユーロタ

得ることあり。但し此の多分は六月頃にして、以後は見ることと甚だ稀なり。Ganesella stearnsi Pils は深林ならざる雜木林にて見出さる。又小徑などの生じたる所にても見出さるれど、餘り多からざる種なり。神社の森林中にては、Ganesella myomphala を見出すを得。又喬木の朽木にては、コギセル貝類、山谷及び山地の落葉下及び其下の岩間にては、毛マイマイ及びヤマタニシ Helicina japonica A. Ad.(var.) 稀に E.(Aegista) kobensis Diplommatina 屬 Kaliella 屬 Macrochlamys 屬 Ennea iwakawa, Microcystina 屬 Opeas 屬 Georissa japonica, Clausilia ducalis decapitata Pils. 等見出さる。E.(Aegista) minula Pils. (var.) は常に一種のすげ、いとすげの叢生せし中に越冬するを見る。Sitala circumcincta elata gude は藪の落葉下にて發見せり。Punctum japonicum 及 Zonitoides minusculus は腐木にて發見せり。岩又は岩の破片の集りたる所にては、大ギセル貝 Clausilia martensi 及び Ena reinianus Kob. 等を見る。又毛マイマイを見ることあり。毛マイマイは又石垣間にても見出さるゝことあり。

(未完)

山陰地方介類採集記

介館内　黑田生

明治卅九年八月十三日、晴、後曇。自分は出發の用意として、牧島から釜山に渡り、禮拜堂に出席し、又下の關への滊船を問ひ合はせた。是より先、自分は朝鮮地方の介類を採集する爲めに渡韓してをつた。で山陰に行くのに釜山から出帆しやうとしてをるのである。

此の朝も牧島の海濱に海介の採集を試みたのであつたが、干潮が淺かつたので頁果を得なかつた。午後五時半夕食を了へ、六時より山陽鐵道連絡滊船に割するために、釜山に渡り七時に乘船し、八時半に出港した。海上は極めて平穩であつたが、滿韓地方修學旅行の學生が、多數

悉くせりと思はるれど、余が實驗する所に多少異なるものあれば、聊か記して讀者の參考に資す。

余の如き邊境に住むものは、學者に質し、圖書に頼りて知識を得ることの困難なる代りに、遠く足を運ぶに及ばずして、動植物の採集極めて容易なり。余が村内特に家の近傍にて得らるゝもの數種あり。

ヤマタニシ　Cyclophorus herklotsi, Mart.

ケマイマイ　Eulota (P.) vulgivaga Schm. & Bttg.

デンノムシ(方言) Eulota (E.) callizona congenita Smith.

ウスカハマイマイ　Eulota (A.) Sieboldiana Pfr.

日本マイマイ　Ganesella japonica Pfr.

キセルガイ　Clausilia japonica Crosse.

コマイマイ　Trishoplita goodwini fusca Gude.

コヒルゲンマイマイ(稀に) T. hilgendorfi rufa Pils.

又屋根、草などの腐敗したるものに、

コギセル貝類 Clausilia 及 Zonitidae の一二種を見る。

又 Vertigo hydrophila Reinh. を見ることもあり。香島村にては見ざれども、飾磨町、龍野町にては、Eulota similaris Fer. を得たる事あり。普通畑地にて得らるゝはウスカハマイマイなり。其の他家の近くにて、デンノムシ(方言)、日本マイマイの如きも見ることあり。山椒の木の皮に Pupisoma japonicum Pils. を得たることあり。但し此は右の一木にて發見せしのみにて、他の樹木にては一回も發見することなかりき。喬木の空洞中にて往々 Clausilia pigra 及び Pupinella rufa を得ることあり。前者は朽木にて得らるゝことあり。雨後に藪垣等を探せば Eulota (Euhadra) callizona congenita を得ること多し。又平常にても、諸種の葉の下にては往々見出さるゝことあり。又 Ganesella japonica も得らる。又藪の落葉下にては、Diplommatina 屬 Kaliella 屬 Ennea iwakawai Pils. Microcystina 屬 Cyathopoma micron 等を得ることあり。またけ或は女竹の葉上に Sitala reinhardti Pilsby. を

はない。以上の叙述は、只陸產及び淡水產介類が、漸次發達し來つた一例に過ぎないのである。

有臍陸產介類の起原は、之れを二樣に考ふることが出來る。海產からして海岸產と變じ、遂に陸產に變せしか、或は淡水產より泥沼に上り、遂に陸產になつたかの二說卽ち是れである。さうして總ての有臍陸介は、リトリニディー及びチリチディーの二屬から出てをる。

リトリニディーは、數日或は數週間、海水に濕さないで置いても生活することが出來る。熱帶に於ては此の力が特に強いやうである。牧師エ、エッチ、クーク氏は西印度ヂヤメイカ島に於て、此の屬の一種が（リトリナ、ムリケタ）低い岩頂の草木中に住んでをるのを見、またパナマに於ては樹上に於て此の屬の三種（ヴアリア、フアシエタ、プルクラ）を得たといふ事である。又レ、ムリケタが採集後三ヶ月間、空氣中で生活し、レ、イルロラタが、四ヶ月間生存してをつた例が記載してある。

有肺類の起原は未鮮の問題である。或は之れをヌヂブランキエタから來たのだと考へ、或は之れをテクチブランキエタ、オピソブランキエタから來たのだと考へるのであるが、どうも後者が眞に近いやうである。

最古の陸產有肺類は、北米の石炭層から出た。又同樣の新形は白堊層（クリテシアス）にも見はれた。其れから今日に至るまで綿々として連鎖をなしてをる。

ゴツドウキン、オースソン氏の說によると、陸產有肺類中の諸屬にあつて、概して強く發達してをる外套葉及び原始的殼を有つてをるものは、却て大殼をもつて體の全部、若しくは殆んど全部を覆はんとしてをるものよりは、多く發達進步したものであるといふことである。

陸貝採集小談

大上宇一

陸貝採集法に就いては、既に岩川氏などの記事ありて

多くは厴を有して居ない。

陸介及び淡水介の起原

陸産及び淡水産軟体動物の起原は、之れを海に求めなければならん。或場合には海産から、非海産に變化する其の變化が、今猶ほ進行中にあるものもあつて、今日之れを目撃することの出來るものがある。或は其の變化は既に完結してはをるが、其の變異は甚だ微少で、其の期日は極めて近世的で、二者の關係、一目瞭然たるものがある。或はまた其の變化が甚だしく、其の期が遼遠であつて、殆んど其の起原を尋ぬることの出來ないものがある。

此のやうな變化は、裏海のやうな、内地の鹹湖に於ける現象を見て推知することが出來る。裏海はもと地中海と連なつてをつたものであらうから、必ず古昔は其の中に海産介類を有つてをつたことであらう、現今の裏海産介類は、皆半鹹産或は淡水産であるけれども、其の一般の形狀は明かに海産である。例へば裏海産螺類廿六種の中で十九種は、四ヶの特別なる屬に屬してをる。さうして此の四屬は、皆海産リソイディーから變じたものである。又此の湖産特有の雙殼類は、三屬に屬し、皆普通のカーヂアム、エヂユールから來たものであることを証することが出來る。之れによつて裏海産の諸介は、此の湖水が遂に全く地中海から分離した事と、湖水が漸々鹽分を減じた事とに由つて、多くの新屬を生ずるやうになつた事を証するのである。

アフリカ内地のタンガニカ湖に住んでをる、數種の淡水介屬は、不思議にも海産的の形狀を有つてをる。或學者は此等の事實からしてタンガニカ湖は、太古の時代にあつては、印度洋の入江であつたらうと信じてをる。

然し陸産及び淡水産介類の起原は、必ずしも此のやうに入江の閉塞、鹹湖の乾涸等のみに由つて説明する必要

雜録

腹足類の分類

此の類は其の數が遙かに有舌類中の他の二類（頭足類及び掘足類）よりも多いので、分類上遙かに此の二類よりも複雜してをる。さうして此の類は日常吾人の目に觸る事が甚だ多いのである。複足類を分つて四目とする。即ちアムフィニユラ、プロソブランキエタ（前鰓類）、オピソブランキエタ（後鰓類）、ポルモネタ（有肺類）などである。

アムフィニユラは、左右相稱の軟体動物であつて、或は中央に一ケの器關を有つてをり、或は長軸の両方に一對の器關を有つてをる。殼を有するものはあるが、決して螺狀をなすことはない。楕圓形の帶まで連結せられてをる八枚の覆瓦狀の板から成り立つてをる。ヒザラ介などは是れに屬するのである。

プロソブランキエタ（前鰓類）は、呼吸器が概して心臟の前に位してをるから、このやうに名づける。心耳は心室の前にある。概して殼を有つてをる不齊等の軟体動物で鰓を有つてをる。海産であるか、或は又海産の屬から由來したものである。アワビ、フイスレラ、ツロカス、テリタ、パテラ、寶貝、ブクシナム、惡鬼介、リトリナ、イアンシナ及び總ての陸産、及び淡水産有厴類等之に屬してをる。

オピソブランキエタ（後鰓類）は、呼吸器を心室の後方に有つてをる不齊整の海産軟体動物であつて、殼を欠いでをるものが多い。成熟したものであつても、鰓を有つてをることは稀で、雌雄同体である。ブルラ、アプリシア、アムブレラ、プテロポタ全体、ドリス、イオリス、デンヅロノタスなどは、是れに屬する。

ポルモネタ（有肺類）は、概して不齊整で、空氣を呼吸し、非海産の軟体動物である。さうして雌雄は同体で、

体光澤を有し(ナカクボエンザの上面は光澤なし)、底面は著しく淡色なり」

第十五圖は大形の變種にして、産地は本種に同じく、高七厘、長徑一分二厘あれども、其長徑は猶は遙かにナカクボエンザに及ばず、**オホマルクボエンザ**と名くることを得べし」

變種、**ヒラクボエンザ**、新稱

H. dip. var. latispira, Pils.

(陸産、第六版、第十六圖)

産地、小笠原父島、

長、五厘强、長徑、一分、

形狀、螺塔本種よりも廣くして淺く、他は本種と異ることなし」

彩色、本種に同じ」

コダマエンザ、新稱 H. profundispira, Pils.

(陸産、第六版、第十七及第十八圖)

産地、小笠原父島、

長、七厘半、長徑、九厘、

形狀、マルクボエンザに酷似するも著しく高く、從て殼口狹長なり、螺塔の凹み著しく深くして狹く其徑は全徑の三分の一に及ばず」

彩色、マルクボエンザに同じ」



底面は半透明にして青色或は緑色を帯び、老成せし殻の外唇縁はコシタカエンザに於ける如く濃褐色を彩ることあり」

ナカクボエンザ、新稱 H. biconcava, Pils.

（陸産、第六版、第九及第十圖）

産地、小笠原母島、

長、六厘、長徑、一分半

形状、圓盤形にして螺塔凹み、初めの數層陥り、周縁圓く、上面及周縁は微脈を有し、底面は幾分か透明にして光澤あり、層數は五ヶありて、殻口は新月形をなし、外唇は簡單なり」

彩色、濃褐色にして、臍部附近は白色を帯び、往々青或は緑色を彩る」

ヒラマキエンザ、新稱 H. planulata, Pils. & Hir.

（陸産、第六版、第十一及第十二圖）

産地、小笠原母島、

長、五厘弱、長徑、一分

形状、ナカクボエンザに酷似するも、螺塔殆んど平坦にして、内方の螺層微かに陥り、且つ小形なるを異なれりとす、層數は$5\frac{1}{2}$乃至$5\frac{3}{4}$にして、新月形の殻口は殆んど垂直なり、外唇内には白色の一強肋ありて厚くなれり」

彩色、帯黄褐色にして、底面は光澤ありて、色薄し」

マルクボエンザ、新稱 H. diplomphalus.

（陸産、第六版、第十三、第十四、及第十五圖）

産地、小笠原父島、

長、六厘、長徑九厘、

形状、稍やナカクボエンザに似たるも小形にして螺塔の凹み狹くして深く、高さ著しく大きく、周縁は廣くして圓く、層數は四ヶ二分の一にして、体層の上部に微角あり、殻口垂直にして、狹き新月形をなし、外唇縁は内方に一條の白色肋を有して厚くなれり」

彩色、淡褐色にしてナカクボエンザよりも色淡く、全

ず、高は比較的に大にして、殆んど前種に等しく、底面は前種よりも膨凸し、臍孔は前種よりも深し、外唇內に白色の滑層を有することは前種に同じ」

彩色、螺塔も底面も共に前種よりも濃色にして、外唇緣は更に濃き褐色を彩れり」

クチヒダエンザ 新稱、

H. insignis Pilsbry & Hirase.

（陸産、第六版、第五及第六圖）

產地、小笠原聟島、

長、六七厘、長徑一分餘、

形狀、大さ及比較的の高は前兩種の中間にして臍孔なく、外唇內にある白色滑層の對面より少し外方の內唇上に白色の一縱襞あるを以て容易に他種と區別することを得べし、（蝸牛科のプレクトピリス屬には本種に似たる內唇襞を有し、外唇緣と連續して、殆んど半月形の唇緣を全ふする種あるによりて考ふれば、本種の內唇襞も或は同じ意味の初步的唇緣なるやも知る可らず、）上面には精密にして規則正しき放射脈を具へ層枚は五ヶなり、殼口狹く、新月形をなす」

彩色、エンザガヒに同じ」

ツヤエンザ、新稱 H. hypolia, Pils.

（陸產、第六版、第七及第八圖）

產地、小笠原母島、

長、五六厘、長徑一分半內外、

形狀、大抵エンザガヒと同大なるも、高さ低く、螺層稍や廣く、体層殊に廣くなり、從て殼口はエンザガヒよりも廣く、肩角稍鈍く層枚五半、外唇及上唇は下唇よりも前方に擴がれるを以て、容易にエンザガヒと區別することを得べし、（エンザガヒは下唇の方前方に進めり）外唇內の白色滑層に加へて內唇にも往々薄き白色の滑層を有す」

彩色、光澤強く上面は淡褐色にして他に異る所なきも

○日本陸産貝類圖說（一）

鼈甲貝科、Zonitidae.

動物は概して殼中に退縮するを得べく、尾部粘液孔あり、顎の中央は延長し、側齒は兩尖にして、緣齒は圓錐形をなし、一尖或は兩尖あり」

殼は通例扁平蝸牛殼形をなし、臍孔を有し、殼質薄くして多少透明にして、簡單にして鋭き殼口緣を有せり」

此類は蝸牛類と混同せらるゝこと多きも、殼の硝子様構造と殼口緣の鋭きとによりて容易に蝸牛科と區別することを得べし」

エンザガヒ屬（圓坐貝）新稱 Hirasea, Pilsbry.

殼は小形にして臍孔を有し盤狀或は兩凸形をなし、殆んど一樣の蒼白色を呈し、精細なる肋脈を有し、殼口は新月形をなし、口緣は狹窄し、內部に厚き滑層肋を有して厚くなれり、エンザガヒを摸式とす、

エンザガヒ 新稱、H. Sinuosa, Pils.

（陸産、第六版、第一、第二、第三圖）

産地、小笠原母島、

長、七八厘、長徑一分半內外、

形狀、圓坐形にして、螺塔は僅かに凸く、螺層は細横脈を有し狹くして密匝し、層數は五ヶ四分三なり、体層は肩角を有し、下方は甚しく脹れ、臍孔小さく、殼口は狹き新月形をなし、唇は擴がり、中部以下は弓形をなして前方に凸出し唇の上端は退引し、外唇緣に平行して內部に狹き白色の滑層あり」

彩色、殼は淡褐色にして上面は幾分か暗汚の觀を呈すれども底面は淡色にして光澤あり」

コシダカエンザ 新稱、H. eutheca, Pils.

（陸産、第六版、第四圖）

産地、小笠原母島、

長、六七厘、長徑八九厘、

形狀、前種よりも小形にして、其徑は前種の半に過ぎ

形状、住所によりて種々に變化すれども、正規なるものは殆ど球形を呈し、殻質極めて薄く、螺塔極めて低く、体層極めて大なり、全体粗糙にして、生長線は皺状をなし、縫合及底部にありては鱗状を呈す、殻口廣く、半圓形をなし、殻軸圓く、外唇は簡單にして鋭し」

彩色、内外共に不透明の白色なり」

第七十七圖に示せるは、琉球より得たる化石にして、本種に屬するや、否やは未だ詳ならざれども、殻口の延長を顯はすため、今暫く茲に附加し置く」

同上備考(第四)

サンゴヤドリ屬、 Coralliophila.

スヂサンゴヤドリ 新稱 C. costularis, Lam.（トライオンより）



第四十四圖

スヂサンゴヤドリ（トライオンより）

産地、フィリッピン、濠洲、大平洋中部、

長、〇・八五乃至一・三五吋、

殻は白色にして、黄色或は紫色を彩し、口内は淡紫色なり」

パキラフイ、 C. pachyraphe, E. A. Smith.（トライオンより）



第四十五圖

パキラフイ（トライオンより）

産地、日本、

長、五分内外、

形状、殻は八九條の縦腫脈を有し、覆瓦状鱗様螺肋と交りて結節を生じ、唇縁は歯状を呈し、口内に六條の短き脈あり」

彩色、淡褐色にして、螺層の肩部にありては蒼白色を呈し、口中は肉褐色にして、殻軸は淡紅色なり」

もとナガニシ屬として記載せられしも、之れ確説謬にして、トライオン氏は此屬に編入し、頗る、ヤウラクガヒ屬に似たり」

所々に鈍角を生じ、体層は分離して延長し、全面に細密なる斜脈を刻し、殻口は圓き三角形を呈し、內唇は少しく反曲せり」

彩色、表面は淡黄褐色にして、口內は帯白色なり」

カブラガヒ屬、新稱 Rapa, Klein.

カブラモドキと密接の關係を有し、蓋は茘枝貝式にして殻の如く極めて薄く、半透明にして、帯黄白色なり」

カブラガヒ、新稱 R. papyracea, Lam.

（海産、第十版、第七十四圖同a圖及第七十五圖同a圖）

產地、琉球、

長、一寸七八分、長徑一寸六七分、

形狀、蕪根形にして殻質極めて薄く、多數の螺肋を繞らし、底部に至るに從て粗糙となり、鱗狀を呈し、縫合も粗糙なり、臍孔は殻頂に達し遠見を有す」

彩色、白色或は淡帯黄色にして、往々底邊に淡紅を彩ることあり」

第七十五圖は、螺塔著しく高く、只体層の底部のみ螺脈を有し、白色或は帯黄色にして往々微紅を彩り臍孔は殆んど塞れり、L. C. Kiener. 氏の圖譜には明かに第七十四圖の標品の幼貝と記しあれど、變種或は別種とするの價値あるものゝ如く、Bullus incurvus, Dkr. 或は R. bulbiformis, Sowb. に非ざるやと疑はる、然れども多數の標品を檢するに非ざれば判定し難きを以て、余は只之を**タカカブラ**と命名して、こゝに附記することゝなしぬ」

カブラモドキ屬 新稱 Magilus, Montfort＝
Leptoconchus, Rüppel.

カブラモドキ 新稱 M. antiquus, Lam.＝
L. striatus, Rüppel.

（海産、第十版、第七十六圖、及第七十七圖）

產地、紀伊、田邊、

長、七分內外、徑六分餘、

產地、土佐柏島、及小笠原島、
長、八九分、
形狀、殼は膨脹したる紡錘形にして、螺層は六層あり、縱肋は次体層に十一條あり、大小交互せる螺肋之を横ぎりて、籠目狀の外觀を呈し、螺肋の間は深溝をなし、螺肋は密鱗より成り、次体層に於ては其數凡そ七八條あり、殼口は卵形をなし、內部平滑にして、臍孔は小なり」
彩色、內外共に純白色にして往々綠色、淡褐等の汚物を被ることあり」

ヒトハサンゴヤドリ、新稱
C. monodonta, Quoy. and, Gain.
(海產、第九版、第七十二圖、同a圖)

產地、土佐柏島、及大隅大島、
長、四五分、
形狀、殼形種々にして、稍廣狹長短あれども、大抵、螺塔小さく、体層は殆んど全体を占め、表面に細密なる螺脈を繞らし、大抵汚物を被り、或はフヂツボ等の附着するありて、彫刻の判然たらざるもの多く、殼口は卵形或は短紡錘形にして、內唇の內方と內腔とを限れる一長襞ありて、襞の前方に一小齒を具へ兩唇及口內は總て光澤あり」
彩色、表面は白色にして、兩唇及口內は紫色を彩る」

ナワボラ屬、Separatista, Gray.
動物も、他屬との關係も共に未だ詳かならず」

ナワボラ、S. Chemnitzii, A. Adams.
(海產、第九版、第七十三圖)

產地、紀伊田邊、


ナワボラ(トライオンより)

長徑五六分、高二三分、殼口の長徑三四分、
形狀、殼は螺塔少し隆まり、螺層は肩部平坦にして、臍孔の周圍に一龍骨を有し之に沿ふて二條の螺溝を見る、又周緣に三條の小肋を具へ、肩角の

し、霰丸細鱗狀をなし籠目狀の外觀を呈し、往々隆起して短刺狀をなすことあり、体層大きく殼口は半圓或は三角形をなし、两唇は簡單にして、溝端尖り、臍孔著し」

彩色、內外共に白色にして、往々表面は淡黃色を帶び或は汚物を被り、口內は淡黃或は淡紅を帶ぶることあり」

ゼフレイシー、C. Jeffreysii, E. A. Smith.

（トライオンより）

產地、瀨戶內海二十二尋、（ピルスブリー氏日本產貝類目錄より）



ゼフレイシー（トライオンより）

長、六七分、

淡帶赤褐色にして、口內は帶靑白色なり

變種、**ヒラドサンゴヤドリ**、新稱、

C. Jeffreysii, var. hiradoensis, Pils.

（海產、第九版、第七十圖、同a圖）

產地、平戶、

長、八九分

形狀、殼は紡錘形にして、七八條の縱肋を有し、周緣に於て尤も著しく、密鱗狀の密なる螺脈を繞らし、体層にありては凡そ十七條を數ふべく、其鱗片は殆んど直立し、籠目狀の外觀を顯はせり、殼口は亞三角形にして、外唇銳く齒狀を呈し、水管溝は短くして、少しく反曲せり」

彩色、殼の表面は帶褐白色にして、大抵、汚物を被り、口內は白色なれども、殼口の內緣には褐色の帶を繞らせり」

ピルスブリー氏は本種よりも殼口大にして殼口の長さは著しく殼の全長よりも長しと記載されしも余の標品中には全長一寸一分位殼口の長五分位の標品もありて殆ど両者を判別し難く、或は殼口の比較的に大なるものは小なるものゝ幼貝には非ずやと疑はる」

カゴメサンゴヤドリ、新稱、C. Stearnsii, Pils.

（海產、第九版、第七十一圖、同a圖）

為めの保護色に等ならず、戦時に際し吾艦を調和よき色に塗り換へ、又陸兵の軍服にカーキカラーを撰べる等思ひ合すべし、併淡水産の種類は海産種に比すれば色彩の鮮麗なるもの形状の奇抜にして人目を悦すに足るべきものは一も之あらざるのみならず其種類も至て寥々たるは固より深く異むに足らざるなり。

本邦海産介類圖説（第六）

サンゴヤドリ属 新稱

Coralliophila, H. and A. Ad.

クチムラサキサンゴヤドリ 新稱

C. neritoidea, Lam.

（海産、第九版、第六十八圖）

産地、琉球、及大島、

長、一寸内外、

形状、殻は重厚堅固にして螺層膨れ、上層は肩角著しく、体層は大きくして長く、無数の螺脈を繞らし、脈間深溝をなし、表面には不規則なる生長線ありて微なる凸凹を生し、殻口は半圓形にして、両端尖く、水管溝は短く斜にして反曲し、外唇内には隆起脈ありて、其端は齒状をなせり、

彩色、外面は白色にして、大抵汚物を被り、口内は美麗なる淡紫色なり」

カブトサンゴヤドリ 新稱

C. galea, Chemn.=C. deformis, Lam.

（海産、第九版、第六十九圖、同a圖同b圖）

産地、喜界島、

長、一寸二三分、

形状、殻形變化多く、両端尖れる紡錘形にして前種よりも薄くして大形なり、螺層膨れ、周縁に角を有し、体層に至て消失するもの多し、或標品は大にして著明なる縦肋を有し、他の標品は曖昧なり、螺肋は細くして密接

めに三舍を避けざるべからず。カミナは固より貝類に非ざるも古人が介類の目中に一括したる二者の一連鎖たるにより茲に附記せん。但此者は後にカウナ又ガウナと轉じ竟にはゴナとも云へり古記を繹るに是も亦盛んに食膳に供せられしものにて大嘗會。大饗等の献立に見えたると蜷に於けるが如し。惟ふに一々殼より援出し醯藏して用ゐしとおぼしくして內膳司の年料の條に「尾張國より蟹蜷二斛四壺」とあるにて知るべし頗る珍味の者なりしにや朝倉亭御成記に五献かうなとあるを見ればやんごとなき方も之を間食しゝものゝ如し方丈記には左の道話を揭げたり

「がうなはちいさきかいをこのむ、これよく身をしるによりてなり。」

其他枕草子にも小き家の比喩として之を引用せり。實に寄居子が已が體の軟部を保護せんが爲めに客殼を以てすることは夫廢物利用の原則を示導すると小中大の學校に於て實物示敎を學徒に授くるに異ならず實に造々化々の道の洪大無邊にして盡くることなきを知るに足らん偖此寄居子が體の成長に從ひて次第に小を去て大に就くや其撰擇の綿密周到なること驚くべきものにして其時期に至れば新に殼を尋ね若し適當ならんと思ふときは先殼調べと有て之を前後左右に回轉し且摸し且按じ遂にても意に叶はざるときは棄て他に及ぶと幾回なることを知らず故に云能く身を知るものは夫れ寄居子か長明が比喩も亦至れる哉

仍茲に一言せんに凡て淡水產の貝類はシヽミ、ドブガヒ、マツカサガヒ、ナガタガヒ、コマノツメ、等は茲に云ふ蜷と等しく其尖端の多少腐蝕せらるゝは大に海產類に異なる所なり是淡水には其水の清否を論せず多少の炭酸氣を含有するに依るものにて是ニナのシリキレガヒの名を得し所以なり依りて淡水產は此腐蝕作用を防止せるが爲に一種の膜皮を被り又其色の黑きか或は汚黑色なるは外界の色に應じて已を擁し去らんとするものゝ眼を掠めん

內大臣、殿所、大饗。窪杯物、四杯。寒海鼠。海月。

蜷、細螺也。

とあり猶同書の別項に蒸蜷、細蜷等の名目ありかく饗應上必須の珍味なるあり延喜式內膳司の條にも

蜷ハ隨ニ得加進。

などあるにても其一斑を窺ふべし。此貝が飽くまでも古代に尊貴の寵眷を縱いまゝにし以て重き式場に侍(ハンベ)りしとは今よりして是を見れば無上の光榮寧人意の表に出づと云ふべし或人の云若し色の黑きが古人の意に叶ひしならば夫の漆黑の如き色を有するクマノコガヒ(熊の子貝)の却て此撰に洩れし爲めに其不遇を悼まざるべからずと聊ことわりあるに似たり。

蜷の古人に賞せられしとは特りそが食膳に登りしのみなす本邦古來美術上唯一の裝飾物として翠簾に衣の袖に甲冑に其他凡てに應用せられし流蘇の結びやうの一種に蜷(ニナ)結(ムスビ)と稱するものあり例へは雅輔裝束抄に

「うへのかざりにになむすび云々」

「あげまきにになむすびさげて云々」

など物語日記等の所々に散見せり徒然草に之を釋きて

「みなむすびといふは糸を結びかさねたるが蜷といふ貝に似たればいふとあり、あるやんごとなき人仰られき。になといふはあやまりなり」。

蜷結とはいかなるものかは姑く措き本鈔には河貝子(ミナ)の次に左の一項を置けり

(附)寄居子(カミナ)　本草ニ云寄居子(和名加美奈、俗假用蟹蜷二字)　貌似蜘蛛者也。

此「似蜘蛛者也」との形容は本體を想起するに難からざるも是古人が觀察の粗大なるを證する一例也。試に之を殼より抽出たし見るに腹部の細長きを蟢蟲(アシトカグモ)に似たればかく云へるなるべし。されども「俗假用蟹蜷」の五字はカミナの語原は蟹蜷(カミナ)なるを知ると同時に其天然分類の位置の甲殼類なることをも併せて暗示し前なる切角の註解も爲

て其生を保たずとも斷言し難し只數年と云へるはあまりに過大に過ぎたる嫌あり。曾て種々の生物を排氣鐘內に入れ試みしに貝類最も久しきに堪へたりと云ふ。

○茲にミナの意義を考ふるに恐くは卷魚(ミナ)の謂が蓋へナタりと云へるも同じ語脈の名なるべし是固より一種の名にあらざるべし即其河にあるをカハニナと云ひ海にあるをウミニナと云ふ但又和訓栞に

泥海の二種ありて海種に。米(コメ)がひ。螢がひ。袂がひ。つとがひ。ちまきがひ。などいふ皆此品也

と云へるは其出典を詳かにせざれば復卒かに信ずべからず且茲に列したる貝は一も黑色なるものなくして倭名鈔に云へる定義と相反すればなり但ミナの黑色なるとは唯り同鈔のみならず萬葉集卷第七に

「彌那綿(ミナノワタ)、香黑髮(カクロヤガミ)云々」

とありて又同卷第十三に

「蜷腸(ミナノワタ)、香黑髮丹(カグロヤカミニ)云々。」

など種々に書き替へて美人の黑々として美しき髮を形容せる枕詞として多く用ゐしにてもミナと云へる貝の黑きに限れるを知るべし。此細爾たる一小貝子も古人の眼には如何に映じにけん種々の物名を形容する一の常套語として弘く用ゐられたり例へば人名には稱德紀に

物部蜷淵。

などあり地名には萬葉集に

「見名(ミナ)淵山。」

等あり是等を始として近くは百人一首には筑波嶺の峯より落つる蜷の川あり一休和尚の高弟に蜷川新左衞門ある等思ひ合すべし。

此貝は今は山民海士の小童も採て食ふと稀なるに古代には最重き儀式の膳羞に供せられしを歷々として數ふべし今一二の例を掲ぐれば人車記に

保元二年八月、有任大臣事。窪杯(クボツキ)、二種。海月、蜷。

とあり。又類聚雜要抄に

しは偶然の結果にして義の同じからざると恰も彈丸。護謨球。蠅除玉。庭球等の偶々形を一にするも其用全く異なると其理一なれば强に吾蜷の字を非とのみ云ふべからず○又「殼上黑小狹長」とあるは不可なきも「似人身者也」とあるはいかゞや。或は蟲身を斥して云へりとするも亦更に相似たる所なし却て竹蟶馬刀等の肉は醋人身に彷彿し頭あり脚ありて立てるが如し故に蠱巫の徒之を人型に擬し以て方物の用に供すと云ふ惟ふに後の五字は削除すべく或書にミナは身成の義但其形人身に似たり故に名づくと云へるは抄註より推測りて云へるにて論ふに足らずミナを今の如くニナと云へるも今に始まれるにあらず新撰字鏡に「蜷。蛧。蜍。三字彌奈」とありて別に又蜷を爾奈とも点せり此蛧蜍の二字も亦和字なるべし。本草綱目には蝸嬴とあり

ミナの義に付ては未だ適當なる解を得ず貝原翁は

ミナとは水鳴なり水中に在りて鳴くを云ふ

とはいかゞ此説に雷同せる者多し。谷川士清等皆之を引證せり尙ミナに付ては種々の奇異なる說あり即和訓栞に

よく化して螢となるとも云へり

と云ひ又

川中にて誤て泥壁の內に入るれば數年なほ生活すといへり

とも云へり○按ずるにモノアラガヒ(物靜のカヒを貝にかけて云へるか)と云へる小貝の夥多汚竇の旁側に群棲し人到れば驚きて縮入るときジーと微音を發することありかゝるとより蜷も鳴くものと誤認したるなるべし化螢の說の如き固より信ずるに足らず但螢の幼蟲は啖肉性にて蝸牛の肉を食するとの說あれば或は蜷をも捕へて食せずとも云ふべからず其壁中に在て能く長生すとの說は他にも此例あり常に水煙を被る岩礁に夥しく群棲する小き螺類にイツマデガヒ又ノボリガヒと稱する貝は能く標品函內に在て久しく死せずと云へば一二ヶ月許は水を離れ

といふ是也」とあれどこは大和本草に云扁螺のことにて是とは全別なり。(形狀)附錄シタヽミノフタを見よ。

(釋名)東雅云「シは即石也、タヽミとは重り疊まれたるをいふと見えたり」とあり又倭訓栞に吐爬をつだみといへば舌吐の義なるべしえぞにちほたといふとあり。小云石疊の義なるべけれども東雅の說解すべからず今按に殼の表面に小瘤密布して甃の如し故に號けたるなるべし但別にイシダヽミと稱する細螺あり即是と同義異稱なり。

(附錄)したゝみのふた。玉蓋。崔禹錫ガ食經ニ云。小蠃子口ニ有白玉蓋(和名之太々美乃不太○介品云。相思子一名郞君子俗ニガンガラ又酢貝ト云フ殼拳螺ニ似テ至テ小ク女拳螺ニ似タリ(啓蒙云七八分以下ソノ尾平ニメ尖ラズ殼ニ微瘤アリテ朶雲ノ如シ。小云唐雲介の名之ニ基ク) 其靨也礫ニ酢ヲ入レ此靨ヲ兩箇メ相對スレバ旋轉メ一處ニ合。礫ノ邊ハ高ク收斂ッテ底ノカタヘ轉シ下ル也。廣島、江ノ島、泉州堺等の介店にて小さき袋に入れて之を販げり酢に浸して旋移するは介質の溶けて氣泡を發し爲に微動を起すにより自づから下方に向ひて滑下するものなり蝮の枯骨を酢に浸せば稍蠢動狀を呈するも亦之と同一理なり。

○第五みな。河貝子。崔禹錫ガ食經ニ云。河貝子ハ(註云和名美奈俗ニ用ル蜷ノ字ヲ非也。音拳。連蜷ハ虫ノ屈ル貌也) 殼ノ上黑メ小狹長ニ似ル人身ニ者也。(此五字恐くは衍。)

按ずるに蜷は今專らニナと稱し普く世人の熟知せる如く溪河湖沼田澤溝渠等の淡水に產し又海に產するものもあり。本鈔に「俗用蜷字非也」と云ふと雖此字は久しく本邦に襲用せられたるものにして日本紀萬葉集等皆然らざるはなし其俗と云へるは漢土に對して本邦を云へるにか訝かし惟ふにニナは卷貝中最普通なるものなれば之を其代表者として其形を取り卷に從ひ虫に從ひて新に本邦にて作れる會意字なるべし。然るに偶々馬蚿などの物に懼るる時体を卷き縮むる意に取りて作れる漢字の蜷と暗合せ

し、斯くして貝數多く合はせ取りたるものを勝と定むるのである。

國書介名考（第三）

永沼小一郎

○第四項。したゝみ小蠃子。崔禹錫ヵ食經ニ云小蠃子ハ(註云、揚氏漢語抄ニ云、細螺ハ之太々美)貌ハ似テ甲蠃ニ而細小ニシテ口ニ有リ白玉之蓋者也ト(本草和名亦同)

日本紀、神武天皇御製の來目歌に

「神風の。伊勢の海の。沖石に。やい匍匐廻る。之多太彌の。あでよ之多太彌の。いはひもとへり。擊ちてし已まむ。擊ちてし已む。」

古事記亦之に同じ。之を初とし。萬葉集に能登の國歌とて

「所聞多ねの。机の島の。小螺を。い拾ひ持ち來て。石もてつゝき破り。早川に。洗ひ濯ぎ。辛鹽に。許多み高杯に盛り。机に立てゝ。母に奉りつや。愛づ兒の刀自。父に獻りつや。身女兒の刀自。」

拾遺集物名。したゞみ。よみ人しらず

「吾妻にて養はれたる人の子は舌だみてこそ物はいひけれ」

山家集に

「商人のいそしく歸るひしきものは小辛螺蛤寄居蟲したたみ」

以上は古歌に讀める所なるが其餘延喜式。台記別記。賦役令。類聚雜要抄。朝倉亭御成記等に大嘗祭大嘗會。大饗。等の用に供せしと見えたり以て古は弘く賞用せられたるを知るに足るべし(別名)小蠃子は通雅に相思螺萬葉集に細螺延喜式之に同じ賦役令に海細螺と書けり玩介家の唐雲介と云へるも是なり丹後にダメと云へるはシタヾミの畧なるべし倭訓栞に梁塵抄に「せゞがひ也と見えたれど尾州知多郡には今此名をよべり今きしやご又ちやご

例とするも、其の意を寓せる遺風である。

貝合に用ゐる文蛤の殼は、表面を磨きて白色とし、長徑二寸五分許の大さの揃ひたるものを選び、其の數を一年の日數に象りて三百六十とし、內面に金泥極彩色の繪歌等を施し、これを半片づゝ二組に分け、金蒔繪定紋付の貝桶に容れて備くのである。二の貝桶の中、一を出貝桶といひ、一を地貝桶と稱す。昔にありても。貝覆は高家の子女の遊戲なりしもへ、貝桶は大名道具の一つで頗る贅澤を極め、姬君御輿入の際には必ず持參する一品であつたやうに見える。今日にありては、民間では見ることは出來ぬが、帝室博物館等には美術品の一として保存されて居る。

之れを玩ぶ遊戲の方法は、面授口傳ありなどゝ稱して勿體を付けてゐるが、貝盡浦の錦てふ書に記する所を摘要して其の一班を紹介して見ませう。今日の子女は、一月になると歌がるた、トランプを玩ぶと同樣に、昔も貝合の遊は正月初午の日に覆ひ初めをし、其の方法は先づ毛氈を敷き、中央に奉書紙一枚を廣げ、出貝桶より一の貝を取り出し、殼の頭を貴人の方へ向けて紙の上に伏せ置き、次に地貝桶より地貝を取り出し、これも亦伏せて殼の方向を一定せしめ、前の出貝の周りに十二を並べ、閏月のある年には十三を輪に並べ置き、其の外は數に拘らず順次に輪を重ねて地貝を殘らず並るのである。

覆人は、幾人にても妨なく其の周圍に居並ぶは歌がるたの散らしを取ると同樣である。覆ひ始むる人を定むるは、秘事なりとて、甚だ複雜なれば茲には省くが、先づ抽籤なりシャンケンなりに依りて順を定めたる後、第一番の人は周圍の地貝中より中央の出貝に符合すべきものを選び出し、手に取りてこれを合はせ試み、正しく相合すればこれを自分の前に取り置き、次に出貝桶より又一を取り出して紙の上に乘せ、復び周圍の地貝中より合ふべきものを選び、若し合はざれば次の順番の人に讓ることゝ

功用　はまぐりは、多く西南の暖海に產し、東京近傍にては徑、二寸以上に達するもの稀であるが、伊勢近海以西、四國瀨戶內海などには頗る大きいのがある。東北地方、北海道及び總べて日本海沿岸の諸濱には、極めて稀にて或は全く產出しない所がある。

はまぐりの肉は、其の全部を食用とすべくして、調理方は煮るのを主とする。桑名の燒蛤とは、東海道の名產として名高いものであるが、是はさゞえの壺燒と同樣に、殼のまゝ火に掛け煮るのであつて、炙くのではない。實際炙いて食するのは、乾蛤の附け燒のみである。其の外、蛤の吸物、佃煮、時雨煮等は一寸風味のある食品である。肉の外に、貝殼は藥品の容器として古來廣く用ゐられて居る。今日は、其の需要大に減じたるも、漢方醫の流行して居つた昔は、煉藥、膏藥、丸藥等の容器としては小蛤の貝に限られた有樣で、從つて其の販路は頗る廣かつたものと聞いて居る。瀨戶內海の大蛤、夫の阿波の國邊でくちぶとゝ稱するてうせんはまぐりの厚貝は、磨礪いて白の碁石を作るに用ゐらるゝにより、今はこれを一名ごいしはまぐりと稱す。

又我國には古へ貝覆或は貝合といへる女兒の遊戲があつて是には必ず蛤の貝を用ゐたのである。此の遊戲は、今日全く廢れ、其の方法さへ知るものも少ないが、其の來歷は甚だ古く、古書を按ずるに源平盛衰記卷の五、行綱中言の條に君達會合して貝覆の御勝負云々の事あり、又西行法師の山家集に

いまぞしる二見の浦のはまぐりを
　かひあはせとておほふなりけり

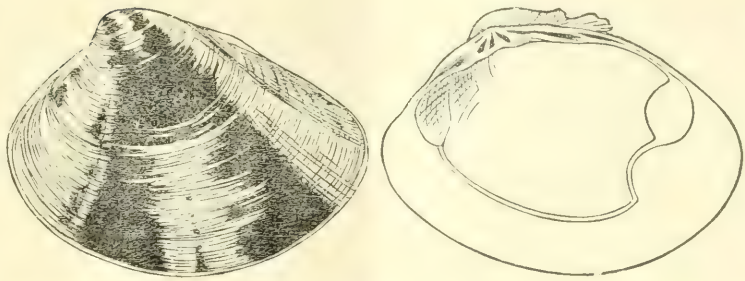
等あるを見て知らる。其の由來を討づぬるに、蛤の貝は幾百幾千ありても、正しく合するものは唯一に限るといふ事實よりこれを婦德に比し、貞女兩夫に見えずとの意を寓し、貞節の義に取つたのであるといふ。今日の婚儀によく蛤を贈物とし、祝言の宴席に其の吸物を出だすを

ある以上は、生活上何の不自由もなく、幸福に暮らすことが出來る。然れども一朝蜆掻の笊に罹るが最後、笊目の少しく粗きものに對しても、逃がるゝ方便を知らぬからして、何時の間にか鍋の中に煮られ、人の腹中に葬らるゝ始末となる。之れに反して、人間は五體具備し、感覺も鋭く、精神の働も充分であるから、危急に際しては自ら禦ぐことも出來、遁がれることも叶ひ、旅順に閉ぢ籠つても六七ヶ月間は支へらるゝやうな業をすることが出來る。はまぐりが、僅に貝殼を以て其の身を保護するとは雲泥の相違ではあるが、食物が空中に浮泳して居るやうなことがないからして、坐ながら糊口するに術なく、從つて一生涯齷齪して働かなければならぬのは、是非もない次第にて、一利一害は生物界の常態である。

蕃殖　世俗に雀海中に入りて蛤と成るといへる諺がある。是は和名鈔景行記に蛤の註に雀入水爲蛤とあるに出たのであらうが、山の芋變じて鰻と成り、朽木化して螢と成るといへる類にして、妄誕素より採るに足らざる說である、はまぐりには矢張雌雄の別ありて卵より發生するのである。

其の卵より孵化せる幼蟲は、略々卵圓形にて一方は少しく尖り、一方は丸くして恰度支那人の頭顱の如く、其の頂に一本の鞭毛を具へ、又其の周りに纖毛を輪生して居る。此の毛を振動して轉顚と水中に泳ぎ廻り、適當の境遇に接すれば、鞭毛を以て他物に附着し、後に毛を脫し、外套膜、貝殼等を生じて成長するのである。此の幼蟲をトロコスフイヤと名づけ、其の形の親と相異なるは毛蟲の蝶に於けると同様で、且非常に細微なるが故に、世人のこれに注意するものゝ稀なるは無理もない次第である。元來はまぐりの親の移動力は、極めて微弱なるにも拘はらず、海底諸所にはまぐりの分布し得る所以のものは、一に此の幼蟲の水中に洄游し得るに由るのである。

本邦各地に産するもの悉く同種であるが、其の大小、色



澤、斑紋等の同じからざる所より種々の異名がある。斑紋の固有なるは、殼の後縁が染まり、殼頂より殼面に沿ひ、栗褐色の條紋二三本射出して居るのである。剝身屋の看板に描いてあるものは、能く其の要を悉くしてあると思ふ。

殼の全面暗栗色にして花紋のないものをあぶらはまぐりといひ。大さ二三分許にして、紋彩一定ならざるをごまはまぐり、五厘大の幼貝をこびとはまぐり、又徑、碁石大にして黒白二種あるものをごいしはまぐりといひ、其の外、色白く唇厚くして徑、三四寸に渉るものをてうせんはまぐりと名づけ、四國阿波地方にては方言これをくちぶとと稱する等數多あるがいづれも皆、同物異名である。

習性　はまぐりは、通常淡水の交る海の淺瀨に住みて砂泥質の地を好み、體の半ばを其の中に沒し、水の暖いときは足を伸縮し、比較的迅速に匍匐して居るが、水の冷いときは全く砂泥の中に潛み、唯呼吸管のみを突き出して呼吸を營み、又これを以て食物をも取る。其の食物は、海に産する顯微鏡でなければ見えぬ程の細かい藻類（主として硅藻類）である。此の藻類は、無數に海中に漂つて居るゆへ、呼吸を營むの際、自ら呼吸管より水と共に體內に流れ込む。恰度吾人が坐ながらにして呼吸に要する空氣に交りて食物が口中に飛び込むやうな譯であるから眞に調法である。彼等は、必竟斯かる境遇にありて生活するが故に眼鼻の感覺を要せず、又精神の働をも俟たずして、五體甚だ不備なるにも係らず、境遇さへ適當で

介類雜誌　第六號
明治四十年六月二十日發行

○貝談漫錄（一）

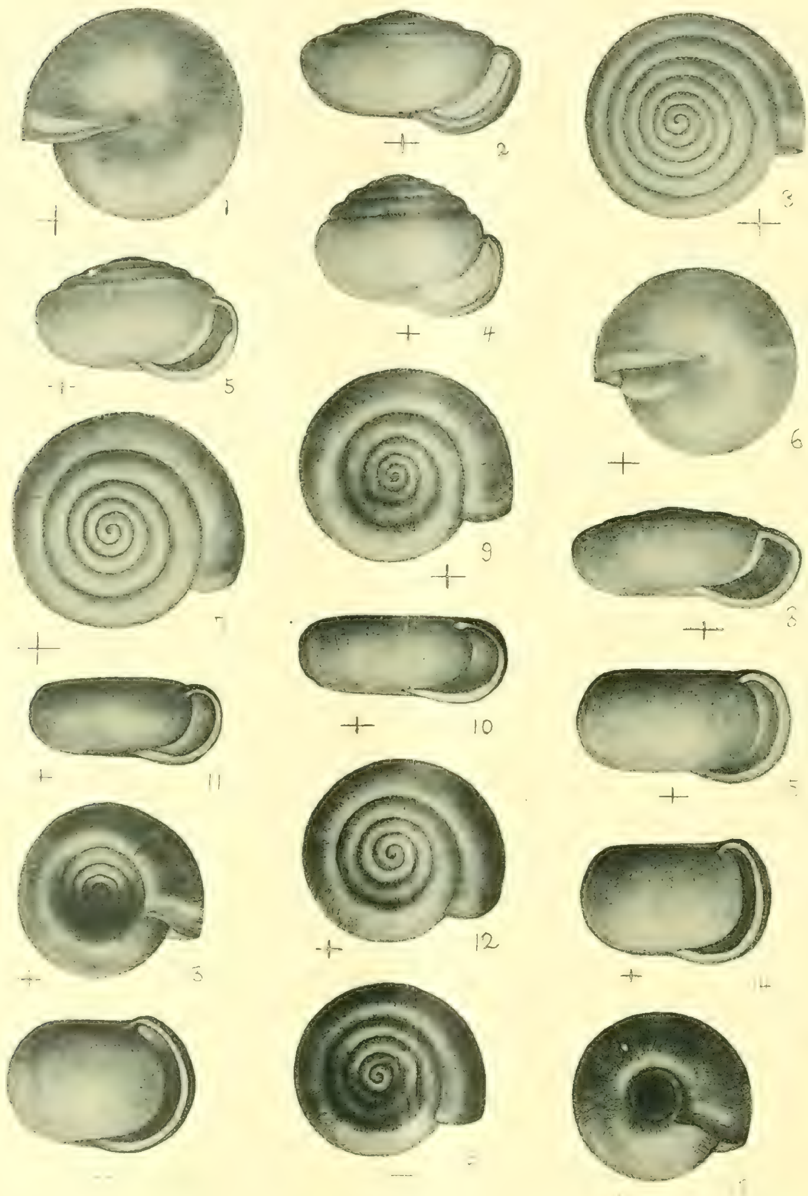
岩川友太郎

余は、去る明治三十七年日本新聞社の請に應じ、食用の貝類及び貝殼の應用てふ表題の下に、苟も人生に關係を有する貝類に就き、何くれとなく思ふがまゝを筆に綴り、弄貝生の名を以て、これを同新聞の家庭理科の欄に掲載したることあり。日刊新聞のことなれば、努めて通俗的に陳べた積りであるが、記事の性質上、博物學の雜誌へ掲ぐべきものと當時考へたることもありしが、謂はゆる騎虎の勢ひ中止するに由なくして、翌三十八年々末に至るまで前後十回に亘り、意外に永く續載せり。淺學寡聞の不肖なれば、杜撰の罪は素より免れざる所なれども、多少内外の諸書をも參考し、且幾分か實驗せる事柄をも併せ記したることもへ、好機會もあればこれを補遺拾集して相當の雜誌へ載せ、聊か同好の參考とも成らば幸甚と思惟せる折柄、貴契平瀨君が介類雜誌に投稿を促さるゝと同時に、前の日本新聞に掲げたる原稿の轉載を申し越せり。如上素より希望する所なれば、直ちに其の需に應じたのである。

此の記事は、由來學術上一定の系統を逐ひたるものにあらず、唯貝學及び貝類に關する諸般の事柄を思ひ出づるまゝに、筆に任かせて書き綴るに止まるものなれば、更に貝談漫錄と題して從前の記事に修正を加へ、時間の許す限り鈍筆を揮ひて腹案を吐露する積りである。讀者諸君幸にこれを諒せよ

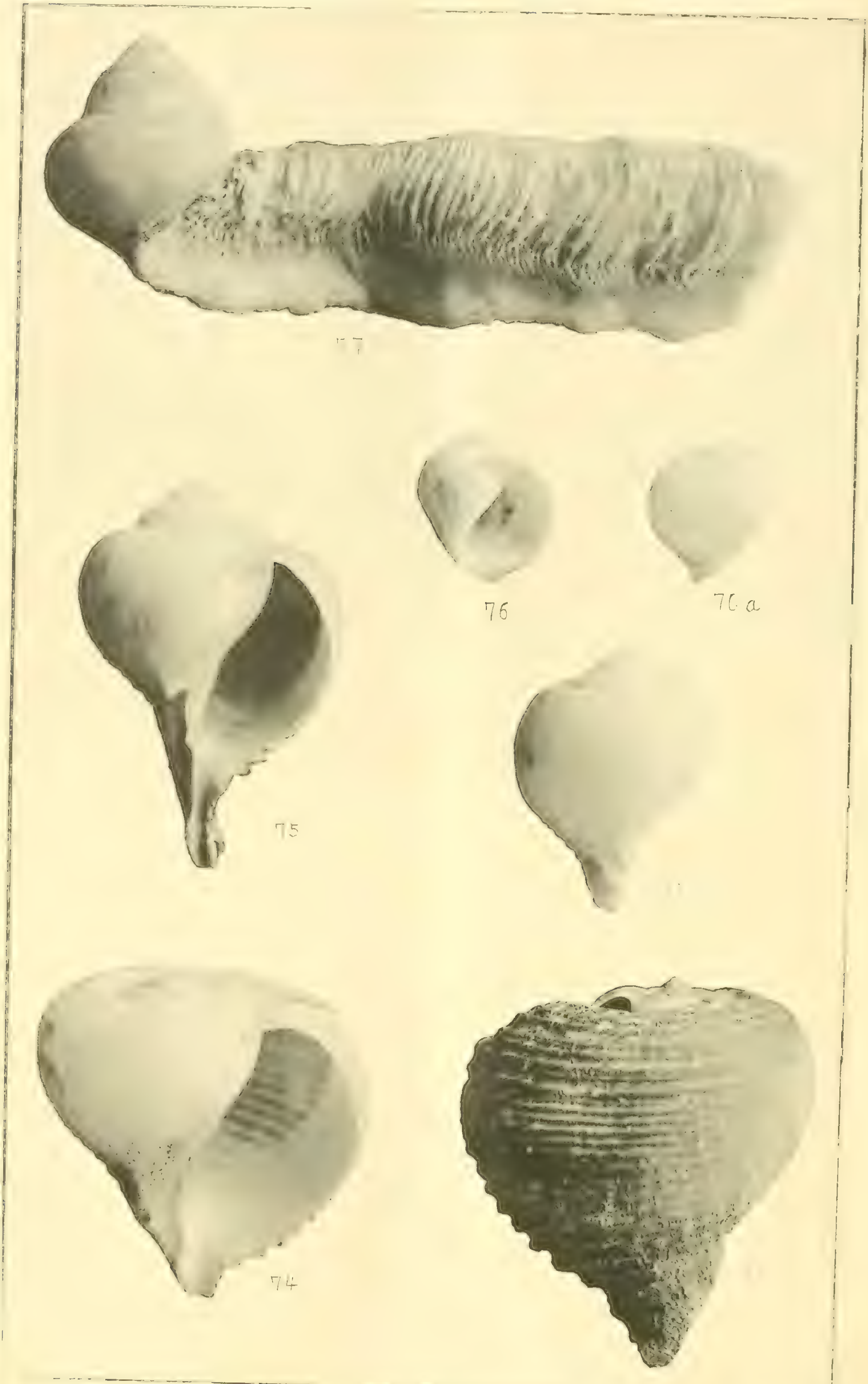
一　はまぐり　文蛤

名稱、形態　**はまぐり**は、漢名を文蛤といひ、和名を濱(はま)栗(ぐり)と稱するは、其の殼の形が栗の實に似たるより出でしといふ。學名をMeretrix (Cytherea) meretrix L. といふ。



1.} 2. 3. Hirasea sinuosa Pils.
4. „ enthcca Pils.
5.} 6. „ insignis Pils. & Hir.
7.} 8. „ hypolia Pils.
9.} 10. „ biconcava Pils.

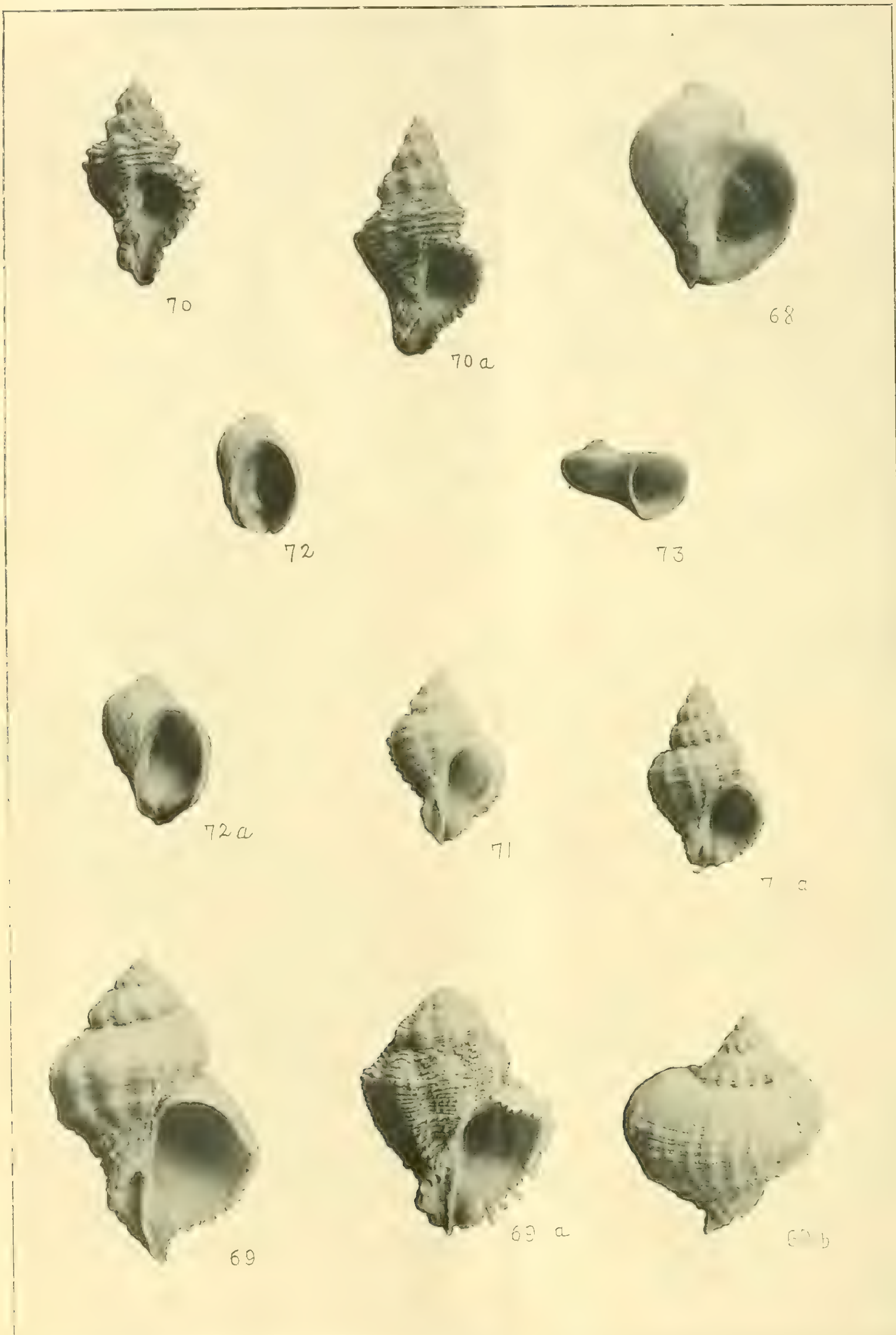
11.} 12. Hirasea planulata Pils. & Hir.
13.} 14. 15. „ diplomphalus Pils.
16. „ „ var. latispira Pils.
17.} 18. „ profundispira Pils.



74.
" a. } Rapa papyracea Lam.
75.
" a.

76. } Leptochonchus striatus Rüppel
" a.

77. Leptochonchus sp. (fossil)



68. Coralliophila neritoidea Lam.
69., "a., "b. " deformis, Lam.
70., "a. " jeffreysii var. hiradoensis Pils.
71., "a. Coralliophila stearnsii Pils.
72., "a. " monodonta Quoy & Gain.
73. Separatista chemnitzii A. Ad.

◯平瀨介館雜誌部 **廣告**

- ○發行 介類雜誌ハ每月一回二十日發兌可致候
- ○前金 介類雜誌代金幷ニ廣告料ハ前金ヲ以テ御拂込被下度候、郵券代用ハ割增
- ○爲替 郵便爲替ハ室町中立賣郵便局宛ニ被成下度候
- ○領收證 本誌代金御送付ノ節ハ別ニ領收證ヲ出サズ本誌ノ發送ヲ以テ御報告ト可致候
- ○前金濟 御拂込ノ前金相盡キ候節ハ本誌包紙ニ濟ノ文字ヲ朱印シ御送金ヲ乞フノ表章ト可致候

本誌定價

一部	金貳拾錢	郵稅壹錢
六部	金壹圓貳拾錢	郵稅不要
十二部	金貳圓參拾錢	郵稅不要

本誌廣告料

五號活字一行、廿五字詰	金拾五錢
半ページ	金參圓
一ページ	金五圓

明治四十年六月二十二日印刷
仝年仝月二十五日發行

不許複製

發行者 平瀨與一郎
編輯者 平瀨信太郎
印刷者 川勝靜三郎
印刷所 合資商報會社

發行所 京都市上京區烏丸通下長者町北龍前町十四番戶 **平瀨介館**（電話九百七十四番）

大賣捌所
京都 東枝律書房
東京 東京堂
仝 東海堂
仝 北隆館書店
大阪 大華書堂

明治四十年一月十九日第三種郵便物認可[illegible]

明治四十年六月二十日發行

介類雜誌

第一卷
第六號

目次

明治四十年七月二十日發行
明治四十年一月十九日第三種郵便物認可（毎月一回二十日發行）

THE

CONCHOLOGICAL MAGAZINE

A MONTHLY

DEVOTED TO THE STUDY OF JAPANESE SHELLS.

PUBLISHED BY Y. HIRASE.

VOL. I. JULY, 1907. No. 7.

CONTENTS.

Notice: The subscription price for foreign countries is $ 1. 50 (3 yen) per annum. All letters and communications should be addressed to Y, HIRASE, Shimochōja-machi, Karasumaru, Kyoto, Japan.

◎動物學雜誌（毎月一回十五日發行）

第十九卷
第二百二十三號

明治四十年五月十五日發行

〔圖版二枚附〕
〔定價金二十錢〕

目次

論說

雜錄

會報

發賣所

東京神田區表神保町　東京堂

全日本橋區通二丁目十八　裳華房

全本鄉區元富士町　盛春堂

地學雜誌

第十九年
第貳百廿一號

明治四十年五月十五日發行

定價一冊金貳拾五錢郵稅壹錢五厘

論說

雜錄

圖

報

雜

發行所　東京市京橋區西紺屋町十九番地　東京地學協會（電話新橋四百十四）

賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂

東京市日本橋區吳服町　北隆館

東京市本鄉區元富士町　盛春堂

東京市京橋區銀座四丁目　東海堂

東京市京橋區彌左衛門町　目明堂

東京市神田區駿河臺西紅梅町　供智堂

明治十九年二月創刊

毎月一回二十日發行　明治四十年五月二十日發行

東京人類學會雜誌

定價壹部金拾五錢　（郵税金壹錢）

第二十二卷　第二百五十四號目次

○挿　圖

○論說及報告

支那古代の陵墓

フイリッピン群島のBISAYAと臺灣のSIRAYAとの近似……伊能嘉矩、臺灣蕃人頭蓋（二五二號續き）……足立文太郎

○雜　錄

臺灣土蕃の書契的結繩……伊能生、人類發達の經路及雌雄の間に存する淘汰……譯者田中茂穗、

○雜　報

口繪說明○坪井博士著「婦人と小兒」○臺灣生蕃の自殺○埼玉縣入間郡鶴瀨村の貝塚○臺灣生蕃の犬の名

○東京人類學會記事

例會○入會者○會員轉居○退會者○會費納入者○寄贈交換圖書雜誌目錄

發賣元　東京市京橋區尾張町一丁目一番地　隆文館

委託發賣所　同　市本郷區本郷六丁目五番地　哲學書院

博物學雜誌

毎月一回廿五日定時發行　定價一册金拾四錢郵稅共

第八十二號目次

○表紙畫　▲顯微鏡にて見たる珊瑚の骨片……（寫眞版）

○口繪　▲世界動物圖譜第十六……（寫眞版）

○論說　▲植物の增殖……秀翠生、▲文學上の動物……林壽祐、▲發生學講話……槻山生、▲理學的智識の普及と迷信……松永松葉

○雜錄　▲岩手山紀行……鳥羽源藏、▲東北地方植物採集記……飯柴永吉、▲伊吹山と劍山の植物分布……鳥居傳八、▲今蘭山を後訪して開書……山海子、▲我地方の藥用植物……梅子、▲動物標品……行洞生、▲蘚植物の研究……丸田善三郎、▲溫古錄……山翁

○雜報　▲日本藻類圖譜▲高輪御殿の御用▲贋作理學博士▲本社出品の賣約濟▲其他數件

○廣告　數十件

發行所　東京市神田區五軒町一番地　動物標本社

◎博物之友

（毎月一回廿五日發行）

定價　一部金拾貳錢　郵稅金壹錢

本誌は博物研究者にとりての良師友たり會員たらんとするものは住所氏名を明記し事務所に申込まるべし

發行所　東京市下谷區鍊塀町十番地市川三喜方　日本博物學同志會事務所

滋養物に富で居るにより善良なる食品で西洋諸國などにては餘程以前より珍重せられて居る羅馬に於ては第七世紀の頃牡蠣の飼育を行ふた事蹟が記錄に殘てゐる下て第十九世紀の始めに於て佛國で此の飼育法を研究し大に改良を加へ現今ビスケイ灣に於て盛んに此の事業に從事しつゝある我國に於ては二三百年以前より安藝國に於て飼育を始め今日に至て居るが西洋諸國に比すれば未だ盛況と云ふとは出來ぬのである我國の太平洋沿岸には至る處良好なる飼育に適する場所が澤山あるから尚一層飼育の事業を盛んにし適當なる方法を講じて亞米利加西岸諸州に輸出し亦外國船の船中食品として供給したら大なる利益があらうと云ふ事である

牡蠣の名は言海によると石よりかき落すと云ふ意より來りしとも云ひ又殼の缺けたるより起りしものであるとも書いてあるが此牡蠣は文蛤などゝ同じく二枚貝の類である二枚貝とは二枚の介殼を体の左右に有するからである學術上よりは斧足類とも云ひ又呼吸器の構造から辨鰓類とも云ふのである（つゞく）

浦つたひ　　伴葛園

心ある蜑か住居や小庭へに
　色うつくしく敷ける貝から

土留めに蠑螺の殼を用ひたる
　浦の花壇の夏くさのはな

雞小舍の鼬威しの蚫貝
　やみにきらめく海きしの家

前號正誤

頁	段	行	誤	正
一三	上		插圖顚倒	
一五頁ヨリ二〇頁ニ至ル陸貝圖説中ゴジック活字長ハ高ノ誤植				
一九	下	七	diplomphalus,ノ次ヘ	Pils. ヲ加フ
二四	下	一六	reinhaːati	Reinhardti
三四	上	一二	Pellina	Tellina

八拾錢に過ぎざるを此に彫刻を施したるものは大なるは拾六七圓鷄卵大の物にて六七圓蠶豆位の物に人の顔を刻み十四金の足を附けたピンが壹圓五拾錢乃至貳圓程の價なり云々』とて實物を示されしが人物を刻せるは恰も石膏像の如く山景草花等は貝の表皮を淺く彫りたる其の天然の色を巧みに利用して至極見事なる出來なり、氏は更らに語を續けて『この彫刻は頗る難しき仕事に非ず小さき器にて根氣よく爲すものなれば手先の器用なる我邦人の腕ならば何の造作も無き事ならん、ネープルスのトラデルグレツゴーと云ふ處には大なる彫刻學校あり又ボノルノーにては珊瑚の玉を製造する大工場あり此工場にても材料の珊瑚中我國產の物最も多く輸入額一年八拾萬圓に上り之が伊國にては八百萬圓以上の物になると云へば我邦人は指を啣へて見て居ず彼國に劣らざる物を製作してドシ〳〵輸出する樣にしたし云々』　（萬朝報）

●御木本眞珠店の名譽

三重縣英虞灣に於て眞珠を養殖し其名歐米に知られたる銀座四丁目の同店へ此程山階宮久邇宮兩妃殿下長崎式部官夫人の御案內にて御微行あらせられ眞珠貝（あこや貝）養殖法に付御下問あり齋藤營業部長は詳細御說明申上げたりと云ふ　（讀賣新聞）

●日本貝釦同業組合創設

阪神及び其の附近を通じて貝釦製造業者は七十八名ありて從來其仲買人にて斯製品の輸出にも價格に常に外人或は仲買人の爲に左右せられ各自の利益を減殺せらるゝ傾きあるより今回標題の組合を組織して此等の弊害を除却せん爲昨日大阪商業會議所に創立總會を開き定款の作成幷に役員選擧を行ひたり　（大阪朝日新聞）

●牡蠣の話

牡蠣は雌牡蠣、牡蠣飯などとなし又ふらいとして一般に賞用せらるゝ貝であるが村井弦齋氏の食道樂によれば牡蠣の料理に澤山の仕方がある殊に牡蠣は消化し易く且つ

雜報

●浦安浦貝蒔の終了

東葛飾郡同浦稚貝の養殖事業は去る七日を以て終了せり本年は原種極めて不足にして此れを得るに困難なりしも理事及び事務員の精勵により漸く終了を見るに至れり然れども其成績は或は昨年度の如き良好を呈する能はざるにや聞き及ぶ(新總房)

●王喜村の蠣養殖

厚狭郡王喜村海岸が水産地にして寶庫たるべきは大に當局者の着目する處にして今回は白崎沖三萬坪に蠣の養殖をなすとゝなり數日前より郡役所雇たる廣島縣斯業家山崎桃太郎氏は同村に出張蠣ひゞ搾らへ中なりしが本年度八千坪は去一日終了を告げたる筈にて磯部同郡長も近日にして養殖地の視察すべき筈なりと云ふ計畫中なる殘部二萬坪餘は漸次實行せらるべき筈なりと(馬關毎日新聞)

●眞珠養殖奬勵

我邦に於ける眞珠は今日まで殆んど獨得有望なる事業として海外輸出額も昨年の如き參百五拾萬圓以上に達し今後益々米國其他に於て販路頗る擴張せられ且つ事業確實なるを以て當局者に於ても益々之れが養殖法を奬勵せんと方針の由なれば今後我邦に於ける同業は大に有望なりと(中央新聞)

●彫刻家の爲すべき新事業

水産講習所技師吉岡哲太郎氏は歐洲の水産事業を視察して此程歸朝されしかば記者は氏を訪問して次の談話を聞得たり、▲伊太利名物の珊瑚等の貝類に繪を彫刻したる物ありて室内裝飾襟留等に盛に賞用され外邦人の遊ぶ者は必ず土産に買行くが爲賣高莫大なり然に此貝類は大抵日本より廉價に輸入せしものなる一事は看過すべからず▲此彫刻に適する貝と云は南洋又は江の島等の産なる唐冠貝萬寶貝夜光貝子安貝等にて我邦にては大なる物も一箇

あることを發見しました。

「あはぶね(Crepidula aculeata, Gmel.)といふ介は、大小の石が海岸に累積されてあると、其等の裏面に附着して居るのであるが、元來色彩か土色であると、外面に汚物を被つて居るのと、今一つは介殼が極く低いのとで石を轉(ころ)ばしても餘程注意して見なければ、それであるといふ事を見出し兼ねるのである。この介を探るには、鋼鐵製の薄いヘラ樣のものを石と介との間に挿入して探るのであります。

干潮の時に砂泥の中を潜り抜けて、「トンネル」を掘へてをるが、淺いのと海底の砂の脆いとので、「トンネル」が墜落して埋められてをる。其の道を傳はつて探すと、行きつまりにまだ工事中と見えて、高つてをるのが見られる。これが「かにもりがひ(Cerithium kochii, Phil.)及びむしろがひ(Nassa livescens, Phil.)などの生活の模樣であります。

細い砂を少し計り取りわらけて、探してをると、奇異な暗色の細長い三寸位の袋が見出されるのであるが、此の袋の内部は寒天狀のものである。其の中に Modiolus japonica Dunker. といふ介が生活してをるのであります。其の袋の後部を指の先で押すと、つると飛び出る。これは美しい色彩を持つてをる愛すべき介であります。

右は其の一端に過ぎないのであります。又私の住んでをる一地方の經驗に過ぎないのでありますから、何處でもこの通りで採集が出來るかどうかは、保證する事が出來ないのであります。私は淺學で研究するといふ事は出來ないのでありますから、只不思議に面白いと感じた事丈けを以上に申述べました。



をるのを見ました。たまには內面の滑層に達くばかり近く透き徹つてをるのもみました。

又或夏の日海岸に採集に出ましたが、砂地に Chione marica, Linn. と**まつやまわすれ** (Macrocallista pacifica, Dill.) などが轉がつてゐましたから、採りあげて見ると、死殼でなく生殼で、しかも其の近傍の砂面には穴が穿たれてゐました。こんな事が幾何もありました。思ふに干潮の時に砂中から飛び出したものでありませう。

Lima orientalis, Ads. & Rve. が游泳する時は頗る美觀である。その樣子はといふと、數多の長い帶黃紅色の觸手を介殼の外方に伸ばして、絕えず之れを動してをる。また介殼を開閉して水中を疾走してゐました。

ひざらがひ (Acanthochites dephilippii, Tap-Car.) の或種はイソギンチヤクの親友と見えまして、何時でもイソギンチヤクの蔭に生棲してゐますので、それを採らうと思へば、イソギンチヤクを目掛けて探したら、それが居るか否かを知ることが出來ます。

Natica concinna, Dunker. は、多く干潮して砂面を露出し得る程の淺海の砂中に潛んでをるのが常であります。以前は死殼ばかりより得ることが出來なかつたのでありますが、或時二枚貝を採るために砂を覆へしてゐた所が、ふと一個の生殼が轉びでた。單殼で砂中に潛むなどは多く見ぬが、これのみは不思議でありました。けれども**ほとゝぎす** (Modiolus senhausii, Reeve.) の居る砂中では却て見る事が出來ぬ。此の介も亦不思議の生活をしてをる。それは何か殼內から線條をだして、周圍の土砂を集め結び付け、塊を作り、其の內に潛んでをるのであります。

Natica concinna, Dkr. を探してをると、之れと一緒に**きせわた** (Philine japonica, Lischke.) をも得る事が出來る。初めは此の介を他の動物かと思うてゐたのですが、ためしに押し潰してみた所が、何か介の破れるやうな音響がしたから、持ち歸つて煮て見た所が、そこに介殼の

ては他の動物の巣の中から、或は体部から、其他あちらる方面から探し求めて種々のものを得ました。今では私の住んでをる淡路の福良及び其の近傍から得た種類ばかりでも、凡三百五十種に達しました。

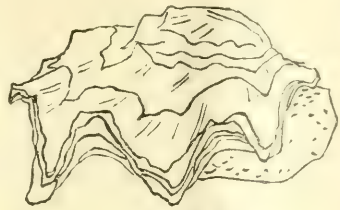
種類によりまして、其れを探集するにも、夫れ〴〵異つた器具を要します。深海の種類は其の生活の狀態を充分知る事が出來ませんが、二枚貝を採集するには、先號に岩川氏の說かれたドレッヂ様の器具を用ひてをります。腹足類には引網を用ひたり、肉食類のものには延繩を使用したりして採集してをります。それから中淺の所、大抵五六尋の海底であると、海底望觀器を使用して（木製の函の底面には硝子板を挿入したもので、頗る輕便である）棹の尖端に金屬製の道具を付して挾み探るのであります。誰も能く御存知の通り、海濱では大した道具は要ないのですが、種類によつては隨分異樣な場所から見出されることがあるのですから、いくらか其の準備をして出掛けなくてはなりません。

しらとりがひ (Macoma nasuta, Conr.) は、海濱の砂上で死殼の浪に打ち上げられてをるのを見たばかりで、生殼を得るといふ事がなかつたのですが、種々と探索の結果岩石と岩石との間の極く狹い和い泥の中に生息して居るのを見出しました。初めは極く淺く隱れてをるものと思つたのですが、中々そうでなく、奧深く潜んでをるので容易に届かないのです。そこで已むを得ず其の岩石を破壞してこれを採つたのです。元來この貝は水管孔が大變長いですから、さう深く潜り込むのでせう。かういふ風ですから、之れを採るには金屬製か何かの長いヘラを携帶する必要があります。

或日赤にしを採りましたが、其れは眞個(ほんさう)に老朽した殼でありまして、小さな穴が澤山穿たれてゐましたから、何んだらうと思ふて殼を破つて見ましたら、其の中にはひみずの一種 Lithophaga aristatus, Solender. の寄生して

『拾ひ貝はなに〳〵ぞ、寄生蟲、小螺子、蛤子貝、汐吹あげの簾貝、ちらと見染し姫貝に、一筆書て送りたいらぎ口明て、ほや〳〵笑ふ赤貝に、心よせがひア、いたら貝、君はすがいと吸付けど、我は蝮の片思ひ、憎やそもしの螂螺に喰せたいぞや榮螺貝、むすめの花貝、さくら貝、寝もせで一人あかにしの、誰を待てこや、人の見るくひ忘貝、我ふたりねの床ふしの身に蜆貝いわひがひ、門出よしの螺貝は、悦びの貝とぞ取りにける。』

カキ



50

この外支那の書物にあらはれてをる種々の句節を抜萃すれば、澤山あるのですが、それもここには漏します。

附言、本篇は研究家の資料にもと思つて書いたのでは、決してない。只ほんの海水浴にでもかれる小供方、婦女方のためと思つて書いたのでありますから其積で、御一讀を願ひます。

海貝採集實地談

森崎生

私は平瀬介舘の命に依つて、海陸産貝類を採集するのですが、特に海產貝類の採集は、殆んど專業のやうになつてゐます。で其の採集中には、種々珍しい事にも出會ひ、奇妙なものも見たのでありますから、全好の方の爲には幾らかで參考にもならうかと思ひますので、少しくお話をいたします。

私が介舘の爲めに採集に從事しましてから、彼是もう十年以上になるのです。最初は採集の仕方も幼稚でありまして、得た種類も僅少でありましたが段々經驗を積むに從つて、或は砂の中から、或は泥の中から、時とし

次に丁度植物見た様な、うみゑら、沙箸、やぎ、石帆、鉄樹などは、矢張小さな動物の群がつたものゝ骨で、珊瑚の類です。又石芝は莖のない椎茸のやうで、ひわから石は、一寸實を去つた枇杷の枝に似てゐます。其他海花石石蠶はまさんごなども皆珊瑚の類で、南洋では珊瑚の島が出來る材料になつてゐます。

まだ書けば種々ありますが、此位にして置きませう。



エゾキンチヤク 1/2

48

七、貝類文學

この項でもざつと申し上げます。紀貫之の土佐日記に忘貝といふ名がでゝをります。そのうたに、

よする波うちもよせなんわがこふる
人忘れがひおりてひろはむ

などいふがあります

竹取物語には種々面白い話がありますが、其のうちに石ノ上中納言が燕の子安貝を採らうとして失敗した話があります。その時赫映姫か

年をへて浪たちよらぬ住の江の
まつかひなしときくはまことか

と歌つたといふ事があります。

堤中納言物語の第六帖に「かひあはせ」といふのでありますが、詳しい事は本書に譲ることにしまして、歌一首だけを擧げませう。



ナミマガシハの一種 2/8

49

かひなしとなに歎くらむしら浪も
君がかたにはこゝろよせてん

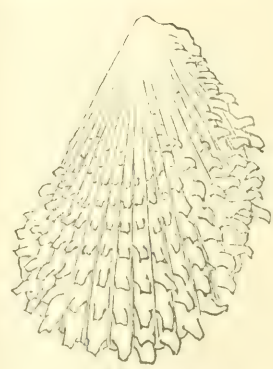
近松が妙筆を揮つて國姓爺を書いた時、平戸の浦の光景を叙して貝の名をくさ〴〵あげました。

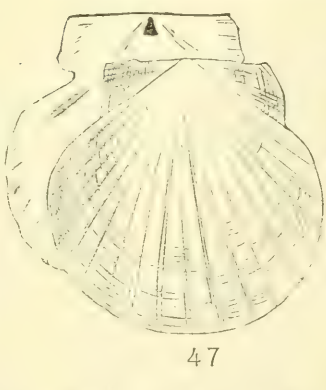
しゆもくがひ Malleus albus, Chemn. (第四十五圖)
みのがひ Lima squamosa, Lam. (第四十六圖)
ほたてがひ Pecten yessoensis, Jay. (第四十七圖)
えぞきんちやく Pecten swifti, Bernard. (第四十八圖)
なみまがしは Anomia cytaeum, Gray. (第四十九圖)
かき Ostraea cucullata, Born. (第五十圖)

六、貝でないもの

海濱で拾つたもの丶中には、かひでないものもはいつて居ます。中には昔から貝としてあつて、随分間違ひ易いものもあります。こんなものも矢張捨てずに別の箱にしまつて置くが宜う御座います。今高等のものから申せば、鮫の齒であります。又鮫の卵のからも折々拾ふことがあります。其他かははぎ、海牛、かはでふぐ、はりふぐ等の類、又龍の子の様なものは海馬又はたつのおとしごと申して矢張下等の魚です。

蝦や蝦蛄や蟹の甲なども、昔はかひの中に入れましたが、これは甲殼類と申すもので、節足動物の中にはいります。又藤壺や、石砌や、茗荷兒も其幼時の形が蝦等に似てゐますから、矢張甲殼類中に入れてあります、かぶゝかひは海膽の殼、釣鐘かひはうにの齒で、八丈うにの大きな棘は石筆の様です。蓮の葉、すかし枕はたこのまくらの殼で、ぶんぶくちやがまなど丶一所の海膽類に屬してゐます。又桔梗がひ、もみぢがひなどは海盤車の類であります。


ミノガヒ 1/5
46


ホタテガヒ 1/4
47

斧足類

にほがひ Pholas manilensis, var. inornata, Pils. (補版第一版第十五圖)

まてがひ Solen gouldii, Conrad. (仝第一版第十一圖)

みぞがひ Siliqua pulchella, Dkr. (第二號第六頁第十七圖)

しほふき Mactra veneriformis, Desh. (第三十三圖)

ばかがひ Mactra sulcataria, Desh. (第三十四圖)

みるくひ Tresus nuttalli, Conrad. (第三十五圖)

いそしゞみ Soletellina olivacea, Jay. (第七號第五頁)

さくらがひ Tellina nitidula, Dkr. (第三十六圖)

ふぢのはな Donax proximus, Bertin. (第二號第六頁第十六圖)

はまぐり Meretrix meretrix, Linn. (第六號第二頁)

かゞみがひ Dosinia troscheli, Lischke. (第三十七圖)

おきしゞみ Cyclina chinensis, Chemn. (第七號第四頁)

あさり Tapes philippinarum, Ads. & Rve. (補版第二版第十圖)

とりがひ Liocardium muticum, Reeve. (第三十八圖)

あほひがひ Hemicardium cardissa, Linn. (第三十九圖)

ながじやこ Tridacna elongata, Lam. (第四十圖)

あかゞひ Arca subcrenata, Lischke. (第四十一圖)

いがひ Mytilus crassitesta, Lischke. (第四十二圖)

ひばりがひ Modiolus barbata, Linn. (第四十三圖)

ひみず Lithophaga zittelianus, Dkr. (補版第一版第十四圖)

くじやくがひ Septifer bilocularis, Linn. (仝第二版第十一圖)

あこやがひ Avicula martensii, Dkr. (第四十四圖)

雑録

たまきび Littorina sitchana, Phil. (補版第一版第二圖)

かやのみかにもり Cerithium humile, Dkr. (第二十五圖)

うみにな Potamides multiformis, Lischke. (第二十六圖)

あまがひ Nerita pica, Gould. (第二十七圖)

さざえ Turbo cornutus, Gmel. (挿圖畧す)

すがひ Turbo coronatus, Gmel. (補版第二版第三圖)

きさご Umbonium costatum, Lesson. (第二十八圖)

さらさばてい Trochus niloticus, Linn. (第二十九圖)

くぼがひ Chlorostoma argyrostomus var. basiliratum, Pils. (補版第一版第五圖)

ぐまのこがひ Chlorostoma nigricolor, Dkr. (全第二版第十二圖)

こしだかがんがら Chlorostoma rusticum, Gmel. (全第二版第八圖)

及び 〃 carpenteri, Dkr. (全第二版第四圖)

ゑびすがひ Calliostoma unicum, Dkr. (全第二版第一圖)

いしだゝみ Monodonta labio, Linn. (全第一版第三圖)

とこぶし Haliotis diversicolor, Reeve. (全第二版第九圖)

みゝがひ Haliotis asinina, Linn. (第三十圖)

うのあし Acmaea saccharina, Linn. (補版第二版第五圖)

よめがかさ Helcioniscus toreuma, Reeve. (全第一版第四圖)

ひざらがひ Liolophura japonica, Lischke. (全第一版第七圖)

なつめがひ Bulla vernicosa, Gould. (第三十一圖)

堀足類

つのがひ Dentalium hexagonum, Gould. (第三十二圖)

まくらがひ Oliva mustellina, Lam. (第七圖)
ふところがひ Columbella versicolor, Sowb. (補版第一版第九圖)
のしがひ Engina mendicaria, Linn. (第八圖)
ころもがひ Cancellaria spengleriana, Desh. (第九圖)
りうきうたけ Terebra subulata, Lam. (第十圖)
まだらいも Conus hebreus, Linn. (第十一圖)
うらすゞまいのそで Strombus pacificus, Swain. (第十二圖)
まがきがひ Strombus luhuanus, Linn. (第十三圖)
しどろ Strombus japonicus, Reeve. (第十四圖)
くもがひ Pterocera lambis, Linn. (第十五圖)
はなまるゆき Cypraea caput-serpentis, Linn. (補版第一版第八圖
ほしだから Cypraea tigris, Linn. (第十六圖)
うみうさぎ Ovula ovum, Linn. (第十七圖)
かづらがひ Cassis strigata, Gmel. (第十八圖)
やつしろがひ Dolium luteostoma, Kust. (第十九圖)
ときはがひ Dolium pomum, Linn. (第二十圖)
つめたがひ Polinices ampla, phil. (第二十一圖)
あはぶね Crepidula aculeata, Gmel. (第二十二圖)
きくすゞめ Amalthea conica, Schum. (補版第二版第六圖)
くまさかがひ Xenophora pallidula, Reeve. (第二十三圖)
いとかけがひ Scala lamellosa, Lam. (補版第一版第十圖)
あさがほがひ Ianthina fragilis, Lam. (仝第一版第一圖)
はまかづら Thylacodes imbricatus. Dkr. (仝第二版第七圖)
みゝずがひ Siliquaria cumingii, Mörch. (第二十四圖)

類が多いやうであります。そして此等は種々種類が異つてをります。一々は申しきれませんから此位にして置きませう。

五、貝の種類

貝類は之れを大別して、頭足類、腹足類、掘足類、斧足類の四つとするのであります。今その詳しい事を書くわけにいきませんから、多くは普通なものを、手當り次第數十種を撰んで、左に揭げます、既に本誌に揭げた、貝の圖は本號には畧します。

頭足類

まいか Sepia esculenta, Hoyle.

まだこ Octopus octopodia, L.

たこぶね Argonauta hians, Solender. (第三號第二十四頁參照)

腹足類

ほねがひ Murex tenuispina, Lam. (海產第一版第一圖)

はねなしやうらく Ocinebra monachus, Crosse. (全第三版第二十圖)

れいし Purpura tumulosa, Reeve. (全第四版自第三十一圖至三十三圖)

あかにし Rapana bezoar, Linn. (全第七版第六十一圖及第六十二圖)

ほらがひ Triton tritonis, Linn. (全第十一版第七十八圖)

ながにし Fusus perplexus, Ad. (第一圖)

いとまきぼら Fasciolaria trapezium, Linn. (第二圖)

てんぐにし Hemifusus ternatanus, Gmel. (第三圖)

いそにな Euthria ferrea, Reeve. (補版第三版第二圖)

ばい Eburna japonica, Sowb. (第四圖)

あられがひ Nassa gemmulata, Lam. (第五圖)

てらせんふで Mitra episcopalis, Linn. (第六圖

貝が游泳ぎます時は、澤山の長い帶黄紅色の觸手を介殼の外に伸出し、絶えずこれを運動させます、此運動は吾吾の心臟の皷動と等しく無意識に起るもの丶やうで、時として其觸手を外套膜縁から切斷しても、矢張一種の蠕蟲様の運動をいたします。其色は外套膜の橙黄色の外は、皆鮮紅色でありますから、其游泳の際は實に美觀を呈します。



ヒバリガヒ

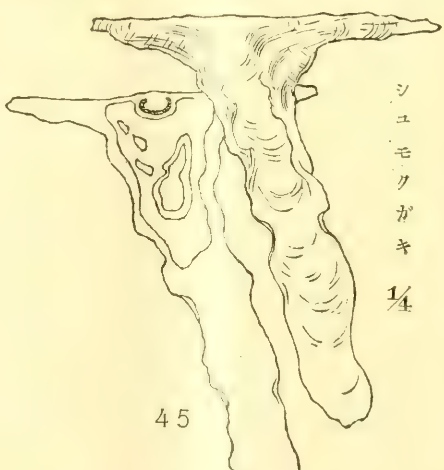
43



アコヤガヒ　1/2

44

にほがひの類は他物内に潜入して生活するもので、多くは海岸の岩石中に穿孔いたします。其孔の深さは單に其躰と介殼とを容る丶に足る丈けであります。そして此孔から一生出ることはないのであります。此貝は光を發します。或人はこれを電氣によつて起る發光といたします。而して此貝は躰の割に住居の入口が小さいのでありますが、これは此貝が孔內で生長する證據であります。



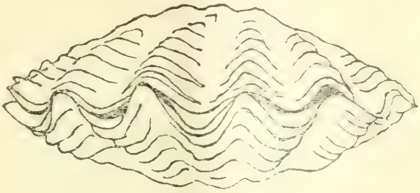
シユモクガキ　1/4

45

この外むしろ貝などは顚倒(ひつくりかへ)つて歩きます。又なつめ貝寶貝などは殼を自分の肉で包んでゐまして、一見した處では貝とは思はれません。また小石に附着してをるものもありますが、此の小石に附着してをるものは、大きな岩石に附着してをるものよりは、総体に小形の種

で他の貝を此んなに自分の身の上につけるのであらうか、是れは一つ私共の観察を要する點であります。

一体生きた貝を仔細に観察しようとするには、桶か、

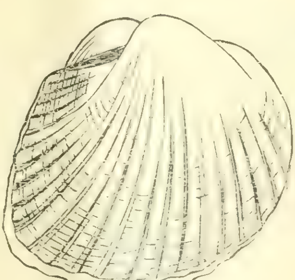

40
ナガジャコ 2/3

鉢などのやうな、口の廣い入物に潮をいれ、生きた貝を其の中に入れて、彼等の行動を観察するのであります。が入物のなかの潮は度々入れ換へないではいけませんから、其丈けの注意を要します。

よめがさらなどいふ貝は、石にくつ付ものでありますから、此のやうな貝のためには、入物のなかに石を入れて置く必要があります。石を入れて置くと彼等はそれにひつ付たり、又其の上を這ひまはつたりいたします。

あさり、蛤などの爲めには、沙を入れて遣らねばなりません。さうすると沙の中をあちこちと運動いたします。其のさまを観察するのは面白い事であります。

其の他舌の様な足をつきだして沙を掘つて動く。或は


41
アカガヒ 1/3

水管をだして呼吸する。又食物の不消化物を排泄する。種類によりましては、水管に長短がありまして、その長短は沙上に顯はしてをる丈けで分ります。又沙中何れの深さにをるかといふことも分ります。

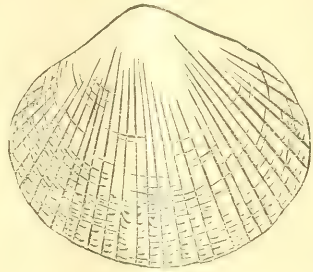

42
イガヒ 1/3

貝の内部を観察する爲には、アルコール漬にして貯藏するがよろしいのであります。

きつねがひの水中を游泳するのは美事であります。此

ら、氣を付けて二枚揃つたのを拾ひ二枚よく合せて、一方の合せ目に小さな細長い紙切を貼つて、一方は開いて裏を調べることの出來る樣にして置く方が便利であります。

トリガヒ 1/2



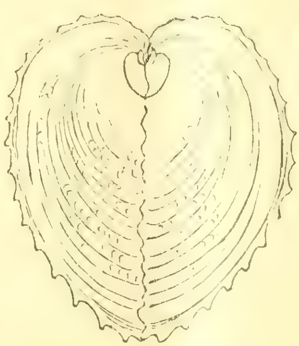
38

小さな貝を取扱ふには「ピンセット」があれば便利です。鐵の「ピンセット」は貳拾錢ばかりで買へますが、自分で竹で以て製へたのが却てやわらかで宜しい樣です。これを製へるには、片端に節のある四五寸の細長い竹切を美麗に削り、其内側を向ひ合せて、節の所を强い糊で合するか、絲で卷くかして、鐵の「ピンセット」の通りに使ひます。介孃方はかひ拾ひにも、之れをお用ひなさつて、藻屑の間、砂の中、泥の上などのかひをお採りになつたら御便利でありませう。

四、貝に就いての觀察

仔細に觀察いたしますれば、天地何れの物にも夫れ夫れ美妙な點があるものであります。貝に就いても詳密(こまか)い觀察をいたしますと、また言ふに言はれない面白味のあるものであります。試にこゝに二三の例を擧げて讀者の一粲に供へませう。

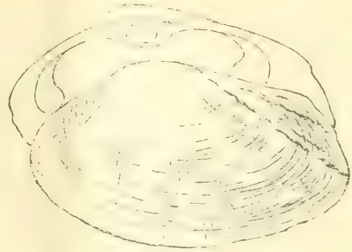
アホじガヒ



39

ぐまさかがひは、背に種々の貝を集めてをります。即ち貝の死殼が背にくつゝいてをるのであります。此んなに多くの貝を背負のは畢竟するに、其身の保護にあるのでありませう。此る有樣でありますから、一見した所貝だか何んだか分り惡いのであります。歐州では方言でこの貝のことを介學者と申します。其れは種々な貝をもつてをるからでありませう。どういふ風

はプラッシユで充分に汚物を拂ひ去つて置くことが必要であります。生た貝の方は海岸などで拾つた死殻よりも、完全で且つ價値があります。



ミルクヒ　1/3

35



サクラガヒ

36

かうして出來たものを、それ〴〵より分けて、珈琲糖のあき箱か何にかに、同じものを一所に異つたものを別な區劃に入れ小さな厚紙の切に、貝の名と、採つた所の名と、年月日と、採つた人の名とを細かに書き付け、かひとふだことに同じ番號を付けて、ちやんとしまつて置くのであります。箱はどんなものでも宜しう御座いますが、中に區劃が仕てあつて、蓋を玻璃で張つた珈琲糖の箱の樣なものが一番宜しいでせう。そうして區劃毎に綿をいれ、かひを上手につめて、飾つて置くと中々美麗なものであります。其つめ綿の内に色綿を雜へ、白い貝には赤綿、暗色のかひには青綿をつめると云ふ樣な風に、色配をよくすれば、花も及ばぬ樣に美麗になります。箱の中の區劃は厚紙を切つて組み立つることが出來ます。大きな貝には札を其内側に貼り付け、小さな貝は其表面と裏面とを併へて厚紙を貼り付け、或は御醫者さんの藥を包むにお使になる「カプスル」と申す、透明つた小さな膠の筒の中に、一種づゝ入れて置いても宜う御座います。



カヾミガヒ　1/3

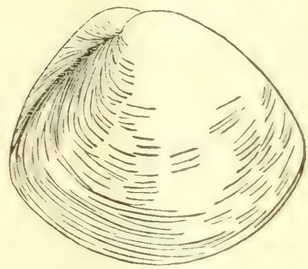
37

もし箱がありませぬならば、小さなものは紙に包み、大きな者は其内に薄い紙の札を折りて入れて置いてもかまいませぬ、併し二枚貝は片貝では餘り役に立ちませぬか

面にも能く注意して、見遁さないやうにするが肝心であると思ひます。



32 ツノガヒ



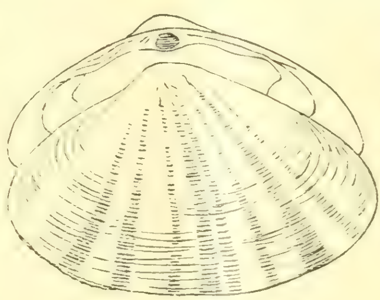
33 シホフキ 2/3

採集の趣味は之に盡きますまい、入れば入る丈け面白くなつて、他人の窺ふことの出來ない趣味を感じて、獨で喜ぶことが出來ませう。

三、貝類の整理

本統に貝類を採集するには、色々の道具もいり、費用もかゝりますが、私共は只小さな籠か、袋か、箱かを一つ持て、干潮の時に帽子を冠つて、海風涼しい海濱に出かけ、かひ拾ひを試みればそれで結構であります。

拾つた貝の生てをる分は、まづ小鍋に水を少し入れてこれを煮、そして其の肉を抜かねはなりません。煮るにも餘り長く煮ては抜けない事があるし、また煮が足りないでも抜けない事があります、煮加減に注意が入用です。



34 バカガヒ 1/2

單殼の貝は針で肉を引き出して宜いのであります。抜け殘つた時は線金の螺旋狀のものを拵へて、それで引き出せば大抵は抜けます。二枚貝は煮ると自然と口があくから肉を取ることは至極樂であります、能く肉を抜いておかないと腐敗して困ります。蓋のある貝は蓋も注意してつけて置くことが必要であります。二枚貝も片片丈けでは標本になりませんから、二枚合せて保存しなければなりません。いふ迄もない事ですが此くする迄に

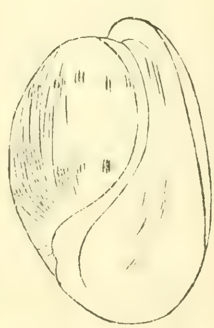
はせたまふた、其小さな貝にも及びませんね」と御悟りなされうも知れませぬ。』

以上加藤氏の貝ひろひには生た貝のことは略してあるのでありますから、これから少し生た貝の採集について申し上げませう。潮の滿干によつて移動するものがあります。**むしろがひ**、**あられがひ**、**くぼがひ**、**くまのこがひ**などはその例であります。又潮の滿干に拘らず、岩石の凹所に三々五々附着してをるものもあります。**れいし**、**はねなしやうらく**、**すがひ**、などは其の例であります。これらのうちには介殼の外面に藻類が附着して泥に埋まつた岩石に附着して居るものもあります。また海産でありながら、海中にはをらないで、大浪が岩石にうち當つて飛沫が届く程の場所に一面に附着してをるのがあります。**たまきび**、**あまがひ**、などは其の例であります。また小石をはね起して見ると其の下に小さい貝が澤山をります。また岩石に海藻の群生してをる中に棲んでをるのもあります。**ふたりがひ**などは其の例であります。二枚介は大抵砂と泥との混つた中に棲んでをるものでありますから、何かで之れを起して見る必要がありませう。此ういふ風でありますから、海邊にでられた時には、何れの方


キサゴ
28


サラサバテイ 1/3
29

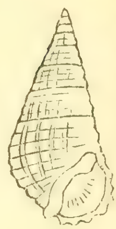

ミミガヒ 1/2
30


ナツメガヒ
31

う。又室内の装飾にします。何やら千尋の底の秘密を覗いて居る樣で、龍宮の御庭の影を棚の上にほのめかして居る樣で、人形や玩具などを飾るよりもどんなに風雅でせう。そして之を御覽になつたならば、

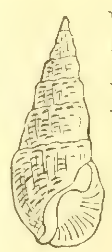


24



25

幾分かは俗務に御疲れなさつた大人方の御慰ともなりませう。又遊んだ土地と其時との紀念にもなります。つまらぬ繪葉書などを集むるよりも、どんなに高尚でせう。其上學問の助ともなるし、研究の材料ともなるし、新種を發見し、或は新しい事實を發見することがないとも限りませぬ。こんな標本をちやんと藏つて置いて、お父さん、お母さん方の御暇の折か、御病氣の折などに取り出して、當時を思ひ浮べ、「あゝあの時は面白かつた、此貝は何處で姉さんが拾つた」など、話しませうものなら、白帆が目の前にちらつき、松風と波の音が耳に響き



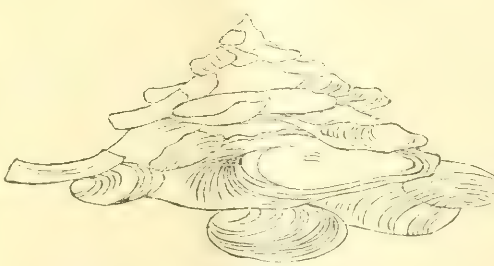
26


27

お父さんお母さん方も其話を聞しめし、其貝を御覽じて、皆さんの高尚な御心がけを御褒めなされ、或は[illegible]無籠に乘つた御心地に御成なされ、「此所は龍宮おやな」、「此貝よりも御前の方が奇麗だ」と仰せられうも知れませぬ。もし又皆さんが無心で、「お母さんこれ御覽なさい、此貝の奇麗な事、お姉さんが此間買て貰ひなさつた帶よりも奇麗でせう」などと申されたなら、どんなお金持のお母さんでも「ほんにね、人間の榮華は神樣の裝

こと、海水浴にも厭き、散歩にも厭き、殊に年のいつた方は讀書にも厭くやうなことがありませう。そんな時は貝を拾ふに尤もよい折です。天氣のよい時に集めて置いて、天氣の惡い時は其名を調べたり、整理したりしたら便利でせう。「兄さんこんな貝を拾ひました」。「姉さん妙なものを拾ひました、これも貝でせうか」などゝ呼びかはし、海風に吹かれ、足さはりよき細砂の上を、かけ波と駈り競べなどして打上られた海の藻屑や、何にかの間をかきわけて、貝拾ふ樂しさは如何でせう、身体も之れが爲めに健康になり、家庭の面白味もいや增し、友達の親しみも加はり、知らずしらずの間にどれ程の大きな利益があるか知れませぬ。そして此慰は其時限りではありませぬ。旅舍や、別莊に歸つて整理します、箱に納めます、名をつけます、採集日記をつけます、只それだけでありませぬ、家に歸つて親類や、友達への土產にします。之れを貰つた人々は、誰でも此麗しい貝殼の中に住でをつた、小さな主人の生命の力で組立てた細工が、如何にも精巧を極て居るのに見とれ、造化の意匠が一々違つた貝殼の形にあらはれて居るのをほめ、表に意味ありげな珊瑚の色を裝ひ、裏に虹なす眞珠の光を飾つてをるのを驚かぬ者はありますまい。そして只美しいばかりではありませぬ、「何所で」、「誰が」、「何して取つた」などゝ話の緒にもなります。田舍菓子や、竹細工などを贈るよりもどんなに面白いでせ

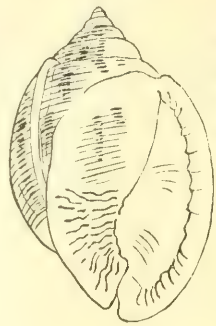

アハブネ
22


クマサカガヒ
23

から略しまして、愈本文に這入りたいと思ひます。

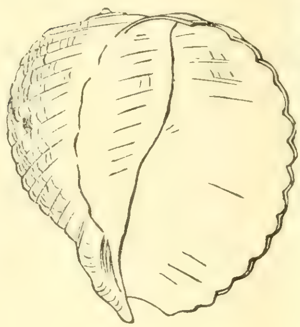
二、貝類採集の趣味

カヅラガヒ ½



18

ヤツシロガヒ ⅓

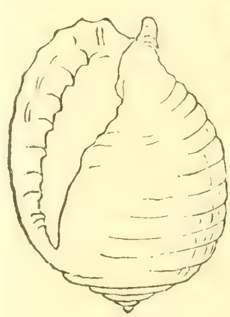


19

海水浴のくだりでは、理屈ぽい事を申して、甚だ讀者の興を殺いだ事と恐れ入ります、此の海水浴に伴うて夏の生活を最も愉快にするものは、貝類の採集ではありますまいか。試に今貝類採集の趣味を讀者の前に描かうと思つて、筆を執つたのでありますが、加藤延年氏の著はされた「貝ひろひ」中に。自分が書きたいと思つた事を見事に記いてありますので、それを拝借して讀者の興趣を喚び起したいと思ひます。

『それで皆さんが貝類を採集なさるに、最もよい所は

トキハガヒ ½



20

ツメタガヒ ⅔

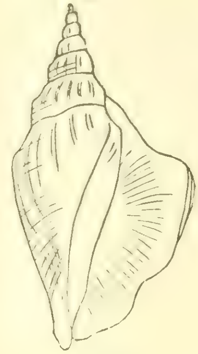


21

海濱です。白砂青松の景色のよい遠淺の海濱ですそこに打上げられてをる寄せ貝を拾ふのが、先づ安全な採集の初歩です。珍らしい貝は、却て岩岸や、海の深い底に多い樣ですが、採集が困難で危險であります。後には段段採集が面白くなつて、生た貝をもでぬいて、其殼を集めなさる樣にもなりませう。實は死殼は價値がありませぬ」皆さんが海水浴などにお出かけなさつて、一週間もたちます

まい。次には、

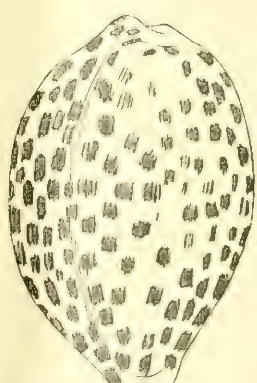
第三浴を行ふ日數の長短及び一浴の時間の事であります。隨分定め難い問題でありまして、病症等によつて斟酌する必要があります。が、まあ大概廿五日乃至三十日が通常でありませう。さうして初めは一日一浴で、初日には久しく海中に在つては宜しくないのであります。一浴の時間は五分以上長きも十分を越えてはなりません。

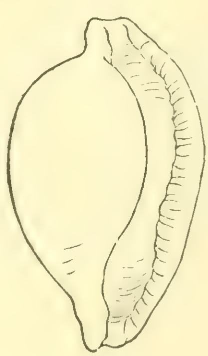

14　シドロ　3/4


15　クモガヒ　2/5

第四は浴を行ふに適せる一日中の時は、何時が良いかといふ事であります。强壯の人には午前八時から、十時十一時迄が一番良いのであります。が決して食後にはいけないのであります。少くとも半時乃至一時を過すことが大切であります。虛弱の人は午後四時か六時迄が適當です。浴後は疎い浴巾で。弱く全身を摩擦しなければなりません。

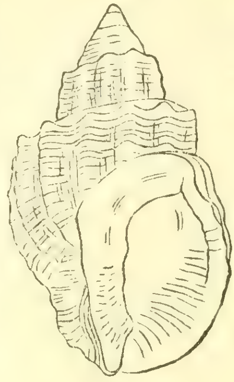
飮食攝生、運動遊戲等いろ〳〵書きたい事がありますが、遺憾ながら悉くつくす譯に參りません。又海水浴場の事も申したいのでありますが。時節柄新聞にもでゝをる事でありま


16　ホシダカラ　1/2


17　ウミウサギ　1/2

(三)波動。波動の搏擊に應じます筋の運動及び筋の努力は、海水浴に於ける體運動と認めることが出來まして又

コロモガヒ



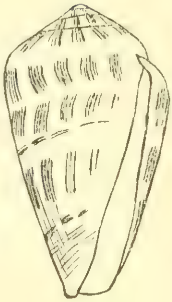
9

リウキウタケ　2/5



10

マダライモ



11

其の波動は更に神經を興奮する力があります。此度は、海水浴の療法といふ事につきましてざつと申し上げます。

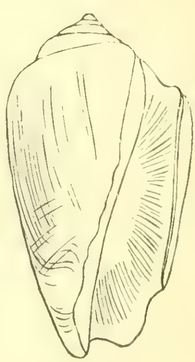
海水浴をするには第一浴場の撰擇が肝要であります。(イ)浴場の位地は、陸地の海濱よりも、大洋中の孤島の方が宜しいのであります。孤島に在つては氣候も整一で頓に冷い風を生ずるといふやうな慨がありません。また(ロ)海水波動の强い所が宜いのであります。卽ち海水の干滿が甚だしくありまして、波動の强い所は効能が多いのであります。次には(ハ)北風を防ぎ東南の海濱に位せる所が宜いのであ

ウラスヂマイノソデ　4/5



12

マガキガヒ　2/3



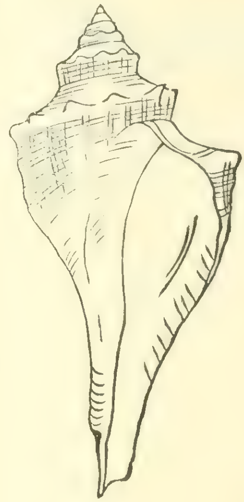
13

ります。かういふ所は氣候の温度均一で温和であります。で北方に山を負ひ寒氣を防ぎ、海濱は白沙を布いて平斜面をなし、岩石の危險のない所が一番であります。

第二は浴を行ふに適せる時期の問題であります。わが邦で海水浴を行ひますには、七、八、九月及び十月の初旬がよいのであります。浴場の結構が整頓してをる所であれば、七月以前に始めても支障はあります

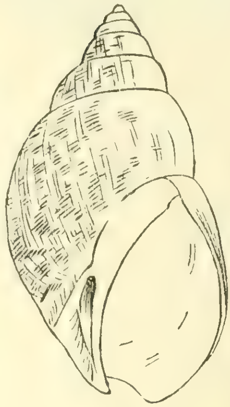
の清潔であります。海氣は清潔で炭酸を含むことが少いのであります。で随て防腐清潔の力を有つてをります。

テングニシ　2/5



3

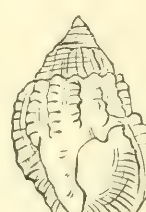
バイ　2/3



4

(ハ)は空氣の濕潤であります。海氣は水蒸氣を含んでをる事が、陸氣に半倍してをるといふ事であります。此の中には食鹽分子の痕跡、鹽酸瓦斯の痕跡を混じてをります。(ニ)は温度の均一であります。海氣は其の温度が常に均一で晝夜變る事がありません。是れは畢竟(つまり)海水の均一であるのによるのでありませう。

アラレガヒ



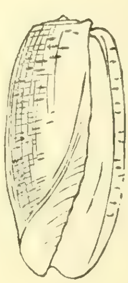
5

テウセンフデ　2/5



6

マクラガヒ



7

ノシガヒ



8

(二)海水。海氣中にをるばかりでも、餘程効能がありますが海水に浴すれば更に効能があります。海水浴をやります初には、大抵寒戰、悸動及び呼吸短促を感じますが、それは一瞬間で後は忽ち快適な温氣を覺え、精神(こゝろ)も身ものびのびして四肢は活潑となり、食氣は進んでまゐります。



雜録

海水浴と貝

一、海水浴

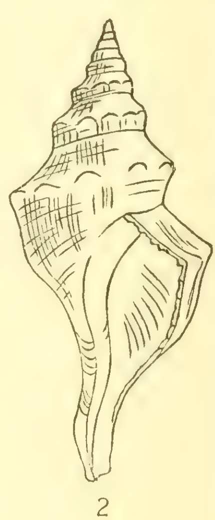
今は海水浴に一番良好時でありまして、隨つて海邊唯一の娛樂である貝ひろひも、同時に出來るのであります。で右の樣な題で略々申上げて見たいと思ひます。まづ海水浴の事から。

海水浴をするには、まづ海水は如何なるものであるかといふことを知つておく必要がありませう。海水は醫療上から申しますと、一種の鑛泉、卽ち鹽類泉と看做すべきものでありまして、百分中には二分半或は三分の鹽類を含んでをります。其の重な成分は格魯兒那篤儡謨でありますが、其の他にも諸種な物を含んでをります。

海水浴は其の海水が、直に皮膚に及ぼす效用の他に、更に生理的醫療に關する次の三件に注意しなければなりません。それは海氣、海水、波動の三つであります。



ナガニシ　½　1



イトマキボラ　½　2

(一)海氣の性質に就いて注意すべき点が四つあります。(イ)は空氣の濃密であります。窒素、酸素の混合してをる点から申せば、陸氣と海氣と別段に差はありません。が海氣は山間大陸の空氣に比べると、濃密で酸素に富んでをりますから、肺の爲に利する所が多いのであります。(ロ)は空氣

(陸產、第七版、第廿七及第廿八圖)

產地、小笠原父島、

高、一分四厘、長徑二分六厘、

形狀、殼はレンズ形にして、ナカタエンザ及ハタヰエンザに似て、質薄く、外唇內部の滑層薄く、螺層の脹み少く、此屬中の最大なる種なり、上面には細密なる斜脈を有し、下面の脈は一層細密にして、螺層は五半內外を數へ、縫合は表面的にして上層の龍骨にて充たされ、体層周緣の龍骨は極めて鋭く、狹き突出部あり、底面脹れ、中央は深く陷りて小さき臍孔をなす、殼口は斜めにして、梯形狀新月形をなし、口緣薄し」

彩色、上面は汚褐色にして、下面は淡色を呈し幾分か光澤を有せり」

カドエンザ 新稱、H. acutissima, Pils.

(陸產、第七版、第二十九及第三十圖)

產地、小笠原母島、

高、五厘、長徑一分四厘、

形狀、殼はナカタエンザに酷似せるも、螺塔低く、螺層は四を數へ、龍骨突出部鋭く、彫刻粗造なり」

彩色、上面は汚褐色にして、下面は稍や淡色なり」

ヒメカドエンザ 新稱、H. acuta, Pils.

(陸產、第七版、第三十一圖)

產地、小笠原妹島、姉島及姪島、

高、五厘、長徑一分二厘、

形狀、殼はカドエンザに酷似せるも、比較的に高く、少しく小形にして、彫刻細かく、下面に布目狀の細脈を有し、体層前端の殼口を爲せる所下方に轉斜せるを異なれりとなす、殼質堅固にして、兩凸形をなし、周緣に鋭き龍骨を有し、螺層は少しく四層を超過し、殼口小さく、龍骨に當る所、角鋭く、底唇の內部に強き白色滑層の肋あり」

彩色、褐色にして、臍孔の周圍は少しく淡色なり」

高、五厘、長徑一分、

形狀、殼は兩凸形をなし、螺層は僅かに四を數へ、底部と共に細縱脈を有し、縫合線に沿へる所と、周縁とには龍骨を具へ、殼口は斜新月形にして上縁前方に出で、外唇の內部には滑層を有し、臍は亞穿孔なり」

彩色、上面は汚褐色にして、下面は少しく淡色なり」

ナカタエンザ（中田）新稱、H. nesiotica, Pils.

（陸產、第七版、第廿四及第廿五圖）

產地、小笠原母島、

高、七厘五毛、長徑一分五厘、

形狀、チ、ジマエンザに酷似し、只著しく大形なるのみ、兩凸形にして螺層は四層半乃至四層四分の三を數へ、底面は不透明にして上面と同じく細脈を有し、周縁に鋭き龍骨を有す」

彩色、上面は淡汚褐色にして、下面は色淡く、少しく蒼白色を帶ぶ」

右は余が同島へ派遣せる採集者中田の紀念として和名を附す

變種、**ハタ井エンザ**（幡井）新稱、

H. nesiotica, var. liobasis, Pils. & Hir.

（陸產、第七版、第廿六圖）

產地、小笠原父島、

高、九厘、長徑一分七厘、

形狀、本種よりも僅かに大形にして、殼口稍や薄く、螺塔及底部共に稍や脹る」

彩色、本種に同じ」

右は余が全島へ派遣せし中田の、歸還後全島の採集を熱心に繼續し、明治三十六年同島の南方二百海里なる硫黃諸島の、貝類採集をなさんとて出發せしが、不幸にして其乘船難破し、遂に此の事業のために、仆れたる幡井氏を哀悼紀念するために、右和名を附せり

オホエンザ 新稱、H. major, Pils.

は帶黄白色をなし肋間は暗栗色を呈す、殼口は白色或は帶青色にして、外唇の齒は柑色より暗栗色に至り、内唇上に同色の斑紋あり」

オホゾウガヒ、(大象貝) 岩川

T. pyrum, Linn.

(海産、第十二版、第八十七圖)

產地、紀伊田邊及琉球、(印度洋、マダガスカー島、チカオ島、フイリッピン、等にも産す」

長、三寸内外、

形狀、フヂツガヒに酷似して稍短く、螺塔低く、背上の結節、フヂツガヒよりも小さく、水管溝は稍狹くして長し、表皮は縱肋上に剛毛の列をなし体層の周緣殊に長し」

彩色、柑色にして、殼口内は大抵色淡く、兩唇の齒は殆んど白色なり」

○日本陸産貝類圖說 (二)

ソコカドエンザ 新稱、H. goniobasis, Pils.

(陸産、第七版、第十九、二十、及廿一圖)

產地、小笠原父島

高、八厘、長徑、一分二厘五毛、

形狀、低き圓錐形にして、螺塔は縫合毎に段階をなし、細縱脈あり、体層は周緣に鈍き龍骨を有し、底部にも鈍き龍骨ありて、それより亞穿孔の臍に向ひ陥りて淺き漏斗狀をなし、螺層は少しづゝ廣まり、層數は五層半を數へ、殼口は直立して狹く、三出形をなし、外唇は厚くして、內方に低き齒あり、

彩色、汚褐色にして、底面の龍骨以内は稍や淡色なり」

チヽジマエンザ 新稱、H. chichijimana, Pils.

(陸産、第七版、第廿二、及第廿三圖)

產地、小笠原父島及兄島、

襞白く襞間栗色なるも、外唇にありては横襞（即ち表面の肋間に對する螺肋の端）は暗栗色を呈す」

ヒメミツカドボラ 新稱 T. labiosus, Wool.

（海産、第十二版、第八十五圖）

産地、相摸、淡路、平戸等、（フィリッピン、モーリチアス、濠洲、西印度等にも産す）

長、一寸内外、

形状、ミツカドボラに酷似して小さく、背上の大結節はミツカドボラに於けるが如く著しからず、肩角高く、大なる縦肋と交つて生ずる結節鋭く、大なる螺肋は各々二溝を有して三脈に分たれ、殆んど同樣なる縦脈と交りて布目狀をなし、水管溝は廣く短かきを常とすれども亦頗る細長なるものあり」

彩色、帶黄白色乃至暗栗にして、往々淡色帶を有し、殼口及両唇の襞は共に白色なり」

オホゾウガヒ亞属、Cymatium (Bolten) Adams.

此亞属は三角形をなし、大なる縦脹脈と結節とを有するを以て直ちに識別することを得べし、層は其頂に頭点を有す」

フヂツガヒ、（藤津貝）群品 T. lotorium, Linn.

（海産、第十二版、第八十六圖）

産地、琉球、（紅海、印度洋、フィリッピン、ポリチシア中部等にも産す）

長、三寸内外、

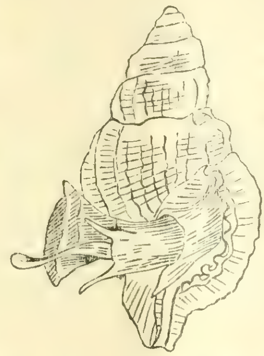
形状、殼質重厚にして暗色の薄き表皮を被り、シノマキに似て角立ち、シノマキよりも螺塔低く、水管溝廣くして長く、縦脹脈大きくして、肩角高く、結節大く、体層の背部にあるもの殊に大なり、外唇の內縁は內曲して、縁下に一條の縦溝をなし、內唇の後部にある一對の横襞は頗大なり」

彩色、柑褐色にして、大なる螺肋は縦脹脈上にありて

脉を横ぎる所に當りて白色を呈し、両唇は柑色にして、其襞は白く、内部も白色なり、幼貝には淡柑色の地に白斑を有するものあり」

ミツカドボラ T. chlorostomus, Lam.

(海產、第十二版、第八十三圖)



ミツカドボラ(トライオンより)

產地、小笠原、薩摩、琉球等、(紅海、ボールボン諸島、ニユーカレドニア、フイリツピン、太平洋中部、布哇、西印度等にも產す)

長、二寸餘、

形狀、シノマキに酷似するも概して小形にして角立ち、不規則なる縦肋は肩部に大なる結節を起し背部の一節は殊に大にして高く殼頂より見下す時は不規則なる三角形を呈す、螺肋は刻線を有し、殼口は比較的に小さく、両唇の機襞等總てシノマキと異ることなく、薄き表皮には剛毛を有せり」

彩色、白色にして、多少赤色或は暗栗色の点を以て格子紋をなし、刻線は大抵色を有し、殼口内は深柑色なり」

トウマキ(セコ(介志)、) T. clandestinus, Lam.

(海產、第十二版、第八十四圖)

產地、九州、琉球、等(濠洲等にも產す)

長、一寸五分内外、

形狀、殼は前諸種よりも小にして、螺層脹れ、比較的平滑にして、上面平坦なる螺肋を廻らし、肋間は螺肋よりも少しく廣くして平坦なり、生長線は不規則にして極めて微(かす)かなり、縦脹脉は外唇縁に只一條あるのみ、殼口は半月形にして、両唇に横襞を有し、内唇の後端附近に一强襞あり、水管溝は稍長し」

彩色、淡黄褐色にして、螺肋は栗色をなし、恰も藤にて巻きたるが如し、口内は白色にして、内唇にありては

の横襞ありて、臍は其先端に頭點を有せり」

彩色、淡褐色にして、縦脹脈及兩唇は暗栗色を彩り、兩唇の齒は白く、唇の內方は肉赤色を呈し、口內蒼白色なり、

シノマキ、T. pilearis, Linn.

(海產、第十二版、第八十一圖、同a圖)

產地、土佐、大隅屋久島、大島、琉球、小笠原等、(紅海、セイケレス諸島(アフリカ洲の東岸にあり)ナタール、支那、濠洲、フイリッピン、布哇、フロリダ、西印度、巴西等にも產す)

長、二三寸、

形狀、殼は長紡錘形をなしカコボラよりも小にして、狹長なり、縦脹脈は厚くして隆く、螺肋は大にして、結節は縦に連りて曖昧なる縦肋をなせり、表皮はカコボラよりも薄くして其毛は細やかなり」

彩色、黃褐色にして、所々に暗色(時として灰白色)の螺帶を繞らし、殼口及兩唇は柑赤色乃至血紅色にして兩唇の横襞は白色なり」

ジユセイラ(壽星螺) T. rubecula, Linn.

(海產、第十二版、第八十二圖)

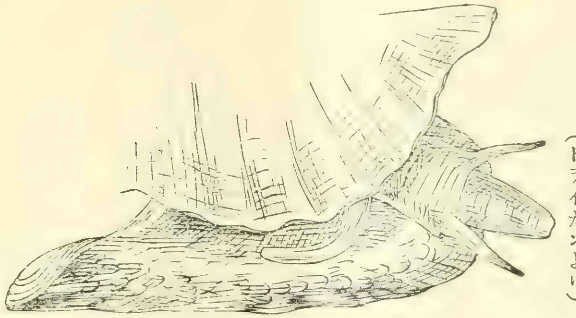
產地、鹿兒島より琉球に至る(紅海、ニコバル諸島、フイリッピン、中央太平洋諸島、布哇、西印度等にも產す)

長、二寸內外

形狀、シノマキに酷似するも小形にして、縦脹脈比較的に大く且つ厚くして圓く、判然たる螺肋は圓くして、念珠狀の顆粒より成り、恰も綱を纏ひたるが如き外觀を呈す、殼口は割合に小さく、兩唇に横襞を有す」

彩色、螺肋は柑色にして、肋間は概して暗栗色を呈し、体層の中央に淡柑色或は白色の一螺帶ありて、他層にありては僅に其上端を各層の下部に認むることを得るのみ此帶に當れる螺肋及縫合肋に次げる一螺肋は、大抵縦脹

彩色、白地に赤褐色の美麗なる斑紋を飾るも、ホラガヒの如く判然たらず、結節は概して白く口內は白色にして微蒼色を彩る、外唇は表面の肋間に當る所に低くして廣き螺肋を見はし其端栗色を彩り、內唇は栗色を染め其後部の齒は白し」



ボウシウボラ（トライオンより）

マダーム、バウアル氏は此動物の觸角を切り去つて其再生することを實驗したり、シヽリー人及アルゼリア人は此貝の肉を賞味し、ナイスの漁夫農民等は此貝の殼頂に穿孔し之を吹て驢聲を發し、老寡婦再婚等不贊成の儀式を妨ぐる爲めの亂樂等には欠ぐ可らざる樂器なりと云ふ」

カコボラ亞屬 Simpulum, Klein.

カコボラ（加古法螺）（衣被（ヤマカツキ）六介、簑法螺 同）

T. olearium, Linn.（海產、第十二版、第八十圖）

產地、東海道、瀨戶內海、四國、九州、（地中海、歐洲、アフリカ洲の太西洋岸、カナリー諸島、ベエルデ諸島、セントヘレナ嶋、西印度より巴西まで、ポリネシア、濠洲、新西蘭等にも產す）

長、四寸內外、

形狀、殼は紡緯形をなし、ボウシウボラよりも小にして、水管溝稍長く、螺塔は長短種々あり、螺肋は强大にして往々一部刻線に分たれて對をなし、或は顆粒の螺列となれることあり、新鮮なる標品にありては、褐色の表皮を被り、所々に隆起反曲せる表皮の縱葉を作り其端分れて長くして太き毛狀をなし、外唇厚く、其內緣に對をなせる肋狀襞を具へ、內唇にはホラガヒに似たる不規則

ホラガヒ（トライオンより）



螺肋は廣くして平たく、縫合線下の一肋は圓き縦肋に横ぎられ、繩狀の外觀を呈し、螺肋間には更に二三の小肋ありて、肋上肋間所々に幾多の細溝を繞らす、殼口は卵形にして両端尖り、水管溝は短くして少しく反曲し後溝淺く、內唇は反曲して軸部を被ひ、其上を横行せる無數の皺狀襞を有し外唇にありては、表面の肋間裏面に隆起肋となりて見はれ、其先端は唇緣に齒狀を呈せり

彩色、帶白或は帶黃色にして、栗色或は「チョコレート」色の半月狀板目玟を螺肋上に飾り縦に斷續にして不規則なる縦斑をなし、殼頂部は淡紅色を呈し、殼口內は柑赤色なり、內唇は濃き「チョコレート」色にして横襞は白し、外唇の隆起肋は赤褐色より漸々栗色に變じ、大抵は両岐せり

ボウシウボラ（房州法螺） T. nodiferus, Lam.

（海產第十一版、第七十九圖）

產地、東海道、淡路、大隅大島等、（地中海、歐洲太西洋岸、英吉利海峽、「カナリー」諸島、「ナタール」、「モーリチアス」、濠洲、新西蘭等にも產す、）

長、八九寸、

形狀、ホラガヒに比すれば殼質厚く小形にして、螺塔稍低く、殼口小さく、螺層に一二列の大なる圓き結節を繞らし螺肋は不規則にして曖昧なり、內唇は平滑にして後部に一齒を有し又往々前部に數條の横襞を有す

説に從つて之を合一してシムプラムとせり、又プリーンはホラガヒ屬とナルトボラ屬との連鎖と稱す可く、ナルトボラ屬中のナルトボラ群の諸種を一見せば直ちに其ホラガヒ屬に酷似せるを想起すべし」

コベルト氏の公にせしホラガヒ屬の目錄は頗る卓越したるものにして、トライオン氏は該目錄を增補して凡そ百五十種を記載せり、其他リーブ氏及キーテル氏等の公にせしものもあり」

亞屬分類綱要

カコボラ屬、Simpulum, Klein.＝Aquilus, Montf. 殼は紡錘形にして、螺層に結節肋を繞らし、外唇厚く、內部に襞齒あり、臍は頂核を有す」

オホゾウガヒ亞屬、Cymatium (Bolten) Adams. 螺層は三角形をなし、殼孔は螺塔よりも長く、外唇の內部に齒を有し、臍は頂核を具ふ」

シホボラ亞屬、Gutturnium, Klein. 殼は梨形をなし、亞塔狀をなし、水管溝は狹長なり、臍は內緣の中央附近に亞緣位の頭點を有す」

セコバイ亞屬、Epidromus, Klein.＝Colubraria, Schum. 殼は長くして大抵曲りたる螺塔を有し、殼口小さく、水管溝極めて短く、臍は三角形をなし、亞緣位の核を有せり

アヤボラ亞屬、Priene, H. & A. Ad. 殼は脹れて薄く、布目或は襞を有し、水管溝短く、臍は頂位の頭點を有す

摸式ホラガヒ類 Typical.

ホラガヒ、T. tritonis, Linn.

(海產、第十一版、第七十八圖)

產地、薩摩、琉球等、(フイリツピン、新西蘭、ポリネシア諸島、印度洋等にも產す)

長、一尺餘、

形狀、殼は螺塔高くして尖り、螺層膨れ、体層殊に甚しく、縱脹脈は大にして、舊口緣の反曲部と齒とを殘し

屬と異にしてレイシガヒ屬に似たり」

キユビエー氏は本屬にTritoniumの名を附し、ピルスブリー氏の如きは此名稱を採用せるもトライオン氏は學名の安定を希ひてTritonの名を採用せられたり」

リーヴ氏は左の如くに曰へり

「ホラガヒの殼はホネガヒ屬或はナルトボラ屬よりも堅固にして、生長簡單なり、故にホネガヒ類の如く刺或は翼等を有することなく、其螺層の卷きかたの拙なるは其生長遲緩(動物の石灰質を分泌する力は頗る大なるも)なるを證するに足れり、此類の外皮は往々非常に厚く、毛或は剛毛をなし、時としては剛毛の小總を有す、更に他の一奇とも云ふ可きは殼頂の構造にして往々角質より成り、其上に薄く殼質を被ひ、其殼質の剝脫して下層なる角質の形を曝露せること亦少からず、此屬の内唇は概して皺狀の光澤ある琺瑯質を被り、外唇の厚くなる方法甚だ奇にして、殼若し成熟の域に達する時は、外唇は下方に卷きて深くして廣き溝をなし、然る後に此溝充塞して厚き唇を成すなり、此類の縱脹脉は總て此の如くにして成り、各縱脹脉は皆一時殼口緣となりて生長休息の期間外唇保護の任務を盡せしものなるべく、此縱脹脉形成と生長再始の間の時間を發見するは甚だ有益なる問題なりと云ふ可し、」

又アーサル、アダムス氏は我宮古群島の土人が法螺貝を茶瓶に使用せるを述べ、唇を蓋として、溝を出口とし木鉤にて火上に懸くるを說き、アダムス氏親ら此粗野なる茶器を試用せしに、其用を達するの妙實に驚く可しと曰へり、

此屬は種類頗る多きが故に更に之を幾多の屬或は亞屬に分類せんと試みし學者尠からず、就中エッチ、アダムス氏及エー、アダムス氏の分類最良なるも只シムプラム(Simpulum)とカベスタナ(Cabestana)との相違は殆んど認む可らざるによりトライオン氏の書にはコベルト氏の

ナルトボラ屬、Ranella, Lamarck. 殼は壓扁せられたる卵形或は楕圓形をなし、兩側に連續せる縱脹脉を有し、殼口は卵形なり、内唇は弓狀に曲り且つ隆起を有し、或は細齒狀をなし、水管溝は短くして反曲し、鋸齒狀をなせり」化石を除きて現今世に知られたるもの五十種以上あり」一

齒式上より云へば、ホラ屬とナルトボラ屬とは互に相密似するも中齒を異にし、イボボラ屬は殆んどホラ屬と異なる所なく、此科の齒式は著しくタウカムリ科及ウヅラガヒ科に似たり」

ホラガヒ屬、Triton, Montfort.

殼は楕圓形にして、螺塔概して高く、各螺層は相隔りて互に連續せざる少數の縱脹脉を有し、殼軸は平滑或は顆粒狀なり、水管は長きことあり或は短きことあり、外唇の内部は齒狀或は細齒狀をなせり」

厴は卵形にして重螺狀をなし、其生長は亞頂核或は亞緣核より始まれり」

齒舌を以て分類すれば所謂紐舌類に屬し、ウヅラガヒ科に酷似するも、殼と動物とはホネガヒ科に近似せり、故に或は此等兩科の連鎖と見做すことを得べきも、之をホネガヒ科より遠ざくるは安全ならず、且本屬の厴がホネガヒの厴に類し、ウヅラガヒの厴と全く趣を異にせるのみならず本屬中の或種の殼はホネガヒ屬中の或種の殼と殆んど相異の點を認めざる程相類似せり」

本屬の分布は熱帶にして、一種も寒海に住するものなし、種類多く、美麗にして、大さと色との變化に富み、大は一尺五六寸のホラガヒ（第一號法螺貝の話參照、腹足類の最大なるものならん）より小は三分ばかりのゴマフヌカボラ（八丈島產 T. bracteatus var. longus, Pils.の新種）に至るまで種々の大きさあり」

本屬中には世界的の分布を有せる種少からず、これ其幼虫が太洋に住し自由に游泳するによる、此屬の幼虫は孵化後變体をなし殼も動物も形を一變することとホネガヒ

至れり宜參考に供すべし
(括論)蓼螺の用義に左の變遷あり
第一、混用期。蓼螺は大小辛螺に通じて混用し之をアキ並にニシと稱し(本鈔及楊氏漢語抄等)或は大辛螺の義に用ゐたり(出雲風土記)
第二、正用期。蓼螺は本草の說に從ひ專小辛螺の名とし之をニガニシなど稱せり(介品の說の如し)

本邦海產貝類圖說(七)

ホラガヒ科 梭尾螺 Tritonidae.

殼は縱脹脈を有し、其縱脈は數少く、不規則に存在することあり(ホラガヒ屬)、或は兩側に位し、諸層を通じて連續せる一列をなすことあり(ナルトボラ屬)、縱脹脈の數は各層にありて二條を超過することなし(骨貝科にありては三條を最小なりとす)、層は重環狀にして亞頂核或は中心核を有し、外套は封閉し、水管直く足小なり、齒舌はウヅラガヒ科の如く、七列にして、齒式は「三•一•三」なり(骨貝科は「一•一•一」なり)、
此科は齒式の相同じき点よりすればトウカムリ科及ウツラガヒ科と接續す可き筈なれども貝殼及動物は骨貝科に類似の点多ければトライオン氏は之を骨貝科の次に編入したり」

ホラガヒ科中の諸屬分類綱領

ホラガヒ屬、Triton. Montfort. 殼は楕圓形にして、螺塔高く各螺層は互に相隔りて、連續せざる數ケの縱脹脈を具へ、內唇は凸凹を有し或は平滑なり、水管溝は反曲し長短一ならず、外唇の內部は齒狀をなせり、化石を除きて現今世に知られたるもの百種以上あり」

イボボラ屬、Distorsio, Bolten. 殼は亞塔狀をなし螺層排れ、殼口不規則にして、狹窄し、兩唇狀をなし、水管溝は反曲し、內唇は擴張して薄板狀をなし、皺狀襞あり、外唇は波狀をなし、內部に襞齒あり」

圖書介名考（承前）

味辣ヲ食ハレズ故苦螺ト云フ。小云本邦到る所に多し

とあり大和本草又通志を引き蓼螺又辛螺と云ふありこは固より本鈔の小辛螺に當り前說と反對なり又

三本草啓蒙に蓼螺ニシ、ナガニシ、ニガニシ、カラニシ、マキニシ、ヨナキ、カウカヒ、ウミトリ、ウシガヒ一名辣螺海中ニ生ス形王螺ヨリ大ニシテツノ流更ニ長シ外ニ短黒褐毛アリ肉ハ紅螺ニ似テ味美ナリ腸ハ至テ辛辣層ハ王螺層ノ如シ藥舗ニ采テ甲香トスツノ爛殼毛已ニ脱落シ淺黄紅色トナル此物チヨナキ介ト云ハ俗稱小兒夜啼不レ止採ニ一箇一置ニ兒枕邊一誓曰汝不レ治ニ兒夜啼一則破レ殼抜レ肉藥ニ于野一若治レ之則放ニ于江海一於レ是夜啼必止ト野必大云ヘリ　一種形小ク流短ク色白クシテ粗黒疣相連ナル者チイワニシト云一名イワカタ、ホウ〳〵ニシ、ホウジニシ、カラニシ此外品類多シ

とありこは大小辛螺に相當するも赤口螺を含まず是別にアキの條を載すればなり。

以上三說の中介品の說を以て正とすべしそは通志に蓼螺大サ如ニ拇指一とあれば蓼螺はニシ中の小形種の名なるべければなり通志は古き書にして漳州府志の外本草拾遺等廣く引証せられたるものなり仍現今の本草綱目を見るに蓼螺は流螺紅螺梭尾螺の如き大螺に伍するとなく之を螺類の末に蝸螺と寄生蟲との間に列して次の如く記したり

蓼螺（拾遺）　藏器曰、蓼螺。味辛辣如レ蓼ノ一時珍曰、按ズルニ韻會云蓼螺紫色有ニ斑文一今寧波出ニ泥螺一狀如ニ蠶豆一

とあり知るべし是に依るも仍蓼螺は小形のものなるとを然るに啓蒙は何に基きて之を今云ナガニシの如き大形の者とイハニシの如き小形の者との名に宛てしか惟ふに本鈔に之を大小辛螺の両方に跨かり記したるを受けてかく定めしものかされども啓蒙は考古のとにあらで專當時の醫學に資するにあれぱかくては其目的を誤るものと云はざるべからず但此記事は大小二辛螺の解としてはさすがに見るべきものにして二者の區別初めて茲に判然たるに

は恐くは落ちたるなるべし今本にはかゝる誤脱多し猶良本に就きて正すべし）

（第三疑）辛螺と蓼螺とは義に於て異なることなし恐くは同物異稱なるべし然るに纔に子一字の有無に依り大小異物の別名となせるは如何にや是亦疑の一に算すべし

小云此兩項に跨る貝類は國書に散見すると極めて繁衍にして其重要なると石決明(アハビ)を凌駕し今時防間にまて囃さる拳螺の如きは及ばさると遠しと云ふべし然るに其用字の法區々にして古今一貫の理なく紛々として互に錯綜すると亂麻の如く若し之れが是非を定めんとすれは忽然として迷路に彷徨し幾回か稿を改めて猶正鵠を得ず轉神盡き氣挫けて屢筆を投して長大息するのみ然とも此まゝにして已むべきとならねば禿筆を呵し旬餘の勞を積み漸く此稿を得たり然とも仍着の及はざるもの又は解きひがめたるも定めて多かるべし乞ふ學者煩を厭はず一讀の榮を垂れ其不可なるが如きは爲めに斧鉞の勞を愛まさらんとを是一に余の幸のみならんや此稿の成るに際し泝て茲に一言を插み以て豫め學者に告くと云。唯り異しむ從來の考古學者深く思はず弘く實物に徴するとなく匆々說をなせるを以て多くは事實に反するもの多きを若し是等を渉獵せば徒らに煩を增すのみ故に茲に一々せず

○今此兩項を蓼螺、大小辛螺及赤口螺の三目に分ちて順次之を考究せんとす

○第一目蓼螺及蓼螺子。此名は古書及今の本草書に見えたり其例左の如し

（一）出雲風土記に意宇(オウ)郡鹽楯島有二蓼螺子(ニシ)一、○島根郡、凡北海所ㇾ捕雜物ハ云々蓼螺子(ニシ)（小云此訓点は後世の業なり或はアキを訓みしがごとし）とありこは本鈔の大辛螺又赤口螺と定むべき理ありそは後に云ふべし夫より遙に降りて

（二）怡顏齋介品に漳州府志ニ曰通志ニ蓼螺大サ如ニ拇指一有ㇾ刺味辛如ㇾ蓼○淸按スルニ伊豫佐渡ニ多シ形拳螺(サザイ)ニ似テ

れを磨きて螺佃細工の原料にも供せらる。

國書介名考（承前）

永沼小一郎

（餘項）石炎螺　辨色立成ニ云、石炎螺（注萬與和）楊氏説同シ

本名は日本紀に人名眉輪ノ王とあるをマヨワと訓ませたる一あるのみ又是が解を試みたるは和訓栞に「眉輪に似たるをもて名とせるなるべし」とあるのみ未た其何たるを詳にせずされば此名目は實に至難中の至難なるもの也蓋マヨワは目上勾にて仍眉と同義なるべし扨眉の形を柳葉或は新月形となすときは介類中稍之に似たるものは半の角貝あれどもマヨワはかゝる罕有品をさせるものとも考へ難しされはマヨワは黥眉のごとし且石炎螺の意義を參照し弘く之を實在の甲介類に繹ぬるに蓋龜脚と同屬なる富士壺と稱するもの稍之に近きが如し此者は圓錐狀の數頂より赤色の鬚の如きのものを出し嫌に卷伸する狀宛然陽炎の浮動するに似たり若しマヨワは是なりとする時はマヨワは復眞の貝類にあらざる也仍識者の考を俟つ

第六項　大辛螺七卷食經ニ云大辛螺（和名阿木）楊氏漢語抄ニ云蓼螺一ニ云赤口螺（和名上ニ同シ）辨色立成ノ説ニ亦同シ

第七項　小辛螺、七卷食經ニ云小辛螺（和名仁之）楊氏漢語抄ニ云蓼螺子

先此二項を結合し只文字の上より考ふるときは忽左の疑問を生すべし

（第一疑）七卷食經に云大辛螺と楊子漢語抄に云ふ蓼螺一に云赤口螺は同物異名か或は異物にして和名同しきか

（第二疑）七卷食經に云小辛螺と楊子漢語抄に云蓼螺子も亦同物異名か或は異物にして和名同じきか然るときは蓼螺子の下に「和名上同」の文字なかるべからず（是

せざれども、呼吸管の長いものには、其の筋肉能く發達するを以て、附着點の大なるを要する、卽ち外膜線の灣深き所以であつて**れきしじみ**の殼はこれによりて其の呼吸管の長さを示すのである。

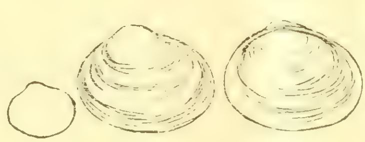
イソシヾミ



我が邦陸中松島灣邊より長崎邊に至るまで專ら西南の沿岸に打ち揚げらるゝ貝類の中に**いそしじみ**と稱するものあり、四國阿波にてはこれを**うすがひ**と稱し居れり、學名をSoletellina olivacea Jay. といふ。殼薄く、形楕圓にて扁たく、前端は圓くして後端は稍々突出し、殼頂は甚だ低く、蝶番には唯一二の主齒を具ふるのみ、表面は黃褐色にして內面は稍々濃厚なる紫色を呈し、前後の柱痕は互に遠く相離れ、灣は甚だ深し。是も亦全く蜆と所屬を異にし、前種と共に純粹の海產である。

又東京府下の小川に產する小貝にして**どぶしじみ**と稱するものあり。全身の殆んど透明なる所より足肉中に隱沒せる聽器の構造を示す爲に動物學の實驗に供せらるゝものなるが、是も蜆屬にはあらず、學名を[illegible]といひ、殼は極めて薄く、肩張り膨らみて齒は甚だ微弱である。表面は淡綠色にして刻線を有せず、大なるものといへども長徑七ミ、メに過ぎず。蜆の幼貝**まめしじみ**等と同所に產することあるが、全く別物である。

ドブシヾミ

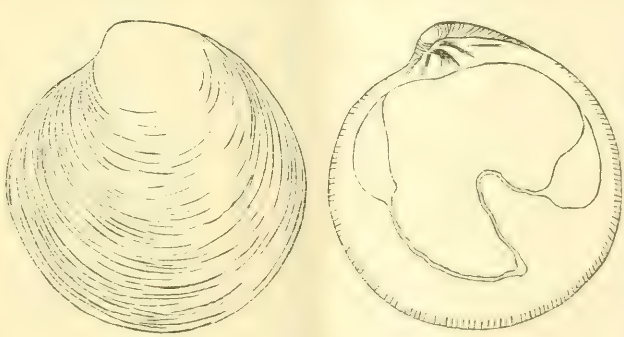


蜆類は七八月の頃最も肉肥えて味も佳い、故に專ら夏期に販賣せられ、調理方は專ら味噌汁である。肉を食用とする外には、殼の內面紫色にして光澤も美しければ、之

は橙黄色を帯び、且内地産の蜆であると、最大なるものも長徑一寸五分に達するもの稀なるに、今此の貝の全成せるものは長徑二寸五分許に達し、實に蜆中の尤物にて本邦産の貝類標本目錄中に加ふるを得たるは、是れが嚆矢であらうと思ふ。

余も初めてこれを見たることなれば、或は新種であるまいかと想像し、段々貝譜類を調べて見ると、獨逸ケムニッチ氏の貝譜中に既に記載せられてあつて學名をC. maxima Prime.とし、東洋の特産なりと言つてある。長澤氏はこれを漁夫より購ひ、淡水河より産するといふことである。臺灣の土人はこれを海豆芽と稱して食用に供するといふ。臺灣府誌物産書に按ずるに、海豆芽は似蜆而大、扁殻綠、吐尾如豆芽故名一曰塗杯とあり。想ふに其の尾を吐く豆芽の如しとは、殻より足の突出するを形容したる義ならん。

蜆と全く所屬を異にして古來蜆の名を負へる二三の貝あり、例へば東京府下の劍身岸に間々あさり、はまぐり等に雜りておきしじみ俗にばらずがひと稱せらるゝものあり。殻の形正圓にして緣邊に細鋸齒を有し、殻頂は明かに前方に向き、蝶番に側齒を缺き、外膜線は短くして、其の後端に深き灣を具ふること圖の如くである。學名をCyclina chinensis Chemn.といふ。



ヲキシジミ

灣とは、後柱痕に接する外膜腺の彎曲せる部分にして是は呼吸管の伸縮を司る筋肉の附着せる痕である。文蛤、蜆等の如く呼吸管の短きものには其の筋肉が短小であつても事足り、從つて其の附着する場所は大なるを要

表皮は黑に黃綠色を帶び、內面の緣は淡紫色で殼頂の下方と後柱痕の邊とに、往々暗紫色の斑紋を具ふ。其の學名をC. nipponensis var. delicata Pils. といふ。

又東京附近の溝小川に產し、形小さくして圓く、殼頂低く、刻紋の數最も少なく、表皮は帶黃綠色にして光澤を有せざるものあり。是は古來俗にかはしゞみと稱したるものにて學名は、C. straminea Reinh. に當たるやうであるが、leana. の幼貝ならんと思はる。



セタシヾミ

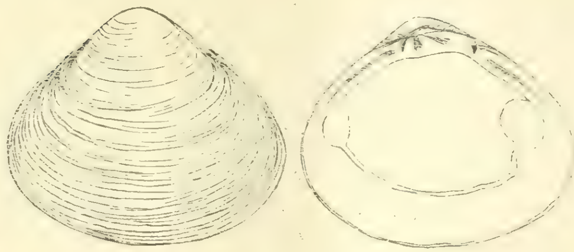
西京邊にて有名なる瀨田蜆は、學名を C. sandai Reinh. といひ、近江琵琶湖の名產であつて專ら瀨田川で採集する所より其の名を得たものと見ゆる。蜆掻は河湖を有する地方に普通行はるゝ業にて、東京灣內隅田川口邊には中々盛んであるが、余の見聞したる所に依れば瀨田川沿岸程蜆掻の盛んな所はあるまいと思ふ。

此の種類は、殼頗る堅固にして殼頂著るしく突出し、殆んど長三角形を成して、其の後端の甚しく延長せるものもあり。殼の緣は、薄くして鋭く稍々物を切るに適せり、刻線は太くして十七八本に止まり、表皮は赤黃色、綠色もしくは橙色にして、間々錆着いて居るが、磨けば光澤甚だ美くし、內面は大部分淡紫色であるが、殼頂部及び緣邊は往々煉瓦色を帶びて居り、幼殼は表面に暗紫色の射線紋を有し、蜆中の美品にして一見他の種類と識別することが出來る。

他の種類に就きての記載は、こゝに省略せんが、臺灣產にして讀者に紹介せんと欲する一品がある。是は去る明治三十五年、知人長澤小兵衞氏が同嶋に渡航せし際、余の請に應じて齎らせたる蜆中の稀品にして、殼の表面は黑褐色を呈し、數多の低き刻線を有し、類圓三角形にして側齒に細微なる鋸目を有する等を以て見れば、蜆屬の一種たるべきことを明かであるが、內面は全く白色で緣邊

に考へて居る。

蜆の屬名をCorbiculaといひ、殼は左右同形であつて略々心臟形を成し、表皮は黒くして光澤を帶び、求心性の刻紋を有して居る。殼頂は、剝脫して白色の石灰質を露はし、內面の眞珠質は多少紫色を帶び、蝶番に三枚の主齒と前後二枚の側齒とを具へ、此の側齒に細微なる鋸目を具へ、外靱帶は小なるも、著明なる等を以て此の屬の特徵となせり。


シジミ

蜆の種類の差別は、要するに殼の形狀、刻紋の深淺粗密等にありて表皮の色澤及び斑紋は貝の老幼及び住所の況遇に關するが如くなるを以て、種類識別の標徵と成すには足らぬやうに見える。概して殼の未だ幼き間若しくは砂礫質の水底を有する清流に棲めるものは、成長の後も猶、多少黄色を帶び、殊に幼貝にありては、間々黒紫色の射線紋を具ふるものがある。これに反して老成せる者及び泥質の水底に住めるものは、早晩黒褐色に變じて斯かる斑紋を有つて居らぬ。

東京の剝身屋に普通販賣せらるゝ蜆には二種あると思ふ、一は殼の幅稍々廣く、殼頂は膨起して剝脫し、刻線の數は三十前後ありて各々竪立し、殼頂部には互に密接して居るが、殼緣に近くに從ひ、伏して扁平と成り、表皮は暗橄欖色にて殼頂の邊は黒く、表面は概して粗糙であり內面は帶紫白色にして、殼緣と外膜線との間に屢々暗紫色の帶紋を具へて居る。其の學名をC. leana Prime といふ。

他の一は、其の殼、類圓三角形にして殼頂は低く、殼を閉づれば兩頭殆んど互に相觸れ、刻紋は二十內外あれども、淺くして不明なるが故に、表面は寧ろ平滑である。

介類雜誌　第七號
明治四十年七月二十日發行

貝談漫錄（二）

岩川友太郎

二　しじみ　蜆

凡そ本邦にて食用とする貝類の中にてしじみほど澤山ありて産地の廣く渉つて居るものはなからうと思ふ、東京の剝身屋でも年中絶ふることのないのは此の貝である。泥質の水底を好み、淡水に棲むことを普通にして小なる溝川にも産し、河水の流れ込む海底及び汐入の河口には殊によく蕃殖する。余は數年來、本邦の淡水産貝類を蒐め、北は北海道より南は鹿兒島の南端池田湖に至るまで、殆んどあるとあらゆる河川湖水に探集を試みしが、他の貝類は所に依りて産せざることあれども、蜆に至りては所としてこれを産せざるはなく、又津々浦々の村童に至るまで蜆を知らざるものなく、其の分布の廣きことを推して知るべきである。

然れども蜆の産地として古來有名なるは、武藏の利根、隅田の河筋、近江の瀬田、攝津の住の江、信州の諏訪湖等にして古歌の中にもこれを詠めるものは少なくない。

（萬葉集に）

すみの江の小濱のしゞみあけも見ず
　忍びてのみや戀わたるらん

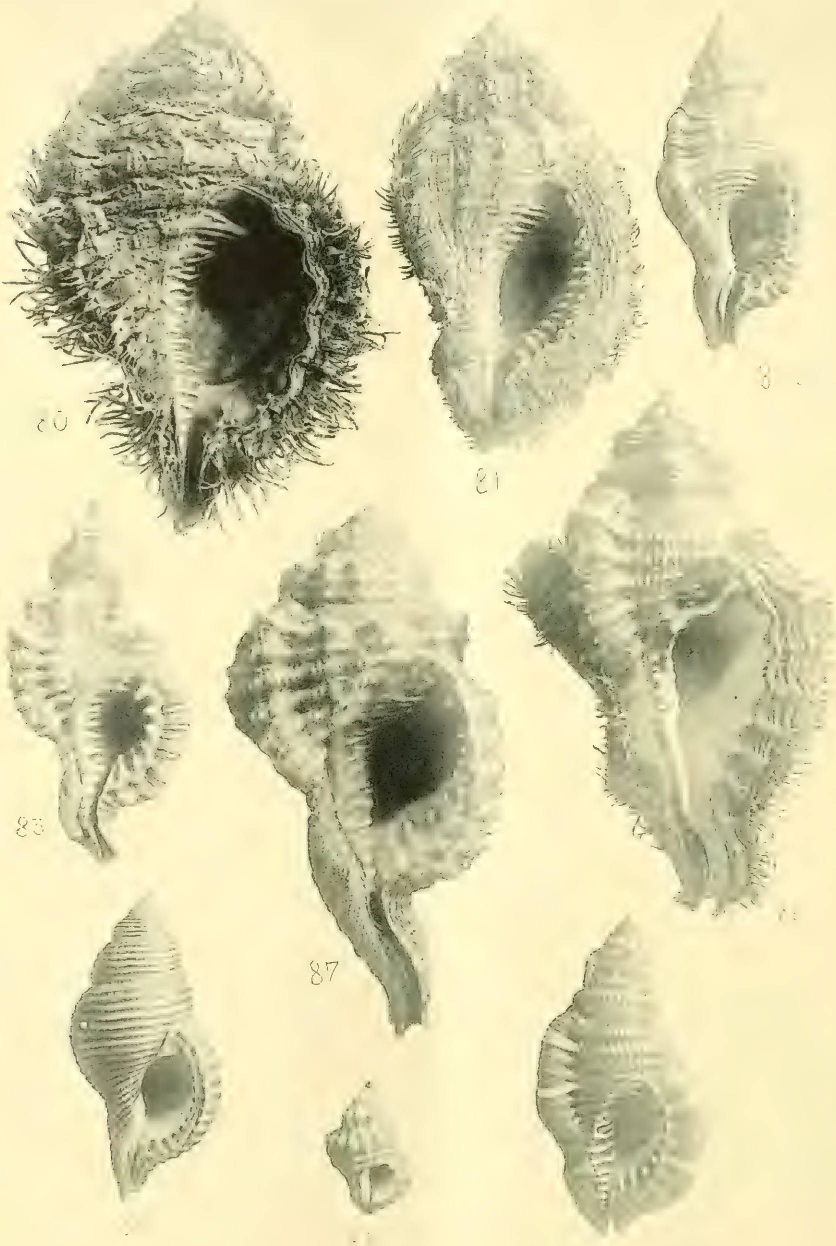
（夫木集に）

しゞみとる堅田の浦の海士人よ
　こまかにいはゞかひぞあるべき

蜆は俗に唯何所の蜆と稱せらるゝのみで各種固有の名は附いて居らぬ。外國の貝學者の調べたるものに依ると、本邦産の蜆は十種以上に區別されてある。余は、本邦内地の産は申すに及ばず、朝鮮支那の産をも廣く蜆の標本を蒐め、目下調査中であるが、同物異名が大分あるやう



19.
20. } Hirasea goniobasis, Pils.
21.
22.
23. } ,, chichijimana, Pils.
24.
25. } ,, nesiotica, Pils.
26. ,, ,, var. liobasis, P. & H.
27.
28. } ,, major, Pils.
29.
30. } Hirasea acutissima, Pils.
31. ,, acuta, Pils.
32.
33. } Fametesta mirabilis, Pils.
34.
35.
36. } ,, ,, var. paterna, Pils.



80. Triton olearium, Linn.
81. }
81a. } ,, pilearis, Linn.
82. ,, rubecula, Linn.
83. ,, chlorostomus, Lam.
84. Triton clandestinus, Lam.
85. ,, labiosus, Wood.
86. ,, lotrium, Linn.
87. ,, pyrum, Linn.



4[illegible]. Triton tritonis, Linn.

49. ,, nodiferus, Lam.

◯平瀨介館雜誌部 廣告

○發行 ○前金 ○爲替 ○領收證 ○前金濟

介類雜誌ハ每月一回二十日發兌可致候
介類雜誌代金并ニ廣告料ハ前金ヲ以テ御拂込被下度候(郵券代用一割增)
郵便爲替ハ室町中立賣郵便局宛ニ被成下度候
本誌代金御送付ノ節ハ別ニ領收證ヲ出サズ本誌ノ發送ヲ以テ御報告ト可致候
御拂込ノ前金相盡キ候節ハ本誌包紙ニ濟ノ文字ヲ朱印シ御送金ヲ乞フノ表章ト可致候

本誌定價

一部	金貳拾錢	郵稅壹錢
六部	金壹圓貳拾錢	郵稅不要
十二部	金貳圓參拾錢	郵稅不要

本誌廣告料

五號活字一行、廿五字詰	金拾五錢
半ページ	金參圓
一ページ	金五圓

明治四十年七月十七日印刷
仝年仝月二十日發行

不許複製

發行者 平瀨與一郎
編輯者 平瀨信太郎
印刷者 川勝靜三郎
印刷所 合資商報會社

發行所 京都市上京區烏丸通下長者町北龍前町十四番戶 平瀨介館 (電話九百七十四番)

大賣捌所
京都 東枝律書房
東京 東京堂
仝 東海堂
仝 北隆館書店
大阪 大華堂

明治四十年七月二十日發行

介類雜誌

第一卷
第七號

目次

明治四十年八月二十日發行
明治四十年一月十九日第三種郵便物認可（毎月一回二十日發行）

THE CONCHOLOGICAL MAGAZINE

A MONTHLY

DEVOTED TO THE STUDY OF JAPANESE SHELLS.

PUBLISHED BY Y. HIRASE.

VOL. I. AUGUST 1907. No. 8.

CONTENTS.

Notice: The subscription price for foreign countries is $ 1. 50(3 yen) per annum. All letters and communications should be addressed to Y. HIRASE, Shimochōja machi, Karasumaru, Kyoto, Japan.

に於ける市に過ぎないので海陸産共に昨今は酸漿の尤も盛りな期節なのである千成酸漿は六月中旬から八月末迄丹波酸漿は七月上旬から同じく八月末迄海酸漿と薙刀酸漿は六月より七月末迄泡酸漿（一名ヒョットコ）は一月より七月迄南京酸漿は五月より同じく七月下旬迄に産するので此期節以外は鹽漬又はカコヒより外は得る事が出來ぬこれは餘り邊鄙な田舍などでは玩ばないが東京、大阪、名古屋、京都などの都會や市では追々盛んに流行して來る樣で元來中々趣味の有るものであるから此勢で進んで行けば將來益々盛んに成つて髭の生へた紳士や上流の淑女達も之れを玩ぶ樣に成るかも知れないが現在では少女か下町の娘乃至は狹斜の街の婦人などに限られ居る時と場所に關はず「ギユツ／＼」とやられては甚だ耳障りにもなるが自分でやつては鳥渡手放し惡い位面白味のあるもので曾て之れが大層好きであつた或音樂家は殆んど之れを口から出した事が無い位で巧みに唱歌やマーチなどを自由自在に吹いて居たといふ（つゞく）

浦つたひ（其の十）

伴蒿園

拾ひたる貝殼の名をこゝろみに
　とへは敎ゆる浦のわらんへ

夏さけてたゝ二人すむ浦の家
　小鍋に代へし帆たて貝かな

移りては七日にみたぬ浦すまひ
　はや貯ふる兒らのかひから

前號正誤

頁	段	行	誤	正
圖版第十一版		欄外	48 49	78 79
一二	上	一〇	カコボラ屬	カコボラ亞屬
一七	上	三	Wool	Wool
二五	下		トキハガヒ挿圖顚倒	
三五	下	一七	Siliguaria	Siliquaria
三六	上	九		Turbo

方地方より購入の爲め態々來縣せし商人も五六人あり競ふて高價に買受くるを以て之を採捕する漁者俄に增加して其賣買總代金は約八千圓に達せんとするの狀況を呈せり其販路は東京、大阪其他の都市にして既に來年採捕の分をも豫約せんとする有樣なり左れば價格は益々騰貴するに至るべきを以て此際産額の增加を計るの必要あるにぞ右長ニシ親貝の採捕を全然禁止し且同海關係の佐賀、長崎、熊本の三縣に同樣禁止方を交涉されしと福岡縣有明海水産組合長石川彌門太氏は組合會の決議を以て一昨日福岡縣知事に出願したり　（佐賀新聞）

◉蚌と云ふ貝

蚌と云ふ貝は福州の特産物にて土語に、ポン、と稱し風味佳良捨て難きものあり隨て福州料理には缺くべからざるものにて長樂縣下漳港前岐等の近海に多く產し有望なる海產物なるが內地の九州沿岸及臺灣の沿岸にも移殖せば繁殖する見込あるべしとて福州領事より督府に報じ來りたる由　（臺灣日々新報）

◉有明海蟶貝の危機

有明海養殖場に於ける蟶貝は近年良好の成績を呈しつゝあるが一兩年以前より種貝孵化後間もなく死滅し種子貝に不足を生じ殊に本年の如きは猶一層甚しく死滅し間には殆んど全滅に近き場所尠からず若し此の狀況を以て進行する時は容易ならざる有樣となるべきに付被害防止策講究の爲め大串水產試驗場長は昨十九日より同海へ向け出發したり　（福岡日々新聞）

◉酸漿の話

酸漿には植物性の陸產物と動物性の海產物と護謨製の人工品との三種があるが本來酸漿と云へば丹波酸漿の事で薙刀酸漿や海酸漿等は畢竟其代用品たるに過ぎなかつたが今では却て此方が廣く玩ばれて居る樣に成つた海陸產の天然品には夫々其期節が有つて過日の淺草觀音の四万六千日などに附會した理由は澤山有るが要するに此時季

の實驗によるに或は然ることもあらんかと思はるさゝゐのはなしに因みて一言す(能登岬蛙鵠漁夫報)

牡蠣の話(承前)

文蛤などにありては左右の介殼が圓形で介殼の背縁の處に凹凸相咬み合ふ樣になつて居る齒がある故に同じ樣な介殼でも他の貝の殼とは決して好く合ふものでない夫故に昔より結婚の祝儀に文蛤を用ゐるが之は新郎新婦の意氣相合するとは文蛤の殼の如く又他のものとは決して相合はぬとの意を寓したものである夫して其背縁の一部に韌帶と云ふ彈力ある帶樣のものがあつて左右の介殼を結び付け居るが牡蠣の殼は長卵形で文蛤とは違つて左右の介殼が圓形でない左殼は大にして平く右殼は少し小さく膨らんでゐる其左殼で海底の岩石其他の物に附着し又許多相集まつて團塊をなして居る文蛤の樣に齒と稱すべきもの殆んどなく韌帶も亦小さい故に在右の殼が離れ易いのである殼の表面も文蛤の樣に平滑でなく粗造で澤山の褶襞の樣な突起が出て居る

貝類の介殼は三段の層より出來て居るものである一番の外が皮膚で次が稜柱層で最内部が眞珠層である之れは介殼を切り磨き減らして薄片とし廓大して見なければ分らぬ牡蠣も先づ此三段によつて出來て居るものと考へて宜しい牡蠣では眞珠層は白色であるが眞珠貝や鮑などでは美麗なる光澤を有するものである青貝と稱して漆器などに塗り込むものは鮑の殼である

介殼の成分は動物質と礦物質より成り立つて居る動物質はコンキヲリンと稱するものにて礦物質は主に炭酸石灰である其他燐酸石灰の少しと其他の礦物分を含んで居る夫故に此の介殼を燒くと動物質に燃えて主に炭酸石灰許りとなる卽ち之れが石灰である(つゞく)

●長ニシ貝採取禁止の出願

有明海に生産する長ニシ貝卵子(俗に海ほうづきと云)は從來婦女子の翫弄物として多少の需用ありしが本年は上

Vermetidae

○ Vermetus imbricatus, Dkr.

Pyramidellidae

○ Pyramidella cinctella, A. Ad.

Littorinidae

○ Littorina sitchana, Phil.

Cerithiidae

○ Cerithium humile, Dkr.

○ 〃 kobelti, Dkr.

○ 〃 attenuatum, Phil.

○ Potamides multiformis, Lischke.

Neritidae

○ Nerita picta, Gould.

Phasianellidae

○ Phasianella modesta, Gould.

雜報

榮螺に就いて

榮螺は沿海の巖瀬に棲息し婦女子と雖どゝ稀れには採取することあり漁者に至ては日々目に視手にさはるものなれども榮螺が子を產む時期は老漁者にも詳ならずと云ふ只古老の傳に三月（目今の陰曆を差すならん）產屋作左江と云へば或は此の時ならんかと思はるさゝゑは優れたる美味はなけれども四季共に味に變りはなきと價の廉なるとにて貴賤共に珍重す特に殼其まゝ炭火に投じて酒を注ぎ込みて煮喰ふをさゞゑの壺燒きとて珍しき馳走とはす採取法は地方に因て異なれども我が地方は竹を以て其元を三つに割りて割目に横に棒を挾んで口をあけ以て突き上るなりさゝゑの澤山に寄り來る年は多少不作の兆あるを以て俗に稱して飢饉介を唱ふ老人の話に實に此の事ありといふ氣候と如何なる關係あるか詳かならねど數年

○ Conus anemone, Lam.

„ pauperculus, Sowb.

Strombidae

Strombus japonicus, Reeve.

„ luhuanus, Linn.

Cypraeidae

Cypraea capt-serpentis, Linn.

„ clandestinus, var. artuffeli, Jouss.

× „ felina, Gmel. (var. ?)

Cassidae

○ Cassis achatina, Lam.

× „ saburon, var. japonica, Reeve.

× Oniscia cancellata, Sowb.

Doliidae

Dolium luteostoma, Kust.

× „ reticulata, Lam.

Naticidae

○ Natica powisiana, Recl.

× „ „ „

× „ colliei, Recl.

× „ ampla, Phil.

Calypteridae

Crepidula aclcata, Gmel.

„ walshii, Herm.

Hipponix pilosus, Desh.

Onustidae

Xenophora pallidula, Reeve.

× „ exuta, Reeve

Solaridae

Solarium maximum, Phil.

Scalaridae

○ Scalaria angusta, Dkr.

○ „ polygonoides, Lam.

Fasciolarinae

Fasciolaria trapezium, Linn.

Buccinidae.

Melongeninae

Hemifusus tuba, Gmel.

Neptuninae

Siphonalia cassidariaeformis, Reeve.

Pisaninae

Euthria plumbea, Phil

○ Cantharus cecilli, Phil.

Eburninae

Eburna japonica, Reeve.

Nassidae

○ Nassa festiva, Powis.

„ japonica, A. Ad.

Volutidae

Voluta megaspira, Sowb.

Olividae

Ancillarinae

○ Ancillaria rubiginosa, Swains.

× „ „ „

Columbellidae

Columbella pardarina, Lam.

Cancellariidae

Cancellaria sp.

Terebridae

○ Terebra serotina, Ad. & Rve.

○ „ Lischkeana, Dkr.

Pleurotomidae

○ Pleurotoma subauriformis, Smith.

Conidae

でもあるから、旁外出を見合せた。少し雲模様になつたから、無益に遊ぶものと思ふつて、十時頃から、背面の、前にカリチユームを採集した所に行つて探した。幸に一二百を得た。歸つたのは十二時過。晝食後時計を受取りに行つた。午後三時半に、電報爲替が屆いた。が明朝でないと受取れない。

(未完)

三崎産貝類目錄 (一)

米澤 松島克生

Gastropoda

Muricidae

Muricinae

○ Murex tenuispina, Lam.
" ternispina, Lam.
○ " senegalensis, var. calcar, Kiener.
○ " brevifrons, Lam.
○ " emarginatus, Sowb.
" falcatus, Sowb.
○ Urosalpinx tritoniformis, Blainv.

Purpurinae

Purpura tumulosa, Reeve.
Rapana bezoar. Linn.
○ " (Latiaxis) sp.

Tritonidae.

Triton nodiferus, Lam.
" olearium, Linn.
" corrugatus, Lam.
Ranella lampas, Linn.

Fusidae

Fusinae

○ Fusus pagoda, Lesson.
" perplexus, A. Ad.

ひ、一つの山を越えようとする、所が阪の中途で、日記帖を落してしまつた。平常山行には携へないのであるが、此日は奥崎氏に面會する積で、名刺を携ふる必要なんぞから、つい持つてでたのであるが、上着の衣嚢(ぽつけつと)で潤れるから、ずぼんの方へ入れた、所が阪を登る際に段々と押し上げたものと見えて、つい落して了つた。阪を下つて數丁いつてから、遺失した事に心付き、大に心配し、阪を上つた人を追掛けて逆戻りすること凡半里、やつと一人に逢つたから尋ねた所が、幸に其人が拾つてをつて返へして呉れた。で少しの謝禮をして、又々雨を冒して午後五時に阪宿した。此行程は約二里半であつた。全身は濡鼠のやうで見る影はなかつた。要するに當方面でも別に異つたものを見出さなかつた。思ふに本島の東西は別に異つた所がないのであらう。今夜は烈しい暴風雨であつた。

九月一日、暴風雨。夜來凄い天候であるので、外出は出來ないので本日入港の筈になつてをる、島廻りの滊船を待つ。其理由(わけ)は最早隱地郡(おちぐん)には見込がないから、後は採集者に委せて充分だと思つたからである。午後二時滊船漸く入港す。烈しい雨は今朝から小歇(をやみ)なく降り續いてをるので、非常の困難をして乘船した。船体の小い上に、波濤が荒いのであるから、實にたまらない、自分は始めてかういふ憂き目にあつた。が兎に角無事で一時間たつて西郷へ着いた。宿にて京都よりの電報并に端書を受取つた。書中には荷造が不完全である爲めに破介があるといふ事と、多數の採集を喜ぶとの事があつた。自分は要心のために金圓の送付と今一度奥へ行つて採集すべきかを電報にて問合はせた。時計が破損したから修理にだした。尚種々の必要品を調べ、採集した標本を荷造りして發送した。夕方になつても、雨は一向に歇まなかつた。

九月二日、雨猶は歇まず。但し午前九時頃からは段々霽れて來た。爲替をまち、時計の修理をまち、又盆節會

背負はせて、都萬に向つて出發した。中山越のトンネルを通り、それから近距離といふことであつたから、舊道を取り、難澁な坂三つ、都萬妻を通つて、行く事五里餘、午後一時過に都萬の內釜屋に着いた。旅宿高宮重太郎氏方に投宿した。明日からは壇鏡其他近傍の地を探索の上歸鄉、島前に向ふ筈である、こゝから壇鏡へは二里であるといふ事である。

八月三十一日、曇、後雨嚴しく降る。夜は暴風雨。案內者が檀鏡山方面に探集を試みようといふから、天候は甚だ惡かつたけれども、頓着はず出發した。途中上里の奧岐氏を訪うて、古代石器に就いて聞き合した。然るに同氏は何物をも所藏せず、又所藏してをる人もないとのことを答へられた。十年前に西鄉の神道敎會の敎師が、探索してをつた時に、讓つて了つた事があるとの話である。自分達は此所から二里といふ山を越え、峻阪をよぢ、全山の背面の椎茸の木のある所を探索して、クローシリヤ、ガテセラ、デプロムマチナを少許得た。一層熱心に探集して、ミクロシスチナ少しと、デプロムマチナ百餘を得た。がもう此時は正午前であつた。其れから上つて行くこと幾丁で、遂に下りとなつた、で谷に下り、方向を轉じ奧に向つた。卽ち檀鏡の瀧のある所である。道々も注意して進んだ、大蝸牛の幼介幷にカリガナの幼介等は度々見付ける事が出來たけれども、成介は得る事が出來なかつた。此日始めてエナレインニアナの死殼一ヶを得たから、生殼を得ようと探したけれども、遂に得なかつた。正午を過ぐる時に漸と瀧に着いた。食後瀧に打たれなどするうちに、少雨がまた降つて來た。(今朝發足する時一度降つた)尙近傍を試みたが、別に異つたものも手に入らず、雨は次第に烈しくなつて、何時やむとも思はれないから、歸宿する事に決した。那久へでゝ歸る積である。道路は雨の爲めに甚だ惡くなつた。一里を降つて漸く人家の在る所にでた。雨を冒して此所より南に向

殘なく晴れ渡つた。で昨日と仝様上荷場谷に行つた。が別に珍らしいものは得なかつた。其他の人等の話によると椎茸の發生する頃には、多數出るから、採集が極めて易いとの事である。幸に有力な一個の周旋家を得たから、万事仝人に一任することゝして、明日は北方々面に廻らうといふ考へである。折り好く西鄕の旅宿の主人も、仝地方に行くといふことであるから、仝道する考へである。此の夕雨ふる。

八月廿八日、快晴。朝は本日まで採集した蝸牛の採肉をした。此うして置かないと携帶上に甚だ不便である。カチセラミチンパラ丈けは採肉が甘くいかなかつたから、生きたまゝ携へることに決して、午前九時頃（一昨日時計のゼンマイを切つたから時間が確められないで困つた）宿の主人と同道、峻阪を上り、二里餘を距てた五箇村の郡といふ所に午後一時頃着いた。旅宿が何處もふさがつてをるので、大いに困つたが、辛つと一戸を見付けて投宿した。北方に行つては種々都合惡しく不經濟の点もあるから此所にとゞまる事にした。が見込のない様子であるから、一兩日の中には都万に行き壇鏡山を探撿しやうとも考へた。前日來の疲勞が甚だしいから午後は休んだ宿の名は藤田シマ。夜は蚤の襲擊で甘くねられなかつた。

八月廿九日、晴、炎天。案內者と一緒に背部嶽山に向つて出發した。椎茸の木がまだ新しいので、見込がないから、同山を越えて、代村の奧の方へでた。此間の山坂は隨分苦しかつた。此所でもまた椎茸の木が古くないから見込がない。全然不結果に終つた。この邊一体は松の林のみで、杉の立木は皆幼少で、其下では採集を試むべくもない。只代の谿谷で小介僅かを得た丈けであつて、歸らねばならぬことゝなつた。明日は都萬に行き、壇鏡山に採集を試むる事に決し、午後四時歸宿。

八月三十日、快晴、炎天。早朝から道案內者に荷物を

茸製造の小屋が建てゝあつて、谷間といはず、中腹といはず、椎樹を凡三四尺位に伐つて、一つの貫木に双方から持たせかけてある。凡百本位から、五六百本位を一群としてある。之れが出來てから最早七年を經過したといふことである。或ものは新しく、或ものは地面に倒れて腐つてをる、自分達は此等の動かしても、差支のないものは轉倒りかへして探した。クロージリヤ二種は稍多數を得る見込がある、又ガ子セラミチンパラも雨後の事であるから這ひ出てをる。頗る有望であるから、段々奧へ奧へと進んだ、凡そ半里餘は進んだであらう。さうして探索のヶ所は、凡そ廿餘ヶ所と記憶せらるゝ。此の日は着島以來の好結果で、大なる蝸牛の分は少なかつたが、ガ子セラ十五六個と、クロージリヤ七十位と、ユーロタ、カリヅナ少々と、ヘリシナ、ミクロシスチナ、プレクトツロピス等少々を得た。ツリシヨプリタは三個を得るに過ぎなかつた。午後六時に飯宿。さて又當地の一婦人からユーロタ、カリヅナ廿五個を買ひ入れた。拔肉せんため煮道具を求めやうとしたけれど、手に入らなかつた。殼が薄弱の爲めにガ子セラ及びカリヅナの數個は破損した。

八月廿六日、晴。前日來の連戰に、身体非常に疲勞はしたが、餘勇を皷し、苦しき身を運んで、前日と仝　、此の日は案內者菊地柳一氏と倶に、一里餘を入り込んだ。今日は昨日よりは稍奧に進んだ。谷は餘り深くはない。下荷場谷といふ名である。結果は前日と餘り違はない。只ガ子セラミチンパラは少數であつた。午後五時から飯宿の途に上つた。同地の木匠小幡信四郎氏は、今後の採集を引き受けんとの事であつたから、仝人に就いて色々心得を話して置いた。又仝人から携帶に便するため一の木函を買ひ入れた。今夕から俄に雲行惡しく、風吹き、雷鳴り、明日の天氣甚だ氣遣はる。

八月廿七日、晴、炎熱。昨夜の疑はしかつた空は、名

腰部をしたゝかに打ちて、一時は言語さへ口に發する能はざることあり。樂しきうちに苦しみもあるなり。採集すべき地の急斜せる所などは、別けて心を用ふ可き也。

（完）

山陰地方介類採集記（承前）

介舘內　黑田生

八月廿三日、晴、時々曇。早朝より有木村近傍に採集を試みた。何等得る所もなく大に困却した。仕方がないから又々昨日の大滿寺山麓へ行つた。時に午前九時であつて、先方に着いたのが十時。其れから專心に採集したが、不相變得る所甚だ少なく、唯僅にデプロムマチナテヌイプリカ狀のもの小許を得た丈けであつた。大の部等に至つては一つも生殼を得ることなく失望した。で愈意を決して他方面を探索することゝして、此の日をもつて引き上げることゝした。午後五時飯宿。更に西鄕に午後六時飯着した。小包の函を買ひ、之れまで採集の分を小包として發送した。但し境の分は殘した。明日からは北部中村に赴く豫定。さて有木村で採集を補助した人は、小泉繁三郎氏である。

八月廿四日、晴、時々曇、炎熱甚だしく風無し。最初は同地へ行く考へは無つたが、旅宿のものゝ勸誘するまゝに、遂に行く事に決神した。幸此の日旅宿の主人も掛取りに行くとの事故同行を約した。萬事を待つて午前九時に出發した。自分は荷物を背負うてをるし、旅宿の主人は用向で屢人家へ立寄るし、途中隨分手間取つて、一難山を越えて、漸と午後五時に中村に着いた。旅宿の主人の紹介で旅人宿赤沼貞一郎氏方に投じた。

八月廿五日、夜來雨降る。朝になつても猶は暗かつた。夜來の降雨で、採集には極めて適當の日であるから、困難は覺悟の前で、外套を被り、案內者の藤木德松氏と倶に出發した。一里餘奥へ入り込んで、東谷山に着いた。椎

飾磨郡飾磨町にては、Eulota similaris Fer.（同じまいまい）及び Opeas kashimae Pils. を得。此の地と對岸なる播磨灘中の家島は、飾磨町を去る五里の海中にあり三十八年五月八日採集を試む、植物には播磨の他村にて見出し難きもの數種ありき。而して陸貝は五種を見出せり。家島神社の森には、雑樹等の喬木あり。此の森にては同じまいくの死殻一箇を見たり。生者にありてはClausilia pigra Pils. を見出せり。宮浦の北端海邊岩窟にてClausilia japonica Crosse を見出せり。眞浦の方にE. peliomphala Pfr と思はるゝものありき。眞浦の南端にてはCyclophorus Herklotsi, Mart. を見出せり。此の外にも尙はあるべからむも、余は遂に發見するを得ざりき。又高砂町の南にてウスカワマイマイを見、伯州の海邊にて、Ganesella japonica と思はるゝものを見たり。

採集の時期に就いては、中形以上の者は、五月より十月頃迄を、採集の好時期とすることは、吾人の知る所なるが、小形種微細の者は、四五月頃を以て、最も採集に適する時期とす。其の次は十一月頃をよしとす。何となれば夏月は樹葉繁茂し、晝尙は闇く、採地に光線を通ずること充分ならず、剰さへ蚊及び蟆子等の螫虫多く、到底其の不快に堪へられざればなり。微細の種にありては光線を受くることの充分なる地にて採集すべし。朝影、夕影の地はうすら闇く、採集すること甚だ困難也。其は形の微細なるが上に、落葉及び土色と類色たる保護色を有すれば也。

採集する時の注意をば少しく記すべし。小種、微小種を採集するには、小ビンを左手に携へ、右手にて落葉、小石等を除き、貝を見出でし時には、三、四寸内外の細き木片に唾液をつけて、貝に接すれば直に之れに附着す、こを其の儘ビンに入る可し。採集の折々、或は足元を踏み辷らして倒れ、折角の貝を失ふこともあり。或はビンを破碎することもあり。或は仰のけに打ち倒れて、頭部、

皇の勅願道塲とかや杉林を以て名あり。一等官林にして植物にも見るべきものあり、さて蝸牛類にては、Eulota senckenbergiana Kob. (var ?) E. peliomphala Pfr. E. vulgivaga. S. & B. Ganesella ferruginea Pils. G. Stearnsii, Pils. の五種を見る。僅に一時半を此の山に費したるのみなれば、詳細には知り難かりしも、若し時日の許すものありて、詳しく取調べたらむには、此の外の種類も得たりしならむと思はる。

夫れより作州吉野郡後山村行者山に行き、廿二、三日と採集を試みしが、此の山は第三紀の火山岩より成形せられたる山にてありき。總じて火成岩地方は、水成岩地方よりは、種類も種數も少きが如し、此の山は役の行者の開きたる行者塲にて、禁伐林なるが故に、ブナ、カツラ、サハグルミ等の喬木甚だしく繁茂せり。此の塲所ならばと希望を懐きしが、意外にも獲物はなかりき。Eulota senckenbergiana Kob. var., Pupinella rufa Sowb., Trishoplita Hilgendorfi var. rufa P., Ganesella Stearnsii Pils., Clausilia japonica 及び C. Martensi 等を得たるのみなりき。

總て陸貝類は、石灰岩地に多しとの説なるが、余は未だ美濃、土佐、琉球等の地方を採集せざれば、今此に其の比較をなすを得ざれど、わが香島村の內篠首村は、田畑百町、山林七百町の地にして、地質は水生岩にして、小佛古生層ならむと思はるゝより成り、火成岩は石英粗面岩より成る一小村なるに拘らず、五十餘種を發見し得たるを思へば、石灰岩地方は種類に富むか、將た種數に富むにてもあらむか。

明治三十三年五月十日、揖保郡室津の明神に詣ふで Eulota callizona var. congenita Smith を得。又三十八年五月、高砂町にても之れと同じきものを見る。明石及び神戸市にも發見せらるゝことありといふ。此の種中國にては、海近き邊より、山間にかけて廣く分布す。

圖解

AB、電信線全長四尺ノモノ二本或ハ三本ヲ三或ハ四ケ處細キ線金ニテ束子タルモノ
C、麻製ノ細キ糸長サ二尺五寸
D、全長六寸、Cノ上ヨリ五分ノ三ノ處ニ附ス
E、釣鉤、軸ハ鉛ニシテ長一寸八分直徑上三分下四分、釣鉤ハ鐵線長二寸ノモノヲ四本軸ニ鑄込シタルモノナリ
F、曳綱、太サ任意、長サ海深ノ三倍以上ヲ要ス
G、H.浮子鉛重量五十匁位底質、深淺、潮流ノ速度等ニヨリ重量及其數ヲ加減ス
E'、Eノ側面圖、
E''、Eノ平面圖

使用の方法、之は晝間使用する漁具で一艘に漁夫二人乘組み一人はトモ艫を押し一人はワキ艫を押す、而して此の「スマル」三個を使用するを普通とする、一個はトモ艫押しが艫杭と共に左手に持ち、他の二個は竹若くは棒に縛つて表の舟梁に結び附け、潮流に沿ふて（但し三十度位の角度を以て斜に潮流を横ぎる位の方向を以て）船を漕ぎつゝ流すのである、魚類を釣獲するには上曳とか下曳とか沈子の重量と曳綱の長とを調節して使用するのであるが貝類標本の採集には、それ迄の加減を要せぬ事と思ふ、たゞ數多く使用する時に、相互にモツレ合はぬ樣曳綱の長さを調節する事は要用である、それから潮流に沿ふて倘は二人で漕ぐのは魚類を曳つ掛ける爲めに、速力の急を要するのであるが貝類のには左程の速力を必要としない。

漁具は使用毎に淡水にて洗ひ、特に釣鉤に注意して錆びない樣にし、使用して先端の鈍つた時には其都度鑢にて尖銳たらしむるを要する。

經驗によれば多產する處なればキシヤゴの如き細小なる螺類もよく曳つ掛ける事が出來る。

陸介採集小談（承前）

大上宇一

一般に砂質にして乾燥せる地は採集に不適當なり。陸生とはいへ、元水生貝より進化したるものなれば、濕潤の地を好むは勿論なり。松林は不適當なれども、杉林にては多少產せざるなし。余明治三十七年五月二十一日宍粟郡船越山に採集す。瑠璃寺あり、藥師を祀る。聖武天

雑録

貝類採集に使用すべき釣具

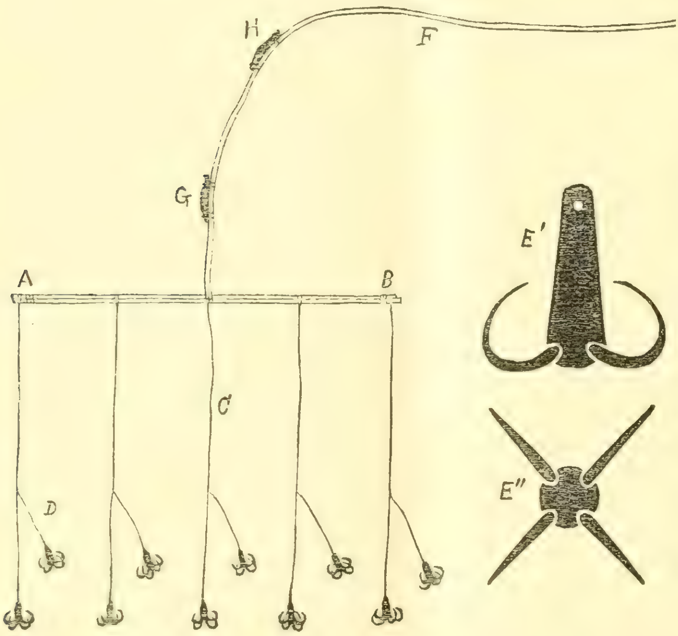
平戸 戸井田盛藏

貝類標本採集器として、ドレッチ、延繩、及び底曳網の種類が適好であると云ふ事は、岩川理學士の採集の栞に於て詳細御説明あつた處であるが、私は茲に簡單にして比較的有効なる漁具を御紹介し度いと思ふ。

それは明治三十四五年頃から兵庫縣下鳴門の漁業者が使用し始めたので目下同縣下一般に使用して居る「スマル」と稱する底曳の空釣（カラツリ）具で原より貝類採集の爲めに考案したるものではなく、カレイ、ヒラメ、アカエイ、コチ、オコゼ等の底捿魚類を曳きかける目的のものであるが、此の漁具が海底を匍匐する螺類の採集に頗る適當して居るのである。

但或は漁具である爲に使用すべき場所が沙底若くは泥底と云ふ樣な平坦な場所に限るのは遺憾とする處である。

構造は次の圖の通りである



羅甸語の一般或は廣布の意にして其分布の廣きを取りて名けしものなるべきも、適當にして簡單なる譯語を案出せざるを以て、原語の儘バガを冠して「バガ、ヒメ、ベツカフ」と名けぬ、

本種は余の新發見にかゝり、採集番號一〇〇六なり」

カドヒメベツカフ　M. acuta, Pils. & Hir.

（陸產、第八版、第五十三及第五十四圖）

產地、薩摩、

高、一分五厘、長徑、二分四厘、

形狀、殼質薄く、光澤を有し低圓錐形にして、概形はツノイロヒメベツカフに酷似するも、該種よりも大形にして、龍骨は外唇の直後部に於て鈍く、或は殆んど消失せり、殼面には低き生長線あるのみにして、螺項鈍く、螺層は五階半を數へ、徐々に增大し、印刻せられたる縫合線にて區劃せられ、其上方に極めて狹き緣あり、体層は鋭くして狹き龍骨を有し、底部凸く、殼口は新月形をなし、內唇は白色の滑層を以て厚められ其着点は急に擴張して、半ば臍孔を覆へり」

彩色、黄褐色なり」

本種は余の新發見にかゝり、採集番號は一三二五なり」



形狀、殼は臍孔小さく、螺塔低く、底面凸く、周縁角立ち、体層の殼口に近き三分の一ばかりは周縁圓し、殼面は光澤を有し、上面には相隔りたる微脈あるも底面は平滑なり、螺層は五階半を數へ、縫合深く、殼口は新月形をなし、口縁薄く、内唇の上部は反曲し、内部は少しく不規則なるも滑層判然たらず」

彩色、褐角色なり」

本種は余の新發見にかゝり、採集番號は一三一五なり

ツノイロヒメベツカフ、新稱 M. ceratodes, Gude.

(陸産、第八版、第四十八及第四十九圖)

産地、播磨、土佐、

高、一分五毛、長徑、一分六厘、

形狀、前種に似て臍孔覆はれ、半透明角質にして、周縁の龍骨は其上に一條の溝を劃して少しく突出し爲めに、縫合線に二重の觀を呈せしむ、螺層五階内外を數へ、螺塔前種よりも少しく高く、生長線は前種の如く判然ならず、全体前種よりも光澤強し、

彩色、褐角色なり」

本種は余の新發見にかゝり、英國グード氏の新種として記載せられし所にして、採集番號は三〇一なり」

バカヒメベツカフ、新稱 M. vaga, Pils. & Hir.

(陸産、第八版、第五十—第五十二圖)

産地、阿波、淡路、和泉、大和、越前、加賀白山等、

高、九厘、長徑、一分五厘、

形狀、殼は低き馬蹄螺形を呈し、平滑にして、光澤あり、螺塔は低き圓錐形をなし、輪廓脹れ、螺層は六階にして脹れ、徐々に增大し、体層の周縁は亞角狀を呈し、低面は凸なり、殼口は新月形をなし、内唇は内部の白色滑層によりて厚くなり、其上部は擴張反曲せり」

ピルスブリー氏は始め此種を第五十二圖の標本により Kaliella yamatoensis Pils. と命名せしが、後其非なるを發見し、更に本名に訂正せられたり、本種の學名 vaga は

んど平滑にして半透明なり」

彩色、淡黄色なり」

本種は余の新發見にかゝり、採集番號は一一四六なり」

ヒメベツカフガヒ屬、新稱 Microcystina, Mörch.

殼は小形低平にして光澤を有し、周縁は圓く或は少く角立ち、外唇薄く殼軸は內部に厚くなれり」

ヒメベツカフガヒ、新稱 M. sinapidium, Reinh.

(陸産、第八版、第四十二及第四十三圖)

産地、本州、四國、九州、臺灣、

高、三厘、長徑、五厘五毛、

形狀、殼は角質にして、光澤を有し、微脈あり、縫合は狹き縁を有し、螺層は四階ありて狹く、徐々に增大し、体層は周縁圓く、底面は少しく凸く、臍孔は覆はれたり」

彩色、黄角色なり」

本種の採集番號は四八三なり」

エゾヒメベツカフ、新稱

M. hokkaidonis, Pils. & Hir.

(陸産、第八版、第四十四及第四十五圖)

産地、渡島、

高、一分、長徑、一分四厘

形狀、殼質薄く稍透明にして臍孔小さく、螺塔極めて低く、底面凸く、周縁圓く、螺層は脹れ四階半を數へ、微かなる生長線を有し、顯微鏡にて窺へば極めて精細なる放散線を見る、縫合深く、殼口は斜めにして廣き新月形をなし、內唇の着点附近は反曲して少しく厚くなれり

彩色、黄角色なり」

本種は余の新發見にかゝり、採集番號は一〇四三なり」

ハコ子ヒメベツカフ、新稱

M. hakonensis, Pils. & Hir.

(陸産、第八版、第四十六及第四十七圖)

産地、相模箱根山、伊豆天城山、

高、一分三厘、長徑、二分、

高、一分二厘、長徑、一分、

形狀、殼は脹れたる圓錐形即ち彈丸形をなし高と直徑と略ぼ相等しく、平滑にして光澤あり、周緣圓く、底部は甚だしく脹れ、螺層は脹れて六層四分の三を數へ、殼口は狹窄して短新月形をなし、脣は內部に厚くなれり」

彩色、帶黃褐色にして、底面は稍や淡色なり」

本種は余の新發見にかゝる所にして、採集番號は八六七なり」

エゾエンザ屬、新稱 Pristiloma, Ancey.

殼形低平、上下両面共に平滑にして光澤あり、脣は前記三屬と同じく內部に厚くなれり、

西暦一千八百八十七年、アンセイ氏は Z. lansingi, Bld. 及 Z. Stearnsi, Bld. の二種の爲めに亞屬 Pristina を設けんことを提言せしが、蠕蟲類に之と同一の屬名あるを以て、ヒルスブリー氏は之を Anceyia と改名し、アンセイ氏の未だ指摘せざりし屬徴を擧げて、此屬を再記せしが、此名稱も亦亞弗利加產の或一屬に用ひありしにより、アンセイ氏は更に之を Pristiloma と改名したり、

前記両種は全く他の諸屬と異にして齒舌の緣齒は刺狀をなし、顎に强肋を有せり」

エゾエンザ、新稱 P. japonica, Pils. & Hir.

(陸產、第八版、第三十九—第四十一圖)

產地、釧路、千島、

高、六厘、長徑、九厘

形狀、殼は微小にして、臍孔なく、圓盤形を呈し、螺塔極めて低く、上面殆んど平坦にして、微かなる放射脈を有し、底部脹れ、其中央凹み、周緣圓く、螺層は少しく脹れ、層數五ケ三分の一を數へ、徐々に廣くなり、殼口は殆んど垂直にして、狹き新月形をなし、外脣は銳くして薄く、口緣より少し內方に一條の白色滑層肋ありて之を强め、外面より之を伺ふときは淡黃色の帶の如く見ゆ、內脣は其着點にありて狹く反曲せり、全体光澤を有し殆

余は特に此種を採集せんことを務めしも、未だ之を得さるが故に之を圖し又詳說すること能はざるを遺憾とす、或は他の南洋諸島の產にはあらざるか」

ヒラヘタエンザ、新稱 F. mirabilis, Pils.

(陸產、第七版、第三十二—第三十四圖)

產地、小笠原母島

高、五厘 長徑、二分四厘、

形狀、直徑は高さの五倍あり、螺層は段階をなし縫合は上層の龍骨に覆はれ螺層の中央を繞りて一條の凹所を存し、淺溝狀をなす」

彩色、上面は汚褐色にして、下面は色淡く少しく蒼色を帶ぶ」

本種は余の新發見にかゝり、採集番號は八五四なり」

變種、**チヽヒラエンザ**、F. mirabilis, var. paterna, Pils.

(陸產、第七版、第三十五及第三十六圖)

產地、小笠原父島及兄島、

高、五厘、長徑、二分三厘、

形狀、本種よりも龍骨鋭く螺層中央の凹溝淺く、殆んど段階を有せず」

彩色、本種と異なることなし」

本變種も余の新發見にかゝり、採集番號八五四bなり」

エンザモドキ屬、新稱 Hirasiella, Pils.

此屬は余の送りし標本に基きヒルスブリー氏の新設する所にして、殼は小さくカリーラ屬に似て、彈丸狀をなし、光澤あり、亞穿孔狀の臍を有し、唇は、狹窄してエンザカヒ屬の如く內部の厚くなれるを以て、カリーラ屬と區別することを得べきも、幼貝はカリーラ屬と同じく薄き唇を有せり」

エンザモドキ、新稱 H. clara, Pils.

(陸產、第八版、第三十七及第三十八圖)

產地、小笠原父島、

ミヤコボラ屬、Ranella, Lam.

模式ミヤコボラ、Typical.

サブグラノサ、R. subgranosa, Sowb.

(トライオンより)

產地、支那海岸、マニラ、

長、三吋乃至三吋半、

第五十四圖



サブグラノサ(トライオンより)

螺塔及水管溝はミヤコボラに於けるよりも延長し、ミヤコボラよりも脹れ少く、結節低く、淡褐色及白色を雜彩し、口内は醬薇色なり」

エレガンス(R. elegans, Beck.)は本種の一變種にして、結節の主要なる二列を發達して刺狀をなせり」

博物館目錄には本種をミヤコボラとなせるも余は暫らくヒルスブリー氏の鑑定に從ひミヤコボラを R. albivaricosa, Reeve. の和名としたり、(ミヤコボラの條下を考せよ)

日本陸產貝類圖說　(三)

ヘタナリエンザ屬、新稱 Fumetesta, Pils.

殼は圓盤形をなし、非常に扁平にして、龍骨鋭く、龍骨の下面凹み、臍孔なく、殼質薄く、微脈あり、殼口斜めにして非常に狹く、底唇は内部に厚くなれり」

ヘタナリエンザ、新稱 F. operculina, Gld.

(米國費府博物學會一千九百〇二年度會報より)

產地、小笠原父島

高、二•五ミメ、直徑、七•五ミメ、

形狀、直徑は高さの三倍あり、螺層は五なり、

彩色、帶蒼褐色なり」

十一米の深）、佛蘭西の島、
長、二吋半乃至三吋、
殻は兩々對をなせる褐凹線を繞らし、稍褐色にして、褐色を混彩し、又二列の距りたる方形褐点を飾れり」
日八譜のセコバイの圖は T. obscurus, Reeve（ヒモカケセコバイ、前出）に酷似せるも、余は本種の標品を有せざるを以て之を比較するに由なし、故に暫らく岩川氏に從ひ後考を待つ」

レチコスス、T. reticosus, A. Adams.（トライオンより）



第五十二圖　レチコスス（トライオンより）

産地、日本、
長、半吋、
白色にして、距りたる褐色の斑紋を有し、螺層は七階あり、圓き縦襞ありて、螺脉之を横ぎり、外唇は内方に脉を有し、外方に縦脹脉ありて、其他には縦脹脉なし」

イボボラ屬、Distorsio, Bolten.

イボボラ、D. cancellinus, Roissy.（トライオンより）

産地、錫蘭、支那、フイリツピン（六尋の珊瑚砂中に産す（クミング氏））、セント、トマス及他の西印度諸島、西コロンビアのモンテクリスチ及ジピザピの七乃至十尋の砂泥中（クミング氏）、



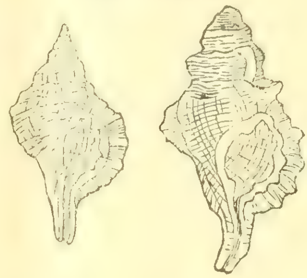
第五十三圖　イボボラ（トライオンより）

長、一吋七五乃至三吋、
帯黄褐色にして、帯なく、螺塔及水管溝は比較的にチヤミボラよりも長く、表面は相隔りたる狹き縦横肋によりて一種の方眼に分たれ、表皮は淡褐色にして剪絨(ビロード)状をなし、内唇板及外唇は極淡乃至濃鮭色を呈す」

シホボラ亞屬、Gutturnium, Adams.

ヴエスパシウス、T. vespaceus, Lam.

(トライオンより)



第四十八圖

ヴエスパシウス(トライオンより)

產地、濠洲、ヴィチ諸島、布哇、西印度、

長、一吋半

極めて細密なる顆粒を有し背面の結節大きく駝背の觀を呈し、帶黃白色にして、褐色の紋及帶あり」

テヌイリラツス、T. tenuiliratus, Lischke.

(トライオンより)



第四十九圖

テヌイリラツス、リッシケより)

產地、日本、布哇諸島、

長、四十ミメ、

殼は淡褐乃至暗褐色にして口内白く、四つの縱脹脉と、九階の螺層とありて、始めの四層は胎層にして小さし」

リベツキー、T. Löbbeckei, Lischke.

(トライオンより參譯)



第五十圖

リベツキー(リシケより)

產地、日本、

長、一吋半、

殼は二縱脹脉を有し、螺層稍平たくして少し脹れ、鈍き肩角あり、螺塔高からず、水管溝短く、稍密なる螺脉を刻し、縱脹脉間の諸肋は消磨せるもの多し」

セコバイ亞屬、Epidromus, 'Klein' Ad.

セコバイ、T. Sowerbyi, Reeve.

(トライオンより)



第五十一圖

セコバイ(トライオンより)

產地、ガラパゴス諸島(六尋の沙泥中)、紅海(十乃至

同上備考（第五）

ボラガヒ科、Tritonidae

ボラガヒ屬、Triton, Montfort.

アーサル、アダムス氏は千八百七十年の Ann. Mag. Nat. Hist. に日本産として左の四種を記載せしも、圖なく、大きさ及比較的の記載なきを以て、今日より殆ど之を考定すること能はず、

T. lirostomus, A. Ad.
T. papillosus, A. Ad.
T. tringa, A. Ad.
T. nodiliratus, A. Ad.

クヽリボラ、T. waterhousei, Ad. and Ang.

（トライオンより）

第四十六圖



クヽリボラ（トライオンより）

産地、南濠洲、
長、二吋二五、
帶黄褐色にして、多少橄欖色を彩り、口内は白し」

ドルスオスス、T. dorsuosus, A. Ad.

圖なく、長さ等の記載なきを以て考定すること能はず」

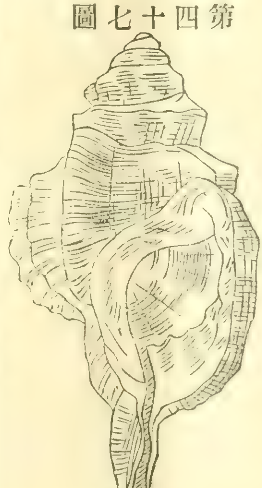
オホゾウガヒ亞屬、Cymatium (Bolten) Adams.

コシタカフヂツ 新川、T. Dunkeri, Lischke.

（トライオンより）

産地、日本、
長、三吋七五、
白色或は帶黄色にして、多少不規則なる褐彩を有し、殼口、殼軸及唇歯は白色なり、

第四十七圖



コシタカフヂツ（トライオンより）

本種はオホゾウガヒに髣似するも、同種よりも殼質薄く、縦脹脈間の縦結節は同種よりも小さく、且一層よく連續し、且つ數多く、（大象貝にては五ケなれども本種には七八ケあり）、彩色異なれり」

彩色、帶白或は乳白色にして、柑褐色を混彩し、口內は肉色にして、幼殼にありては兩唇、口內共に柑赤色を呈す」

本種は此屬中の最も重厚大形なるものにして、三五寸の長さに生長せし時既に老殼の性質を具へ、彩色は却て老殼よりも濃色美麗なり」

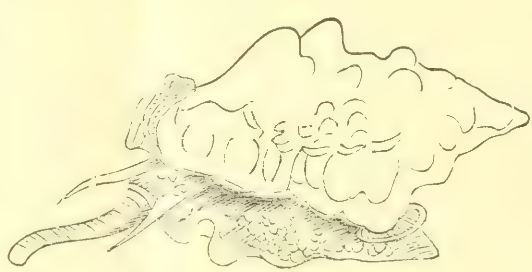
オキニシ、R. bufonia, Gmelin.

（海產第十四版、第九十七圖）

產地、土佐、薩摩、屋久島、喜界島等、（紅海、フィリッピン、セイケレス、ブールボン、ポーモッス等にも產す、）

長、二寸五分、

形狀、殼質重厚にして、腹背の方向に扁たく螺肋及結節大きく、肋間更に小螺肋あり、兩側の縱脹脉上に後溝の痕を殘し、殼口小にして、外唇の內緣に齒を有し、內唇に横襞ありて其前後にあるものは稍大きく、中央にあ



オキニシ（トライオンより）

るものは細少なり」

彩色、帶白色にして、汚點を雜へ、兩唇及口內は帶黃色を呈し、齒及大なる皺は白色なり」

變種、**クチムラサキオキニシ** 新稱

R. bufonia, var. venustula, Reeve.

（海產第十四版、第九十八圖）

產地、土佐柏島、

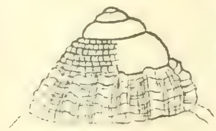
長、一寸四五分、

形狀、殼形前種と異なることなく、稍小形にして殼口圓形なり」

彩色、兩唇及口內は暗紫色にして、內部は淡色なり」

其他本種と異なることなし」

と美麗なる布目狀の彫刻を有し、之に次で稍不規則なる縫目狀の部あり、微細なる結節を見はし之に次で漸く尖れる肩部の結節を發達し、体層にありては、其下に更に一列の小結節を有し、後溝の外端に一ヶ及外唇外なる最後の縱脹脈上に二ヶの刺狀結節あり殻口は紡錘形をなし、內唇凹み、外唇の內縁は低齒狀をなし、前溝は短くして廣く開き、其附近の外唇は少しく外方に擴張して螺肋を見はせり」


ミヤコボラの殻頂(原圖)

彩色、白色にして赤褐色の雲を有し學名は白縱脹脈の義なれば縱脹脈は白色なるべき筈なれども、多くは淡褐色を彩り、殻口は紅色或は紫色を帶ぶ」

余は本種を米國ピルスブリー氏に送りて其鑑定を請ひしに、同氏は之をアルビバリコサと決定せられたり、而して該標品が日八譜のミヤコボラたることは疑ひなきが如し、更に之を東京帝室博物館より寄贈せられたるミヤコボラ(R. subgranosa, Sowb.)に比較するに正に同一物なるを證せり、而してアルビバリコサとサブグラノサとは非常に相類似したる種なれば余は頗る其判決に躊躇したりしも、遂に暫らくピ氏に從ひ、ミヤコボラをアルビバリコサとして記載し、サブグラノサは之を備考に讓りてトライオンの書中より譯出することゝなしぬ」

ナルトボラ亞屬、Lampas, Schum.

ナルトボラ、R. lampas, Linn.

(海産第十四版、第九十六圖)

産地、阿波、相摸、薩摩、琉球等、(紅海、印度洋、フイリッピン、モーリチウス等にも産す)

長、九寸、

形狀、殻は大きく、螺塔尖り、縱橫の肋曖昧にして、結節大きく、体層には數螺列を見る、殻口は卵形にして兩唇は擴張し、滑層あり、前後の溝深く、外唇の內縁と內唇の上下部に齒を有せるものと曖昧なるものとあり

吻非常に發達し、他種にありては延長することなし、蓋は卵圓角質にして半圓形をなし、側核を有す、

本屬の諸種は暖海に產し、殊に熱帶に多く、翼狀縱脹脈を有する摸式群中の諸種は深海に住し、結節多きナルトボラ亞屬の諸種は前者よりも淺き所に產し、好んで珊瑚礁及岩上に住す、以前本屬中の一群たりしユープリエラ亞屬は、齒舌の硏究によりて今や骨貝科中の一亞屬たるに至れり、

本屬の名稱は Bursa, Gyrinium, Bufo, Rana. 等先用の異名あれども、幾分曖昧の點もありて、未だ一般に普及せざるを以て余は本名を用ゆることゝなしたり」

亞屬分類綱要

ナルトボラ亞屬、Lampas, Schum. 殼は小塔狀をなし螺層には結節あり、殼口は後溝を有し、前溝は極めて短かくして、反曲せり」

アスパ亞屬、Aspa, H. & A. Ad. 殼は卵圓形にして、脹れ、平滑なり、螺塔は極めて短かく、螺層は肩角に結節を有し、殼口は後溝を有す、未だ本邦產あるを知らず」

マツカハガヒ亞屬、Argobuccinum, Klein. 螺塔高く、前溝短かく、後溝を欠ぐ」

摸式ミヤコボラ、Typical.

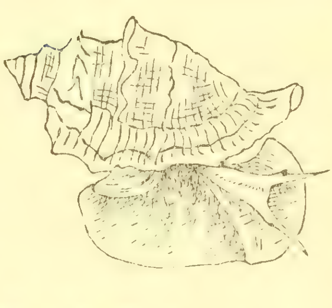
ミヤコボラ、R. albivaricosa, Reeve.

（海產第十四版、第九十五圖）

產地、淡路、阿波、伊豫、薩摩、（印度、ヂヤヴア、北西オーストラリアにも產す）

長、三寸、

形狀、殼は腹背の方向に扁平なる紡錘形にして、各層兩側に縱脹脈を有し、不規則にして曖昧なる縱脈と、大小の螺肋とを有し、頂に三層ばかりの平滑なる胎殼を戴き、其界に縱脹脈なく、次の一層餘は縱脹脈



ミヤコボラ（トライオンより）

かに本種の幼貝なり、」

イボボラ屬、Distorsio, Bolten.

殼口は開脣狀をなし、其狀は鶉貝科中のトキハガヒの殼口を想起せしむ」

チヂミボラ 六介 D. anus, Linn.

（海產、第十三版、第九十二圖及同a圖）

產地、大隅大島及琉球等、（紅海、印度洋、フイリツピン、ソサイチー諸島にも產す）

長、二寸三分、

形狀、殼形頗る奇異にして有毛の薄皮を被り、螺塔高く、体層短く、螺層は歪みて奇形を呈し、縱横の肋相交りて結節を起し肩部殊に甚しく、殼口は狹窄して不規則なる形をなし、前後の溝を合せて見るときは殆んどイ字形をなし、滑層は四方に擴がりて、螺層上及内唇上殊に甚しく、凸凹ありて顆粒多き不規則の楯形薄板に發達し、縱脹脈毎に之を伴ふを以て頂上より標品を見下す時は螺塔は三角形の薄板内に閉ぢらるゝが如き觀を呈す、水管溝はく字形に反折して其緣に齒あり、」

彩色、白地に赤褐色の帶を繞らし表面の結節は大抵白く、殼口の滑層は白色にして肉褐色を彩り口內、齒及其結節は白色なり」

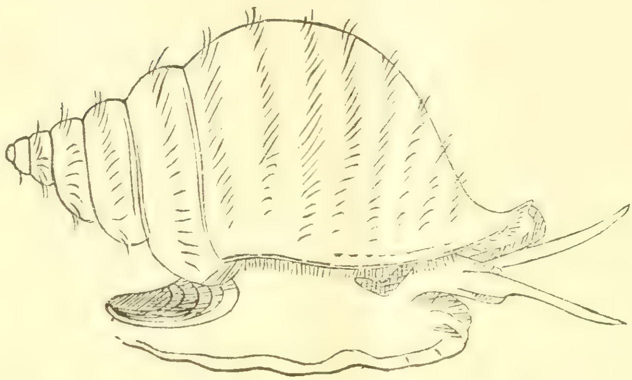
チヂミボラの動物之圖（トライオンより）



ミヤコボラ屬、Ranella, Lam.

動物の觸角はホラガヒ屬に於けるよりも幾分か相接近し、頭部はホラガヒ屬及ナガニシ屬よりも狹長にして、或種の眼は殆んど觸角の基底にあるも、大抵は觸角の外側の中央にあり、水管は短くして上方に向ひ、足はホラガヒ、ホネガヒ、ナガニシよりも大きく、前後共に著しく擴がり、外套はホネガヒ屬の或種に於けるが如く緣飾狀の突起を有することなし、本屬中の或種にありて

形狀、殼は紡錘形にして縫合深く、螺塔高く、螺層脹れ一二の鋭き縱脹脈を有し、螺肋大きく、其間に小螺肋

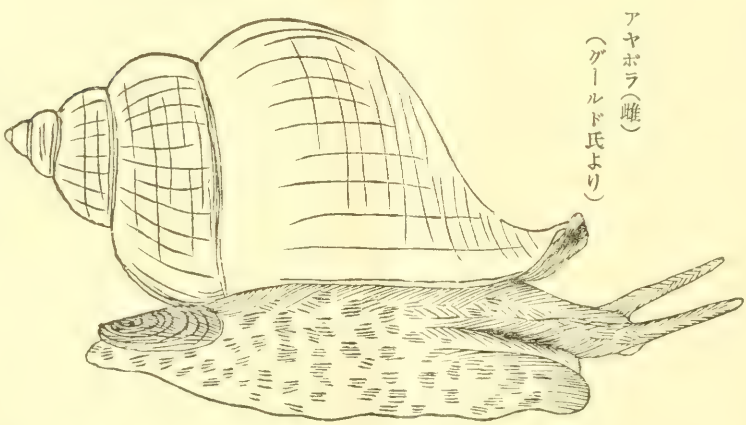


アヤボラ(雄)(グールド氏より)

を繞らし、縱肋は曖昧にして大きく、相交りて低く圓き結節を見はし、全面布目乃至格子狀を呈す表皮は細密なる縱線をなし恰も綾を織りたるが如く、大小の螺肋上に大小の剛毛總を着け、初の數層は剝脫せるを常とす」

グールド氏は殼の形狀と彩色とによりて本種の雌雄を區別すべしとなし、此に掲げし如き圖を公にせられたり、「

殼口は半月形にして外唇は下方に於て稍反曲するのみな



アヤボラ(雌)(グールド氏より)

るを以て餘り厚からず、內唇は殼軸上に反曲し、滑層を被り、後部に大なる一低齒を有し、螺肋を再現し滑層の薄きものにありて殊に著し」

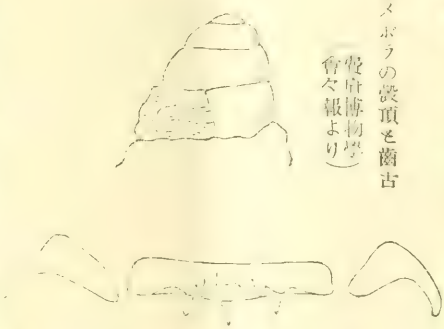
彩色、表皮は汚褐色なるも、殼面は帶白色にして、口內は純白なり」

レッドフィールド氏は本種の內唇の上部に隆起なきものを T. oregonensis, Redfield, と名けて區別せしも、之れ明

產地、小笠原、（フィリッピン、モーリチアス、ヴイチ諸島にも）

長、五分內外、

形狀、殼質堅固、長紡錘形にして、螺塔高く、殼頂尖り、螺層は圓くして脹れ、肩角なく彫刻は前種よりも細かく、或は縱肋明かにして螺脈曖昧なるあり、或は縱肋曖昧にして、螺脈判然たるものあるも、何れも布目狀の觀を呈し、縫合極めて淺く殼口は楕圓形にして水管溝は極めて短く、外唇厚く、其內緣は齒狀を呈し、外方は大なる縱脹脈に强められ、往々對側に他の縱脹脈を有することあり、內唇は少しく反曲して殼軸を覆ひ、滑層を有せり、」



コメボラの殼頂と齒舌
（東京博物學會々報より）

彩色、白色乃至淡黃褐色にして、往々曖昧にして點々相距りたる栗色點の三四列を繞らすことあり、

本種は前種と共に**マクロトリトン**屬に屬すべきものとす、」

アヤボラ亞屬、Priene. H. & A. Adams.

此小群は比較的大形の貝を含み、殼質薄く、布目狀の彫刻を有し、白色にして、白帶或は色點なく、大低多少表皮を被り、蓋は先端に頂點を有し、分布餘り廣からず、南北亞米利加洲の西岸に產し、我日本にも一種を產す、其縱脹脈の稀なること、殼の外形とは梭尾螺科より長辛科に渡るの橋梁たるを示し、又遙かにナルトボラ屬のアルグス群と連絡あるものゝ如し」

アヤボラ、T. cancellatus. Lam.

（海產第十三版第九十一圖）

產地、北海道及陸前、

長、四寸內外、

或は短線を繞せり」

ブラクチエツス、T. bracteatus, Hinds.

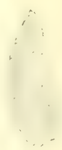
（トライオンより）

產地、フィリツピン、マーケサス、布哇、紅海、

長、〇・四乃至〇・六吋、

帶黃白色にして、結節は暗黑色を彩り、往々点の螺列をなす、

老殼は間々彩色を欠ぎ、結節と螺肋とは消磨し、只縱肋を殘せり、此の如き標品をリーヴ氏は T. laterariosus, Reeve. として記載し、多少消磨せし白色の標品を T. bacillum, Reeve.として記載したり、



ブラクテエツス（トライオンより）

變種、ゴマフヌカボラ 新稱

T. bracteatus, var. longus, Pils. & Van.

（海產、第十四版、第九十三圖及全a圖）

產地、伊豆八丈島及小笠原島、

長、四分、

形狀、殼は本種よりも細長にして螺塔高く、彫刻は本種に同じく、肋はコメボラよりも粗なり、大なる縱肋と、密にして美麗なる螺脈と相交りて、顆粒狀を呈し、外唇厚く、內緣は齒狀をなし、一條の縱脹脈は其外緣を強め往々其對側に他の縱脹脈を有し、殼口長く、水管溝短く、本屬中の最小品なるべし、

彩色、灰白色にして、同樣の結節は黑褐色を彩りて点の帶をなし、底及縫合下にも同樣の帶あり、但し縫合下の点は互の間、距り大きく、体層の他の諸層には大低二帶を認む、

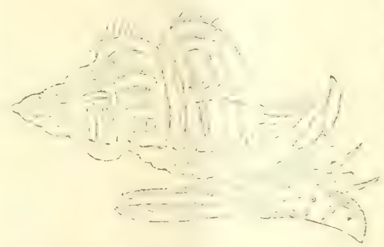
本種は余の新發見にかゝる所にして、次のコメボラと共にドール氏の新設せられしマクロトリトン屬（Maculotriton, Dall.）に屬すべきものとす、

コメボラ（米法螺）新稱 T. digitalis, Reeve.

（海產、第十四版、第九十四圖及全a圖）

長、一寸八分內外、

形狀、殼形ナホヅサガヒに似て小さく、縱橫の肋及縱橫の肋間脈あり、表面に凹凸多く、背上の一結節は殊に大にして、畸背の觀を呈し其周圍は皺みて綱紐狀を呈し、



シホボラ(ドーナイヤンより)

縱脹脈に滑層を殘し、殼口は短紡錘形をなし、外唇稍直く、膨み少く、內唇の凹み甚しく、後溝を有し、兩唇の滑層厚く、外唇內には螺肋ありて其內緣は齒狀を呈し、水管溝は開きて強く反曲し、殼頂は先端に核を有せり」

彩色、淡褐乃至暗褐色にして橙褐色を交へ、肋及結節は淡色或は帶白色を呈し、時として白帶を有せり、內外唇は白色或は帶黃色にして、殼口內は帶赤乃至紫黑色にして、往々中央に白帶を見はせり」

セコバイ亞屬、Epidromus, Klein, ＝(Cabraria, Schum.

ヒモカケセコバイ 學名 T. clandestinus, Reeve.

海產第十三版、第九十圖

產地、肥前及喜界島、印度洋、ボーモッス、西印度、(ヴエド岬諸島にも)

長、一寸七分內外、

形狀、殼形細長にして、螺塔非常に高く、体層比較的に少さく、螺層膨れ、十層內外を數へ、全表面に縱橫の脈ありて、縫目狀を呈し、縱脹脈は大きくして闊く、其上の螺脈は他部と異なることなきも、縱脈非常に密接するにより、美麗なる布目狀の觀を呈せり、殼口は斜めなる短紡錘形にして、內唇は擴張反曲して殼軸を覆ひ、薄き滑層を有し、外唇の內部には螺肋ありて其端は細齒狀を呈せり」

彩色、淡褐色の地に栗色の雲を有し、二三列の栗色點

しては両ながら其肉味俱に最厚く層は眞の甲香となすべきものなれば也

本邦海産貝類圖說　（第八）

シホボラ亞屬、Gutturnium, Klein.

オナガガヒ　介志　*T. caudatus*, Gmel.

（海產第十三版、第八十八圖）

產地、鹿兒嶋、（支那海にも產す）

長、二寸

形狀、稍サツマツブリに似て、二條の縱脹脈を有し、有毛の表皮を被り、形体は殆んど球形をなし、螺塔低く、体層脹れ水管溝は長くして開き、少しく捩れ殆んど直く、体層には十條內外の曖昧なる縱肋と、六條ばかりの圓き螺肋とありて、肩角上の其交叉点は稍鋭き結節をなし、該螺肋は美麗にして密なる縱脈に横ぎられ、撚糸狀の觀を呈し、諸上層の螺肋は大抵二條位なり、螺肋間にも亦美麗にして密なる螺脈ありて、全体の彫刻は布目狀をなし、水管溝上にも亦斜脈あり、縫合は深き溝をなし、殼口は斜めなる短紡錘形にして、內唇は擴張反曲し、外唇の內方には强き螺肋を有して、唇緣は齒狀を呈し、內唇の上部內方にも亦下層の螺肋を再現せり」

彩色、白色にして縱脹脈及縱肋は褐色を呈し、淡黃褐色の雲あり、両唇は美麗なる柑色にして、口內は淡柑色なり」

介志の「鼠」は本種に酷似するも少しく大形にして、同書の「尾長介」は少し小形なるも他に比較す可きものなく學名も殆んど同意なるを以て暫らく「尾長介」に當てゝ後考をまつ」

シホボラ、*T. tuberosus*, Lam.

（海產、第十三版、第八十九圖及仝a圖）

產地、琉球、大隅大島等（西印度、印度太平洋、モーリチウス、ポリネシア等にも產す、）

して眞ならんにはヘナタリは啓蒙に云ふ所のものとは全く別物なり但合類節用集には

海螺(ヘナタリ)、甲螺(同)。又海螺(バイ)、流螺(同)、甲螺(同)。又海螺(ツブ)、甲螺(同)、甲香(ツブノヘタ)。

と三所に出し卽同文字をヘナタリ、バイ、ツブと三樣に訓ませたり此說に從へばヘナタリは今云ナガニシにも又餘の貝にもあらで今云バイなるに似たり更に進みて之を徒然草に徵するに曰

甲香はほら貝のやうなるがちひさくて口のほどのほそながにして出たる貝のふたなり武藏國金澤といふうらにありしを所の者はへなたりと申侍るとぞいひし

扨此「法螺貝のやうなるが小さくて」といへるまではバイかとも聞ゆれど「口の程の細長にして出たる貝」とあるにて見ればまさしくナガニシなるとしるし但バイの蓋も等しく甲香として用ひざるにはあらざるもこは本草に所謂小甲香の類にて甲香とは別なり字には王螺黃螺油螺などかさ玩介家は往々蛽の字を作りて之に宛てたり

或は云つれ〳〵草に此一話を物して紙の費えを惜まざりしはヘナタリと云ふ名のいと異やうなるを覺えし故なるべし是は陰垂(ヘナタリ)の義也と小云此名目は此書の外絶て古書に見えず恐くは東國野人の口に出でゝ正しき名にあらざるべし扨或說の如きは倭名鈔莖垂類の條下の某注に「垂者(ヘ)陰囊也」とあり此意にやされども二者の彷彿し難きはいぶかしと云ふべしされば大槻氏の言海には別に新按を立て「隔(ヘテリ)ノ意ニテ隔(ヘタ)リト通スルカ」とあり小按するに流郎水管の長く斗出して隔りたる義か但貝名には前說の如きあからさまに云はんもいかゞと打傾ぶかるゝも多かれば動もすれば云ひ甲斐なき餘の事に解き去らんと企てたるもあれど斯くてはその眞相を發揮するに難かれば如何なるとにまれありのまゝに云はんこそ斯道の本意なるべけれ甚麽の憚るとか是あらむ。とまれかくまれヘナタリはナガニシ或は次に云はんとするアカニシの名なるやしる

又大和本草附錄に

カウ貝、其肉可レ食、ニシト相似テ長シ

とありて圖を掲げたるが其圖は拙なけれども所謂ナガニシなるを察するに足る。又カウカヒは筑前肥前にてナガニシを云へるよし啓蒙に見えたり小云大和本草に云へるニシはアカニシなると同書の圖說にて明なり今按するにカウ貝は香螺の義なるべし。

扨此流螺香螺を本草綱目に徵するに卽海蠃の條下に

(頌曰)海螺卽流螺厴ヲ曰二甲香一云々南州異物志云甲香大ナル者如二甌面一前一邊直ニ攙ク長サ數寸、圍ミ殼ニ岨峿有レ刺、其厴雜ヘテ衆香ニ燒レ之、益芳シ、獨燒ハ則臭シ

とあり以て流螺の何者たるを知るに難からず但し此名は今に始りたるにあらで已に本草和名に出でゝ之を阿岐と訓みたれば久しき以前より此名ありしを知るべし又此一名香螺の名は同じ條下に

時珍曰香螺ハ厴可レ雜二甲香一

とあるに依れる者也されば又次の如き變遷あり

第三期　大辛螺は後專流螺と稱し和名ナガニシと呼べり

(附說ヘナタリ)香螺は叙上の如くなるに本草啓蒙には之をナガニシとなさずしてヘナタリなりとせり其說下の如し

徒然草ニ甲香ハ武藏國金澤ノ浦ノヘナダリノフタナルヿヲ云ヘリ今ハヘナタリト云或ハヘナタレト云是南州異物志ノ甲香時珍ノ說ノ香螺ナリ廣東新語ニ甲香蠃ニ作ル形蓼螺(ナガニシ)(小云蓼螺(イハニシ)と混ずべからず)ニ似テ五六寸小ナル者ハ二三寸頭ニ禿疣多シ赤黑色又淡白色ナルモアリ厴ノ形馬眼ノ如クニシテ厚ク褐色ニシテ紋理アリ

其記する所は仍今云ナガニシ又ヨナキガヒに彷彿するのみならず頭(螺旋部)に禿疣多きものは之を外にして求むべからず又今俗のヘナタリと云へるものは海蜷の大形種を云へるにや群分品彙等に見かゝる圖を出だせり此圖に

國書介名考（承前）

云々にし°は°まぐりはさしくいきたるをくひ侍しば

(三)斐入記　きやうのせんにし°云々

(四)祇園會御成記　献立云々にし°

(五)大草相傳之聞書　にし°のつぼいりの事。下にひばを鋪其上にもかい敷を敷其上ににし°をもる也。高さ三寸たるべし。其上にふたをかひ候。にし°のつくりやうはわきのかつうを取てまがりを切はなし竪にうすくつくりてよし。にし°の料理はけしかつををよくすりて能酒にてすりたてゝ能こしたでをすこしくはへにし°をよきかげんにあはせ。もる時はすこしこせうのこをひねりかけてかきあへもる也

(戊)[虫辛]をニシと讀みたる例は

(一)四條流庖丁書　[虫辛]ニシを折ニ積ヘキ事　[虫辛]ノ蓋ノ方ヲ下ニナシテツムベシ云々。

此[虫辛]の字は辛螺の二合字にて又鮮に作れり共に和字なり以上叙列する所の例を通覽するに常陸風土記以下の辛螺及にし°は或は國郡の名產を記し或は大會饗宴の膳羞に供する料なれば介品或は啓蒙に云へる如きニガニシ卽小辛螺の類にあらずして必や珍味のものならざるべからずされば古書に見えたる辛螺及にし°は本鈔に云大辛螺なると明けし

(括要)大辛螺の變遷を察するに略左の如し

第一期　上古は大辛螺は流螺とも書きアキと稱し(本鈔及ビ倭食經)又辛螺(常陸風土記等)[illegible]或は[illegible]と書きニシとも云へり(新撰字鏡)

第二期　中古に至り專辛螺と書きニシとのみ云へり夫より本草の學漸く明なるに及びて辛螺の稱漸く廢たれ專流螺と稱し和名ナガニシ等を之に配し大に舊來の面目を一新せり卽怡顏齋介品に云。

流螺卽香螺○達按スルニ流螺俗ニ長ニシ又夜啼貝ト云フ、凡ソ螺ノ先キ長キヲ通ノ流螺ト云フ禮記ニ敦牟巵匜ハ有流ト流ハ片口カタクチノ鼻ツマミ也香螺ノ名ハ福志ニ出ヅ

介類雜誌 第八號
明治四十年八月二十日發行

國書介名考（承前）

永沼小一郎

「第二目、大辛螺小辛螺」辛螺を大小に分ちたると他書に見えず但辛螺又にしの名目は古來の國書に散見すると罕ならざるも近古の本草書には見えず、寧波府志に辣螺とあるは其後身か別に新撰字鏡に蜷及蠃を爾志と訓めり今是等の例を掲ぐるに唯り時代に因らず用字の異同に依り之を各條に分ちて彙列すると次の如し

（甲）辛螺とある例は

（一）常陸風土記 凡一三七年 行方郡板來村其海、辛螺多生

（二）賦役令 一三七八年 若輪雑物者辛螺頭打六斗 小云頭打は腸を去りたる名也

（三）台記別記 一八〇二年 康治元年十一月大嘗會丹波國辛螺白貝 小云未だ丹後を分たず

辛螺の訓點今本にはニシとあれどこは後世の業なると上にも云へる如し惟に風土記まではアキと訓めりしならん

（乙）辛螺及にしとある例

（一）文錄四年御成記 二ノ御膳辛螺、御相伴二ノ膳辛螺」諸大夫二ノ膳にし

（丙）辛螺をニシと點したるは

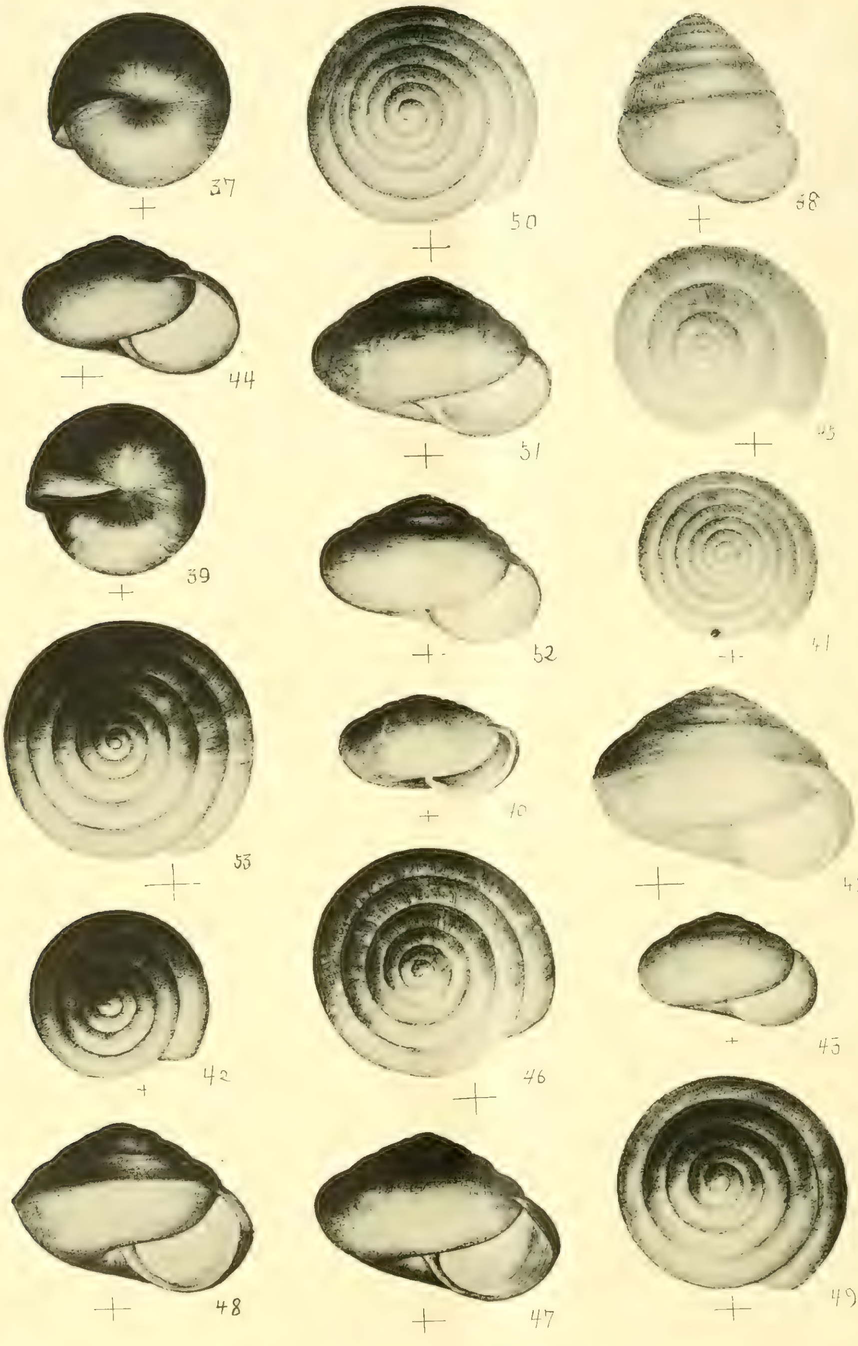
（一）塵添壒嚢鈔 辛螺（ニシ）

（丁）にしとある例は

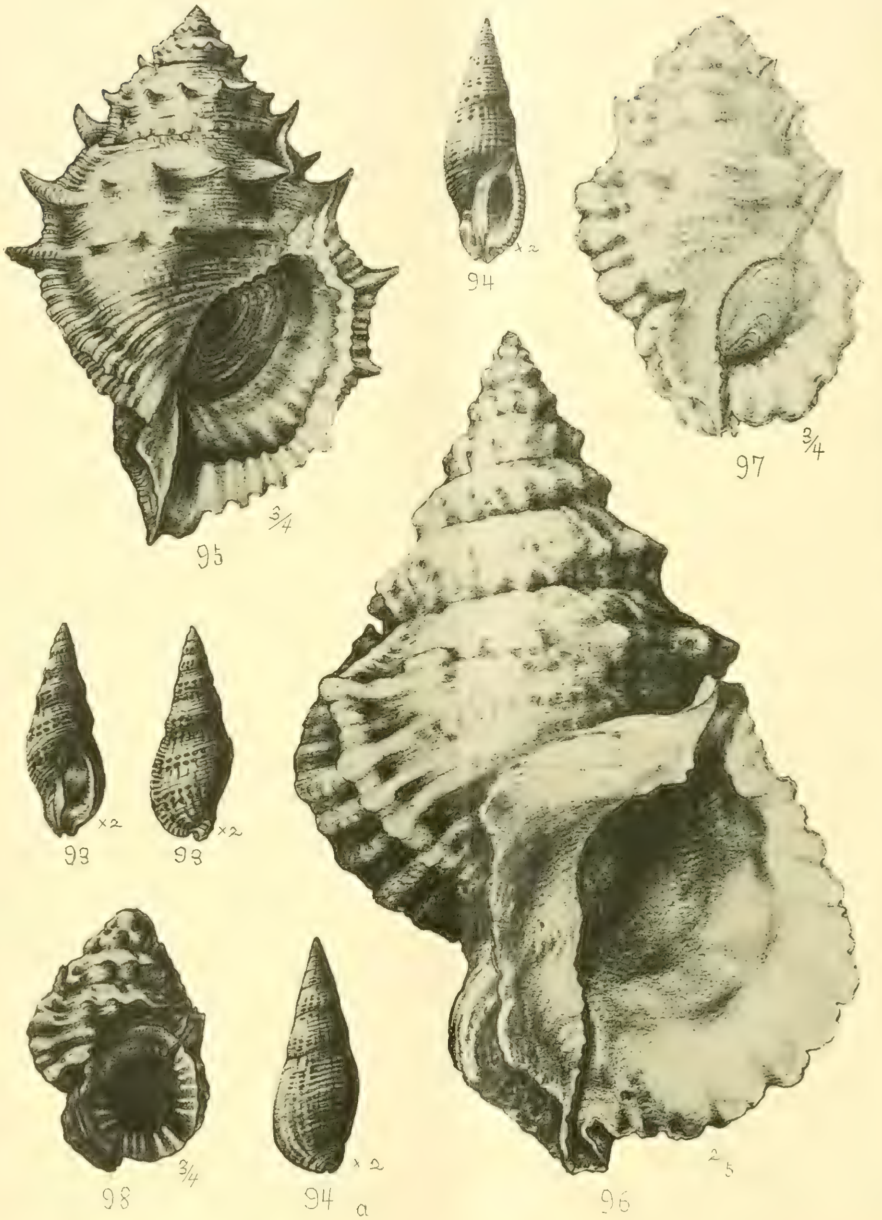
（一）散木集 一八四三年 あるあまのくちわしとてものゝくはれぬにゝしといふものこそ思ひ出られといひけるを聞てもとめてくはせけるに、からみといへる所はからしとてくはさりければよめる

「よしとおもふ心のねかふにしなればからみ成ともゐらざらめや

（二）古今著聞集二十 宮内卿なりみ川卿のもとに盃酌の事有けるにすひ川の邊ににしをおほく取置たりけるに



37, 38 Hirasiella clara, Pils.
39, 40, 41 Pristiloma japonica, P. & H.
42, 43 Microcystina sinapidium, Reinh.
46, 47 Microcystina hakonensis, P. & H.
48, 49 " ceratodes, Gude.
50, 51, 52 " vaga, Pils. & Hir.



93 } Maculotriton bracteatus, var.
93a } longus, Pils. & Van.
94 }
94a } „ digitalis, Reeve.
95. Ranella albivaricosa, Reeve.
96. Ranella lampas, Linn.
97. „ bufonia, Gmel.
98. „ „ var. venustula, Reeve.



88. Triton caudatus, Gmel.
89 }
89a } ,, tuberosus, Lam.
90. ,, obscurus, Reeve.
91. Priene cancellatus, Lam.
92 }
92a } Distorsio anus, Linn.

加藤延年著

（予告）袖珍美本 **貝ひろひ** 全一冊（近刻）

貝ひろひ！美しきこの止め難さかな、あゝ波打つ際に踏みけん白砂の跡！未知の色を湛に千古の情を包む海其の大なる懐より吐きし秘密の影、趣味の豊かなる可憐の貝は、學科的の腦を以て而かも詩的情趣に富める著者にこゝろはれ、茲に無限の意味を含み面白く、津々たる筆致明確なる圖解を引き須つて、最も平易に而かも最も面白く、分類、屬名、種名、其他貝類に關する一般の知識を網羅し、兼ねて悠々たる趣味を傳へ來る、由來我邦たる北は樺太より南は臺灣に至り、各地帶の産一として備はらざるなく、實に世界の稀異たり、若夫れ珍種異類を踏み付けて顧ざる海水浴客の如き、一たび本書一讀せば、全國到所の避暑愉快更にて其愉快を倍するものあらん、幸に愛讀を希ふ、

●新案 **貝合せ**（說明附き） 近刻

優美なる「貝おほひ」の遊びが公卿諸侯の姫君たちに喜ばれしは昔、今や巧に貝類の科名種名等を案配して科學的符合せが作られた、啻に雅麗なる彩色圖もある當に娯樂として面白いのみならず知らず〳〵の間に、博物上の知識を興味をもて得ることを大なる[illegible]

●**貝類畫はがき** 四枚一組 郵稅共金拾五錢

貝類數種を選びて上等の紙質を用ゐ實物大の寫眞版となし學名、和名、產地等も附記しあり優且にして高尚なる嗜好に適す

京都市烏丸通下長者町上ル

發行所 **平瀨介舘**

◉廣告

昆蟲世界 毎月一回（十五日）發行

昆蟲世界生れて以來茲に十年號を重ぬる百十五昆蟲に關する專門雜誌にして毎號正確鮮明なる多數の圖を插入し害蟲驅除の指導者となり昆蟲學研究者の機關となり當所の發展と共に益々其改善を加ふ昆蟲を學ばんとするものは見よ農業を營まんとするものは讀め本誌の價値如何世既に定論あり茲に喋々を要せず

定價 一部金拾錢 一ヶ年十二部前金壹圓八錢（郵稅不要）

發行所 岐阜縣岐阜市公園內 **名和昆蟲研究所**

〇廣告 平瀨介舘雜誌部

一 介類雜誌ハ毎月一回二十日發兌可致候

一 介類雜誌代幷ニ廣告料ハ前金ヲ以テ御拂込被下度候（郵券代用ハ割增）

一 郵便爲替ハ京都中立賣郵便局宛ニ被成下度候

一 本誌代金御拂込ノ節ハ別ニ領收證ヲ出サズ本誌ノ發送ヲ以テ御報告ト可致候

一 御拂込ノ前金相盡キ候節ハ本誌包紙ニ「濟」ノ文字ヲ朱印シ御送金ヲ乞フノ表章ト可致候

本誌定價

一 冊	金貳拾錢
六 冊	金壹圓貳拾錢
十二冊	金貳圓參拾錢

本誌廣告料

五號活字一行二十五字詰	金拾五錢
半頁	金參圓
一頁	金五圓

發行所 京都市[illegible]烏丸通下長者町上ル北側西町十四番戶 **平瀨介舘**（電話九百七十四番）

明治四十年八月廿日印刷
全年全月廿三日發行

不許複製

發行者 平瀨與一郎
編輯者 平瀨信太郎
印刷者 川勝靜三郎
印刷所 合資商報會社

大賣捌所

京都 東枝律書房
東京 東京堂
全 東海堂
全 北隆館書店
大阪 大華堂

明治四十年八月二十日發行　（禁轉載）

介類雜誌

第一卷　第八號

目次

明治四十年九月二十日發行
明治四十年一月十九日第三種郵便物認可（毎月一回二十日發行）

THE CONCHOLOGICAL MAGAZINE

A MONTHLY

DEVOTED TO THE STUDY OF JAPANESE SHELLS.

PUBLISHED BY Y. HIRASE.

VOL. I. SEPTEMBER 1907. No. 9.

CONTENTS.

Notice: The subscription price for foreign conutries is $ 1. 50(3 yen)per annum. All letters and communications should be addressed to Y. HIRASE, Shimochōja machi, Karasumaru, Kyoto, Japan.

題に出會すと、平常から注意して居ないと一寸と困ることがございます。

この赤貝は、日本の海には大抵な處には住んで居りますが、東海の沿岸には最も多く住み、中々繁殖力も强うございます。夫れから其の住んで居りますところは、淡水の澤山に混交らない淺い海で、泥の中に潜つて棲息して居るものでございます。

この貝は動物學上では軟体動物の斧足類に屬しまして、大きいのは三寸餘に達するものもございますが、大抵は二寸から二寸四五分のものが多いやうで、介殼の丁度心臟を膨らました如き形狀をして、外面は淡褐色で少し黑色を帶びて内面は白くなつて居ります。又介殼の表には、彼の聯隊旗の筋のやうに規則正しく、本は細く末は太き筋が直線に放射して、宛然畝を盛つたやうに成つて居ますが、その凸凹になつてゐる高低の筋は、三十五本内外あるのが普通でございます。

また貝の合さつてゐる齒は、細かく一直線を爲して居りますれど、其兩端にありますものは、大きくなつて中央にあるものは小さいです、そして彼れの歩きますには、介殼の間を開き舌のやうなものを出して、之れで這ひずつて廻るのでございます。で、これを俗に貝の舌と申しますが、舌では無くて、夫れが彼れの足で其の形狀の似てゐるので舌と申して居りますのは、飛んだ間違ひでございます。

この種類も多くあつて、夏季に卵を産み段々と繁殖します。その肉は喰べて美味く酒の肴などには最も珍重される、只だ肉が食用になるばかりで無く。殼は燒て灰にして肥料に使はれますから、少しも棄るところはありません。

（讀賣新聞）

書見などをする。午後四時半滊船入港。非常の荒であつたとの事、乘客から聞き及んだ。此船明朝、中の島、知々井へ寄港するといふ事であるから、同船に便乘する考。今夜切符を求めた

雜報

酸漿の話（承前）

東京で酸漿の問屋は日本橋半永町の相澤半兵衛神田新石町の西村商店の二軒で丹波酸漿は神奈川在又は水戸地方で產し千成酸漿は千住近邊の請地と稱する土地で出來る海產の海酸漿や薙刀酸漿は昆布や海苔と同樣海草の一種と思つて居る人も有るが之れは蓼螺と稱する貝類の卵で海酸漿は長蓼螺（夜なき貝）薙刀酸漿は赤蓼螺、泡酸漿は螺、德利酸漿は法螺、軍配酸漿はアカンベ、饅頭酸漿はシウル貝、南京酸漿は蓋無貝の子なのであつて五尋以上の深い海底の岩やシビに產みつける而し薙刀酸漿や海酸漿などは近來親貝を飼つて置いて產出せる事をする酸漿の相場は客の人柄と場所とに依つて隨分相違がある樣であるが普通大海酸漿は卸直一個六厘で小賣壹錢五厘中海酸漿は卸參厘小賣五厘薙刀酸漿は卸一厘にて五厘賣軍配酸漿は一握にて壹錢位丹波酸漿は壹厘貳毛の卸にて貳厘五毛賣千成は一升拾貳錢の卸にて壹錢にて二、十個位が相場で本年は天候が悪いので丹波酸漿や千成酸漿は出來が充分で無いので從つて相場も少し高いと云ふ護謨酸漿は杉山齋藤両名の專賣品で保が宜つて價が安いので盛んに流行して居るが音が少し荒過て聊か下品の傾きが有る樣である　（東京日々新聞）

赤貝の話

あらひにしてお刺身の傍などに附け、喰べてこちくして淡泊とうまい味を有つてゐます赤貝は、皆さん方も能く御存じでゐらつしやるでせうね。そうして此の貝が、何處に最も多く居るものでありませうか。斯ういふ問

ナと少數のカリチユーム、ノヅリフエラム等を得た。大蝸牛は甚だ僅少で、二人でやつと三ヶの生殼と、二ヶの死殼を得た丈けであつた。クロリチスは死殼丈は發見したけれども、生殼又は完全なものは、得る事が出來なかつた。全然不結果に了つた譯である。最早此上は小嶓氏の媒介によつて、買ひ入れるより外道がない。今夕は稍多數の介を購入した。で函の注文をする。此日は他に一名の婦人をして、異つた方面を探索させた。

九月八日、晴、曇、午後四時半降雨。中大の分等、頗る多數出來たので、携帶、保管、送付等何れにも、不便であるから、本日は山行きは休むことにして、抜肉、清洗、紙包などをする。朝のうち河に行つて、淡水介少々採集し、之れも亦抜肉をする。標本の容積が大きくなつたから、昨日のと同形のものを注文する。介買入れにつき種々奔走し、又採集者へ謝禮をする。終日多忙であつた。

九月九日、降雨。椎茸發生期になつて、人夫が數多入り込んで、他人の入るを許さない例であるから、長居しても無駄であらう、それよりか次へ出發した方が宜らうと考へたので、今朝入港の滊船で西鄕に歸へる事にして、種々と荷物を整理し、八時に乘船した。久見、北方、那久、都萬などへ寄港し、午後一時半に西鄕に着いた。宿に着いたのは二時で、直に晝食をする。乘船中は雨で困難したけれども、波浪は左まで荒くなかつた。暫くして色々の品を買ひ求め、小包の荷造をし、夕方に發送した。所が目方が超過したので、二つに分けなければ送る事が出來なかつた。夜は送狀を認む。明後早天に島前に便船があるとの事である。

九月十日、暴風雨。夜來風が吹きすさんでをつたが、朝になつても一向やまない。其れに朝からは雨さへ加はつたので。近傍の探檢も出來ず。其上別に行くべき所もないので、止むを得ず休業する。所々へ手紙をだし、又

取りに行つた。着更其他の雜品を荷負つて、午前九時に西鄕を出發した。今朝は煑介の爲に鍋を求めて携帶した。道中は無事。四里二十丁を距てた中村に着いたのは、もう二時半であつた、其れから赤沼に行つて、採集者を尋ねて、ガテセラ其他少々のものを買ひ入れた。

九月四日、晴、夕方に雨が降る。案內者と同行して、中村の奥の谷に行つた。以前の場所から見ると、ずつと奥の方に行つた。稍好結果であつて、ガテセラ、ミチンパラ。全フエルギニア。プレクトツロピス。クローヂリヤ、ジヤポニカ。ミクロシスチナ數種、ディプロムマチナ等多數を得た。尙本日はクロリチス、ヒラセイ變種の生介一ケと、エナ、レインニアナの死殼一ケを得た。右の二種に就いて、更に得たいと熱心に索めたけれど、到頭得なかつた。村の或人から陸介少々を買入れた。小なクローヂリヤ五ケを得た。

九月五日、晴。例のやうに、案內者と一緒に、東谷の方に行つた。此所は昨日の所と大分異つた所である。ガテセラ、ミチンパラ。クローヂリヤ、ジヤポニカ。全ビラブラタ。プレクトツロピス大蝸牛二個、幷に小ミクロシスチナ等、頗る多數を得た。午後五時に歸つた。今朝は少々買入れをした。

九月六日、曇、夕方少雨。今日は東谷のうちの異つた方面に行つた。が、どうも採集が面白く行かなかつたで、地を轉へて見たが、其れでも獲物がなかつた。夕方になつて、やつとG、フエルギニア數ケを得た。プレクトツロピスなどは、一つも得なかつた。ミチンパラはやゝ多くを得た。本日二人からガテセラ、ミチンパラ及ミクロシスチナ等を買ふた。午後五時半宿に歸つた。

九月七日、曇。今日は大峯山に行つた。折柄椎茸培養の時節で、人夫が入込んでをつて、自分達の入るのを禁した。東谷の方には最早行く所がないから、已むを得ず、山の中腹以上の所に登つて探した。多くのデプロムマチ

○Modiolus barbata, Linne.

Lithophaga nasuta, Phil.

○Septifer crassus, Dkr.

Aviculidae.

○Meleagrina Martensii, Dkr.

Monomyaria

Spondylidae.

Spondylus sinensis, Sowb.

Limidae

○Lima goliath, Sowb.

Pectinidae.

○Pecten laetus, Gmel.

△　〃　puncticulatus, Dkr.

Vola laqueatus, Sowb.

△Amusium japonicum, Gmel.

Anomidae.

○Anomia ephippium, Linne.

○Placunanomia macroschisma, Desh.

Ostreidae.

○Ostrea denselamellosa, Lischke.

○　〃　cucullata, Born.

〃　echinata, Quoy.

○印は帝室博物館目錄により、×印は動物學雜誌內山氏の記載により、△印は動物學雜誌德永博士の記載により、無印は余の所藏標本により蒐集一括せしものなり、是れに加ふるに動物學教室所藏の標本全部を記入するとせば、三崎產貝類目錄として、最も完全なるものを得るならん（完）

山陰地方介類採集記（承前）

介舘內　黑田生

九月三日、晴天、淸涼。時間を見計つて、爲替金を受

○ Mya arenaria, var. japonica, Jay.

Anatinidae.

○ Lyonsia sp.

Mactridae.

○ Mactra sulcataria, Desh.

Tellinidae.

○ Tellina nitidula, Dkr.

○ 〃 ostracea, Lam.

Donacinae.

○ Donax australis, Lam.

Petricolidae.

○ Venerupis monstrosa, Chemn.

○ Saxidomus purpuratus, Desh.

Veneridae.

Venus jedoensis, Lischke.

Dosinia troscheli, Lischke.

Cardiidae.

○ Cardium muticum, Reeve.

Chamidae.

○ Chama semipurpurata, Lischke.

○ 〃 retroversa, Lischke.

Astartidae

Cardita Cumingiana, Dkr.

Asiphonida.

Homomyaria.

Arcidae.

○ Arca ocellata, Reeve.

〃 obtusa, Reeve.

Heteromyaria.

Mytilidae.

Mytilus crassitesta, Lischke.

Modiola Senhausii, Reeve.

" nigerrimum, Gmel.
○ " rusticum, Gmel.
○ " Pfeifferi, Phil.
○ Cantharidus japonicus, A. Ad.
○ Calliostoma unicum, Dkr.
Monodonta labio, Linne
" sp.

Stomatellidae.

Stomatella japonica, A. Ad.

Haliotidae

Haliotis diversicolor, Reeve.
" gigantea, var. discus, Reeve.

Edriophthalma

Patellidae

Acmaeinae.

Acmaea saccharina, Linne.

Patellinae.

○ Helcioniscus pallidus, Gould.
" nigrolineatus, Reeve.
○ " toreuma, Reeve.

Opisthobranchiata

Aplysiidae.

○ Dolabella scapula, Mart.

Scaphopoda.

Dentalidae.

Dentalium octangulatum, Don.

Lamellibranchiata.

Siphonida.

Sinupalliata.

Solenidae.

○ Solen Gouldii, Conrad.

Myacidae.

の眞情の甚だ大切なものであることを今更ながら感じた。

歸京の節、同地を出發せんとする際には、多くの人々が來られて、別を惜まれ、荷造の手傳をし、其上之を荷車二臺に積んで、停車場迄送られた。一家の者が門前に出た時、數十名の方々が、見送りに來られたが、折惡しく其際雨が降りだし、其れに汽車の時間が切迫してをつた爲め、一々懇情を謝する暇がなく出發したのは、如何にも不本意千萬であつた。

寺の門前に澤田といふ一奇人がある。章魚を漁するのが營業で、朝早くから漁に行き、夕方に歸る。夕食が終ると直に寺に來て、四方山の談話をせられる。此人は壯年にして不幸に遭ひ、種々の辛酸を嘗めた經驗があつて漁夫としては物知りの方で、種々の面白い話をせられるから、小供らは此人が來られて話をせられるのを、又共に話すのを、何よりの樂しみとしてをつた。で此人によつて一家が慰藉を得た事は夥しい。此人は勿論、其家族幷に近隣の人々何れも深切であつた。其上私は右の澤田氏から、貝類の蒐集幷に調査につき、便益を得た事が少からずあつた。終に臨んで私は前述の人々に對し、深く感謝の意を表するのである。（をはり）

三崎産貝類目錄（二）

米澤　松島克生

Turbinidae

Turbo argyrostomus, Linne.

" cornutus, Gmel.

" coronatus, Gmel.

Astralium haematragus, Menke.

○ " japonicum, Dkr.

Trochidae.

Chlorostoma argyrostoma, Gmel.

イタヤガヒ　Pecten laqueatus, Sowb.
アカザラガヒ　〃 laetus, Gould.
ナデシコガヒ　〃 irregularis. Sowb.
ナミマガシハ　Anomia cytaeum, Gray.
カキ　Ostrea cucullata, Born.
イタボガキ　〃 denselamellosa, Lischke.

などであつて、Cytheria sp. は、まだ私の見たことのない種類である。多分は新種であらうと思はれる。

右の内で尤も多く產し、その期節に多額の收獲のあるのは、**ウチムラサキ**、及**イタボガキ**で、次には、**オニアサリ**、**カミソリガヒ**、及**アカニシ**などである。

四十日間も滯在したけれども、他にも種々の要務があつた爲め、採集幷に調査の爲め費した日數は甚だ少く、十分の結果を得なかつたのは、頗る殘念であつた。此地に產する貝類は、前述の外、尙澤山あることゝ思はれる。今回調査した事項は追々と誌上に揭載する積りである。

寺には住職一名と老婢一名とあるのみである。住職宮崎師は、年齢三十歳位、熱心道の爲に盡し、殊に說敎に巧で、所々から招待せらるゝことが多く、檀家の人々も皆信服してをる。私共一家のものも頗る懇切な待遇をうけた。老婢は忠實で、表裏なく克く働き、寸時も職務を忘ることなく、私共一家の爲にも甚だ深切であつた。

大村、中村、山本、田中、足利等の諸氏は、西二見の紳士であるが、是等の諸氏は、私共一同を歡迎することも頗る篤く、屢來訪せられ、又其宅に招待せられた事も少くなかつた。或は小供らの爲に舟遊をなし、網打をなし又は魚釣をなして無聊を慰められた。何れも皆眞情からでることであるから、私共一家は心から欣び、丁度故鄕にでも歸つた思ひがした。從來(これまで)海水浴にいつた所は、ここから見ると餘程便利な土地であつたけれども、滿一ヶ月を待兼ねて歸京するのが常であつたのに、今年は四十日を經過しても、歸京を急ぐものは一人もなかつた。人

ネコガヒ Sigaretus papilla, Gmel.
キヌガサガヒ Xenophora exuta, Reeve.
ハマカヅラ Thylacodes imbricatus, Dkr.
コベルトカニモリ Cerithium kobelti, Dkr.
ウミニナ Potamides multiformis, Lischke.
キサゴ Umbonium costatum, Val.
スガヒ Turbo coronatus, Gmel.
サザエ 〃 cornutus, Linne.
コシダカガンガラ Chlorostoma rusticum. Gmel.
エビスガヒの一種 Calliostoma sp.
イシダヽミ Monodonta labio, Linne.
アヲガヒ變種 Acmaea schrenckii, var. concinna, Lischke.
カミソリガヒ Solen grandis, Conr.
バカガヒ Mactra sulcataria, Desh.
オホトリガヒ Lutraria, sp.

キヌタアゲマキ Psammosolen divaricata, Lischke.
ウチムラサキ Saxidomus purpuratus, Sowb.
オニアサリ Venus jedoensis, Lischke.
サイセリア Cytheria sp.
マツヤマワスレ Macrocallista pacifica, Dillw.
カヾミガヒ Dosinia troscheli, Lischke.
スダレガヒ Tapes euglyptus, Phil.
スダレガヒの一種 〃 greeffei, Dkr.
アサリ 〃 philippinarum, Ads. & Rve.
トリガヒ Liocardium muticum, Reeve.
キクザル Chama semipurpurata, Lischke.
アカヾヒ Arca inflata, Reeve.
モンズリ Glycimeris vestitus, Dkr.
ヒバリガヒ Modiolus barbata, Linne.
タヒラギ Pinna japonica, Hanl.
チリボタン Spondylus cruenta, Lischke.

なければならないのは、何んとなく氣味の惡いことで、其上濱には方言で本庄介といふ、ウチムラサキ、及オニアサリの殼の破片(こはれ)が多く、洗足になると足の裏に多少の痛みを覺ゆるのは、偏に此地の欠點である。

境内には蓮池があつて、白花大輪である。早起して開花の模樣を見るのは實に愉快であつた。蓮池に並んで數十種の白花の萩があつて、七月末からこぼれ咲を始め、八月末からは盛に咲きいでやうとしてをるのであるから、今暫時滯在してをつたならば、どんなに良い眺めであらうかと、今にも殘惜しく思れる。

この地方で蒐集した貝類は、

キヌボラ	Murex brevifrons, Lamarck.
ビリレツフイ	Urosalpinx birileffi, Lischke.
レイシ	Purpura tumulosa, Reeve.
アカニシ	Rapana bezoar, Linn.
チリメンボラ	〃 bulbosa, Solender.
ミヤコボラ	Ranella albivaricosa, Reeve.
ナガニシ	Fusus perplexus. A. Adams.
テングニシ	Hemifusus ternatanus, Gmel.
セシリー	Tritonidea cecillii, Phil.
バイ	Eburna japonica, Sowb.
アラムシロ	Nassa festiva, powis.
ムシロガヒ	〃 livescens, Phil.
マクラガヒ	Oliva mustellina, Lam.
コロモガヒ	Cancellaria Spengleriana, Desh.
シドロ	Strombus japonica, Reeve.
カヅラガヒ	Cassis strigata, Gmelin.
ヘソクリ	Natica maculosa, Lam.
コンシンナ	〃 concinna, Dkr.
エゾタマガヒ	〃 janthostoma, Desh.
シラタマツバキ	Polinices powisianus, Reel.
ツメタガヒ	〃 ampla, Phil.

便局などもある。郵便物の集配も、一日に二三回はある。然し西部の方は、商家至つて少く、隨つて物品の種類も少く且つ劣等である。郵便の集配も、一日一回丈けであるから、都會に住み慣れたものには、往々不便を感ずる事がある。

私が本年の銷夏地として此地を撰んだのは、本年の三月、此邊一帶の海濱に遊び、海水浴に適當な場所をと、種々搜索した折、明石から高砂まで數里の間、章魚を産する事が頗る多く、章魚は此地方の一大産物で、甚だ名高く、之を漁する者は、西二見に尤も多く、同地の人々は、章魚で生活してをるといつても差支ない位であるから、私はこの章魚のこと、幷に、他の貝類と章魚との關係につき、聊か調査してみたい爲め、又一方には久しく振に田舍生活の趣味を味ひ、小供らにも、其實況を示して、教訓の一端にもしたいといふ希望があつたから、つい此地を撰ぶ譯になつたのであるが、幸に此地の海濱に威德院といふ寺院があつて、南向で、空氣の流通はよく、只南方が隣家の屋根に妨げられて、海上の眺望を欠ぐは、甚だ遺憾であるけれども、北方は數里の間青々とした稻田で、遠く播州の諸山も、一眸のうちに集まるといふ譯で、室數も多く、住職は掃除好きで、可なり清潔の方であるから、至極適當と考へ、この暑中數室借用のことを頼んだのに、早速住職の快諾を得たので、愈今夏を此地に送つたのである。

さて寺から凡そ二十間斗りもあらう、小阪を下りて往くと濱に行かれるのである。海は遠淺であるから、十歳前後の小供でも、濱から二丁位沖にでゝも、更に危險はない。海水も清く、水浴には、至極適當であるけれど、唯だ一つ殘念に思ふことは、濱から四五間行くと、幅三四間位の泥地があり、それから又幅六七間位の海草の繁茂してをる所があることで、之を過ぎ行くと良好な砂地になる。この砂地に届く前に泥地と海草中とを、通行し

……………………アツグチハハヒメ、

（四）外唇薄く、螺塔稍凸く、殼口新月形をなして狭く、螺層は四階半にして、高は二〇七ミメ直徑は五ミメなり」……………コシタカハヽヒメ、

（乙）周縁の角は餘り著しからざるも前方にありては鋭く其他は圓し、螺層は四ヶ三分の一階にして、高さは二〇二ミメ、直徑は四ミメなり」……………アニヒメベツカフ、



雑録

西二見貝類採集

この篇は本館長の談話を筆記したもので、本館長は本年七月二十一日、家族を同伴して、八月三十一日まで、播磨加古郡二見村で、海水浴をせられ、傍ら貝類採集を試みられた。實は本誌第七號に掲げられた「海水浴と貝」と題する記事の實行と見て差支ないのである。只談話の大要を筆記した迄で、甚だ盡くさない所があるが、それは全く筆記者の責である。

筆記者誌

二見村は土山驛から、南方二十餘丁で、東西二部に分れてをる。東部は五六百戸、西部は百五十六十戸、其距離は六七丁に過ぎない。東部の方には商家も多少あつて、普通日用品には事を欠かない。銀行もあれば、旅店、郵

産地、小笠原兄島、

高、八厘、長徑一分四厘五毛、

形狀、殻は微細なる臍孔を有し、螺塔低く、上下面共に凸く、表面平滑にして、螺脈の痕跡なく、螺層少しく脹れて殆んど四階半を數へ、縫合は線狀にして、下方に狹き透明の條を具へ、体層は殻口の前方に鈍角を有し、其他は圓し、底面脹れ、臍孔の邊は凹み、殻口は稍斜にして新月形をなし、外唇及底唇は薄く、內唇は內部に少しく厚くなりて、其中央に薄弱なる低き結節を有せり」

彩色、前種よりも稍淡色なり」

本種は口緣の前部に角あるを以てコハヽヒメの小形なるものと區別するを得べし。中の島の採集品中に本種と同形なる標品あり、表面平滑にして螺脈なきを以てMacrochlamys lineatus, Pils.と區別することを得べし」

本種は余の新發見にかゝり、採集番號は八〇三aなり」

同上備考（一）

ピルスブリー氏は小笠原産ベッカフガヒ科の識別表を製し之を一千九百〇五年の米國費府博物學會々報第七百十一頁に掲げられたれば、余は其中よりヒメベッカフに關する部分を左に譯載することゝなしぬ」

ヒメベッカフ屬、

殻軸は內方に滑層を有し、一低歯或は一結節を具ふ、螺脈は之を欠けるか、或は非常に微なり」

(甲)周緣は圓きか、或は前部に極めて薄弱なる角を有し、表面は頗る光澤あり

(一)外唇薄く、五螺層を有し、高四ミメ、直徑六。五ミメ、なり……………ハヽヒメベッカフ、

(二)外唇薄く、凡そ四ヶ四分の三螺層を有し、高凡三。九ミメ、直徑凡五ミメ、なり…コハヽヒメ、

(三)外唇は內部に厚くなり、螺層は四階半、高さは一。八ミメ、にして、直徑は五ミメ、なり………

第六十二圖及第六十三圖は姉島産の模式標本なるが(高一・八ミメ、直徑五ミメ)、中の島産の本亞種は螺塔少しく高くして本種に近く(採集番號八〇三c、最大なる標本は高三・二ミメ、直徑五・二ミメ、螺塔の高殆んど本種に同じ、其他兄島産(採集番號八〇三a、高三ミメ、直徑五ミメ)、姉島産(八〇三d、大さ同上)等皆多少の差異あり」

本亞種は余の新發見にかゝり、採種番號は八〇三eなり」

アツグチハヽヒメ 新稱

M. hahajimana pachychilus, Pils. & Hir.

(陸産、第九版、第六十四圖及第六十五圖)

産地、向島(母島の西南約二海里)

高、一分、長一分六厘、

形狀、殼形コハヽヒメに等しく、螺塔は本種よりも低く四階半を數へ、外唇及底唇の緣は内部に厚くなれり」

彩色、本種に等し、

本亞種は余の新發見にかゝり、採集番號は八〇三bなり」

亞種、**コシタカハヽヒメ**、新稱

M. hahajimana kitaiwojimana, Pils. & Hir.

(陸産、第九版、第六十六圖及第六十七圖)

産地、小笠原北硫黄島、

高、八厘五毛、長徑一分四厘、

形狀、前出諸亞種よりも小形にして、螺塔の高は本種に比す可く、殼口は新月形にして前諸種のよりも狹く、螺層は四階半を數ふ」

彩色、本種に等し」

本亞種は余の新發見にかゝり、採集番號は八〇三f也」

アニヒメベツカフ、新稱

M. anijimana, Pils. & Hir.

(陸産、第六十八圖―第七十圖)

唇は内方に厚くなり其插点に於て少しく擴張せり」

彩色、光澤ある淡黄褐色にして半透明なり」

本種は最もよくヤクヒメベツカフに類似し、該種よりも大形にして低く、バカヒメベツカフよりも殻質厚くして周縁に龍骨なし」

第五十八圖は屋久島産にして、ピルスブリー氏は之を本種と同物なりとせり」

本種は余の新發見にかゝり、採集番號は九四九なり」

ハハヒメベツカフ 新稱、M. hahajimana, Pils.

(陸産、第九版、第五十九圖—第六十一圖)

産地、小笠原母島及父島、

高、一分二厘五毛、長徑二分三厘、

形狀、殻は扁球形をなし、微小なる臍孔を有し或は有せず、螺塔は凸く、五層を數へ、螺層は殆んど平坦にして縫合淺く狹き線を具へ、体層は前部に微角を有し、下部膨れ、中央凹み、殻口は新月形をなし、口縁簡單にして鋭く、殻軸は滑層を有し、上部厚くなりて、鈍歯を具へ、殻面は光澤ありて極めてかすかなる生長線の外螺刻線なく、ヒメベツカフ屬中の一摸式種なるが如し」

彩色、琥珀色にして、輝ける光澤を有し、半透明なり」

本種は一千九百〇二年に余の發見したる新種にして、採集番號は八〇三なり、爾後之に類似したる標品續々附近の諸島より發見せられしがピルスブリー氏は之を新亞種として記載せられたり」

亞種コハヽヒメ 新稱

M. hahajimana jejuna, Pils. & Hir.

(陸産、第九版、第六十二圖及第六十三圖)

産地、小笠原妹島、中の島、兄島、姉島等、

高、九厘五毛、長徑、一分六厘、

形狀、本種よりも小形にして、其模式標本にありては螺塔本種よりも低し」

彩色、本種に等し」

同上備考(第六)

グラシリフォルミス、F. graciliformis, Sowb.

(トライオン氏追加)

日本產として圖と名とを揭ぐるのみ」

第七十二圖



グラシリフォルミス(トライオンより)

コーダツス、F. caudatus, Quoy.

(トライオン氏追加)

產地、未詳、

長、記載なし、

此圖はクオイ氏の記載と符合せす、多分幼貝ならん、後考を待つ」

第七十三圖



コーダツス(トライオンより)

シーボルデイ、F. sieboldi, Schepman.

シーボルド氏始めて採集せし所にして、Notes Leyd. Mus., の第十三卷第六十二頁、第九版、第一圖に揭げあるも暫く之を略す」

オホミクリガヒ 岩川 F. tuberosus, Reeve.

近時本種をナガニシ屬中に編入する學者多きもトライオン氏の說に從ひ、之をミクリガヒ屬(Siphonalia, A. Adams.)の條下に記載することゝなしぬ」

日本陸產貝類圖說(四)

ハチヂヤウヒメベツカフ 新稱

M. circumdata, Pils.

陸產、第九版、第五十五圖―第五十八圖

產地、八丈島、三宅島及屋久島、

高、一分、長徑一分四厘五毛、

形狀、殼は曖昧なる臍孔を有し、低平にして、螺塔は低圓錐形をなし、微かなる生長線を具へ、顯微鏡下には上部に微細にして密接せる螺線を刻し、下部に淺溝にして粗き螺溝を見る、螺層は脹れて徐々に增大し、四階半を數へ、縫合深く、体層は周緣圓く、臍孔附近凹み、殼口は斜めなる新月形をなし、外唇は簡單にして薄く、内

シの体層は肋なきものなるやも知る可らず」

ニポニクス、F. niponicus, E. A. Smith.

（トライオンより）

産地、日本、（日本の南部、五十二尋の深に産す セント、チョン氏）

長、二十二ミメ、

帯白或は帯黄色にして、刺は褐色を彩り、体層に一狹褐帯を繞らし、口内は白色なり、

本種は明らかに幼貝にして、多分眞のナガニシ屬中のものにあらざるべし」



第七十圖　ニポニクス（トライオンより）

シムプレツクス、F. simplex, E. A. Smith.

（トライオンより）

産地、日本、（韓國南部にも、セント、チョン氏）

長、十八ミメ、

白地にして、平滑なる帯灰橄欖色の表皮を被る、

本種も明らかに極幼貝にして、其生長せし殼は別に舊名を有するならん」



第七十一圖　シムプレツクス（トライオンより）

モデスツス、F. modestus, Gould.

（トライオンより）

北部太平洋探検の際、日本函館灣內深十尋の殼砂上より採集せられしものにして、圖なく其記載は以て該種を識別するに足らず、而して模式的の標本はシカゴ大火の際烏有に歸したりと信ず」

ソリヅルス、F. solidulus, A. Ad.

トライオンの書に未定種日本産として名をかゝぐるのみにて、記載なく、また圖なし」

ジャポニクス　F. japonicus, Gray.

トライオン氏は本種に關して一の參考を得ずと云へり

ピルスブリー氏は日本海産とし Zool. Beechey's Voy., P. 115. を引照せり」

チスタンス(琉球方言) F. distans, Lam.

(トライオンより)

產地、フイリッピン、(ピルスブリー氏日本、海產貝類目錄には八重山產とあり)

チスタンス(トライオンより)

第六十七圖



長、五六吋、

殼は堅固なるも組織輕く螺層膨れ、中央に龍骨を有し、側扁なる結節の一列を繞らし、淡黃褐色にして、螺肋及結節間は濃色なり」

スペクトラム、F. spectrum, Ad. and Reeve.

(トライオンより)

產地、東洋、日本、(長崎、函館、シユレンク氏 ピルスブリー氏)

長、三吋、

殼は細長優美にして、全体一色を呈し、白色の肌に淡褐色の表皮を被り、螺層に圓き肋を繞らし、體層にありては該螺肋は消失し、肩角に側扁なる結節を有せる、龍骨を具ふ」

スペクトラム(トライオンより)

第六十八圖



ロンヂコーダ、F. longicauda, Bory.

(トライオンより)

產地、セイロン

長、五乃至六・五吋

ロンヂコーダ(トライオンより)

第六十九圖



帶黃白色にして、褐色の薄き表皮を被り、殼頂及水管溝端は往々褐色を帶ぶ、

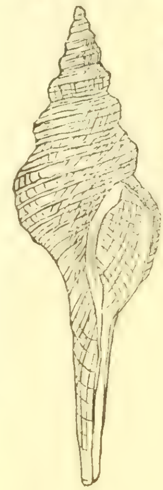
本種はホツニシの龍骨なきものか或はイトマキナガニ

長、四・五乃至五吋、

帶黄白色なり、

リーヴ氏の圖せるムルチカリナッスはイトマキナガニシに似て肩角なきを以て、Philippi 及び Tapparone-Canefri 氏のムルチカリナッスと圖示したるはF. Reeveanus.（リーヴィアヌス）と稱す、該種はスペクトラム（F. spectrum, Adams and Reeve.）と異名同物なり」

第六十四圖



（ムルチカリナッス、トライオンより）

オーストラリス、F. australis, Quoy.

（トライオンより）

產地、紅海、日本、濠洲、

長、三・七五吋、

帶褐赤色或は帶黄色にして、栗色の斑点と狹き帶とを有し、周縁には亞肩骨を有するも、肩角稜味にして圓く

同上備考、第六

第六十五圖



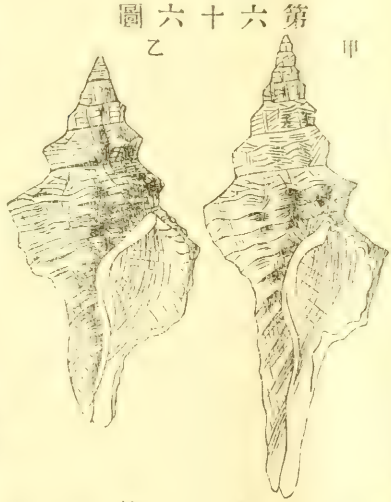
オーストラリス（トライオンより）

体層上の螺脈は往々縱肋よりも著しく、兩者相交りて顆粒狀の觀を呈し、螺塔及水管溝は比較的に短し」

ツノマタガヒ、F. polygonoides, Lam.

（トライオンより）

第六十六圖



甲　乙

（ツノマタガヒ、トライオンより）

產地、東印度（東京博物館標本目錄には伊豆相摸、安房、上總等の產とす）

長、二・五乃至三・五吋、

淡褐色にして、栗褐色の点及線を有し、体層には結節ある二角を具へ、肩角殊に著し」

殼色白く、圓き肋を繞らして彫刻粗く、肩角上に稍や隔りたる結節を具へ、肋間は栗褐色なり、

(シベ[illegible]より)

第六十二圖



本種はチトセボラよりも廣くして螺塔短く水管溝短きも或はチトセボラの一變種なるやも知れず未だ本邦産あるを聞かず」

變種　**ノドソプリカツス**、var. nodosoplicatus, Dkr.

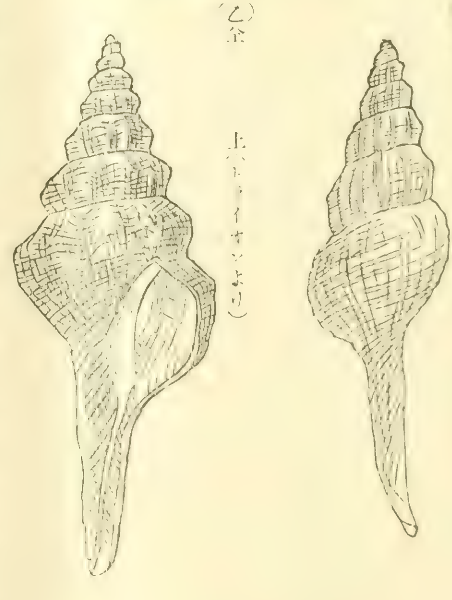
(トライオンより)

産地、日本、(リシユケ氏は長崎、センド、デヨン氏は五島宇久島を擧ぐ)

長、五吋半、

殼は本種よりも大きく、結節高く、全体一色なり、甲圖はリシユケ氏の書より縮寫せし所にして、只ナガニシ等と酷似せるのみならず、龍骨消失してナガニシ科中の他の諸群と連絡を通ずるものと云ふ可し」

第六十三圖



(甲)變種ノドソ[illegible]より)

(乙)仝上(トライオンより)

ムルチカリナツス(方言ヨナキモーモー)

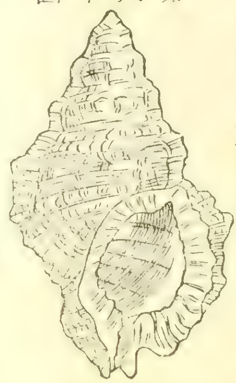
F. multicarinatus, Lam.

(トライオンより)

産地、紅海(ピルスブリー氏の目錄には八重山産とあり)

表面は帶褐赤色の雲と点とを有し、結節は肩角上にあるもの最大にして、時としては二分せるものあり、（或はR. granifera, Lam. 卽ちウネボラと同種なるやもしれず）

第六十圖



アフフィニス、（トツイヤンより）

譯者曰く「ピルスブリー氏の日本、海產貝類目錄中に Gyrineum affine Brod. とあるもの多分本種なるべしと考へしを以て、こゝに之を譯載することゝなしぬ」

ナガニシ科、Fusidae

ナガニシ亞科、Fusinae

ナガニシ屬、Fusus, Lam.

イトグルマ、F. pagoda, Lesson.

產地、相模、土佐、瀬戸内海、（九州、朝鮮にも、凡十四尋の深に住す）

長、二寸五分、水管溝の長一寸二三分、

同上備考（第六）

形狀、殼は鋭き肩角上に扁平なる廣き刺を具へ、其下方に更に短刺を具へたる一角を有し、長き水管溝上にも短刺を具へたる斜肋を繞らし殼頂に斜にして平滑なる胎殼を戴き、一種異様の觀を呈せり」

第六十一圖



イトグルマ（原圖）

彩色、帶黃褐色にして、口内白く、胎殼は紫褐色なり

マーチンス氏 von Martens.) は此種の爲に別に**イトグルマ**屬（Columbarium, von Martens.）を創設したるを以て、余はクダマキガヒ科、イトグルマ屬の條下に於て圖版を揭げ更に之を詳說せんとす

ツベルクラツス、F. tuberculatus, Lam.（トライオンより）

產地、紅海、印度洋、

長、四寸半、

表面には小乳頭狀の結節を密布せり」

本種は始めホラガヒ屬として記載せられ、今猶は之を該屬中に編入せる著名の貝類學者あり、本種はナルトボラの如く、ホラガヒ屬の縦脹脉とミヤコボラ屬の外形とを有するを以て余は此両性質の輕重を測りて遂に之をミヤコボラ屬に編入したり」

第五十七圖



(コナルトボラ、トライオンより)

第五十八圖



(コリアシイ、トライオンより)

余はリーブ氏のコリアシイ(R. coriacea, Reeve.)は本種の幼殼なるべしと信ず」

カエラタ　R. caelata, Brod.

(トライオンより)

產地、パナマ、八重山島(岩川)

長、一乃至一•七五吋、

殼は暗栗色にして、數列に配列せられたる濃き「チョコレート」色の諸結節を有せり」

第五十九圖



(カエラタ、トライオンより)

東京帝室博物館海產貝類標本目錄には R. granifera, Lam. と共に本種を**ウネボラ**に當てあるも、余は未だ該標品を手にせざるを以て暫らく後考を待つ」

アフアイニス、R. affinis, Brod.

(トライオンより)

產地、フイリッピン、ニユーカレドニア、サモア、西印度等、

長、一•五乃至二吋、

淡黄或は肉白色にして、殼頂附近は往々淡紅色を呈し、

形狀、小形にして、螺塔高く、水管溝は短くして少しく反曲し、縱肋を有し、大小交互せる約十二條の螺肋あり」

彩色、汚淡肉色より濃褐色を經て黑色に至るまで種々わり肋は往々濃褐色を彩し、口内は淡茶色より濃紫色に至る」

a圖に示せるは釜山より得たる標本にして稍小形に彩色黑褐色なり」

同上備考（第六）

サルトボラ亞屬、Lampas. Schum.

クルエンタタ、R. cruentata, Sowb.

（トライオンより）

產地、モーリチウス、フイリッピン、西印度、

長、〇・七五乃至一・五吋、

淡黃或は帶褐白色にして、主要の諸結節は往々赤色を雜へ、口內は白色或は薔薇色にして、殼軸は往々濃赤色の諸點を有す」

第五十五圖



クルエンタタ（トライオンより）

攝式形なる、フイリッピン產の標品には往々殼軸上の諸點を欠ぎ、變種**ロドストマ**（var. rhodostoma, Beck.）にありては殼軸上に點を有することなし、

第五十六圖



變種ロドストマ（トライオンより）

本種はピルスブリー氏の「日本海產貝類目錄」中に掲げられ、**オキニシ**に酷似せるも著しく小形にして、水管は該種に於けるが如く螺塔上に延長することなし」

コサルトボラ（若川） R. scrobiculator, Linn.

（トライオンより）

產地、地中海、

長、二乃至三吋半、

帶黃褐色と白色とを雜へ、濃色の不明瞭なる帶を有し、

彩色、帯褐色にして、縱襞の間には濃色を彩り、螺脉白く、水管溝は帯紫黑色をなし、口內は帯青或は帯紫色なり」

帝室博物館海產貝類目錄には F. polygonoides, Lam. をツノマタガヒとして揭げられ、岩川氏より余に寄贈せられたる該種の標品は全く本種と同一なり、されど余は暫時ピルスブリー氏の鑑定に從ひ該標品を Nigrirostratus. とし、別にツバクロナガニシてふ新稱を附することゝなしぬ、殊に第百十圖に出せるは余の平戸より得たる標本にして、トライオンの插圖とよく符合せり又第百十一圖に示せるは淡路より得たる標本にして甚だ大形なり」

イトマキナガニシ 新稱、F. turricula, Kiener.
= F. forceps, Perry
(海產、第十六版第百十一圖)

產地、紀伊田邊、(支那にも)

長、五寸、水管溝の長、一寸七分、

形狀、ナガニシよりも螺塔及水管溝共に長く、螺肋大にして彫刻粗く、縫合深く、外觀頗る美麗なり」

彩色、殼の表面は全体帯黃白色にして、口內は白し」

テウセンニシ亞科、Ptychatractinae.

スチムプソン氏の一科として創設せし所にして、小形にして、北方に產し、類似の諸科と齒式を異にせり、同氏は P. ligatus, Mighels and Adams. てふ一種を此中に編入し、ステールンス氏は更に P. occidentalis, Stearns てふ一種を加へ、トライオン氏はテウセンニシをも此科中に編入せられたり」

テウセンニシ屬、Ptychatractus, Stimpson.

テウセンニシ 新稱、P. coreanicus, E. A. Smith.
(海產、第十五版第百六圖及仝a圖)

產地、釜山及平戸、

長、(仝長、一寸、 水管溝の長、一分一厘、
(仝長、七分五厘、 水管溝の長、九厘、

彩色、「白地に汚褐色の有色表皮を被り、絕頂の數層と水管溝の一部とは褐色を彩り、周緣には往々結節間に褐帶を有せり」

チトセボラ、F. nicobaricus, Lam.

(海產、第十六版第百八圖)

產地、琉球、大隅大島等、(フィリッピンにも)

長、全長、五寸、水管溝の長、一寸七分、
全長、四寸、水管溝の長、一寸三分、

形狀、前種よりも重厚大形にして、彫刻は前種よりも粗く、大小の螺肋は圓く、結節大きく、水管溝も大なり」

彩色、白色乃至帶黃色にして、栗黑色の斷續波動せる縱脈或は斑點を有し、口內は白色なり」

ナガニシ、F. perplexus, A. Adams.

=F. inconstans, Lischke.

(海產、第十五版第百五圖及第十六版第百九圖

產地、太平洋に面せる各地、瀨戸內海、九州沿岸等、

長、全長、五寸、水管溝の長、一寸七分、
全長、二寸五分、水管溝の長、七分、

形狀、殼質薄くホソニシよりも稍短く太くして脹れ、表面には大小の螺肋を有し、縱肋及結節は著しきものより、全く之を欠ぐものに至るまで種々あり」

彩色、白地に帶綠黃色の有毛表皮を被り、往々栗色の斑紋を有するものあり、口內は白色なり」

ツバクロナガニシ 新稱

F. nigrirostratus, E. A. Smith.

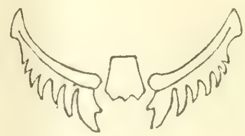
(海產、第十六版第百十圖及第百十一圖)

產地、肥前、淡路等、

長、全長、一寸八分、水管溝の長、三分、
全長、二寸八分、水管溝の長、六分、

形狀、前記の諸種よりも短く、水管殊に短くして少しく後方に反曲し、螺脈小さくして縱肋著しく、結節殊に大なり

水管溝短く、殼軸は少しく彎曲し、不等の小科襞を具へ、外唇は稍や鋭く、前部に多少著しき一ヶの齒或は結節あり、齒式は上圖の如し」



リュウコゾニアの齒舌（トライオンより）

マルニシ亞屬 新稱 Lagena, Schum.

螺層の上部圓く肩角を有せす」

ナガニシ亞科 Fusinae.

ナガニシ屬、Fusus, Lam.

殼は紡錘形にして、螺塔高く、螺頂尖り、螺層多く、殼口は卵形をなし、大抵口内に螺脉を有し、外唇は簡單にして、殼軸は平滑なり、臍孔なく、水管溝は長くして直し、帶黄褐色或は淡角色にして、往々赤褐色の脉或は点を有することあるも決して帶を有することなし、靨は尖き卵形にして、頂核を有す」

此屬は形色彫刻相密似せる多數の種を含み、種の分類に注意す可き諸点は殼徑と殼長との割合、縱肋及螺脉、螺層上肩角及結節の有無、等なり、トライオン氏は一地方産の多數の標品を調査して、其變化多きに驚き、殆んど爲す所を知らざりし程にて氏は若し各種の標品を多數に蒐集し、更に各種の特徴を考究せば今日よりも遥かに種數を減ずるに至るべしと云へり、此屬は紡錘形の殼を有せる種に限られ、亞熱帶に産し、舊式の貝類學者が此屬中に加へ來りし北方産の諸種は今日大抵エッチウバイ科に編入せらるゝに至れり」

ホソニシ 新稱 F. colus, Linn.

（海産、第十六版、第百七圖）

産地、大隅大島、（セイロン、トンガ、タポーにも）

長、（全長、四寸、　水管溝の長、一寸八分、
（全長、三寸二分、　水管溝の長、一寸三分、

形狀、螺塔非常に高く、水管溝非常に長く、全形は爲めに長紡錘形をなし、ナガニシよりも更に細長なり、大なる縱肋と絲狀の螺肋とを有し、肩部に大なる結節を起せり」

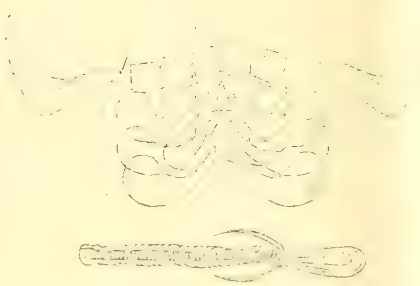


テウセンニシの齒舌（トライオンより）

マキボラ屬に似たる襞を有す

齒式は上圖の如し

メイアリア屬、Meyeria, Dunker and Metzger. 未だ本邦産あるを知らず、故に之を略す



イトマキボラの齒舌（トライオンより）

イトマキボラ亜科 Fasciolariinae.

イトマキボラ屬、Fasciolaria, Lam. 殻は紡錘形にして、螺塔尖り、殻口は長卵形をなし、水管溝は長さ中庸にして開き、殆んど眞直なり、殻軸は平滑にして前部に少數の斜襞を有し、外唇の内方は齒狀をなす、

齒式は上圖の如し

ツノマタモドキ亜科、Peristerniinae.

ツノマタモドキ屬 新稱、Peristernia, Mörch. 殻は小塔狀にして、臍孔なく、螺層は縦肋を有し、殻口は卵形をなし、水管溝は中庸にして反曲し、外唇は薄くして齒狀を呈し、殻軸の前部に輕微の二三襞を有す、齒式は上圖の如し、其リウキウツノマタ屬との識別点は臍孔を欠ぎ、内唇の襞隆陵にして、水管溝の反曲せるにあり



ツノマタモドキの齒舌（トライオンより）

リウキウツノマタ屬、Latirus, Montf. 殻は小塔狀にして、紡錘形をなし、往々臍孔を具へ、螺塔高く、螺層は結節を有し、殻口は長卵形をなし、外唇は薄くして細齒を有し、殻軸直く、其前部に二三の小斜襞あり、

リユウコゾニア屬、Leucozonia, Gray. 殻は卵圓形にして、肩角を有し、螺塔高からず、殻口は稍圓形をなし、

入せられしが、研究の結果今や之をエッチウバイ類と隣接せしむるに至れり、又以前オニコブシ科に屬せしリウキウツノマタの類はイトマキボラ的の齒式を有するにより之をナガニシ科中に移すに至りたり、

ナガニシ亞科、Fusinae. 殼軸に襞なく、また歪曲せす」

イトマキボラ亞科、Fasciolariinae. 殼軸は歪曲し、科襞或は褶を有す」

テウセンニシ亞科 新稱、Ptychatractinae. 前亞科と齒式を異にし、僅かに北方產の三小種を含むのみ」

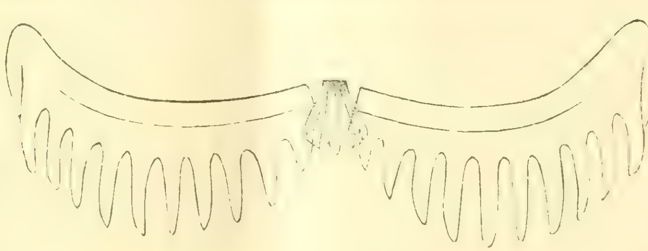
ツノマタモドキ亞科 新稱、Peristerniinae. 殼軸に横襞を有す

ナガニシ科中の諸屬分類綱領、

ナガニシ亞科、Fusinae.

ナガニシ屬、Fusus, Lam. 殼は紡綞形にして、螺層多く、殼頂尖り、螺塔は高しくて体層よりも長く、殼口は卵形をなし、水管溝は狹長にして直く、殼軸は平滑にして、弧狀をなし、齒式は上圖の如し」

ナガニシの齒舌（トロツセルより）



ヒダリマキナガニシ亞屬、Sinistralia, H. and A. Ad. 殼は左旋し紡綞形をなし、水管溝長く螺層圓し、未だ本邦產あるを知らす」

アフエル屬、Afer, Conrad. 本邦產なきを以て之を略す

クラヴエラ屬、Clavella, Swains 本邦產なきを以て之を略す」

ブクシノフサス屬、Buccinofusus. Conrad. 未だ本邦產あるを知らす、故に之を略す」

テウセンニシ亞科、Ptychatractinae.

テウセンニシ屬、Ptychatractus, Stimpson. 殼は紡綞形をなし、螺脈を有し、水管溝は中庸にして、殼軸はイト

ピルスブリー氏は別にApollon(アポロン)屬を設けて之を編入せり」

モロハボラ 新稱、R. anceps, Lam.

(海產、第十五版第百四圖及仝a圖)

產地、小笠原島、トルレス海峽、ヴイチ諸島、布哇諸島、パナマ、西印度にて。

長、四分、

形狀、殼は微小細長にして、螺塔高く、螺層は徐々に增大し、兩縱脹脈の間の腹背兩面に右に偏して曖昧なる一條の縱肋を有し螺脈を具へ、殼口は長楕圓形をなし、兩唇平滑にして前溝短し」

彩色、純白色なり」

ナガニシ科(長辛螺) Fusidae.

殼は多少紡錘形を呈し、縱脹脈を有せず、殼口の唇は厚くなることなし」

厴は尖りたる卵形にして、頂核を有す」

動物は其外形骨貝の動物に似たり」

齒式、模式的ナガニシ屬の齒式は大抵イトマキボラ屬の齒式と異なることなし、スチムプソン氏(Stimpson)は前者は後者の鋸齒狀側齒を有せりと記載し、マクドナルド氏(Macdonald)はナガニシ屬中にホネガヒ式の側齒を有せる者あるを發見せられたり、然れどもトライオン氏はマクドナルド氏が他屬の或種をナガニシ屬の一種と間違へて其齒式を研究せしものなるべしと批評せり、ツロツセル氏(Troschel)はシラクサヌス(F. syracusanus)がイトマキボラ的齒式を有するを發見して、アプチキシス(Aptyxis)てふ新屬を創設し、シヤコー氏(Schacko)は模式ナガニシに於てもイトマキボラ的齒式を有することを發見したり、テウセンニシ類はイトマキボラに似てホネガヒに近き一種特異の齒式を有するにより、スチムプソン氏は之が爲に別に一科を設けギル氏(Gill)も亦之に從へり」

エゾボラ類、テンダニシ類等も永くナガニシ科中に編

產地、相摸、紀伊、土佐、（フィリッピンにも）
長、凡二寸、体層の幅六、七分、外唇外の縱脹脉の幅五、六分、両側の縱脹脉を加へたる幅一寸七八分、
形狀、殼は螺塔高く、螺層は六階を數へ其上に二三層より成れる胎殼を戴き、甚しく腹背の方向に壓扁せられ、両側の縱脹脉は各三大肋を有して三尖をなし非常に發達して鰭或は翼狀の奇觀を呈し、曖昧なる縱橫肋の交叉点は圓き結節をなし、殼口は卵形にして、両唇は平滑にして突出し、前溝は長くして扁たし」
彩色、淡黄乃至白色にして、淡褐色の曖昧なる帶或は斑点を有し、口內は白色なり」

シマアラレ 新稱、R. gryina, Linn.
（海產、第十五版第百二圖）

產地、琉球、（濠洲のトルレス海峽及ヴイチ諸島にも）
長、殆んど一寸
形狀、殼はアラレボラに酷似するも小形にして、結節大きく、規則正しく整列して殆んど縱肋をなし、比較的に重厚なり」
彩色、白色にして、各層に一條、体層に二條の暗栗色帶を繞らすを以て直ちに識別することを得べし、口內は白色なり」

イサメボラ 新稱、R. pusilla, Brod.
（海產、第十五版第百三圖）

產地、八丈（紅海、印度洋、フィリッピン、濠洲、新カレドニア、タヒチ、ロルド、フード島、布哇諸島ナタルにも）
長、四分五厘、
形狀、殼形稍シマアラレに似るも微小にして結節小さく縱橫の肋明かにして布目狀をなし、両側の縱脹脉の鰭は甚しく捩れ、殼質比較的に重厚なり」
彩色、白色乃至桃紅、鮮紫、柑褐等種類極めて多く、之に種々の帶或は線を繞らし、美麗にして愛す可し」

本邦海産貝類圖說（第九）

ウチボラ 六介 R. granifera, Lam.

（海産、第十五版九十九圖及仝a圖）

產地、琉球、大隅大島、小笠原島等（紅海、ナタル、ボーモツ、フィリッピン、濠洲の北東岸にも）

長、一寸七八分、



ウチボラ（トライオンより）

形狀、殼は螺塔高く、螺層脹れ縫合淺く、腹背の方向に扁平にして、大小の螺肋は大小の結節列より成り、両側の縱脹脈は紐をかけたるが如き外觀を呈せり、殼質比較的に薄く、殼口は椿圓形をなし、前溝短く、後溝稍深く、内唇に横襞を有し、外唇の内緣に螺肋の末端よりなれる齒を具ふ」

彩色、淡黄褐色にして、濃色の雲と雜斑とを有し、腰様なる白帶を有し、結節は往々白色にして、口內及內唇の襞と外唇の齒とは白色なり」

マツカハガヒ亞屬、Argobuccinum, Klein.

アラレボラ 卅介、R. tuberculata, Brod.

（海産、第十五版第百圖）

產地、淡路、紅海、印度洋、支那、マラッカ、マニラ、タヒチ、にも）

長、一寸二三分、

形狀、ウチボラに似るも小形にして、後溝を欠ぎ前溝少しく長く、両唇稍滑かにして全体濃色なるを以て直ちに識別することを得べし、結節は規則正しく整列して縱橫の肋を形成す」

彩色、栗褐色にして、結節黑く、往々縫合下と中央附近とに淡色帶を有し、汚褐色の有毛外皮を被り、口內は大抵菫青色なり

マツカハガヒ、R. pulchra, Gray.

（海産、第十五版第百一圖）

紅螺或流螺（アカニシ或ナガニシの一つ或は二つ）
- 辛螺　和名 ―（常陸風土記・賦役令）― 辛螺
- 蓼螺子　和名 ―（出雲風土記）― 蜷
- にし（赤螺ニアカニシノフリガナアリ）

（乙）紅螺アカニシ　Rapana bezoar, Linn.
- 蓼螺・赤口螺　和名阿木（楊氏漢語抄・辨色立成・和名抄）― 辛螺（閑大曆）ニシ（頓醫抄）ニシ（大和本草）
- 口廣大辛螺　和名於保爾之（七卷食經・本草和名）― 紅螺・赤螺（アカニシ）アカニシ ニシ（介品・啓蒙）

（丙）蓼螺イハニシ　Purpura. 屬中の各種（一名イハカタ　ホウ〳〵ニシ　ホウジニシ　カラニシ　ニガニシ）
- 小辛螺　和名仁之（七卷食經・和名抄）― こにし（山家集。）
- 蓼螺子　和名仁之（楊氏漢語抄・和名抄）― 蓼螺 苦螺（ニガニシ）（介品・啓蒙）
- 白小辛螺　和名之良爾之（七卷食經）
- 黑小辛螺　和名久呂爾之（本草和名）― 蓼螺・辛螺（大和本圖）和名を點せず

- 四條流庖丁記　蜷
- 大草相傳聞出　にし

一表中上古とあるは奈良朝の終平安朝の初の頃までとす

一此頃までは流螺紅螺をなべてアキと稱すると專行れしが如しては流螺(テングニシ)よりも紅螺(アカニシ)の方多産なればにやあらん

一常陸風土記賦役令の辛螺出雲風土記の蓼螺子は古訓傳はらざれども恐くは當時アキと訓めりしにやあらん

一平安朝の中頃よりは流螺紅螺共にニシと汎稱せしにや此頃よりアキの稱見えず推して臺記別記に云辛螺はニシと讀めりしなるべし惟ふにアキの稱のニシと云ふよりも比較上典雅に聞えざりしにも依るならんか

一延喜式には鮑(アハビ)の名殊に多く見えたるも辛螺等の名見えず惟ふに其産額鮑の如くに豊多ならざれば常には進貢せざりしと見ゆ。

に反すといふべし

（アキの釋義）小按に赤口螺は恐くは漢名にあらずしてアカクチニシの借字なるべし抑其アカクチを約すれば頓てアキとなる也（Aka-Kuchi A-Ki）即此名は今云紅螺にのみ固有しニシの如き廣義を有する名にあらず但紅螺も必竟ニシの一なれば其此種は流螺(テングニシ)よりも多産し藥餌ともに其用極めて廣かりしに依り特に此名ありて他と區別するに便せしものなるべし但平時は概してニシと呼びしが如しされば古書に辛螺又にしとあるは主として紅螺の方なりしなるべし、抑本邦の所産中殻口の美紅色なるものは鳴門法螺又沖繩産には水字貝、錐の紬抔いへるもの間々あれども多産種に在ては特り紅螺の外一もこれあることなし

（ニシの釋義）小按にニシは苦尻(ニガシリ)の約なるべし凡紅螺、流螺蓼螺の類は其腸（即嚴に云へは肝臓部は膽汁の爲めに）太苦きを常とす故に此部を俗にナシと云へり是亦苦尻の約にてニシと同義異稱なり（Niga-Shiri=Na-Shi）さればニシは是等の汎稱なれども特に流螺(テングニシ)は其中の盟主とも云ふべければ古來ニシと呼べばやがて流螺のことゝなしゝなるべし

○次に古今各對稱表を掲ぐ

今名	上古名	中古及近古名
（甲）流螺テングニシ *Hemifusus ternatanus,* 一名 香螺（ナガニシ、ニシ、ニガニシ、カラニシ、マキニシ、ヨナキ、カツカヒ、ウミトリ、ツシガヒ）	蜷（辛蠃） 和名爾之（新撰字鏡） 流螺 和名阿岐（七卷食經 本草和名） 大辛螺 和名阿岐（七卷食經 本草和名 和名抄） 辛蠃子 和名於保阿岐（崔禹 本草和名）	甲香へなたり 徒然草 カヽ貝 大和本草 流螺長ニシ 香螺夜啼貝 介品 蓼螺ナガニシ等 啓蒙 臺記別記 辛螺一 散木集 にし 古今著聞集 にし 塵添壒囊抄 辛螺(ニシ) 文錄四年御成記 辛螺にし 祇園會御成記 にし 娶入記 にし

して到底黒白の二色を以て律すべくもあらず寧汎稱して今の如くイハニシ(或はカラニシなど)と呼べるの簡なるに如かず圓位上人が歌にてにしと詠めるは殊に妥當なるを覺ふ歌は已にシタヽミの條に出だせり

(餘考)前諸説を總括し、尤合理なる修正を施すときは次の如くなるべし

(甲)赤口螺和名阿木之本草云紅螺今名アカニシ 本誌(海)第七版第六十一圖

(乙)大辛螺和名仁之或於保仁之本草云流螺今名テングニシ

(丙)白黒小辛螺和名之貝爾之久呂爾之本草云蓼螺今名イハニシ 本誌云テツボランラクセガヒ等

(餘考)赤口螺大辛螺は中古辛螺と書し共にニシと稱して分たず小辛螺は上古分の稱なく中古てにしと云へり

(釋名)茲に古名アキ及ニシの義を釋し以て前考の補翼たらしめんとす

(一)東雅云。大辛螺アキ小辛螺ニシ。古語にアといひしは大也。アキとは其大きなるをいふ。○ニとは赤色。ニシとは其殼内の赤きをいふなるべし。またカといひ。キといふは轉語也。アキは其大殼なるをいふにや。白蛤、海蛤並にウムキといふ。キは殼也。

(二)倭訓栞云。あき。倭名鈔に大辛螺をよめりにしの大きなるなり○又云にし辛螺をいふは其殼の赤きよりいふ丹の義しは助語新撰字鏡に蛘をよめるは和字にや○ながにしは香螺あかにしは紅螺にがにしは蓼螺なり

小云アキを大殼又ニシを丹シ(助語)と釋せるはいかゞ未だアを大の義と云へるを聞かず恐くは大辛螺とあるに因みての推量なるべし又ニシのシを無意義となせるは考の未だ及ばざりしよりの言に過ぎざるべし況んやニシの類中色のアカキは紅螺の一種あるのみ香螺蓼螺等なべて赤からざるものゝみなるをや殊に東雅の説の如き大辛螺(アキ)皮赤口螺即今云香螺(テングニシ)紅螺(アカニシ)を大殼(アキ)と釋せるは事實に宰らざるが如くなれども小辛螺(ニシ)今云蓼螺(ニガニシ)を丹シ(ニ)と釋せるは甚しく事實

黒膽アリ味辛辣肉ノ味甘美ナリソノ殼和方ニ多ク用ユ
岡　齋明　日ノ方大和本草ニ詳ナリ又細末トナシ沙糖ニ和シ水ニテ飲テ能積聚ヲ逐ニ便ヲ通ズ殼ノ燒タルヲ虎眼ト云フ

又是より以前の書をさなる

(五)南大曆云。御隨身秦久文狩衣不知其色。面黃香。裏紅。後ニ聞。辛螺色狩衣云々。

(六)頓醫抄云ニシ荒痢ノトヾメガタキヲ治ス。極テ色ノ紅梅ノ如クナルニシノカラヲ灰ニ燒テ細末ノスヱニカキタテ一服ニ壹錢元服スベシ二三服ニハカナラズトヾマルナリ如此ノ秘藥也

是等は唯辛螺或はにしとのみあれども其記事に殼の赤きとを云へば紅螺なるとしるし但し紅螺は綱目に「紅螺色微紅」とある是なり但微紅にあらず殷紅也

(括要)赤口螺は初アキと云ひ中古ニシと稱し後アカニシと呼びてナガニシとの別明なるに至れり

(附説)茲に一の疑問ありそは

(七)本草和名に云口廣大辛螺肉出七卷食經和名於保爾之とある是なり扨アカニシの口は圓くテングニシの口は長しされば口廣とはアカニシのとなるに之をアキと云はずして大(オホ)ニシと云へり但アカニシとテングニシは其大さ互に伯仲して孰れを大とも定め難し然るに其口廣を口長に對し大と云ふのみならず當時ニシと呼べるは異例と云ふべしされども世已に遠く其理は知るべからず只これをしもニシと云へるは古き以前よりの習はしなるとを知れりといはんのみ

(イハニシの古名)扨今云イハニシは貴重なる種にあらざれば上古は公の稱呼見えず但し

(八)本草和名に

白小辛螺肉　和名之良爾之

黒小辛螺肉　和名久呂爾之

とあるものこそ今云イハニシなれ但イハニシは種類多く

となければ此名目は漸く跡を斂めしものゝ如し、然るに之に反して奈良朝の終平安朝の初の頃までは專アキの名行はれニシの名は特り小辛螺即今云イハニシの通稱なりしが如し即本鈔の師たるべき本草和名を見るに

大辛螺出七巻食經　和名阿岐

辛螺子出崔禹　和名於保阿岐

とあり然るに此書の無意的編集なるはと相並べて出せり二者の出典は異なれども和漢の名其大小を顛倒せるは寔に奇異なる現象ならずや其餘アキの名は仍左の一あり

甲香一名流螺　和名阿岐乃布多

とあり此甲香、流螺の名は已に云へる如く後の本草書にも出でゝ正しく今云テングニシなり又是より後に出て來し本草類編を見るに

甲香、和、安支乃不太又云仁之乃不太

とあり知るべしアキの名は漸く廢れてニシの名に移れるを、扨赤口螺はいかなる者ぞと云ふに之より遥に世を經て大和本草寶永に

赤螺、大ニシテ短シ肉赤シ味美ナリ

又同書の附錄に圖を掲げて云

ニシ○カウ貝ト相似タリカウ貝ヨリ短シ二者共ニ可食ツニシノカラニ鹽ヲシテ、燒テ存性ナ牙齒ニスヽル久シテ堅固ナリ

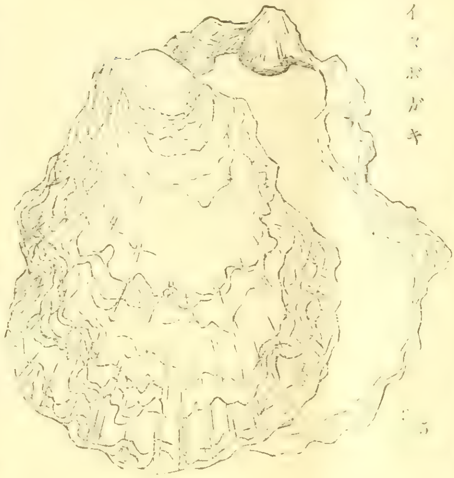
小云カウ貝はテングニシなると已に云へりとあるは稍明を缺くと雖殆同時に成れる怡顔齋介品に元文

(三)紅螺ツ　達拔スルニ赤螺アカニシト云フ大小二種アリ殼裏赤シ一種窮白キ者アリ。小云「白キ者」とは色の淡きを云へるなるべし

とあり即赤螺は畧本鈔に云赤口螺なりと知るべし次に掲くる本草啓蒙の說は之を說て詳なり

(四)紅螺ハアキ○和名鈔俗名ニシ又アカニシト呼ブ形拳螺ニ似テ低ク大ニシテ圓ナリ角刺ナシ外色紫黑唇モ同色肉ハ純赤色ツノ肉白ク頭黑ク中白ク尾ハ拳螺ニ似テ蒼黑色青

して一種となすか、或は産地的の變種とする方が穩當ではないかといふ説があり、余も稍々此の説に傾いて居る、專ら北海道を始め東北地方の荒海に産するものは此の種類である。今一をいたぼがきと呼び、殼の形圓く、殼頂は前種の如くに突出せず、表面は暗灰色で若色を帶び、葉狀片は細くして腹側縁に近づくに從ひ緻密となり、大さ三寸餘あり、其の學名を、O. denselamellosa, Lischke.といふ。此の牡蠣は、他の種類と異なりて海中の他物に附着することなく、砂中に埋もるゝか、或は單に海底に離生するを以て俗にころびがきの稱あり。此の種類は、



イタボガキ

九州長崎を始めとし、瀬戸内海の波靜かなる所に産す。かきは、鹹水凝りて化生したものだとか、或は牝なくし牡のみなるが故に、牡蠣の名を得たるなりなどといふのは、學術未開の昔の説で採るに足らぬことと言ふまでもない。かきには、皆雌雄の性がありて卵生するものなることは、今日確乎たる事實と成つて居る。けれども本邦産のかきは悉く雌雄異體なるが如くなるに、歐洲大陸の有名なるかき O. edulis L. は、雌雄同體であるといふことである、是れもよく研究すべき問題であると思ふ。

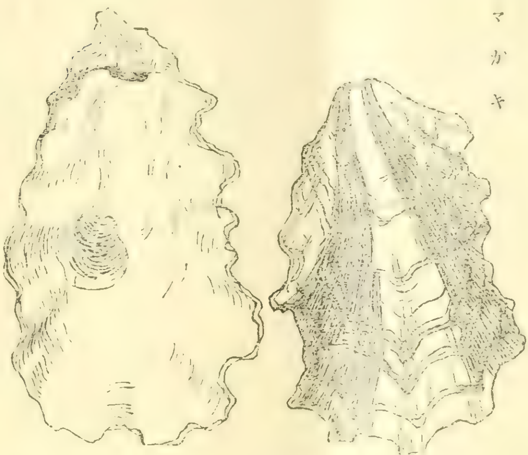
國書介名考（承前）

永沼小一郎

○第二十　赤口螺。此名は本鈔に大辛螺と等しく和名を阿木となせり但文章上より判するときは赤口螺と大辛螺とは別物にして偶和名を同じうせるに似たり但アキの名は中古以後に出て來し散木集古今著聞集等に只纔えて見る

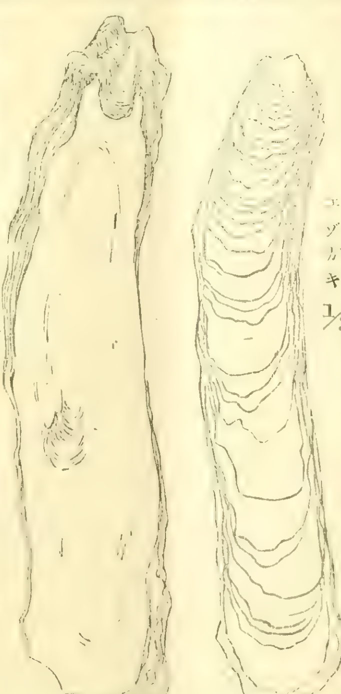
右全く分離して縁に毛を列生し、體内の諸器官はほゞはまぐりと同じであるが、肉足は發達して居ない。是れかきは他物に附着して生活するもの〻へ、自ら體を運動する必要がないからである。

マガキ



本邦産にして食用とせらる〻かきは幾種あるか精密なる調査を爲さぬければ、斷言はし難いが、外國の貝學者の鑑定に依ると三種としてある。一は俗にまがきと稱する普通の牡蠣で、殼は長卵圓形を成し、左殼片の殼頂は稍々長く突きいで〻少しく屈曲し、腹側縁が累々波狀を成し、表面の薄片は疎大にして木葉を重ねたる如き狀を成し、淡黄色で濃紫色の射線が二三條殼頂より腹側縁に向かつて走り、内面は白く光澤ありて貝柱痕は獨り栗色を呈し、大さ一寸五六分より二寸六七分に渉り、其の學名を Ostrea talienwhanensis, Cross. といひ、廣島縣の古來有名なる牡蠣は此の種類に屬するものである。一はえぞがき一名れぼがきにして俗にながゝきとも稱し、殼は甚だ長くして往往尺餘に達し、且頗る厚くして表面の葉狀薄片は極めて疎大である。其の學名を O. gigas Thunb. といひ、前種と區別してあるが、更に深く研究しなば、或は之れを合

エゾガキ 1/3



介類雜誌　第九號
明治四十年九月二十日發行

貝談漫錄（三ノ一）

岩川友太郎

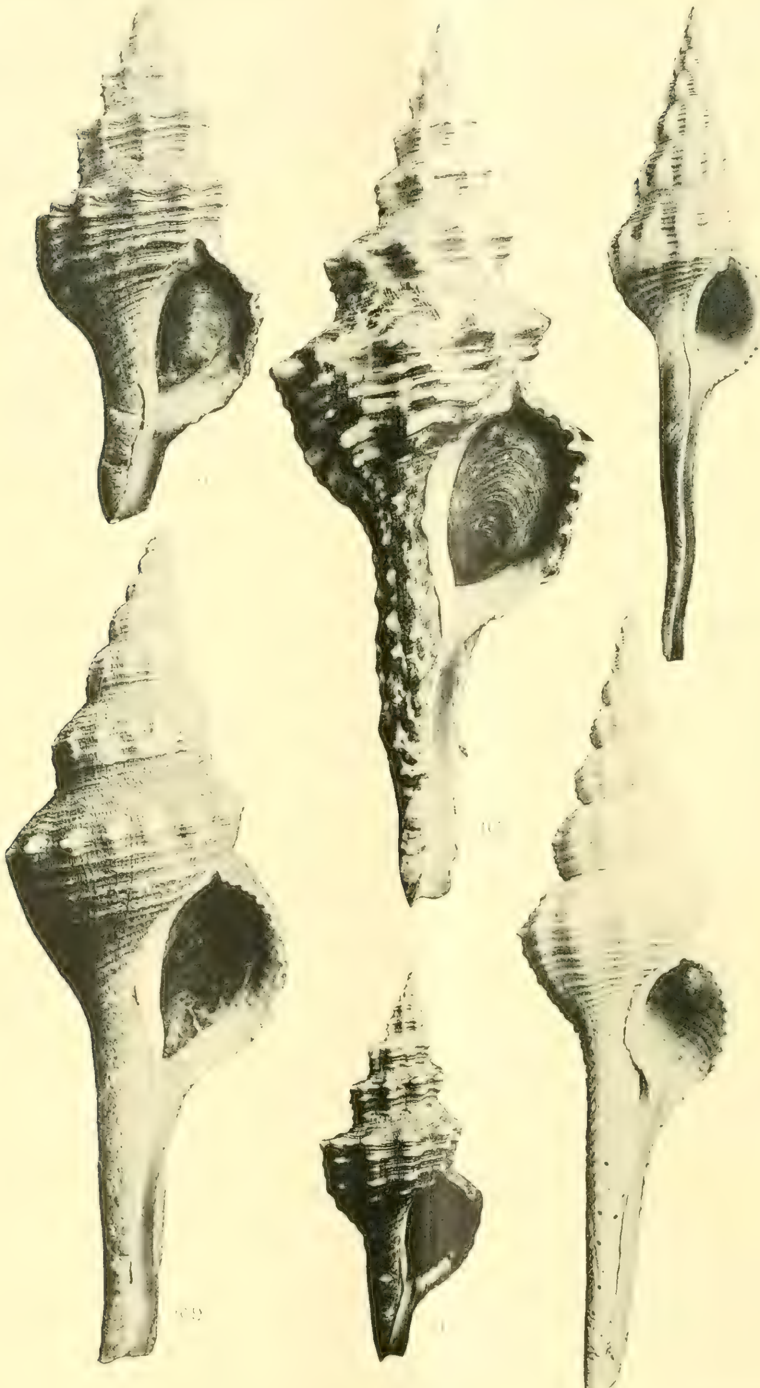
三　かき　牡蠣

かきは、食用貝類中、最も主要なるものに屬す。和名かきと稱するのは、其の殼を缺きて肉を採るが故なりと古書に見えて居るが、言海には石より掻き落す爲だとある、孰れが是なるか未だ詳かにせぬ。又漢字に牡蠣と書くことに就きても色々面白い說がある、其の中にも本草綱目に藏器の說として、天萬物を生ずる皆牝牡あり、獨り蠣は鹹水結んで塊を成したるのみ、陰陽の道何に依りて生ずるかとある。又宗奭の說に、牡蠣と言へるは牝蠣に對する謂にあらず、猶牡丹ありて牝丹なるものなきに均し、蚌の屬皆胎生にあらざれば卵生なり、此の化生は唯雄のみにして雌なし、故に牡の名を得、蠣といひ蠔といふは其の粗大なるを言ひたるなりと、古人の生物を解するや、孰れ此の類にて學術進歩の今日より見れば、其の說多く牽强附會ならざるはない。是は事物を觀察する方便未だ開けず、原理の發見せられざる罪であつて、強ち嗤ふべきことでない。

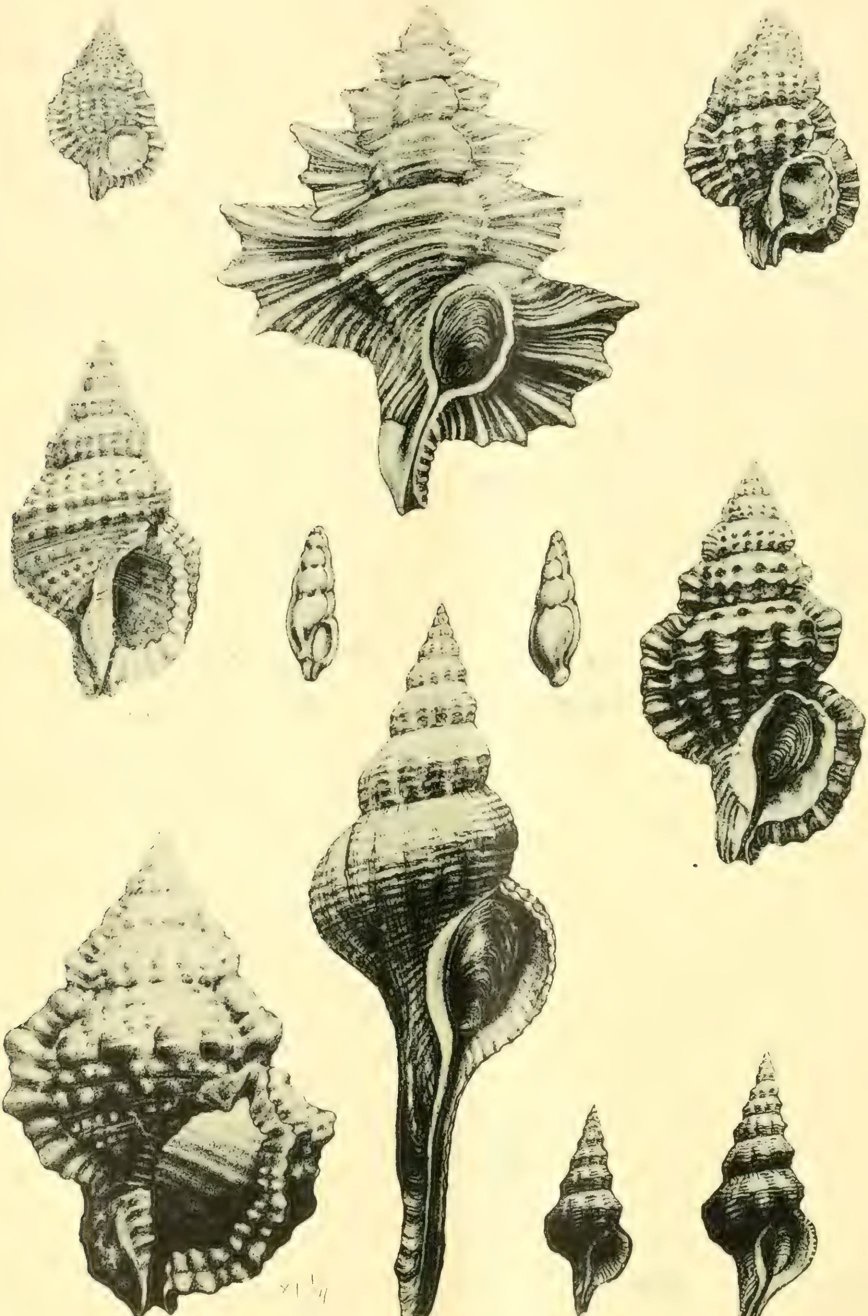
かきは、普通の二枚貝と違ひ、左右の殼片は著るしく不同である、即ち左の殼片は大きくして深く凹み、常にこれを下にして肉を收め、右の殼片は扁くして宛かも蓋のやうに上よりこれを覆ひ、且左殼片を以て岩石其の他の物體に附着して居る。殼は、覆瓦樣に積み重なれる數多の薄片より成り、左殼片の殼頂は多少突出して居るが、他の貝の樣に齒を有せず、唯茲に太き韌帶があつて殼片を互に結び合はせて居る。內面は、乳白色にして中央に唯一の貝柱の痕を止め、此の貝柱ははまぐり、しじみなどにある後貝柱の發達したるものにて、かきには前貝柱といふものが缺けてある。外套膜は、背部を除くの外、左



55, 56, 57, 58 Microcystina circumdata, Pils.
59, 60, 61 ,, hahajimana, Pils.
62, 63 ,, ,, var. jejuna P. & H.
64, 65 Microcystina hahajimana, var. pachychilus, P. & H.
66, 67 ,, h. var. kitaiwojimana, P. & H.
68, 69, 70 ,, anijimana, Pils. & Hir.



107. Fusus colus, Linn.
108. ,, nicobaricus, Lam.
109. ,, perplexus, A. Ad.
110, 111 } Fusus nigrirostratus, Smith.
112 ,, turricula, Kiener.



99, 99a. Ranella granifera, Lam.
100. ,, tuberculata, Brod.
101. ,, pulchra, Gray.
102. ,, gryina, Linn.
103. ,, pusilla, Brod.
104, 104a. Ranella anceps, Lam.
105. Fusus perplexus, A. Ad.
106, 106a. Ptychatractus coreanicus, Smith.

加藤延年著

◉袖珍美本 貝ひろひ　全一冊（近刻）

貝ひろひ！樂しき思ひの止め難きかな、あゝ波打つ際に踏みはけ入白砂の背！永劫の色を湛にし千古の情を包む海の其の大なる懐より吐きし秘密の影、趣味の豊なる可憐の貝は、學科的頭腦を以て而かも詩的情操に富める者にひろはれ、茲に無限の意味を語る、津々たる趣味を明確なる圖解を相須つて、最も平易に而かも最も面白く、分類し名稱を其他貝類に關する一般の知識を網羅し、兼ねて悠々の趣味を傳へ來る、由來我邦たる北樺太より南臺灣に至り、各帶の産一々そして備はらざるなく、實に世界の驚異たり、若夫れ珍種異類を踏み付けて顧ざる海水浴客の如き、一たび本書を繙かば、全國到所の避暑愉快更に其愉快を倍するものあらん、幸に愛讀を賜へ、

◉新案 貝合せ（說明附き）　近刻

優美なる「貝おほひ」の遊びが公卿諸侯の姫君たちに喜ばれしは昔、今や巧に貝類の和名學名等を案記して科學的の貝合せが作られた、貝殼に美麗なる彩色圖もある實に貝類をして面白いのみならず知らず〳〵の間に、貝類上の知識を興味をもたらすることを大なるものがあるであらう

◉貝類繪はがき　四枚一組　郵稅共拾五錢

貝類數種を選びて上等の紙質を用ゐ實物大の寫眞版をなし學名、和名、産地等も附記しあり優佳にして高尙なる嗜好に適す

京都市烏丸通下長者町上ル

發行所　平瀨介舘

◉廣告

昆蟲世界　毎月一回（十五日）發行

昆蟲世界生れて以來茲に十年號を重ぬる百十五昆蟲に關する專門雜誌にして毎號正確鮮明なる多數の圖を挿入し害蟲驅除の指導者となり昆蟲學研究者の機關となり當所の發展と共に益々其改善を加ふ昆蟲を學ばんとするものは見よ農業を營まんとするものは讀め本誌の價値如何世既に定論あり茲に贅せず

定價一部金拾錢　一ヶ年十二部前金壹圓八錢（郵稅不要）

發行所　岐阜縣岐阜市公園內　名和昆蟲硏究所

◯廣告　平瀨介舘雜誌部

○發行　介類雜誌ハ毎月一回二十日發行可致候

○前金　介類雜誌代金拜ニ廣告料ハ前金ヲ以テ御拂込被下度候（郵券ハ一割增ニテ代用）

○爲替　郵便爲替ハ室町中立賣郵便局宛ニ御振込被下度候

○領收證　本誌代金御送付ノ節ハ別ニ領收證ヲ出サズ本誌ノ發送ヲ以テ御報告ト可致候

○前金濟　御拂込ノ前金相盡キ候節ハ本誌包紙ニ濟ノ文字ヲ朱印シ御送金ヲ乞フノ表章ト可致候

本誌定價

一部	金貳拾錢	郵稅壹錢
六部	金壹圓貳拾錢	郵稅不要
十二部	金貳圓參拾錢	郵稅不要

本誌廣告料

五號活字一行、廿五字詰	金拾五錢
半ページ	金參圓
一ページ	金五圓

明治四十年九月廿日印刷
全年全月廿三日發行

不許複製

發行者　平瀨與一郎
編輯者　平瀨信太郎
印刷者　川勝靜三郎
印刷所　合資商業會社

發行所　京都市上京區烏丸通下長者町北龍前町十四番戶　平瀨介舘（電話九百七十四番）

大賣捌所
京都　東枝律書房
全　東京堂
全　東海堂
東京　北隆館書店
大阪　大華書堂

明治四十年一月十九日第三種郵便物認可（毎月一回二十日發行）

明治四十年九月二十日發行　（禁轉載）

介類雜誌

目次

第一卷

第九號

明治四十年十月二十日發行
明治四十年一月十九日第三種郵便物認可（毎月一回二十日發行）

THE CONCHOLOGICAL MAGAZINE

A MONTHLY

DEVOTED TO THE STUDY OF JAPANESE SHELLS.

PUBLISHED BY Y. HIRASE.

VOL. I. OCTOBER 1907. No. 10.

CONTENTS.

Notice: The subscription price for foreign conutrics is $ 1. 50(3 yen)per annum. All letters and communications should be addressed to Y. HIRASE, Shimochōja-machi, Karasumaru, Kyoto, Japan.

JAPANESE SHELLS,

Marine, Fresh-Water, and Land Shells of Japan, Loochoo Is., and Formosa,

Fine specimens, (accurately determined, and exact localities given,) of a great number of species, many of them new or rare, for sale at reasonable rates.

Catalogue sent on Application. Specimens will be sent on approval to purchasers known to me or giving satisfactory references.

Y. Hirase,
Kyoto, Japan.

Payment should be made by postal orders; bank drafts are also acceptable, when registered.

Prices are the lowest possible, though varying more or less according to the quality and the amount of the goods ordered.

Orders from unknown correspondents should be accompanied by a remittance or a satisfactory reference. A remittance is in many cases preferable, as it will prevent the loss of time otherwise needed for making necessary enquiries. The full address of an unknown correspondent should be written clearly.

廣告

○介類學名調査ノ依頼ニ應ズ

介類ノ學名調査ヲ希望セラルヽ方ハ左記ノ諸件御含ミノ上御申込アルベシ

○介類雜誌購讀者ニ非ザレバ調査ノ依頼ニ應ゼザルヿ

○調査ヲ請求セラルヽ介類標本ハ色澤幷ニ形狀ノ完全ニシテ克ク成長セシモノヲ擇ビ一種ニ付數個宛寄送セラルベシサスレバ各種一個宛ニ學名ヲ記シテ返送シ殘餘ハ調査報酬トシテ當舘ニ受納スベキヿ

○荷物ハ念ヲ入レテ適當ナル裝置ヲナスベキヿ

○標本ニハ產地幷ニ採收年月日ヲ詳記セラルベシ

○標本返送料ハ依頼者ニ於テ負擔セラルヽ事

○介類標本購入

介類ヲ採集シ當舘ノ購入ヲ希望セラルヽ方ハ左記條件御承知アランヿヲ乞フ

○當舘ニテ購入スベキ介類標本ハ完全ナルモノ卽生キタル介類ヲ採收シ充分成長シ形狀色彩ノ損傷セザルモノヲ擇ビ且「フタ」アル種類ハ「フタ」ヲ添ヘ二枚介ハ左右合ヒタルモノナルヿ可トス

○最初ニ見本ヲ送付セラルベシ見本ニハ產地ト採集年月ヲ記シ且番號ヲ附シ同樣ノモノヲ寄送者ノ許ニモ留メ置カレ番號ニヨリ互ニ通信ノデキル樣ニナスベキヿ

○當舘ハ見本ノ寄送ヲ受ルヰハ調査ノ上要用ノ種類アレバソノ番號ト員數(種類ニヨリ一種ニ付數百個ヲ要ス)トヲ記シテ注文ヲナスベシ

○介類ヲ採收セシヰハ死セザル內ニ煮且肉ノ殘ラザル樣注意シテ拔キ去リ克ク洗ヒ清潔ニナシテ送付セラルベシ

○陸介ノ中ニハ肉ノ拔ケガタキ種類アリ夫レ等ハ生キタルマヽ寄送セラルヽモ妨ゲザレドソノヰハ大形ノモノハ一個宛中形ノモノハ二三個宛紙ニテ包ミタル上木製ノ箱ニ入レ荷造セラルベシ然ラザレバ途中ニテ破損シ又ハ腐敗スルノ恐レアリ又產地ノ異リタルモノハ夫レ〳〵別ニ小箱ニ入レ濕セザル樣ニナスベキヿ但紙ニテ包ミ又ハ產地異ルモノヲ紙箱ニ入レ別々ニナシ置キテモ時トシテ紙ヲ喰ヒ破リ他ト混合スルヿアリ注意ヲ要ス

○荷造ハ途中ニテ破損セザル樣丈夫ナル木製ノ箱ニ入レ且ツ內部ノ動搖セザル樣充分注意ヲ加ヘラルベシ倚古綿古切等ノ類決シテ荷造ニ用ヒザルヿ

京都市烏丸下長者町北入(電話九七四番)

平瀨介舘

たま
　夜光貝細工（琉球の産）
はいせん　さかづき　いんざい　たま
　あはび貝細工（志摩の産）
茶たく　かしばち
　はしだか　貝細工（琉球の産）
さかづき　つまようじ入
　小供みやげ貝の笛（志摩の産）
はらがひ　やつしろ貝　天狗にし
ばいがひ
　美術貝細工（同上）
鳥　うめ貝、ひばり貝、　猫　梅貝、　筆立　硫黄を用ひてかためる、きしやご、あかがひ、かやのみ貝、しどろ、　かしばち　筆立と同様、
菊　しほふき貝、うめがひ、
　其他
月日貝は　皿　しや光貝は、印材碁石（琉球）

ほたて貝は　鍋（北海道）　眞珠がひは　しやくし（志摩）などである。聞く所によると、貝細工に從事してをる人が一百餘人で、商店が十數軒、年販賣額が壹萬圓餘といふことである。

櫻がひひらふ二見の海士が子は
　袖にも涙の花や散るらむ

正誤

（八號）

頁	段	行	誤	正
一六	下	一	イボボラ	イボホラ
一七	上	一	ミヤコボラ	ミヤコホラ

（九號）

頁	段	行	誤	正
一〇	上	一二	gryina	gyrina
一二	下	三	sinistraiia	sinistralia
三一	上	一五	salcataria	sulcataria

ら、海軍望樓の設備を見物し、五時半過ぎに歸宿した。明日は知夫里島に渡る心組である。

雜報

○熱心なる採集家

まだ斯界に其名を廣く知られてはゐないが、數十年來中々熱心に集めに集めて、今では其總數四百種も所持してをる人がある。其人は大阪市南區生玉前町、宗惠院の住職佐伯眞梁師である。師が集められた多數のうちには、中々珍らしいものもある。かやうに熱心な日本的採集家ではあるが、まだ不幸にして廣く世に知られてゐない。今は病褥に呻吟せられる身であるが、それでも猶孜孜として怠らず集めてをられる。以前は毎月一回、同寺院内で考古會といふ名で、同好者數名相集り、採集品を陳列したり、或は研究せられたとの事であるが、病を得られてからは、それも思ふやうに行かないので、甚だ殘念がつてをられるさうである。が何時かは貝類展覽會を開いて、自分の採集品は勿論の事、同好者の出品も求めて、可成有益な會を催したいとの熱心が、愈事實となつて現はれる運になつたさうである。其會期は十一月頃といふことゝ、われ〳〵は此會が極めて有益に進行して、斯界の爲に貢獻し、一般世人に幾分の印象にても與へむことを希望してやまないのである。

○二見浦の貝細工

伊勢に遊ぶものは、必ず宇治に遊ぶであらう。宇治に遊ぶものは、必ず二見浦に遊ぶであらう。二見浦の夫婦岩、日の出の景は、必ず一度は見るものであるが、思つた程にないとの感は、誰にも浮ぶであらうが、然し其處に思ひ懸けない貝細工のくさ〴〵が、旅人の眼を惹くのは又一興であらう。今其種類をあげてみると、

丁貝細工

くし　かんざし　もびわ　いんさい

九月十八日、晴天。早朝から出發、まづ後醍醐天皇黒木の行在所を訪ひ、後高崎山に行つた。道程が甚だ遠く十一時前山頂の山祠近傍に着した。此所は海軍の望樓のあつた所で、設備なほ依然としてをる、高崎山の社祠近傍を除いては、悉く小柴、松、或は禿山で、數年毎に麥作をする牧場兼畑地で、探すべき見込がない。自分らは右小祠の背部にある、一ヶ所の廢れたる椎茸培養地で、採集を試みた。幸にして新にツリシヨプリタの稜骨あるもの、クロージリヤの中形の珍らしきもの一ケ、エナレイソニア等を得た。何れも死に絶えたものと見え、死殼或は幼介のみである。此外小クロージリヤ數十ケ、ガテセラミヲンパラ、カリゾナの死殼、クロージリヤジヤポニカ、同ビラブラタ、ツリシヨプリタ、クロリチフの死殼一ケ、ミクロシスチナを多數得た。此日は自分に取りて、大好結果の一日であつた。只殘念に思ふことは、其索むる區域が、明一日で盡きることである。尙明日この地をかけ廻つて試みる考である。午後六時歸宿。

九月十九日、晴天。早天渡舟で別府まで行き、後高崎山に登つた。再度の道であるから稍近い感じがして十時に着いた。それから昨日の續きを一心に探索する。午後二時頃には、最早尋ぬるヶ所も盡き、善い種類もあるけれども僅少で、中止の止むを得ざるに至つた。今日の得ものは、ユーロタ（カサイカ）形のツリシヨプリタ生殼二ケ、死殼數ケの外、幼介少々、小クロージリヤ百餘ケエナレイレニアナ數ケ、クロージリヤジヤポニカ十數ケ、全ビラブラタ、ヘリシナジヤポニカ少々、ミクロシスチナ四五十ケ、カリゾナ、ミヲンパラの死殼少々、珍らしい中形クロージリヤ　ホンダナ類似）二ケであつた。嗚呼一叢の椎櫟の樹林中にも、神の妙なる御業は秘められてある。採れども盡きぬ自然の富かなと、坐に天地の妙をたゝへざるを得なかつた。この樣な樹林は其後又と見出すことが出來るであらうか否。右の採集を了つてか

あるから、島後の中村のやうな結果は得る事が出來なかつた。

九月十六日、午前一時頃から降雨、明けてからは曇、午後は晴。雨後の天氣を幸に、案内者と一緒に、陸路燒火山に行く積りで、まづ東方から南方に廻り、正午前に難場を遠く通り抜け、茨の中、柴の中、道のない所を、非常の辛苦で、辛と午後二時に燒火神社にでゝ、午食を喫した。食後は附近で、小クロージリヤ少々を得たけれども、多數を得ることは出來なかつた。此の社には立派な社殿、幷に數百名の參詣者を容るゝことの出來る、社務所兼旅宿の大廈がある。掃除が行き屆いて、眺望が極めて佳である。麓から一里、宿からは一里數丁、自分達は廻り廻つて登つたから、多分二里餘の道は歩んだであらう。今日の採集で、クロージリヤジヤポニカ六十ケばかり、同ピラブラタ數ケ、ミクロシスチナ稍多數、デプロムマチナ、アリコース等少數、ガチゼラミチンパラ數ケ、大蝸牛幼介二ケ、カリヅナ一ケ（但しこれは破損したから捨てた）ガチセラ一二ケ（これも全樣破れたから捨てた）抔であつた。午後六時に歸宿。

九月十七日、曇、雨。船で燒火山の東南海を航して、西方に回り上陸する。それから阪を昇り、同神社の上方に着いた。頻りに探索したけれども何物も得なかつた。折柄降雨が甚だしいので甚だ困却した。彼地此地と有望な方面を探索したけれども、何物も得なかつた。クロージリヤジヤポニカ二ケ、ツリシヨプリタ數ケ、デプロムマチナ僅少、ヘリシナ二ケ、ガチセラミチンパラ三ケを（一ケは後に破損した）得た位で、甚だ殘念であつた。午食後少々寒さを覺えたけれども、勇を皷して社殿の近邊の塵のなかを探し、クロージリヤピラブラタ數ケ、小クロージリヤ十五ケを得た。探す所が盡きたので、午後三時歸途に上つた。五時過歸着。最早同山も見込がないから明日は高崎山に向つて試みる考である。

同小、同シーボルデー、ヘリシナジヤポンニカ、ユーロタカリゾナ。同ルハナ、ガテセラミチンパラ、ツリショプリタ、ミクロシスチナ等を得た。正午過ぎになつて最早採集するケ所も盡くしたので、宿に皈る。さて皈へつてから、濕れた衣服外套を乾し、大の部の拔肉掃除等をした。午後五時に終了。以上は旅宿分家での作業であつた。午後當村の天神社境内の銀杏木で、クローザリヤシーボルデーを數多得た。此日正午頃から雨歇み、段々雲風が和いで來た。午後四時頃は全く快晴となつた。明日は寄港中の第一隱岐丸も出港するであらう。上陸の船客も乘船するであらう。自分も北方菱浦(ひしうら)へでゝ、西の島に渡航する積である。

九月十四日、晴。午前八時前、村の小學校に行き、校長に面談し、同地産の陸介九種に學名をつけ寄贈した。宿に皈り支拂を濟し、荷物を負ひ、案内者を伴れないで出發した。新道が開けてゐて餘り困難はなかつた。太井、布施、西分等を過ぎ、二里程の菱浦に午前十一時に到着した。渡船で西の島に渡つた。別府に行かうと考へたが船人のいつた言葉を有理(もつとも)と信じ、燒火山(たくひさん)に近い、大山勝に行く事に變へて、其方へ渡る。正午頃到着、旅宿松谷作四郎氏方に投ず。明日から採集に從事する考。さて見渡す限り、西の島も中の島同樣、或部分の外は全く禿山である。

九月十五日、晴。早朝から渡舟(宿の主人の船)に乘り、燒火山の南麓、文覺の崖の近傍から上陸して登山した。半腹の所々で採集した。甚だ少ない。クローザリヤジヤポニカ五六十ケ、大蝸牛の死殼一ケ、サイクロホラス一ケ、小クローザリヤ四五ケ、小介僅少を得た。其他カリゾナの死殼、又ガテセラミチンパラの幼介を見たけれども、拾はなかつた。又ヘリシナジヤポニカも得た。クローザリヤジヤポニカは、まだ生のある立木の老幹でみだされた。此地は椎茸の培養が、既に數年前に了つた所で

の分よりは小形のもの、及幼介二三ヶと、ツリショプリタ二三ヶと、チペアスキヨトエンシス一二ヶと、デプロムマチナカッサ數ヶと、パレイナプシラ一二ヶと丈であつた。明日は知々井崎へ行くがいゝこのやうに、宿の話であつたが、今日の道筋から察してみると、此の中の島は全然(まるで)松山で、それも古木といふはなく、殆んど禿山といつてよい有樣である。又村落の方でも、採集を試むるに足る所は、只の一ヶ所も見當らない。恐く西の島の方に移るのが得策であらう。正午過飯宿。海上不穩の爲め瀛船は境港への航海を見合せ、再び知々井に入港した。愈船は明朝出港と決せられたといふ事で、乘客の多數は上陸して投宿した。で宿は大混雜を極め、其の爲め自分らは。近隣の分家の方に移された。此中の島は一郡一村、即ち海士(あま)郡で海士村である。

九月十二日、二百廿日、暴風雨。荒れ天空(ぞら)ではあるけれども、遊ぶに忍びないで、案內者の老婦人と倶に、最も雜木の多い知々井崎の山に行つた。熊野神社の地點の下部分で、雨風に戰ひながら採集した。何分樹木の少い上に、松の樹ばかり混じてゐて、充分の効果を得ることは望がたい。得たものは、大蝸牛ユーロタルハナ、カリヅナ、（カリヅナは中國邊のものに似て、島後のものには似てゐない）ガデセラミチンパラ、（小形で島後のよりも一層小い）サイクロホラスハークロチー、クローヅリヤジヤポニカ大變種、（出雲產と同種の樣に思はれるもの）とツリショプリタ、ブレクトフロピス、ミクロシスチナ二種、デプロムマチナカッサ等を得たけれども、幼介であるか、又は極僅づゝで殘念であつた。風雨が烈しくつて、とても堪へきれないから、午後一時に飯宿した。昨日と同じく分家の方に休む。

九月十三日、暴風雨はなほ止まない。が午後からは段段霽模樣となつた。風雨を冒して、昨日殘して置いた部分の採集に行つた。困難と戰つた末、クローヂリヤ大、

ドクトル、ギレマードド氏は、フエズとタンヂールとの間の砂漠中に、ヘリツクス、ピサナが群生して、矮林から双拳大の塊となつて懸垂してをるのを見たといふことである。

アルゼリアのサハラに産する陸介は、歐洲産の同種から見ると、大形で美麗である。砂漠産の陸介は、概して白色か或は淡褐色を呈してをる。或は其の殼は非常に厚くつて、酷發及び蒸發から保護せらるゝ。

淡水産介は屢温泉に住んでをることがある。即ちチリチナ、フリユヴエチリスは、バクテレ、ド、ビゴールで、華氏六十八度の水中に住んでをり、又東部ピリニース山中には、華氏七十三度の温泉中に、ビシニアの一種が生活してをる。又プレーンヴィル氏は、ビシニアが、華氏百廿二度の熱湯中に住んでをる一例を記載せられた。

山陰地方介類採集記（承前）

介舘内　黒田生

九月十一日、荒、降雨。午前二時半起床。食事をすまして乘船の時刻を待つ。四時前に汽笛が聞えた。で宿料の拂をして出掛ける。船に乘り込み、五時に出港する。海上は思つた程に荒くない。八時前に、島前中の島知々井に入港した。上陸直に旅宿若林支店に投じた。天氣が悪いから、今日は見合せる事にして、明日の爲に案内者を頼んで置く。で今日は後鳥羽院崩御の跡を拜觀する爲に單身で出掛けた。一里ばかり行くと海士村の中里村に玉垣をとり繞らして、一小森をなしてをる。隣に海士助九郎といふ豪士がある。御陵内には無論入ることは出來ない。裏の方に一小祉がある。この森で探される丈は探して見たけれど、別に珍らしいものはなく、且つ多數も棲んでゐない。それに雨を冒しての事であるから、思ふ樣に行き兼ねた、得たものは ガラセラ ミチンパラの島後

は、バレア、ポルヴオルサ及びクローヂリア、ルゴサ等の陸介十四種があるといふことである。

ヴイツリナは、霜の朝、霜のつんだ葉の上を匍匐し、ヴイツリナ、グラシアリスは（チヤーペンチール氏に從へば）、一年中の九乃至十ケ月間、雪を以て覆はれてをる、アルプス山中に住んでをるといふことである。

アリオンは、防護の殼を有つて居ないが、普通の蝸牛から見ると、寒に耐ふる力が強いと見えて、秋になつて蝸牛よりも、冬眠を始むることが遲い。有磨陸介は、磨があるから、寒さに耐ふるであらうと想像せらるゝのであるが、實際はさうでなく、寒に耐ふる力が極めて弱いので、全屬殆んど熱帶或は半熱帶にのみ産する。北米南部諸州に住んでをつた、ヘリシナの一種のやうなのは、或歳餘り寒さが厳しかつたので、全種悉く絶滅した事があつたといふ事である。

陸介の住んでをる最高所は、恐くヒマラヤ山中に在つて、高さ一萬四千呎を算する、リチ峠であらう、此の地にあつて、二種のブリミナス（アーキユエタス及びニヴイコラ）は、雪斑である杜松林中に住んでをり、又一ケのアナデナスは、同所に在つて一万五千呎の高さで發見せられた。又リムニア、フーカリーは、ランドールにあつて一万六千四百呎餘の高所から採集せられた。ペリユー及びボリヴイアのアンデス山中には、ブリミユラス五種、プマ一種、リマツクス一種、一万五百呎乃至一万五千呎の高さに住んでをり、ボリヴイア高原にあるチ、カ、湖は海面から一万二千五百五十呎の高さに位してをるにも拘らず、猶ほ其の中に種々の淡水介を産するといふことである。

アルゼリアの砂漠の或部に於ては、一本の草もなく、日中の温度は華氏の百十度に上るに、全地時としては、ヘリツクス、ラクチアを以て覆はれ、爲めに眞白に見ゆる事があるといふ事である。

ふことである。

或書に（テー、スコット氏の介類學二百三十頁）、厨に飼はれたヘリックス、アルバストラムが、何時も放水管の直下に行つて、冷水を浴するのを樂しみとするといふ事が記載してある。

又或種に至つては、少しく其境遇を變ずると、直ぐ滅亡するものがある。例へば巴西及び南米の北部に産してサクシテアに類似してをる、オマロニクスといふ一屬は、常に水邊に覆ひかゝつてをる植物の上を匍匐するにも拘らず、之れを水中に入れ、或は少時之れを他所に移すと直ぐに死滅する如きである。

二、寒熱に耐ふる力

或種のものは極寒極暑にも堪ふるのである。今日までに發見せられた有肺類で、最も北方に住んでをるものは淡水介フィサ（アプレクタ）、ハイホノラム、リンテである。其の殼は脆いから取扱に注意しなければ、直ぐに破損して了ふ。此の介類は北緯七十三度半に當つてをる、北シベリアのタイミル半島に住んでをる。此の地の平均温度は、華氏の十度であつて、七月には華氏の四十度に上り、一月には華氏零下卅度に下るといふことである。

リムニディー及び亞熱帶の淡水介の多數は、常に氷の下に住んでをるばかりでない、氷中に包まれ、また自身に氷ることがあつても、矢張生存することが出來るといふことである。ガーニール氏は紀元千八百二十九年の末から、翌年の始めにかけての冬中、リムニア、オリキユラリアを小皿に入れて置いたのに、其れが氷結して固塊となつたので（華氏零下二度であつた）、最早死んだことと頓悟てをつたのに、不思議な事には、氷が溶けるに隨つて彼等は漸々と蘇生したといふことである。又パルデイナ、ヴィヴィパラは、氷解の後直さに幼兒を産んだといふことである。

北緯六十七度卅七分の（北極圏内）那威國のボーヅに

高、五厘五毛、徑、九厘、

形狀、殼質薄く、微小なる臍孔を有し、上面には細密なる放射脉及溝あるも底面は平滑なり、螺塔は低圓錐形をなし、殼頂は鈍し、螺層は稍や脹れ、徐々に増大し、四階半を數へ、体層は著しく廣し、周縁圓く、下面脹れ、殼口は新月形をなし、内唇の上部は擴張し、少しく内方に厚くなれり」

彩色、半透明にして光澤強き帶黄角色なり」

本種は余の新發見にかゝり、採集番號は一三七一にして、僅かに四箇を採集せしに過ぎず」

正誤 第二號第三十頁上段第十二行凹みハ低くノ誤ニ付正誤ス

詠蝸牛似介堂雅契　　卓翁

泥壁雨痕濕　流涎寫字成
角頭有双國　爭地競功名

雜録

陸介及び淡水介の習性 其一

一、感覺

多くの陸介は吾人の想像してをるよりは、一層よく感ずるものであらう。殊に空氣の温度は、著しく其の皮膚を刺激するものと見えて、蝸牛は濕つてをる夕、殊に雨後に出て來るのである。さうして其の出て來るにも、雨滴が其の軟な觸角を撃つのを恐るゝものゝやうに、屹度降雨のやむのをまつのである。又蝸牛を捕へて玻璃鐘下に置いても、若し外氣の濕潤となることがあれば、さながら外氣中にをるやうに奮興して活動を始むるといふことである。

又濕地に住んでをる或種の蝸牛を、其の常棲所から移しても、猶ほ能く水を求めて、其の故郷を發見するとい

をなし、下面膨れ、周縁圓く、下面は微透明にして、強き光澤あり、上面は非常に精密なる垂直卽ち放射脈を有せるを以て不透明なり、而して該脈は擴がりて周縁を超へ、光澤ある底面の周圍に一帶を見はし、之を強度の廓大鏡下に檢すれば、精巧にして相距れる螺線を見る、螺層は膨れて凹階を數へ、縫合著し、殼口は新月形をなし、內唇縁は稍々厚くなることなく、其插點にありて三角形に反曲せり」

彩色、琥珀色にして、上面は汚絹光澤を有せり」

本種は余の新發見にかゝり、採集番號は一三六八なり、標品の採集せられたるもの僅かに四個に過ぎず

本種は內唇の滑層を有せざるを以て、或は他屬に編入せらるゝに至るやも知る可らずと雖ども、之をKaliella屬に編入せんには螺層の階數餘りに少し」

ホタワヒメベツカフ 新稱、

M. lissobasis, Pils. & Hir.

(陸產、第十版、第八十四、及第八十五圖)

產地、臺灣省斗山(ホタワ)、

高、四厘五毛、徑、七厘五毛、

彩紋、前種に酷似するも小形にして殼口廣く、殼質稍薄にして、微小なる臍孔を具へ、螺塔は低圓錐形をなし、底面膨れ、上面及周縁帶及周縁下帶は絹光を有し、他の底部は平滑にして光澤あり、螺層膨れ凹階を數へ、縫合著しく、周縁圓し、殼口は廣き新月形をなし、內唇は斜向し、少しく內方に厚くなりて、其縁は少しく擴張せり」

彩色、半透明の淡黃角色なり」

本種は余の新發見にかゝり、採集番號は一四二三にして、採集せし標品の數僅かに二十個に過ぎず」

コスヂヒメベツカフ 新稱

M. radiata, Pils. & Hir.

(陸產、第十版、第八十六、及第八十七圖)

產地、臺灣宜蘭、

M. spadix, Schum. & Bttg.

（陸產、第十版、第八十、及第八十一圖）

產地、打狗、

高、一分六厘、徑、二分三厘五毛、

形狀、殼質薄く半透明にして、廓大鏡を以て窺へは、全面に微細なる生長線を見るべし、螺塔低く、螺層脹れ凡そ六階內外を數へ、縫合著しく底面脹れ、中央は凹みて深き臍孔をなし、殼口は兩端を截切せし斜めなる新月形を呈し、內唇は殆んど垂直にして、底唇との間に鈍角をなし其上部は狹く反曲す」

彩色、上面は淡黃角色にして、縫合上褐色帶を具へ、底面の中央部は乳白色を呈す」

本種は褐色なるを以て直ちに他種と識別することを得べくもと**ラムプロシスチス**（Lamprocystis）屬として記載せられしも、內唇の結節は明かにヒメベツカフ屬たることを見はせり」

余は未だ本種を採集すること能はず、故にピルスブリー氏の寄送されたる標品を以て圖せり」

變種**オビウラジロヒメベツカフ** 新稱、

M. spadix, var. cinctus, Pils.

（米國費府博物學會々報、千九百〇一年三月號第百九十四頁より譯す）

殼は白色にして、縫合上に赤褐色の一帶を有し、臺灣にてチェーン、ビー、スチーヤ（J. B. Steere）氏の採集せし所にして、氏は亦ウラジロヒメベツカフの多數を採集したり」

ギランヒメベツカフ 新稱、

M. lamprobasis, Pils. & Hir.

（陸產、第十版、第八十二、及第八十三圖）

產地、臺灣宜蘭、

高、五厘五毛、徑、八厘、

形狀、殼質薄く微小なる臍孔を具へ、上面は低圓錐形

産地、大隅池地島(大島の屬島)

高、一分强、徑一分七厘、

形狀、殼は微かなる臍孔を具へ、螺塔は脹れたる低圓錐狀にして、底面脹れ、前方にありては周縁に鈍き角を有し、表面に輕き生長線あるも螺脈を見ず、螺層脹れ、五階半を數へ、徐々に增大す、縫合著しく、体層の前部は曖昧なる角を具ふるも、其後半は周縁圓し、殼口は新月形をなし、內唇は上方に狹く反曲傾斜し、內方に厚くなれり」

彩色、極めて光澤强き帶黃色にして、微透明なり」

本種はバガヒメベッカフに酷似するも大形にして螺塔低く、螺層の階數は半階少し、余の新發見にかゝり採集番號は一三二七なり」

本種の標本は只七ヶ採集せしのみにて、ピルスブリ氏はEdgar A. Smith氏の名を採り、之をエドガリアナと命名せしが余は邦人の呼び易からんため其の姓を採り、スミスヒメベッカフてふ和名を附したり」

クメヒメベッカフ 新稱、

M. kumejimana, Pils. & Hir.

(陸産、第十版、第七十八、及第七十九圖)

産地、琉球久米島、

高、八厘、徑、一分二厘、

形狀、殼質薄く、微小なる臍孔を具へ、螺塔は低圓錐形をなし。周縁圓く、底面脹れ、極微の螺線を刻し、表面には粗き放散狀の溝を有し、其上方は距離不規則なり、殼頂鈍く、螺層は四階半ありて、少しく脹れ、縫合下少し凹めり、殼口は新月形をなし、內唇緣は上部擴張し、內方厚くなれり」

彩色 帶黃色にして、輝ける光澤を有し、微透明なり」

本種は余の新發見にかゝり、ヒメベッカフに近似し、著しく大形なり」

ウラジロヒメベッカフ 新稱、

高、九厘、徑、一分五厘、

形狀、殼は臍孔を有し、低平なる馬蹄螺形にして、螺塔は低圓錐形をなし少しく脹れ、殼頂鈍く、螺層は五階半を算へ、徐々に増大し、体層は周緣圓く、下面凸く、殼口は新月形をなし、內唇は弓狀に曲り、內部に滑層を有し、內唇緣は擴張し、其上部は狹く反曲せり」

彩色、光澤ある淡琥珀色にして半透明なり」

本種はバガヒメベッカフに酷似するも体層圓くして內なきを以て區別するを得べく、ヤクヒメベッカフよりも大形なり、

本種は余の新發見にかゝり探集番號は一二八二にして、屋久島の採集者太倉專助氏の紀念の爲めにこの和名を附す」

コシタカヒメベッカフ　新稱、

M. Hiraseana, Pils.

（陸産、第十版、第七十四、及第七十五圖）

產地、種子島及屋久島、

高、一分一厘五毛、徑、一分四厘、

形狀、殼は馬蹄螺形をなし、殆んど被はれて、微少なる臍孔を具へ、周緣には狹く且つ鋭くして突出せる龍骨を有し、上部の縫合にありても之を認むることを得べし、螺塔は圓錐形をなし、殼頂鈍く、螺層脹れ五階四分の一を數へ、底面脹れ、其中央は狹く凹み、殼口は兩端を截切せし斜めなる新月形をなし、口緣は簡單にして鋭く、內唇は臍孔附近にて反曲し、白色の滑層を有して內部に厚くなり、往々波狀をなせり」

彩色、褐色をなし、平滑にして光澤を有し、微透明なり」

本種は余の新發見にかゝり、探集番號は六六七なり」

スミスヒメベッカフ　新稱、

M. Edgariana, Pils. & Hir.

（陸産、第十版、第七十六、及第七十七圖）

長、二•五乃至三•五吋。

帯青柑褐色にして、肋間は栗褐色の斑点を有し、口内は柑黄色なり」

第七十七圖



レグルヴイロストリス（トライオンより）

デセイス氏は本種をL. carmiferus, Lam. の一變種となせり、或は然らん、然れども、該種に比すれば比較的狭長にして、体層上の結節間隆起帯は該種程廣からず、臍孔は著しく廣し」

正誤 第八號二百四十八頁上段二行三行 ボラガヒはホラガヒノ誤植ニ付正誤ス

日本陸産貝類圖說（五）

ヤクヒメベツカフ 新稱、M. yakuensis, Pils.

（陸産、第十版、第七十一、及第七十二圖）

産地、屋久島、土佐、加賀白山、佐渡等、

高、五厘五毛、徑、八厘、

形狀、殼は半透明にして薄く臍孔なく、両凸扁球形をなし、平滑にして光澤を有し、螺搭極めて低く、螺層は四階半を數へ、徐々に増大し、縫合は著明にして、体層の周縁圓く、其下部は脹れ、臍部凹み、殼口は新月形をなし、口縁薄くして脆く内唇縁は反折し、稍や厚くなれり」

彩色、光澤ある淡黄角色なり」

本種は種子島又薩摩産なる"Macrochlamys" tanegashimae, Pils. の細き様なる形狀をなし、余の新發見にかかり、採集番號は九〇〇なり」

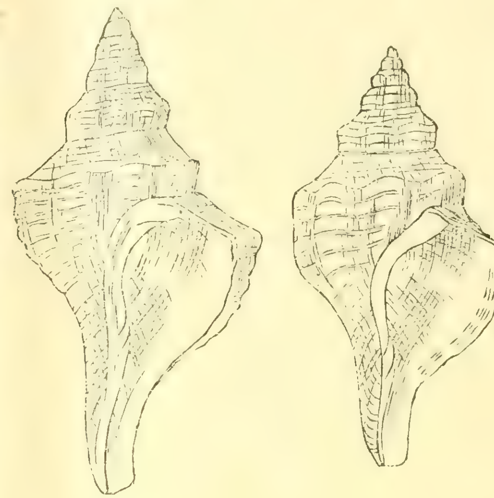
オホタラヒメベツカフ（大倉）新稱

M. lampra, Pils. & Hir.

（陸産、第十版、第七十三圖）

産地、屋久島及口之永良部島、

第七十五圖



オホイトマキボラ（キイ子ルより）

ツノマタモドキ屬、Peristernia, Mörch.

インカーナタ、P. incarnata, Desh.

=P. pulchra, Reeve.

（トライオンより）

產地、フィリッピン、印度洋、紅海、（房州 ステーールンス氏）

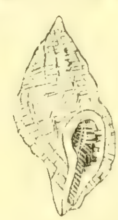
同上備考

長、〇・七五乃至一・三吋

柑褐色にして、口內は淡紅色なり、

上圖は始め Ricinula pulchra, Reeve として記載せられしものにして、外唇の齒はレイシダマシ亞屬の特徵を具ふるも內唇に二襞を有せり、

第七十六圖



インカーナタ（トライオンより）

余の琉球より採集せし標品に本種と酷似せるものあるも內外共に白色なるを以て、此記載に適合すること能はず」

リウキウツノマタ屬、Latirus, Montfort

レクルヴイロストリス、

L. recurvirostris, Schub, & Wag.

（トライオンより）

產地、呂宋、（深海に）（ステーールンス氏は日本の東岸にて一ケの大なる生標品を採集せられたり）

色の螺溝をなし、淡黄褐色の表皮を被り、外唇表面の上部、表面底部及內唇の襞の外方と水管溝端とは、多少栗色を彩るを常とす」

同上備考（七）

イトマキボラ亞科、Fasciolariinae.

イトマキボラ屬、Fasciolaria, Lam.

コシダカイトマキ 岩川、F. crocata, Phil. （トライオンより）

產地、ユカタン、ギアナ、（東京帝室博物館海產貝類標本目錄に八重山島產とあり）

長、三四吋、

殼は帶黄色にして、螺隆起線は淡色を呈し形狀は尤もナガイトマキに近し」

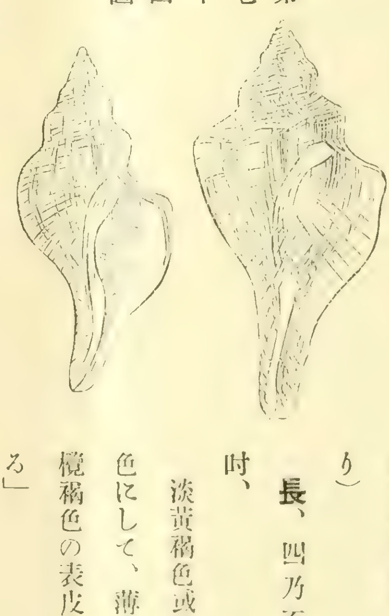
ベニイトカケ、F. cronata, Lam. （トライオンより）

產地、フィリッピン、濠洲、タスマニア、（博物館目錄には琉球產とあり）

長、四乃至七吋、

淡黄褐色或は肉色にして、薄き橄欖褐色の表皮を被る」

第七十四圖



ベニイトカケ（トライオンより）

世界最大の螺類はイトマキボラ屬中にあり

オホイトマキボラ (F. gigantea, Kiener.) は米國南カロリナ、西印度、巴西等に產し、殼は帶黄白色にして、栗褐色の表皮を被り、口內は肉色或は帶黄色を呈し、大形にして相隔れる結節を有し、長さ一呎乃至二呎に達し、既知單殼類中の最大なる種なり」

脉を見る」

彩色、殼の表面は柑赤色にして、螺肋は栗黑色をなし、口內は帶黃色を呈す」

ニシキニナ、L. nagasakiensis, E. A. Smith.

海產、第十八版、第百二十五圖）

產地、大隅屋久島、喜界島、大島、八丈、琉球、

長、一寸五六分、

形狀、殼は前種よりも狹長にして、螺肋細く、縱肋廣くして肋間に二倍し、口內の螺脉稍大きく、外唇縁は齒狀をなす」

彩色、殼は表面及口內共に淡肉褐色にして、縱肋は栗黑色を彩り、螺脉は帶白色を呈す」

本標本はSmith氏の記載せし長崎產の標本よりも却てL. craticulatus, Linne. に酷似せる如くなれども、今暫くピルスブリー氏の說に從て本標品を nagasakiensis, におて、後考を待つことゝせり」

リウコゾニア屬、Leucozonia, Gray.

マルニシ亞屬、Lagena, Schum.

本屬は大抵著しき肩角を有すれども、此亞屬は螺層圓し、ピルスブリー氏は全く之を別屬とせり」

マルニシ 新稱、L. smaragdula, Linn.

海產、第十七版、第百十七圖）

產地、琉球、（フィリッピン、ヴイチ島にも）

長、一寸五分、

形狀、殼は重厚なる圓き紡錘形をなし、全面略ぼ平滑にして、縱橫の細脉を有し、螺塔低く、



マルニシの動物（トライオンより）

螺層脹れ、縫合淺く、殼口は紡錘形をなし、內唇は弓狀に凹み、外唇薄く、其內縁は微齒狀を呈し、口內に微なる螺脉を有し、水管溝は極めて短く、少しく反曲せり」

彩色、表面、口內共に白色にして、表面の螺脉間は栗

（海產、第十八版、第百二十二圖）

產地、大隅喜界島、琉球、（フィリッピンの珊瑚礁上、マスカリーン諸島（モーリチアス島等を含める諸島の總名）、紅海、中部太平洋にも）

長、二寸五分、

形狀、殼は紡錘形をなし、縱肋極めて大きく、六七條を數へ、肩部に結節を起し、体層の下部にも一列の結節を具へ、まばらなる螺脈は肋上に明瞭にして肋間に曖昧なり、口內に微かなる螺脈を見はし、外唇薄く、唇緣は微齒狀をなせり」



（キクツノマタの動物を示す）（トゥイオンより）

彩色、稍褐色にして、縱肋は栗色を彩り、螺脈は概して淡褐色を呈す」

ベニマキ 目八、L. rhodostoma, Dunker.

（海產、第十八版、第百二十三圖）

產地、肥前、大隅大島、小笠原、

長、一寸二三分、

形狀、殼は小形細長にして、縱肋大きく六條內外を數へ、殼口狹長、口內に微脈ありて、外唇緣は微齒狀を呈す」

彩色、表面は褐色にして、螺脈は白色を呈し、口內は淡紫色なり」

スヂグロニシキニナ 新稱、L. turritus, Gmel.

（海產、第十八版、第百二十四圖）

產地、大隅大島、（紅海、フィリッピン、濠洲、ボールボン島、中部ポリネシアにも）

長、一寸五分、

形狀、殼は重厚にして、脹れたる紡錘形をなし、前種よりも短大にして、縱肋は鈍結節狀をなし稍曖昧なり、螺肋はまばらにして大きく、殼口狹小にして、口內に微

(トライオンより)」

産地、ニユーカレドニア、ヴイチ島、トンガタブー、モーリチアス、印度洋、

長、一乃至一・四吋、



ウスツラタ(トライオンより)」

帶赤褐色にして、縫合及周縁下尺往々濃色を呈し、殼底は暗栗色を彩る、(此暗栗彩は本種に普通なる特徴なり」)

變種、キイロツノマタモドキ 新稱

P. ustulata, var. luchuana, Pils.

(海産、第十八版、第百二十一圖)

産地、琉球及大隅大島、

長、一吋内外、

形狀、殼は細長なる紡錘形をなし螺塔高く、細脈を繞らし、形狀及彫刻は本種に等しきも、縱肋の數少くして太く、体層には凡そ七條あり、殼口は狹くして、口内に螺脈を有し、内唇に二襞を具へ外唇縁は齒狀をなせり」

彩色、淡肉黄色にして、大抵周縁の肋間に褐點を有し、口内黄く、水管溝の末端は紫黒色を彩れり」

本變種は余の新發見にかゝり、採集番號は一二九八にして、ウスツラタ中の最北方産なり」

リウキウツノマタ屬、Latirus, Montfort.

諸學者の此屬に關する分類猶ほ頗る不完全にして、ツノマタモドキ屬との區別最も曖昧なり、此屬の特徴の一は臍孔を有するにあれども、之を有せざるもの其半に近く、之を有せるものも其大さ極めて狹く、偶ま臍孔の大なるものあれば多くは病的の發達を遂げしものたるを免れず、余の所有せる本邦産標品中には臍孔を有せるものなし、此屬は概してツノマタモドキ屬よりも水管溝延長せるによりて、内唇の襞は中央に近く、殼軸概して直く、これまで觀察せられし此屬の動物は大抵汚赤色なりき」

リウキウツノマタ、L. polygonus, Gmel.

くして曖昧なり、口內に螺脈を有し水管溝は短くして反曲す」

彩色、白色にして、螺頂は淡紅色を呈し、栗色斑紋の螺列、或は栗色及柑色の螺線を繞らし、內唇及口內は帶青或は帶黃色なり」

ツノマタモドキ 新稱、P. Belcheri, Reeve.

（海產、第十八版、第百十九圖）

產地、琉球、（印度洋の珊瑚礁にも）

長、一寸五分內外、

形狀、前種に酷似し、螺塔稍高く、結節稍粗し」

彩色、前種と異にして、柑色の螺線を有することなく、白地に暗栗色或は黑色の縱折線或は火焔狀紋或は斷續せる帶を有し、淡黃或は帶綠色の表皮を被り、口內は白色或は帶青色をなし、或は青紫色を彩り、外唇緣に栗黑色の斑紋を有することあり、殼頂は淡紅色を呈す」

ムラサキツノマタモドキ 新稱、

P. nassatula, Lam.

海產、第十八版、第百二十圖

產地、大隅大島、喜界島、琉球等、（紅海、印度洋、フィリッピン、ニューギニア、ニューカレドニア、ポーモタス等にも）

長、一寸二三分、

形狀、殼は前二種よりも小形にして厚く、縱肋明かにして密接し、肩角上に微なる尖りを具へ、螺肋は明瞭密接し頗る美麗にして、殼口狹く、外唇の內緣は隆起脈の末端によりて、齒狀をなす」



ムラサキツノマタモドキの動物(トライオンより)

彩色、淡黃褐色にして、肋間は濃色を呈し、往々淡赤褐色の帶を有し、口內は淡紫色なり、殼頂は淡紅色を呈す」

ウスツラタ、P. ustulata, Reeve.

せしむ。表面には兩々對をなせる刻線を繞らし。其末端は外唇に突起して齒狀をなし、口内には螺脈を有せり」

彩色、肉色にして、帶黄褐色の表皮を被り、刻線は褐色をなし、口内も亦肉色にして螺脈は淡栗色なり」

本種中には結節の高低により一見別種と思はるゝものなきにあらず、例へば土佐及平戸產の標本（長四寸四五分）は第百十五圖に示せる如く、結節低く、螺層圓く、紡形にして、ヨナス Jonas 氏は別種として之を F. Audouini. Jonas. と稱すれども（變種**ヒメイトマキボラ**と稱するを得べし）トライオン氏は之を本種の一變形たるに過ぎずとせり」

ツノキガヒ（角木貝）群品　F. glabra, Dkr.

（海產、第十七版、第百十六圖）

產地、紀伊、阿波、土佐、

長、三寸内外、

形狀、殼は前諸種よりも著しく小形にして、螺塔高く、長紡綞形をなし、稍やナガイトマキに類似し、結節矇昧にして、螺層圓く、縫合淺く、對をなせる淺き螺溝は不規則矇昧にして、口内に螺脈を有し、内唇の兩端に數襞あり」

彩色、ナガイトマキに似て稍濃色なり、所々栗黒色を呈す」

ツノマタモドキ亞科、Peristerniinae.

諸學者の分類配列猶は頗る不完全にして、就中コミルト氏の著を最良なりとなす」

ツノマタモドキ屬、Peristernia, Mörch.

アヤツノマタモドキ　新稱、P. picta, Reeve.

（海產、第十八版、第百十八圖）

產地、琉球、（ヴイチ島にも）

長、一寸乃至一寸六分、

形狀、殼は短紡綞形をなし、肩角に殆んど二重となれる結節を具へ、体層にありては別に下部に一列の結節を繞らし、螺層は脹るゝことなく、縱肋大きく、螺脈は細

厴はナガニシの厴よりも更に鈎狀に近く、稍大形にして殼口を塞げり」

前頁にかゝげたるは米國産 F. tulipa, L. の卵嚢なり」

ナガイトマキ 新稱、F. filamentosa, Lam.
（海産、第十七版、第百十三圖）

産地、大隅諸島、琉球、八重山等
（紅海、セイロン、フィリッピン、濠洲、中部ポリネシアにも）

長、五寸內外、

形狀、螺塔高く、螺層脹れ、縫合淺く、肩角及結節は高からず、螺溝は兩々對をなし、其端は少しく外脣緣に突出して齒狀をなし、殼口は長卵形にして美麗なる隆起脈を有し、內脣は滑層を以て被はれ、前端に凡そ二ヶの强襞あり」

彩色、帶青白色にして、赤色、褐色或は柑色の雜斑及脈を有し、螺溝は暗栗色或は帶黑色を呈し、口內は帶青色、帶黃色或は淡肉色にして、口內の螺脈は赤色或は淡栗色なり」

本種は日八譜の礒法螺に酷似せるも未だ俄かに確定すること能はず故に暫らく新名を附して後考を待つ」



ナガイトマキの動物（トライオンより）

イトマキボラ、F. trapezium, Linn.
（海産、第十七版、第百十四、及第百十五圖）

産地、大隅大島、琉球諸島、肥前、土佐等、
（フィリッピン、ヂャヷア、支那、紅海等にも）

長、五寸、

形狀、殼は重厚にして、肩部斜降し、肩角には一列の大結節を繞らし、老標品にありては該結節は頗る大くなりて、頂上より見下すときは全殼をして稍梯形の觀を呈

試に其反面に立て海産中凡百の種を取て一々之に比するに一も疑はしきものを發見するとなし。されば

甲贏子(ツビ)者今云黄螺(バイ)也。

と判すべし。然らば之を甲贏子と名づけし所以如何。曰、甲は礑也此者甲を小甲香と稱し以て薫物(タキモノ)の料とす故に甲贏と名つけしなるべし。田螺の甲亦啓蒙に云。「ﾚﾉ甲ﾊ薬舗ニテ甲香ノ僞トス」とあり亦二者の相類せる一證なり。

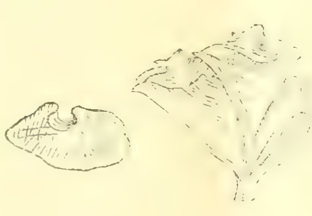
田螺(タニシ)と黄螺(バイ)とは形の外貌一の相似たるものあり。其は其本性夥多相集りて互に相倒くとなきと是也、此二者を通じてツビと呼びしは宜なりと云ふべし。蓋ツビは集貝(ツヒ)の義にてヒはカヒの上略なり但、名義考に津火(ツヒ)の義と釋せり復同義なり（貝は離に屬し離は火なり津亦船舶の輻湊する所にして即集なり）○されば田螺は田辛螺(タニシ)と云はんよりはタツブタツボなどいはん方趣ありと云ふべしそをば田壷の義と云へるはまだしき考なり

本邦海産貝類圖説（十）

イトマキボラ亞科、Fasciolariinae.

イトマキボラ屬、Fasciolaria, Lam.

イトマキボラ屬の動物は大抵ナガニシ屬の動物に類似し、其殼も亦差異著しからず、今其殼の少異を指示せんにイトマキボラ屬の殼はナガニシ屬の殼よりも概して螺塔低く、体層脹れ、水管溝は廣く且短くして彎曲し（ナガニシの水管溝は狹長にして直し）、殼軸の前端附近に數斜襞あり、リウキウツノマタ亞科にありても殼軸に襞を有すれどもイトマキボラ亞科のよりも一層横になりて其位置高く、且つ殼形著しく小なり、本屬特徴の一は其大形なるにあり、本屬は熱帶及亞熱帶の淺海に産し、現今已知の種類頗る少く、化石は白堊系より始れり、



イトマキボラの一種の卵嚢（トライオンより）

ざる也。斯く螺蛤と龍と其形狀の差天淵啻ならざるものを取て互に必偶せるものは已に名義考に云へる如く是等は外剛内柔にして易の離の卦に配したるに基因せり。

卽

離と螭と等しく离に從ふ

を見ても其意明なり。

抑螺の体たる其外觀甚長からずと雖其質は否らず試に其螺肉を引き放ちて假に延長したりとせんか其形頗る長くしてさながら小蛇を看るの思をなすべし又小蛇蟠屈して槪を作り滿を持したりとせんか其狀恰も螺形に異ならざるを見んさらば蛇と螺と其外觀の異なるは一は伸ると一は屈するとに飯因するものにして其本體は卽一のみ茲に於てか螺一たび立てば倏然として、龍勢を得て天に冲すべく。龍も其勢を收むれば復螺と奚ぞ撰ばん卽螺蛤は累合にして潜勢（ポテンシヤルエ子ロギー）なり螭蜃は離振にして張勢（カイチチックエ子ロギー）なり斯の如く是は陰德を守りて隱れ彼は陽德を得て顯はる螺蛤（タニシハマグリ）の類人見て以て爲す處なしとし誰か知らん一たび志を得ば忽如として雷を卷て起り疾雷耳を覆ふに遑あらざらしむ。夫の蚌の鷸を制し田螺の小蛇を倒せるが如き豈異しむに足らんや。

古の辨物學は凡て眞虛相半すると常なり。此其眞を晦誘せんが爲に哲學上の理想物を加味すると多きによる但しらずして之を混載するものは復論するに足らず。

（釋名附甲蠃）太津比は田甲蠃（タツピ）の義なり但甲蠃子は猶疑の一なりしが今此明晰なる田甲蠃を得たれば推して以て之を解するとを得べし是數理學（マテマチック）の原則（ロー）に已知の數（ナウンカンチーチー）を得て未知の數（アンナウンカンチーチー）を推歩するに異ならず○本草啓蒙に云

「田蠃。形黃螺（バイ）に似て短し

實に海產類にてタニシに似たる貝は黃螺（バイ）を外にして求むべからず二者の相肖たると兄弟姉妹も啻ならず殊にナガタニシの如きは彷彿として二者一の如し但色采に於て文質の異あるを覺ゆるのみ

品と異なり予は泉州堺近傍の田中にて初めて之を見得たり。凡て同地方の田螺は幾此種のみと思へり。されども深く探究して云へるにあらず。

(田螺は胎生也)田螺は挿秧の頃を過ぐれば卵管中の卵の其中に孵化したるものは已に完全に發達して母体と同一なる殼を被り幾十となく列を正して管中に充つるを見るべし今其一仔を取り仔細に之を隊金下に視るに母殼の卑野なるに似ず其表面に天鵞絨の如き光澤ある黒毛を蒙り酷美觀なるもの也。

(田螺小蛇を捕ふ)和訓栞に左の一話を載せたり

「田螺口を開きしを小蛇來て之をはむ田螺蓋を閉ぢて泥中に入る小蛇躍り揚れどもいかんともしがたし息絶えて死ぬ明和年中の事なりし。」

小云是戰國策に蚌の鷸を拑むといへる說に似て別なるものなり。かゝる俗說は往々耳にする所なり。

(螭螺の解)扨本項に拾遺本草の說を引て註釋に代へたり。されどもかゝる奇說は却て後生を惑はすの外更に些の益なかるべきか。何となれば田螺に近き非海產種(ノンマーリン)にして殼に有稜者ありとも覺えねば也。實に純正介學(コンコロギー)より見るときは一の蛇足に外ならず蓋朝臣は識和漢に通し詩歌に達し辨物に明なる大人なり其深意は得て知るべからずと雖試に今哲學上の解釋を試みんと欲す。

按ずるに田螺に對するに螭螺(チラ)を以てしたるは已に「貝の名義考」に論せし如く蛤に對するに蜃を以てしたると同日の談なり。蜃は月令の注に大蛤(オホハマグリ)とあり。本草には蛟(ミツチ)の屬とあり和名ミツチは水螭(ミツチ)にて水に栖む螭の義なり。氣を吁て樓臺城郭の狀(所謂蜃氣樓)を成すと本草に云へり。之より推して螭は陸生なると知るべし。本鈔の龍魚類に。

螭は龍の無角赤白蒼色也

とあり以て螭螺の何者たる推して知るべきのみ。扨螭螺と蜃とは共に實在の性にあらずして一の理想物に外なら

「田にし鳴く淺香の沼の月夜哉」俚言集覽。

此月夜と附けたるは時珍が田蠃の集解に

「其肉視月盈虧。故王充云。月毀於天螺消於淵。」

とあれば田螺は月の滿ちたる頃に取れば從ひて肉多しといへる意を酌みて月夜には殊に身に禍あらんとを恐れて悲しみ泣くと云へる義と思はれたり。其淺香と云へるは月の名所なればなり、いとあはれなる句にこそ。

こは苗代のやゝもえいでたる頃水田を見渡せばこゝかしこに田螺の這ひさまよひてのゝ字の跡あざらけく或は長蛇の蟠るが如くなるにいづこともなく呱々喈々の聲耳に澄み渡るを頓て田螺の鳴けるものと聞き誤りたるものにて其實田蛙の聲なり。河鹿蛙の鳴くを杜父魚也と誤り大和本草等螻蛄の鳴くをば蚯蚓の聲と誤るが如きは世に名高くして和訓栞にも蚯蚓の條に。

「ねそにとひもとけ。といふ聲きよく鳴くをもて歌女の名あり」

とあり此事詩に賦し歌に詠し主しらぬ美名世にかくれなきこそ中々に彼が身の禍の種とはなりにけれ。浮世をよそに土深く潜みて固く白圭の戒を守りて晝猶靜かに結ぶ夢は空しく其美音にあやからんとするやからの爲に破られて生ながら腹中に葬らるゝもの日に幾千萬たるを知らず。其餘前項に出せるミナの鳴說など思ひ合すべし。

蓋田蛙の鳴聲にはさして曲節あるにあらざれども聞やうによりいかやうにも聞ゆる也。かの

「秋風にほころびぬらし藤袴つゞりさせてふきりぎりすなく」古今

など詠めるも皆此たぐひ也

(本邦產の田螺は一種にあらず田螺は形の見るに足るものなければ古來の愛貝者は多く之を度外に附し去れり然れども仔細に之を見るときは色澤形狀に多少の變化あり中にもナガタニシは名の如く殼長くして質も厚く一見通常

よりタカヒ土州タツブ能州本草類編タツボ北國、房州、總州ツブ越後などさまざまの稱呼あり。圓位上人の歌につみと詠めるは此タニシのとなるべしとの考は已に甲蠃子(ツビ)の條りに論へり。こは越後にてツブなどいへるに似通ひたり。又料理に吸壺(スヒツボ)といふ事ありと和訓栞に見へたり。されば タニシはさる料理にも用ゐし事と知らる。

○タニシは本鈔の外古書には纔に本草類編に 太川不 夏月採レ之とある外絶えて國書に見えず。然るに今は賤民も食はざる蜷(ミナ)の事は歌書に記錄に嘖々たるものは奇と云ふべし。依て惟ふに古書に蜷(ミナ)とあるは唯り蝸蠃(ミ)のとのみならず此田蠃をも籠めて云へるものなるべきか。本草書にも田蠃蝸蠃を倂記し共に「煎食レ之」とあるのみならず算する所の藥餌の功も少小ならざるをや苟も古人之を採て甲を斥くるの理あるとなければ也已に云へる如くミナは卷魚(マキナ)の約言(Ma[ki]-Na.=Mi-Na.)と見るときはタニシも尙其中に包容し得ればなり猶之を極言せばミナはタニシの古名ならんも亦知るべからず古人何を苦しみてか一種の香味あるタニシを捨てゝ今は賤民だも食はざる蕞爾たる蝸蠃を取て之を嗜み食ふの理あらんや。古書を見るもの常に此意なかるべからず。

「田螺は鳴くといふ說」田螺は秦椒(サンセウ)の芽の出る頃多く採て之を市に販けり。予甞て丹後の山間に遊べる時田螺の殼の大なるもの二つ三つを拾ひて宿に歸りしに宿の老媼予が珍らしげに之を看居たるを見て語り出でゝ云タニシは一具頃能く鳴く者にて候。「さらばいかにか鳴くぞ」といへば。「心を澄ませて聞く時は、

　時節はよかれ。さんしよ(秦椒)の芽は腐れ。」

と鳴き申すと答へき。いかにやさしき媼よ彼レ何の作れる辜なうして釜中になくいと哀にこそといへば媼は鼻打かみてさにこそはべれとねぶつ唱へて打しをれにき。夫の上人が「つみよりつみをつくる」と口ずさみしもかゝる心ばえにや。是に似たるは或る俳句に

國書介名考（承前）

永沼小一郎

一紅螺流螺は殼の形著しく異なるも其肉味は相伯仲して庖厨上之を區別するの必要なし故に臺記別記以下大草相傳聞書等の九部の書には通じてにしと書きしなるべし　（正誤）前表、赤螺ニアカニシノフリガナアリ）とある十四字は衍なれば之ヲ削（て其空位の處ニ臺記別記以下大草相傳聞書まで（ハ九書名ヲ移し見給ふべし）中古及近古名の標目位置高し。其字だけ引下げて見給ふべし

一流螺の産は南海を中心とし紅螺の産は瀬戸海を中心として東海西海に及ぼすものゝ如しされば流螺の産は紅螺に及ばず且紅螺の殼は焼て薬用に供せらるゝ外之にみせばや。しのぶ。雪の下。石菖蒲。などを植ゑて軒に吊縋し或は翠螺（ヤクガヒ）・鸚鵡螺（アフムガヒ）を以て杯となす如く紅螺も杯として用ゐしものにや本邦の古詩中屢ゝ紅螺杯の句を見ることあり。されば紅螺は上下おしなべてよく其物を知られしとしるし之に反して流螺は殼も紅螺の如く堅牢ならず形も雅ならず從ひてあまりに世間にしられざりしなるべし、但し肉は此方柔かにして優ると聞けり。

一卑賤の徒紅螺を吝嗇の義とし往々人を罵るの稱となせるは悪むべしかゝる陋習のあるより心ある婦女子は此名を聞くすら耻らへり。況んや之を口にするをや

一流螺は本草書にはナガニシとあり今はテングニシと呼べり鼻（呼吸管にして本草書に云流）の長きに基く蓋愛貝者の稱呼に始るもの也。又今名のナガニシは本草家に沙汰なしては學名 Fusus なり、其産敢て鮮きにあらざれども其大なるもの少く從ひて市に上ぼすと罕なりされば古書に云ふナガニシ卽流螺は今云ナガニシ卽 Fusus と預るとなし宜く辨ずべし。

第八項　田中螺（タツビ）　拾遺本草ニ云。田中ノ螺。其有稜者。謂ニ之ヲ鏑螺ト一。（和名太都比（タツビ）。鏑ハ音知。見ニ龍魚灝ニ一）

今名ハタニシ。

田中螺は本草綱目に田贏とあり今云タニシなり。所に

如き寄生蟲さへ含んで居つて品位甚だ劣等で廣島産の精品にはとても及ばない、是れ必竟人工の淘汰を經ないからであつて、恰も明治の初年に役用の牛を屠りて吾人は其の肉を喰ひ、臭氣の甚しいのと肉の硬いのとに驚き、西洋人が何故こんな不味いものを好んで喰ふのだらうと嘲笑したことがあるが、牡蠣も其の如く西洋の牡蠣は食用の爲に特に培養したのであるから別段に味が良いのである。夫れに又一は調理法にも依ることゝ考へられる、本邦では普通三杯酢で牡蠣を生食するか、さもなければ煮て吸物とするか、乃至は牡蠣飯に仕立つるなど色々にやるが、之れをフライにするか、或は蒸炙にして粉胡椒等を加ふるなどの洋風の調理法を用ゐれば、一層の滋味を添ふるやうである。

英京倫敦のみにて消費する牡蠣の總高は、年々約八億であつて其の價は四五百萬圓に達するといふことである、我が邦にて消費せらるゝ高は、幾何なるか、無論歐米の諸國には及ばなからうが、去る明治二十四五年の統計に依れば廣島縣下安藝佐伯二郡のみにて産出せる數量は、十一萬貫許で其の價額は貳萬壹千五百圓餘に上ぼつた、僅に二郡の産物としては決して少額といへぬ、是は專ら生蠣として内地に販賣せらるゝものに係り、明治二十年頃より乾蠣として支那に販路を試みたが、是れ亦、相當の利益があるといふ、其の他殼はこれを燒て蠣灰を製す。

本邦實業家の舊習として、同縣下の養蠣業者は各自分權の制を取りて居るが、斯かる小作法を廢し、共同一致して一大會社を組織し、大に斯業を勵んだならば、其の隆盛期して待つべく、其の利益は決して唯其の會社の利益のみでない、清國といふ一大華客さへあるではないか。

き居たる安藝國佐伯郡草津村の五郎右衛門なるもの橋際の制札を抜き取り、其の火災を免れしめたる功に依り、褒賞を賜りたる上、大阪市中各橋畔に於いて牡蠣販賣の特許を得たりとの舊記あるを以て考ふれば、斯業の起原は遙に其の以前にありしことも明かなりとしてあつて、詳細なることは今日よりこれを知るに途がない。

却説養蠣の方法は、廣島縣下に於いても所に依りて多少異なるものなれば、一概に言ひ難いが、要するに粗朶或は枝付の竹を海中に建てゝ蠣苗をこれに附着せしめ、時を定めて收獲するにあり、大概其の稚貝成長して二才或は三才の秋に至れば、これを掻き落して市場へ出すやうである。此の方法は品川灣千葉縣下沿岸諸所にも行はれ、農商務省では此の兩所に特に養蠣試驗場を設け、斯業を奬勵して居るが、到底廣島縣に及ぶものはない、同縣下の養蠣業は由來二百有餘年來の經驗を積み、今日の盛況を致したるものにて、其の方法の善惡適否は養蠣場の地形、潮流の方向、氣候の寒暖、海水の性質等種々の事情に依ることなれば、これを擬ねて遽に其の隆盛を望むべきものでない、然れども日新の學理を應用し、斯業を勵ましたならば數年を出でずして其結果を收むるに相違ない、強ち二百年の長年月を要せぬのである。經驗と學理は車の兩輪の如く、兩者相須つて始めて事業の隆盛を覩すべきこと、獨り斯業のみには限らぬのである。

我が國人の牡蠣に對する嗜好は、遠く歐州人に及ばぬやうである。聞く所に依れば、歐州の牡蠣は肉が締りて香氣が多いといふ、是れは恐らく海水の性質、食物の種類等に依ることゝ考へられる。然し養蠣の方法を研究して淘汰に注意すれば人の嗜好に適するやうな牡蠣を作り得ることは、容易であると思ふ。東京市場に上ぼる品には、品川灣御臺場邊の木石に附着し、天然に蕃殖したものが雜りて居るから、色も榮えず、肉もいやに軟かで歯障惡しく、間々異臭を發し、甚しきはヂストマ(肝蛭の類)の

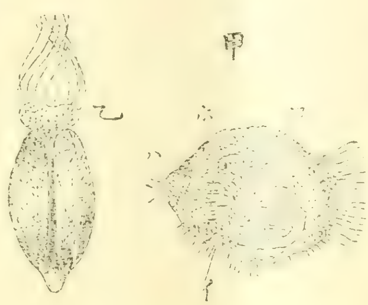
石器、古陶器等と共に澤山發掘される。歷史時代に入りて羅馬人は一般に牡蠣を好み、上は王侯貴人より下は學者、政治家、僧侶、諧工の端に至るまで苟も後世に名を遺したる人の史傳中には屢々牡蠣嗜食の記事を見ることがある。例へば羅馬帝の中、カリギユラやウイテリアスの如きは、孰れも牡蠣を好み、殊にウイテリアスは食膳毎に牡蠣の調理を命し、一時に一千個の牡蠣をも開こし召し得ると自信せりなどの記事がある、又希臘の哲學者カリスセデースは大の好蠣家であり、シセローもこれに讓らなかつたとのことである、且今日の養蠣術の嚆矢は、實に羅馬のソルギアス、オラタの工夫に出でたりとしてある。降りて中古以來近世史に至りて佛帝ルイ十一世は每年一回ソルボーンの學士を召して牡蠣の饗宴を張るを例とし、幾代のルイ帝であつたか、牡蠣調理法の巧妙なるを賞せんが爲め、一介の料理人を貴族の高位を與へたりなど隨分甚しいのがある、其の他、那翁第一世は戰中の晩餐にも事情の許す限り常に牡蠣の供膳を選ばれたとある。英國は、當時牡蠣の產地を以て其の名歐州に轟き、昔にありては遠く羅馬にこれを輸出し、シーザーが英國の遠征を企てたる目的の一は、牡蠣とこれより獲らるゝ眞珠にあつたとも言はれて居る。歐州人が今も猶、牡蠣料理を珍重し、盛んにこれを嗜食する習慣は、全く歷史的なること以上を以て察すべきである。

養蠣の事業は、古來廣く歐州の諸國に行はれ、英國、佛蘭西、伊太利等最も名がある、米國には斯業の起原日尙淺いが、近來益々盛大と成り、孰れも之れに依りて國益を增して居る、牡蠣貿易の歐米に盛んなる想ふべきである。我が邦に於いて古來養蠣業に其の名を得て居るのは、廣島地方である。去る明治廿六年、箕作博士が農商務省の囑託を受けて取調べたる報告に依りて見るに、其の起原は甚だ古くして寶曆五年、今を距ること一百五十餘年前、大阪大火の節。高麗橋の橋詰に船を繋ぎて牡蠣を鬻

疫病、寄生蟲等に罹りて斃るゝものもあらう、其の他海水の變性、温度の加減、食物の多少等に依り、萬難を排して僥倖に其の成長を遂げ得るものは十中僅に一二に止まるといふも、決して不當の揣定ではないと思ふ。總べて動物の種屬に從ひ、産む子の數に大小の差があるのは、一

蠣苗の圖

イ　口
ロ　食管
ハ　肛門突起
ニ　毛冠
ホ　心臟
乙　六日間經たるもの



に成長の難易に因るものであつて、高等の動物は産んだ子を保護し、これを養育する能を有つて居るから少數の子を産んでも、其の種族の絶える患はないが、下等の動物に至れば、親は子を放棄して他動物の毒手に委ね、境遇の變遷に任かして、生存競爭の場裡に暴露せしむるが故に、多數の子を産まぬといふと自分の苗裔を永續することが出來ない、然れば子の數の多い動物ほど生存競爭激しくして生存の困難なるものであるといふことが察せらるゝのである。

かきの産卵期には、特別の季がなくして全年に渉つて居るやうであるが、最も盛んなる時節は六月末より十月までの間である。卵は初め粘液を以て包まれ、母貝の外套膜中に保藏せらるゝ間に蠣苗と成り、是を去るときは既に前圖の如き形を呈し、極めて細微であるが一個月を經れば豌豆大と成り、六個月の末には七八分と成り、一年の後には一寸以上二寸五分許に達し、三年を經たるものは食用に適して市場に上ぼすことを得、但し海水の温度に關して其の成長に著るしく遲速の差ありとす。

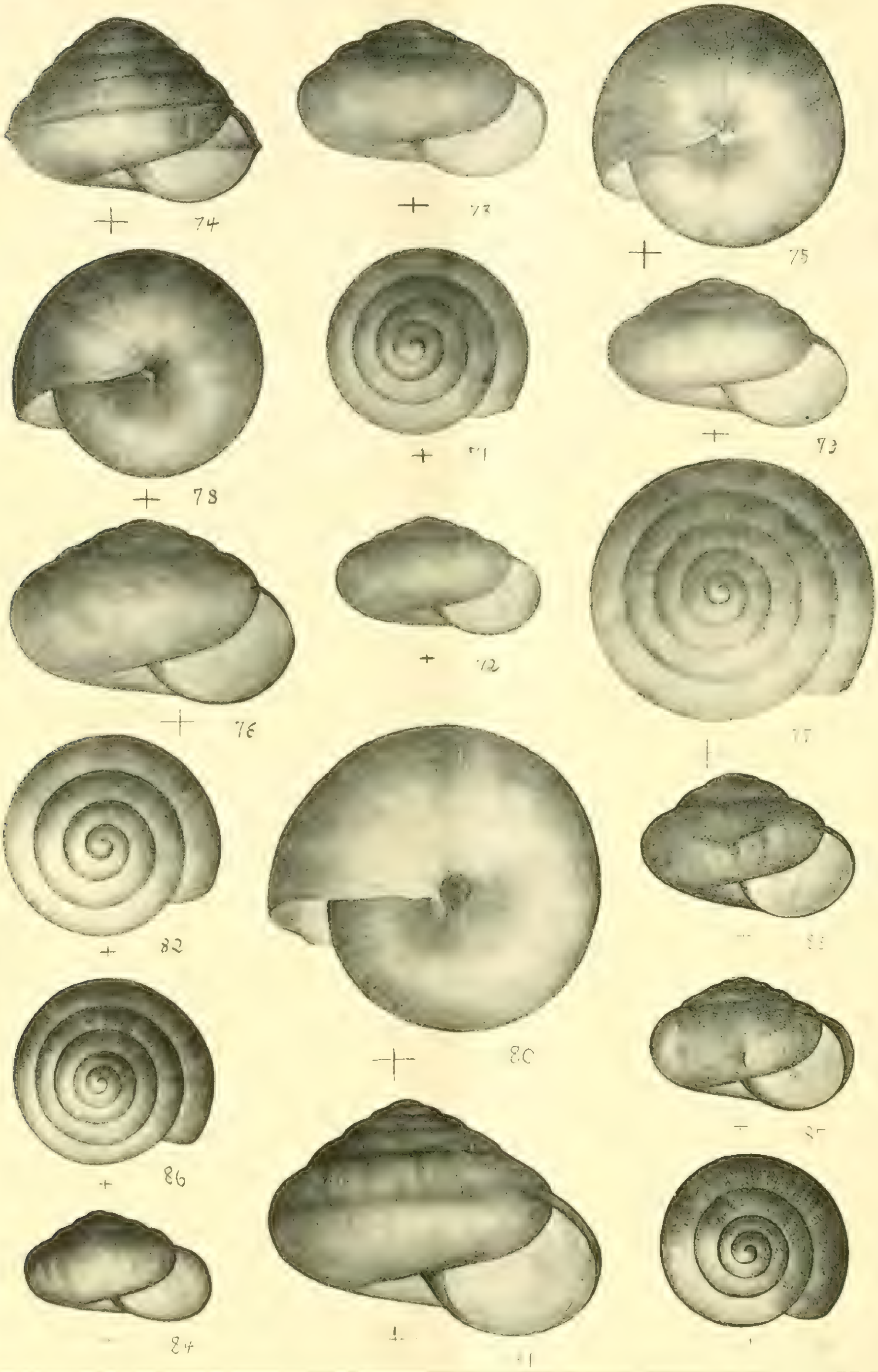
かきを食用とする習慣は、西洋では遠く史前時代にあつたものと見えて、其の貝殼は今日歐州北部の介墟中より

介類雜誌　第拾號
明治四十年十月二十日發行

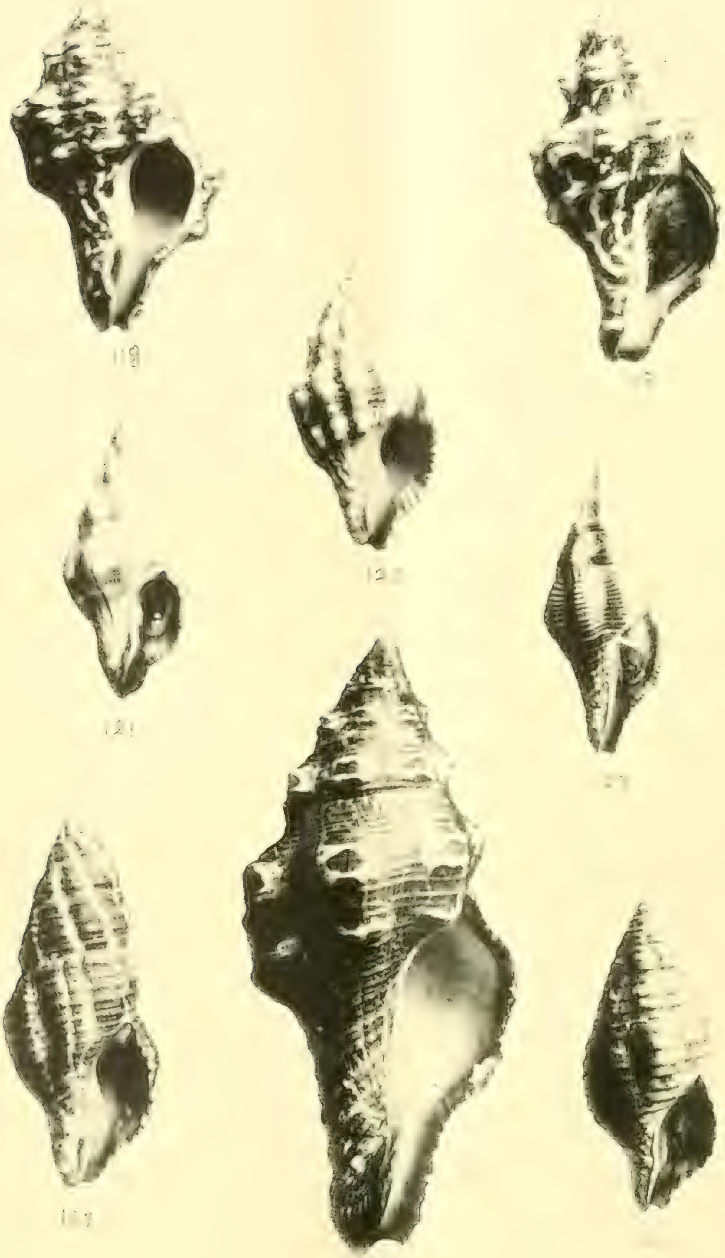
貝談漫錄（三ノ二）

岩川友太郎

かきの幼蟲は、卵と共に頗る小さく、到底肉眼を以て認むることは出來ない、親は永久他物に附着して動かざるものなるに、子は毛冠の纖毛を振動して自由に水を泳ぎ、適當の場所に至れば、是に附着して發育を遂ぐ、此の幼蟲たる間は、口の上の方に二の單眼を有つて居る、すべて動物の感覺器は其の運動性に伴つて發達するものゆへ、既に他物に固着せる以上は最早其の用なきを以て、他の器官の發達するに反し、眼は自ら消滅するに至るのである。產卵の數は頗る多く、歐州のかきは、一萬内外、米國のかきは十萬乃至六十萬に上ぼるといふ。今茲に一萬の親貝があつて各々最少數の卵一萬を產するとすれば、子貝の數は一億を成り、若し最多數の卵六十萬を產するとすれば、子貝の數は六十億の巨數に達することに成る。此の巨數の卵にして悉く其の發生を遂ぐることを得るとすれば、數年ならざるに殼は積みて山を成し、大海を沒するに至るべきである。果して然らば、人は養蠣業に從事して忽ち巨萬の富を致すに相違ない、所が自然は決して斯くの如き依估贔負はせぬ、即ち一生物の跋扈するを許さないのである。全體、かきは成長して後に人の食慾を充たさんが爲に、獨り漁獲せらるゝのみならず、他動物の餌となるものも意外に多いのである、蠣場の怖るべき害敵として擧げらるゝものは海綿、ひとで等の類であるが、我が邦ではれいしぼら、あかにし抔が害敵の巨魁とせられてある。殊に幼蟲たる間は種々の動物の餌とせられ、直し其の餌とならぬにしても、或は怒濤の爲に粉碎せらるゝもあるべく、或は潮流に浚はれて遠く大洋に漂ひ、取り附く術もなくして死するもあるべく、又或は

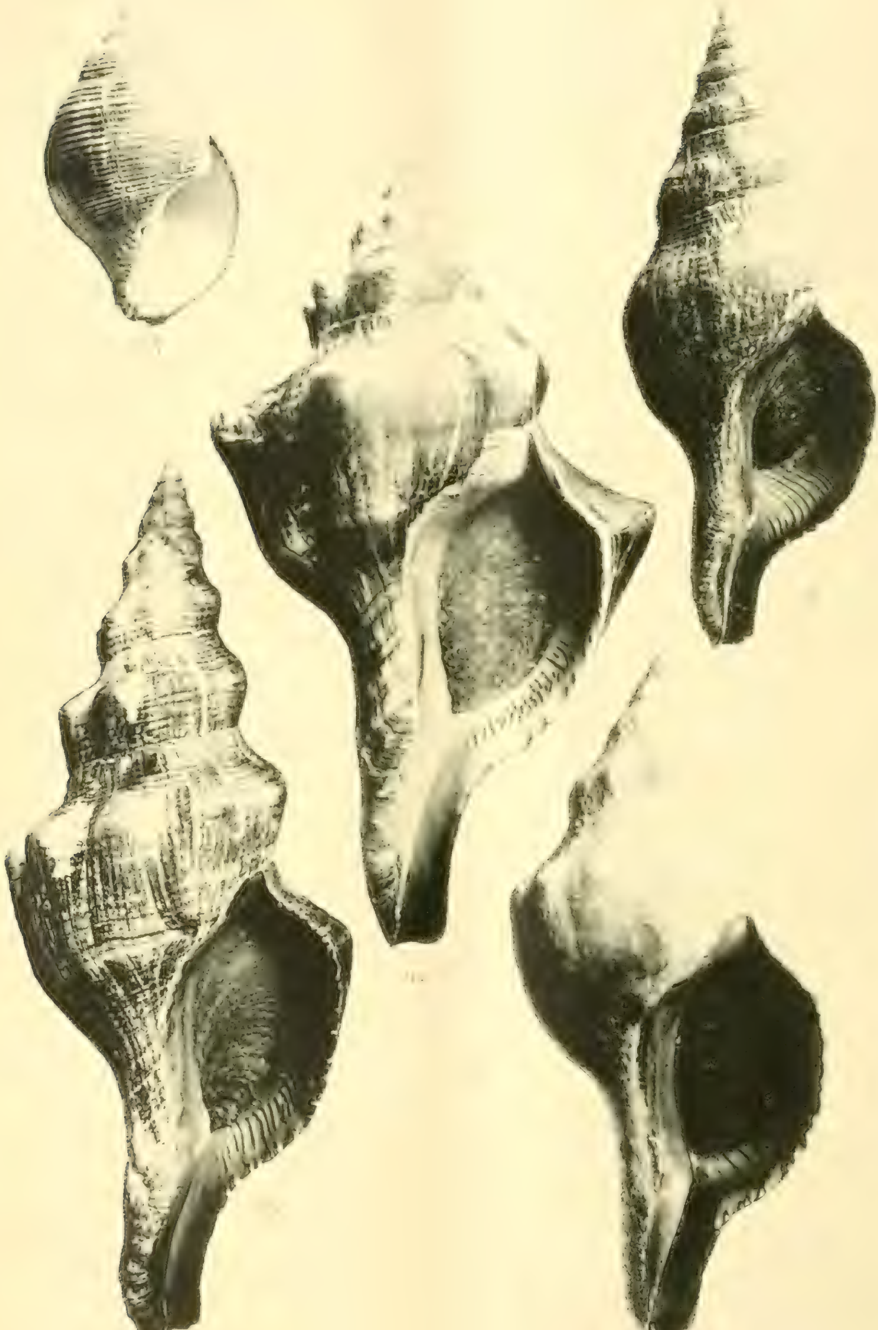


71, 72 Microcystina yakuensis, Pils.
73. ,, lampra, Pils. & Hir.
74, 75 ,, Hiraseana, Pils.
76, 77 ,, Edgariana, Pils. & Hir.
78, 79 ,, kumejimana, Pils. & Hir.
80, 81 Microcystina spadix, Schm. & Bttg.
82, 83 ,, lamprobasis, Pils. & Hir.
84, 85 ,, lissobasis, Pils. & Hir.
86, 87 ,, radiata, Pils. & Hir.



118. Peristernia, picta, Reeve.
119. ,, Belcheri, Reeve.
120. ,, nassatula, Lam,
121. ,, ustulata, var. luchuana, Pils.

122. Latirus polygonus, Gmel.
123. ,, rhodostoma, Dunker.
124. ,, turritus, Gmel.
125. ,, nagasakiensis, Smith.



113. Fasciolaria filamentosa, Lam.
114. ,, trapezium, Linn.
115. ,, ,, var. Audouini, Jonas.
116. Fasciolaria glabra, Dunker
117. Lagena smaragdula, Linn.

本誌定價

一部	金貳拾錢	郵稅五錢
六部	金壹圓貳拾錢	郵稅不要
十二部	金貳圓參拾錢	郵稅不要

本誌廣告料

五號活字一行（廿五字詰）	金拾五錢
半ページ	金參圓
一ページ	金五圓

明治四十年十月廿日印刷
仝　年仝月廿三日發行

不許複製

發行所 京都市上京區烏丸通下長者町北龍前町十四番戸 **平瀬介館** （電話九百七十四番）

發行者 平瀬與一郎
編輯者 平瀬信太郎
印刷者 川勝靜三郎
印刷所 合資商報會社

大賣捌所

京都 東枝律書房
東京 東京堂
仝 東海堂
仝 北隆館書店
大阪 大華堂

明治四十年一月十九日第三種郵便物認可（毎月一回二十日發行）

明治四十年十月二十日發行

目次

介類雜誌

第一卷
第十號

明治四十年十一月二十日發行
明治四十年十一月十九日第三種郵便物認可（毎月一回二十日發行）

THE

CONCHOLOGICAL MAGAZINE

A MONTHLY

DEVOTED TO THE STUDY OF JAPANESE SHELLS.

PUBLISHED BY Y. HIRASE.

VOL. I. NOVEMBER. 1907. No. 11.

CONTENTS.

Articles in Japanese;

Notice: The subscription price for foreign countries is $ 1. 50(3 yen) per annum. All letters and communications should be addressed to Y. HIRASE, Shimochōja-machi, Karasumaru, Kyoto, Japan.

明治十九年二月創刊

毎月一回二十日發行　明治四十年十月二十日發行

東京人類學會雜誌

定價壹部金拾五錢（郵税金壹錢）

第二十三卷　第二百五十九號目次

發賣元　東京市京橋區南鍋町一丁目　隆文館

委託發賣所　同　市本郷區本郷六丁目　哲學書院

博物學雜誌

毎月一回廿五日定時發行
定價一冊金拾四錢郵税共

第八十六號目次

發行所　東京市神田區五軒町一番地　動物標本社

◉會員募集

博物學智識の交換と普及とを以て目的とし毎月雜誌「博物之友」（一部十二錢 郵税五厘）を發行す。創立以來既に七年、今や全國に亘りて多數の誠實なる會員を有す入會希望者會費（半ヶ年分六十錢）を添へて事務所に申込まるべし、

東京市下谷區練塀町十番地市川三喜方

日本博物學同志會事務所

THE CONCHOLOGICAL MAGAZINE

VOL. I. NOVEMBER, 1907. NO. 11.

A CONCHOLOGICAL MUSEUM

BY Y. HIRASE.

The Establishment of a Conchological Museum is another question in Western countries, where there are many good museums in which equipments for the preservations of natural history specimens and books of reference are complete. It is not so here with us. Though Japan is an island Empire consisting of thousands of large and small islands, where the abundance and varieties of shells are known as the first in the world, and though nature has given us this good situation, the study of Mollusca is still in its infancy in this country. We regret no beneficial contribution to the study of this branch has ever been done in this land of natural deposit for shells.

After having thought over the matter for years, I decided about twenty years ago to devote my life to conchological work. No one knows how hard it was for me to reach the present position, though I am not content with this. No small amount of money has been spent in sending collectors to different parts of the Empire,—sometime I went out myself.

Thus my explorations have extended from Hokkaido in the north to Formosa in the south. Even very difficult places of access, high mountains, dark valleys, deep forests, wide plains, brooks and rivers, swamps and lakes, and many far away groups of isles, such as the Loochoo, Izu groups, Ogasawara (Bonin islands), Iwojima which are in the Pacific Ocean, very far south of Bonin group, and also the island of Yonakuni which lies between Formosa and Loochoo Islands, all these have not escaped from the keen eye of our collectors.

Up to the present time, I have collected over three thousand species, among which about one thousand species and varieties are newly found by myself or by those under my care.

Last year, I extended my exploration to Korea and China. Moreover, I started, this January, a monthly journal called the Conchological Magazine, for the diffusion of conchological knowl-

edge in our country. From both these undertakings, I suffer no small loss and I am in need of a large amount of money. I am doing this work by myself independently, and no financial help do I receive from any one. Most of my slender means was lost for the work, therefore my family live in a very frugal manner, enduring every inconvenience in our mode of life and we are all thus striving for the future success of the work.

Most people collect shells merely for sport on the beach, but they are commonly dead shells which were carried up on the sand by the waves. Their shapes are not perfect; colours are faded away. They have lost their operculata in operculated species. In bivalves, they have lost one side. It is not the same with my collection. I have taken care on these points. My specimens are all fresh. Their lustre and shapes are as natural as they were in the bottom of the sea. They are good both for use by the conchologists and for show. It is not too much, to say that my collection is larger than those in either the Imperial Museum or in the Imperial Universities. Mine is far greater in number and much superior in quality. Therefore I am confident enough to say that mine is the largest in Japan. At present, there are above eight thousand in my collection, five thousand being foreign species. In counting Japanese species, each species includes more than one specimen, often of those which came from different localities, for I carefully arrange them according to their localities, for the convenience of examination. If I count these, the number of the Japanese shells will be numbered by tens of thousand. There are many rare species among them, for which it is almost beyond hope to send collectors again. My collection is not only valuable in this country, but also to the world conchologists for the study of this branch. Even for these reasons alone it is necessary to keep the specimens in safety. Now this valuable collection is merely piled up in the store and the full use of it is impossible. It would be not only my own calamity, but also the misfortune of the world, if by accident, like fire, we happen to lose these specimens which were collected after hard striving for years. Some one says that it will be better for the safety of keeping to make over my collection to either of the museums.

This is one way, yet I am not in full sympathy with it. It is true that, in consideration of its safety, to transfer the collection is better than merely to pile it up in my store house. However, owing to the lack of enough room for the public exhibition, there is no difference between keeping by myself and trusting them to such institutions.

For these reasons I hope to establish a conchological museum for the public benefit and also for the safety of the specimens. A museum of this kind, will give much pleasure not to the specialists alone but also to the public who do not know much about the shells. It will become a favorite place for pastime to the people and then unconsciously they will get knowledge of natural history. There are, no doubt, many species which are especially beautiful in their coloring, the curiousness of their shapes and in delicate sculptures, from which painters will find good models. But why did they not make use of these beautiful shells before? I think, it is because of the lack of perfect and fine specimens. There is a great advantage for these painters if I am successful in the establishment of a complete museum.

In Japan, foreigners usually visit temples and shrines, and the one Imperial museum. I am sorry to say that there is no place we can proudly show to the foreigners except these few kinds of buildings. If, in time, we have a museum of Japanese shells, perhaps it will interest much the foreign guests. The principal collection in the museum I am so willing to establish consists of Japanese and foreign species of both fresh and fossil shells, with conchological books of reference and many shells wares. I hope to do it as soon as possible. As there are few in our country who are interested with this plan, I am expecting to do it with my own means independently. It must be hard, however, to accomplish in the near future, as I suffered much loss in the past out of my slender means. Still I am in hope the time will soon come when we shall see the first conchological museum established in Japan. I shall be much obliged if you kindly favour my work. I shall be happy if this poor composition will give you a clear understanding of my purpose of establishing a conchological museum in this country.

Summary—The Philology of Shell-Names from Ancient Japanese Manuscripts

In the magazine from the 4th to the 11th number, Mr. R. Naganuma of Tokyo dilligently discussed on the following shell names.

1. *Tsubi*—A general term applied for all univalves ? (No. 4)
2. *Sadaye* or *Sazae*— Turbo cornutus, Gmel. (do)
3. *Seki-inshi* or *Karasugai*— A small mussell? (No. 5)
4. *Shitatami*, or *Sugai*— Turbo cornutus, Gmel. (No. 6)
5. *Mina*— Melania (do)
6. *Aki*— Rapana bezoar, Linn.
7. *Nishi*— Hemifusus ternatanus, Gmel., Fusus perplexus, A. Ad. and Purpura etc. (Nos. 7, 8, & 9,)
8. *Tatsubi* or *Tanishi*— Vivipara. (No. 10)

In this number:

9. *Kisa*, or *Akagai*— Arca inflata, Rve. is discussed.

Many ancient books are taken in reference and also allied species, *Sarubo*— Arca subcrenata, Lischke and *Haigai*— A. granosa, Linn., are touched upon.

Summary—Japanese Marine Mollusca

From the first number of this magazine, I began to describe Japanese shells already known to us, according to the classification of G. W. Tryon Jr. in his Manual of Conchology. I have finished the description of Muricidae, Tritonidae and Fusidae. In the present number introduction of Buccinidae and synopsis of Genera is published. Also descriptions of various species of the Genera Hemifusus and Neptunea have been completed in this paper.

Summary—Japanese Land Shells

Descriptions of Japanese land shells have begun from the sixth number according to the description and classification of Dr. H. A. Pilsbry of Philadelphia. Among Zonitidae, Genera Hirasea, Fametesta, Hirasiella, Pristiloma and Microcystina have already been described.

In the present paper, one species of Vitrina, one Helicarion, four species, one subspecies, and two varieties of Macrochlamys are described and Lieut. Col. Godwin Austen's study of soft anatomy of Helicarion Hiraseanus, Pils. is also appended.

來れる藻類を取て口に送るの用をなすものである牡蠣の体も略相似たるものであるが肉柱は大なるものが只一本ある之れは文蛤の後肉柱に相當するもので前の方の肉柱はない又外套膜の後縁は文蛤の樣に二本水管となつて居らぬ足は牡蠣にては岩石に着附する習性の爲めなくなつて居る。牡蠣は六七月の頃に卵を産むものである雌雄の別はあれども之を見分くる程の著しき特長はない此の産卵期には毒があるから食用に供してならぬ卵より孵化したる稚貝は數日の間水中を游泳して居るが後岩石に附着する十分成長するには三年程かゝるが生活に適する場處にては二年目には二寸の大さとなつて早や卵を産むと云ふことである普通食用に供するは二年子三年子である
牡蠣の成分は衞生試驗所の調査によると左の通りである
水八九、八八九　蛋白質八、四五　脂肪○、八九　灰分○、七七牡蠣の種類は七十種あるが本邦で普通なるはまがき、いたぼがきになかゞきの三種であるが食品として珍重せらるゝはまがきである、いたばかきは殼稍圓くして厚く海底の沙泥中に棲息して居て岩石等に附着して居るとは少ないながかきは其殼細長くして厚く外面は特に粗糙である此の種はまがきの變種であると云ふとである本邦に於て天然産の牡蠣の最も盛に生育する處は釧路の厚岸灣で千萬坪の中で六百萬坪は牡蠣の生育場となつて居る干潮の時は牡蠣の團塊が島となつて水面上に顯はれると云ふとである此の地方にては之を牡蠣島と稱へて居る其他薩摩大隅の海面にも蠣が天然に澤山に産する廣島は古來牡蠣を以て名の高いとは誰れも能く知る處である牡蠣は洋の東西を問はず一般に珍重し之を嗜食するが故に天然産の牡蠣のみでは其需要を滿たすとが出來ぬから人工を加へて之を保護し養へ育つるとが盛んに行はれて居る之を養殖と云ふ本邦にては牡蠣の養殖は廣島磐城の松川浦等で昔より行はれては居るけれども之を西洋諸國に比すれば規模小に其方法も幼稚であると云ふとである（つゞく）

貝類の体は文蛤のむきみなどにて知らる通り柔軟で胴と稱すべき部分と足と稱すべき部分の二つよりなり頭と稱すべき部分はないのである足と稱すべき部分は俗に貝の舌と稱せられて居る處である介殼の外へ出して居る樣が舌に似て居るからでばかゝひと云ふ貝は其舌と稱せられて居る足が長く介殼の外へ出て居る樣子が馬鹿が舌を出して居る樣であるから起りしものだと聞いて居たが言海には肉味が劣等であるからであると云ふてある此の足の出てゐる方が前で足の筋肉が伸縮するによつて前の方へ進行するものである胴の左右両側に各一枚の大なる薄膜があつて体の大部を被つて居る之は体壁の褶襞で外套膜と名が付いて居る其の緣は少しく厚くなり內外二枚に淺く分れて居て外方のものは薄い膜で介殼の緣に附着して居る此の厚き部分は血管に富んで居て其緣より石灰質を分泌して介殼を作るのであるが外套膜の後緣は文蛤にては左右相合して二本の管となつて上下に并んで居る之を水管と云ふ其下方の水管より水が左右の外套膜の間に入り上の水管より出て來るのであるむきみの前と後の方に各一本づゝ略肉柱狀になつて居る筋肉が体の左右に通つて居る之を肉柱と云ふので一端は右の介殼に他端は左の介殼に附着して居る此の筋肉を伸ばすと介殼について居る靱帶の作用で左右の介殼が少し口を開けるが縮むと介殼が閉づるので又閉殼筋の名も付いて居る俗に貝の柱と云ふのは此の事である貝を能く煮ると殼が口を開くが之れは肉柱が收縮して殼から離れるから靱帶の力で開くのである外套膜を撥くると其下に二枚の瓣狀のものがある之れが此の動物の鰓で卽ち呼吸器である入水管より左右の外套膜間に入り來れる水は鰓の內を通つて出水管へ出て來る其水が鰓を通過するときに呼吸の作用を營むのである口は前にある肉柱の直下足の基にあつて二對の三角になつて居る瓣の中央にあるが歯や其他咀嚼の器械はない此の三角の瓣を食唇とも唇瓣とも云つて水と共に流れ

員は博物館設立の資金の一部に供せんとの覺悟からである。有志の諸君は、本館の微志のある處を諒察し、幸に同情を賜はらむことを切望する次第です。

◉プラタス島と貝釦原料

本邦貝釦は大阪を本場とし大阪府兵庫縣に在れる日本貝釦製造同業組合員七十餘名、職工千二百餘名にて製造し現在に於て一箇年約百萬圓以上其の內七十萬圓は外國特に獨逸に向け輸出し三十萬圓餘は內地の需用に應じ年一年供給力の增大を告げつゝあるが原料は鮑貝、螺、眞珠貝等の內地產を用ふることあるも此等は大抵內地の需用に止り品質精良を求めんには蝶貝及び高瀬貝を得ざる可からざるに蝶貝は米國に產すれども種々の事情より今は多く流行らず目下は一に高瀬貝を歡迎せり而して高瀬貝は從來印度より輸入され原產地の何れなりやは不詳なりしを過般森田商工局長に據り此の貝が總て比律賓群島に生じ支那商を經て新嘉坡に運ばれることを明瞭したる次第なりしが本年六月探知されたるプラタス島に於て其の產出なきやとて西澤吉次郎氏が自ら海面を檢測したる結果此の程に至り右高瀬貝の產出頗る豐富なるを確めたるより神戶なる青柳貝釦組合長へ照會し見本を送りたるを點檢するに決して從來の品と優劣なきを以て同組合員中廿餘名は兎に角一度材料として製品を試みるに決し約十萬斤餘十日神戶へ取り寄せたり原料價格は百斤五六圓乃至十四五圓なるがプラタス產は十圓五十錢位の取引値にて中等以上の品質を有し採集設備を完全になさば一箇月三十萬斤以上の產出容易なりといふ由來前記比律賓產額の九割迄は獨佛へ輸出され僅に其の一割が本邦へ輸入されたる爲或は船便を缺く時の如き直に原料價格の騰貴を來たし當業者の苦心多かりしを右プラタス產の供給十分とならば經濟界に及ぼす影響多からんとなり

（大阪朝日新聞）

牡蠣の話（承前）

に大に勉むる所ある精神である。館主は斯業の爲め既に資産の大部分を消費し、尙殘る資産も斯業の犧牲とする覺悟であるから、館主夫妻は協心戮力、慈善、教育、衞生等の事には。出來る限り應分の出資を惜まないけれども、他の生計費に至つては、頗る節儉を守つてをられる。今その一二の實例を擧げると、館主の家族は男女に關らず、平常は皆綿服を用ひ、男兒の如きはあらたまりたる場合にも、木棉の紺がすりときめてある。館主の如きも金緣の眼鏡や金時計などは夢にも携へた事はなく、また洋服一着も持たれぬ位である。館主の夫人も同樣、金時計は勿論のこと金銀に關らず指環一つ持つてをられぬ。館主の家族には金のものは殆んど禁物のやうになつてをる。只一つあるのは、館主の結婚の時、親戚から贈られた羽織の紐の環があるのと、館主は至て齒のあしき方にて齒の療治に金がつかつてある丈けである。かういふ風に自家の事には出來る限り節約をし、半錢も無益にしないやうにつとめてをられるが、斯學の爲めに盡くすことと、他の慈善教育等の爲に盡くすこととには、決して人後に落ちない覺悟である。で寄附金の依賴などある時は身分不相應の捐金をせられるので、世間では平常は別段職業として、これといふ働もしてゐないし、介類採集の旅費やら、その參考書などに多額の金を費つてをるから、資産は餘程豐かと見える、だから寄附などは澤山ださせてもよいといふ風評もあるさうであるが、これは飛んでもない誤解で、全く本館の精神を知らぬからして起つた誤解であらうと思はれる。館主は固より薄資のことであるから、全財産を盡くした所で、中々獨力で介類博物館を設立することは六ケ敷のである。さればといふて他の寄附を仰ぐことは本館の本意でないからして、敢てしない覺悟である。今回標本の發賣を創めたのは、一は斯學界に從來欠乏してをつた、否殆んど皆無であつた標本を供給して、斯道の進歩を謀り、一には又夫れから得た金

雜報

貝類標本の發賣と貝類博物館

本館は、年來蒐集し貯蓄してをつた海陸及淡水産介類の完全な標本を、今回から廣く世に發賣することにした、本館は久しく斯業に從事し、採集の爲めには、交通の尤も不便である洋中の孤島も殘さず、日本全國は殆んど探檢しない所はない程に採集した。其上我國の貝類との比較研究上大なる關係のある清韓二國にも、昨年から遠征を企つることになり。今は着々其歩を進めてをる。十數年間數名の助手が西に東に奔走し、幾多の探集者を養成するに至るまで本館の努力は尋常ではなかつた。これらの爲めに費した金員は決して少くなく、又研究の爲に心をつかつたことも一通りではなかつた。剩さへ種々の參考書を購入したから其費用も中々の負擔であつた。一例をいへばトライオン氏のマヌアル、オブ、コンコロジーの爲めに九百圓を仕拂つたので、他は推して知ることが出來るのである。雜誌の發行についても、多くの圖版を挿入し且用紙印刷等にも格別心を用ふる爲め、原價實費賣の定價に均しく、購讀者少數なるが爲め、其賣上は甚だ少く、その爲めにも毎月多額の損失をなしつゝある譯である。本館は從來全く獨力の經營にかゝる事であるから、それが爲め一家の經濟に及ぼす影響は少からぬとで、常に甚だ困難を極めてをつた。加之數年來希望してをつた介類博物館設立の事も、本誌に其の趣旨の揭げてある通り、愈その計畫に着手することになつたので、本館の責任は容易ならぬものがある、この事業は一大事業であるから、それが愈設立せらるゝ迄には、幾多の時日を要するは勿論のこと、その準備の爲に本館は今から一層の困難を嘗むることを覺悟してをる。で館主はいふに及ばず、館員一同は大々的奮發をなし、早晩其目的を達せむ爲め

16. Oliva mustellina, Lam. マクラガヒ 室津．高砂

COLUMBELLIDAE. 懷貝科

17. Columbella pardalina, Lam. マツムシガヒ 各地

18. „ versicolor, Sowb. フトコロガヒ 仝上

STROMBIDAE. 袖貝科

19. Strombus japonica, Rve. シドロ

CASSIDAE. チトセガヒ科

20. Cassis saburon, var. pila, Rve. ウネウラシマ

21. „ „ var. japonica Rve. 仝 (五百貝圖のカツラガヒは是ならん)

DOLIIDAE. 鶉貝科

22. Dolium luteostoma, Kust. ヤツシロガヒ (稀なり.五百貝圖の宮代は是ならん)

XENOPHORIDAE. 衣笠貝科

23. Xenophora exuta, Rve. キヌガサガヒ (稀に死殼を拾ふ)

NATICIDAE. 玉貝科

24. Natica zebra, Lam. モクメダマ (稀に死殼を得る)

25. „ maculosa, Lam. ゴマフダマ (稀)赤穗

26. Natica Adamsiana, Dkr. オビタマガヒ (稀)室津

27. „ ampla, Phil. ツメタガヒ 赤穗．室津．網干．飾磨．家島．高砂．明石．

28. Sigaretus incisus, Rve. ツガヒ

CALYPTERIDAE. 舟貝科

29. Hipponyx pilosus, Desh. スヾメガヒ

SCARALIDAE.

30. Scalaria pyramidalis, Sowb. イトカケガヒ 室津.



ものゝ見え、其ヱピフラムは著しく凸出してゐる。

播磨産水産軟体動物類（一）

大上宇一

CEPHALOPODA.　頭足類

OCTOPODIDAE.　タコ科

1. Octopus octopodia, Linn.　マダコ（大ダコ方言）
2. „ macropus, Risso.　（テナガダコ方言）
3. „ ocellatus, Fer.　イヽダコ

SEPIOLIDAE.　ミヽダコ科

4. Sepiola japonica, Fer. & Orb.　ミヽダコ（一名ミヽイカ）

OMMASTREPHIDAE　スルメイカ科

5. Ommastrephes pacifica, Steens.　スルメイカ

（?）　發光イカ科

6. (?) sp.　ホタルイカ（稀に來る）

SEPIIDAE.　マイカ科

7. Sepia esculenta, Hoyle.　マイカ

LOLIGINIDAE　ベニイカ科

8. Loligo (?) sumatrensis, Orb.　ベニイカ

GASTROPODA.　腹足類

DORIDIDAE　海牛科

9. Chromodoris sp (?)　ナシヂウミウシ(?)

MURICIDAE.　骨貝科

10. Murex brevifrons, Lam.　キエボラ（オニガイ　方言）明石．高砂．
11. Purpura tumulosa, Rve.　レイシ　赤穂．室津．網干．飾磨．家島．高砂．明石．
12. Rapana bezoar, Linn.　アカニシ　産地全上
13. „ bulbosa. Sol.　チリメンボラ（前種ヨリモ僅少）

FUSIDAE.

14. Fusus perplexus, A. Ad.　ナガニシ（一名ヨナキガヒ）

BUCCINIDAE.　越中蜆科

15. Eburna japonica, Rve.　バイ　網干

OLIVIDAE.　枕貝科

ずエピフラムを作る。之れは蒸發を防ぎ或は寒さを防んが爲めである。

エピフラムの性質は、之れを作る陸介の種類に從つて大きな差異がある。クローシリア。プパ・プラノルビスの如きものは、透明の薄膜から成つてをる。ヘリックス、アポルタ。ヘリックス、ポマチアの如きは、厚い白堊質であつて、多量の炭酸石灰を含んで、頗る石膏に似てをる。上述の二種のエピフラムは、之れは兩極端の例であつて、其の間には各種の厚さ及び各種の硬度を有するエピフラムのあることを知らねばならん。又長時間の冬眠中には、一ケの介であつて屢數ケのエピフラムを作ることがある。此る場合には漸々內方に退くに從つて、互の距離を減少するといふことである。此の樣にエピフラムは、實際蓋の効用をするけれども、蓋は動物の一部であるに、エピフラムは只一時の分泌物たるに過ぎない。

エピフラムを作る方法は、動物の種類によつて小異があるやうである。フィスケル氏の說に從ふと、動物は先づ殼內に縮み入り、全く空氣の通路を塞ぎ、肺孔を閉ぢ、殼孔と水平の位置を保つてをる、足の中部から、徐々に透明の薄膜を分泌し、漸々其厚さを增し、或種にあつては、更に石灰質を加ふるに至るといふ事である。

博士ビンチー氏は、ヘリックス、ホルテンシスを、多く飼つたからして、其エピフラムを作るのを見る機會を得られた。其摸樣は、殼孔を上向にし、動物の頸部は、殼孔と水平の位置を保ち、それから膠質物を分泌し、肺孔を開いて、內部から不意に強く空氣をだし、頸部と膠質物とを分離させ、丁度空氣の空胞のやうに、殼孔內から其薄膜を突出せしめ、動物は急に殼の內部に陷退する。こゝで外氣の壓力は、薄膜を押戾して水平となし、薄膜は乾固して、エピフラムとなるのである。

又或歐洲產の陸介には、其膠質分泌物に、多量の炭酸石灰を含み、動物が空氣を呼出した時、直ちに乾固する

又ヒアリニアを、突然温室に入れると、動悸を生じて來る。又ヒアリニア、ラディエチエラを、室內の机上に置くと、華氏六十二度の時、一分の脈搏は五十二であるけれど、之れを掌上に移すと、百〇八となる。ヒアリニアを、同樣の取扱にすると、七十二から百十となる。又之れを水上に浮べると、暴落して二十九となるといふことである。

淡水介は、冬眠をしないやうである。然しユニオ及びアノドンタは、冬季になると、一層深く泥中に埋沒するのである。又旱魃の時、池水が乾涸すると、多くの淡水介は、泥中に埋沒するけれども、之れは冬眠には關係がない。又リムニア及びプラノルビスは、屢厚氷の下面を匍匐することがある。之れでもつて其の冬眠しないといふことを證據だてることが出來る。

四、暑蟄

暑蟄は主に熱帶産に限るのである。又地中海の海岸のやうに、突然酷暑の襲ひ來る處にあるのである。陸介が暑蟄をする時は、或は深く地中に埋沒し、或は草木の蔭、岩石の下などに固着するのである。例へば南米のブラジル、エクワードル及び東部ペリユーに住んでをる、大形で彩色の美しいオルサリカス。コロナータ及びポルフィーリアバアフィーは、乾候の間は、深く地中に埋藏し、雨が降ると大森林の樹梢に攀ぢ上るのである。かゝる理由(わけ)であるからして、大アンチールス等のやうな熱帶の島嶼中で探集する人が、若し其地の乾候に遭遇する時には、少しも得る所はないであらうが、若し幸に雨候となることがあると、其の陸介の多い地方では、石上叢中、皆珍奇の種類に覆はるゝのを見るであらう。

五、エピフラム

多數の陸産有肺類は、粘液を出して殼孔を塞ぐのであるが、其の凝固したものをエピフラムといふ。或種の陸介は、冬眠、暑蟄若しくは少時潜隱してをる間にも、必

雜　錄

陸介及び淡水介の習性　其一、

三、冬　眠

秋霜林梢を染め。枯葉滿地の候になると、陸介は皆、石下、壁隙、樹洞、岩際などの各種の隅、或は罅裂に隱退し、或は地中、苔下、枯葉などの下に、深く埋匿する。之れを冬眠といふのであるが、さうして其の冬眠の時間は、各地冬期の長短に關係するのである。又屢蝸牛が互に相結合して團塊をなし、さうして冬眠するのを見ることがある。之れは期せずして、好隱匿所に相會合したものであらうか、或は相抱いて其の微少の体温でもつて、互に相温むるものであらうか、思ふに之れは朋友團欒の樂を得んが爲めではあるまいか。

蛞蝓類は、概して孤獨の冬眠をなすものであつて、地を穿つて巢を作り、体を縮めて球狀となり、粘泥を分泌して包嚢とする。蝸牛類は、其の殼孔に膜樣或は白堊質のエピフラムを作るのが常である。

蝸牛及び蛞蝓は、共に冬眠に入る前に當つて、其の身体の健全ならんことを欲するからして、外國の美食家等は、此の時期に捕へられた蝸牛を賞美すといふことである。

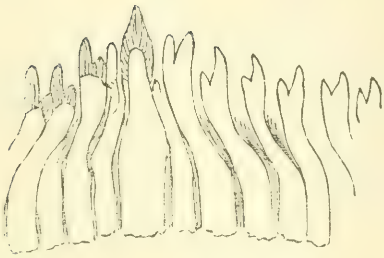
陸產有肺類は、冬眠してゐる間は、殆んど其の肺の働を全廢するのである。之れは全く嚴寒の直接の結果のやうである。シー、アシフォルド氏は、ヘリックス、ホルテンシス及びヒアリニア、セラリアに就いて、有益な實驗をして、溫度の變化が、其の脉搏に影響することを確められたが、其の結果は左表の通りである。

	華氏の温度	52	44	38°	30
一分間の脉搏數	ヒアリニア、セラリヤ	21	12	11	9
	ヘリックス、ホルテンシス	22	14	10	4



第三圖 ゴッドウヰン ナースデン氏





第四圖 ゴッドウヰン ナースデン氏

にして、上部は球状嚢をなし下部は柄状をなせり、輸卵管は余の解剖せし標品にありては大形にして膠質塊より成り、蛋白腺（タン）も亦陰莖及他の器管に比すれば大抵大なり」

顎（第三圖）は薄く、組織纖弱にして、少しく曲れる切緣を有す」

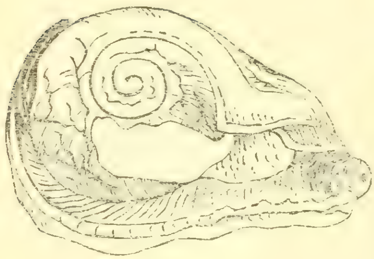
齒舌（第四圖）は最も纖弱なる廣帶にして、僅かに四百五十列內外の齒を具へ、齒は皆一樣に狹くして曲り、兩尖をなし、只中齒のみ一尖を有し、齒形は中央より緣に至るに從て漸々狹くなりて齒舌の兩端なる最も外方にある三四齒は鋸齒狀なし、全然 Leptodontarion の齒式を見せり」



同上備考（二）

ハリガヒモドキ(Heliearion, Hiraseanus, Pils.)の解剖

余は嘗て英人、中佐、ゴッドウヰン、オーステン氏にハリガヒモドキの標品を送りしに氏は、之を Heliearion の一亞屬 Leptodontarion, P. & F. Sarasin に屬す可き一種なりとし Leptodonation Hiraseanus, Pilsbry. と名け本年四月出版の論文「印度の陸産及淡水産貝類」中に其解剖を掲げ之を余に送付せられたれば、余はこゝに之を抄譯することゝなしぬ」



第一圖（ゴッドウヰン チーステン氏）

動物（第一圖）の長足には龍骨及黒色狹帶ありて、粘液腺は腺狀をなし、頸部は眼柄に至るまで黒色を呈し、体の他部は青白色なり、蹠面は區分せられ、周足溝は同類中に他種と異ることなし、右殼葉は平滑にして、廣く殼頂に達し、左殼葉は廣さ中庸にして舌狀をなし先端尖り、平滑にして青白色を呈す、右背葉は微乳嘴狀をなし、左背葉は狹長にして、裂痕によりて二區に分たる、内臟嚢は微かに黒點を散布し、腎臟は右側に狹き黒色の縁を有せり」



第二圖（ゴッドウヰン チーステン氏）

生殖器（第二圖）陰莖（丙圖）は簡單なる管にして、稍や長き牽筋を具へ、epephallus は長さ中庸にして、少しく脹れたり、特に著明なる器官は貯精嚢（スポルマセカ）（甲及乙圖）

殼口に近づくに從つて消失して圓くなれり、螺塔は低圓錐形をなし、其斜面は殆んど直く、底面は强く脹れ、臍部凹み、臍孔は内唇の三角形擴張部によつて殆んど陰蔽せらる」

彩色、本種よりも稍淡色なり」

本亞種は余の發見にかゝり、採集番號は一一七三にして信濃に面せる惠那山麓に於て、採集せしを以て M. c. shinanoensis と名づけられぬ」

變種アハクリイロベツカフ 新稱、

M. cerasina var. awaensis, Pils.

(陸産、第十一版、第百二、及第百三圖)

産地、阿波、

高、一分五厘、徑、二分七厘、

形狀、殼は本種よりも螺塔低く、螺層密卷せり」

彩色、本種よりも淡色なり」

本變種の産地は本種の産地と甚しく隔離せるも、両者の形狀は別種となること能はざる程相酷似せり」

本變種は余の新發見にかゝり、採集番號は八一二なり」

カズマキベツカフ 新稱、M. decens, Pils. et Hir.

(陸産、第十一版、第百四、及第百五圖)

産地、越後青海村、

高、一分二厘、徑、一分七厘五毛、

形狀、殼質薄く微小なる臍孔を有し、両凸扁球形にして、螺塔は低圓錐形をなし、周縁に鈍角を具へ、表面は多少光澤を有し、細やかにして不規則なる皺狀生長線を刻す、螺層脹れ六階を數へ、徐々に増大し、殼口は新月形を呈し、口緣は簡單にして鋭く、軸の挿点に小三角形の擴張部を有し、内唇は内部に厚くなれり」

彩色、琥珀褐色にして、多少透明なり」

本種は余の新發見にかゝり、採集番號は一一一九なり」

大形なるのみ、故に大グードベッカフと名づけぬ」

本亞種は余の新發見にかゝり、採集番號は一一〇八なり」

クリイロベツカフ 新稱、M. cerasina, Pils.

(陸産、第十一版、第九十六、及第九十七圖)

産地、羽後飛島、佐渡、

高、一分九厘、徑、二分九厘、

形狀、殼は臍孔を具へ、螺塔は低圓錐形をなし、光澤強く、微かなる生長線を有し、螺脈を有せず、螺層脹れ五階半を數へ、徐々に增大し、縫合深く、体層は前方に於て明瞭なる角を有し、底面脹れ、殼口は少しく斜向し、新月形をなし、唇は簡單にして薄く、內唇の附着点は小三角形をなして反曲す」

彩色、殼は暗赤琥珀色なり」

本種は余の新發見にかゝり採集番號は八三八なり」

變種ヒメクリイロベツカフ 新稱、

M. cerasina, var. reductus, Pils. & Hir.

(陸産、第十一版、第九十八、及第九十九圖)

産地、羽前、

高、一分三厘、徑、一分八厘、

形狀、本種よりも著しく小形にして、螺層五階を數ふ」

彩色、本種に等し」

本變種は余の新發見にかゝり、採集番號は一一二三なり」

亞種エナクリイロベツカフ 新稱、

M. cerasina shinanoensis, Pils. & Hir.

(陸産、第十一版、第百、及第百一圖)

産地、惠那山、

高、二分三厘、徑三分三厘、

形狀、殼はクリイロベツカフ及グードベッカフに酷似するも著しく大形にして、光澤強く、螺層は六階半を數へ、極めて徐々に增大し、体層の周緣は前方に角をなし、

採集の經驗によれば本屬中大形なる種の動物は概して殼內に退縮することなく、運動極めて活潑にして、若し之を捕へんとすれば轉覆して以て速かに逃れんとするもの、如し」

グードベツカフ 新稱、M. Gudei, Pils.

（陸産、第十一版、第九十三、第九十四圖）

產地、琉球國頭、大隅德之嶋、

高、二分六厘、徑、三分四厘、

形狀、殼は微小なる臍孔を具へ、低き圓錐形をなし、殼質薄く、微透明にして、表面に光澤を有し、弱き生長線を刻し、底面には粗くして淺き朦朧なる螺溝を有し、所々消磨せり、螺塔は圓錐形をなし、縫合淺れ、六階四分の三を數へ、徐々に增大し、體層廣し、周緣に角を有し、其角は前方に於て著しきも、殼口附近にありては消失せり、底面膨れ、臍孔の周邊凹み、殼口は新月形をなし、外唇簡單にして薄し、內唇緣は厚くなりて上方擴がり、三四半に反曲して一部臍孔を覆へり

彩色、黃褐色なり。

本種は余の新發見にかゝり採集番號は六三五なり、

本種の所屬は稍疑はしくして或はヒメベッカフに屬す可きものなるやも知れず、故に余は之をヒメベッカフ屬の次ベッカフ屬の始めに列し、兩屬の中間に在る意を寓す、ピルスブリー氏は本邦蝸牛の研究に功績ある、其友ジー、ケー、グード氏（G. K. Gude.）氏の名譽の爲めに本種をグーディと名けしかば余も亦之にグードベッカフてふ新名を附することゝなしぬ」

亞種、**オホグードベツカフ** 新稱、

M. Gudei inclytus, Pils. & Hir.

（陸産、第十一版、第九十五圖）

產地、德之嶋、

高、二分六厘、徑、四分三厘、

形狀彩色、皆本種に同じく、只螺塔低く且つ、著しく

（陸産、第十一版、第九十第九十二圖）

產地、臺灣サンマイポー、美濃及甲仙埔等、

大さ、二分二厘五毛、徑、三分五厘、

形狀、殼は臍孔を有せず、低き扁球形にして、殼質脆薄なり、表面は平滑にして强き光澤を有し、螺塔は凸くして狹し、螺層は三階半を數へ、急激に増大し、体層は周縁及下面圓く、殼口は斜めにして廣き新月形を呈し、口縁には狹く反曲せる表皮縁を有し、內唇は簡單にして薄く且つ凹めり」

彩色、透明なる淡黃角色なり」

本種は余の新發見にかゝり、採集番號は一四三一なり、本邦にては未だ他に之に類似せる種類を發見すること能はず」

ベツカフガヒ屬、新稱 Macrochlamys, Benson, 1832.

ベンソン氏はブンデルクンドのバンダに於て岩の斜面に始めて本屬中の一種を發見し、之を觀察して左の如き意味の記載をなせり、

動物は殼を略ぼ水平の位置に荷ひ、運動迅速にして、若し之に觸るれば、蝸牛類の如く其觸角を縮むることなく却て、ヘリコリマックス類の如く、速力を早めて匍匐す、多濕の天氣には其足肉、濕氣を吸收して膨脹するを以て、動物は殼內に退縮すること稀なり、若し突然之を沸湯中に投ずるときは、動物が殼內に退縮せんとするが爲に殼口の破壞を生ずるを常とす、而して天氣乾燥なるときは、動物は其足を退縮し、蝸牛類の如く帶白色の殼口膜を生ず、本屬の動物は外套に二ケの長突起を有し絶へず之を動かし、一種の液を出して殼を濕し以て光澤を發せしむ、又尾部の角狀附屬器の根元にある孔より出す液は帶綠色を呈し、動物が此液を出すは外より刺激を受けし時に於てし、尾部の附屬器を敵の方に向け突然襲撃の外觀を呈せしむ」（ゴッドウヰン、オーステン氏「印度の貝」第三、七十六頁より）

高、八厘、徑、一分四厘、

形狀、殼は僅かに臍孔を有し、脹れて低く、殼質極めて薄く、透明にして硝子樣を呈し、相隔りたる極微脈あり、縫合著しく、螺層は三階を數へ、急激に増大し、体層廣くして下面は平坦なり、殼口は斜卵形にして口縁は膜質を呈し、内唇縁は少しく反曲せり」

彩色、透明なる白角色にして玻璃狀の光を呈せるを以て余は之を玻璃貝と名けたり」

ハリガヒモドキ屬、Helicarion, Férussac, 1821.

殼はハリガヒ形にして、卵圓形をなし、殼質脆薄にして極めて薄き表皮を被り、螺層は階數少くして急激に増大し、体層は甚しく脹れ、殼口大きく、簡單にして鋭き口縁を有せり」

動物は全く殼内に退縮するを得ず、外套は前方に延長し頸上に二葉をなし、右側上に一後葉を作り、一部は殼を覆ひ、足の後方は截切狀をなし、一ケの背突起と粘液孔とを有し、蹠は縱に三部に區分せられ、縁背は兩尖なり」

本屬の記載せられしもの既に六十種に及び、暖國の産にして、分布上温地のハリガヒに交代せるの觀あり、亞細亞洲の東部及南部、マレイシア、フィリッピン、濠洲、アビシニア等に産す」

本屬は動物の性質に從て之を數區に分つことを得べきも動物未知の種類多きを以て此區別に從ふこと難し、トライオン氏の書には次の三區を掲げあるも余は今其細説を省き只其名稱産地のみを列擧することゝなしぬ、

クリプトソマ區、Cryptosoma, Theobald.

(ビルマに一種を産す)

オーステニア區、Austenia, Nevill,

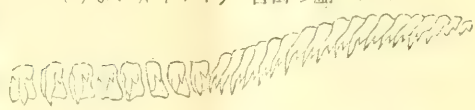
(南アジアの産なり)

アフリカリオン區、Africarion, Godwin-Austen.

(東アフリカの産なり)

ハリガヒモドキ 新稱 H. Hiraseanus, Pils.

疑なきが如し、本屬は殆んど陸上到る所に產し、熱帶產のものは只だ其殼のみを觀察し、動物を研究せしもの極めて少きも、其多數はハリガヒモドキ屬(Helicarion)或はハリガヒ屬とハリガヒモドキ屬との中間形に屬すべきものゝ如し、模式的ハリガヒは北半球の溫帶或は北地の產にして、暖國の山地にも住し、よく低溫に抵抗し、雪上にさへ匍匐することあり、本屬の化石は歐州の始新層より出でたるを最も古しとなす」



ハリガヒ屬の齒舌（トライオンより）

トライオン氏は模式的ハリガヒ屬を左の四區に細別せり」

殼に臍孔なきもの

セミリマツクス區 (Semilimax, Stabile, 1859.) 動物は其殼內に全く退縮するを得ず、外套は甚しく發達し、殼は長卵形をなす」

フエナコリマツクス區、(Phenacolimax, Stabile, 1859.) 動物は全然殼內に退縮することを得て、玻璃質の口膜を作り、外套の發達は中庸にして、殼は卵形をなす」

殼に狹き臍孔あるもの、

オリゴリマツクス區 (Oligolimax, Fischer, 1878) 外套は僅かに前方に於てのみ殼外に擴がり、動物は全く殼內に退縮することを得、殼は球狀にして細脉を有せり、日本產ハリガヒは本區に屬す」

ゴーランディア區 (Gallandia, Bourguignat, 1880.) 動物は全然殼內に退縮することを得べく、殼は圓錐狀をなし体層は角を有す」

オリゴリマツクス區、Oligolimax, Fischer.

ハリガヒ 新稱 V. exilis, Morelet.

(陸產、第十一版、第八十八、及第八十九圖)

產地、千島擇捉島、(カムチヤツカ、アラスカにも)

褐色乃至帯赤褐色の表皮を被り、体層の下部は表皮特に薄くして剝脱せるもの多く、頂部の四五層も裸出せること多し」

彩色、表皮下は藍白色にして、口內は光澤ある肉色也」

本種はトライオン氏の書によれば螺層六階ありと記せるも余の所有せる標品にありては凡そ十階を數ふべく、其外觀テヂスキエツチウバイに酷似し体層下部表皮の剝脱も亦之に類す」

日本陸産貝類圖説（六）

ハリガヒ屬 新稱 Vitrina, Drapar.aud.

殼は臍孔を缺ぎ、或は極めて狹き臍孔を有し、扁球形をなし、殼質極めて薄く、角質透明にして、螺塔小さく、螺層の數少く、急激に増大して体層大きく、殼口は新月形或は圓形をなして大きく、內唇緣は少しく內曲し、口緣は往々膜質をなす、動物は殼の大さに比して大きく辛じて全体を殼內に退縮することを得るものもあれど、大抵殼に對して肉体過大なり、動物は体長く尾短く、粘液孔なく、外套は頸の一部を覆ひ、殼の緣上に反折して、右側上に一ケの箆狀後葉を供し、間斷なく殼面を運動して、表面を硏磨して光澤を發せしむ、顎は下部に嘴狀突起を有し、齒舌の中齒は三尖をなし、側齒及緣齒は兩尖にして、緣齒は薄くして尖れり」


ハリガヒの一種の動物（トライオンより）


ハリガヒ屬の顎（トライオンより）

此類は濕地を好み、粗鬆なる土壤、石、草、苔等の中に住し、活潑に運動し、若し之に觸るゝときは往々地上に躍り上ること數寸なることありと云ふ、此類は他の蛞蝓類の如く往々肉食することあり、

本屬の已に記載せられしもの凡そ百種ありと雖ども、互に酷似せるもの多く、研究の結果其種數を減ずべきや

半を超へ、外唇薄く、內唇は滑層を有し、上部凹み下部少しく捻れ、水管溝は廣く開きて短し」

彩色、表面は一樣なる帶黃白色にして、口內は柑色乃至白色なり」

本種は余の新發見にかゝり、採集番號は一一八二なり」

變種、**コエゾボラモドキ** 新稱

N. intersculptus var. frater, Pilsbry.

(海產、第十九版、第百三十圖)

產地、陸前、

長、四寸、

形狀、本種よりも小形にして薄く、螺肋强く、肋數少く、肋間に細密なる螺脈を有し、水管溝は本種よりも稍や狹長なり」

彩色、表面は汚淡褐色にして、口內は帶紫白色なり」

本種は日本海岸に產し本變種は太平洋岸に產するを以て見れば、本變種は多分本洲東岸にありて西岸のエゾボラモドキを代表せるものなるべし」

本變種も余の新發見にかゝり、採集番號は五九なり」

ネヂボラ屬 Volutopsis, Mörch.

此屬に屬する貝は殼口大きく、兩唇擴張し、水管溝極めて短く、厴は小形にして、エゾボラ屬の厴よりも一層卵形に近く、齒式も亦摸式エゾボラと異れり、而して本屬は正にエゾボラ屬とエッチウバイ屬との中間に位せるものと謂ふべし(但本邦產にありては此の定義に符合せざる点多し」)

ネヂボラ 新稱 V. pericochlion, Schrenck.

(海產、第二十版、第百三十一圖)

產地、陸前、

長、四寸五分、

形狀、螺塔非常に高く、各螺層も比較的に高くして少しく脹れ曖昧微細なる螺線と生長線とを有し、凡そ七階を數へ頂端は稍や乳頭狀をなし螺層の上部扁平にして、縫合には廣き溝を有し、上向龍骨を以て之を限り、帶黃

することを得可し、固より両屬の中間に位して、其何れに屬す可きや俄かに判決し難きものありと雖もトライオン氏の如きは産地に重を置きて分類せるもの多し」

本屬中の或種は外觀頗る變化に富み Gwyn Jeffreys 氏及 Kobelt 氏の保守說と Mörch 氏等の稍極端なる說と何れか果して眞理に近きやを判するに苦まざるを得ず」

エゾボラ 岩川 N. despecta, Linn.
=arthriticus 'Val' Bern.
=saturus, Mart.
=Cumingii, Crosse.
=bulbaceus 'Val' Bern.
=taeniata, Sowb.

(海産、第廿版、第百卅一圖及全a、b、c、d圖)

産地、北海道、陸奥等(那威、スピッツベルゲン、西比利亞、アラスカ、綠州(グリーンランド)、氷州(アイスランド)、ニユーフアウンドランド等にも)

長、二寸ヨリ五寸ニ及ブ、

形狀、分布廣く殼形種々にして、異名頗る多く、諸說紛々統一し難し、概して脹れたる紡錘形をなして、多少の肩角を示し、或は低く圓き數條の螺肋と細螺脈々を有し、或は大小の小脈を繞らし、或は葉狀の縱襞を發達し、螺塔の高低、結節の大小有無等一々記載の遑なし、」

彩色、表面は一樣なる帶白色乃至汚褐色にして、口內は白色、柑色、暗黒色等種々あり」

d圖に示せるは、擇捉島より得たる標品の背に附着せしものにして、本種の卵嚢と思はる」

エゾボラモドキ 新稱 N. intersculpta, Sowb.

(海産、第十九版、第百二十九圖)

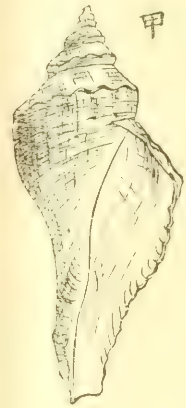
産地、丹後、陸前、

長、五寸內外、

形狀、殼質薄く、両端尖れる紡錘形にして、螺塔は高き圓錐形をなし、螺層は脹れて圓く八階を數へ、大小の螺脈と曖昧なる生長線とを有し、殼口廣く其長さ全長の

岩川氏は本種の和名をテングニシとせられしも目八譜によればテングニシは正に前種に相當し、本種は同書の鬼辛螺一名角辛螺に相當せるが如し、故に余は已むを得ず目八譜に從ふこととなしぬ」

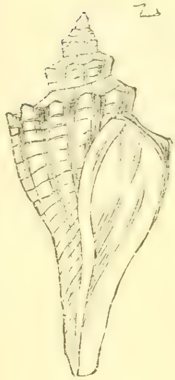
甲



テングニシ(原圖)

余は前種及本種の多數の標品を比較せしに、出雲產(上圖甲)は結節極めて低くして螺層圓に近く、能登產(第百二十六圖)は形狀之に等しくして只非常に大形(長さ凡そ二倍)なるのみ淡路產(第百二十七圖)は結節稍高く、其大なる標品は薩摩產(第百二十八圖岩川氏の寄送品)に酷似せり、

乙



テングニシ(トライオンより)

かく觀察し來ればテングニシ(上圖乙)とオニニシ(次圖丙)とは或は多形なる同一種に非ずやとの疑なきを得ず」

丙



オニニシ(トライオンより)

ヱゾボラ亞科 Neptuniinae.

ヱゾボラ屬 Neptunea, Bolten.

=Chrysodomus, Swains.

此屬は北方に產し、他の極地附近產貝殼の如く、彩色乏しくして、白色或は帶黃色を呈し、稍平滑なる淡褐或は帶白色の稍平滑なる表皮を被り、彫刻を有せる種にありては螺脈或は螺肋を具へ、殼口の唇は内部平滑にして、殼質薄き標品にありては、往々表面なる彫刻の影響を蒙ることあり」

主として日本及濠洲に產するミガキボラ屬は概形本屬に酷似せるも、殼に結節多く、往々縱肋を有し、外唇は齒狀を呈し、表面に彩色を飾り、帶を有するを以て識別

をなし、螺塔は短くして鋭く、縫合は溝狀を呈し、殼軸凹み、平滑、或は細溝を有し、外唇は前部に微かなる切込みを具へ、後部に截痕を有し、內部に溝あり。厴は末端に核を具へ、齒式は未だ詳ならず」

テングニシ亞科 Melongeninae.

テングニシ屬 Hemifusus, Swainson.

メロンゲナ屬よりも殼質薄きのみならず、帶或は他の彩色なく、白色にして、帶黃褐色の表皮を被り、ナガニシ屬よりも水管溝廣く、該水管溝は開きて殼口の下部に至るに從ひ漸々廣くなれり」

テングニシ目八譜 H. ternatanus, Gmel.

(海產、第十九版、第百二十六、及第百二十七圖)

產地、日本海沿岸、肥前、淡路等、(印度洋、フィリッピンにも)

長、六七寸、

形狀、殼は紡錘形にして、螺塔の高さは殼口の長さの半以下にて、水管溝廣く殼口との界判然せず、螺層の微肩角上に低き結節を具へ、低き螺肋と肋間とに精細なる螺脈ありて、布目細鱗狀をなせる薄き有毛表皮を被り、殼軸の前部に捩れたる一隆起部を有し、外唇緣は微齒狀を呈す」

彩色、表皮は汚れたる黃褐色にして、殼は內外共に淡肉色なり」

オニニシ道具 H. tuba, Gmelin.

(海產、第十九版、第百二十八圖)

產地、薩摩、和泉、相摸、伊豆、安房、加賀、阿波、土佐等(支那にも)

長、六寸、

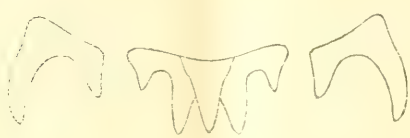
形狀、前種よりも殼質重厚にして、結節高く、輪廓は稍不等邊四角形を呈す、螺塔は前種よりも稍低し」

彩色、帶黃肉色にして帶褐黃色の薄き表皮を被り、殼口內は淡肉色を呈す」

クラニドタ屬（Chlamidota, Martens.）、未だ本邦產あるを知らず、故に之を略す」

バイ亞科 Eburninae.

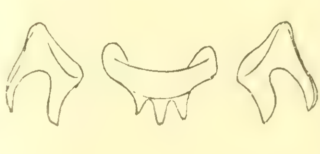
バイ屬 (Eburna, Lam.)、殼質厚く、長卵形をなし、磁質にして、薄き表皮を被り、深き臍孔を有し、螺塔尖り、螺層は稍や脹れ、縫合は多少溝狀をなし、殼口は卵形にして、殼軸は弓狀に彎曲し、後部に滑層を具へ、內唇は擴張して成熟せしものにありては、往々臍孔を覆ひ、外唇は簡單にして鈍く、厴は頂核を有し、齒式は上圖の如し」



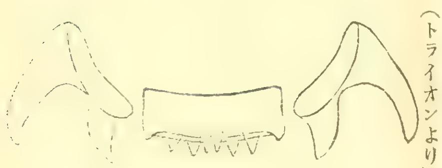
バイ屬の齒舌（トライオンより）

マグロン屬(Macron, H. & A. Adams.)、未だ本邦產あるを知らず、故に之を略す」

トクサバイ亞科、 Photinae.



トクサバイ屬の齒舌（トクサバイ）（トライオンより）



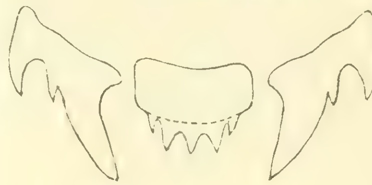
ナサバイ屬の齒舌（トライオンより）

トクサバイ屬 新稱 (Phos, Montfort.) 殼は縱橫線を具へ、楕圓形をなして尖り、大抵縱肋あり、外唇は內部に脈を有し、前部に近く微凹部あり、殼軸は斜溝を具へ、或は前部に一襞を有す、厴は鈎狀をなし頂核あり、齒式は上圖の如し」

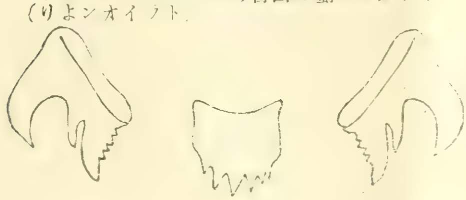
ナサバイ屬 新稱 (Nassaria (Link) H. and A. Adams.)、殼は卵樣紡錘形をなし、螺塔尖り、螺層は縱肋を具へ、或は縱橫線を有す、殼口は前の方反曲せる長水管溝に終り、內唇薄く、制限せられ、皺狀橫襞を有し、外唇の內部に溝あり、厴は卵形をなして頂核を具へ齒式は上圖の如し」

シレ子屬 (Cyllene, Gray.)、殼は卵形

メツラ屬の歯舌(トライオンより)



ホラダマシ屬の歯舌(スジクロホラダマシ)(トライオンより)



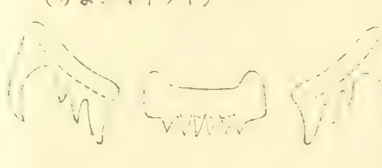
Reeve) 未だ本邦産あるを聞かず、」

ホラダマシ屬新稱 (Cantharus, Bolten)、殼はエッチウバイ形をなし、中部は多少脹れ、前方狹く、螺塔と殼口とは大抵等長にして、内唇には概して數ケの横隆起脈を具へ、外唇は内方に鋸齒を有し、又其上部に一ケの水管溝あり、蓋は卵形にして、頂核を有し、齒式は上圖の如し」

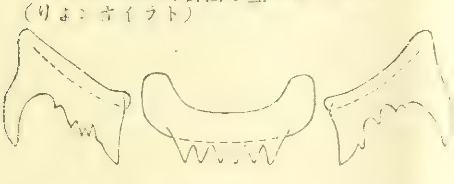
エツチウバイ亞科 Buccininae.

エツチウバイ屬 (Buccinum, Linn.) 殼は卵形或は楕圓形にして、角質の表皮を被り、螺塔高く、殼頂鋭く、殼口は大きくして卵形をなし、前部に截痕を有し、水管溝は廣くして極めて短く、或は單に殼口底の斜截切

エツチウバイ屬の歯舌(トライオンより)



モスソガヒ屬の歯舌(モスソガヒ)(トライオンより)



なることあり、殼軸平滑にして、内唇擴張し、外唇は大抵薄くして、内部平滑なり、蓋は卵形をなし、小さき核は外前端附近にあり、齒式は上圖の如し

子オブクシヌム屬 (Neobuccinum, E. A. Smith) 未だ本邦産あるを知らず故に之を略す」

ブクシノプシス屬 (Buccinopsis, Jeffreys.)、未だ本邦産あるを知らず、故に之を略す」

モスソガヒ屬(裙貝) (Volutharpa, Fischer.) 殼質薄くして脹れ、螺塔短く、体層と殼口とは極めて大なり、蓋は大抵之を欠ぐも、之を有せるものにありては、始め頂核を見はし、後に環状となる、齒式は上圖の如し」

ミガキボラ屬(Siphonalia, A. Adams.) 殼質薄く卵狀紡錘形をなし、往々雜彩を有し、表皮極めて薄くして脱離し易く、体層脹れ、肩角あり、大抵結節狀の襞と螺肋とを具へ、殼口は卵形にして、外唇薄く、内唇は平滑なり、水管溝は稍短くして捩れ、厴は卵形にして頂核を有し、齒式は未だ詳ならず」

ゴウシウミガキボラ亞屬(Austrofusus, Kobelt.) 螺層に肩角なし」

フルグル屬(Fulgur, Montf.)、未だ本邦産あるを知らず故に之を略す」

ストレプトシフオン屬(Streptosiphon, Gill.)、未だ本邦産あるを知らず、故に之を略す」

ツデイクラ屬(Tudicla, Bolt.)、未だ本邦産あるを知らず、故に之を略す」

ベツカフバイ亞科 Pisaniinae.

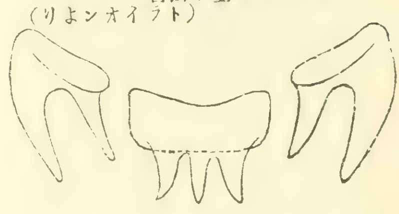
ベツカフバイ屬 新稱 (Pisania, Bivona.)、殼は楕圓形にして螺塔高く、螺層は平滑、或は螺脈を有し、水管溝極めて短く、外唇厚くして鋸齒狀をなし、厴は卵形にして、頂核を有す」

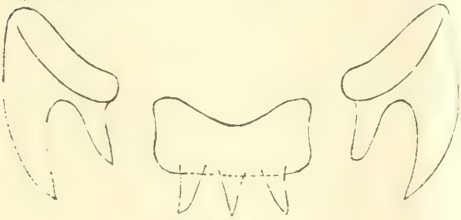


イソニナ屬の齒舌
(トライオンより)

イソニナ屬 岩川 (Enthria, Gray.) 殼は平滑なる紡錘形にして、殼口は卵形をなし、前方は延長して反曲せる長水管溝となり、内唇薄く、外唇は後方に切込ありて、内部に脈を有し、厴は卵形にして、頂核あり、其齒式は上圖の如し」

メツラ屬(Metula, H. and A. Adams.) 殼は長紡錘形にして、精細なる縱横線を有し、螺塔は高くして鋭く、殼口狹く、内唇は平滑にして離れ、外唇は外方に厚くなりて内方に鋸齒を具へ、後方に截痕あり、厴は未だ詳ならず、齒式は次頁の如し、凡そ四種あり一種支那海に産するものあるも (M. mitrella, Adams and


メロンゲナ屬の齒舌
(トライオンより)

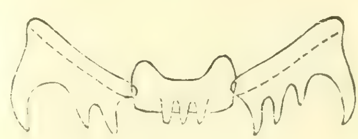

テングニシ屬の齒舌(オニニシ)
(トライオンより)

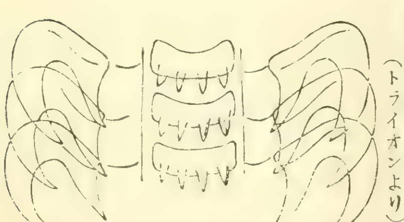
頂核を有し、齒式は上圖の如し、未だ本邦產あるを知らず」

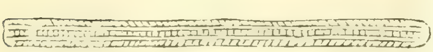
テングニシ屬(Hemifusus, Swainson.) 殼質重厚亞紡錘形にして、無色或は淡黃色なり、螺塔は殼口よりも短く、螺層は肩角上に扁平なる刺(或は結節)を有し、殼口は長卵形をなし、其後部に上昇內溝ありて、前方は延長して中庸の廣さを有せる水管溝をなし、內脣は平滑にして、外脣は簡單なり、齒式は上圖の如し」

ヱゾボラ亞科
Neptuniinae.

ヱゾボラ屬(Neptunea, Bolten.) 殼は紡錘形にして脹れ、螺塔高


ヱゾボラ屬の齒舌
(トライオンより)


ネヂボラ屬の齒舌
(トライオンより)



く、螺層圓く、角質の表皮を被り、殼頂は乳頭狀をなし、殼口は卵形にして、水管溝短く、內脣は簡單にして、平滑なり、厴は卵形をなし、頂核を有し、齒式は上圖の如し」

ネヂボラ屬(Voltopsis. Mörch.) 殼は平滑卵形にして脹れ、螺塔低く、殼頂は亞乳頭狀をなし、体層大きく、殼口極めて大きく、脣は著しく擴張し、水管溝稍延長し、廣き斜切狀をなし、厴は不規則なる卵形にして頂核あり、齒式は上圖の如し」

シフオ屬(Sipho, Klein.)、未だ本邦產あるを知らず、故に之を略す」

ニシ屬に類似したるものを先にし、歯式を參考して、それより順次エッチウバイ形のものに及ぼせり」

テングニシ亞科(Melongeninae.)、殼質重厚にして梨形をなし、螺塔及水管溝は短し」

ヱゾボラ亞科(Neptuniinae.)、殼質薄く、梨形或は卵形をなし、水管溝は中庸にして拗れたり」

ベツカフバイ亞科 新稱 (Pisaniinae.)、殼質重厚、小形にして、肋を有し。水管溝は極めて短く且つ廣く、外唇厚くして內方に齒を具へ、內唇には滑層を有して皺多し」

ヱツチウバイ亞科(Buccininae.)、殼質稍や薄く卵形をなし、平滑或は肋を有し、角質の表皮を被り、殼口甚だ大きく、唇薄く、內面平滑にして、下方は短き斜の切れ込に終れり」

バイ亞科(Eburninae.)、殼質厚く、平滑、長卵形をなし、臍孔深く、或は厚き滑層に被はれ、外唇は簡單にして鋭し」

トクサバイ亞科 新稱 (Photinae)、殼質重く、卵形或は塔狀をなし、小形、平滑にして、肋或は縱横の脉を有し。外唇の內方に脉あり、水管溝は短くして廣く、殼軸の下部拗れたり」

エッチウバイ科中の諸屬分類綱領、

テングニシ亞科 Melongeninae.

二屬を含む、左の如し、



メロンゲナ屬の一種の動物(トライオンより)

メロンゲナ屬 (Melongena, Schum.) 殼質堅固にして、梨形をなし、暗色或は帶を有し、螺塔低く、結節多く、刺を具へ、殼口は長卵形をなし、水管溝は短くして開け、內唇は平滑にして、外唇は簡單なり、軸は堅固にして、鉤狀をなし

びにてありき、啓蒙の說によれば備前、作州のヘイガヒ(灰介)勢州のツメキリガヒ(爪切介か義未詳)土州のチガヒ(血介)通州のムマノツメ(馬ノ蹄)は皆サルボホのことなりとぞ之をアカガヒに比すれば殊に小く瓦壟の數も少なし其別は目八譜に詳なり

○泉州堺、相州江ノ島。備中巖島の介商は其海に晒されて自づと白くなりたるを集め之を蘇木、梔子（今は早染粉にて紫青綠褐等くさぐの色に染めたり）にて染めたるを絲に貫きて販げり

○其餘ウバガヒ(姥介)と云へる一種ありこはアカヽヒに似て殼の兩唇齊しからずして一片短きを異とす備前にてモガヒ(藻介)といふも是なりとぞ。其餘種類多かれど鉅細は本誌の圖說に讓る。

本邦海産貝類圖說（十一）

○エッチウバイ科（[illegible]）[illegible]

殼は卵形、楕圓或は梨形をなし、水管溝は中庸なるか或は短く、內唇に皺襞なし、蓋は頂核或は側核を有す。齒式は一●一●一にして、中齒は三尖を具へ、側齒は二或は三尖を有す」

模式的エッチウバイは汚色の薄き卵形殼を有し、全殼面は一色にして、殼口底はナガニシ科の如く延長して水管溝を作ることなく、廣き切込を有するを常とすれども、近時ナガニシ科に似たる梨形の種を加ふるに至れり、故に外形に就て觀察すればテングニシ類等はエッチウバイ科とナガニシ科とを連絡せる橋梁といふべし、然れども本科中ナガニシ類に類似せる諸種にして水管溝の長きものは該溝廣く開け、イトマキボラ屬に於ける如く推れたりと雖ども、該屬の如く內唇上に數襞を具ふることなく多くは只一褶を有するのみ、トライオン氏の書にはナガ

るか。象牙をもキサと云へるは其紋理あるを讃めて云へるか。夫より移りて象をもしかいへり。げに此の貝は餘の貝と異にしてさながら瓦甕の如き顯著なる劃目縱横に亘れり故に瓦屋子瓦壟子などの漢名あり。

夫の松島と相對峙して其名を轟かしゝ象潟(キサカタ)は實は蚶潟なるべし。今や桑田碧海の諺に漏れず磯打浪濱風誘ふ松の音も絶えて久しく今は只門田の稻葉音づれて鳴だに立たぬ夕暮を哀と詠みし蕉翁が奥の細道たえぐに名のみ殘るぞ悲しかりける。

(あかゞひの名目)今名アカヾヒの稱は永祿十一年(一二二八)のとを記せる朝倉亭御成記に

九獻あかゞ井。

とあり。卽今年より三百三十四年前なりされば此稱稍古くより行はれし名なるべし實に其肉赤くして煮たるものは胡蘿蔔の如し佐渡にてチトコガヒと呼べるよしされど其由は詳ならず。

(アカヾヒの一屬)アカヾヒは一屬多し中にも是が昆弟として世に普通なるは

サルボホ(猿頬)

なり。扨本邦産の猨は一種特別にして頬の内に食物を蓄ふる囊の如きものを具ふ之を猨嗛(サルホホ)と云ふ此カヒ猨の食物を爰に納めたるとき痛く外に向ひてふくらみ出てたる形のさながら相似たりとてかくは呼びいでしものと云ふさもありぬべし。之をサルボと逼るはさるべけれど、攝泉地方の海士はサブロ又サブロウと云へどいとをかし凡て同地方にては名の中間に良行の音ある時は良の音は母音を殘して語尾に移り其母音を取て發音する習慣あり卽

Sarubo=Saburo.

是たり。卽是と同じ筆法にてツルベ(釣瓶)をツブレ、又カラダ(軀)をカダラといへるなど皆此例なり。長崎に茶ガマ(釜)と云ふ貝あり牡蛎の屬にて殼厚く形は寧碗に似たり是を予に惠みし人の手簡に茶マいがとありしはいとも薹なき筆のすさ

前陳の理由により、余は介類博物館の必要を感ずること爰に數年、一日も速に、其設立を見むとする念、甚だ切なるも、現今の我日本に在りては、余と感を同うする人甚だ少數なるべければ、此際他の助力を仰ぐ事は、到底望むべくもあらず。されば余は出來得る限り、余の獨力を以て經營せむことを期するも、余は元より薄資なるが上、既に輕からざる資財を投じたれば、近き將來に於て此目的を達せむことは、甚だ困難なるべきを信ず。されど余は苦心經營、計畫是れ怠らざれば、早晩其素志を遂行する時あるべきを信ず、希くは大方博雅の君子、余が微衷を諒して、一臂の聲援を與へられむことを、敢て介類博物館設立の主旨を陳ずること爾り。

國書介名考 (承前)

永沼小一郎

第九項。蚶(キサ)ニ　唐韻ニ云フ蚶ハ(乎談ノ反。)辨色立成ニ云。和名木佐)。蚌ノ屬ヲ狀如蛤。圓而厚ク外ニ有リ理ノ縦横(スヂメ)即今ノ蚶也。今云アカヾヒ。

本草綱目に魁蛤を本名とし而して蚶一ニ作ル蚶とあり。且注釋も明了なると、本鈔稀に見る所なり故に斷じて今云アカヾヒとす。

(和名創見)和名キサの名は創めて古事記に

𧏛貝比賣(キサガヒヒメ)

とある是なり但し此字の出典詳ならず而して之をキサと訓めるは出雲風土記に

御祖神魂命御子支佐加比比賣(キサガヒヒメ)社

又支佐加比比賣命ともあり推して𧏛は蚶と同義なることを推知せられたり此姫神の神話は後に云ふべし。

釋名ニ時珍云。魁者羹斗之名。蛤(カヒ)ノ形肖ルニ之ニ故也。蚶ハ味甘シ故ニ從フ甘ニ。とあり。又和名キサは本鈔に橒をもキサと訓みたり之を推してキサは文理の義と知らる。刻目(キサメ)などいへるも同義か果た俗にキザ〳〵など云へる孰れか本な

人の不幸に止まらざる也。

帝室博物館又は大學の標本室に寄附して、其保存を託すれば可ならむといふ人あれども、其も一端の議論にして余の滿足する所にあらず。何となれば、單に保存の点よりは、自家の倉庫に貯へむよりは、多少の安全はあるべきも、之れを余が希望する、公衆縱覽の点よりすれば、其設備を欠げるか爲に、余が倉庫内に蓄積し置くと、敢て異なることなかるべし。

余は此等の理由よりして、一の介類博物館を設立し、標本の保存と共に、廣く世人の縱覽に供せむ事を欲す。こは唯斯學者に多大の興味を與ふるのみならず、其他に及ぼす利益も亦少からざるべし。例へば普通の觀覽者にありても、高尚なる遊覽場として、不知不識の間に、科學上の知識を得るに至るべく、又介類の中には、其色彩の美麗なる、紋樣の精妙なる、彫刻の緻密なる、形狀の珍奇なる、實に驚嘆すべきものあれば、美術工藝家の參考資料として、有益なるもの少からざるべし。然るに美術工藝家に在りて、從來之を實地に應用するものなかりしは、抑も何の故ぞ。是れ畢竟するに、彼等の參考に資すべき完全なる標本の欠乏せるが爲めのみ。されば若し余が企畫にして成就したらむには、此方面にも利益する所少からざるべし。

又我國に於て來遊外人の觀覽に供すべき場所は、帝室博物館と神社佛閣とあるのみ、其を除きては他に何等の見るべきなし。此く觀覽すべき場所の貧少なる國にありて爰に日本國中に產する介類を網羅したる博物館ありとせば、聊か以て外客に誇るに足るべく、外客を滿足せしむるものあるべし。

この博物館に陳列すべきものは、日本產介類を主として蒐集し、次に外國產介類、化石介類、及介類に關する圖書、並に參考用として介類にて造りたるもの、介類を應用したるもの等を蒐集せむことを希望す。

衣食といはず、住といはず、他一切の事物に、常に不自由と不便とを忍び、一家の全力を盡くして、斯業の成功に努力せり。

從來我國に於て普通蒐集せられる貝類標本は、大概海濱にて波浪の爲に打ち上げられたる、死殼を拾ひ上げたるもの多きが故、形態の破損せるもの、外皮の磨滅せるもの、或は靨のある種類にして、靨を失ひたるもの、二枚貝にして、一枚よりなきもの等なれども、余の所有せる標本は、最初より十分注意を加へ、多數の生介を採集し其中より完全なるものを、精撰せしを以て、その形狀に於ても、その色彩に於ても、最も完備し、敢て生物に異ならず。研究用とするも、觀賞用とするも、少しも欠点なきものなり。

大學の教室又は帝室博物館にも、介類の標本を備へあるも、余の標本は是等に比して、獨遜色なきのみならず、必ずこれに優るものあることを信ず。其數に於ても、余の所藏の標本が、我國に於て第一位を占むべきことは、確なる事實也。

現今余の藏する介類の標本は、外國産五千種、日本産三千種合計八千種あり。日本産は種類よりいへば、三千種なれども、同種類にても、産地を異にせるものは、研究上の必要より、一々區別して保存せり。故に此等をも合せて計算する時は、幾万の標本となり、その内には、頗る珍奇なるもの、及今後再び採集せむことの困難なるものも甚だ多し。

余の標本は、我國の介類標本として貴重なるのみならず、世界斯學の研究上、大切なる基本として、永久に保存すべき必要あり。然るに此有要なる標本は、目下余の倉庫内に貯へらるゝが故、廣く世に効用を及ぼすことなし。且萬一にも火災等に遭遇することありて、多年苦心の結果になりたる、此貴重なる一切の標本を、一朝にして烏有に歸せしむるが如きことあらむには、其は獨余一

介類雜誌　第拾壹號

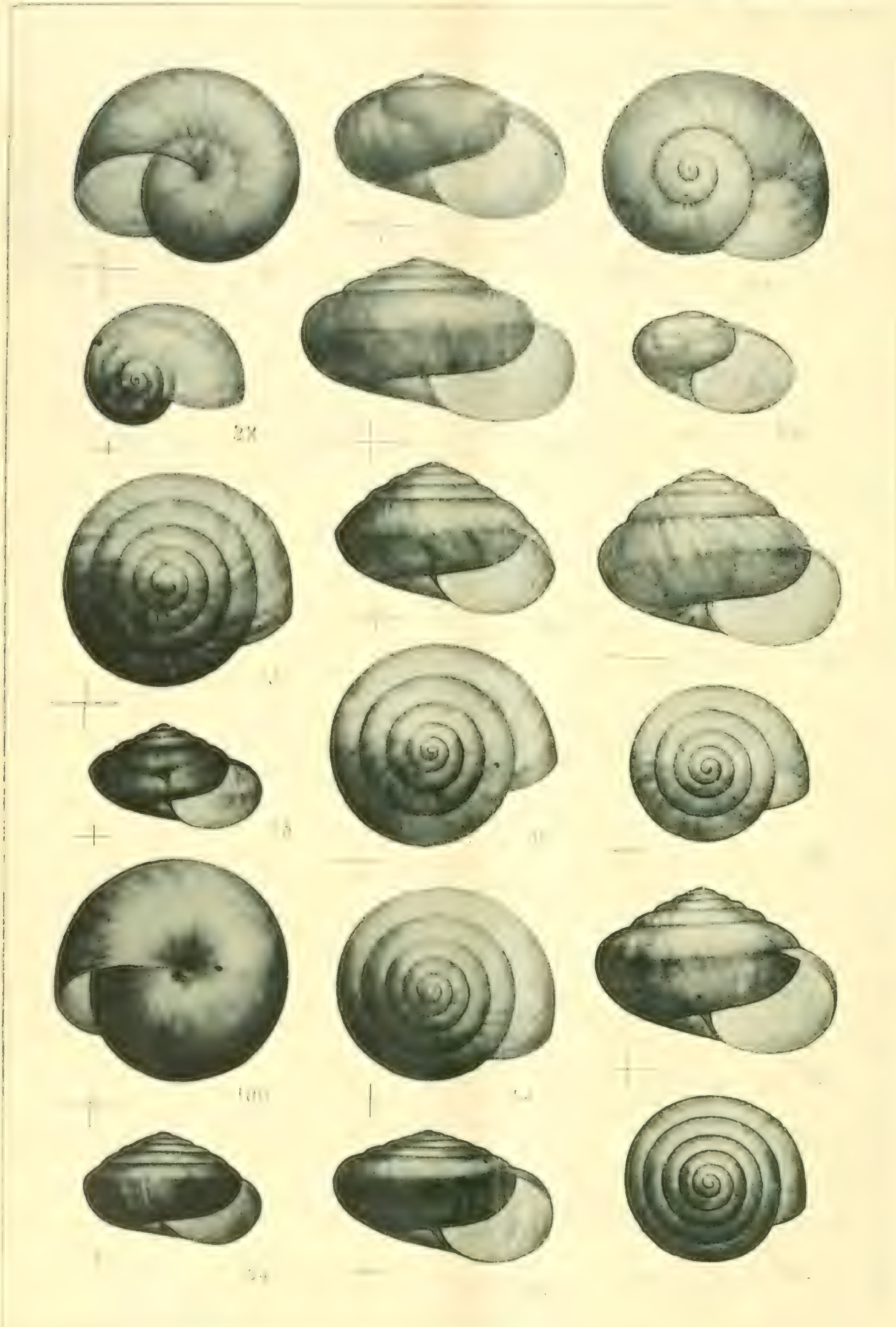
明治四十年十一月二十日發行

介類博物舘の設立に就て

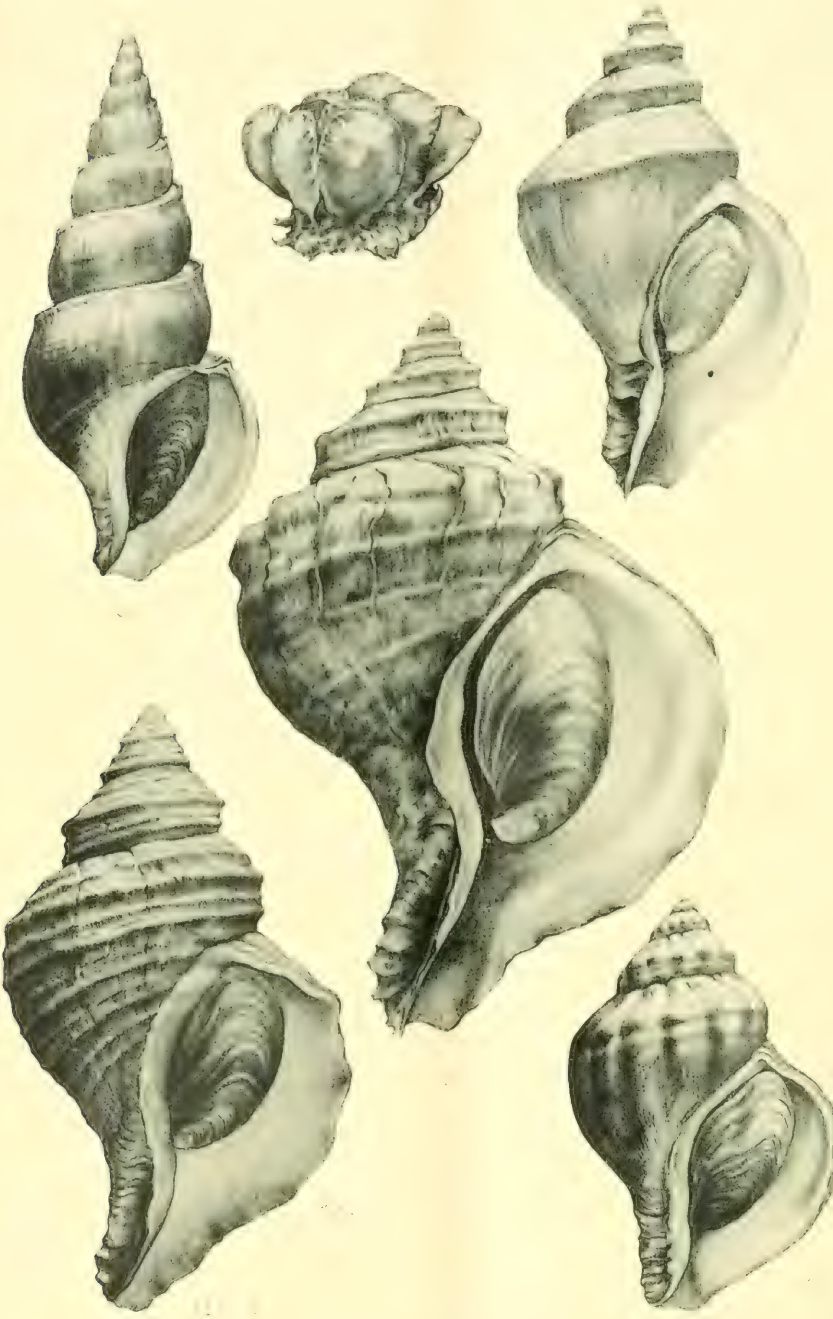
歐米諸國に於ては、介類の硏究も、他の學術と共に、大に進步する所ありて、標本の保存及陳列場とも共に完備し、之れに關する圖書も備りをりて斯學者の便少からず。

然るに我國は、四面海を以て環し、大小の島嶼無數なるが故に、海陸產貝類の種類の豐富なること、世界第一とも稱せらるべき天然の好位置なるにも關らず、斯學の方よりいへば甚だ幼稚にして、何等の見るべきものなきは實に慨歎の至りに堪へず。余は此の不振の狀態に慨すること數年。而して余が不肖をも顧みず、斯學の爲に余の生涯を獻ぐる決心をなしてより、既に幾多の星霜を經過せり。其間日夜斯業の爲に心身を勞せしこと幾許なるを知らず。非常の困苦を耐へ忍び、北は北海道より、南は臺灣に至るまでの、高山、幽谷、深林、原野、河溝、沼湖等より、或は琉球、小笠原島、伊豆の群島、及小笠原島を南方に距る遙かなる硫黃島等より、或は琉球と臺灣との間に在る與那國島の如き、交通不便なる小島より、探撿採集し、之れが爲に私財を費したること少からず。

かくて余が蒐集せし介類標本は、凡三千種に達し、その內余の新に發見せし新種及新變種は、合計殆んど一千種に近し。昨年よりは新に清國及韓國の探撿採集に着手せり。特に本年一月よりは、介類雜誌と稱する專門雜誌を、毎月一回宛發行し、一層斯學の爲に貢獻せむことを企圖せり。清韓の探撿といひ、雜誌の發行といひ、要する所の資金少からざるも、余は獨力之れに當り、敢て一切他の補助を受けしことなし。余は是れ迄斯業の爲に、巨額の金員を消費したれば、余が資產は、之れが爲に其大部を失へり。かゝれば余の家族は、非常の節儉を守り、



88., 89. Vitrina exilis, Morelet.
90., 91., 92. Helicarion Hiraseanus, Pils.
93., 94. Macrochlamys Gudei, Pils.
95. ,, ,, inclytus, Pils. & Hir.
96., 97. ,, cerasina, Pils.
98., 99. Macrochlamys cerasina reductus, Pils. & Hir.
100., 101. ,, ,, shinanoensis, Pils. & Hir.
102., 103. ,, ,, awaensis, Pils.
104., 105. ,, decens, Pils. & Hir.



131. }
" a }
" b } Neptunea despecta, Linn. (Chrysodomus)
" c }

131d. N. despecta, Linn. (egg capsules)

132. Volutopsis pericochlion, Schrenck.— (Chrysodomus)



126. Hemifusus ternatanus, Gmel.
127. ,, ,, ,, var.
128. ,, tuba, Gmel.
129. Neptunea intersculptus, Sowb. (Chrysodomus)
130. ,, ,, var. frater, Pils. (,,)

◯平瀬介館雜誌部 廣告

○發行　介類雜誌ハ毎月一回二十日發兌可致候

○前金　介類雜誌代金幷ニ廣告料ハ前金ヲ以テ御拂込被下度候（郵券代用一割増）

○爲替　郵便爲替ハ室町中立賣郵便局宛ニ被成下度候

○領收證　本誌代金御送付ノ節ハ別ニ領收證ヲ出サズ本誌ノ發送ヲ以テ御報告ト可致候

○前金濟　御拂込ノ前金相盡キ候節ハ本誌包紙ニ濟ノ文字ヲ朱印シ御送金ヲ乞フノ表章ト可致候

本誌定價

一部	金貳拾錢	郵税壹錢
六部	金壹圓貳拾錢	郵税不要
十二部	金貳圓參拾錢	郵税不要

本誌廣告料

五號活字一行（廿五字詰）	金拾五錢
半ページ	金參圓
一ページ	金五圓

明治四十年十一月二十日印刷
仝年仝月廿三日發行

發行所　京都市上京區烏丸通下長者町北龍前町十四番戶　平瀬介館
（電話九百七十四番）
（振替貯金口座第壹貳〇五貳番）

發行者　平瀬與一郎
編輯者　平瀬信太郎
印刷者　川勝靜三郎
印刷所　合資商報會社

大賣捌所
京都　東枝律書房
東京　東京堂
仝　東海堂
仝　北隆館書店
大阪　大華堂

明治四十年一月十九日第三種郵便物認可（毎月一回二十日發行）

明治四十年十一月二十日發行

第一卷第十一號

介類雜誌

（禁轉載）

目次

明治四十年十二月二十日發行
明治四十年一月十九日第三種郵便物認可（毎月一回二十日發行）

THE CONCHOLOGICAL MAGAZINE

A MONTHLY

DEVOTED TO THE STUDY OF JAPANESE SHELLS.

PUBLISHED BY Y. HIRASE.

VOL. I. DECEMBER. 1907. No. 12.

CONTENTS.

Notice: The subscription price for foreign countries is $ 1. 50(3 yen)per annum. All letters and communications should be addressed to Y. HIRASE, Shimochōja-machi, Karasumaru, Kyoto, Japan.

價格				
六百種	千二百個	百五十六円	百二十六円	百八十七円
七百種	千四百個	二百三円	百六十八円	百四十七円
八百種	千六百個	二百七十二円	二百三十二円	二百円
九百種	千八百個	三百四十二円	二百九十七円	二百六十二円
千種	二千個	四百三十円	三百七十円	三百四十円

○荷造費遞送料等ハ代價ノ外ニ申受クベシ

○右ハ標準價格ヲ示シタルモノニシテ珍敷モノ稀レナルモノ等ハ此ノ限リニ非ズ

○一種毎ニ入ルヽ陳列用ノ小箱ヲ要スルトキハ別ニ代價ヲ要ス

○日本產介類目錄ヲ調製スベク準備中ナリ追テ印刷ノ上ハ介類雜誌ニ廣告スベシ

○日本陸產介類目錄同追加目錄各一冊日本海產介類目錄一冊アリ產地ハ羅馬字ニテ記シ外國人ノタメニ調製セシモノナリ二百種以上ノ標本ヲ購入セラルヽ方ニテ請求アラバ無代ニテ進呈スベシ

○通例標本ヲ組トナストキハ海產陸產及淡水產モ多少加入スルモノトスモシ海產トカ陸產トカノミヲ特ニ望マルヽトキハソノ旨始メニ申込マルベシ

○外國產介類モ需ニ應ズベシ

貝のいろ〳〵　觀賞用

右ハ大中小三種ノ箱アリ各異リタル種類ニシテ何レモ頗ル美ハシキモノヲ撰ビ且優美ナル裝飾ヲ加ヘタル桐ノ箱ニ入タルモノニシテ贈物及美術工藝家ノ參考品等ニヨシ

十二種宛　桐箱入　代價　大　二圓　中　一圓二十錢　小　六十錢　小包郵稅　十二錢

貝づくし　小供用

右ハ玩弄トモナスベク標本トモナスベキ美麗ナル紙箱ニ入レ夫々和名ヲ記シアリ第一ヨリ第五マデノ五種（夫々種類異ル）既ニデキアリ猶追々調製ノ筈

十二種入　一箱　代價　二十錢　郵稅　二錢

京都市烏丸通下長者町北
電話九七四番
振替貯金壹貳〇五貳番
平瀬介館

平瀨介館精選 貝類標本

當館ハ平瀨與一郎ノ主幹スル所ニシテ其ノ唯一ノ目的ハ貝類ノ研究ヲ以テ聊カ學術界ニ貢獻セント欲スルニアリ此ノ目的ヲ達センタメニハ多年非常ノ辛酸ヲ嘗メタリ當春ヨリ介類雜誌ヲ發行スルモ今又標本ノ發賣ヲ創メタルモサテハ又介類博物館設立ノ計畫アルモ皆コノ目的ヲ達セントスルノ手段ニ外ナラズ決シテ營利ノタメニ非ルコトハ從來ノ經歷ニ依テ既ニ世人ノ知ラル、所ナリ當館發行ノ介類雜誌及當館撰擇ノ介類標本ヲ一覽セラレタル諸君ハ當館ガ斯學ノタメ如何ニ勉メツ、アルカヲ推知セラルベシ

右介類標本ノ學名ハ當館ニ於テ出來ル限リ調査ヲナシタル上更ニ世界ニ於テ介類學者ノ泰斗タル米國ノピルスブリー博士ニ再調ヲ煩ハシタルモノ故最モ正確ノモノナリ

從來普通販賣スル介類標本ハ大概波浪ノタメ海濱ニ打上ゲタル死殼多キヲ以テ研究上必要ノ點ヲ缺グモノ并ニ產地ノ不正確ノモノ甚多シ當館ニ於テハ特ニ採集者ヲ使用シ生介ヲ捕獲セシメソノ中ヨリ完全ナルモノヲ撰擇セシコトナレバ產地ノ正確ナルハ勿論ソノ形狀色彩トモ生キタルモノニ異ナラザルヲ以テ研究用トナスモ愛翫用トナスモ至極適當ノモノナリ同好ノ諸君陸續購求セラレンコトヲ乞フ

○標本ヲ要望セラル、諸君ハ先ヅ其ノ用途例ヘバ幼稚園用小學校用中學校用愛翫用圖案用工藝用等ノ如ク可成詳細ニ望ム所ヲ記入シ種類數及一種ニ付何個宛且標本ノ等級トヲ記シテ照會アレバ代價ソノ外詳細ナル回答ヲナスベシソノ上注文セラルベシ照會ハ往復葉書又ハ返信用郵券ヲ封入セラルベシ

○何人ニテモ總テ前金ニテ注文セラルベシ

○注文者ノ參考ノタメ左ニ標準價格ヲ揭載ス

標準

種類數	五十種	百種	二百種	三百種	四百種	五百種
個數	百個	二百個	四百個	六百個	八百個	千個
一等品代價	七円	十七円	三十五円	五十五円	八十円	百十五円
二等品代價	五円	十二円	二十五円	三十九円	六十円	九十円
三等品代價	四円	九円	二十円	三十二円	四十八円	七十五円

◎動物學雜誌

第二十卷 第二百二十九號
（毎月一回十五日發行）
明治四十年十一月十五日發行
〔圖版二枚附〕〔定價金二十錢〕

目次

論說

雜錄

會報

發賣所
東京神田區表神保町 東京堂
仝日本橋區通二丁目十八 裳華房
仝本郷區元富士町 盛春堂

地學雜誌

第十九年 第貳百廿七號
明治四十年十一月十五日發行
定價一冊金貳拾五錢郵稅壹錢五厘

論說及雜錄

附圖

雜報

發行所 東京市京橋區西紺屋町十九番地 東京地學協會（電話新橋四百十四）

賣捌所
東京市神田區表神保町 東京堂
東京市日本橋區吳服町 北隆館
東京市本郷區元富士町 盛春堂
東京市京橋區[illegible]西丁目 [illegible]海堂
東京市[illegible]左衛門町 [illegible]明堂
東京市[illegible] [illegible]智堂

INDEX AND SYNONYMY.

索　　引

A

B

C

D

E

F

G

H

I

J

K

L

M

N

O

P

R

S

T

U

V

W

Y

Z



雜報

正誤

第八號第二百四十四頁　チヾミボラ(六介)　は第四號に同名ありたるに付、シマイボヾラ(新稱)　を改む

第一卷總目錄

介類雜誌

第一卷

THE CONCHOLOGICAL MAGAZINE

Vol. I. DECEMBER, 1907. No. 12.

Talks on Shells (IV) *Pecton yessoensis, Jay.*

This species is chiefly collected from the sea of Hokkaido and Aomori Bay. Wrongly thinking that it sails with its one valve standing straight like a sail of a vessel, people call it "*Hotategai*" in Japanese, which means "a shell in full sail." It ranges six to ten fathoms and changes its habit opening and then shutting its valves suddenly, and pushing out water. Therefore, they do not live in one place and we cannot expect to see them in the same place yearly.

A few years ago, Dr. Kishigami examined the habit of this species very carefully and the fact above mentioned came to light. The shell fish of this kind, especially the adductor, is said to be very delicious to the palate. There is a way of cooking which is interesting to relate. A live shell of this kind is put on the fire and when it is dead, opening its valves, soy is poured on and then people eat the roasted delicacy on the dish of the same valve,—that was its very armour before. The dried adductor loses its proper taste, while the canned one keeps a little of its natural flavour. We have never heard of its being transported to Tokyo, fearing putrefaction on the way. After the Restoration in 1868, owing to the rapid increase of the population in Hokkaido, the demand for these shell fish increased and people almost wasted its kind in these localities, until the Department of Agriculture and Commerce forbade the young shells under three years to be taken up. Its shells, beside, are used for small pans. We have heard that in Aomori Prefecture each house is furnished with one or two pans of these shells.

Appendix—On Japanese Marine Mollusca

In the course of our study, several species are found afterwards, which ought not to be overlooked. In this present number, therefore, the descriptions of more than ten of the following species are added.

MURICIDÆ.

Murex recurvirostris, Brod.(?) pl. xxi, fig. 133.

Tryon's Manual of Conchology, vol. ii, p. 80, pl. 12, fig. 124.

Japanese name, Tosatsuburi, Hirase. n. n.

Locality, Tosa and Iyo.

Murex triqueter, Born. pl. xxii, fig. 139.

Tryon's Man. Conch. vol. ii, p. 85, pl. 40, figs. 506, 515.

Jap. name, Hime-bashō, Hir. n. n.

Loc. Kikai, Osumi; Loochoo.

Murex maurus, Brod. pl. xxi, fig. 134.

Tryon's Man. Conch. ii, p. 89, pl. 14, figs. 138, 139, 142.

Jap. name, Ko-senju-gai, Hir. n. n. **Loc.,** Iyo.

Murex torrefactus, Sowb. pl. xxi, fig. 135.

Tryon's Man Conch. ii, p. 89, pl. 14, fig. 143.

Jap. name, Senju-modoki, Hir. n. n. **Loc.,** Oshima, Osumi.

Murex penchinati, Crosse. pl. xxi, fig. 136.

Tryon's Man. Conch. ii, p. 91, pl. 15 fig. 150.

Jap. name, Ko-ganzeki, Iwakawa.

Loc. Loochoo; Kikai, Osumi.

Murex laciniatus, Sowb.(?) pl. ii, fig. 9, pl. xxi, fig. 137.

Tryon's Man. Conch. ii, p. 97, pl. 20, fig. 184.

Jap. name, Ogasawara-ganzeki, Hir. n. n.

Loc., Ogasawara; Iyo.

Vitularia sp. pl. xxi, fig. 138.

Jap. name, Yōraku-modoki, Hir. n. n. **Loc.,** Loochoo.

Murex (Cerostoma) coreanicus, A. Ad. pl. xxii, fig. 140.

See p. 64.

Tryon's Man. Conch. ii, p. 114, pl. 34, fig. 376.

Jap. name, Chōsen-hiregai, Hir. n. n. **Loc.,** Fusan, Korea.

Murex (Ocinebra) japonicus, Dkr. pl. xxii, fig. 141.

See p. 66, 67.

Tryon's Man. Conch. ii, p. 126, pl. 37, figs. 445–448.

Jap. name, Owu-yōraku, Hir. n. n. **Loc.,** Uzen; Rikuzen.

Murex (Ocinebra) endermonis, Smith. pl. xxii, fig. 142.

See p. 69, 70.

Tryon's Man. Conch. ii. p. 128, pl. 38, fig. 454.

Jap. name, Ezo-yōraku, Hir. n. n.

Loc., Akkeshi, Kushiro ; Kunashiri, Chishima.

Purpura mancinella, Linn. var. echinata, Blainv. pl. xxii, fig. 143.
See p. 136.
Tryon's Man. Conch. ii, p. 164, pl. 47, fig. 63.
Jap. name, Uni-reishi, Hir. n. n. **Loc.,** Hizen; Tosa.

Ricinula hystrix, Linn. var. clathrata, Lam. pl. xxii, fig. 144.
Tryon's Man. Conch. ii, p. 184, pl. 56, figs. 197, 198.
Jap. name, Hirokuchi-igareishi, Hir. n. n.
Loc., Yakushima to Oshima, Osumi.

Ricinula biconica, Blainv. pl. xxii, figs. 145, 146.
Tryon's Man. Conch. ii, p. 185, pl. 57, figs. 208–211.
Jap. name, Ko-murasaki-igareishi, Hir. n. n.
Loc., Oshima, Osumi

Ricinula (Sistrum) concatenata, Lam. pl. xxii, fig. 147.
Tryon's Man. Conch. ii, p. 189, pl. 59, fig. 269.
Jap. name, Kuchibeni-reishidamashi, Hir. n. n. **Loc.,** Loochoo.

TRITONIDÆ

Distorsio cancellinus, Roissy. pl. xxii, fig. 148.
See p. 250
Tryon's Man. Conch. iii. p. 35, pl. 17, figs. 175–178.
Jap. name, Ibo-bora. **Lac.,** Uncertain.

Summary—On Japanese Land Shells (VII)

Macrochlamys hakusanus, Pils. & Hir. pl. xii, figs. 106, 107.
Japanese name, Hakusan-bekkō, Hir. n. n.
Locality, Hakusan, Kaga; Uzen, no. 1,040 of my collection.

Macrochlamys izushichitojimana, Pils. & Hir. pl. xii, figs. 108, 109.
Original description, The Nautilus, vol. xvii, p. 106.
Jap. name, Shichitō-bekkō, Hir. n. n.
Loc., Niijima, and Miyakejima, no. 1,058 of my coll.

Macrochlamys semisericata, Pils. pl. xii figs. 110, 111.
Or. des., The Nautilus, vol. xvi, p. 54.
Jap. name, Kinutsuya-bekkō, Hir. n. n.
Loc., Kurozu and Nachi, Kii; Awa; Tosa, no. 935 of my coll.

Macrochlamys kumeensis, Pils. & Hir. pl. xii, figs. 112, 113.

Or. des., Proceeding of the Academy of Natural Seiences of Philadelphia, 1905, p. 714.

Jap. name, Kume-bekkō, Hir, n. n.

Loc., Kumejima, Loochoo, no. 1,357 of my coll.

Macrochlamys subelimatus, Pils. & Hir. pl. xii, figs. 114, 115.

Or. des., Proc. A. N. S. Phila., 1904, p. 635.

Jap. name, Tokunoshima-bekkō. Hir. n. n.

Loc., Tokunoshima, Osumi, no. 1,286 of my call.

Macrochlamys tanegashimae, Pils. pl. xii, figs. 116, 117.

Or. des., Proc. A. N. S. Phila., 1901, p. 498.

Jap. name, Tanegashima-bekko, Hir. n. n. **Loc.,** Tanegashima and Yakushima, Osumi; Kagoshima, no. 666 of my coll.

Macrochlamys lineatus, Pils. & Hir. pl. xii, figs. 118, 119.

Or. des., Proc. A. N. S. Phila., 1905, p. 713.

Jap. name, Makisuji-bekkō, Hir. n. n.

Loc., Nakanoshima, Ogasawara, no. 1,177 of my coll.

Macrochlamys chaunax, Pils. & Hir. pl. xii, figs 120–122.

Or. des., The Nautilus, vol. xviii, p. 6.

Jap. name, Ogasawara-bekkō, Hir. n. n.

Lac., Hahajima and Imotojima, Ogasawara, no. 899 of my coll.

Macrochlamys fulgens, Gude. pl. xii, figs. 123, 124.

Or. des., Proc. of the Malacological Society of London, vol. iv, part 2, August, 1900, p. 75.

Jap., name, Okinawa-bekkō, Hir. n. n.

Lac., Loochoo; Tanegashima, Osumi, no. 465 of my coll.

Macrochlamys fulgida, Godwin-Austen. pl. xii, figs. 125, 126.

Or. des., Godwin-Austen's "Land and Freshwater Moll. of India," vol. ii, part x, April 1907, p. 214, pl. cxv, figs. 3–3f; pl. cxvi, figs. 6, 6a.

Jap. name, Tsuya-bekkō, Hir. n. n.

Loc., Hōtawa and Kōsenpo, Taiwan, no. 1370a of my coll.

Remarks on *M. fulgida*, G.–A.: Soft anatomy of the same, translated from the original descreption by Lient. Col. H. H. Godwin-Austen.

Late Mr. C. F. Ancey.

The following is a short sketch of the late Mr. C. F. Ancey, sent, on my request, from Mr. Gabriel Ancey, his brother, of Marseilles. Mr. C. F. Ancey was an earnest student of conchology who devoted all the time that could be spared from his official service to the study of the shells and who was one of our longest correspondents.

On hearing the death of Mr. Ancy from Mrs. Ancey, we sent a letter of condolence to her at once, asking at the same time to be favoured with his portrait and his biography, of which unfortunately the former was not sent.

In commemoration of our honorable friend, and a conchologist to whom we were in long conmmunication we have put here Mr. Gabriel Ancey's letter in full.

Albeit Mr. Ancey (César-Félix) was born at Marseilles (the 15th of November 1860), he was, by his grandfather, from the Eastern French province, whose he retained the physical as well as moral characteristics. He studied under the Jesuits in Avignon, took his degree in letters, sciences, and law, and was, in 1889, named the Algerian administration. His longest residence was at Dra-el-Mizan in the Jurjura mountains, whence he had just departed for the post of administor at Mascara, when an unforeseen illness brought him to death upon the 10th of October, 1906. He was married and laid a widow and two young children.

He had a genial mind and a most commendable ingenuousness. As for the intellectual capacities, he understood quickly, remembered marvellously, worked easily. His first conchological writings are from 1879 and (never gathered) would make a big volume 700 pages if no more. Doctrinally, he was a temperated Evolutionist of the Bourguignet's line, whose following the examples he multiplicated the species, so that he raised protests from the other school, a bit troubled in its habits. Be that as it may, he was indisputingly a mighty observer, a clever nomenclator, and a most honourable man.

の幼虫をくふ。リムニア、ペラクラは、他に食物のない時は、水匣中の鯀魚を食ひ、又同類の殼頂に近い薄弱な所を穿つて之をくふ。リムニア、スタクナリスは、普通の「トゲウヲ」さへも殺して食ふといふことである。

雜報

老媼貝類を献す

鹿兒島縣鹿兒島市町田品子と云へる七十三歳の老媼は嘗て島津家に仕へ後故中山一位局に奉仕し居りしが皇太子殿下御降誕の際は御傍に侍き参らせお年十八歳にならせ玉ふまで伺候し殿下も婆よ〳〵と親しみ給ひしが後御暇申上げ故郷に老を養ふうち今回殿下が韓國よりの御歸途鹿兒島へ行啓あらせられしに際し御幼少より貝殼菊花石など好ませ給ひしを思ひ浮べ自から濱邊をあさりてくさ〳〵の珍らしき貝類を拾ひ集め献上せしにいと御滿足に御嘉納あり且二十七日御內謁を玉ひてお幼けなかりし折のことゞも打ち語らはせ給ひ老媼は御還啓の折御途上に迎へ奉りしに殿下は之を認し內舍人に向はせられ品子は彼處に居りしよとて特別の思召しもて目錄一封御下賜ありしかば老媼は此世の面目此上やあるべきとて老眼に嬉し涙をたゝへつゝ霎時は起きも得上らざりき（中央新聞）

●烏貝と漁具

北勢各沿岸に於ける烏貝は海外輸出品の一となり其産額も尠からざることなるが本年は其發生非常に多き由なれば來春の漁期は頗る好望なれ共先に三重縣廳は烏貝捲器の目に制裁を加へたるより小柄のものは之を漁獲するを得ず然るに發生多き年は比較的發育悪しきが例なれば此際漁具の改正を縣廳に出願せんとて夫々協議中なりと云ふ（名古屋新聞）

とである。同氏が又曰はるゝに、如何なる蛞蝓でもいゝが、其口に指を永く押付け置くと、必ず磨擦を感ずる。が然し出血することはないと。ゲーン氏が曾て大きなアリオン、ニーターを取扱つてをる時、其指の間を磨擦せられたが、一分間の後には、其指が少し[illegible]たのを見たといふ事である。此の蛞蝓に磨擦せられた痕は、火傷のやうな感じがあるといふ事である。

ヘリックス、ピサナを新に捕へ、他種のものと、同じ箱に入れて置くと、廿四時間内に之を食ひつくす。牧師クーク氏は、ピサナがヘリックス、ニリセトラムを殺し、自分の長い体を其螺頂に插し入れ、漸次に之を食ひ盡くすのを見たといふことである。又曾てヒール孃の飼養した多數の種類中に、ニアーニア、[illegible]があつた、初の夏其幼者を、甘藍、蕣などで飼つたが、嚴霜の中にあつても、猶は冬眠をしない。戸外に食物がな[illegible]で之を飼つたのに、翌春から翌夏に至り、絶えず互に食み合つたといふことである。

ゾニテス、アルヂラスは、腐果及植物質及臭氣を發する肉類などを食ふ。

アカチナ、パンセラは、死んだ他の蝸牛、植物及紙などを食ふ。

南歐に普通にをるステノヂラ、デコラタは、肉食であるから、ピンチー氏は、他の蝸牛の殼内を掃除させるために之れを飼つたといふことである。ヒール孃は、此種を數千[illegible]つたが、他の蝸牛の肉と共に、其殼をも食つたといふ事である。此種は又生肉も食ふのである。

普通のリムニア、スタグナリスは、平素全く植物のみを食するのであるが、時としては肉食に耽ることもある。カール、セムパル氏は、屢此動物が、周圍に植物が多くあるにも拘らず、其養魚箱中にあつて、不意に建全活潑な龍盤魚を襲うて之を倒し、遂に之を食ひ盡くすのを見たといふことである。此種は又自己の卵を食ひ Dytiscus

屍を食ひ、又嘗て五ヶの該蛞蝓が、綠草多き牧場の中央にあつて、各蜻蜓を急ぎ食つてをつたのを發見した人があるといふからして、此蛞蝓は如何にかして、蜻蜓を捕へ、且つ綠草よりも動物質を好んでをると思はれる。但し軟体動物が、昆蟲を捕へて食ふといふことは、甚だ奇異なることのやうであるが、然し此のやうな事實は決して其類の少くない事である。

チー、ヴオルノン、チルラストン氏ハ、嘗て一の瓶の中に、四ヶのヘリックス、カンチアナと、三ヶのヘリックス、ヒスピダと、一ヶのヘリックス、ヴオルゲタと共に、少くとも三十六ヶの甲蟲を入れ、更に新鮮の植物を充分に入れ置き、十四五日をたつてから、之を撿べたのに、甲蟲は全く食ひ盡されて、其跡を止めなかつたといふことである。又アマリア、マーヂネタを捕へ置き、之れにユーケリア、ヂャコビェーの蛹を食はしむると、二時間に三ヶの割合で之れを食つて了うといふことである。

リマックス、マキシマス(十九圖)は、度々庖厨に這入て來て、生牛肉を食ひ、之を捕へて置くと、同類互に食ひ合ふ。さうして其同類が互に食み合ふのは、決して饑餓に迫まれるが爲ではない、前夜に其好むものを飽食せしめて置いても、矢張同類相食むのである。牧師シーン氏は、此蛞蝓を誘ふ最良の餌は、前夜殺して置いた、同類の肉である事を實驗せられた。又ゲーン氏は、此蛞蝓を甚だ美食家であるとし、此は好んで菌蕈を食し、少しも花園を害する事がないといつてをられる。

リマックス、フラヴアスは、好んで地窖の近傍に住んでをつて、食器を侵し、徐々に食物及麥粉を貯へた器中に入込み、殊に乳皮(クリーム)を嗜むといふ事である。

蛞蝓は時として捕獲者の手を噛むことがある、キュー氏は、リマックス、アグレスチナを指上に置いたのに、大きなアリオンの攻撃を逃れやうとする間に、烈しく其指を噛み、丁度齒擦(おろし)で磨(おろ)すやうな痛痒を感じたといふて

で昇降共に絲を用ふるものは、現今知られて居るものでは、リマックス、アルボラムあるばかりである。

但し此等の動物が滿腹すると、其分泌する粘液は稀薄で、自分の重さを保つことが出來ないけれども、消化を了ると粘液は再び濃厚となる。此の譯で此等の動物が饑渴に迫り、食餌搜索の爲め遠行の必要ある時は、其粘液の有樣も、亦之を爲すに適してをるけれども、動物が飽滿して遠行の必要がない時には、絲を造る粘液は分泌せらるゝことなく、粘液腺は消化前の食物を滑にすることを助くるのであらう。

七、食事

大形黑色の蛞蝓アリオン、エーターは、普通の草食であるけれども、又肉食類であることも疑ひない。則ち腐肉、鮮肉或は又生活してをる動物でさへも食ふことがある。或は屢蚯蚓を捕へて食ひ、或は生牛肉を食ひ、又其同類の屍さへも食ふことがある。博士グレー氏の實驗によると、此蛞蝓の食べないものは殆んどない。死介、蜻蜓は固よりのこと、新聞紙を嚙み、砂を呑み、石鹼さへも嫌ひながら遂に食つたといふ事である。

シムロス氏及スカーフ氏の說に從ふと、英國產の蛞蝓中には、概して葉綠を含んでをるものを嫌ひ、葉綠を含まないものゝみを食ひ、或は綠色のものゝみを食ひ、園圃に大害を及ぼすものがあるといふことである。さうして後者の方は、晝間は地下數寸の所に隱れ、夜になつて地面に匍ひでる。球根類の消失は、蛞蝓類の罪に歸すべき事が多いのである。それは蛞蝓は非常に球根類を嗜むからである。又リマックス、マーギナータスは、菌類のみを食ひ、之を捕へ試むるに、決して他の綠葉、肉類などを食ふことはない。で農業者及園藝家等は、宜しく蛞蝓等の葉綠を好む種類を殲し、其反對の性質をもつてをるものを殘して置くべきである。

リマックス、アグレスチスは、アリオン、エーターの

りしものは散亂して未だ輯集の好機を得ずと雖も、恐らくは七百餘頁の上に出づべし。學派に於ては「ボルグイグチット」軟派進化論に屬し、其主義により其種を大に增加せしを以て、他派の抗議を惹起すこともありき。かゝる抗議は兎に角に、氏は明に且偉大なる觀察眼を有し、其分類及命名に於て極めて妙を得たりき。げに氏は尊むべき人なり。

陸介及び淡水介の習性（其二）

六、紡絲

淡水介の多數は、一絲を紡ぐ力をもつてをる。此絲は粘液が水面まで延長したものであつて、動物の運動を助ける働をする。此絲は或二枚介類の分泌する纖維質海絲とは、全く異つた方法で作られ、之を生ずるに特別の腺を要することはない。

海介中にも亦紡絲力を有するものがある。其尤も著しいものは、絹絲狀の粘絲をだして、藻海中の藻類に附着してをる、リチオパ、ボムビックスである。

諸種の蛞蝓は、此のやうな絲に懸垂して、樹枝から自分で降るといふことである。取り分けて此力の尤も著しいのは、リマックス、アーボラムで、産卵期には雌雄一對となつて懸垂することがある。ピンチー氏の說に從ふと、テベンノフオラスの外、米國産のリマックスは、皆此特性をもつてをるといふことである。

此絲の最長なのは、フイシーの絲であつて、之を幽閉する時は、十四吋の絲を生ずといふことである。

此絲は概して動物が上昇する時に、紡ぐものであつて、其下降する時は、概して絲を卷き收めて、之を携へ行くのである。下降の際には決して絲を紡がない。然し其絲が多少永久のものとなる時は、其使用の度每に、粘液を加へて、之を强固にし、昇りにも、降りにも、之を用ふるやうになる。然しながら又例外がないでもない。陸産

し且仝氏の略傳及肖像の惠送を求めた。不幸にして肖像は惠送の榮を得なんだが、左の略傳の寄送を得た。氏とわが館との交誼は海外萬里、只書信の上の交誼に過ぎなかつたが、然し氏の熱心な書信の爲に、幾度か勵まされ、幾多の敎示を得たことは少なくなかつた。わが館は今氏の永逝の報に接して、眞に痛恨措く能はざるものがある。われらは斯界に於ける熱心なる硏究家、わが館の忠實なる良友を失ひたるを、深く哀悼する次第である。われらは衷情をさゝげて氏の遺族に同情し、遺族の幸を祈つてやまないのである。但し氏が斯界の爲に遺された硏究の結果は、永く斯界の學者を裨益し何時迄も記憶せらるゝことであらう。肖像を得なかつたのは甚だ遺憾であるが、幸に略傳を得たから、謹んでこれを掲げて、氏を偲ぶよすがとする、われらの氏に對する哀悼の情は、これによつて滿足せらるゝ次第ではない。只萬分の一を表するのである。

編者謹誌

アンシー氏は一千八百六十年十一月十五日マルセーユ市に生れしと雖も祖父は佛蘭東部の人也。而してアンシー氏は其の身体上及道徳上に於て、祖父の性質を受けしこと多し。夙にアビクノンにて「ゼズイット」敎派の下に在りて學を修め、文學、理學、法律等の學位を得。一千八百八十九年アルゼリヤ政廳行政官に擧げられジユルユラ山中ドラ、エル、ミザンには最も長く居住せしが、最近マスカラ市長となりて赴任するや、偶然病魔の襲ふ所となり、一千九百六年十月十日永き眠に就きぬ。氏の命君は二人の遺兒を擁して寡婦となりぬ。

氏天性快活にして(正直)磊落一も隱す所なし。事物を了解すること速に、記憶力また非常に發達せしを以て、事に當りて裁斷明確、少しも苦める風なし。始めて筆を介類學硏究に染めしは、一千八百七十九年にして、其成

し或る時期に本國に送るのであるから、時々刻々に相場の變動のあるべき筈のもので決してない。惜しいことには内地生産人が小資本であるが爲めに、ソンナに安値ならば二ケ月でも三ケ月でも價の高くなるまで賣らずに待つて居るといふ腰がない、二函でも三函でも販賣したる金額を以て更にそれを製造費用に流用し次の荷物を漸く造出するといふ次第なので、イクラ支那人に頭を叩かれても、只何もいはずに買ひ値通り苦情も言はずして賣つて仕舞ふ。故に支那商は益々つけ上り實に言語同斷なことをやる、一例を擧ぐれば生産の多ほい七八月には相場が百斤拾八圓にも下るが、生産減少する秋季に入ると參拾五圓の價になるが如き、百斤拾八圓といふ相場は實に生産人にとりては非常に困難なる事である從て佐賀縣沿岸にては近來養蟶反別が減少の傾向を生じて來た。ドーシテモこの豫防策としては同業者が團體をつくり蚶蟶輸出同業組合を設立し、直接輸出を企るか、或は大資本の會社へ一手輸出販賣方を委託するか、兎も角今日の小資本個立といふことは絶對に養蟶業の發展に對し非常なる不得策といはねばならぬ。今日の生産人は支那では蚶蟶が一斤幾何の價値であるか、又はその需要の多寡は幾何萬斤であるかそこらの事につきては一向御承知なしといふ有様であるから長崎の支那貿易商に馬鹿にされるのも無理はない、宜しく有明灣沿岸の各縣即ち長崎、佐賀、福岡及熊本の四縣と岡山縣を加へ五縣聯合にて同業組合を設立し一致協力して輸出販賣方を統一にする方法を講ずることは蓋し今日の急務とする所である。

故シー、エフ、アンシイ氏畧傳

左に掲げたのはアンシー氏の畧傳である。氏は熱心な介類研究者であつて、わが介館との交際は餘程以前からである。昨年病氣に罹られ遂に永逝せられた。其報知が令君からあつたので、當館からは弔辭を呈

一回人夫を使用す、但し一回三人役とす。

一金壹圓　番人代

一金四拾錢　縣稅

一金拾貳錢　村稅(縣稅の三割)

一金六拾四圓也　製造用人夫及薪料

五升の貝にて製品壹斤を得るものとす、製造費は百斤につき金貳圓を要す、(內譯石炭代五拾錢、貝を沖より受け來る人夫一人四拾錢、賣方壹人參拾五錢、乾方女人夫三人七拾五錢なり)。

一金八圓也　剝身賃

生貝三升に對し剝身一升の割合なり、その剝身一升に對し壹厘半の人夫賃を支拂ふ、故に五十三石三斗三升の剝身を得る譯なり。

一金參拾貳圓也　運送費及長崎貿易問屋手數料共(但し製品三千二百斤に對し)

總計參百八拾七圓貳拾貳錢

收　入

一金六百四拾圓也　千坪に對し三千二百斤の製品賣高

虷蟶は年々價額に高下ありて當地製品は拾八圓乃至貳拾貳圓を上下するも最近十ヶ年の平均價格百斤につき貳拾圓として計算したるものなり。

差引純益金貳百五拾貳圓七拾八錢

併し右養蟶經濟につきては、最後に一言是非加はへねばならぬことがある、それは販賣方法であつて、從來より虷蟶は殆んど全部長崎の支那貿易商の手を經て支那へ輸出するものなるか、只內地の生產者を個々單獨の小作をなし各々小額の製品を別々に長崎へ送る次第であるが、この各小資本であることとて支那商人は附け込んで居るからして、各所より集る製品の多寡によりて日々相場を勝手に高下する、甚だしきは米相場の如く午前と午後と壹圓も差違のある樣なことがある。元來虷蟶の如きものは性質上そんなものではない、支那人は製品を一纏めとな

の供給を仰ぎ之を壹坪に對し、上地三升、中地四升、下地にて五升の割合にて蒔き付けをするのです。この時種貝十石につき舟壹艘と人夫二人役を要する。かくして養育地に蒔きつけたるものを翌年七八月の頃滿壹ヶ年の後貝を取り揚げる、この取揚賃は上地一升につき壹錢壹厘、中地一升壹錢、下地一升九厘といふ相場が先づ平均の所である、尚此外に養殖費のうちに加ふべき出費は害敵驅除費である、害敵は Bolophthalmus pectinirostris, *Richard* ムツゴロウ及び Taenioides lacepedii, T. & S. ワラスボと稱する小魚が泥の中を自由に往來して蟶を食するのである、故にこれらの害魚を捕獲するために秋冬及び春の三度人夫をかけるのである。養殖地にては尚番人をつける爲めにその費用を加算する、それより後は製造費であるがこれに其剝身賃と製造用薪料及人夫賃に處分する、詳細は明細表に述べる。茲には假りに千坪に對する養蟶收支經濟を見積る。

支　出

一金百〇八圓也　種貝四十石買入代（但し中地蒔付の計算也）

右種貝は有明灣にてもその發生に適せる部分一區に限れるを以て無已他より供給を仰ぐものなりその價は鹿島に持參して壹升貳錢七厘なり

一金九圓貳拾錢　種蒔人夫八人役及舟四艘借入賃

これは種貝四十石を四回に蒔く、（一回につき二人役及び舟一艘を要す、一人役は五十錢舟費は參拾錢也）

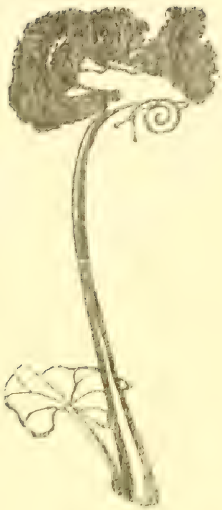
一金百六拾圓也　取揚賃（百六十石分）

但し取揚の際は蒔付當時より貝殼長大となり上地は五倍、中は四倍、下地は三倍の容積に增加す、今茲にては中地の計算なるが故に四十石蒔きが百六十石となるなり。

一金四圓五拾錢也　害敵驅除費

これは蒔きつけたる當時秋一回、十一月一回及び三月

らんと論結し、**オキナハベツカフ**も亦本種と同一屬中の一種なるべしと附記せり」



前號正誤

九　頁　上段　初行ミガキボラ屬はミクリガヒ屬の誤

二十三頁　上段　六行Leptolonationは Leptolontarion の誤植

右訂正す

雜　録

養鯉の經濟

妹尾秀實

壹千圓の資本を以て養鯉事業を創むれば幾何斤の鮮鯉が出來るかなど、いつてお出でになるお方が、屢々見えるので茲に本誌の餘白を借りて詳細なる收支經濟を明記し創業家の爲めのみならず、尚既に營業しつゝある當業者の參考にも供せんと存ずる。

但し以下記述する收支明細表は、養鯉業については比較的秩序ある佐賀縣藤津郡北鹿島村に於て余が親しく調査をしたものであるから、その收支の詳細なる項目につき自ら充分の責任を帶ぶるのである。

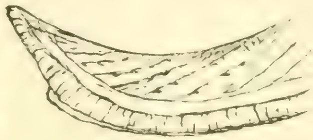
先づ經濟を論ずる前に順序として養殖の方法並に人夫を使用する時期等を簡單に申し述べて置きます、北鹿島にては毎年七八九の三ヶ月の間に同縣大井道方面より種貝

同上備考（三）

ツヤベツカフ (M. fulgida,(G.—A.)) の解剖

余は曾てツヤベツカフの酒精浸標品をゴッドウヰン、オーステン氏に送りしに同氏は其肉体を解剖し、之を本年四月出版の「印度の陸産及淡水産軟体動物」なる同氏の著書中に掲げられたれば余はこゝに之を抄譯することゝなしぬ、





（イ）　（ロ）

（ゴッドウ井ン、オーステン氏）

動物（イ及ロ）は暗褐色を呈し、足は狭長にして、龍骨を有し、先端突り、粘液腺は狭くして線状をなし、周足溝は廣き縁部上にありて著明なり、縁部には相隔りたる縁飾を有し、蹠部（ハ）には中央面あり、



（ハ）

（ゴットウ井ン、オーステン氏）

殻葉は大形にして相離れ、右葉（ニ）呼吸孔上及其附近の厚くなりたる部分より擴がり、



（ゴッド井ン、オーステン氏）

中央黒く、一ケの中央静脈を有し、それより數條の細静脈を枝出せり、又左葉（イ）は唯二黒点を有するのみにて、後左背葉は極めて小形にして、前左背葉より隔れり、

生殖器は極めて小さきを以て、完全に取り出すこと難く、陰莖はタイワンベッカフに類似し、輸卵管は極めて長し、



（ホ）



（ヘ）

（ゴッドウ井ン、オーステン氏）

顎（ホ）は前方殆んど直く、薄弱なり、

歯式（ヘ）は$\left(\frac{65.2.10.1.10.2.65}{77.1.77}\right)$なり、ゴッドウヰン、オーステン氏は此歯式を以てベッカフカヒ屬と何等の關係なしとし、本種を Lamprocystis. 中の一種な

形狀、殼質薄く、比較的大形にして、臍孔を有し、微透明にして光澤あり、螺塔低く、殼頂鈍く、縫合は線狀にして、縁付られ、螺層は稍や急に增大して、四階を數へ、体層は下降することなく、臍孔附近は少く凹み、其幅は次体層に二倍し、脹れて少しく壓扁せられ、其細脈は顯微鏡的の螺線と相交叉す、殼口は少しく斜めなる新月形にして、口縁薄く、鋭直にして、兩縁は相隔りて、殆んど平行し、内唇は少しく反曲して、殆んど微細なる臍孔を覆へり」

彩色、汚黄角色なり」

本種は余の新發見にかゝり、英人ザー、ケー、グード氏の新たに命名せられたる所にして、採集番號は四六五なり」

ツヤベツカフ 新稱、

M. fulgida, Godwin-Austen.

（陸產、第十二版、第百廿五、及第百廿六圖）

產地、臺灣、寶斗山及甲仙埔等、

高、一分四厘、徑、二分、

形狀、前種に酷似し、殼質薄く、微臍孔を有し、扁球形を呈し、表面平滑にして光澤あり、規則正しき縱脈と、相隔りたる細螺線とを具へ、螺塔低く、殼頂圓く、縫合淺く、螺層は規則正しく增大し、四階半を數へ、殼口は廣き新月形を呈し、外唇縁は殆んど圓の弧をなし、口縁薄く、内唇直く、反曲部なし」

彩色、蒼白角色にして微綠色を彩る」

本種は余の新發見にかゝり、ピルスブリー氏は之を前種と同一物なりとすれどもゴッドウヰン、オーステン氏は之を前種と區別し、体層及次体層前種よりも脹れて圓しと云へり、同氏の肉体解剖は之を備考に讓る」

本種の採集番號は一三七〇aなり」

(陸産、第十二版、第百十八、及第百十九圖)

産地、小笠原中之島、

高、五厘、徑、九厘、

形狀、殼質薄く、上下両面脹れ、稍や深き螺脉を刻し、臍孔狹く、螺塔低く、螺層は少しく脹れ、四階三分の一を數へ、体層は周縁に微鈍角を有し、殼口は新月形を呈し、外唇は薄くして脆く、内唇も亦薄く、其殼軸に附着する所は三角形をなして反曲せり」

彩色、稍透明なる琥珀色にして、光澤あり」

本種は M. chaunax よりも著しく小形低平なり、又螺脉を有せるによりて小笠原産ベッカフガヒ科の他種と識別することを得べし」

本種は余の新發見にかゝり、採集番號は一一七七なり」

オガサハラベツカフ 新稱、

M. chaunax, Pils. & Hir.

(陸産、第十二版、自第百二十至第百二十二圖)

産地、小笠原妹島及母島、

高、一分一厘、徑、一分七厘五毛、

形狀、殼質薄く、臍孔を有し、上面は脹れたる低圓錐形をなし、下面は更に脹れ、周縁に微鈍角を具へ、其角は中央より上方にあり、表面は强き光澤を有し、皺狀の微生長線と密集せる細螺脉とを具へ、螺層は稍脹れ、四階を數へ、体層は次体層の二倍の幅を有し、鈍き角あれども殼口に近くに從て消失す、殼口は稍大にして圓き新月形を呈し、口縁は簡單にして薄く、殼軸に附着せる所は反曲せり」

彩色、多少透明なる淡黃角色なり」

本種は余の新發見にかゝり、採集番號は八九九なり

オキナハベツカフ 新稱、M. fulgens, Gude.

(陸産、第十二版、第百廿三、及第百廿四圖)

産地、琉球、種子島、

高、一分四厘、徑、二分二厘、

彩色、殼は多少光澤ある褐色なり」

本種は余の新發見にかゝり僅かに十數ケを採集し得たるのみ、其採集番號は一三五七なり」

トクノシマベツカフ 新稱、

M. subelimatus, Pils. & Hir.

(陸産、第十二版、第百十四、及第百十五圖)

産地、大隅德之島、

高、八厘、徑、一分四厘、

形狀、殼は半透明、平滑にして光澤を有し、螺塔極めて低く、螺層四階半を數へ、体層甚だ廣く、其幅次体層の二倍に達し、周縁及底面圓く、臍孔を具へて其附近凹み、殼口は少しく斜めなる新月形をなし、唇は簡單にして薄く、其殼軸に附着する所は少しく擴張せり」

彩色、殼は淡褐色なり」

本種はキヌツヤベツカフに似て殼の上面の光澤强し、

本種は余の新發見にかゝり、採集番號は一二八六なり」

タネガシマベツカフ 新稱、M. tanegashimae, Pils.

(陸産、第十二版、第百十六、及第百十七圖)

産地、種子島、屋久島及鹿兒島、

高、七厘、徑、一分二厘五毛、

形狀、殼は小形底平にして、殼頂鈍く、臍孔小さく、平滑にして光澤あり、螺層は稍密に螺旋して四階半を數へ、可なりに脹れ、縫合密接し、恰も縁を有せるが如し、体層は殆んど次体層の二倍の幅を有し、周縁圓く、底面は稍脹れ、殼口は少しく斜めなる新月形を呈し、唇は簡單にして薄し、殼軸と附着せる所は急に反曲せり」

彩色、麗はしき褐色にして、多少透明なり」

本種の大さ及外形はM. Doenitzi, Reinh. に酷似せるも臍孔小さく、螺塔該種よりも高く螺層一階多きを以て識別することを得べし」

本種は余の新發見にかゝり、採集番號は六六六六なり」

マキスヂベツカフ 新稱、M. lineatus, Pils. & Hir.

は上面よりも平滑にして光澤あり、螺層は四階四分の三を數へ、規則正しく増大す、殼口は新月形をなし、唇は簡單にして鋭く、其殼軸に附着する所は小三角形をなせり」

彩色、透明なる淡褐色なり」

本種は余の新發見にかゝり採集番號は一〇五八なり」

キヌツヤベツカフ 新稱、M. semisericata, Pils.

(陸産、第十二版、第百十、及第百十一圖)

産地、紀伊、阿波、土佐、

高、一分、徑一分六厘、

形狀、殼質薄く、半透明にして、臍孔を具へ、螺塔稍低く、底面滑澤にして、殼頂より周縁下に至る迄、微かに波狀をなして少しく斜走せる平行細密線を刻するを以て周縁及上面は鈍き絹光を有せり、螺層脹れ四階半を數へ、徐々に増大し、深き縫合にて區劃せられ、体層は遙かに廣く、其周縁は圓し、殼口斜にして新月形をなし、口縁は簡單にして薄く、其殼軸に附着せる所は擴張せり

彩色、殼は帶赤褐色なり」

本種はアハクリイロベツカフ及タネガシマベツカフに類似せるも、殼の上面にハクサンベツカフの如き絹光を有するを以て識別するを得べく、ハクサンベツカフ及アハクリイロベツカフよりも著しく小形なり」

本種は余の新發見にかゝり、採集番號は九二五なり

クメベツカフ 新稱、M. kumeensis, Pils. & Hir.

(陸産、第十二版、第百十二、及第百十三圖)

産地、琉球久米島、

高、一分二厘、徑、一分八厘、

形狀、殼質薄く、臍孔を具へ、螺塔低く、微かなる低き生長線を有すれども螺脉なし、螺層脹れ、五階を數へ、徐々に増大し、体層著しく廣く、周縁圓く、底面脹れ、中軸附近は凹めり、殼口は少しく斜にして、新月形をなし、殼軸斜にして、内部に微かなる滑層あり」

本種はアイヌ人の常食に用ひられトライオン氏は圖の出版せられたるものなく、叉本種を見たることなしと記せり」

日本陸產貝類圖說 (七)

ハクサンベツカフ 新稱、

M. hakusanus, Pils. & Hir.

(陸產、第十二版、第百六、及第百七圖)

產地、白山、羽前、

高、一分四厘、徑、二分二厘五毛、

形狀、殼質薄く、半透明にして、臍孔を具へ、螺塔は低き圓錐形をなし、螺層脹れ、徐々に增大し、四階半を數へ、縫合深く、体層は其幅次体層の二倍に近く、周緣の前方に微角を有するも、シチトウベツカフの如く著しからず、上面には微細なる螺脈を具へ、殼頂より周緣下に至るまでは生長線間に密に平行せる美麗の細脈を有すを以て絹光を發し、底面は平滑にして殼口は斜なる新月形を呈し、口緣薄く、其殼軸に附着せる所は反曲して小三角形をなす」

彩色、帶赤褐色なり」

本種はキヌツヤベツカフに酷似し著しく大形にして、シチトウベツカフよりも濃色なり」

本種は余の新發見にかゝり採集番號一〇四〇なり」

シチトウベツカフ 新稱、

M. izushichitojimana, Pils. & Hir.

(陸產、第十二版、第百八、及第百九圖)

產地、伊豆新島及三宅島、

高、一分二厘、徑、二分、

形狀、殼質極めて薄く半透明にして、臍孔小さく、螺塔低く、体層は前方に明かなる角を有し、殼口に近づくに隨ひ漸々角を失ひて圓くなり、表面は稍光澤を具へ、上面は生長線の方向に低く粗き不規則の皺を刻し、下面

帶黄白色にして、殼口は白色なり」
此殼の絲掛狀怪物なることは疑なきも、果して何種の變形なりやは未だ俄かに判定し難し」

エゾボラ屬 Neptunea, Bolten.

アンチクワ N. antiqua, Linn.

（トライオンより）

產地、コルンテールよりセットランドに至る、北海、佛の太西洋產、

第七十九圖



アンチクワ（トライオンより）

長、三吋半乃至七吋、

螺層圓く、頂層は稜昧なる龍骨を有し、窄に螺脈を刻す、白色にして、内部は帶黄色なり」

動物は白色或は帶黄白色の体を有し、時としては体の一部に黑斑を散らし、蹠は往々藁色或は淡柑色をなせり」

コベルト氏は本種中に變種 carinata 及 despecta を設けしも、ゼッフレイ氏は各之を別種とし、トライオン氏は後說に左袒せり、ピルスブリー氏は其目錄中に Chrysodomus antiquas var. despectus, L. を擧げアンチクワスもデスペクタスも北部日本より產すれども氏は未だ之を見ざる由を附記せり」

ルリダ N. lurida, A. Ad.

（トライオンより）

產地、日本、

長、記載なし、

殼は脹れたる卵形にして、白堊色或は汚白色を呈し、表皮薄く帶褐色をなし、螺塔は殼口よりも短く、螺層は四階半を數へ、体層の後部は鈍き亞角を有し、殼口は大きくして卵形をなし、内部は青黑色を呈し、内唇平滑にして脹れ、水管溝は甚だ短く、開きて僅かに反曲せり、外唇の内部に脈を有し、唇緣に至るに從ひ平滑となり、後方に廣き切れ込み狀部あり」

産地、琉球、

長、一寸一分、

形狀、殼は紡錘形をなして両端尖り、レイシダマシに比すれば大きく且つ長く、肩角を有し歯小さく、シマレイシダマシに似て大形なり、体層には凡そ五列、次体層には二列、他の螺層には一列の結節肋を繞らし、殼口の長は凡そ全長の半に達す」

彩色、レイシダマシ及シマレイシダマシと全く彩色を異にし、此両種よりも淡色にして、帯白、帯黄乃至灰色をなし、珠狀の結節は概して暗色を呈し、口内は柑色、或は菫色にして往々白色を呈す」

イボボラ属 Distorsio, Bolten.

イボボラ D. cancellinus, Roissy.

（海産、第二十二版、第百四十八圖）

産地、未詳、

長、一寸八分、

本種の**形狀**、**彩色**は本誌第八號「本邦海産介類圖説備考」（第十六頁下段）中に記載せしを以て之を略す」。

本邦海産介類圖説備考　（八）

チマキボラ属 Thatcheria, Angas.

殼質堅固にして、角を有せる梨形をなし、螺塔高きも、殼口よりも短く、螺層は上部扁平にして、周縁に強き龍骨を有し、下部窄み、階數多く、殼口は最後の龍骨の末端と体層の接着部との間に内曲せる廣き切込を有し、底溝は廣くして開き、殼軸は平滑にして、外唇は切込の下部簡單なり」

チマキボラ（千卷法螺）日八 T. mirabilis, Angas.

（トライオンより）

産地、日本、

長、三吋半、

第七十八圖



チマキボラ

（トライオンより）

イガレイシ屬 Ricinula, Lam.

アカイガレイシ R. hystrix, Linn.

變種**ヒロクチイガレイシ** 新稱、
var. clathrata, Lam.
(海產、第二十二版、第百四十四圖)

產地、屋久島、大島、喜界島等

長、一寸三四分、

形狀、殼質薄く本種に比すれば形圓くして殆んど卵形を呈し、螺塔高く、結節小さく、殼口廣くして半月形をなし、外唇薄く、其內緣の齒は兩々對をなせり、

彩色、殼面は帶褐白色にして、口內は赤色をなさずして菫色を呈し、兩唇白く所々に褐色を彩り、齒は白し」

コムラサキイガレイシ 新稱 R. biconica, Blainv.
(海產、第廿二版、第百四十五及第百四十六圖)

產地、大隅大島、

長、一寸、

形狀、殼は稍や長き紡錘形をなし、螺塔の高低、結節の大小等種々異りたるものあれども、大抵体層に三四列、他層に一二列の結節を繞らし、其結節は縱に列なりて縱肋をなし、殼口狹長にして、外唇內にある齒の中上部の二ケは稍や大にして相接近し、結節の螺肋間には更に細螺肋を具へ細鱗狀をなせること多し」

彩色、表面は帶白色にして、往々暗褐色を呈し、口內は菫色なり」

本種の或標品は形狀、彩色共に余の新種ハチヂヤウレイシダマシ(本誌第五號海產第七版第五十四圖)に酷似し、或は同一種なるやも測られざれど、著しく大形なるを以て、暫く別種となして、後考を待つ」

レイシダマシ亞屬 Sistrum, Montf.

クチベニレイシダマシ 新稱、
R. concatenata, Lam.
(海產、第二十二版、第百四十七圖)

余は只一ヶの幼標品を所有せるのみにて其種名を確定することと能はざるも多分 V. miliaris, Gmel. なるべし」

ヒレガヒ亞屬 Cerostoma, Conrad.

テウセンヒレガヒ 新稱、M. coreanicus, A. Ad.

(海産、第二十二版、第百四十圖)

産地、釜山、

長、一寸四分、

本種の**形狀**、**彩色**は本誌第二號 本邦海產介類圖說備考」中に(第二十頁)記載せしを以て之を略す」

ヤウラクガヒ亞屬 Ocinebra, Leach.

オウウヤウラク(奥羽纓絡) 新稱、 M. japonicus, Dkr.

(海産、第二十二版、第百四十一圖)

産地、陸前、羽前等、

長、一寸四五分、

本種の**形狀**、**彩色**は本誌第二號「本邦海產介類圖說備考」中(第二十三頁)に記載せしを以て之を略す」

エゾヤウラク 新稱、M. endermonis, Smith.

(海産、第二十二版、第百四十二圖)

産地、釧路、千島國後、

長、一寸七八分、

本種の**形狀**、**彩色**は本誌第二號「本邦海產介類圖說備考」中(第二十六頁)に記載せしを以て之を略す」

レイシガヒ屬 Purpura, Brug.

テツレイシ亞屬 Thalessa. H. & A. Ad.

キナレイシ P. mancinella, Linn.

變種**ウニレイシ** 新稱、var. echinata, Blainv.

(海產、第二十二版、第百四十三圖)

産地、肥前及土佐、

長、一寸五六分、

本變種の事は本誌第四號「本邦海產介類圖說」中(第十四頁下段第二行以下)に記載したるを以て之を略す」

し、口內は肉紅色なり」

オガサハラガンゼキ 新稱 M. laciniatus, Sowb.(?)

(海產、第二版、第九圖及第廿一版、第百卅七圖)

產地、小笠原島、及伊豫、

長、二寸、

形狀、稍コガンセキに類似せるも、螺塔低く殼口比較的に大きく、縱脹脉上の突起は短くして連續し、縱脹脉間に二行の結節狀縱肋を有し、螺脉小さく曖昧にして細鱗狀をなす」

彩色、帶白乃至淡褐色にして微紅を彩り、殼頂は殊に美麗なる薔薇色をなし、往々曖昧なる褐帶を具へ縱脹脉上を殊に著しとなす、然れどもコガンセキの如く暗色の肋を繞らすことなし、口內は微紅を彩る」

本種をトライオン氏の書にかゝげられたる M. laciniatus, Sowb. の圖(第二卷第二十版第百八十四、第百八十五、及第百八十七圖)の圖に比較するに水管溝部稍狹く又同書の記載には「口內帶赤色なり」とありて、少しく疑なきに非ざれど他に類似の種を發見せざれば暫時該種に適合して後考を待つことゝなしぬ」



ラシニアツス(トライオンより)

ヤウラクモドキ亞屬 Vitularia, Swainson.

ヤウラクモドキ 新稱 Vitularia sp.

(海產、第二十一版、第百三十八圖)

產地、琉球、

長、九分、

形狀、殼は脹れたる紡錘形をなし、兩端尖り、螺塔高からず、螺層は肩角高く、七條の薄く鋭き扭れたる縱脹脉あり、其兩側には不規則なる螺脉の痕跡を認むべく、表面凸凹甚だし」

彩色、白色にして、縱脹脉の傍に二螺列の栗色點を見る」

形狀、殼はセンジユガヒに酷似し該種よりも小形にして內唇に齒なく、葉狀突起の間に更に小突起あり」

彩色、殼の表面は淡紅色にして、口內は淡紫色なり」

本種の模式標本は暗色にして、帶紫色を呈せる由なるも余の標品はトライオン氏が本種の異名となせるソーエルビー氏の M. sauliae, Sowb. に適合し前記の如くに淡色なり」

センジユモドキ 新稱 M. torrefactus, Sowb.

(海產、第二十一版、第百三十五圖)

產地、大隅大島、琉球、

長、三寸、

形狀、殼はコセンジユガヒに酷似せるも重厚大形にして、センジユガヒよりも、水管溝短く、縱脹脈間に唯一つの大なる結節狀縱肋を有し、往々更に一ヶの低き小縱肋を見ることあり、指狀突起はセンジユガヒよりも短小にして、指間更に小刺を具へ、內唇に齒なし」

彩色、概して暗色にして螺脈は殊に濃色を見はし表面は時に淡色を呈し、往々白色の汚物を被り、兩唇柑色にして口內白く、指狀突起と外唇とは間々淡紅を彩ることあり」

コガンゼキ 岩川 M. penchinati, Crosse.

(海產、第二十一版、第百三十六圖)

余は本誌第一號に於て、海產第二版第九圖の標品により本種を記載せしが、後該標品は全く別種(次記オガサハラガンゼキ)なることを發見したり、故に更めてこゝに記載することゝなしぬ、

產地、琉球、

長、一寸五六分、

形狀、殼は狹長なる紡錘形にして、螺塔高く、殼口比較的に小さく、縱脹脈間に二條の大結節狀縱肋を有し、螺肋も小結節狀をなし、其間に細螺脈あり」

彩色、殼は淡紅色にして、螺肋及葉狀突起は暗色を呈

外唇の内方にも平行横脈を具へ唇の内縁に見はれて微歯狀をなす」

彩色、淡黄褐色にして、体層に六七條より九條、水管基部は三條より五六條、他の螺層に三條の栗色螺脈を繞らし、平行せる両栗線間は微褐色を彩り、体層に三條、他の螺層に一條の褐帯をなせるものゝ如く、口内は白色なり」

本種は外形 M. motacilla, Chemn. var. elegans, Beck（トライオン氏貝類學第二巻第十三版第百三十四圖）に酷似せるも該種は縦脹脈間に只二條の縦肋を有せるを以て一致する能はず、又トライオン氏の書に揭げられたる本種の模式形は小形にして一吋以下なるも、同氏が本種の異名となせる M. nigrescens, Sowb. に適合せる如きを以て、余は暫らく、該種に當て、此所に記載し、以て後考を待つことゝなしぬ」

バセウガヒ亞屬、Pteronotus, Swainson.

ヒメバセウ 新稱 M. triqueter, Born.

（海產、第二十一版、第百三十九圖）

產地、喜界島、琉球、

長、一寸五分内外、

形狀、殼形稍やバセウガヒに似て小さく、扁平突起擴く、三條の捻れたる縦脹脈間に三行宛の縦肋ありて粗き螺肋と相交りて籠目狀をなし、殼口は楕圓形にして、水管溝は廣く且つ長し、」

彩色、帯白乃至淡褐色にして、体層に於ける二條の褐帯は縦脹脈上に著明なるも脈間にありては消失せること多し、口内は白色なり」

テングガヒ亞屬 Chicoreus, Montf.

コセンジユガヒ 新稱 M. maurus, Brod.

（海產、第二十一版、第百三十四圖）

產地、伊豫福浦、（フイリツピン、マーケサス諸島にも）

長、二寸、

日には、價の高下に拘らず需要の増加すべきは疑を容れぬと思ふ。維新以來、北海道の人口増加するに從ひ、需要の増加に伴れてこれを濫漁せる結果、此の東海の珍味は一時殆と絶滅の厄に罹らんとするに至りたる爲め、農商務省にては其の漁期に制限を設け、三才未滿の幼貝を漁獲するを禁じて、漸く其の絶滅を防ぎ得たのは結構なことである。

肉を食用とする外に、殼は小鍋に代用せられ、青森縣下に行つて見ると戸毎に一二枚の貝鍋を必ず備へて、以前廉いものであつたが、府下の相場に依ると四才以上の貝は其の價貳拾五錢を下らぬ、昔は其の小なるものを小皿に代用したのである、漁獲豐かなるときは貝柱を乾製し、或は罐詰を製し、又殼は燒いて石灰となす等の效がある。

本邦海産介類圖説追加

余の貝類研究歩を進むるに從ひ續々追加す可き種類を生ずるは已むを得ざることにて今こゝに十數種を得たれば左に之を記載することゝなしぬ

ホネガヒ屬 Murex, Linn.

模式骨貝 Typical.

トサツブリ 新稱 M. recurvirostris, Brod. (?)

（海産、第二十一版、第百三十三圖）

産地、土佐、伊豫（西印度、中央亞米利加の西岸マザツトラン迄）

長、二寸七分、

形狀、殼はサツマツブリに似て小さく、縱脹脈間に三條或は四條の縱肋を具へ、細螺脈の之を横ぎる所は微結節狀を呈し、殼頂に近き部の螺層にありて殊に甚しく、肩角極めて微なり、殼口は楕圓形をなし細長なる水管溝は右方に曲り、内唇著しく發達し、其内部に微脈を見はし、

調理の方は、煮ることを主として居るが、最も輕便にして而かも佳致あるのは、生貝の儘火に懸てこれを煮るのである、即ち口を堅く封じたる生貝を火に懸けると、旅順の籠將スチッセル的に殼の堅固なるを賴んで力んで居るが、やがて後方の二〇三高地より浴せ掛けらるゝ砲火ならぬ庖火に堪へ兼ねて口を開く途端に爆烈彈よろしくといふ風に醬油と味淋とを適宜に注ぎ込み、貝を直ちに鍋ともし、又皿ともして食するのである。肉の中にても貝柱は其の主要部を占め、又美味無比なるは眞に此の貝柱である、今日は此の柱を煮乾して他の地方に輸出するから信州木曾の山奥でも此の干物を味ふことが出來る、殊に支那に行くものは尠からずと聞く、然し一旦乾固したる後は固有の香味を失ふものであるから、世人これを喫して帆立貝の乾燥無味なるを訴ふるが如きは少しく酷であると思ふ、罐詰の方は稍々固有の風味を存して居る。帆立貝の肉は、斯くの如く美味なるに何故、此の東都の市場に上ぼらぬであらうか、今は昔と異なり交通至便にして合浦外ヶ濱も僅に一晝夜にして到達し得るに拘らず、斯かる珍味の貝類が當地に知られないのは余の常に訝る所である、夫れは都人士の嗜好に適せざる故であるかといふに決してさうでない、余は先年都人士たる同僚兩三名と同行して、青森縣下野邊地灣に貝類採集を試みたことがあつたが、適々帆立貝の漁期に遭遇し、旅館にては殆ど三食毎にこれを膳に供ふる狀であつたが、孰れも其の味の美なるを賞し、爾來今に至るも猶屢々之れに及ぶのを以て見ても、此の貝が都人士の嗜好に適することが解かる。これが東京に輸入せられないのは、恐らく他に原因する所あるのであらう、夫れは即ち帆立貝の漁期は、適々盛夏の候に際するより途中に腐敗するの虞がある、從つて精品の價不廉と成るのと輸出者が算盤を取つて當初の損耗を氣遣ふとが重なる原因であらうと思はれる。然し此の美味にして一度喰ひ道樂の咽喉を過ぎた

て肉を保藏すれども、左片は扁くして蓋の如き狀を成して居る。表面に三十有餘の縱の溝と縱の隆條とが殼頂より射出して居る。殼頂の前後に同大の耳形の突起がありて蝶番線は鉛直と成り、其の中央に太き靱帶を容るゝ凹がある、猶、蝶番線に沿ひ薄い皮膚がありて殼の両片を互に結合して居る、表は淡紅褐色で內面は白く、其の中心に一大柱痕を存し、殼の直徑の大なるものは、七寸餘に達することがある。外套膜は、左右全く相離れ、其の縁に暗色の單眼數個を具へ、足は長くして指狀を成し、貝柱は頗る太くして最大なるものは、徑二寸に達することあり。

帆立貝は、六尋より十尋內外の海底に棲み、平素は蹲踞て居るが、時によりて居所を轉ずることあり、其の法は尋常の二枚貝の如く足を伸縮して匍匐するのではなく、殼片を頻繁に開閉する際、水を激しく排出して其勢で斜に水中に跳躍するのである。斯く、帆立貝は居所を轉ずる性あるに依り、同灣內にありても、漁場は年々一定せずして、前年多額を產したる所も、今年は全く不漁と成り、更に豫期せざる所に新漁場を發見することありといふ。先年、青森縣よりの申請に依り、岸上博士出張して種々試驗を施し、取調べたる結果、前の事實が明白となつたのである。俗人の信ずるが如く、帆を立てゝ海上を遊弋するなどゝいふ風流は絕えてないのである。

帆立貝の肉は、獨り我が邦のみならず、歐州に於いても賞味せられ、殊に饕食家の食品としてある、其の種類は本邦產とは異なつて居るが、愛蘭土の西北一帶の沿岸は產地として古來有名である、本邦人も東北人の外は其の生貝の味を知るものは稀であるが、一度其の味を占むるに於ては忘るべからざる底の美味がある、余の郷里は、陸奥にして其の味を知るが故に、貝肉の料理に對する毎にこれを回想せぬことはない、實に故郷忘じ難しの一であると考へて居る。

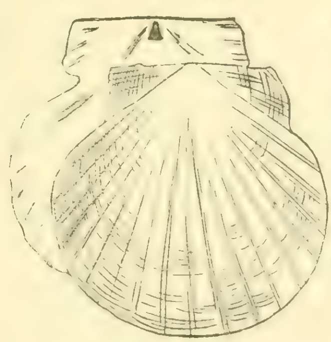
ふたることあり又白き蛤殼の內面に繪畫を施して取合するの遊戯あり是は稍後に始まりしならんと云へり之を貝合又貝蓋と呼ぶ蛤殼は白色なるを宜しとすれども純白色の者稀なれば成べく其白にして斑紋の少きを用ふ故に之を白貝と呼ぶ其數三百六十個あり此蛤殼を容るゝ器を貝桶と云ふ後には此貝を婚禮の調度品となし儀式的裝飾物となせり貝合に關する用式を記するの書もありて用法頗る嚴なり而して其蛤殼の一對を分けて出貝と地貝とす出貝は一に男貝と云ふ上殼にして右の方稍濶く其齒凸し地貝を一に女貝と云ふ下殼にして左の方稍濶く其齒凹し之を陽と陰とに譬へ分ちて二個の貝桶に收むるなり帝室博物館には婚禮式用具に貝桶一對あり八角形にして黑塗に蒔繪を施す蛤殼は三寸許の長さなり又雛祭具に貝桶二對あり一は八角形一は圓筒形にして前述の品に比し半分の大さとす蛤殼も一寸半許なり貝合の遊戯に次で貝の歌合ありて三十六歌仙、源氏五十四帖、小倉百人一首に配當せる類聚もありし。(以下次號)

貝談漫錄（四）

岩川友太郎

ほたてがひ　帆立貝

ほたてがひは、北海道及び青森灣の名産で他の地方には絕えてなく、學名を Pecten yessoensis Jay といふ和名を帆立貝と言つたのは、一片の殼を起てゝ帆の如くにし、風に隨つて海上に浮び行く爲であると日東魚譜等に記してあるが、是は矢張古人の臆説で事實ではない。



ほたてがひ　1/4

殼の兩片不同なるは、牡蠣と同様であるが、**ほたてがひ**は左片の代りに右片を下にして居るので、右片は深くし

物品と交換すと云ふ帝室博物舘列品に未開國人の用具は多きも貨幣用の貝を見ず而して貝子の中に形小く稍扁くして白色、黄白色、鮮黄色の者あり之を翁面又黄金貝子と呼ぶ英名を(Money-cowry)と云ふ貨貝の義なり古昔は貝を貴ぶにより文字にも貝を添へたる多し即ち寶、貨、財、資、貴、賤、貧、貪、贈、賄等の類是れなり此貝の字を貝扁と呼ぶも介殼の總名にあらず又頁の字を大貝と呼ぶも是は首と云ふ字にして貝とは大に異なれり右の如く支那にて往古は貝を貨幣となし未開國は今猶貨幣となせるも我邦に於ては貝を貨幣とせしことなきが如し。

本草綱目に介部ありて二に分つ一を龜鼈類とし蟹をも含み一を蚌蛤類として螺、貝、蛤等の外に軟体ならざる者をも加ふ此蚌蛤の稱は介類と云ふが如し此等の書に據るときは貝の字は軟体類の總稱にあらず和訓栞にも「かひは貝をよむも殼に同じ貝はもと一物の名なるを此國にて甲貝の類を總て貝といへり」とあり然れども我國にて編述せる博物の書は大低介の字を用ふ即ち多識編に介部あり和爾雅に蟲介門あり訓蒙圖彙に蟲介部あり大和本草綱目に介類あり本朝食鑑に介類あり物品目錄に介屬ありて皆介の字を用ひたり之を要するに「介」の字義は甚だ廣く「貝」の字義は狹けれども我國に於ては貝を介の如く用ひ來れるのみならず近年發刊の書も又貝類、介貝、貝殼等の名を用ふるを常とせり又貝の名も又我國に用ふる所の漢字と彼邦の義と異なる者あり喩ば蜷は蟲行詰屈又長屈貌なりとあるも我邦にてはになと訓し一の貝類の名とし又貽貝(黒色の貝)は貝の種類なるも我邦にてはいかひと訓じ即ち淡菜の和名に當てゝ用ふ是は延喜式に出る所なり唄の字は貝の俗字なりと字典に見ゆるも我邦にてはばいと云ふ小螺の名に充つ猶馬河の名をばかがひとするが如し。

我邦にて介殼を玩ぶことは頗る古きことにして今より一千一百年許前に於て貝合と稱へ各種の介殼を集めて詩

贏と同字にして巻貝の總名なり螺類の英名を(Univalve)此中に片殼を含む蛤類の英名を(Bivalve)と云ふ

貝の字はかひと訓すれども通例かいと讀み文字もかいと書くは貝介の音より出でたるが如し原來貝は生物をも殼をも云ふ介の字を用ふべきなれども我國に於ては古事記、舊事記等の國史を初め皆貝の字を用ふ故に和名類聚鈔には魚貝類あり和漢三才圖會には鱗介類の中に介貝部あり又魚貝と云ふときは食饌に供すべき水族を云ふ而して器物の名には靑貝細工、貝杓子、貝釦等あり地名、姓氏には貝塚、貝原、貝野、片貝、久貝、貝沼等ある如く慣用して今に至れり依て本題も又之に傚ひ貝の話とせり漢土の書に據れば蟲に外殼あるを介蟲と云ふとありて介は貝の外に龜、蟹等を含み鱗介と云へば魚類と龜、蟹、貝類等を云ひ介族と云へば貝類、蟹、蝦を含むことゝなる爾雅には釋魚の中に貝類數種を載す其中に貝子の類六種あり貝の字を介類の總名となさず又或る書に貝は海の介蟲なり古へは貝を貨とし龜を寶とす周に泉あり秦に至り貝を廢して錢を行ふとあり而して貨泉は錢なりとあれば泉は即ち錢のことなり故に泉譜と云へば錢を記載せるの書となる其圖を見るに周の泉も秦の錢も均く扁圓にして中央に孔あり其形に太差なく只文字と模樣に相異なる所あるのみ蓋し周の世既に泉ありて貝をも倂せ用ひたりしに秦の世に至り錢なる貨を發行して貝の通用を禁止したるならん但し周の世には泉の外に布又刀と稱する貨もありたり布の形は又にして琴柱の如く刀の形はにして剃刀の如し帝室博物館には其實物各種あり其中鏟布と稱する鏟形の者若干ありての形をなし大なるは長五寸餘あり此外磬幣あり其形にして磬に似て薄し幅四寸許あり而して貝を貨幣とすることは秦の世にて止みしも他の國にては通用するものなれば今猶未開の國に於ては之を用ひる所多し故に開明國の人は他の地方より貝を集めて未開の國に來り

介類雜誌 第拾貳號

明治四十年十二月二十日發行

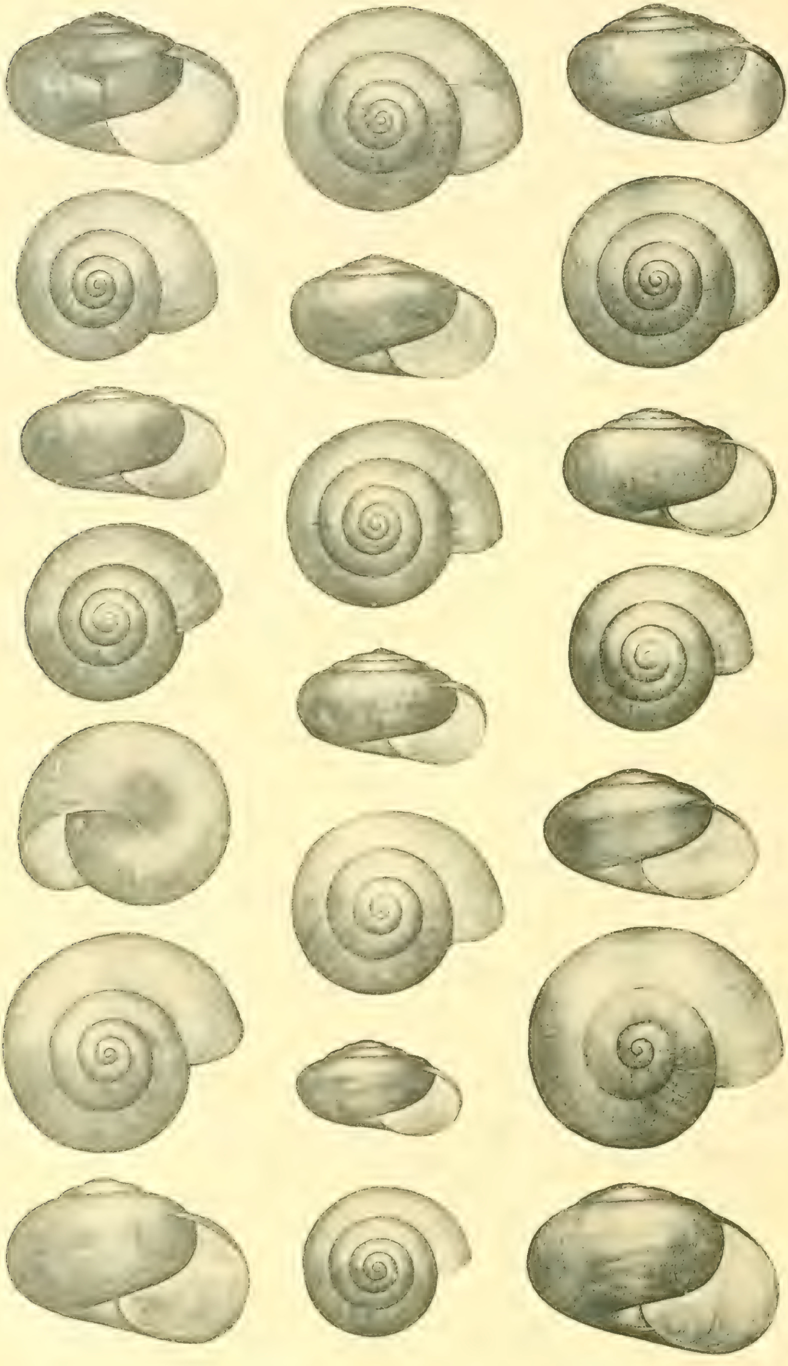
貝の話

田中芳男

左に掲げた『貝の話』は、田中芳男氏の講演せられたもので、もと東洋學藝雜誌第二十三卷第三百號に掲載せられたのであるが、わが誌上を飾るべき恰好の講演であるので特に同氏の承諾を得て、こゝに轉載することゝした。學藝雜誌の方には幾多の圖が挿入してあるが、それは茲に掲げる譯にいかん。が是迄わが介類雜誌に掲げた圖版で本講演の參考になるものには、一々參照の出來るやうにしておいた。編者は田中氏の好意を深謝すると同時に、世の讀者がこれによつて大に裨益せられんことを希望する。

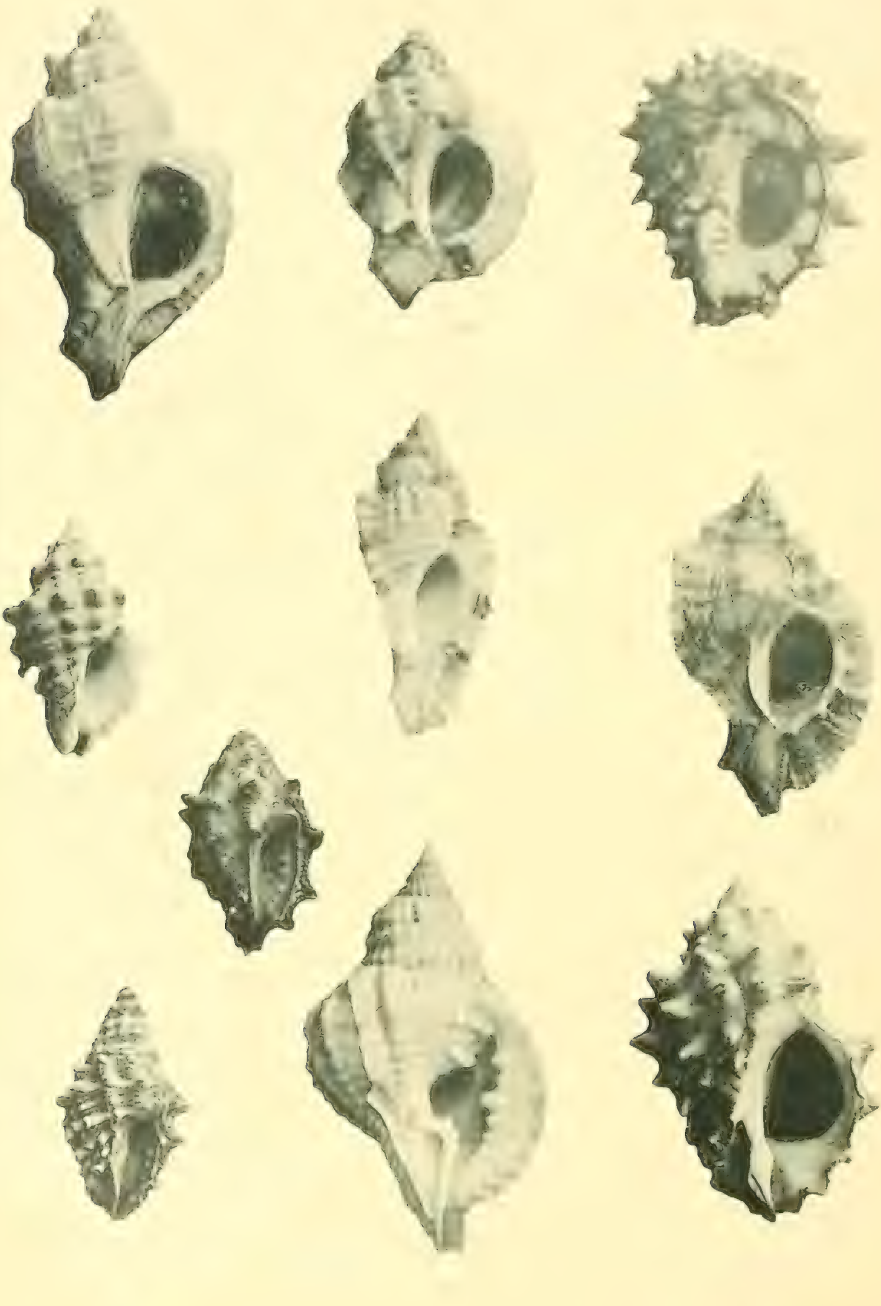
編 者 誌

貝とは軟体類（即ち動物學の軟体動物 Mollusca）の外殼を云ふ故に貝の話は貝殼の話と云ふに同じ但し軟体類には外殼ある者多けれども又外殼を有せざる者即ち蛞蝓類其外尚若干あり其他體内に骨ある者は烏賊類にして石灰質と角樣質の二つあり又体内に殼ある者は雨虎の類とす是れ又介殼質と角樣質との二あり而して貝なる稱は軟体類の殼なるも烏賊骨には及ばずして芒刺類（又名棘皮類 Echinodermata）放線類（又名射形類 Actinozoa）若は甲殼類（即ち蟹蝦類 Crustaceae）に屬する若干種の殼をも算入するを常とす世俗介殼を區別するには蛤の如く二枚の殼あるを合貝即ち蛤類と云ひ螺の如き卷たるを卷貝即ち螺類と云ふ（右卷を常とすれども稀に左卷あり蝸牛の如きは左卷の者少からずして東京に於ては各半なりと云ふべし）扁形にして無對なるを片殼と云ふ（學術上にては之を螺類に入る）其外異類の者を異形又は類違と云ふ螺は



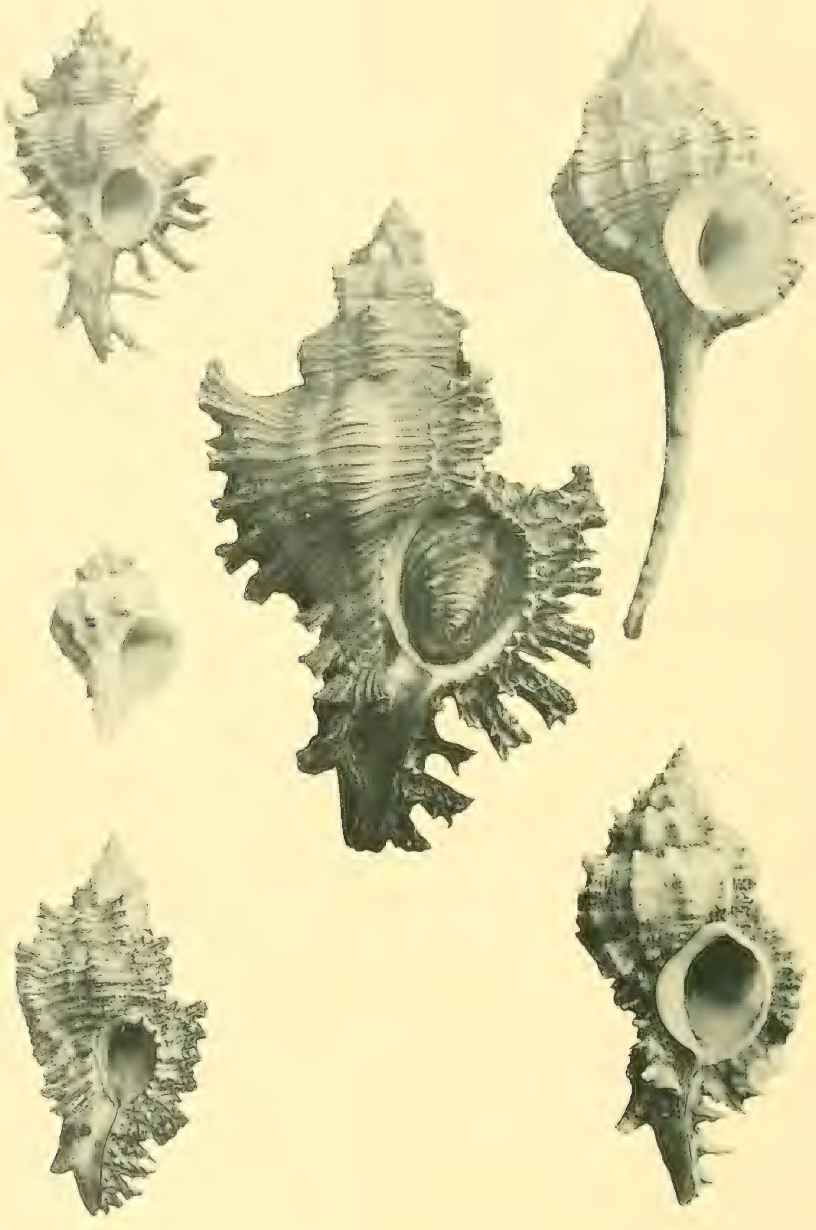
106, 107 Macrochlamys hakusanus, Pils. & Hir.
108, 109 " izushichitojimana, Pils. & Hir.
110, 111 " semisericata, Pils.
112, 113 " kumeensis, Pils. & Hir.

116, 117 Macrochlamys tanegashimae, Pils.
118, 119 " lineatus, Pils. & Hir.
120, 121, 122 " chaunax Pils. & Hir.
123 " fulgens, Gude.



139. Murex triqueter, Born.
140. " coreanicus, A. Ad.
141. " japonicus, Dkr.
142. " endermonis, Smith.
143. Purpura mancinella, var. echinata, Blainv.

144. Ricinula hystrix, var. clathrata, Lam.
145, 146. " biconica, Blainv.
147. " concatenata, Lam.
148. Distorsio cancellinus, Roissy.



133. Murex recurvirostris, Brod. (?)
134. " maurus, Brod.
135. " torrefactus, Sowb.
136. Murex penchinati, Crosse.
137. " laciniatus, Sowb.(?)
138. Vitularia sp.

振替貯金加入廣告

送金の安全と通信料及手數料を省くため振替貯金に加入致し候に付今後御送金の節は下記の番號へ御拂込被下度候

口座番號 壹貳〇五貳番

京都市烏丸通下長者町

平瀬介館

○平瀬介館雜誌部廣告

○發行　介類雜誌ハ毎月一回二十日發兌可致候

○前金　介類雜誌代金併ニ廣告料ハ前金ヲ以テ御拂込被下度候（郵券代用一割增）

○爲替　郵便爲替ハ室町中立賣郵便局宛ニ被成下度候

○領收證　本誌代金御送付ノ節ハ別ニ領收證ヲ出サズ本誌ノ發送ヲ以テ御領收ト可致候

○前金濟　御拂込ノ前金相盡キ候節ハ本誌包紙ニ濟ノ文字ヲ朱印シ御送金ヲ乞フノ表章ト可致候

本誌定價

一部	金貳拾錢	郵税壹錢
六部	金壹圓貳拾錢	郵税不要
十二部	金貳圓參拾錢	郵税不要

本誌廣告料

五號活字一行（廿五字詰）	金拾五錢
半ページ	金參圓
一ページ	金五圓

發行所 京都市上京區烏丸通下長者町北爾前町十四番戸 平瀬介館（電話九百七十四番）（振替貯金口座第壹貳〇五貳番）

明治四十年十二月二十日印刷
仝年仝月廿五日發行

不許複製

發行者　平瀬與一郎
編輯者　平瀬信太郎
印刷者　川勝靜三郎
印刷所　合資商報會社

大賣捌所
京都　東枝律書房
東京　東京堂
仝　東海堂
仝　北隆館書店
大阪　大華堂

明治四十年十二月二十日發行

第一卷第十二號

介類雜誌

（禁轉載）

目次